原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第11集

# 原の辻遺跡

はる　つじ

## 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ

1999

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第11集

# 原の辻遺跡

はる　つじ

## 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ

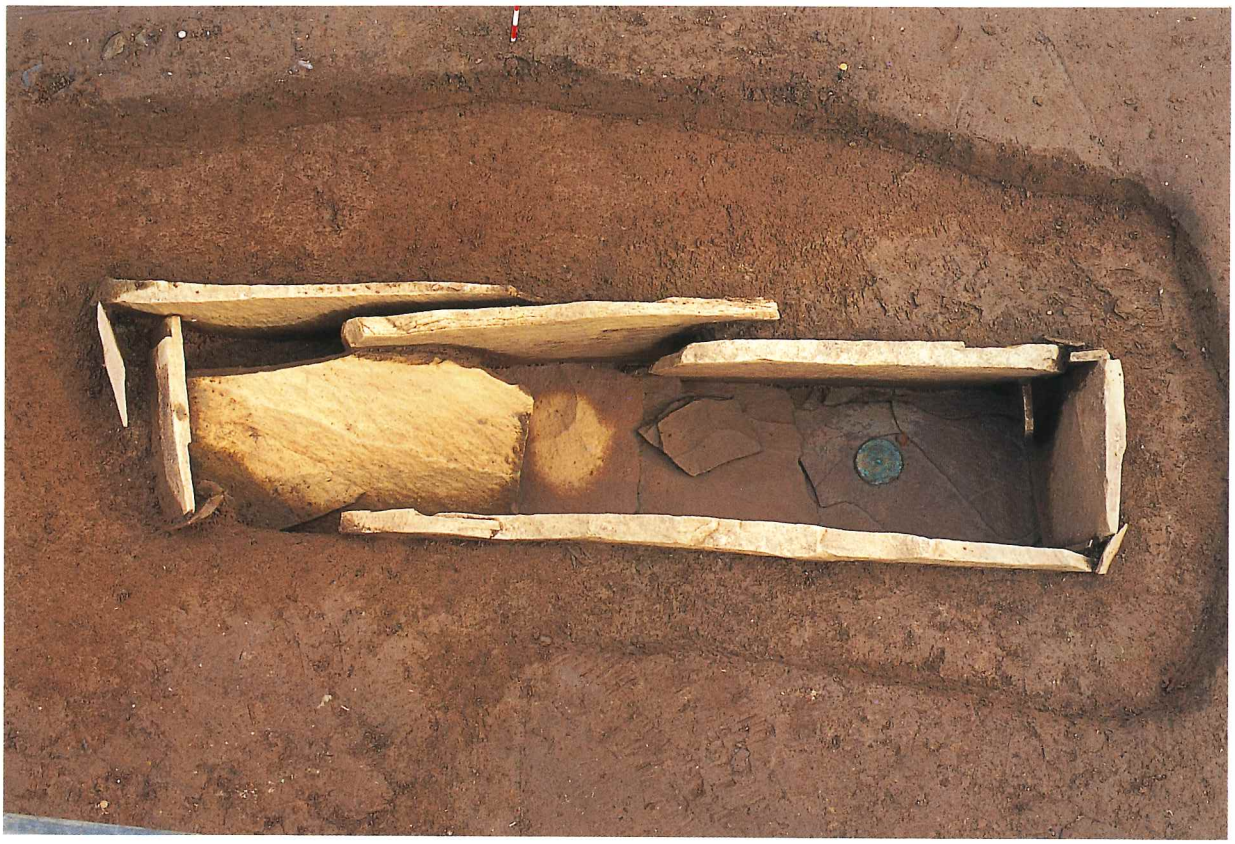
原の辻遺跡と東方海上を望む

平成７年度 大川地区空中写真（調査区全景）

平成７年度 原地区空中写真（Ａ区全景）

平成８年度 原地区空中写真（東から）

平成９年度 原地区空中写真（東から）



原ノ久保Ａ地区８号箱式石棺墓

原ノ久保Ａ地区出土仿製鏡，獣帯鏡片

原ノ久保Ａ地区出土内行花文鏡（９号土壙）

原ノ久保Ａ地区出土青銅器・管玉・ガラス勾玉

# 発刊にあたって

本書は，国庫補助を受けて平成７年度から実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成７年度から平成９年度分の発掘調査報告書です。

平成７年度は，石田町大川地区と芦辺町原（はる）地区の調査を実施しました。大川地区では，弥生時代中期から後期の箱式石棺墓，石蓋土壙墓，土壙墓，小児甕棺墓，溝などの遺構が確認され，大人の墓は石棺墓や土壙墓が主体であることが明らかになりました。原地区では，平成６年度の調査に続いて台地の高台部分を発掘して祭儀関係の掘立柱建物や２条の濠などが検出され，原の辻遺跡のなかでの中枢の地域であることが分かってきました。

平成８年度は，石田町原ノ久保Ａ地区と芦辺町原地区の調査を実施しました。原ノ久保Ａ地区は，弥生時代中期から後期の墓地で，箱式石棺墓，石蓋土壙墓，土壙墓，小児甕棺墓など22基の墳墓が確認され，中国後漢の内行花文鏡，国産の小型仿製鏡，ガラス勾玉など貴重な遺物が出土しました。原地区は，台地の高台から西側傾斜面で確認された濠が東側傾斜面に延びていることが確認され，新たに３条の濠が発見されました。また，弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴式住居跡が13棟検出され，環濠内部の東側にも居住域が拡がっていることが判明しました。

平成９年度は，石田町原ノ久保Ｂ地区，池田大原地区と芦辺町原地区，高元地区の調査を実施しました。池田大原地区では，弥生時代中期の濠が１条検出され，環濠の外の防衛ラインであった可能性をもっています。原地区では東側傾斜面に竪穴式住居跡が16棟検出され，平成８年度に発見された濠がさらに西側に延びていることが分かりました。

このように３箇年の調査によって多くの成果があがり，一支國の中心集落である原の辻遺跡の実態が徐々に明らかになりつつあります。今後も調査は継続いたしますが，地域の方々のご理解とご協力をいただきながら，遺跡の保存と活用を図っていかねばならないと考えています。

原の辻遺跡の発掘調査成果が，学術的資料として活用され，文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

平成11年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　出　口　啓二郎

# 例　　言

1．本書は，国庫補助を受けて平成７年度から実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成７年度から平成９年度分の発掘調査報告書である。

2．調査は，芦辺町教育委員会と石田町教育委員会の協力を得て，長崎県教育委員会が主体となって実施したものである。

3．本書に収録した地区と分担執筆は，以下とおりである。文責が複数の場合には，文章末尾に文責名を明記した。これ以外のⅠ・Ⅱ・Ⅳ章については宮崎が担当した。

①大川地区　　平成７年度調査　文責（宮崎貴夫）
壱岐郡石田町石田西触字大川
②原ノ久保Ａ地区　　平成８年度調査　文責（安楽勉・西信男）
壱岐郡石田町石田西触字原ノ久保
③原地区　　平成７～９年度調査　文責（宮崎貴夫）
壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字原
④高元地区　　平成９年度調査　文責（杉原敦史）
壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字高元
⑤池田大原地区　　平成９年度調査　文責（杉原敦史）
壱岐郡石田町池田東触字大原
⑥原ノ久保Ｂ地区　　平成９年度調査　文責（安楽勉）
壱岐郡石田町石田西触字原ノ久保

4．本書関係の出土遺物と図面および写真類は，現在，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所に保管している。

5．本書の総編集は，宮崎が担当した。

6．本書で方位の基準としたのは，磁北である。図ではＭＮの略字を使用した。

# 本 文 目 次

頁（文責）

Ⅰ　遺跡の立地環境……1（宮崎）

1．壱岐の地勢と弥生時代の遺跡……1

2．原の辻遺跡の概要……3

Ⅱ　調査の経緯……7（宮崎）

1．平成７年度の調査……7

2．平成８年度の調査……9

3．平成９年度の調査……9

Ⅲ　調　　査……11

1．大川地区の調査……11（宮崎）

(1)　調査概要……11

(2)　遺　　構……11

(3)　遺　　物……32

(4)　小　　結……43

2．原ノ久保Ａ地区の調査……57（安楽・西）

(1)　調査概要……57

(2)　Ｄ区の遺構……63

(3)　Ｄ区の遺物……76

(4)　Ｅ区の遺構……89

(5)　Ｅ区の遺物……90

(6)　Ｆ区の遺構……90

(7)　Ｆ区の遺物……90

(8)　Ｇ区の遺物……90

(9)　小　　結……93

3．原地区の調査……115（宮崎）

(1)　平成７年度の調査概要……115

(2)　平成７年度調査の遺構……115

(3)　平成７年度調査の遺物……134

(4)　平成８年度の調査概要……163

(5) 平成8年度調査の遺構 ……163
(6) 平成8年度調査の遺物 ……181
(7) 平成9年度の調査概要 ……231
(8) 平成9年度調査の遺構 ……237
(9) 平成9年度調査の遺物 ……247
(10) 小　結 ……270
4．高元地区の調査 ……283（杉原）
(1) 調査概要 ……283
(2) 遺　構 ……283
(3) 遺　物 ……283
(4) 小　結 ……283
5．池田大原地区の調査 ……287（杉原）
(1) 調査概要 ……287
(2) 遺　構 ……287
(3) 遺　物 ……287
(4) 小　結 ……290
6．原ノ久保B地区の調査 ……295（安楽）
(1) 調査概要 ……295
(2) 土　層 ……297
(3) 遺　物 ……297
(4) 昭和52年出土の甕棺について ……298
(5) 小　結 ……300
Ⅳ　ま　と　め ……303（宮崎）

# Ⅰ　遺跡の立地環境

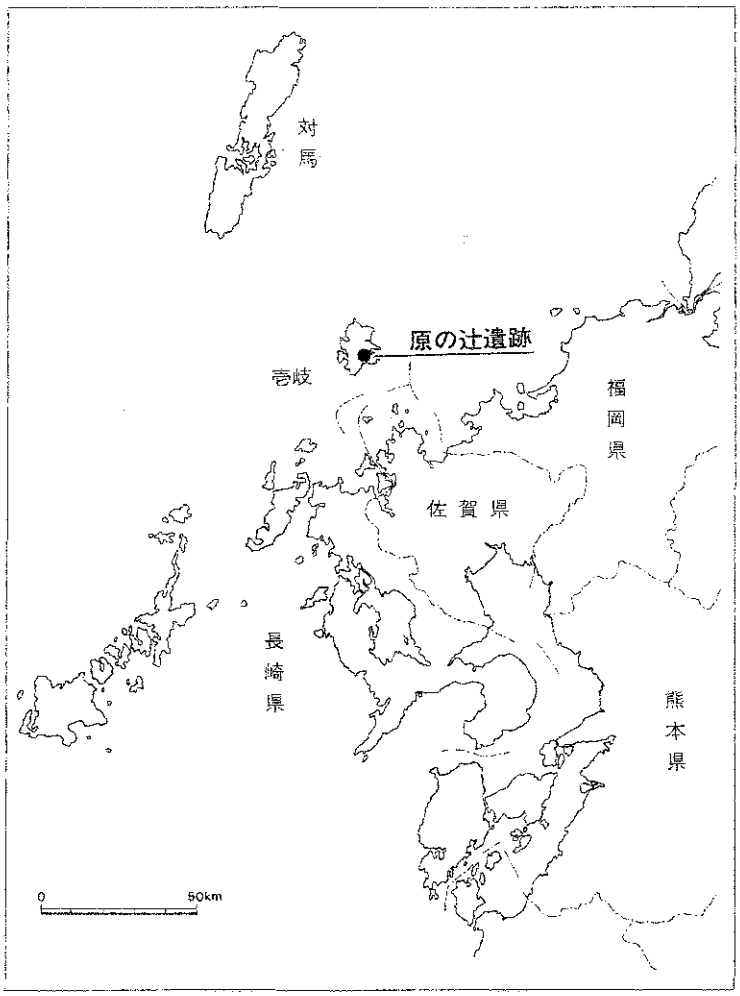
## 1．壱岐の地勢と弥生時代の遺跡

壱岐は，九州島北西海上の玄界灘にあり，南北17km，東西15km，属島を併せても面積139km²の小規模な島である。壱岐は，第三紀の基盤の上を玄武岩が覆っていて，最も高い山が標高213mの岳ノ辻（たけのつじ）という低く丸みをもつ丘陵性の地形をなしている。島の耕地面積は4,552haで土地面積の33%を占めて，長崎県内では最も高い耕地率である。

壱岐島は，福岡市の北西67km，佐賀県呼子町の北26km，対馬の南東67kmにあり，大陸・朝鮮半島と日本本土を結ぶ地理的な位置にあって，古来より対馬とともに大陸交渉・交流に重要な役割を果たした島である。3世紀頃のわが国のことを述べた中国の歴史書『三国志』「魏志倭人伝」には，「一大国」（一支国（いきこく）の誤記）で登場し，「やや田地があるが，水田を耕しても食料には足らず，やはり南や北と交易して暮らしている」（平野邦雄訳）と記述され，壱岐の人々が活発な交易活動を行っていたことを物語っている。奈良平安時代の律令期には下国の壱岐国であり澤田呉一氏は奈良時代の人口を10,600人と推測している[註1]。現在の行政区分では長崎県に属し，壱岐郡4町に分かれ約35,000人が住んでいる。

壱岐の弥生時代遺跡は現在60余箇所が知られているが，そのなかで小地域の核となる拠点集落は，カラカミ遺跡（勝本町），車出（くるまで）遺跡（郷ノ浦町）と原の辻遺跡（芦辺町・石田町）である。

弥生時代前期の遺跡は，原の辻遺跡，カラカミ遺跡，小場（こば）遺跡（勝本町）の3遺跡だけが知られているにすぎない。したがって，ほとんどの遺跡は弥生中期から後期にかけての遺跡ということになる。小場遺跡は，カラカミ遺跡に隣接した位置にあって，合口の壺棺が1基出土している。カラカミ遺跡と関係をもつ遺跡であろう。カラカミ遺跡では，昭和57～59年度の調査において弥生前期末の甕と壺破片が数点出土していて，前

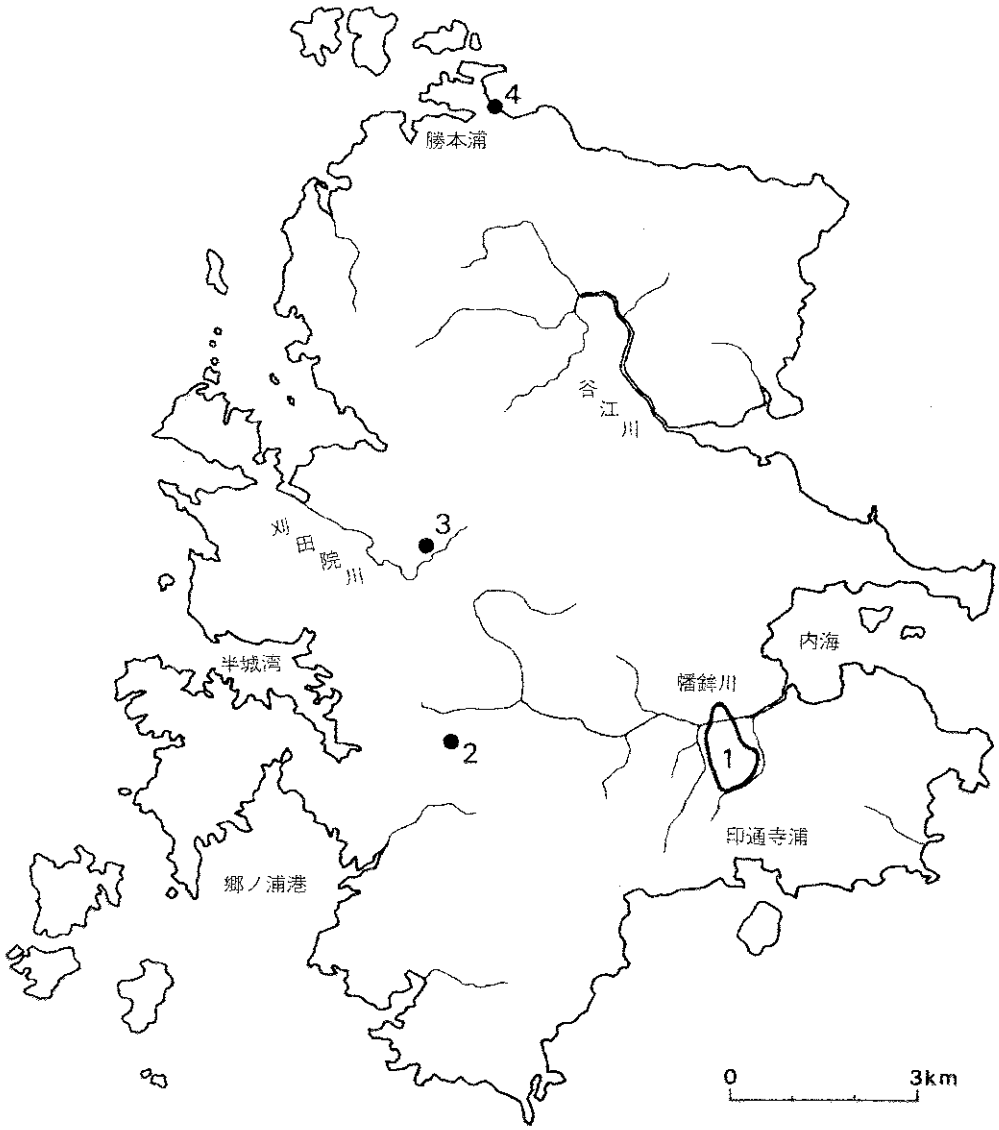



第1図　遺跡の位置

期末には集落が形成され始めたことが推測される。しかし，まだ点的な確認にとどまっている。平成5年から本格的な調査が行われている原の辻遺跡では，前期末に台地と北側から北西側の低地において居住が開始され，面的な拡がりをもつことが明らかになりつつある。原の辻遺跡とカラカミ遺跡の拠点集落としての端緒は両者ともに弥生前期末に開始されるが，萌芽段階においてすでに原の辻遺跡の方が規模的に卓越していたことが考えられる。

弥生中期になると，原の辻遺跡とカラカミ遺跡は双方ともに中期前半以降に隆盛期をむかえるが，最近の調査の成果からみていくと，原の辻遺跡は須玖Ⅰ式の段階に多重に環濠を巡らして大集落として整備されたことが推測できるようになってきた。平成8年度に発見された八反地区（芦辺町）の船着き場跡も，須玖Ⅰ式段階に築造されて弥生中期に使用されたことが推測されている。

車出遺跡では，弥生中期から後期の資料が出土していて，原の辻遺跡と同じ幡鉾川（はたほこがわ）水系の上流部に




第2図　原の辻遺跡位置図
1．原の辻遺跡　2．車出遺跡　3．カラカミ遺跡　4．天ケ原遺跡

あるところから，原の辻遺跡から分岐した集団によって弥生中期に経営が開始された可能性が高いことが考えられ，親子に似た帰属関係が維持されていたことが考えられる。

カラカミ遺跡は，刈田院川の谷底平野から比高40mの丘陵上に立地していて，昭和57～59年度の調査で環濠が一重巡ることが確認されている。過去の調査成果も併せると，方格規矩鏡片１点，国産の小型仿製鏡，銅鋤先，銅鏃などの青銅器，楽浪系滑石混入土器・楽浪系瓦質土器・三韓系瓦質土器・陶質土器等の朝鮮半島系土器，鉄鎌・鉄製鋲・鉄製釣針等の鉄製品，骨角製鋲・ヤス・アワビオコシ等の骨角製品などの資料が出土している。遺跡は弥生前期末から古墳時代前期まで続くが，弥生終末以降古墳時代に入ると急速に衰退するようである。遺物の組成からみると農具の石庖丁や鉄鎌の出土が少ないのに対して漁撈関係の遺物が多く出土していて，農耕的な色彩よりも漁撈的な様相が強い遺跡である。

車出遺跡は，平成９年度の調査において，濠と推定される断面Ｖ字形の溝が確認され，貨泉，方格規矩鏡片，小型仿製鏡，銅鏃等の遺物が出土して，柳田地域の拠点集落であることが判明した。遺跡の規模からみると，原の辻遺跡が約100ha，カラカミ遺跡が約５haであり，車出遺跡も数haほどの拡がりをもつことが推測される。この三つの拠点集落のうちで原の辻遺跡は圧倒的に巨大で，青銅器などの遺物や遺構の内容からみても一支国の中心的な集落（国邑）であったことは間違いない。また，三者の遺物組成をみると，中国や朝鮮半島から舶載された品々がみられ，それぞれに「市庭」をもっていた可能性も示唆している。

壱岐北端に位置する天ケ原遺跡では，対馬を望む海岸のセジョウ神という石祠の下から三本の中広銅鉾が出土している。北端にあるという場所を考慮すると，異国から招来する悪霊や疫病等に対しての辟邪のための境界祭祀であったことが推測される。この他に壱岐では，勝本町の熊野神社に神宝として中広銅鉾１本が伝世されているが，これまで広形銅鉾は出土しておらず，百本を超える銅鉾を出土している対馬と比較すると対照的なあり方を示している。

## ２．原の辻遺跡の概要

原の辻遺跡は，大正年間に遺跡として注目され始め，これまで数々の調査が実施されてきた。ここでは最近の調査成果を基にして原の辻遺跡の概要について述べたい。

原の辻遺跡は，島内最長の幡鉾川が形成した深江田原と呼ばれる沖積地のなかに舌状に突出した標高８～18mほどの低い台地と，標高５～７mほどの現水田面の低地に立地している。遺跡は，弥生前期末に居住を開始し，中期前半期に多重環濠をもつ大集落として整備され古墳時代前期まで存続するが，布留式新相段階に原の辻大集落の解体が起きて消滅にむかったようである。

弥生前期末の段階には，台地では高元地区東側傾斜面の大溝付近，低地では北東部の不條地区一帯の二つの地域に分かれて居住が開始されたようである。両者の集団の差異についてはまだ明確ではないが，大溝では鍬と手斧柄未製品が出土しているところからここでは木製品の製作が行われていたことが分かる。台地の北西から北部にかけての低地の不條・川原畑・閨繰（安国寺前Ａ）地区では，弥生前期末から中期にかけて，頁岩や粘板岩を用いた石庖丁・石鎌・石斧・石剣等の石器製作が行われ

表１．これまでの主な調査の経緯と成果

| 発見・調査年度 | 発見者・調査主体 | 主な成果 |
|---|---|---|
| 大正～昭和初期 | 松本友雄・山口麻太郎 | 学会への遺跡の紹介・報告。 |
| 昭和14年 | 鴇田忠正 | 幡鉾川改修に伴う耕地整理での調査。 |
| 昭和26～39年 | 九学会・東亜考古学会 | 住居跡，墓域の確認。卜骨，貨泉，銅鏃，朝鮮半島系土器など出土。原の辻上層式の設定。石器から鉄器へ転換した典型的遺跡の評価。 |
| 昭和29年 | 東亜考古学会 | 圃場整備で大原地区から細形銅剣２・銅鉾１出土。 |
| 昭和49年 | 県教委 | 大原地区で，個人の基盤整備に伴って甕棺墓52，石棺墓19が発見され，戦国式銅剣・トンボ玉など出土。 |
| 昭和50～52年 | 県教委 | 大川地区，原ノ久保Ａ・Ｂ地区などの墓域の発見。大川地区では，規矩鏡・有鈎銅釧など出土。遺跡が台地上に広域に拡がることを確認。 |
| 平成３～５年 | 県・芦辺・石田町教委 | 幡鉾川総合整備計画に伴う範囲確認調査。自然災害に伴う緊急調査。環濠の一部など発見される。 |
| 平成５年 | 県・芦辺・石田町教委 | 台地東裾で環濠，大溝が確認され，遺跡が大規模な多重環濠集落であることが判明する。盾，短甲，銅鏃，貨泉などが出土する。 |
| 平成６年 | 県・芦辺・石田町教委 | 原地区の台地高台部分で高床建物群確認。高元地区で弥生中期～古墳時代前期の住居跡13棟，土壙30基などが確認され，卜骨・獣帯鏡などが出土する。<br>大川地区で初期貿易陶磁，緑釉陶器，墨書土器出土。 |
| 平成７年 | 県・芦辺・石田町教委 | 原地区台地高台部分で高床建物群と古墳前期竪穴住居跡，区画濠２条など確認。大川地区の墓域調査。調査指導委員会で一支国の王都であることが確定される。 |
| 平成８年 | 県・芦辺・石田町教委 | 台地北側から西側の低地に弥生前期末から中期の居住域の拡がり，旧河道・濠などが確認される。ココヤシ笛出土。八反地区では，船着き場跡と水田畦畔跡が発見される。原地区では，台地東側に濠，竪穴住居跡などを確認。原ノ久保Ａ地区の墓域調査。内行花文鏡など出土。 |
| 平成９年 | 県・芦辺町教委 | 不條地区のため池造成工事に伴う調査で，弥生中期の床大引材出土。池田大原地区では区画濠を確認。原地区では，台地東側に濠，竪穴住居跡などを確認。 |
| 平成10年 | 県教委 | 不條地区の調査において，弥生前期末～中期の居住遺構と，弥生後期の濠を確認し，前漢時代の五銖銭・三翼鏃出土。 |

第3図　原の辻遺跡　概要図（1：8,000）

ていて，島内に配布したばかりでなく，島外にも交易物として運ばれていった可能性をもっている。低地の北西部不條地区では，朝鮮半島系の無文土器や擬無文土器がまとまって出土していて，半島の人々が集中して居住していたことが推測される。平成9年度には，低地を流れる沿河道の中から礎石建物の建築部材といわれる床大引材が出土していて，敷葉（しきば）・敷粗朶（しきそだ）工法という大陸直輸入のハイテク土木技術で築造された船着き場跡と共に，大陸から来島した技術者が直接にかかわっていたことが考えられる。不條地区で実施された平成10年度の船着き場付近水路等状況調査（以下特定調査）では，前漢時代の五銖銭や三翼鏃も出土して，本遺跡が対外交渉・交流の基地であったことを如実に示すことになった。船着き場付近には倉が建ち，周辺の低地には国際的な「市庭」が存在したことが想像されてくる。この低地一帯では居住が弥生後期初頭頃に放棄され，新たに濠が整備されるという大きな変化が認められる。弥生後期前葉以後の居住は台地の内濠の中だけに限られ，中期に掘られた濠の再整備と共に新たに幾重にも環濠が巡らされ，原の辻集落は再び城塞化したようである。

原の辻遺跡では，弥生後期後半期の下大隈式の段階において，環濠に遺物の廃棄が行われて濠が埋まっていく様子がみられ，倭国大乱の終息以後の状況を反映していると推測することができる。濠は後期後葉から古墳時代前期には埋没して，弥生終末から布留式段階には埋没した濠の上に竪穴住居が設けられている。戦乱や紛争がおさまって緊張した状況が解消されると，防御のための濠の必要性がなくなり人為的に埋められたのであろう。

原の辻遺跡では，墓域が環濠内に一箇所（高元地区），環濠外に五箇所（石田大原，大川，柏田，原ノ久保A，原ノ久保B）確認されている。墳墓の形式は，北部九州系の成人用甕棺が石田大原地区などで確認されているが，大川地区など墳墓の主体となるのは箱式石棺墓，土壙墓である。これは壱岐の墳墓が北部九州地域よりも長崎県本土部や佐賀県北部の西北九州地域の墓制に類似したあり方をもっていたことを示している。石田大原・大川・原ノ久保A地区の墳墓では，規矩鏡・獣帯鏡・内行花文鏡などの中国鏡，戦国式銅剣・細形銅剣・細形銅鉾，および国産の銅釧などの青銅器や中国製のトンボ玉などが副葬されていて，王族級の有力な集団の墳墓が存在したことが明らかである。

また，原の辻遺跡の台地頂部（原地区）では，祭りや儀式に使われたと推測される掘建柱建物群が検出されている。東京国立文化財研究所の宮本長二郎氏は，北側の建物群を小型高床祭殿，中央部の建物を高床主祭殿，南側の建物を平屋脇殿と解釈されている。[註2] 宗教・祭儀のためのシンボリックな中枢区域であったのであろう。

出土遺物をみると，大陸・朝鮮半島からの舶載された品物や本土からの搬入品が多く出土していて，「倭人伝」にいう南北市糴の状況がうかがえ，一支国の人々の活発な交易活動も考えられるが，ここに「市庭」があって，各国から人の往来がみられる国際的な交易・交流の拠点であったことが推察される。今後も継続される調査によって，一支国の豊饒な歴史が明らかになってくると考えられる。

註1　澤田吳一『奈良時代民政経済の数的研究』富山房1925　復刻版柏書房　1972

2　宮本長二郎「弥生の大型建物」『歴史九州』第7巻5号　1997

# II　調査の経緯

## 1．平成７年度の調査

原の辻遺跡では平成５年度から幡鉾川総合整備計画に伴って本格的な発掘調査が始まって環濠等が発見され，「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の中心集落であることが明らかになった。しかし遺跡は大規模に拡がり，集落内の詳細な様相はまだ明らかになっていない。そのために諸開発行為や遺構の保存・活用・整備のための基礎資料を得る目的で，国庫補助を受けて「原の辻遺跡発掘調査事業」を平成７年度～平成11年度の計画で実施することになった。調査は，芦辺町・石田町教育委員会の協力を得て，県教育委員会が主体となって実施した。

平成７年度は，原地区（芦辺町深江鶴亀触字原）と大川地区（石田町石田西触字大川）の範囲確認調査を実施した。原地区は，台地頂部の高台と西側傾斜面にかけて，Ａ～Ｉ区の９箇所の調査壙を設定して1,573m²を発掘した。調査は，平成７年９月29日～平成８年１月22日に実施した。その結果，高台部のＡ区で祭儀関係の掘立柱建物２棟以上，竪穴住居跡２棟，東西方向の濠２条などが検出され，西側傾斜面の調査壙では濠が西側にのびていることと，竪穴住居跡７棟，溝３条などが確認された。Ａ区は平成６年の県単独事業の調査で北端を調査して小型の高床建物群が発見されていたが，今年度の調査によって台地頂部全体を剝いで調査したことになり，祭儀建物群を確認することができ，この区域が原の辻遺跡の中枢部分であることが明らかになった。

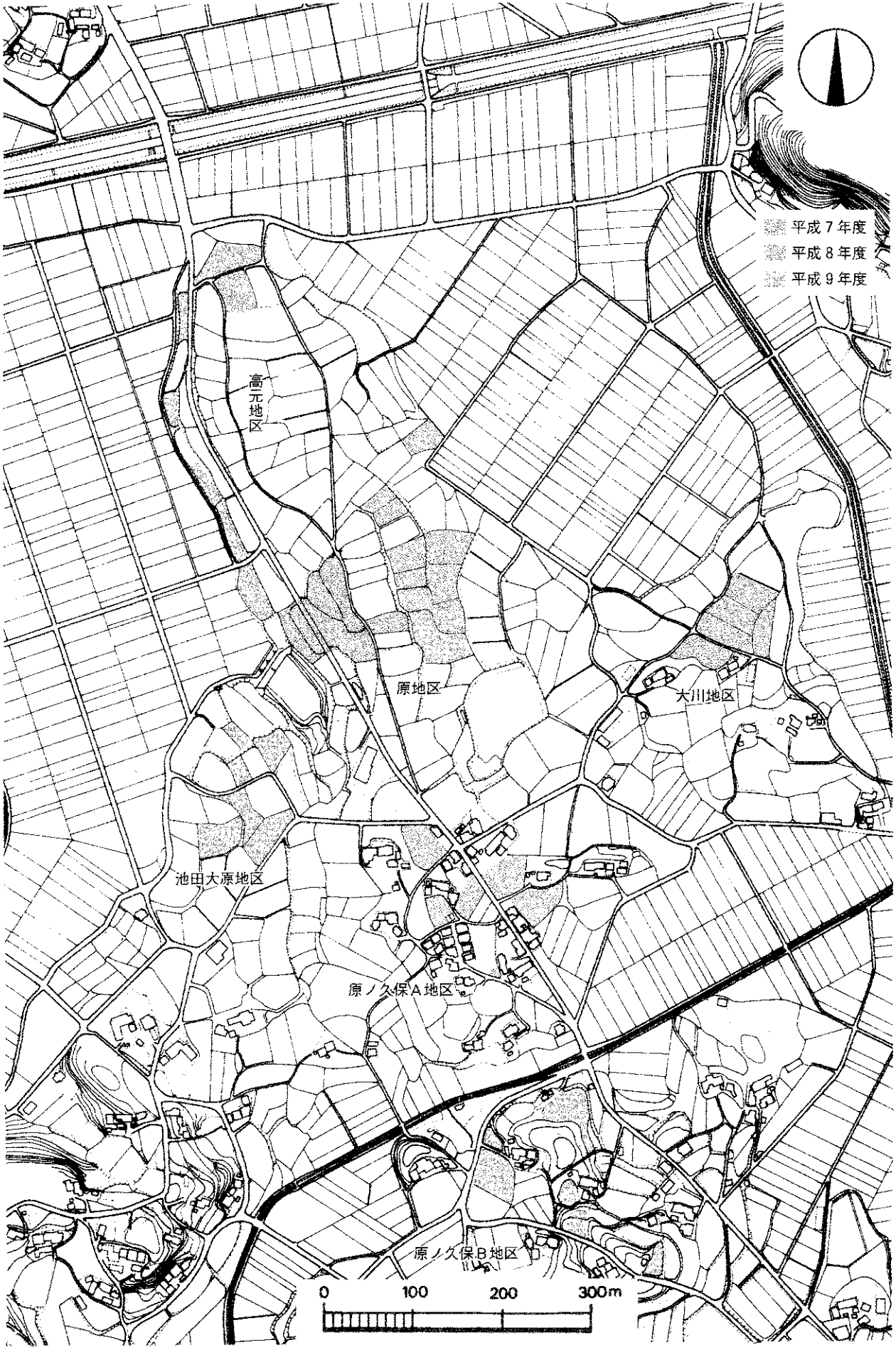
大川地区は，昭和51年度の範囲確認調査によって墓域としての確認がなされたが，その後に規矩鏡１面と有鉤銅釧３点，ガラス玉などが採集されて有力集団の墳墓として注目されることとなった。当該地区の調査は，Ａ～Ｊ区の10箇所の調査壙を設定して533m²を発掘した。調査は，平成７年９月４日～平成７年11月24日に実施した。調査の結果，箱式石棺墓５基，石蓋土壙墓１基，土壙墓および土壙墓13基，小児甕棺墓７基，溝状遺構５条などの遺構が検出され，鉄剣，鉄鎌，鉄鋤先，管玉，ガラス玉，鏡片などが出土した。今回の調査によって，墳墓の分布状況は密でなく，わりとゆったりとした配置状況をなしていること，墳墓の主体が箱式石棺墓，土壙墓であること，墓域の範囲が東西約60m，南北約80mの拡がりをもつことなどが明らかになった。

調査関係者は以下のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

| | | |
|---|---|---|
| （原地区） | 係　　長 | 副島　和明（現文化課係長） |
| | 主任文化財保護主事 | 宮崎　貴夫（現調査事務所係長） |
| | 文化財保護主事 | 川口　洋平（現文化課文化財保護主事） |
| | 〃 | 石尾　和貴（現長崎南高校教諭） |
| （大川地区） | 主任文化財保護主事 | 宮崎　貴夫（現調査事務所係長） |
| | 文化財保護主事 | 山下　英明（現壱岐高校教諭） |

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会




第４図　年度別調査対象地区（１／6,000）

## 2．平成８年度の調査

平成８年度は，原地区（芦辺町深江鶴亀触字原）と原ノ久保Ａ地区（石田町石田西触字原ノ久保）の範囲確認調査を実施した。原地区は，平成７年度の調査を行った台地最頂部で確認された濠や居住関係の遺構が東側傾斜面にどのように拡がるのか追求する目的で，Ａ～Ｉ区の９箇所の調査壙を設定して1,140㎡を発掘した。調査は，平成８年11月５日～平成９年３月20日に実施した。調査の結果，弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡13棟，東西方向の濠５条，溝５条，小児甕棺墓６基などの遺構が確認され，濠が東側にのびることと，内濠内部の台地東側斜面に居住域が拡がることが確認された。

原ノ久保Ａ地区は，昭和52年の調査で墓域であることが確認されていたが，墳墓の構成や墓域の拡がりを調べるために，Ａ～Ｇ区の７箇所の調査壙を設定して，502㎡を発掘した。調査は，平成８年10月24日～平成９年１月31日に実施した。調査の結果，Ｄ区を中心としてＦ区・Ｅ区で，箱式石棺墓13基，石蓋土壙墓・土壙墓６基，土壙９基，小児甕棺墓３基，集石遺構４基，溝２条の遺構が検出され，墳墓の主体が箱式石棺墓であること，墓域が東西100m，南北150mの範囲に拡がっていることが確認された。出土品は，箱式石棺墓のなかから小型仿製鏡１面，後世に掘られた土壙のなかから長宣子孫銘の内行花文鏡１面，筒形不明青銅器１点，碧玉製管玉１点，ガラス製勾玉１点，ガラス製丸玉などが出土した。内行花文鏡は破壊されていたが，もともとは完形で径20cmの大形鏡であるところから王族級の有力者の副葬品であった可能性が高い資料である。この他にガラス製小玉，鉄製ヤリガンナ，鉄製鋤先，小壺などが出土し，多くの副葬品を伴う墓域であることが明らかになった。

調査関係者は以下のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

（原地区）

| | |
|---|---|
| 係　長 | 宮崎　貴夫 |
| 文化財保護主事 | 西　信男 |
| 〃 | 山下　英明（現壱岐高校教諭） |
| 〃 | 川口　洋平（現文化課文化財保護主事） |

（原ノ久保Ａ地区）

| | |
|---|---|
| 所　長 | 田川　肇 |
| 課　長 | 安楽　勉 |
| 係　長 | 宮崎　貴夫 |
| 文化財保護主事 | 西　信男 |
| 〃 | 山下　英明（現壱岐高校教諭） |
| 〃 | 川口　洋平（現文化課文化財保護主事） |

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会

## 3．平成９年度の調査

平成９年度は，原地区・高元地区（芦辺町深江鶴亀触字原・高元）と池田大原地区・原ノ久保Ｂ地区（石田町石田西触字大原・原ノ久保）の範囲確認調査を実施した。

原地区では，平成８年度調査区域の南側を中心としてⅠ・Ⅱ区の調査壙を設定し，台地西側傾斜面にⅢ区を設定して650㎡を発掘した。Ⅰ・Ⅱ区では，弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡17棟，濠１条，溝６条，小児甕棺墓５基などの遺構が検出され，住居跡が多数重複した状況がみられた。台地の東側傾斜面が長期間にわたって居住域として利用されていたことが明らかになった。平成８年度調査のＤ区で検出されていた濠が，西側のⅡ区にのびていることが確認された。また，この濠に沿って小児甕棺墓が両岸に並んだ状況で検出され，本来の墓地とは性格が異なることが推測される。台地西側斜面のⅢ区では，調査壙の幅が１ｍという制約もあり遺構の内容がはっきりしないところもあるが，弥生後期から古墳前期の竪穴住居跡の可能性のある落ち込みが４箇所確認された。高元地区では，Ⅰ～Ⅵ区の６箇所の調査壙を設定して220㎡を発掘した。調査の結果，Ⅰ区とⅤ区でピットが，Ⅲ区で弥生終末～古墳初頭の合口小児甕棺墓２基が検出されたが，その他の調査壙では遺構の確認ができなかった。芦辺町の原・高元地区の調査は，平成９年11月４日～平成10月３月24日に実施した。

池田大原地区は原地区から南西にある台地で，これまで調査が実施されたことがない区域である。そこでの遺構等の確認ために，Ⅰ～Ⅵ区の６箇所の調査壙を設定して235㎡を発掘した。調査によって，Ⅰ区で東西方向にのびる弥生中期の濠１条が検出され，Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ区でピット群が若干検出されたが，厳密な居住を物語る遺構の確認はできなかった。今回発見された濠は，台地を区切る環濠外の防衛ラインの一つと推測される。この濠は弥生後期には存在せず，短期間に埋没したようである。この地区の調査で，環濠内部が基本的な居住域であり，環濠外部に墓域や畑地などのエリアが存在したことが推測できるようになった。原ノ久保Ｂ地区は，昭和52年の調査で，弥生終末～古墳初頭期の西新式系の成人甕棺墓が２基検出されていた場所で，墓域の確認を主体としてⅠ～Ⅵ区の６箇所の調査壙を設定して495㎡を発掘した。調査の結果，全ての地区ともに遺構は検出されず，Ⅰ区から甕棺片，Ⅲ区から古墳時代から歴史時代の土器片などが出土した。石田町池田大原・原ノ久保Ｂ地区の調査は，平成９年12月10日～平成10年３月６日に実施した。

調査関係者は以下のとおりである。

調査担当　　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

（原・高元地区）　係　　長　　宮崎　貴夫

文化財保護主事　　杉原　敦史

〃　　西　　信男

（池田大原・原ノ久保Ｂ地区）

課　　長　　安楽　　勉

係　　長　　宮崎　貴夫

文化財保護主事　　杉原　敦史

〃　　西　　信男

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会

# Ⅲ 調　　査

## 1．大川地区の調査

### (1) 調査概要

当該調査地点は，遺跡の北東部に位置し，標高11～13mの台地に立地する弥生時代の墓地である。昭和51年には県文化課による範囲確認調査が実施され，箱式石棺墓２基，土壙墓２基，小児甕棺墓４基が検出され，ガラス製勾玉・管玉・小玉，鉄製ヤリガンナなどの副葬品が出土した。その後，畑地（604番地）の深耕で出土した規矩鏡などの舶載鏡片，有鉤銅釧３点，多数のガラス玉が地元の研究者によって採集され，有力者集団の墓域として注目されることになった。この地区は，従来「高原地区」と称されていたが，字名が間違っていることが判明したため，後に「大川地区」に改められた。

平成７年度の調査は，墓域の範囲確認と墳墓の内容・構成を究明するために調査を実施した。調査は，石田町石田西触602番地，603－１番地，604番地，605－１番地，606番地の畑地に，Ａ～Ｊ区の７箇所の調査壙を設定して，553m²を発掘した。調査の結果，箱式石棺墓５基，石蓋土壙墓，土壙墓および土壙13基，小児甕棺墓７基，溝状遺構５条などの遺構が検出された。副葬品は，鉄剣，鉄鋤先，碧玉製管玉，ガラス小玉がみられたが，墳墓ではないＡ１区の１号土壙から鉄鋤先，鉄鎌，丹塗土器片などが出土した。後漢鏡片はＤ１区，Ｉ１区で出土し，604番地と605－１番地でも採集されている。604番地の１区では，排土をフルイによって選別したところ150点を超えるガラス玉，硬玉製勾玉片と鏡片が採取された。今回までの調査によって，本地区の墳墓が弥生中期後半から後期の時期に営まれたことが明らかになってきたが，弥生前期土器が少量ではあるが出土していて，墓地として利用される以前にも小規模ではあるが人々の居住があったことが分かった。また，台形様石器やナイフ形石器などの旧石器時代の資料も若干出土した。以下，個々の遺構についてみていきたい。

### (2) 遺　　構

①箱式石棺墓（第12・13図）

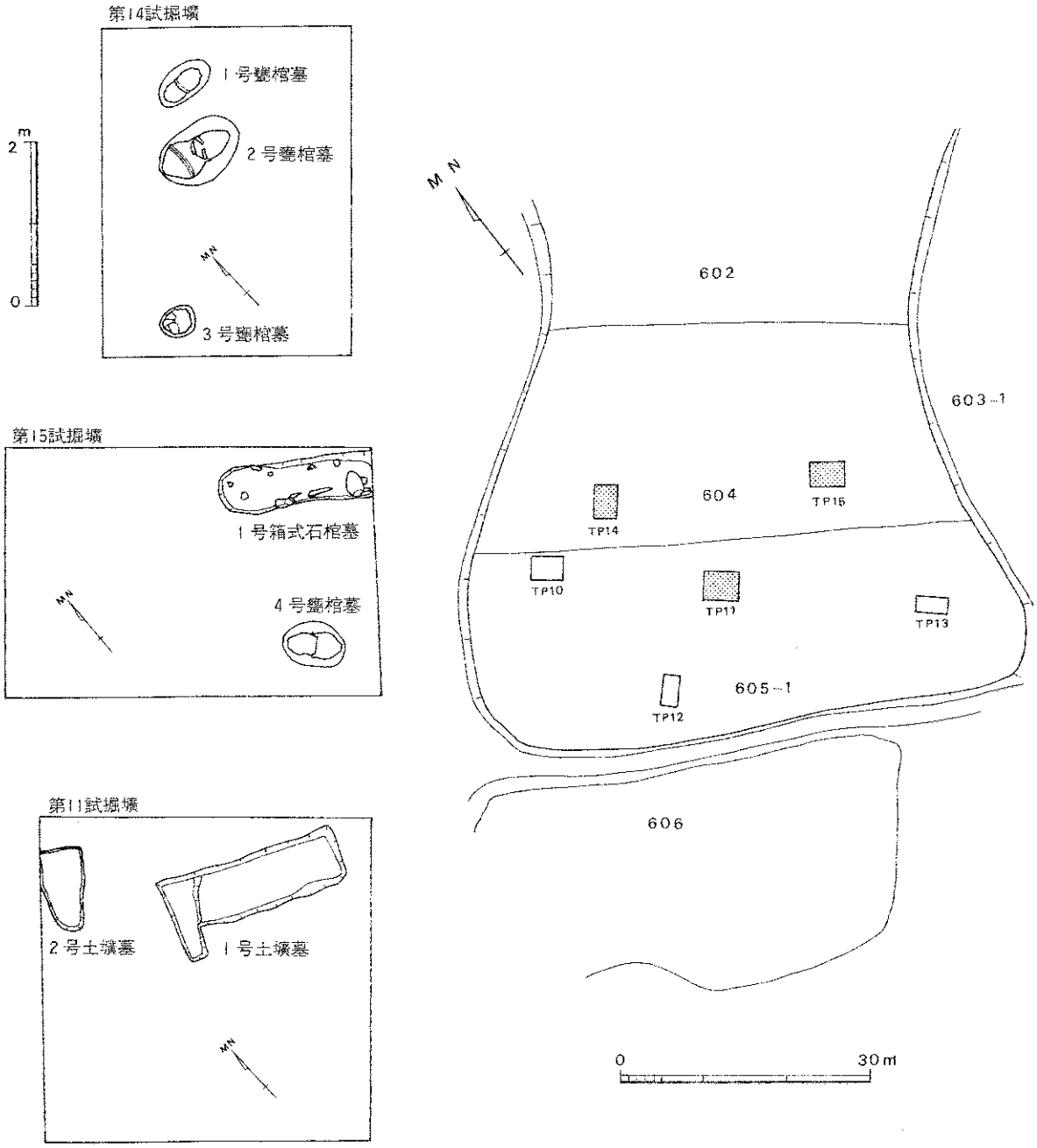
**１号箱式石棺墓**（第12図）

Ａ２区にある石棺墓で，棺材をほとんど抜き取られ，側石が５箇所残っているに過ぎない。墓壙は隅丸の長方形をなし，長さ2.17m，幅0.6mを測る。残った棺材と小口の掘り方など考慮すると，内法は長さ約1.9m，東側の幅が約0.4mを測る。東側が西側よりも幅が広く，頭位方向は東側と推測され，主軸方位はN108°Eを測る。中から骨片少々と弥生後期と思われる土器片が出土して，規模が長大傾向をもっているので弥生後期後半以降の時期のものと考えられる。なお，これから説明を行う本地区の石棺墓，石蓋土壙墓の棺材はほとんどが玄武岩の板状石を用いている。

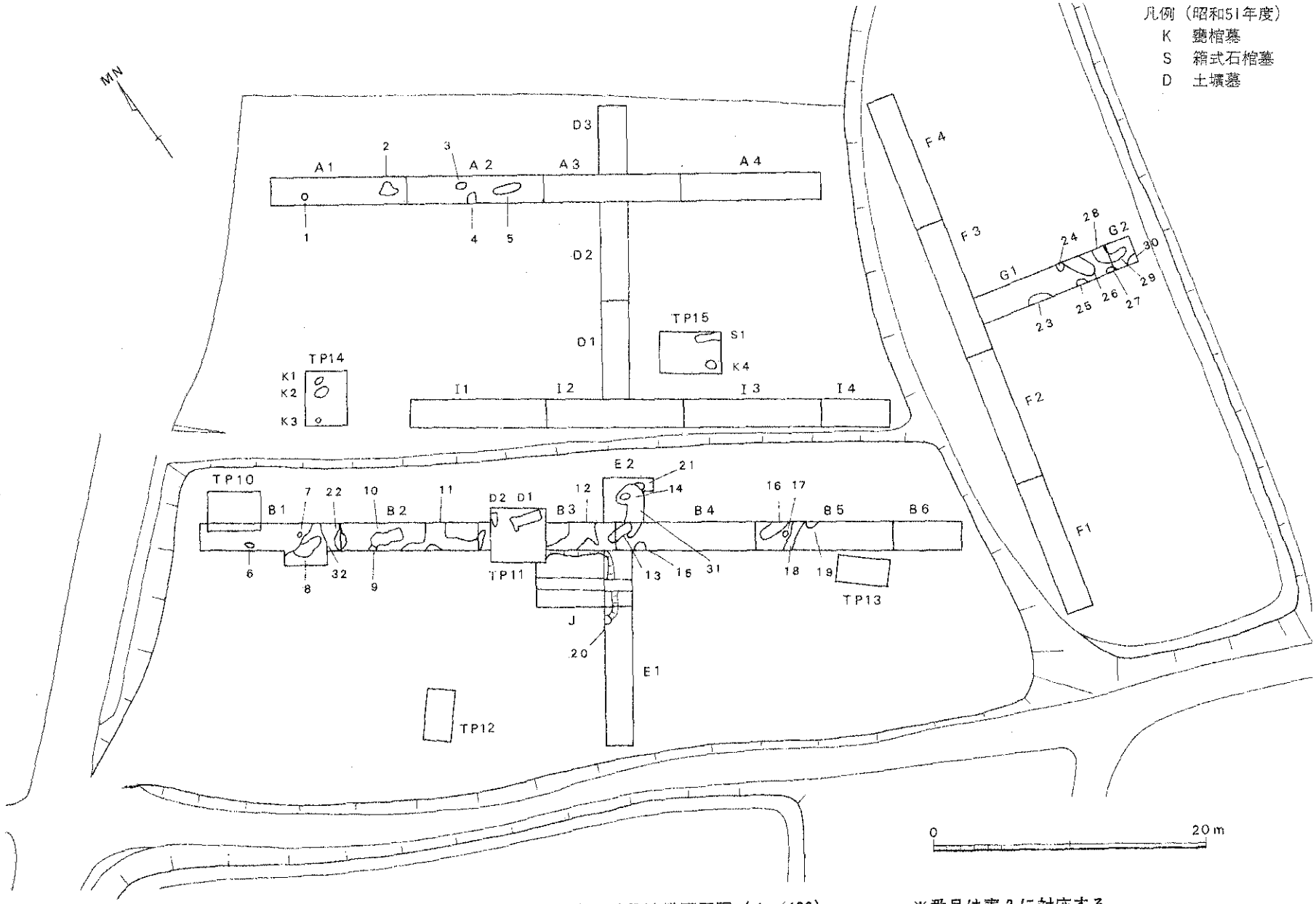
**２号箱式石棺墓**（第12図）

Ｂ１区にある石棺墓で，蓋石は西端が残っていたに過ぎないが，小口と側石は完存していた。小口・側石ともに薄手の板状石を使用し，側石には５枚の石を用いている。棺身の内法は，長さ2.02m，東側の幅0.25m，深さ0.37mを測る。東側の幅が広いので頭位方向は東側と推測され，主軸方位はN101°

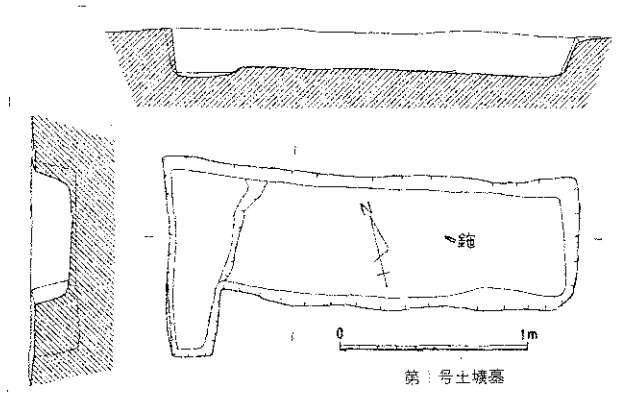
第5図　大川地区調査区域図（1／1,000）



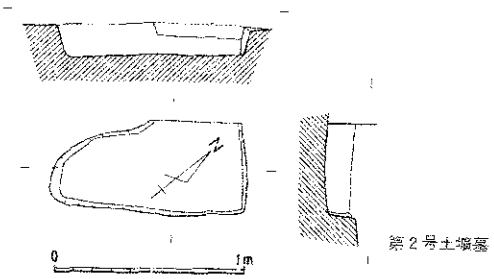

第6図　昭和51年度調査区図（1／800）および試掘壙遺構配置図（1／80）




第７図　大川地区遺構配置図（１／400）　※番号は表２に対応する

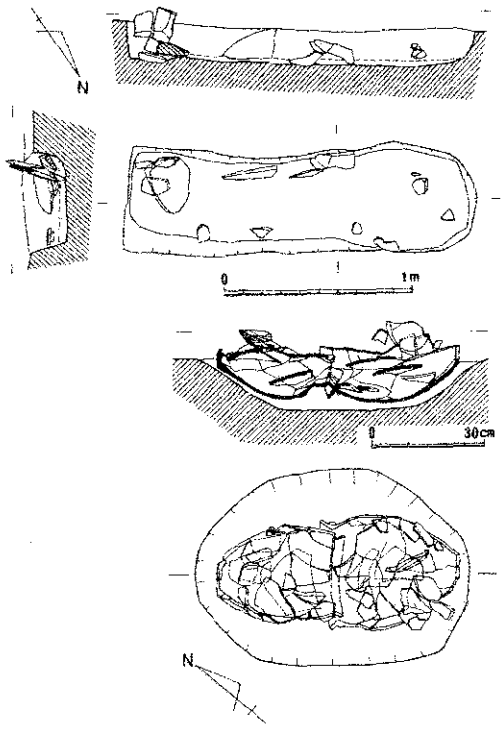



第1号土壙墓

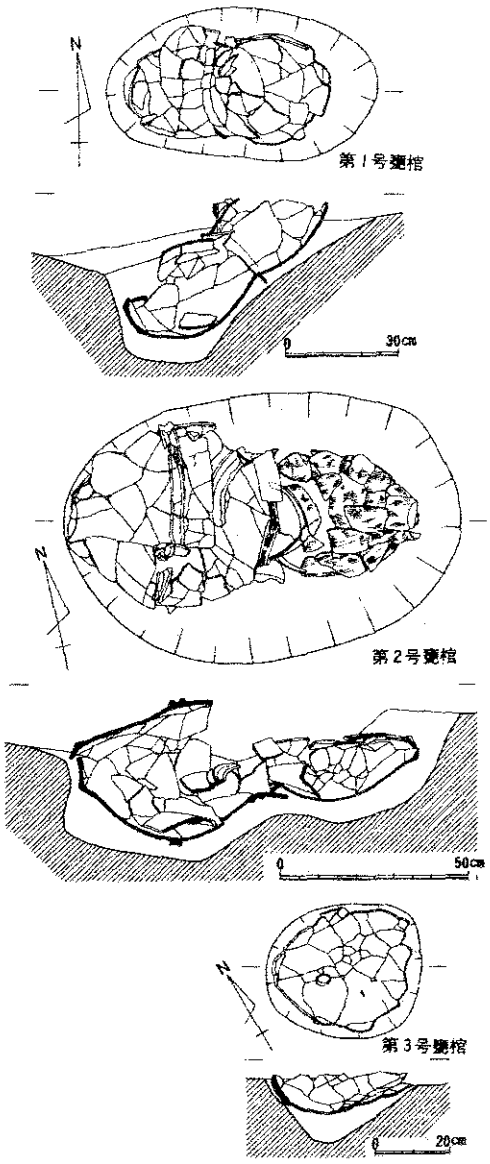



第2号土壙墓

第11試掘壙検出遺構

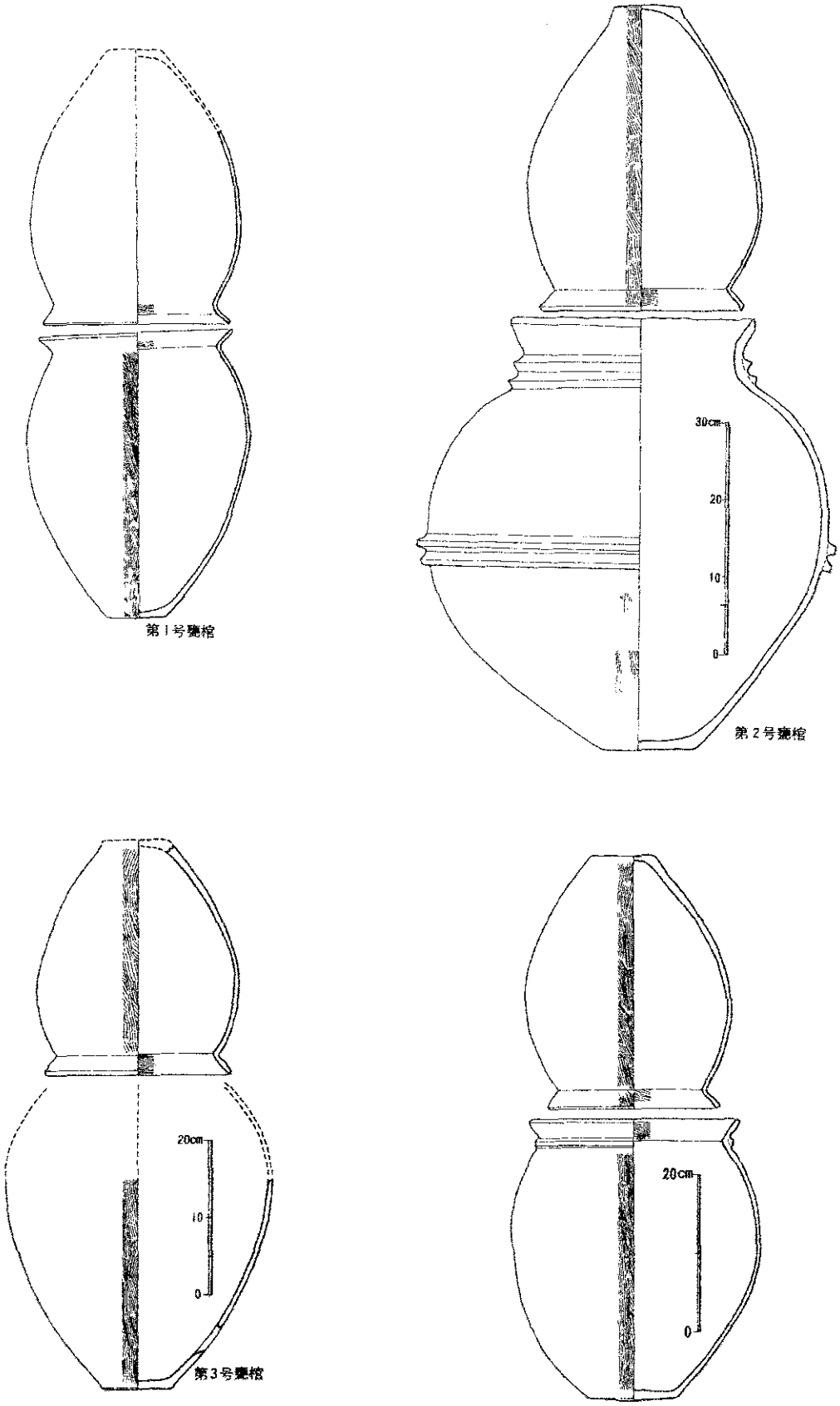



第15試掘壙検出遺構

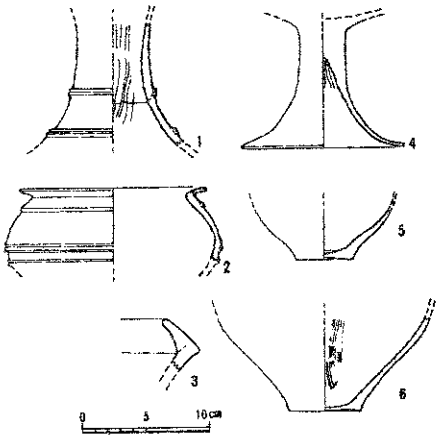



第14試掘壙出土甕棺

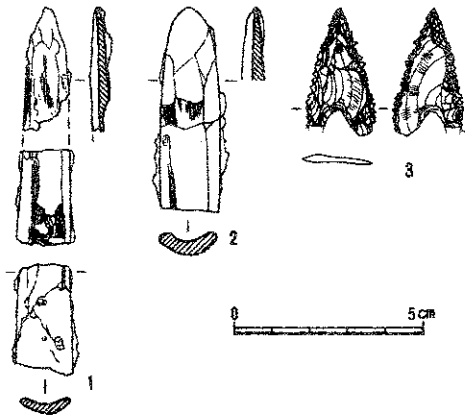
第8図　昭和51年度調査検出遺構（1／20・1／40）



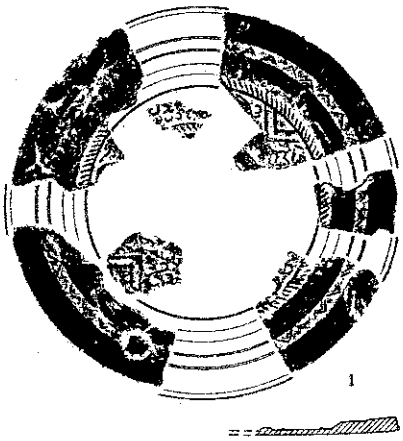

第9図　第14試堀壙（1～3号甕棺）・第15試堀壙出土甕棺（4号甕棺）（1／8）

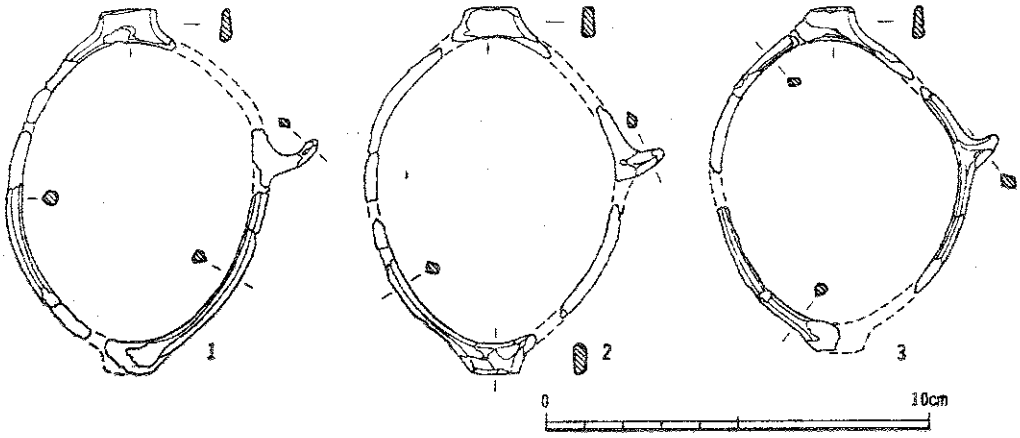



第11試掘壙出土土器（1／6）



第11・第14試掘壙出土遺物と
604番地採集品（1／2）



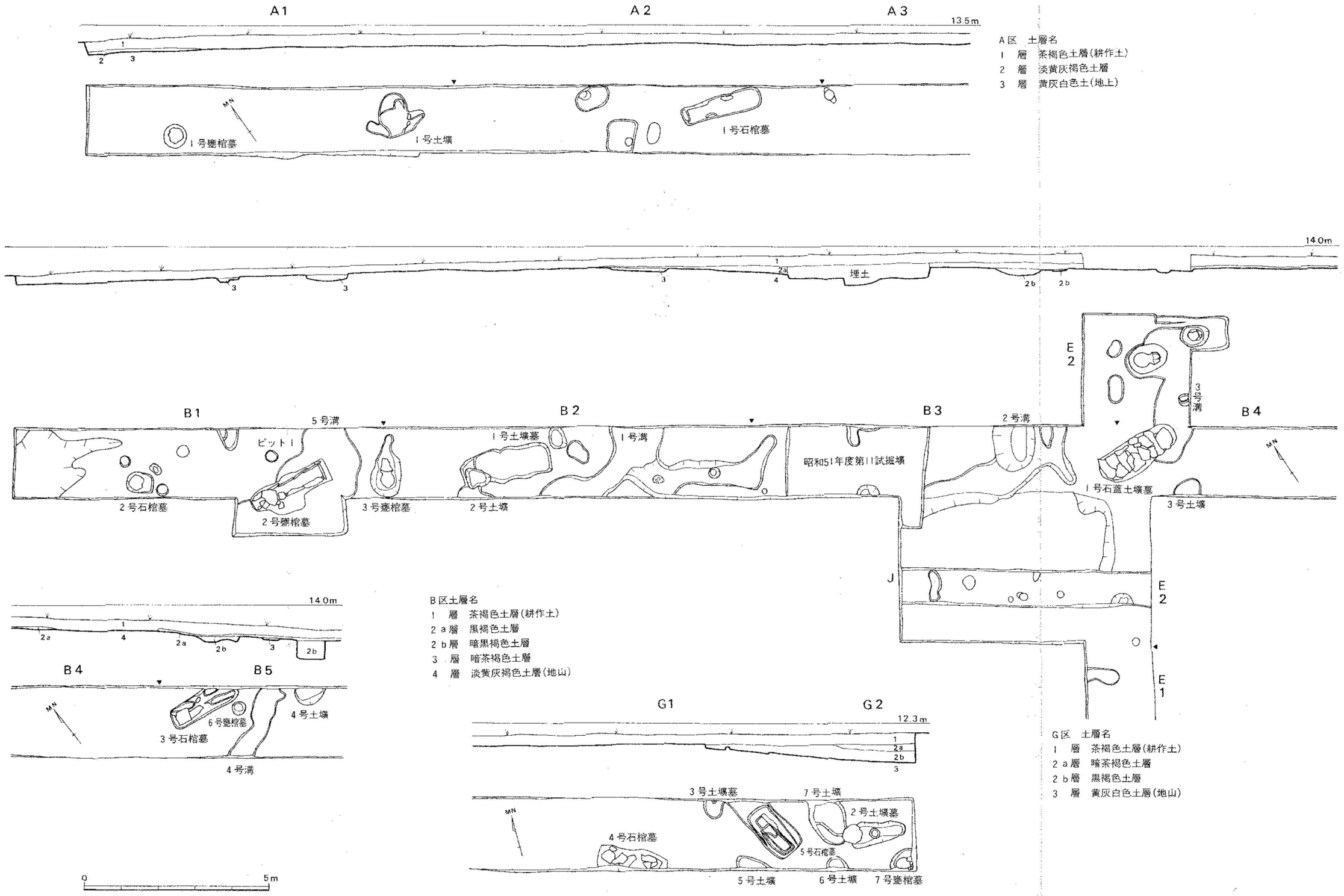




604番地採集品（1／2）

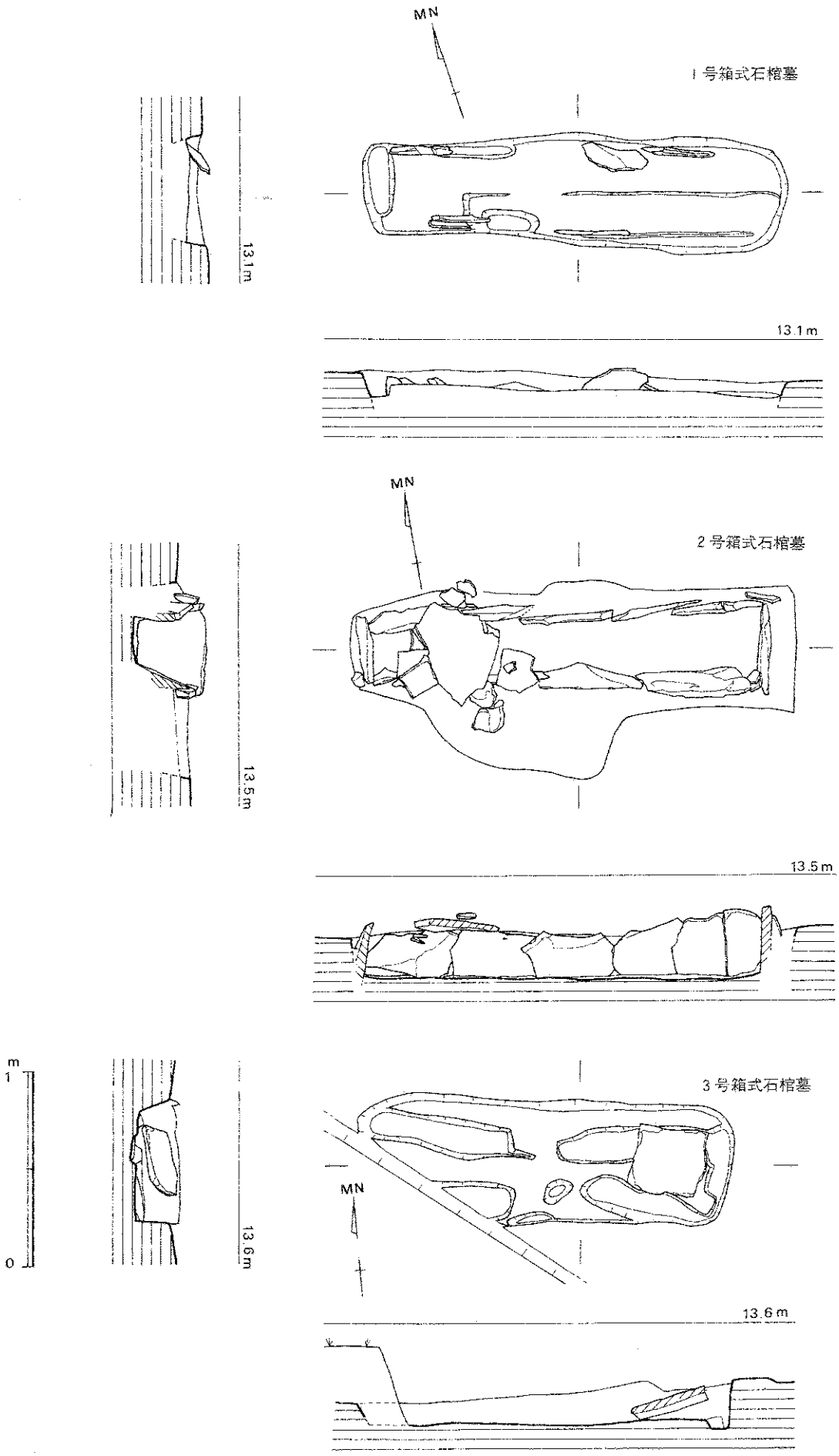
**第10図　昭和51年度出土遺物（1／2・1／6）**

表２．平成７年度大川地区遺構一覧

| 番号 | 地区 | 種別号数 | 時期 | 遺物・副葬品 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | A 1 | 1号甕棺墓 | 後期中頃 | | 壺＋壺 |
| 2 | A 1 | 1号土壙 | 中期末 | 鉄鋤先，鉄鎌，丹塗土器片 | |
| 3 | A 2 | 土壙 | | | |
| 4 | A 2 | 土壙 | | | |
| 5 | A 2 | 1号石棺墓 | 後期？ | 骨少々，弥生土器片 | 石棺抜け跡 |
| 6 | B 1 | 2号甕棺墓 | 後期前半 | | 壺＋壺？ |
| 7 | B 1 | ピット | 前期末 | 弥生前期土器片 | |
| 8 | B 1 | 2号石棺墓 | 後期 | 弥生土器片 | |
| 9 | B 2 | 2号土壙 | 中期末 | 丹塗土器片 | |
| 10 | B 2 | 1号土壙墓 | 中期末 | ガラス小玉385　以上，ヤリガンナ，丹塗土器片 | 木棺墓？ |
| 11 | B 2 | 1号溝 | 中期末 | 丹塗土器片 | |
| 12 | B 3 | 2号溝 | | | |
| 13 | B 4 | 1号石蓋土壙墓 | 後期？ | 弥生土器片 | |
| 14 | E 2 | 4号甕棺墓 | 後期前半 | ガラス小玉54 | 壺＋壺 |
| 15 | B 4 | 3号土壙 | | | |
| 16 | B 5 | 3号石棺墓 | 中期末 | 管玉７，丹塗土器片 | 石棺抜け跡 |
| 17 | B 5 | 6号甕棺墓 | 後期後半 | ガラス小玉６，棺内に朱 | 壺 |
| 18 | B 5 | 4号溝 | | | |
| 19 | B 5 | 4号土壙 | 後期中頃 | 弥生土器片 | |
| 20 | E 1 | 土壙 | 後期？ | 弥生土器片 | |
| 21 | E 2 | 5号甕棺墓 | 後期前半 | ガラス小玉20，管玉，丹塗土器片 | 甕＋丹塗壺 |
| 22 | B 2 | 3号甕棺墓 | 後期前半 | ガラス小玉19 | 甕＋壺 |
| 23 | G 1 | 4号石棺墓 | | | |
| 24 | G 1 | 3号土壙墓 | 後期後葉 | ガラス小玉４，鉄剣，弥生土器片 | |
| 25 | G 1 | 5号土壙 | 後期後葉～ | 弥生土器片 | |
| 26 | G 1 | 5号石棺墓 | 後期？ | 弥生土器片 | 石棺抜け跡 |
| 27 | G 1 | 6号土壙 | 後期？ | 弥生土器片 | |
| 28 | G 1 | 7号土壙 | 後期後葉～ | 弥生土器片 | |
| 29 | G 2 | 2号土壙墓 | 後期？ | 鉄鋤先 | ピット |
| 30 | G 2 | 7号甕棺墓 | 後期後半 | | 甕＋甕 |
| 31 | E 2 | 3号溝 | 中期末 | 丹塗土器片 | |
| 32 | B 1 | 5号溝 | | | |




第11図　平成7年度調査検出遺構配置図（1／100）

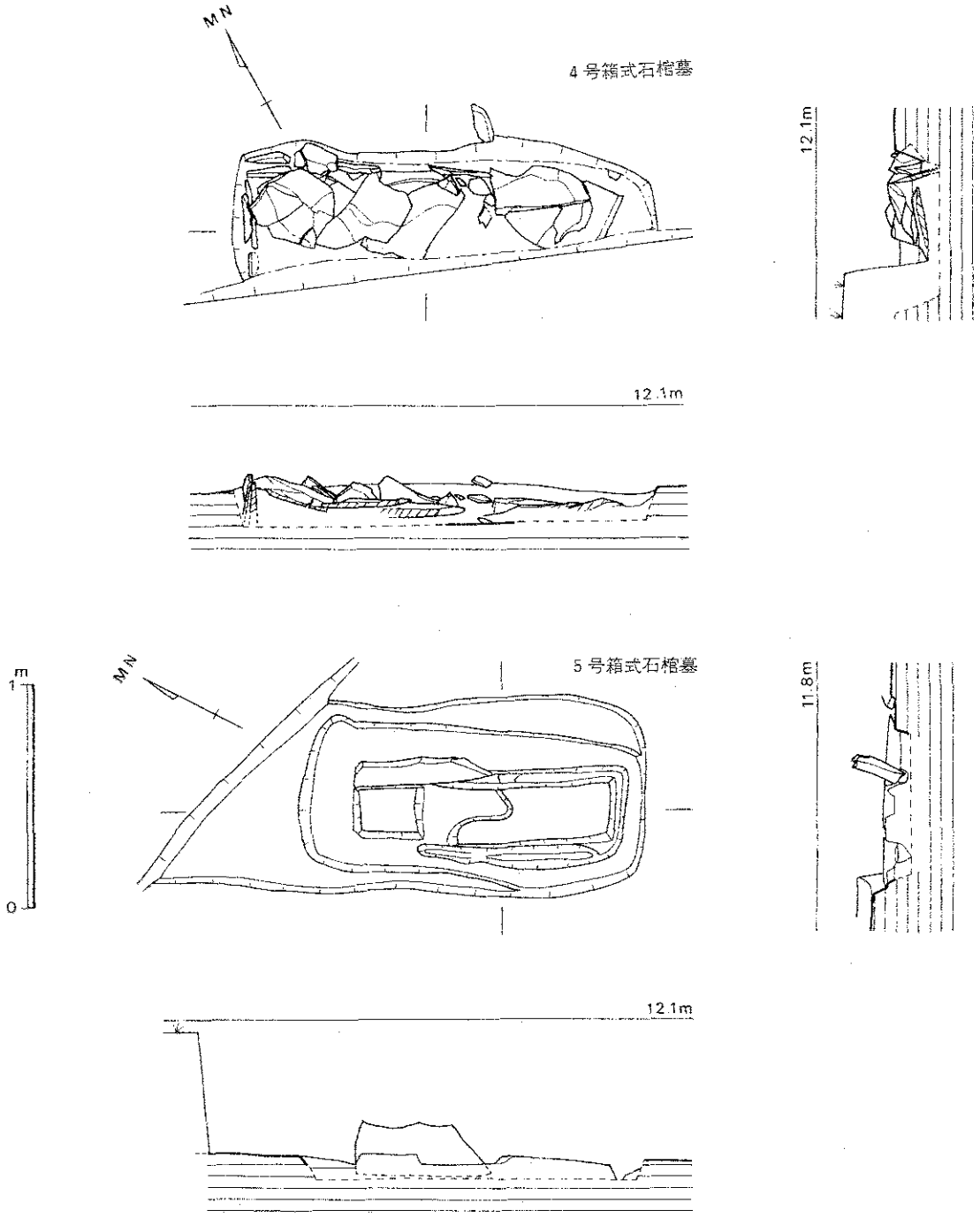



第12図　箱式石棺墓実測図①（1／30）

Eを測る。弥生後期の甕片が蓋石付近にみられたが，棺身が長大傾向をもっていて弥生後期後半以降の時期のものと考えられる。

**3号箱式石棺墓**（第12図）

B5区にある石棺墓で，ほとんどの棺材が抜き取られ，東側の小口材が1枚倒れた状態で残ってい




第13図　箱式石棺墓実測図②（1／30）

たに過ぎない。この小口材は例外的に頁岩を用いている。墓壙の規模は，長さ1.9m，東側の幅が約0.65m，深さ0.23mを測り，棺材の抜き取り痕などから判断すると棺身の内法は長さ約1.7m，幅約0.3m程度であったことが推測できる。頭位は東側で，主軸方位はN95°Eである。棺内から，丹塗土器片と碧玉製管玉7点が出土している。丹塗土器からみると弥生中期末頃の遺構であろう。

**4号箱式石棺墓**（第13図）

G1区にある石棺墓で，調査区に半分ほどかかった。棺身は薄い板状石を用い，蓋石が割れて棺内に落ち込んでいる。全形が出ておらず，上面の記録に留めた。墓壙は隅丸長方形をなし，長さ1.89m，推定幅約0.7m，深さ0.18mを測る。主軸方位は，N61°Wである。棺身は，1.7m前後の長さであろう。棺内から遺物は出土していない。

**5号箱式石棺墓**（第13図）

G1区にある石棺墓で，棺材をほとんど抜き取られ，東側の側石1枚が残っているに過ぎない。墓壙は隅丸長方形をなし，長さ1.53m，幅約0.7mを測る。棺材の抜き取り痕から判断すると，棺身の内法は長さ約1.12m，南側の幅約0.25mを測る。当地区では，最も規模の小さいものである。南側が幅が広いので頭位は南側と推定され，主軸方位はN28°Wである。弥生後期と思われる土器片が出土している。

②石蓋土壙墓（第15図）

**1号石蓋土壙墓**（第15図）

B3・4区にある石蓋土壙墓である。7枚の板状石を長楕円形の墓壙に被せ，さらに5枚の石で覆っている。墓壙は，二段になって棺身に相当する墓壙が掘られている。頭位方向と推測される東側の小口部分には，小口と側面に1枚ずつ「コ」の字形に板状石が配置され，特異な形態をもっている。棺身の内法は，長さ1.67m，東側の幅0.23m，深さ0.25mを測る。棺身の主軸方位は，N103°Eである。出土遺物はみられなかった。当地区で明確に石蓋土壙墓と確認できたのは当遺構だけである。

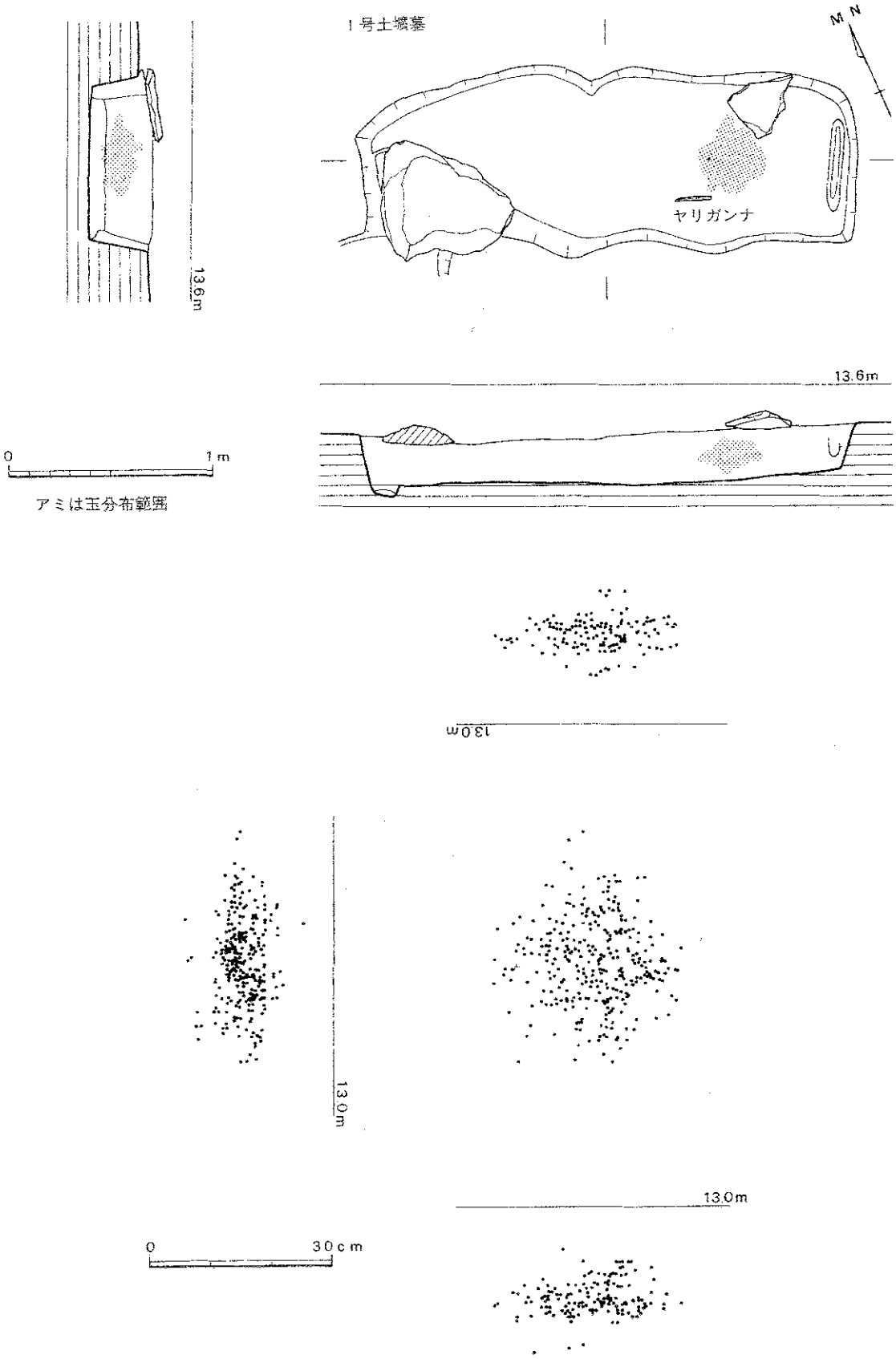
③土壙墓（第14・15図）

**1号土壙墓**（第14図）

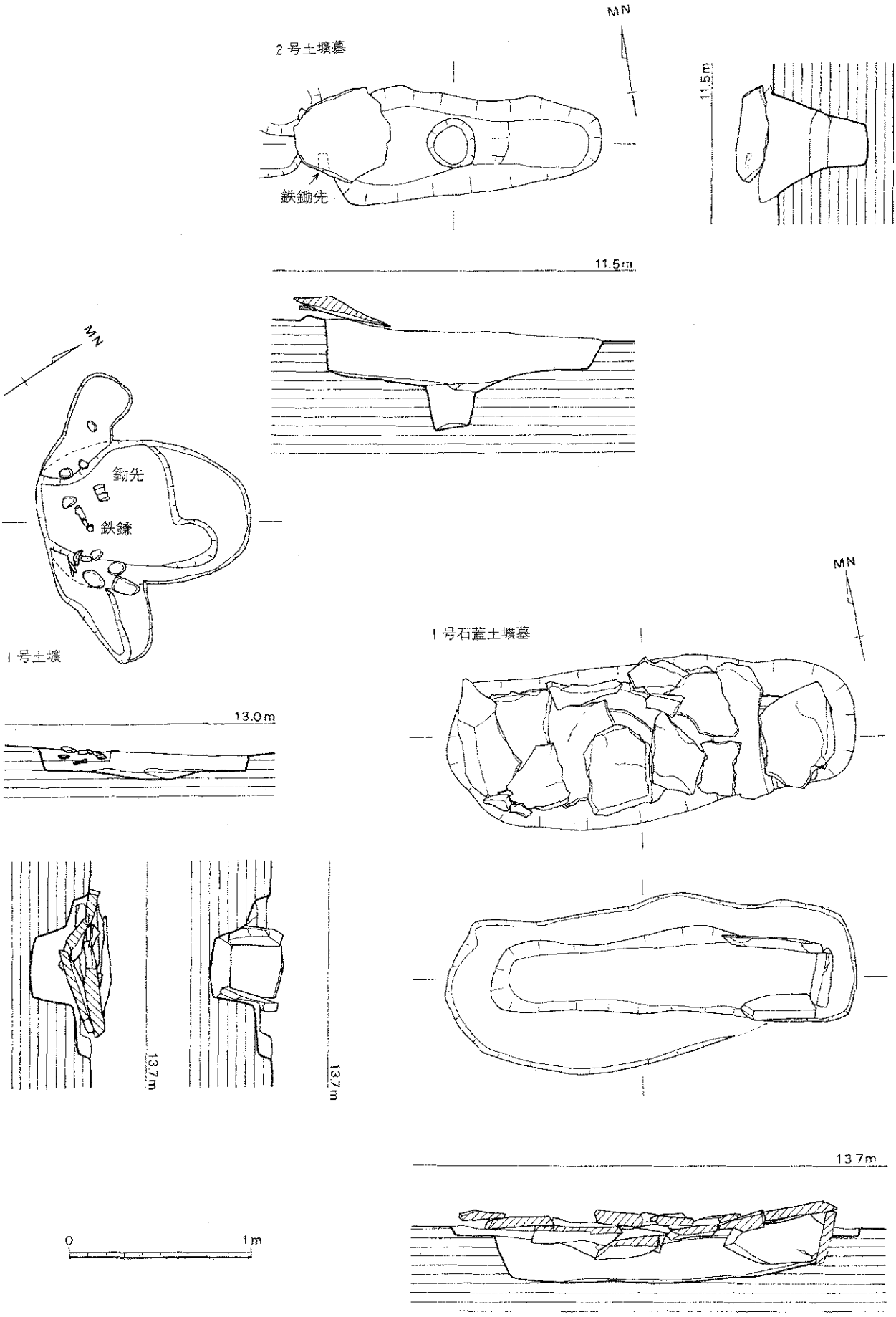
B2区にある隅丸長方形の土壙墓で，西隅に55cm×70cmほどの三角形状の石と北東隅に35cmほどの板状石が存在した。墓壙は，長さ2.43m，幅0.85m，深さ0.28mを測る。東側小口付近に長さ30cmほどの落ち込みが掘り下げ途中で確認され，西側小口部分に掘方が確認されたので，木棺墓の可能性が高いと思われる。副葬品は，東側からガラス小玉が385個以上，鉄ヤリガンナ1本が出土していて，他に丹塗土器片が出土している。副葬品の配置状況からみると頭位は東側で，主軸方位はN112°Eを測る。遺構の時期は，丹塗土器が出土しているので弥生中期末以降の時期が推測される。

**2号土壙墓**（第15図）

G2区にある土壙墓で，東側が大きい長楕円形状をなしている。東端には50cmほどの板状石が置かれ，下から鉄鋤先が出土した。墓壙の長さ1.53m，東側の幅0.54m，深さ0.3mを測る。棺床面中央に径27cmのピットがみられる。頭位方向は東側と推測され，主軸方位はN82°Wを測る。墓壙の東側に置




第14図　土壙墓実測図（1／30)および玉出土状況（1／5）




第15図　土壙墓・石蓋土壙墓・土壙実測図（1／30）

かれた石は，一種の標石であろうか。しかし元々石蓋土壙墓であったものが，蓋石を除去された可能性も残っている。

**3号土壙墓**（第11図）

Ｇ１区に一部かかった土壙墓で，南北方向を向く。長辺の長さは不明で，幅0.5mを測る。中から鉄剣１本と弥生後期後半期の高杯が出土した。

④土壙（第11・15図）

**1号土壙**（第15図）

Ａ１区にある土壙で，溝状の落ち込みによって切られているが，もともとは楕円形状の形状をもっていたことが推測される。長さ1.16m，幅0.8m，深さ0.15mを測り，主軸はN32°Eを向く。中から鉄鋤先，鉄鎌，丹塗土器片が出土し，５cm～15cmほどの円礫（浜石）が８個入っている。石は元々まだ数多く存在した可能性をもっており，鉄鋤先，鉄鎌などの出土を考慮すると墓域の祭祀関係の土壙であったことが考えられる。

**2号土壙**（第11図）

Ｂ２区で一部検出された土壙で，１号土壙墓に切られているようである。主軸は南北方向を向き，丹塗土器片が出土している。土壙墓の可能性をもつ。

**3号土壙**（第11図）

Ｂ４区の南壁に一部かかる土壙である。幅37cmを測る。周辺から弥生後期後半期の高杯が出土している。土壙墓の可能性をもっている。

**4号土壙**（第11図）

Ｂ５区の北壁に一部かかる土壙である。中から弥生後期中頃の土器片が出土した。土壙墓の可能性をもつ。

**5号土壙**（第11図）

Ｇ１区の南壁に一部かかる土壙である。中から弥生後期後半以降の土器片が出土している。土壙墓の可能性をもっている。

**6号土壙**（第11図）

Ｇ１区の南壁に一部かかる土壙である。中から弥生後期と思われる土器片が出土している。土壙墓の可能性をもっている。

**7号土壙**（第11図）

Ｇ１区の北壁にかかる土壙で，２号土壙墓と近接して板石が南端の一部に被っている。南北方向を向き，長さ1.3mほどがかかり，幅約１mを測る。弥生後期後半以降の土器片が出土している。墓であるか否か明確でない。この他にも，Ａ２区に２基，Ｅ１区に１基の性格不明の土壙がみられた。

⑤甕棺墓（第16～19図）

**1号甕棺墓**（第16図）

Ａ１区にある小児甕棺墓である。壺と壺を組み合わせた合口甕棺で，下甕の半分ほどと上甕の大半

が撹乱を受けて欠失している。下甕は口頸部を打ち欠いた壺が斜めに据えられ，上部を打ち欠いた壺胴下半部を被せて上甕としている。主軸方位はN119°W，埋置角度は39°を測る。焼成後の穿孔や副葬品は認められなかった。下甕の壺は，形態的に弥生後期中頃の所産であろう。

**2号甕棺墓**（第16図）

B１区にある小児甕棺墓である。中形壺の口頸部を打ち欠いた胴部部分を棺として用いているが，半分ほどを撹乱を受けて欠失している。検出状況では，合口甕棺であったか否か判断するのは難しかったが，別の壺破片が混じっているので壺と壺の合口甕棺の可能性が高いと考えられる。棺は斜めに据えられ，焼成後の穿孔が２箇所認められる。主軸方位はN114°E，埋置角度は29°を測る。この遺構は，下甕の壺の形態から後期前葉の所産と考えられる。

**3号甕棺墓**（第17図）

B２区にある小児甕棺墓である。下甕に鋤先形口縁の広口壺，上甕に「く」の字形口縁の甕を使用した合口甕棺である。楕円形の墓壙内に，下甕は斜めに壺を据え，上甕は甕を三箇所15～20cmほどの石で固定している。上甕，下甕共に焼成後の穿孔が１箇所ずつ認められる。主軸方位はN29°E，埋置角度は16°を測る。副葬品としてガラス小玉が19個出土してた。この遺構は，甕などの形態から弥生後期初頭から前葉の所産と考えられる。

**4号甕棺墓**（第18図）

E２区にある小児甕棺墓である。鋤先形の広口壺を斜めに据えて下甕とし，上甕にも壺を用いて合口甕棺としているが，撹乱を受けていて特に上甕の残りが悪い。下甕には焼成後の穿孔が１箇所みられる。主軸方位はN119°E，埋置角度は25°を測る。副葬品としてガラス小玉が54個出土した。この甕棺は，下甕の壺の形態から弥生後期前葉の所産と考えられる。

**5号甕棺墓**（第19図）

E２区にある小児甕棺墓である。口頸部を打ち欠いた丹塗壺を下甕とし，上甕に「く」の字口縁の甕を用いて合口甕棺としている。上部を撹乱によって削平され，上甕の大半を失っている。下甕には１箇所焼成後の穿孔が認められる。主軸方位は106°E，埋置角度は57°を測る。下甕内からガラス小玉20個と碧玉製管玉が出土している。弥生後期初頭から前葉の所産と考えられる。

**6号甕棺墓**（第19図）

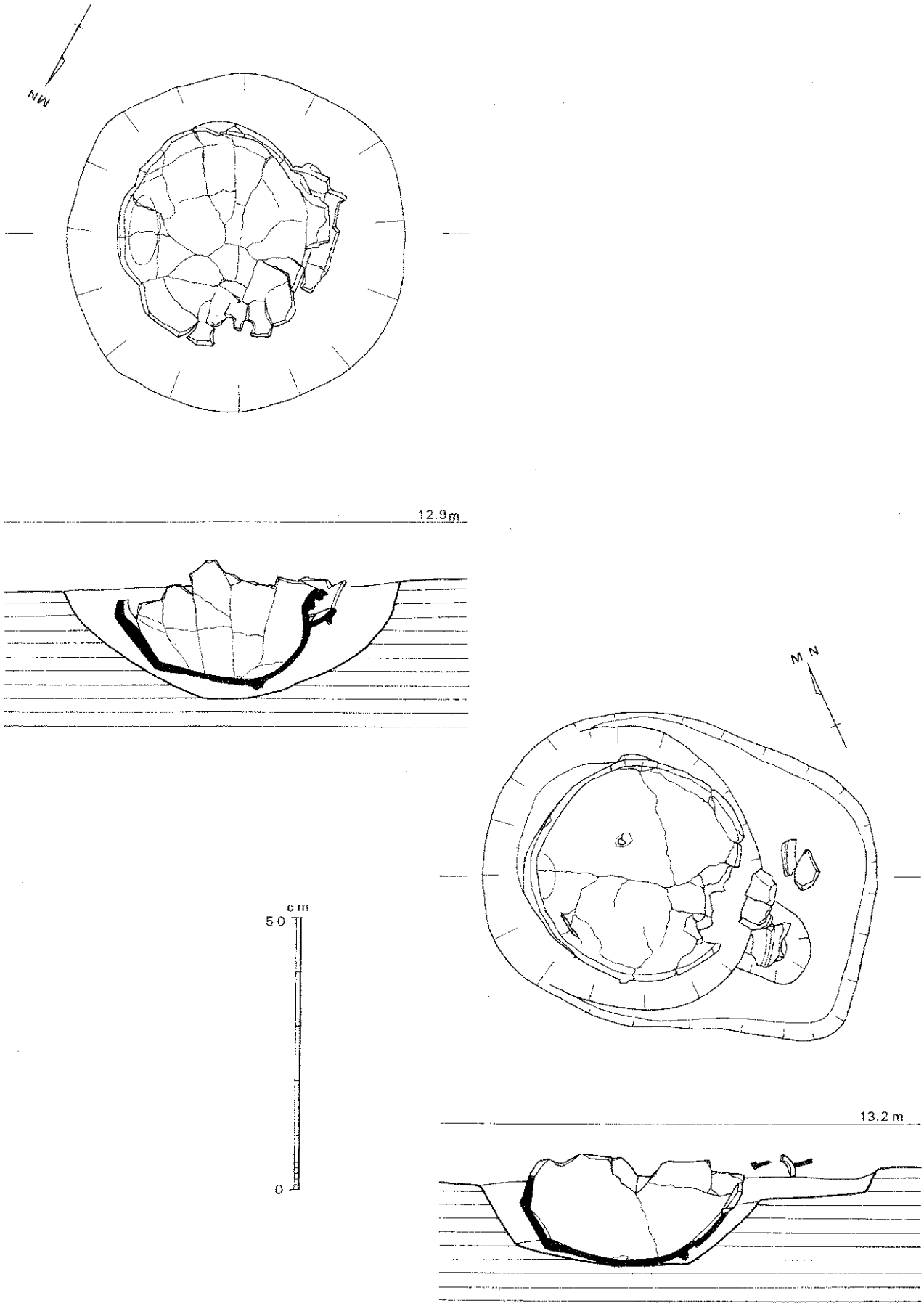
B５区にある壺棺で，撹乱によって上部大半を失い，下半部を残すだけである。棺内に17cm×13cmの範囲に朱が残こり，ガラス小玉６点が出土した。主軸方位はN86°E，埋置角度は60°を測る。凸レンズ状の底部で，弥生後期後半の所産である。

**7号甕棺墓**（第11図）

G２区の南隅にかかった主軸が東西方向を向く甕棺墓で，甕と甕の合口甕棺である。下甕の底部は凸レンズ状をなしていて弥生後期後半の所産である。この甕棺は，取り上げずにそのまま残した。

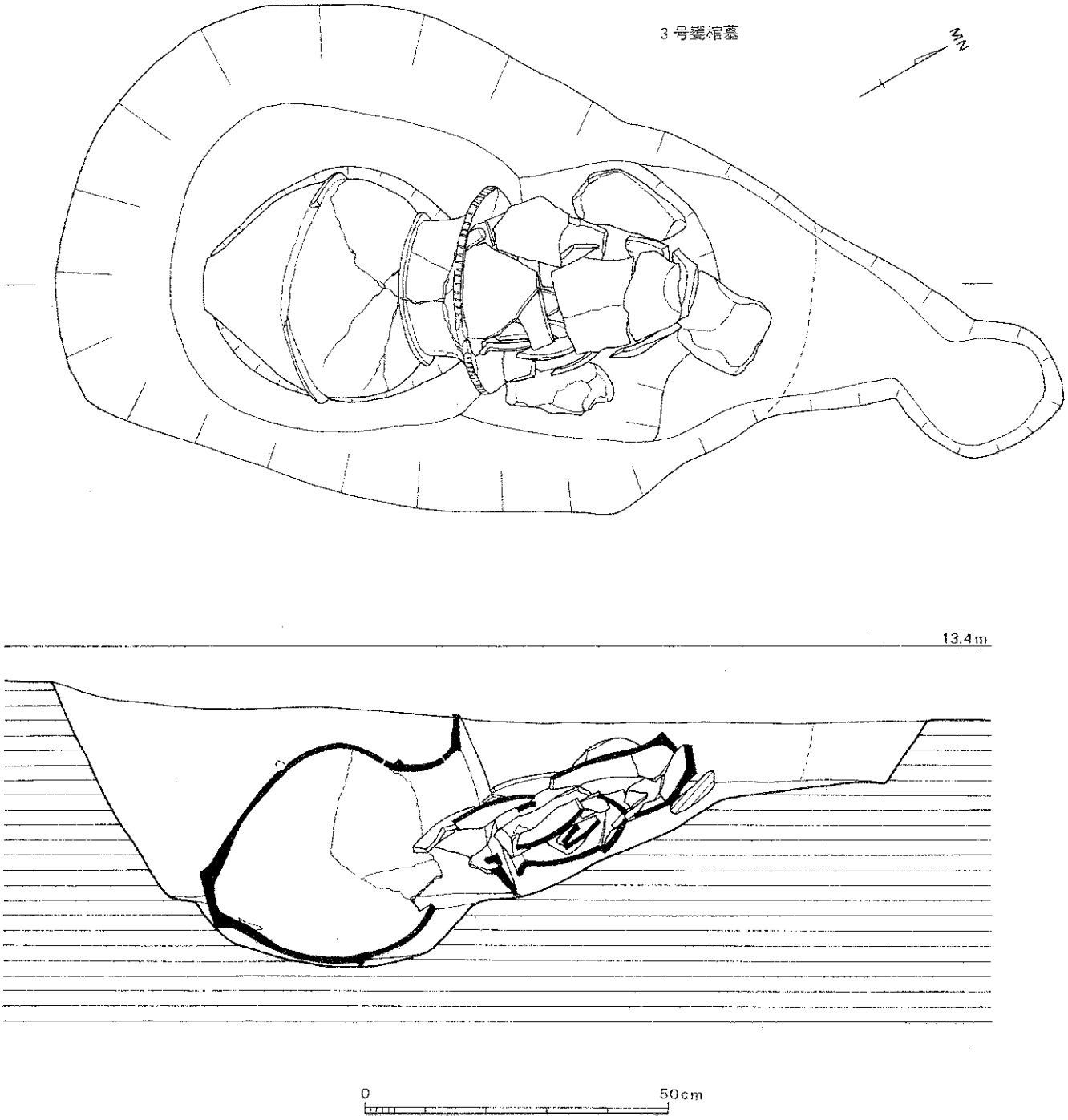
⑥溝状遺構（第11図）

浅く不整形状のB・E区で溝が５条確認されている。そのうち，１・３号溝で丹塗土器が出土して

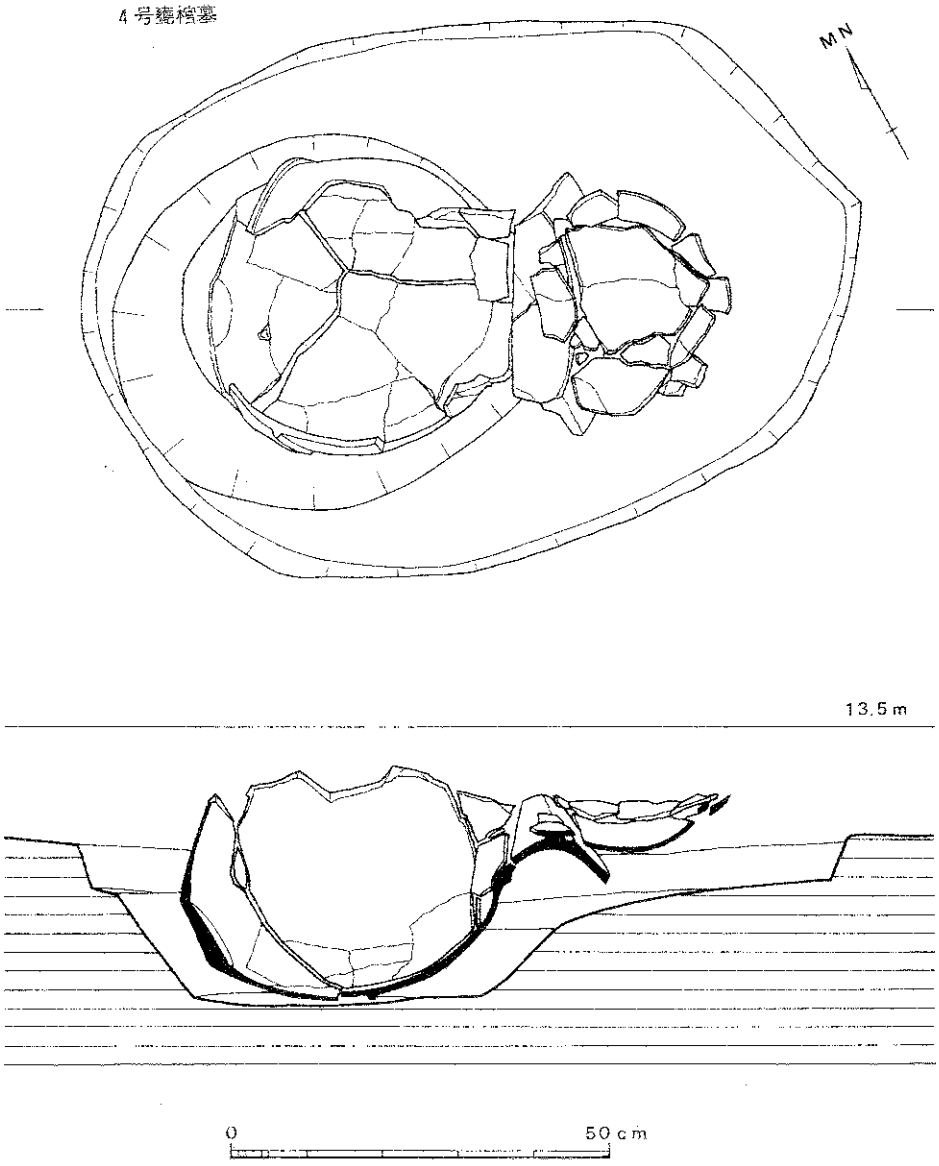



第16図　甕棺墓実測図①（1／10）

いる。排水関係の溝ではないので，墓地や墳墓を区切る溝であった可能性をもっている。その性格については，将来広く発掘して検討すべきと考える。

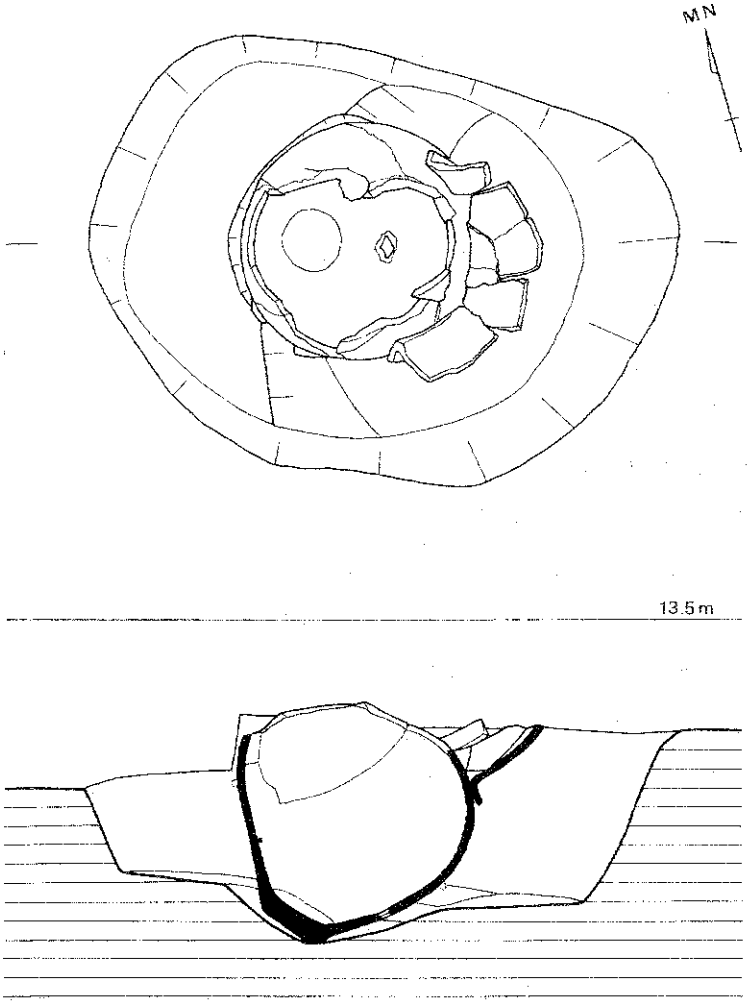


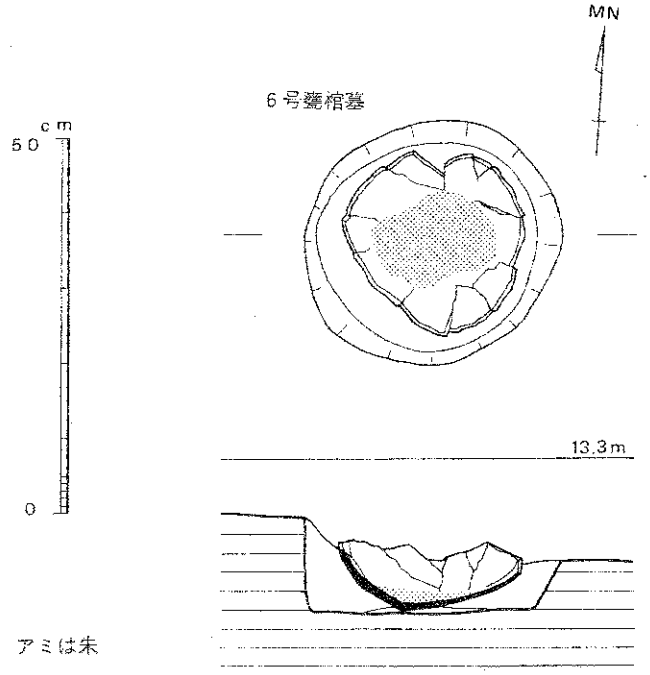

第17図　甕棺墓実測図②（1／10）




第18図　甕棺墓実測図③（1／10）

5号甕棺墓




第19図　甕棺墓実測図④（1／10）

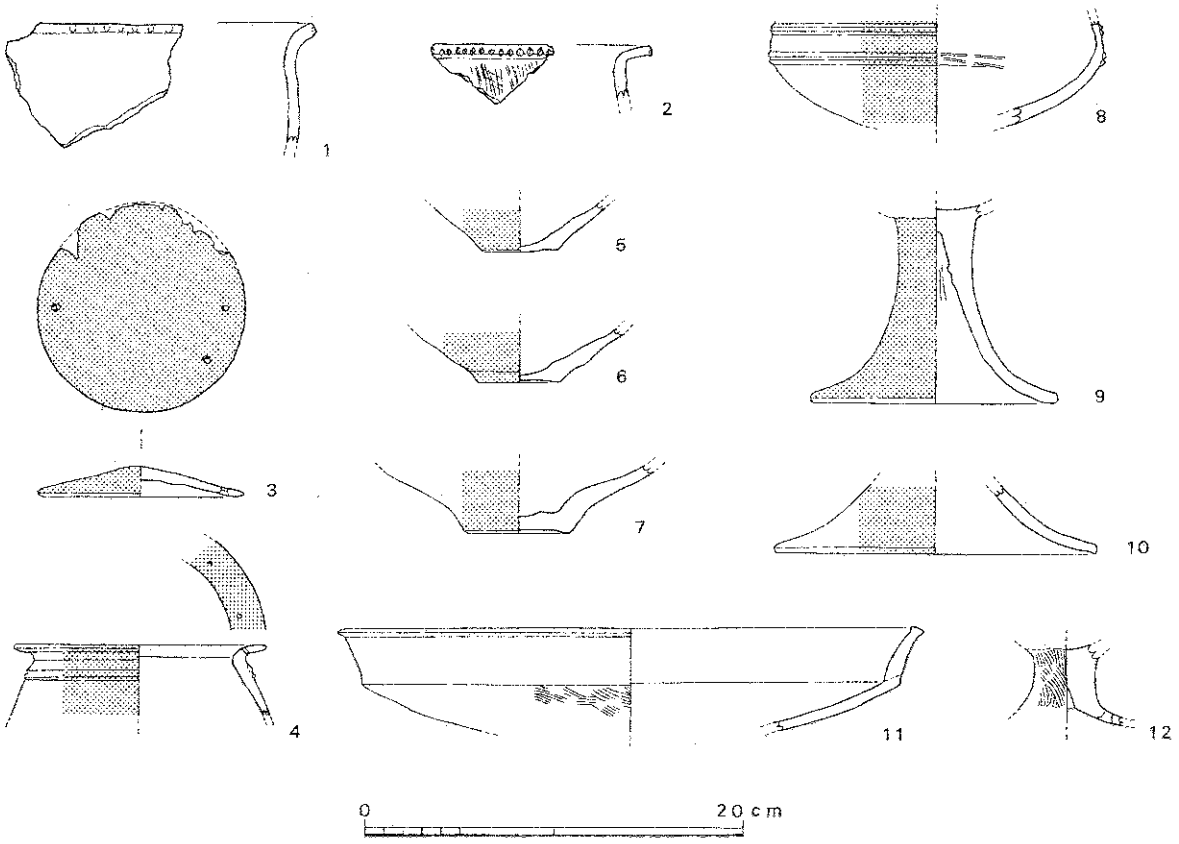
### (3) 遺　物

当地区の遺物は，旧石器時代と弥生時代の遺物などがコンテナ10箱分出土している。

①土器（第20～22図）

**各地区出土土器**（第20図）

1・2は弥生前期の甕である。口縁端部に刻目を施すが，1は風化を受け不明瞭になっている。1はにぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。2はにぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。1はE2区2層，2はB2区1号溝出土。弥生前期の土器は，B1区ピットとJ区からも出土している。3～10は丹塗土器で，4～7は壺，3は蓋，8～10は高杯である。色調は，10がにぶい橙色の他は橙色を呈し，胎土にはいずれも金雲母を含む。4・7・8は1号溝，9・10は1号溝付近，3は3号溝，5はB4区2層，6はE2区2層から出土した。時期的に弥生中期末から後期初頭頃に比定される。11は高杯の杯部片で，下半部から直立ぎみに屈曲している。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。弥生後期中頃の高杯である。4号土壙から出土した。12は小形高杯の脚部破片である。短い柱状部から裾部は大きく開いている。裾部には，焼成前の穿孔が3箇所みられる。橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色粒・金雲母を含む。古墳初頭頃の土器であり，墳墓が古墳前期まで営まれた可能性を示唆する資料である。B4区2層出土。




第20図　出土土器（1／4）

**1号甕棺**（第21図）

下甕は，口頸部を打ち欠く壺で，頸胴界に2条の台形状の突帯をもち，胴部にも突帯が剝げ落ちた痕を残している。橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。上甕は体部上半を打ち欠く壺で，後世の撹乱によって胴部下半部を欠失している。胴中位に「コ」の字形の突帯を有する。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。焼成後の穿孔は認められない。弥生後期中頃の資料であろう。

**2号甕棺**（第21図）

壺と壺の合口甕棺であったが，上甕は後世の撹乱によってほとんど無くなっていた。下甕は，体上部を打ち欠く壺で，胴中位に台形状の突帯をもつ。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。胴下半部に焼成後の穿孔が1箇所認められる。弥生後期前葉の資料であろう。

**3号甕棺**（第21図）

下甕は，ほぼ完形の広口壺である。倒卵形の胴部から頸部は直立ぎみに立ち上がり，口縁は朝顔形の大きく開く。口縁は肥厚されて内面に段を有し，鋤先形口縁の形態を残している。口縁端部には刻目が斜めに施されている。胴中位と頸胴界には，1条ずつ三角形の突帯を有する。器高は，49.3cmを測る。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。胴下端部に焼成後の穿孔が1箇所認められる。上甕は，「く」の字形口縁の甕で，胴上半部に丸く張りをもち，口縁端部は丸くおさめている。橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。胴下端部に焼成後の穿孔が1箇所認められる。胴外面には煤が付着していて，日用に使用したものを利用している。甕は，弥生後期初頭から前葉の高三潴式の資料である。

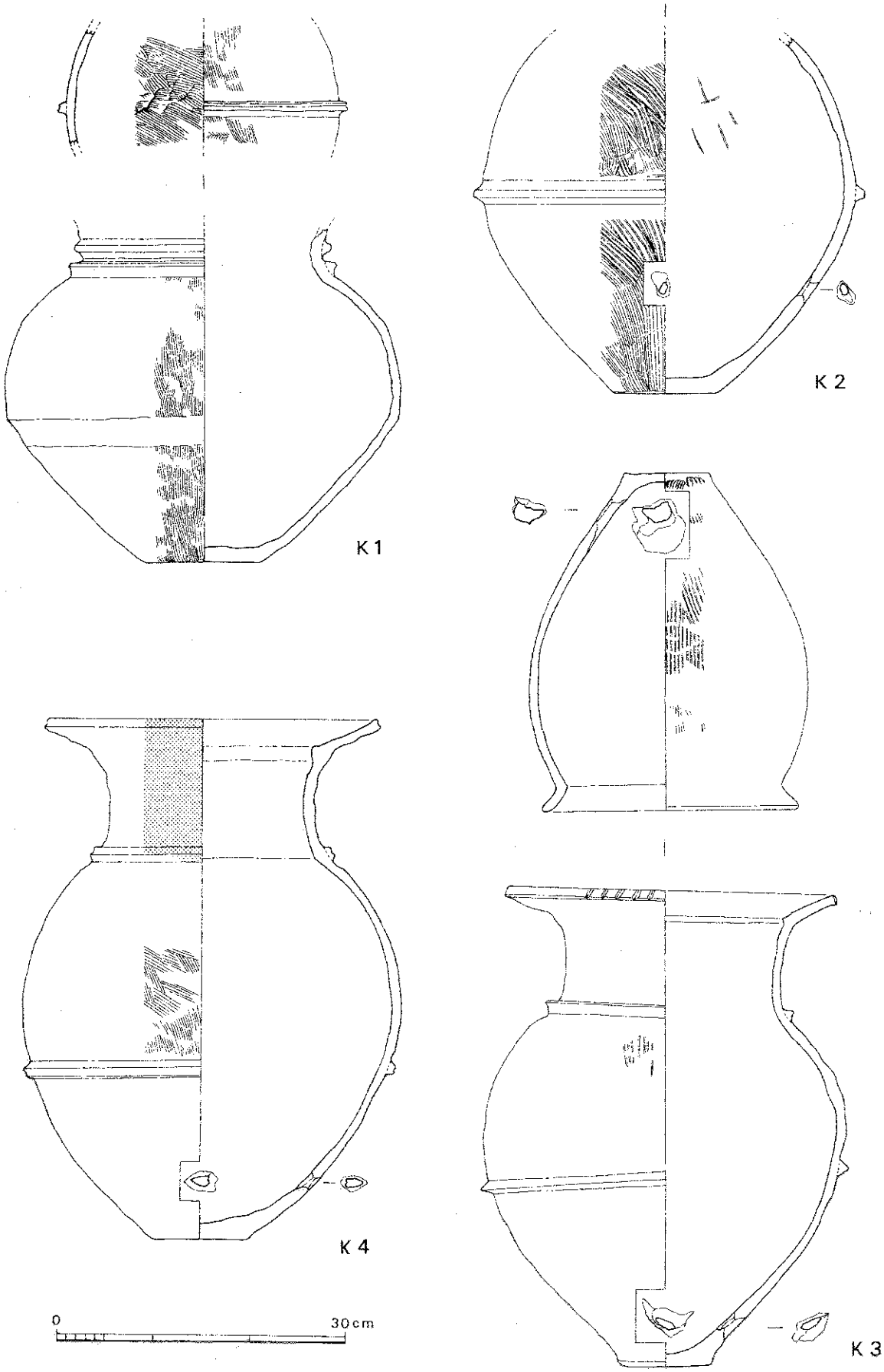
**4号甕棺**（第21図）

壺と壺の合口甕棺であったが，上甕は残りが悪いので，下甕をのみを図示した。下甕は，倒卵形の胴部から頸部が直立ぎみに立ち上がり，口縁は大きく開いている。口縁は肥厚され内面に段を有し，鋤先形口縁の形態を残している。胴中位と頸胴界に1条ずつ「コ」の字形の突帯をもっている。器高は53.6cmを測る。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。口頸部外面には丹塗が施されている。胴下端部に焼成後の穿孔が1箇所認められる。弥生後期前葉の資料であろう。

**5号甕棺**（第22図）

下甕に丹塗壺，上甕に「く」の字形口縁の甕を用いた合口甕棺である。下甕は，口頸部を打ち欠いた倒卵形の胴部で，胴中位に「コ」の字形の突帯を2条施している。胴上半の突帯から上部には丹塗が施されている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。内面は，器表がアバタ状に剝落している。胴下半部に焼成後の穿孔が1箇所認められる。上甕は，「く」の字形口縁の甕で，後世の撹乱によって体下半部が無くなっている。胴部は丸く張りをもち，口縁端部を丸くおさめている。浅黄橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。焼成後の穿孔については体下半部を欠損しているので明らかではない。この甕は，弥生後期初頭から前葉の高三潴式の資料であろう。

この他に丹塗壺(1)と高杯(2)の口縁部破片が出土している。1は朝顔形に広がる丹塗壺の口縁部で，




第21図　出土甕棺①（1／6）

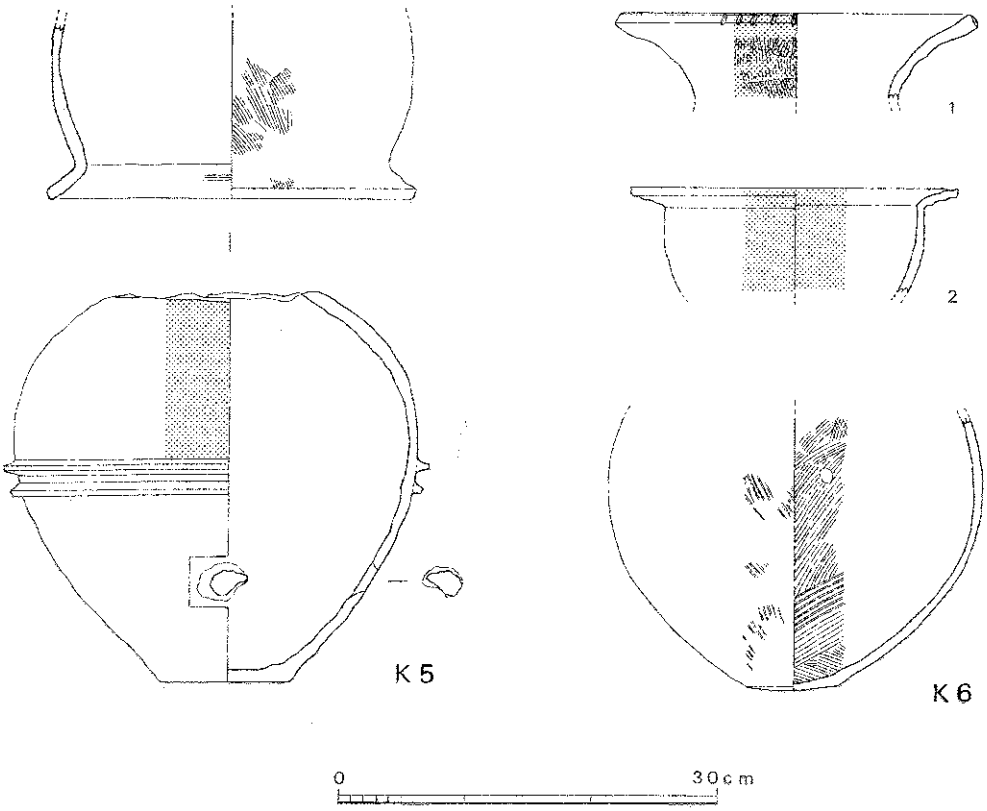
端部に刻目が施されている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。下甕の打ち欠かれた口縁の可能性をもつ。2は，丹塗高杯の杯部片である。口縁は「く」字形に屈折し，丸みをもつ身はわりと深い。明褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。

**6号甕棺**（第22図）

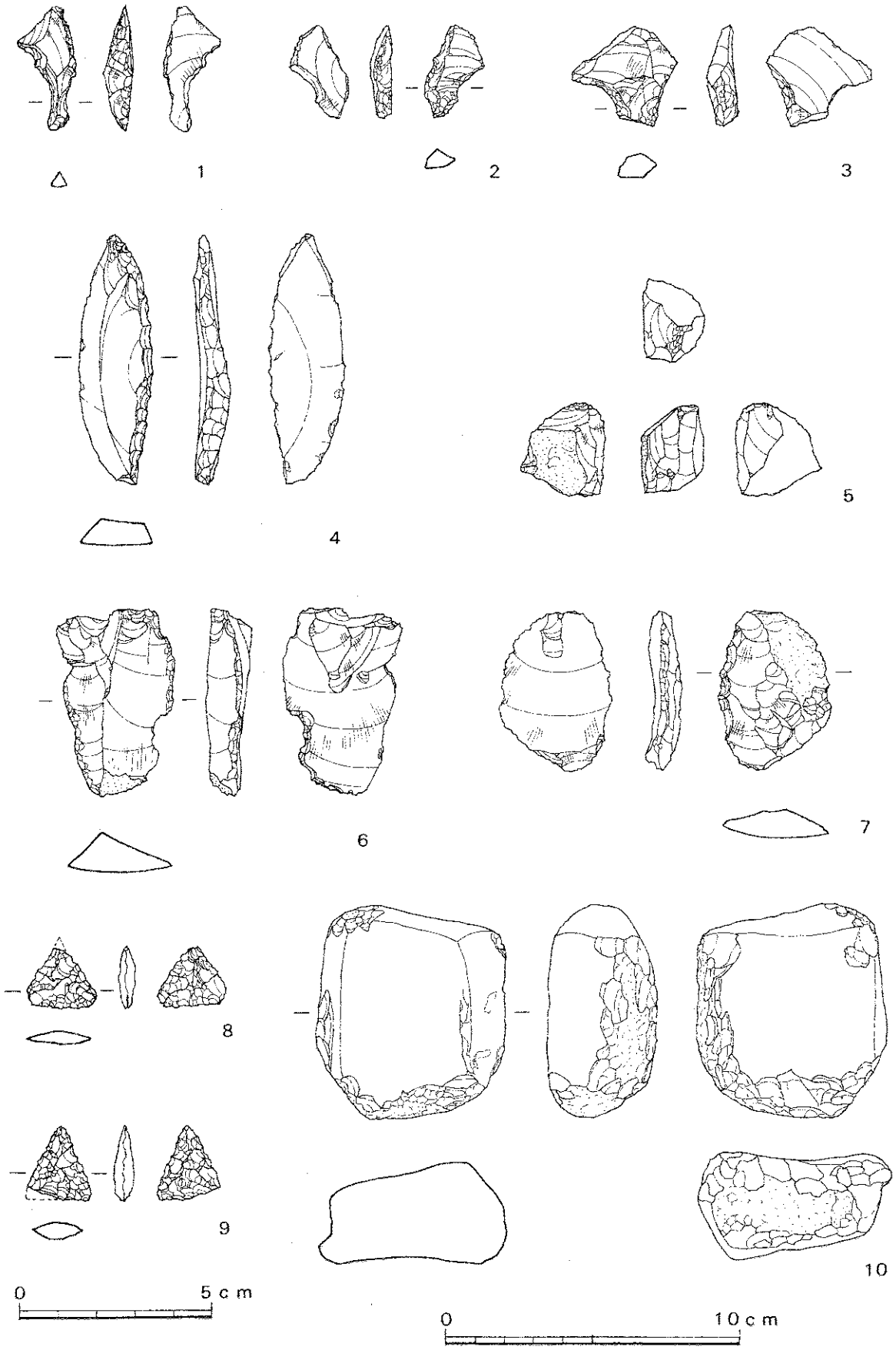
体下半が残る壺棺で，体部は丸く張りをもち，底部は凸レンズ状をなしている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。焼成後の穿孔は認められない。弥生後期後半期の資料である。

②石器（第23図）

1～3は，台形様石器で，いずれも側辺部の一方に抉りが入って刃部は斜めになっている。1は3号石棺墓，3はJ区出土。2は605―1番地で採集された資料である。いずれも黒曜石製である。4は，横長剥片を利用したナイフ形石器で玻璃質安山岩製である。片側の側辺部をブランテイング調整し，一方の側辺が刃部になっている。B3区2層出土。5は黒曜石製の細石刃核で，全体の約1／3ほどが新しく欠失している。E3区2層出土。6・7は黒曜石製のサイドスクレイパーで，6は両側辺に，7は片側側辺に刃部をもっている。6は5号溝，7は2号箱式石棺墓出土。8・9は，黒曜石製の石鏃である。両者ともに平基式の三角形鏃である。8はJ区2層，9はB1区出土。10は頁岩製




第22図　出土甕棺②（1／6）




第23図　出土石器（2／3・1／2）

の敲石である。側辺の半分ほどに使用による痕跡が認められる。重さ275ｇを測る。B51層出土。１～９の石器は，８・９の石鏃を除くと旧石器時代の資料と考えられ，10もその可能性をもっている。

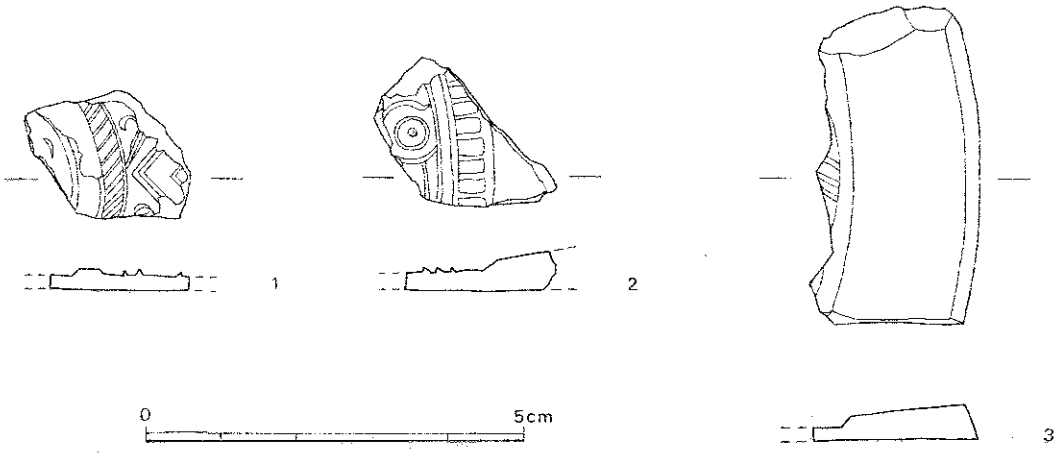
③金属器（第24・25図）

**青銅器**（第24図）

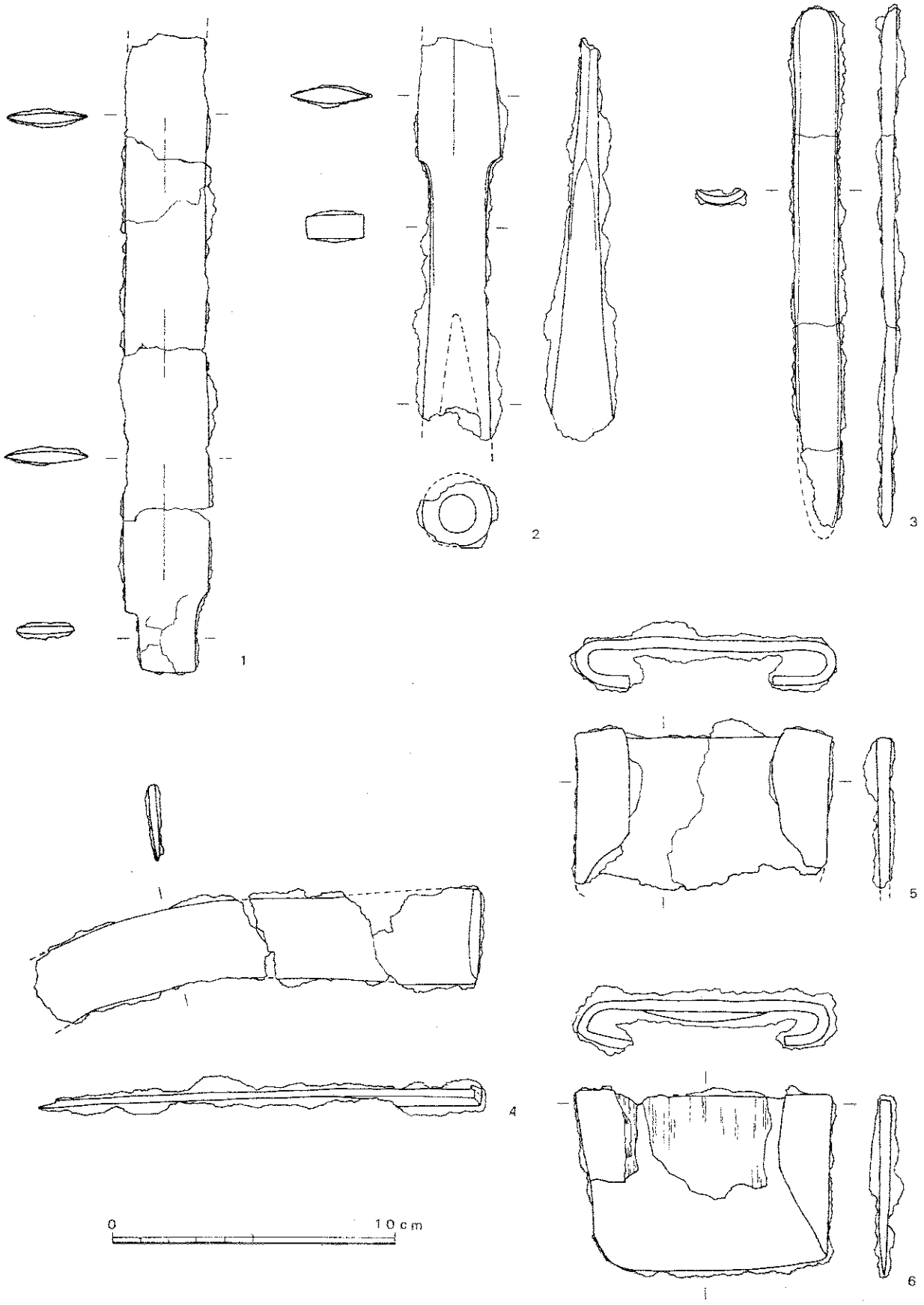
１～３は，青銅鏡片である。１は，Ｉ１区１層から出土した内区鏡片で，規矩のＬ文，斜行櫛歯文と銘文の一部などがみられる。全体に黒みを帯びて，朱が付着している。昭和51年に採集された円圏規矩四神鏡の一部と考えられる。２は，604番地で採集された鏡片で，縁の一部と櫛歯文，雲雷文帯の渦文・斜角線文などがみられる。岡村秀典氏の分類の四葉座内行花文鏡Ⅳ式[註1]に相当する資料であろう。３は，Ｄ１区で出土した平縁の鏡片で，櫛歯文が一部うかがえる。面径18cm前後を測る。内行花文鏡の可能性が高いと考えられる。この他に鏡片は，Ｉ１区から１点出土し，604番地で６点，605－１番地で２点が採集されている。

**鉄器**（第25図）

１は，切先部を欠失する剣である。現存長22.6cm，幅2.8cm，厚さ４mmを測る。茎部は短く，長さ２cm，幅２cmを測る。短剣で茎部の短いタイプである。３号土壙墓出土。２は，先端と基部を欠失する鉄鉾である。現存長14cm，刃部幅2.9cm，茎部幅2.4cmを測る。605－１番地で採集されていた資料である。３は，先端の一部を欠失する以外はほぼ完存のヤリガンナである。現存長18.4cm，幅1.6cmを測る。１号土壙墓出土。４は，先端を欠失する鎌である。現存長15.6cm，刃部幅2.7cm，基部幅3.4cm，厚さ２mmを測る。１号土壙出土。５は，鋤先で刃部欠損している。現存長5.4cm，幅8.8cmを測る。４の鉄鎌とともに１号土壙から出土した。６は，片側の折り返し部分が半分ほど欠失する以外はほぼ完存の鋤先である。部分的に木質部が残っている。長さ6.2cm，幅９cmを測る。２号土壙墓の棺外副葬品である。




第24図　出土鏡片（１／１）




第25図　出土鉄器（1／2）

④装飾品（第26～28図）

今回の調査で，石製勾玉・管玉，ガラス製小玉が790点以上出土および採集されている。

**勾玉**（第26図）

1は，Ⅰ区から出土した硬玉製の勾玉片である。孔部と尾部を欠失していて，現存長2.2cm，孔部幅0.8cmを測る。

**管玉**（第26図）

2～8は，3号石棺墓から出土した7点の碧玉製管玉である。長さ5～9㎜，径3㎜を測る。この資料以外に，5号甕棺墓から管玉が出土しているが図示していない。

**3号土壙墓出土ガラス玉**（第26図）

9～12は，3号土壙墓から出土した小玉で，9・10は径4～5㎜で，11・12は径2㎜以下の極小玉である。9は青緑色，10と11は淡青緑色，12は紺色を呈する。

**3号甕棺墓出土ガラス玉**（第26図）

13～31は，3号甕棺墓から出土した小玉である。13～22は不透明の紫紺色，23～25は紺青色，26は不透明のアズキ色，27～31は青緑色を呈する。

**4号甕棺墓出土ガラス玉**（第26図）

32～83は，4号甕棺墓から出土した小玉である。32～69は紺色，70～82は淡緑色，83は不透明の薄い萌黄色を呈する。

**5号甕棺墓出土ガラス玉**（第26図）

84～101は，5号甕棺墓から出土した小玉である。20点以上出土しているが，18点を図示した。84～100は淡青緑色，101は濃い青緑色を呈する。

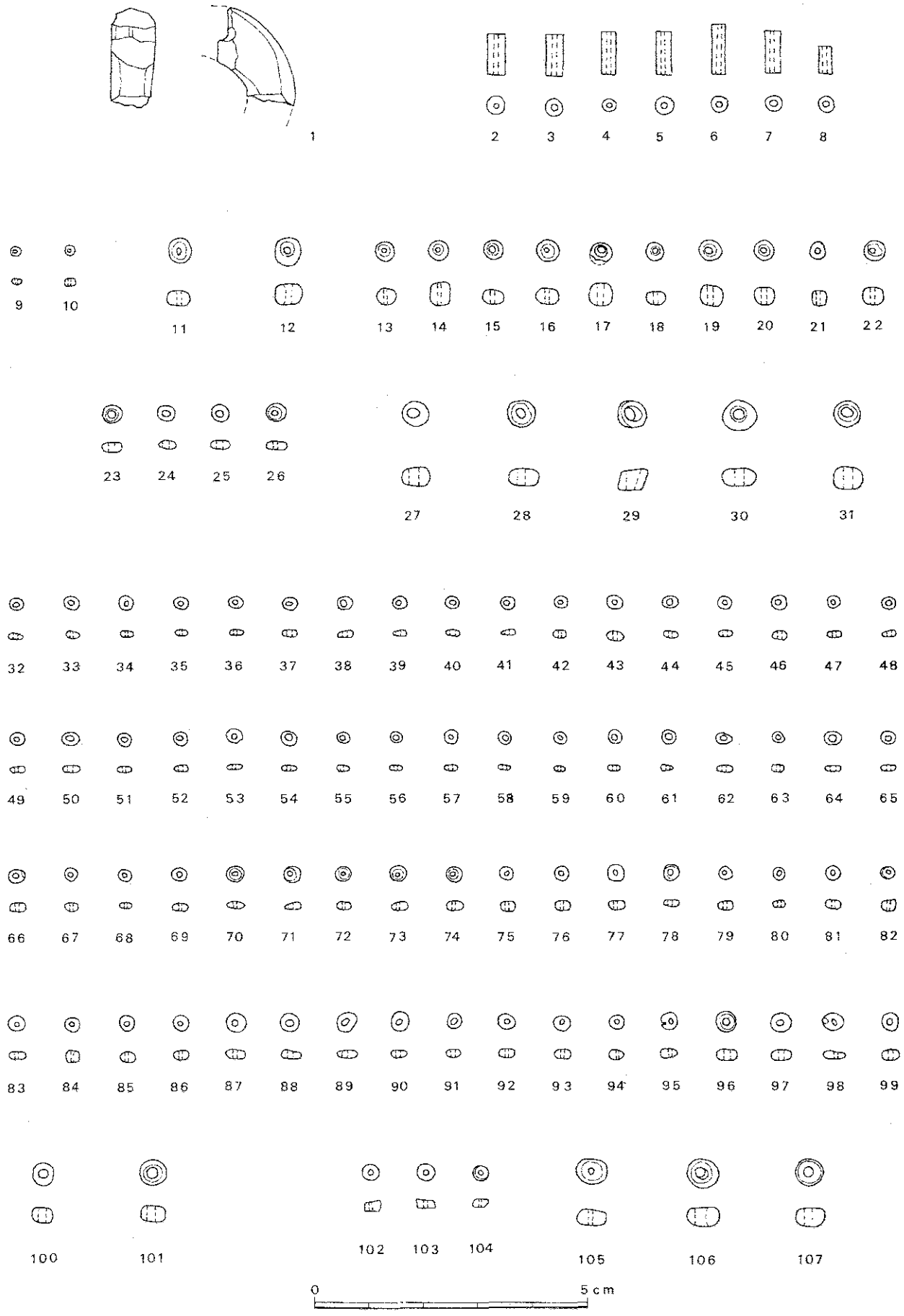
**6号甕棺墓出土ガラス玉**（第26図）

102～107は，6号甕棺墓から出土したガラス小玉である。102・103・107は紺青色，104～106は紺色を呈する。

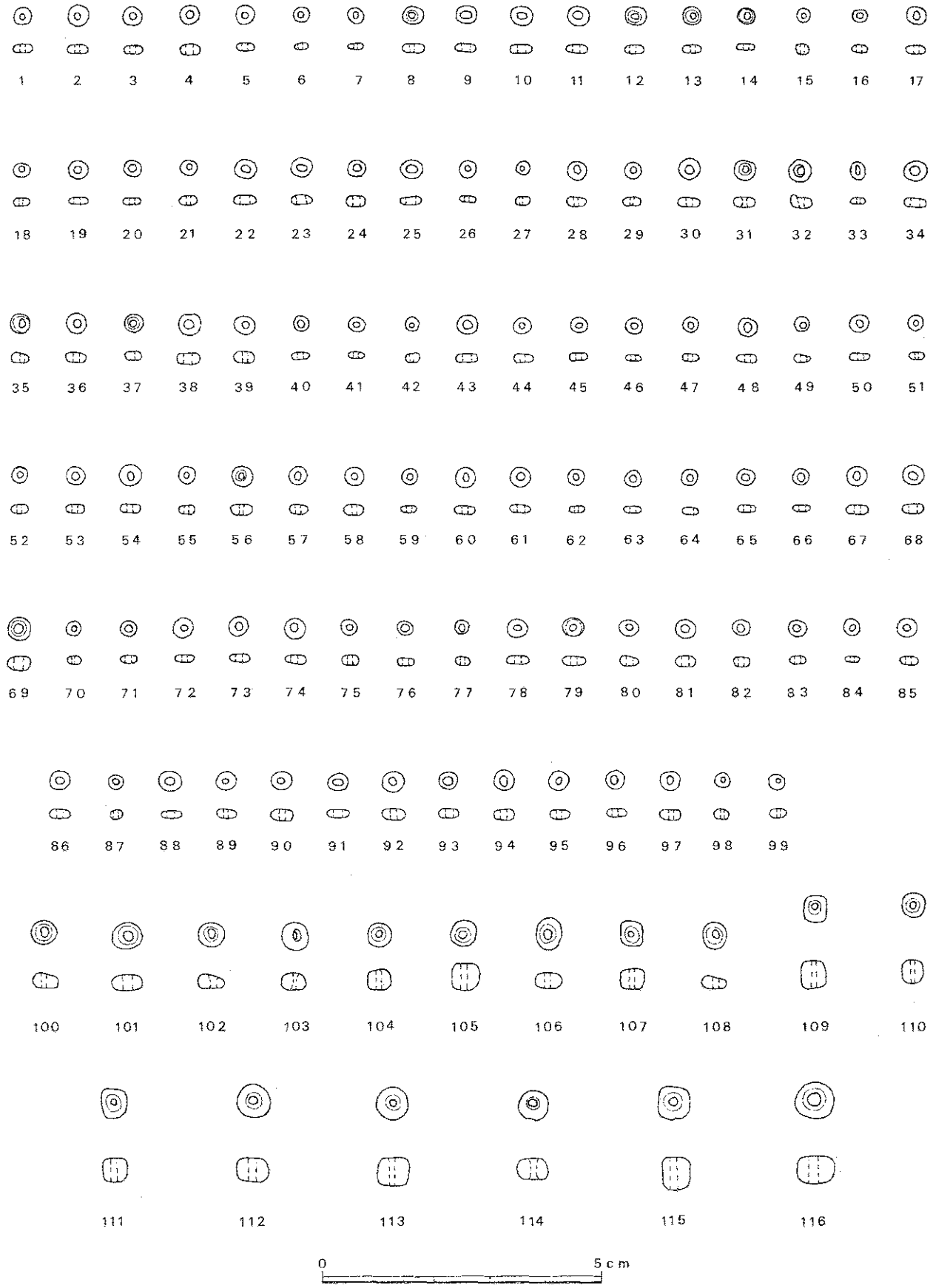
**1号土壙墓出土ガラス玉**（第27・28図）

1号土壙墓では，ガラス小玉が385点以上出土したが，そのうち209点を図示した。1～116は紺色，117～207は淡青緑色，208・209は青緑色を呈する。出土した385点を区分すると，紺色系が276点以上，淡青緑色系が106点，青緑色系が3点という内訳になる。

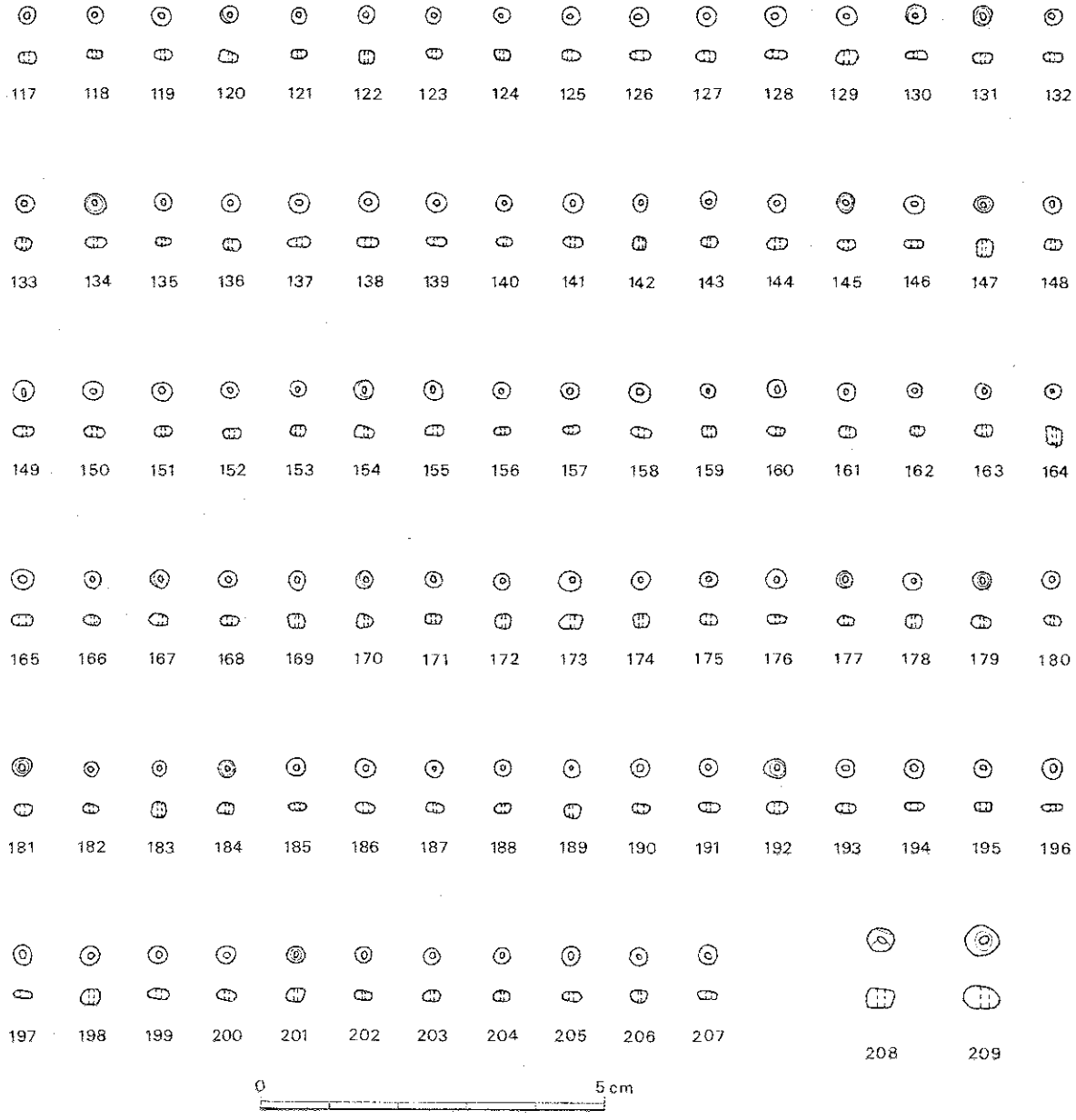
**註1**　岡村秀典「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集　国立歴史民俗博物館　1993




第26図　石製玉・ガラス玉（1／1）




第27図　1号墳墓出土ガラス玉①（1／1）




第28図　1号壙墓出土ガラス玉②（1／1）

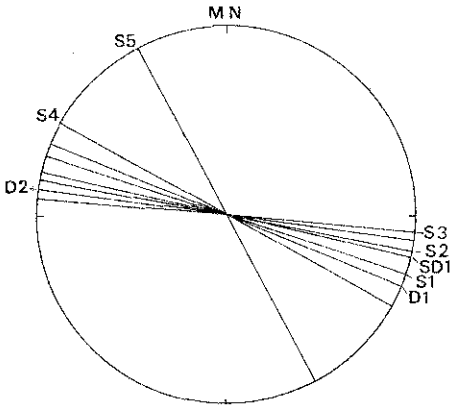
### (4) 小　結

今回の範囲確認調査によって，墳墓が603—1，604，605—1番地の畑地で確認され，墓域が東西約60m，南北約80mの範囲に拡がりをもつことが判明した。墳墓の構成をみると，成人墓は甕棺でなく，箱式石棺墓と土壙墓で，幼小児墓は日用の容器を転用した甕棺墓であり，成人墓において甕棺が主体である北部九州地域とは異なる様相をもつことが明らかになった。土壙墓のなかには，1号土壙墓や昭和51年度調査の第11試掘壙1号土壙墓のように木棺墓の可能性が高いものも認められる。また，1号石蓋土壙墓は小口付近にだけに板状石を用いているが，平成8年度に調査した原ノ久保A地区でも両小口に板状石を用いる石蓋土壙墓が2基，片側小口に板状石を使う石蓋土壙墓が1基あって原の辻遺跡にみられる石蓋土壙墓の特異な形態例として指摘することができる。

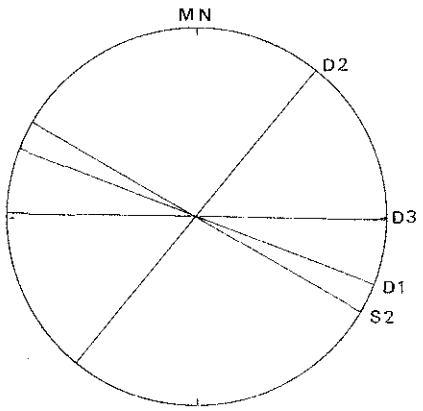
墳墓の主軸方位は，箱式石棺墓と土壙墓が2例を除き東西方向を向き，30°の振幅範囲に集中している。甕棺墓も東西方向を向き47°の振幅範囲にほとんどが集中している。甕棺の埋置角度は，6°から60°まで傾斜幅が広い。

墳墓の分布状況は，北部九州地域の甕棺墓地のように過密でなく，わりとゆったりとした配置状況をもち，1号土壙墓と2号土壙，2号土壙墓と7号土壙が切り合っている他には墳墓関係の重複状況は認められない。溝状遺構からは，弥生中期末の丹塗土器が出土しているものもあり，祭祀や墓域・墳墓を区画する溝であった可能性をもっている。

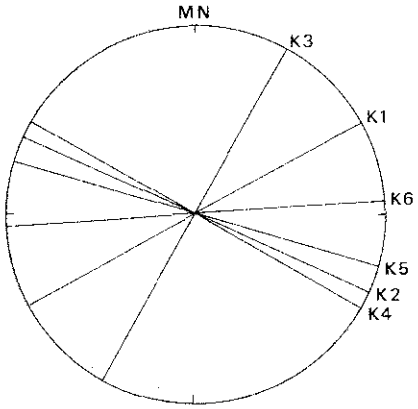
大川地区は，昭和51年の調査成果などを併せると，舶載品として円圏規矩四神鏡，内行花文鏡などの青銅鏡，国産品として有鉤銅釧，ガラス勾玉，その他に剣・鉾・鋤先・鎌・ヤリガンナの鉄器など豊富な副葬品をもつことがこの地区の特徴として指摘できる。幼小児墓までガラス玉が副葬されていることを考慮すると，有力な集団によって営まれた墓地であったことが考えられる。本地区は，弥生前期には小規模な居住があったことが確認されているが，墓域として利用されたのは主に弥生中期末から弥生後期後半期であって，古墳前期初頭頃にまで存続したようである。幸いに605—1番地などを中心として墳墓遺構が残っているので，将来の整備などに伴う詳細な調査によって遺跡の構造が明らかにされるのを期待したい。



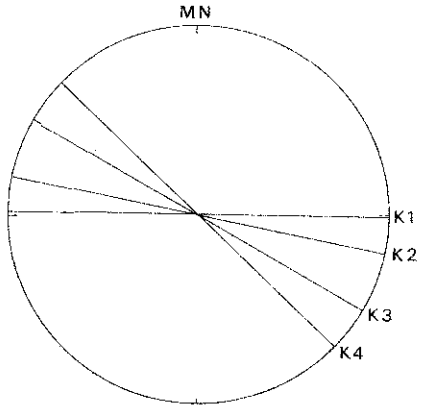

石棺墓・土壙墓の主軸方位(平成７年度)
(Ｓ箱式石棺墓，Ｄ土壙墓，ＩＤ石蓋土壙墓)



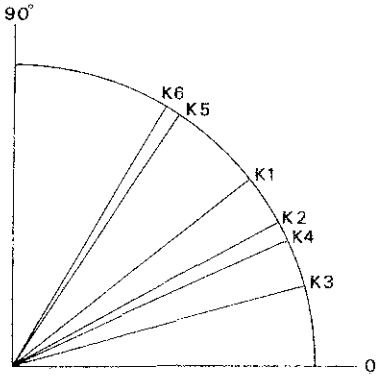

石棺墓・土壙墓の主軸方位(昭和51年度)



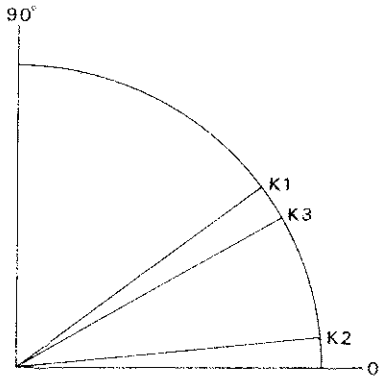

甕棺の主軸方位(平成７年度)
(Ｋ甕棺)




甕棺の主軸方位(昭和51年度)



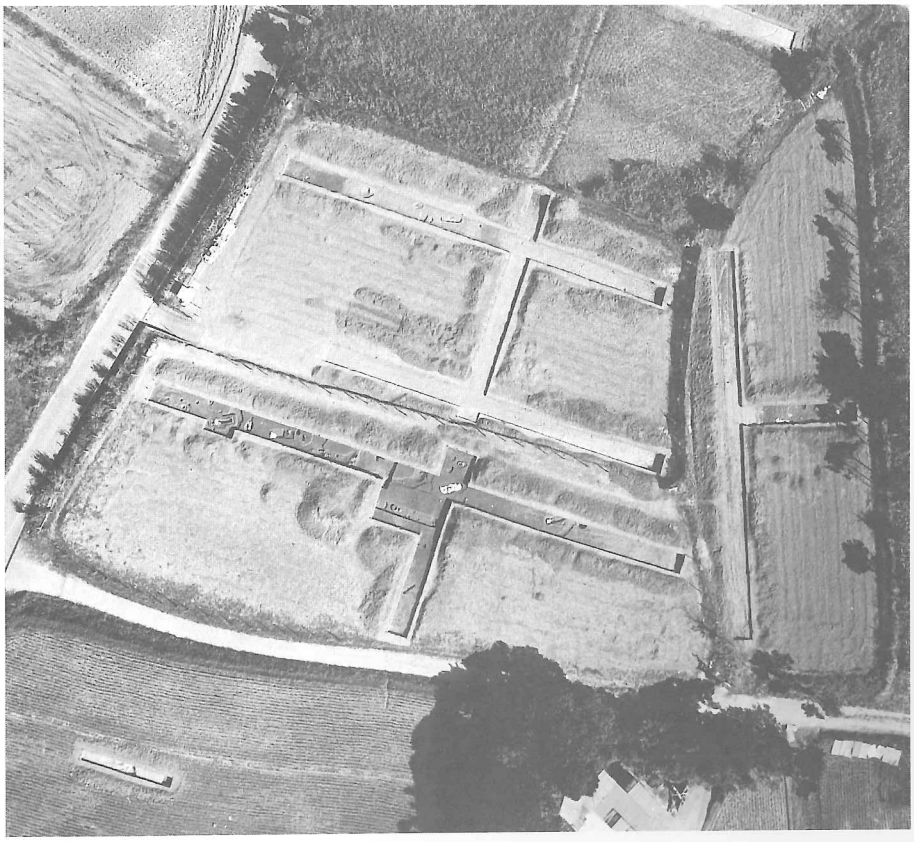

甕棺の埋置角度(平成７年度)



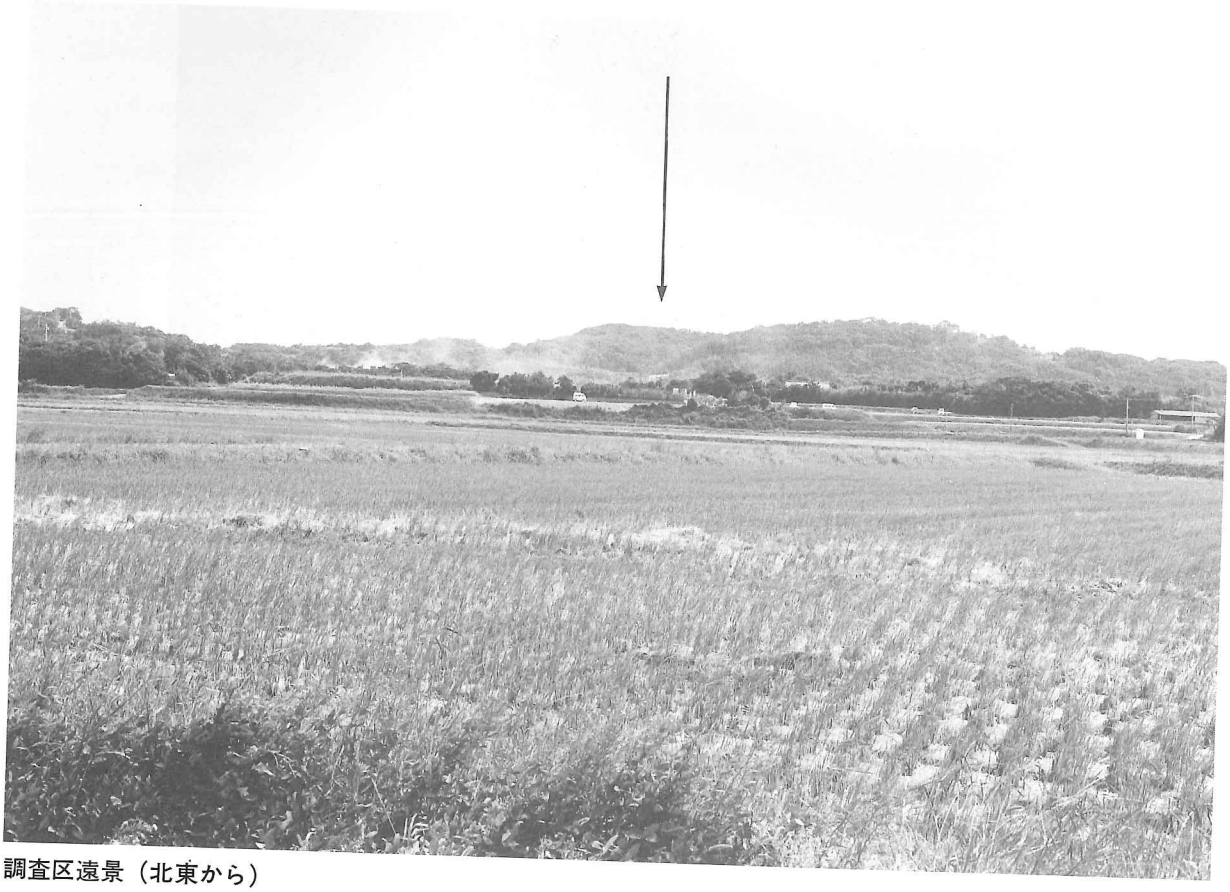

甕棺の埋置角度(昭和51年度)

**第29図　遺構の主軸方位と甕棺の埋置角度（ＭＮは磁北）**

調査区全景（東側上空から）



調査区全景（南西側上空から）

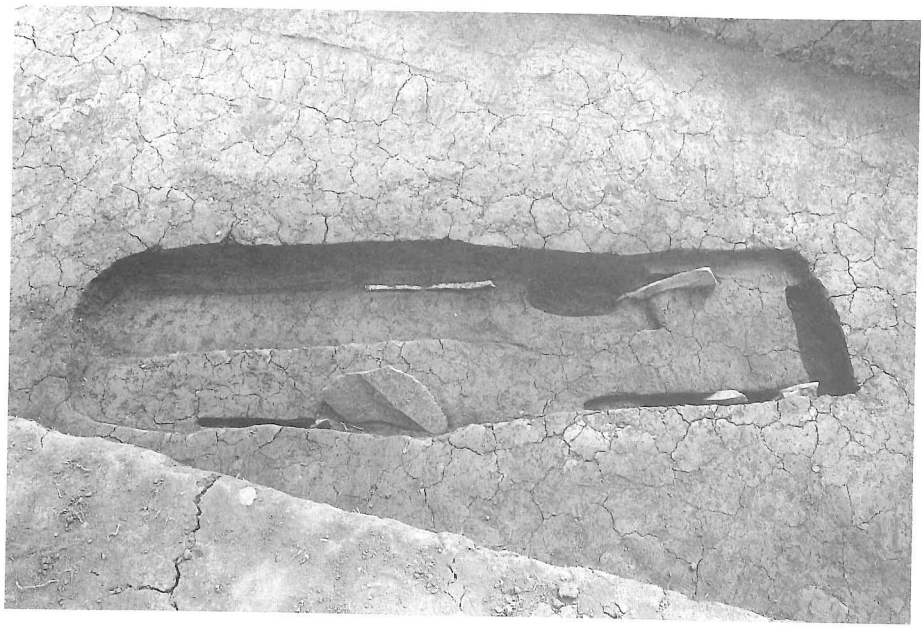


調査区遠景（北東から）

調査区近景（南西から）

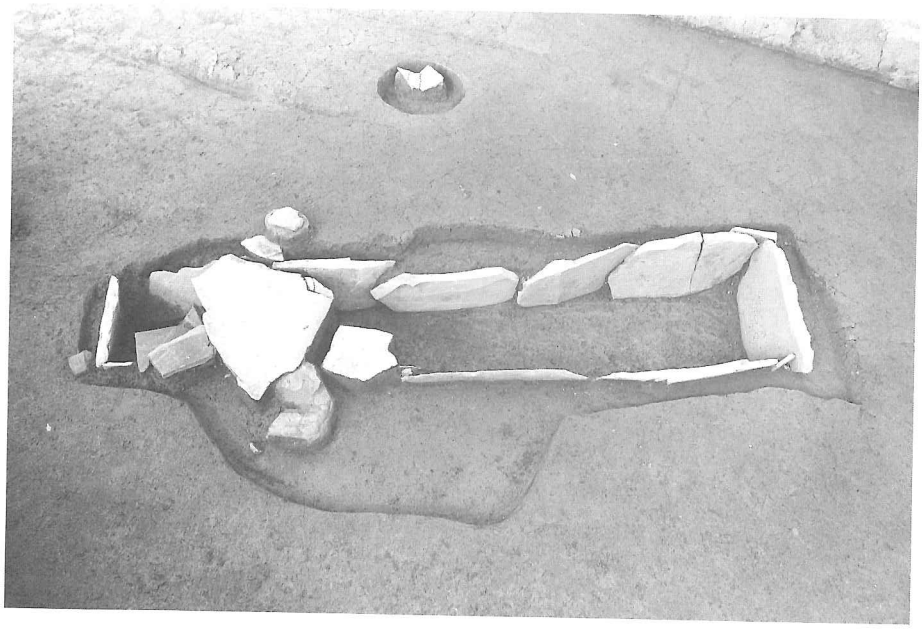
B 1 ～ 2 区遺構検出状況（北西から）

E 2 区遺構検出状況（北東から）

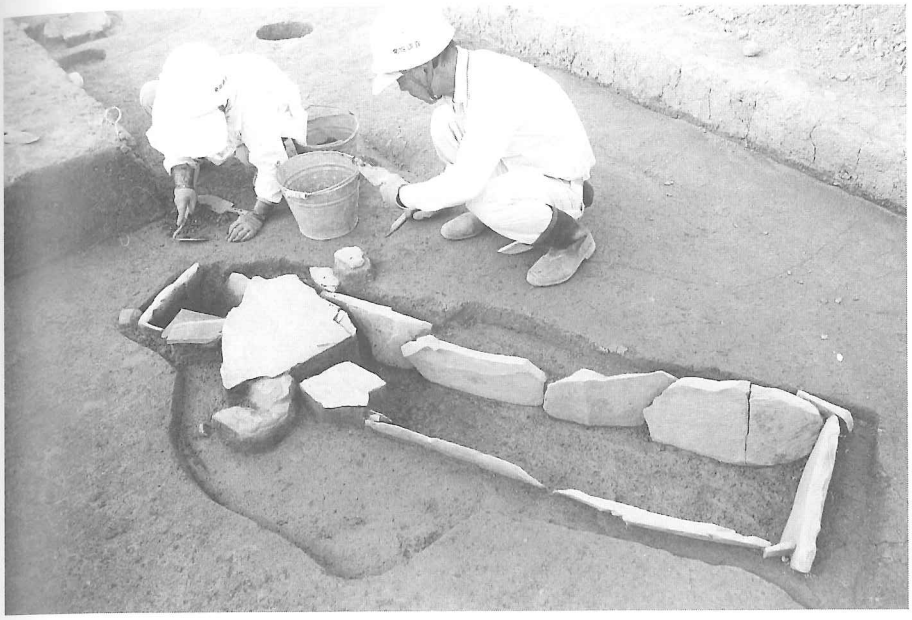


1号石棺墓
（北東から）

2号石棺墓
（西から）



2号石棺墓
（南から）

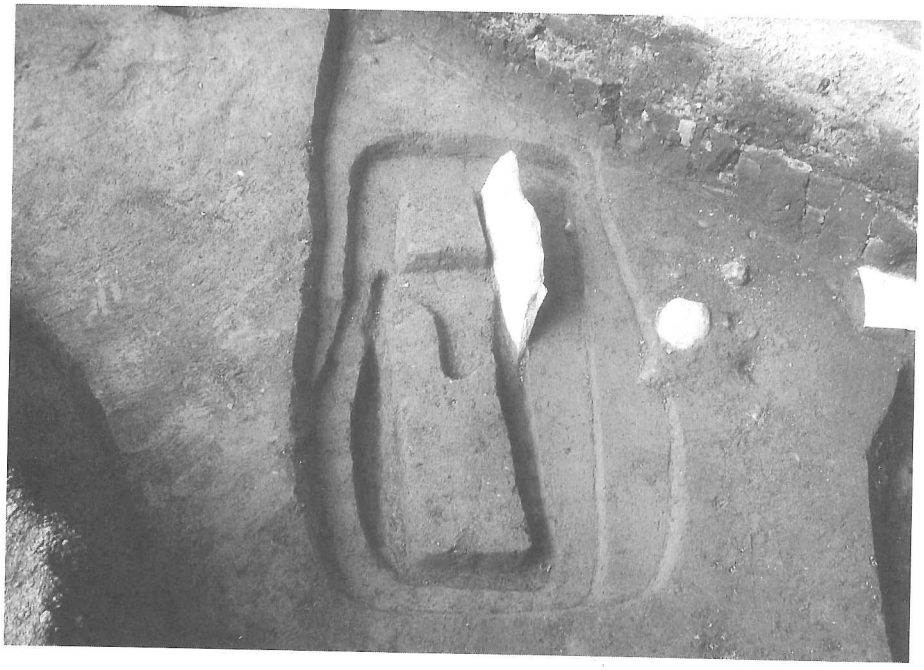


調査風景

3号石棺墓
（東から）

3号石棺墓
（北から）

4号石棺墓
（北から）

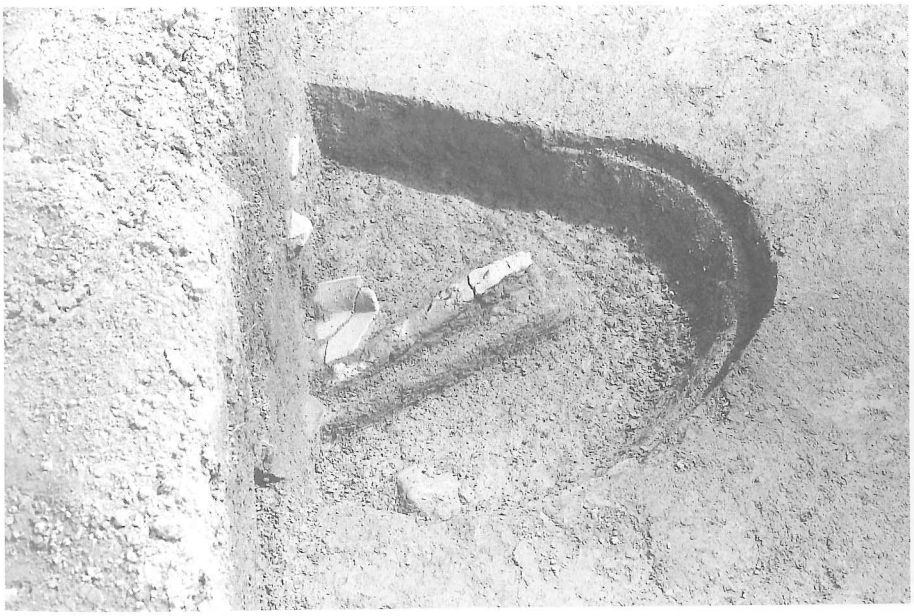


5号石棺墓
（南から）

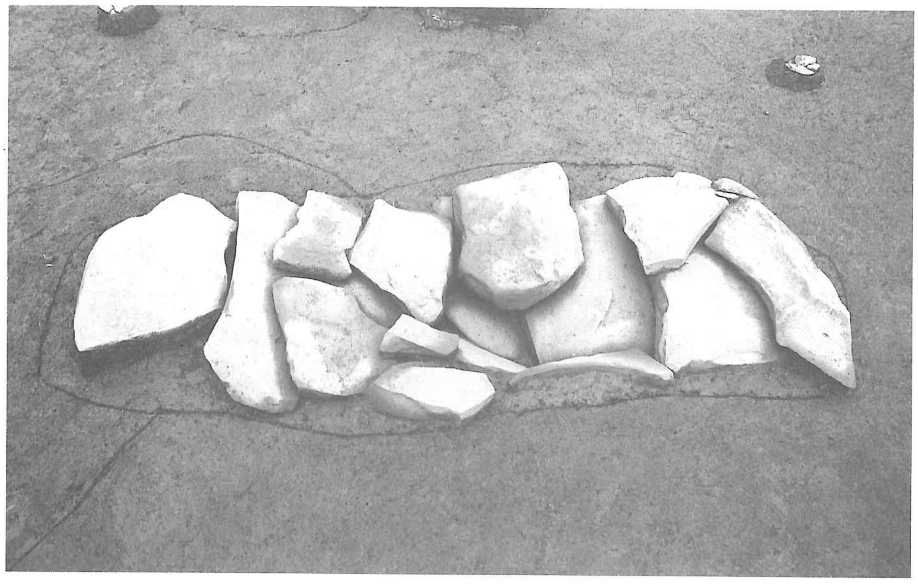
調査風景
（A区）

1号土壙墓
(北から)

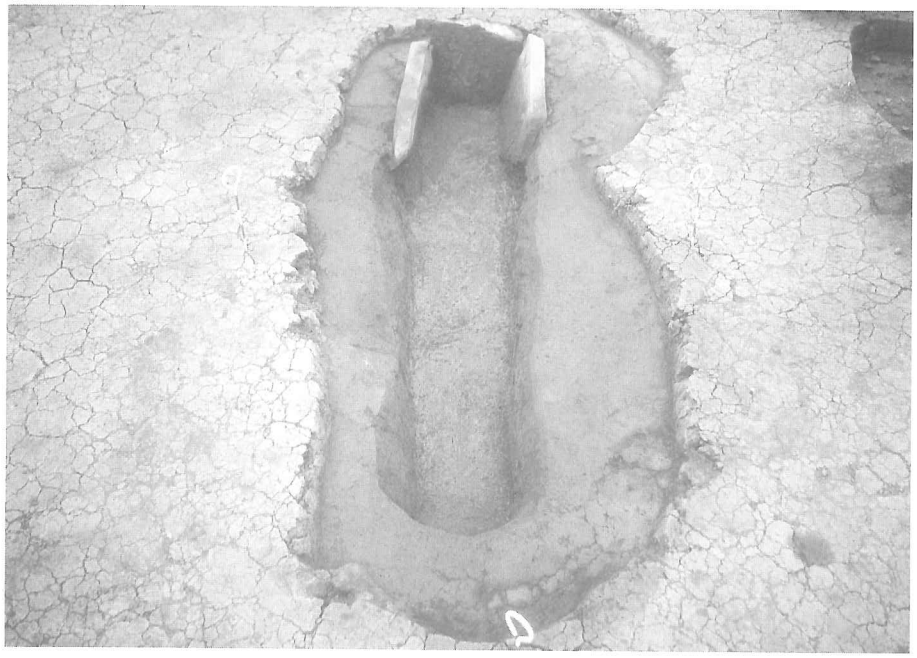
2号土壙墓
(東から)



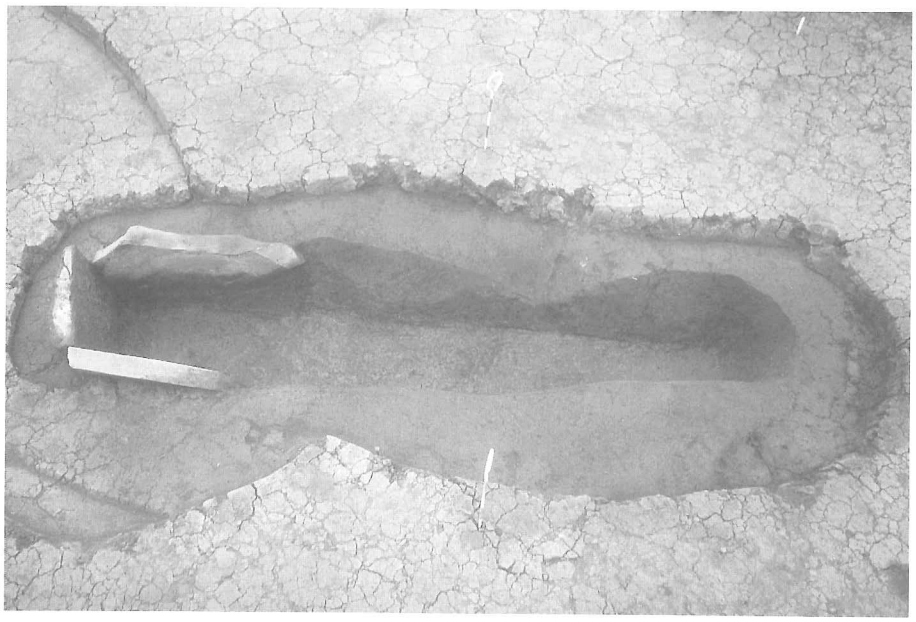
3号土壙墓
(西から)



1号石蓋土壙墓
（北から）

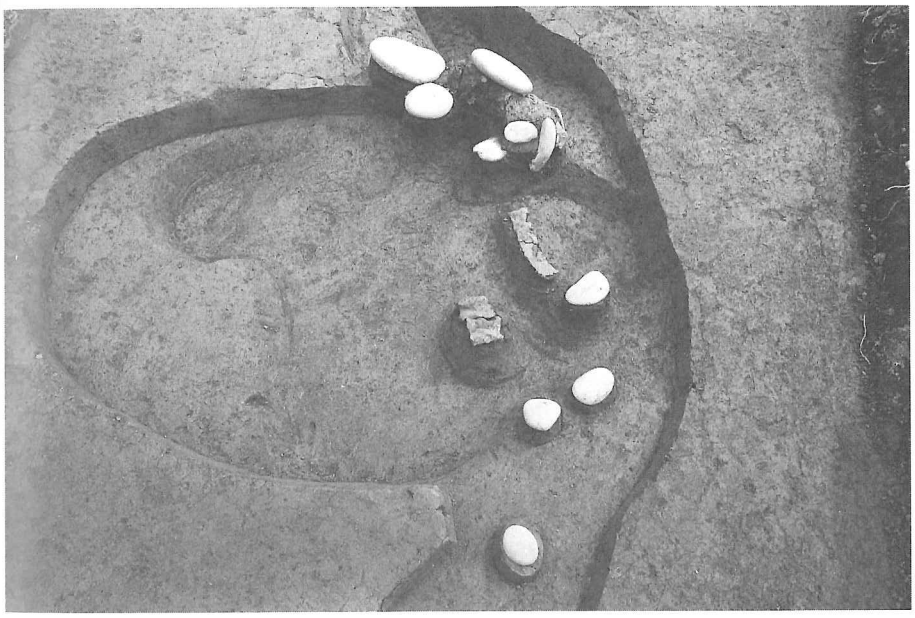


1号石蓋土壙墓
（西から）

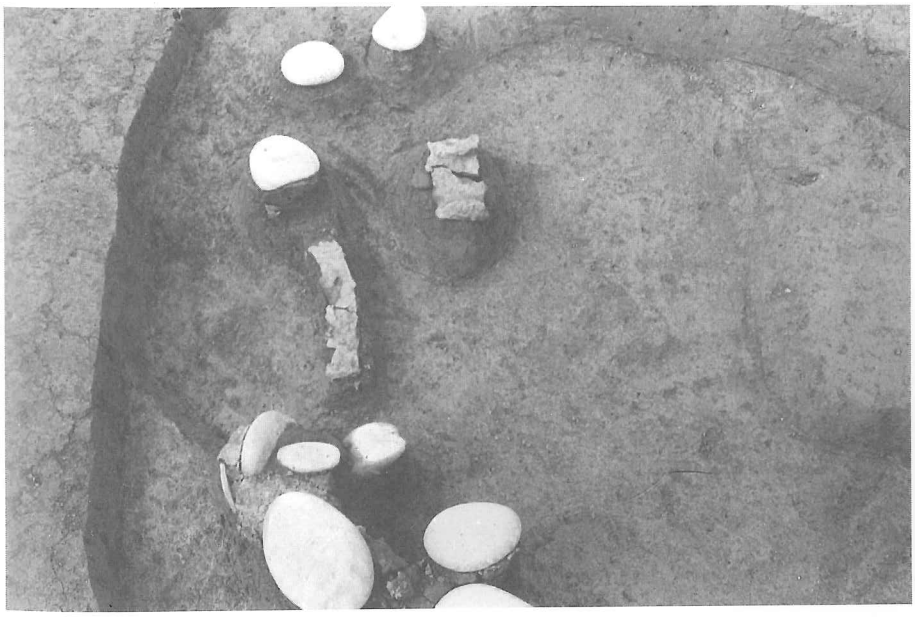


1号石蓋土壙墓
（南から）

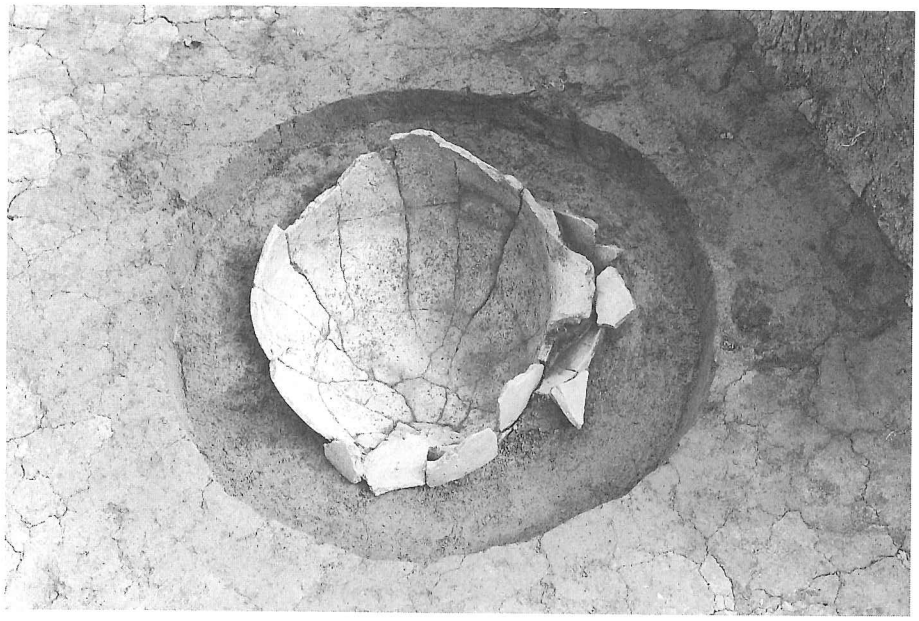
1号土壙
（南から）



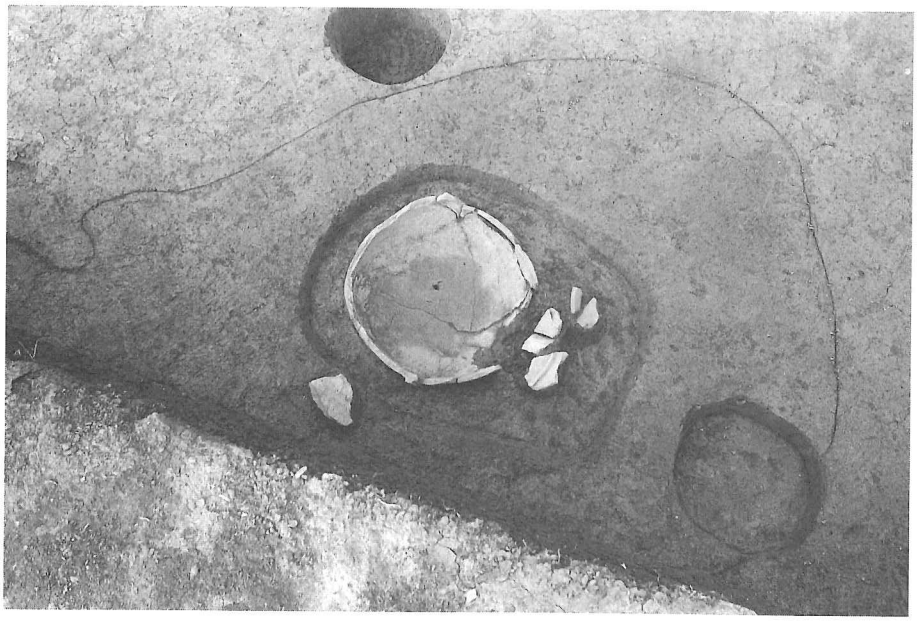
1号土壙
（西から）



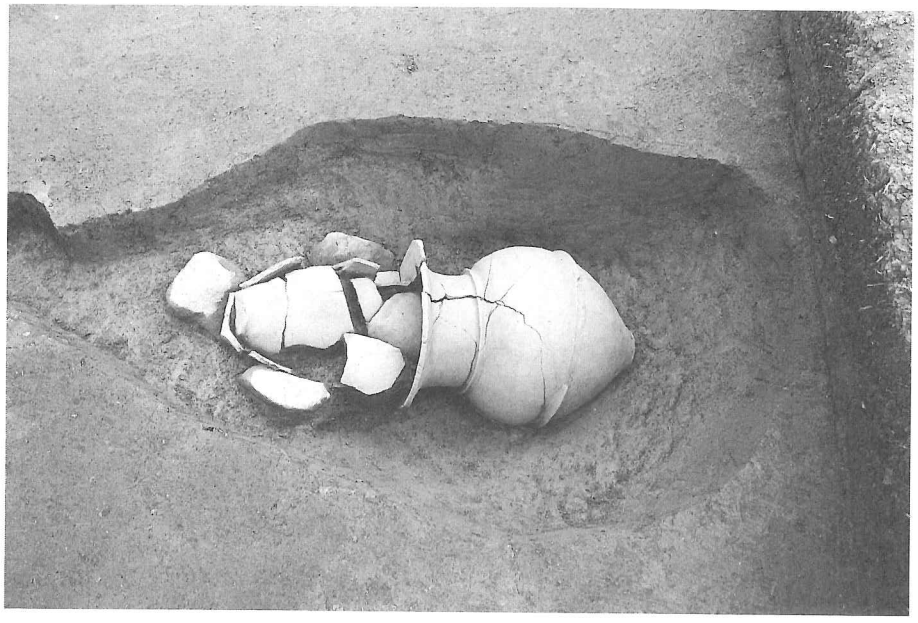
1号土壙
遺物出土状況
（東から）



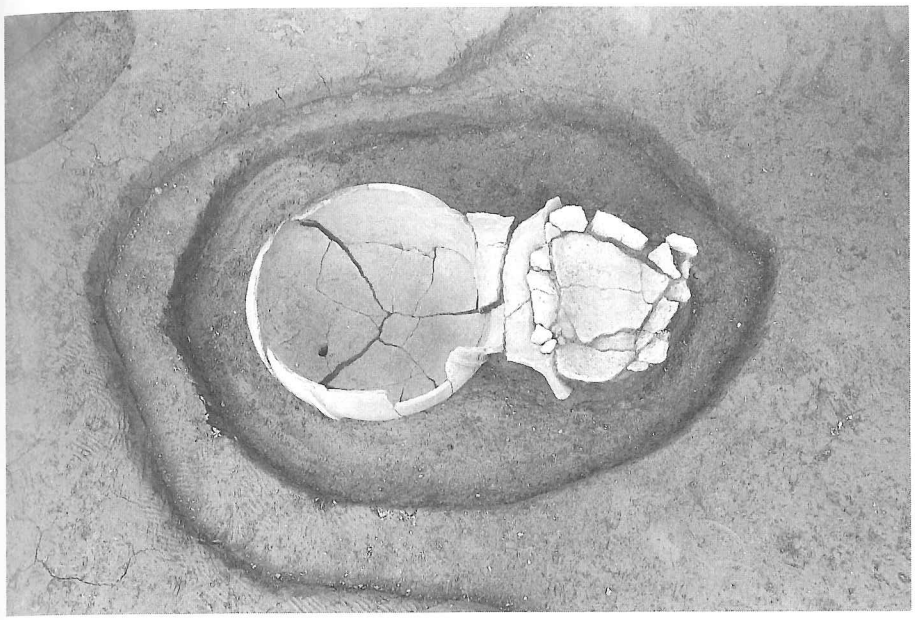
1号甕棺墓
(北から)



2号甕棺墓
(南から)

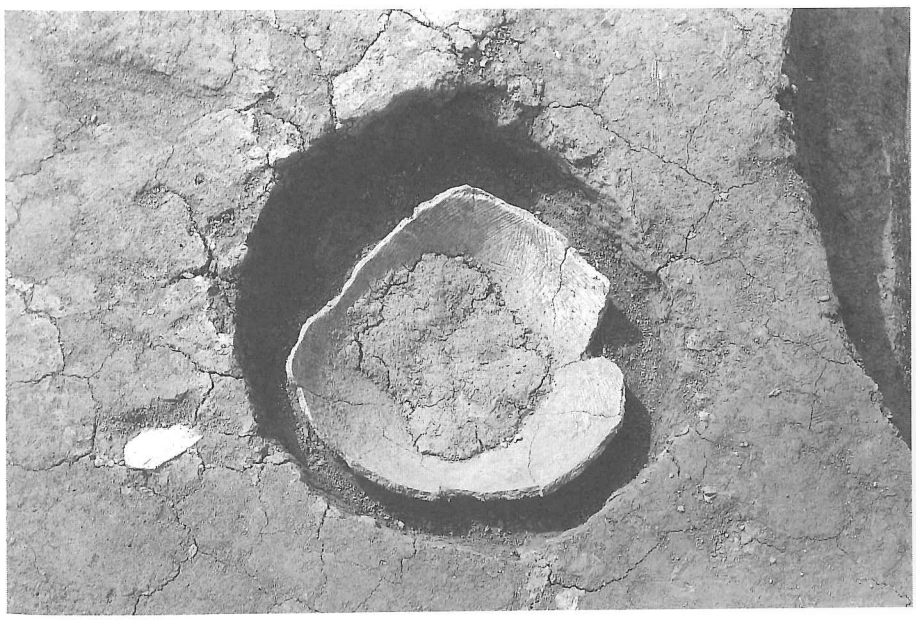


3号甕棺墓
(西から)

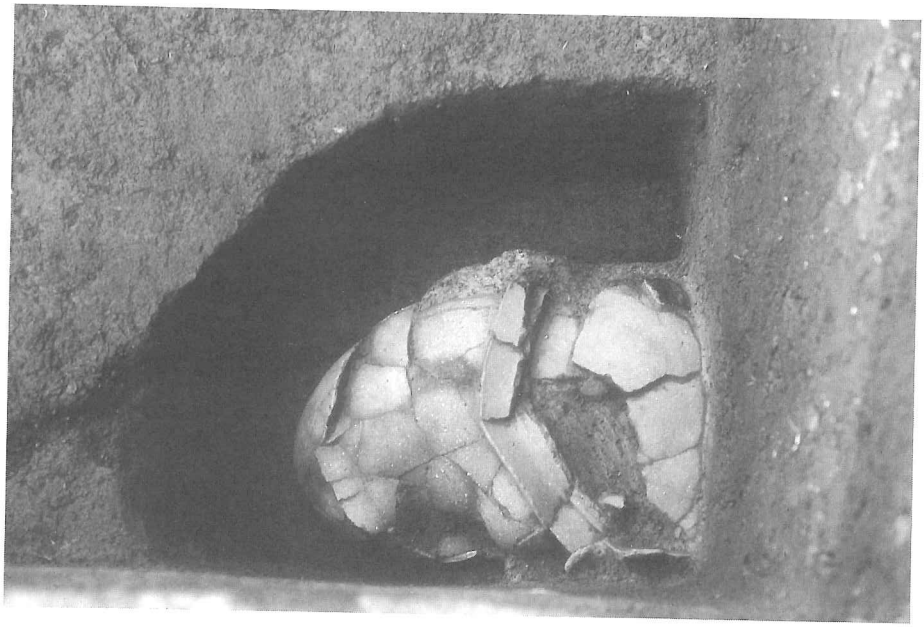


4号甕棺墓
(南から)

5号甕棺墓
(西から)



6号甕棺墓
(東から)



7号甕棺墓
（南から）

1号溝
（南西から）

4号溝
（南西から）

## 2．原ノ久保Ａ地区の調査

### (1) 調査概要（第30．31．32図，表３）

昭和52年度の長崎県教育委員会の原ノ久保Ａ地区の調査によって，箱式石棺墓４基が検出されており，墓域であることが確認[註1]された。その調査では精査を行わず，そのままの状態で埋め戻している。今回は，原ノ久保Ａ地区を対象として，墓域の範囲と内容を確認するために，範囲確認調査を行った。調査対象地区は，遺跡南端にある大川橋付近から，北側に広がる標高15m前後の台地で，周囲は，宅地や畑地として利用されている。調査区は，県道勝本・石田線を挟み，Ａ地区からＧ区を設定し，502㎡を調査した。Ａ区は，東西幅4.0m，南北幅3.0m。Ｂ区は，東西幅1.0m，南北幅20.0m。Ｃ区は，東西幅1.0m，南北幅20.0m。Ｄ区は，当初は東西幅20.0m，南北幅15.0mに設定していたが，遺構の状況確認のために調査区を拡幅して，最終的には390㎡となった。Ｅ区は，東西幅2.0m，南北幅15.0m。Ｆ区は，東西幅2.0m，南北幅5.0m。Ｇ区は，東西幅1.0m，南北幅20.0mである。

①各調査区ごとの調査概要

Ａ区は，遺構の検出，遺物の出土，ともにみられなかった。

Ｂ区は，遺構の検出，遺物の出土，ともにみられなかった。

Ｃ区は，遺構の検出，遺物の出土，ともにみられなかった。

Ｄ区は，箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・土壙・甕棺墓・集石遺構・溝が検出された。遺物は，弥生土器・石器・鉄器・青銅器・装飾品が出土した。

Ｅ区は，溝が検出された。遺物は，弥生土器が出土した。

Ｆ区は，箱式石棺墓・甕棺墓を検出した。

Ｇ区は，弥生土器が出土した。

②基本土層

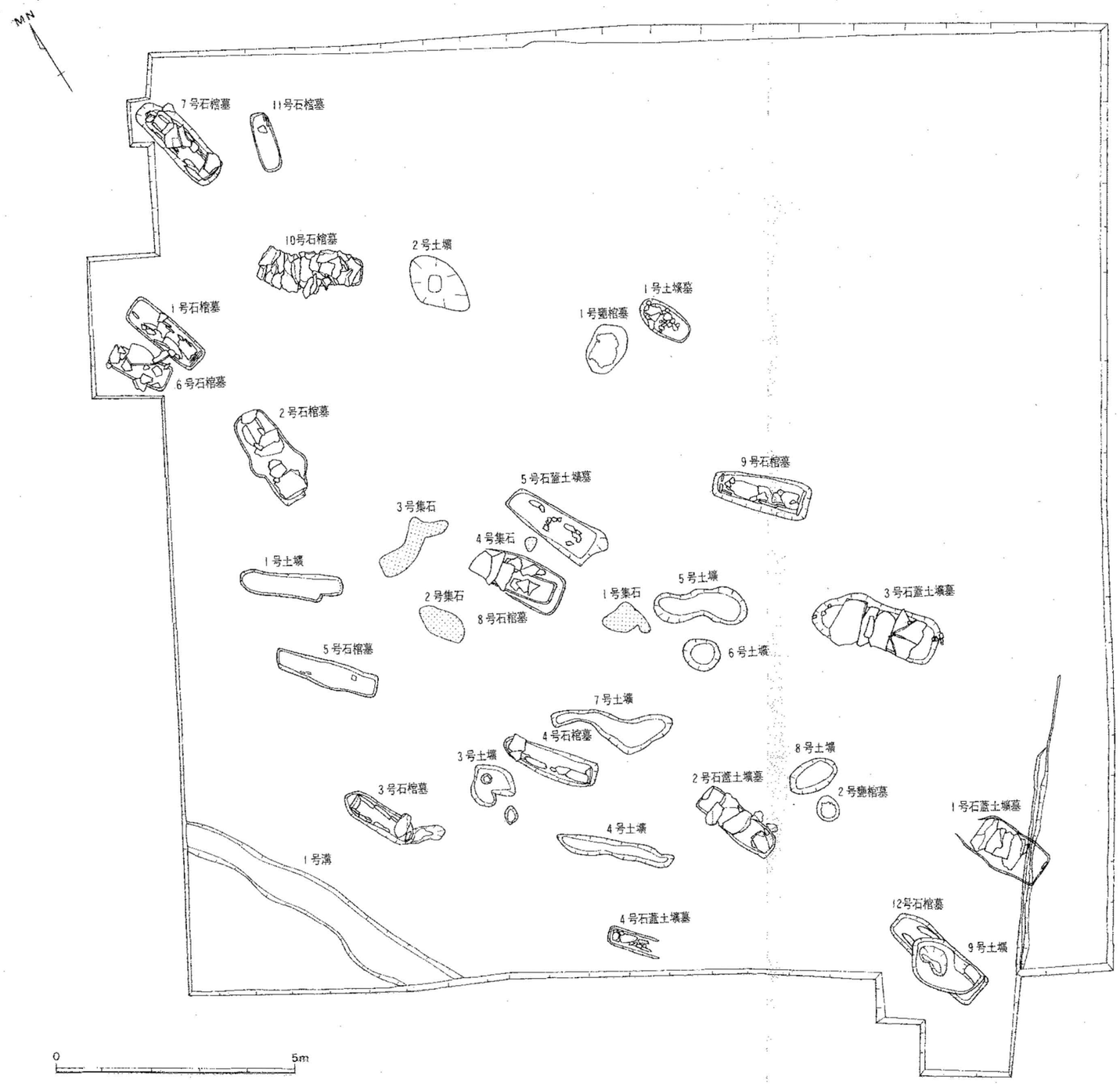
Ｄ区は，大別すると４層に分かれる。１層は表土。撹乱をうけている。色は，灰褐色とにぶい黄褐色に細分される。２層・３層は，黒褐色土で弥生時代の遺物が出土しているが，Ｄ区は，畑として利用されているために撹乱されており，厳密には包含層とはいえない。４層は，にぶい暗褐色土の地山である。

Ｅ区は，大別すると５層に分かれる。１層は，表土。２層は，にぶい黄橙色土。３層は，黒褐色土。弥生土器が出土している。４層は，暗褐色土。５層は，明褐色土の地山である。

Ｆ区は，大別すると６層に分かれる。１層は，表土。２層は，炭化物を含む暗褐色土と砂粒の混じる褐色土に細分される。３層は，褐色土で弥生土器が出土している。４層は，暗褐色土。５層は，暗褐色土の地山である。

Ｇ区は，大別すると７層に分かれる。１層は，表土。２層は，褐色土。３層は暗褐色土。４層は，黒褐色土で，弥生土器が出土している。５層は，黒褐色土。６層は，４・５・６層の混在，７層は，地山でにぶい赤褐色をしている。（西）

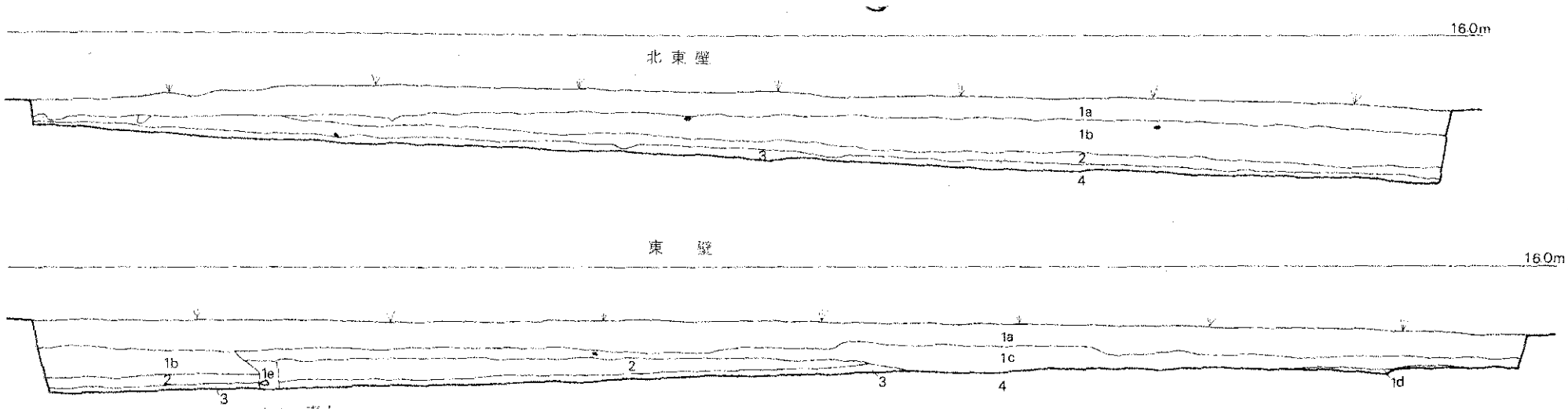
第30図　調査区配置図（1／1,000）




第31図　D区遺構配置図（1／100）

表3．検出遺構一覧表

| 調査区 | 遺構名 | 出土遺物・副葬品 | 備考 |
|---|---|---|---|
| D区 | 1号石棺墓 | | |
| | 2号石棺墓 | | |
| | 3号石棺墓 | | |
| | 4号石棺墓 | | |
| | 5号石棺墓 | | |
| | 6号石棺墓 | 硬玉製勾玉，碧玉製管玉 | |
| | 7号石棺墓 | | |
| | 8号石棺墓 | 小型仿製鏡 | 棺床に朱が残る |
| | 9号石棺墓 | | 石棺材の抜け跡あり |
| | 10号石棺墓 | | |
| | 11号石棺墓 | | 石棺材の抜け跡あり |
| | 12号石棺墓 | | 9号土壙が石棺墓を切っている |
| | 1号石蓋土壙墓 | ガラス製小玉 | |
| | 2号石蓋土壙墓 | | |
| | 3号石蓋土壙墓 | 小壺 | 石棺材の抜け跡あり |
| | 4号石蓋土壙墓 | | |
| | 5号石蓋土壙墓 | | |
| | 1号土壙墓 | 鉄鏃・鉄鋤先・小鉾 | |
| | 1号土壙 | | |
| | 2号土壙 | | |
| | 3号土壙 | | |
| | 4号土壙 | | |
| | 5号土壙 | | |
| | 6号土壙 | | |
| | 7号土壙 | | |
| | 8号土壙 | | |
| | 9号土壙 | 後漢鏡・筒形不明青銅器・ガラス製勾玉・ガラス製丸玉・碧玉製管玉 | |
| | 1号甕棺墓 | | 上甕・下甕，壺を使用 |
| | 2号甕棺墓 | | 単式甕棺，壺を使用 |
| | 1号集石 | | |
| | 2号集石 | | |
| | 3号集石 | | |
| | 4号集石 | | |
| | 1号溝 | | |
| E区 | 1号溝 | 丹塗土器 | |
| F区 | 1号石棺墓 | | |
| | 1号甕棺墓 | | 上甕・下甕，壺を使用 |




1 a　表土
1 b　灰褐色土(ややしまっている)
1 c　にぶい黄褐色土(攪乱層)
1 d　〃　(〃)
1 e　2層と1c層の混在
2　黒褐色土
3　褐色土
4　暗赤褐色粘土層(地山)

0　5m

第32図　D区土層図(1/80)

(2) D区の遺構

①箱式石棺墓

**1号箱式石棺墓（第33図．PL14）**

調査区の北西部，6号箱式石棺墓と一部重なる形で検出された。昭和52年度の調査で検出された第3号石棺墓と同一である。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身の長軸内法は，推定約1.6m，短軸内法は0.32mを図り，基軸は，磁北より東に167°傾いている。石棺材は，板状の石が使用されており，棺身部は，南側に小口材が1枚，側石，それと敷石が棺床材として残っている。遺物は，出土していない。（西）

**2号箱式石棺墓（第33図．PL14．15）**

調査区の北西部で検出された。昭和52年度の調査で検出された第4号石棺墓と同一である。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身の長軸内法は，1.75m，短軸内法は0.32mを図り，基軸は，磁北より東に177°傾いている。棺身部は，残りがよく，厚みのある蓋石，敷石，側石，小口材，全て残っている。遺物は，出土していない。（西）

**3号箱式石棺墓（第34図．PL15）**

調査区の南西部で検出された。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身の長軸内法は，推定約1.34m，短軸内法は0.21mを図り，基軸は，磁北より東に142°傾いている。棺身部は，北側に小口材が1枚と，側石，蓋石が1枚，それぞれ，厚みのあるものが残っている。遺物は，出土していない。（西）

**4号箱式石棺墓（第34図．PL15．16）**

薄い板状の石を利用した箱式石棺墓である。蓋石は，北側に一枚残るだけで，消滅している。小口石は南側に一枚立てられ，掘り方が方形に対し，北側には置かれておらず，楕円を呈している。南側の小口石も，堀り片面よりやや内側に位置しており，後に動いたと考えられる。棺床には，板石が敷かれている。長軸内法1.72m，短軸内法最大幅0.3m，深さ約0.23mで副葬品はない。（安楽）

**5号箱式石棺墓（第35図．PL16）**

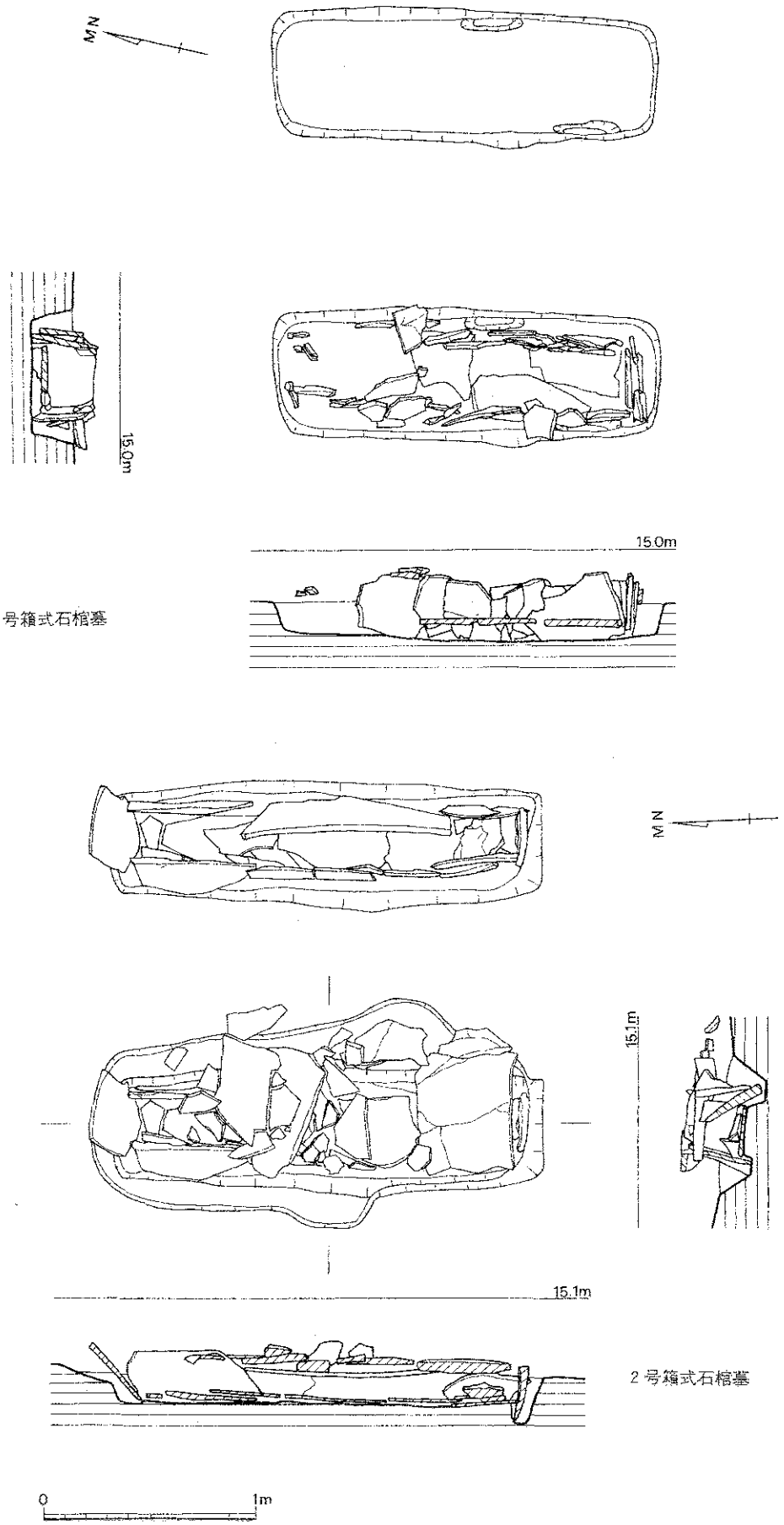
調査区中央西寄りに検出された。側石が一部残っており，墓の平面は，隅丸方形をしている。長軸内法は，1.93m，短軸内法は，0.26mを図る。基軸は，磁北より東に20°傾いている。遺物は，出土していない。（西）

**6号箱式石棺墓（第35図．PL16）**

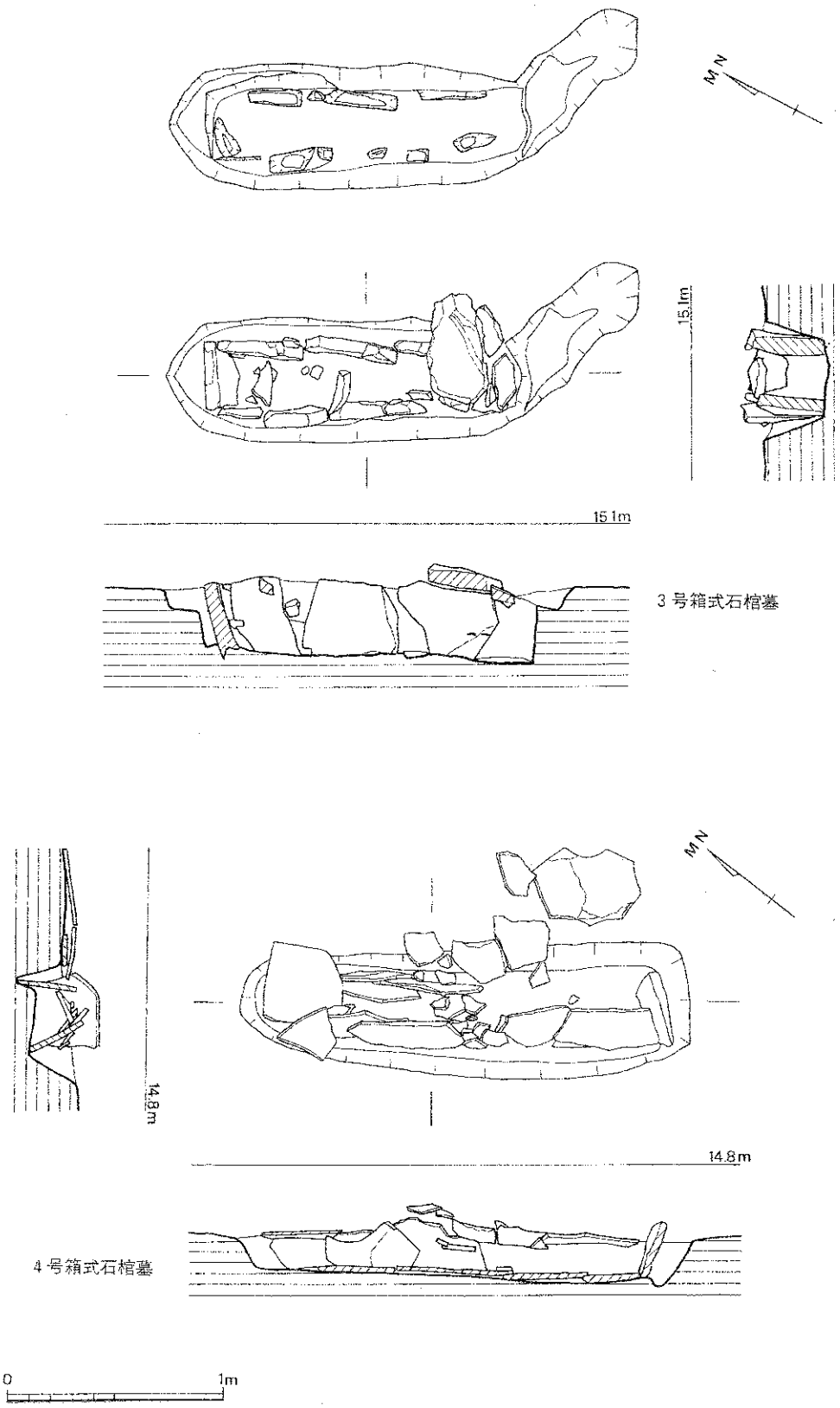
調査区の北西部，1号箱式石棺墓と一部重なる形で検出された。昭和52年度の調査で検出された第2号石棺墓と同一である。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身の長軸内法は，1.15m，短軸内法は0.32mを図り，基軸は，磁北より西に35°傾いている。石棺材は，板状の石が使用されており，棺身部は，残りがよく，南北に小口材が1枚づつと，側石，板状の蓋石が残っている。硬玉製の勾玉，碧玉製の管玉が，それぞれ1点出土している。（西）

**7号箱式石棺墓（第36図．PL17）**

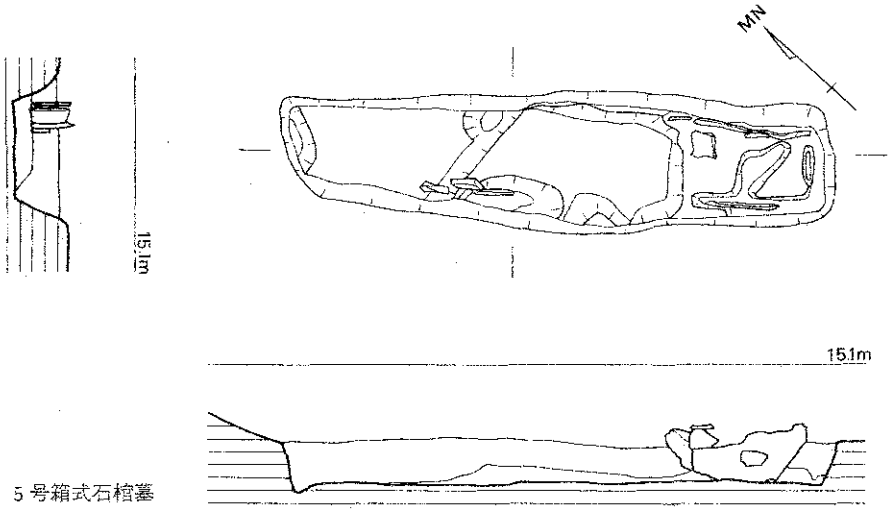
調査区の北西部で検出された。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身の長軸内法は，1.50m，短

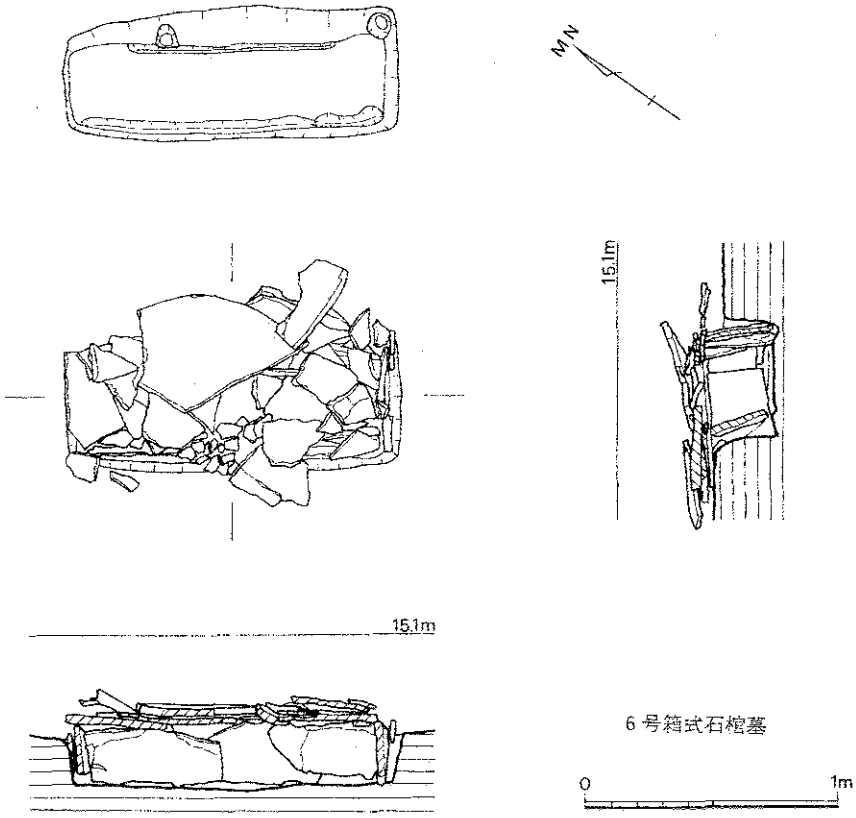



第33図　D区箱式石棺墓実測図①（1／30）




第34図　D区箱式石棺墓実測図②（1／30）




第35図　D区箱式石棺墓実測図③（1／30）

軸内法は0.25mを図り，基軸は，磁北より東に161°傾いている。棺身部は，南北に小口材が１枚づつと，板状の側石，厚みのある蓋石が残っている。遺物は，出土していない。（西）

**８号箱式石棺墓（第36図．ＰＬ17．18）**

今回の調査区の中では，ほぼ中央に位置する。本体部分を囲むように一段削られているが，北側では消滅している。棺材は，比較的大形の板石を使用し，しっかりとした長方形の石棺に仕上げている。蓋石は，半分ほどかぶるが，あとは動いており，棺内にも残る。側石は，片面３枚組になっており，小口の隅にあたる部分は小さな石をいれ補強している。棺床は，丁寧に板石が敷かれている。南側小口から約0.25m離れた棺内の床に接して，小型仿製鏡が１面副葬されていた。鏡は，直径約7.6cmの内行花文鏡である。石棺の長軸内法は1.5m，短軸内法は，0.25m，深さ0.3mで，小口面は，ほぼ正方形を呈する。この遺構は，検出遺構のほぼ中央に位置することに加え，段を持つこと，さらに，東西南北の四面に集石を意図的に配したのではないかと思われ，副葬品から察すると，集団墓の中でも特別な被葬者であったことが窺われる。（安楽）

**９号箱式石棺墓（第37図．ＰＬ18）**

調査区の中央東よりに検出された。墓の平面は，隅丸で，台形状をしている。棺身の長軸内法は，1.64m，短軸内法は，北側が0.30m，南側は0.45mである。基軸は，磁北より東に135°傾いている。石棺材は，板状の石が使用されており，棺身部は，南北に小口材が１枚づつと，西側に側石，板状の蓋石が残っている。東側・西側には，側石の抜け跡がみられる。遺物は，出土していない。（西）

**10号箱式石棺墓（第37図．ＰＬ19）**

調査区の北西部で検出された。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身の長軸内法は，1.62m，短軸内法は0.3mを図り，基軸は，磁北より東に121°傾いている。棺身部は，南北に小口材が１枚づつと，側石，板状の蓋石が残っている。他の石棺材に比べて小ぶりなものが多く，その代わり数が多い。遺物は，出土していない。（西）

**11号箱式石棺墓（第39図．ＰＬ19）**

調査区の北西部で検出された。墓の平面は，隅丸方形をしている。棺身部に，小口材と側石の抜け跡がみられ，長軸内法は，1.17m，短軸内法は，0.22mを図る。基軸は，磁北より東に20°傾いている。遺物は，出土していない。（西）

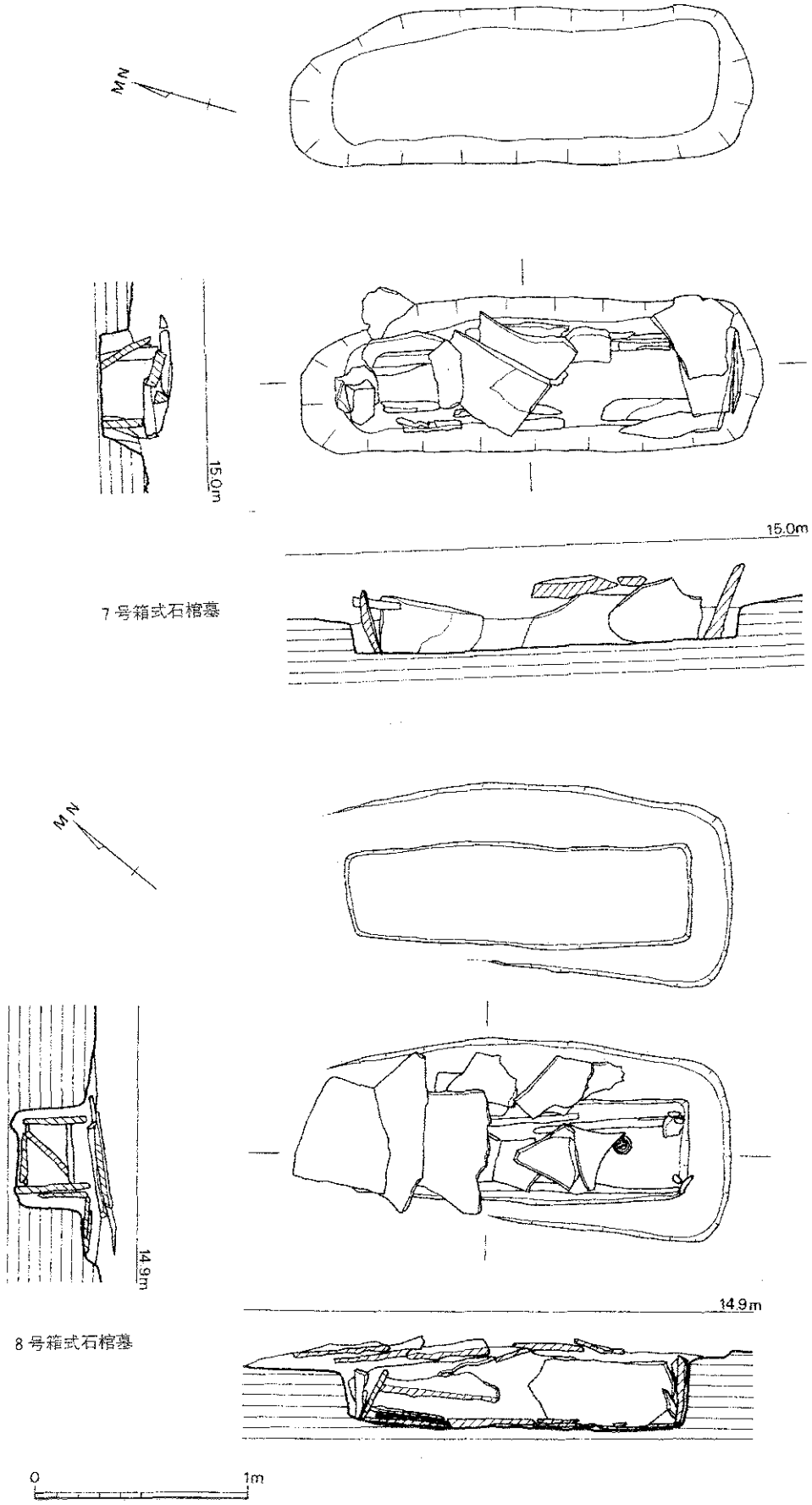
**12号箱式石棺墓（第38図．ＰＬ19．20）**

調査区南東部で検出された。墓の平面は，隅丸方形をしている。長軸内法は，推定約1.72m，短軸内法は，0.4mを図る。基軸は，磁北より東に169°傾いている。棺身部は，南側の小口材と側石の抜け跡がみられる。棺身部が，土壙によって切られている。遺物は，出土していない。（西）

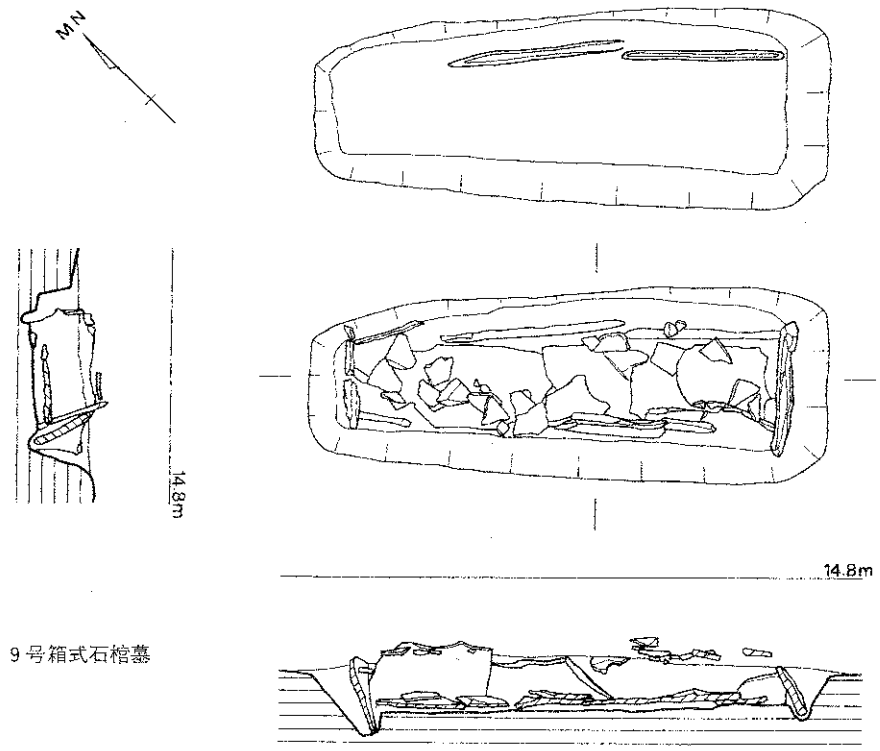
②石蓋土壙墓

**１号石蓋土壙墓（第39図．ＰＬ22）**

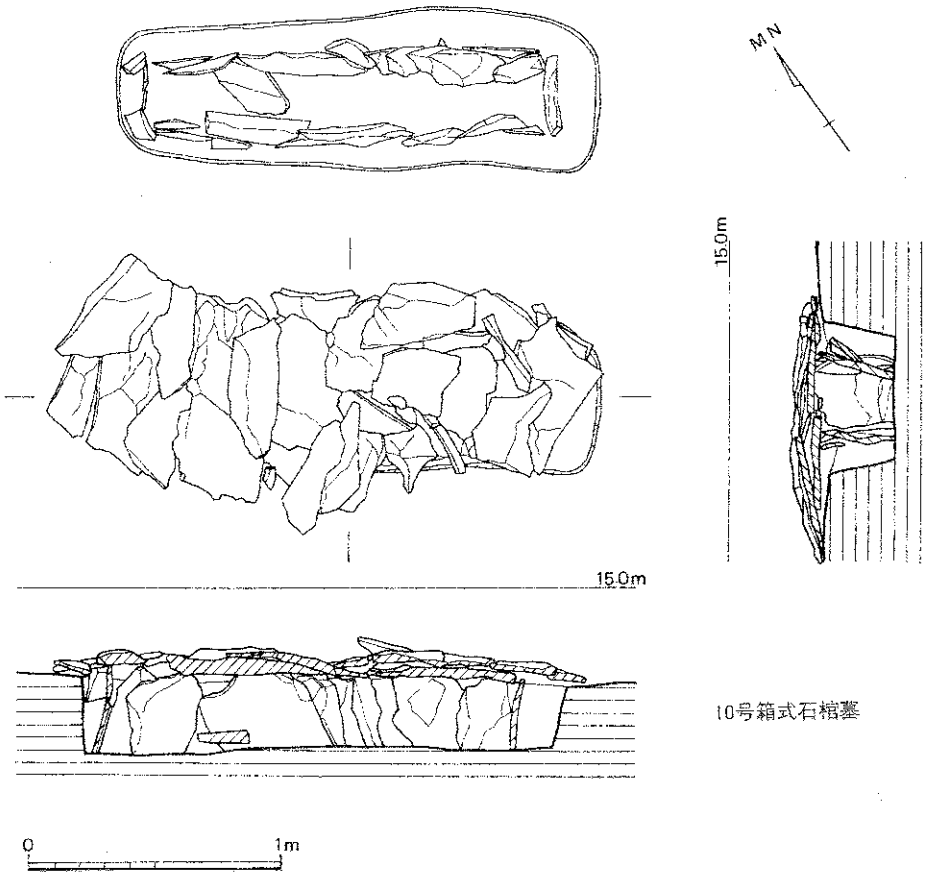
板石を鎧板状に重ねた石蓋土壙墓である。南側の４分の１は耕作によって削られ，段差が付いている。小口石は両端とも抜かれているが，掘り方だけ残っている。土壙はほぼ長方形で，南側が若干狭




第36図　D区箱式石棺墓実測図④（1／30）

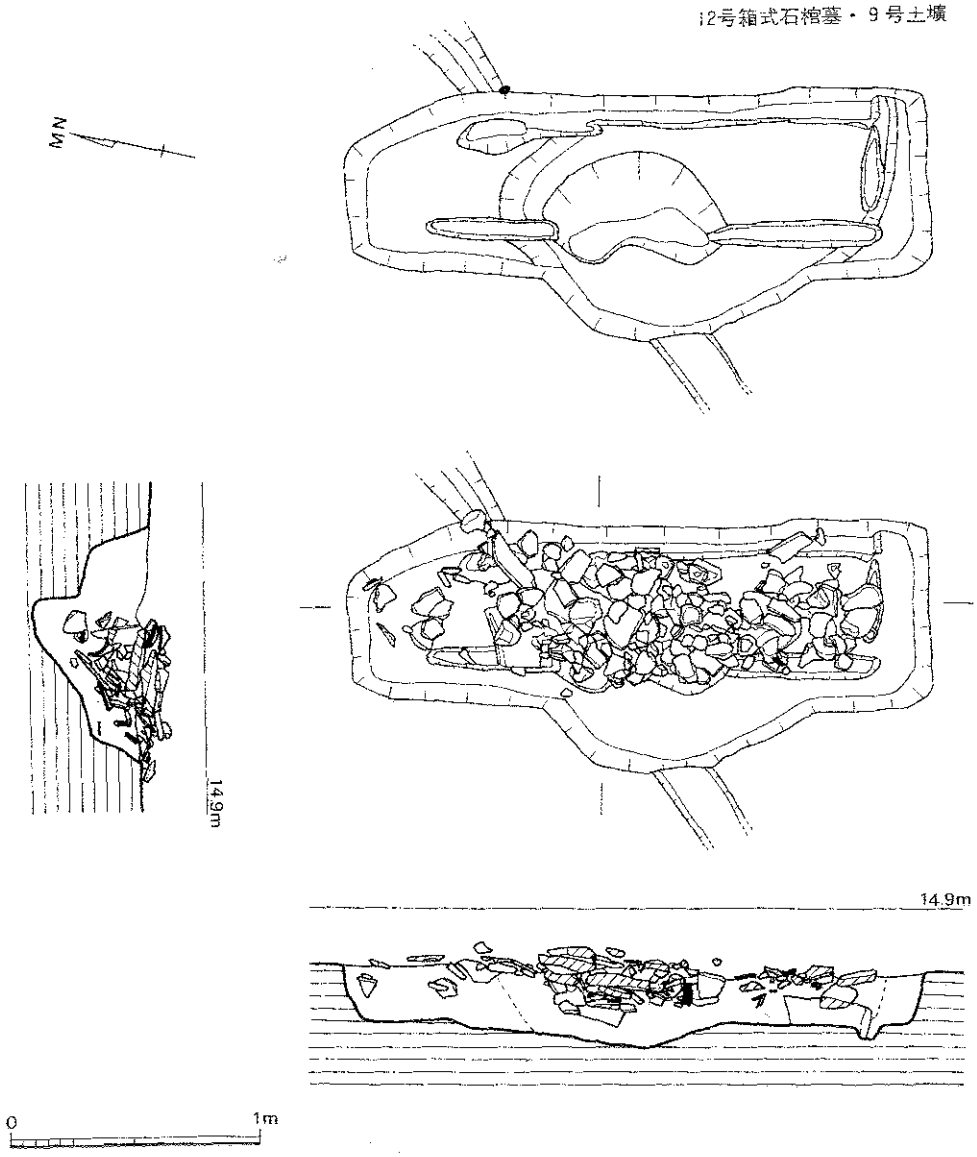



9号箱式石棺墓

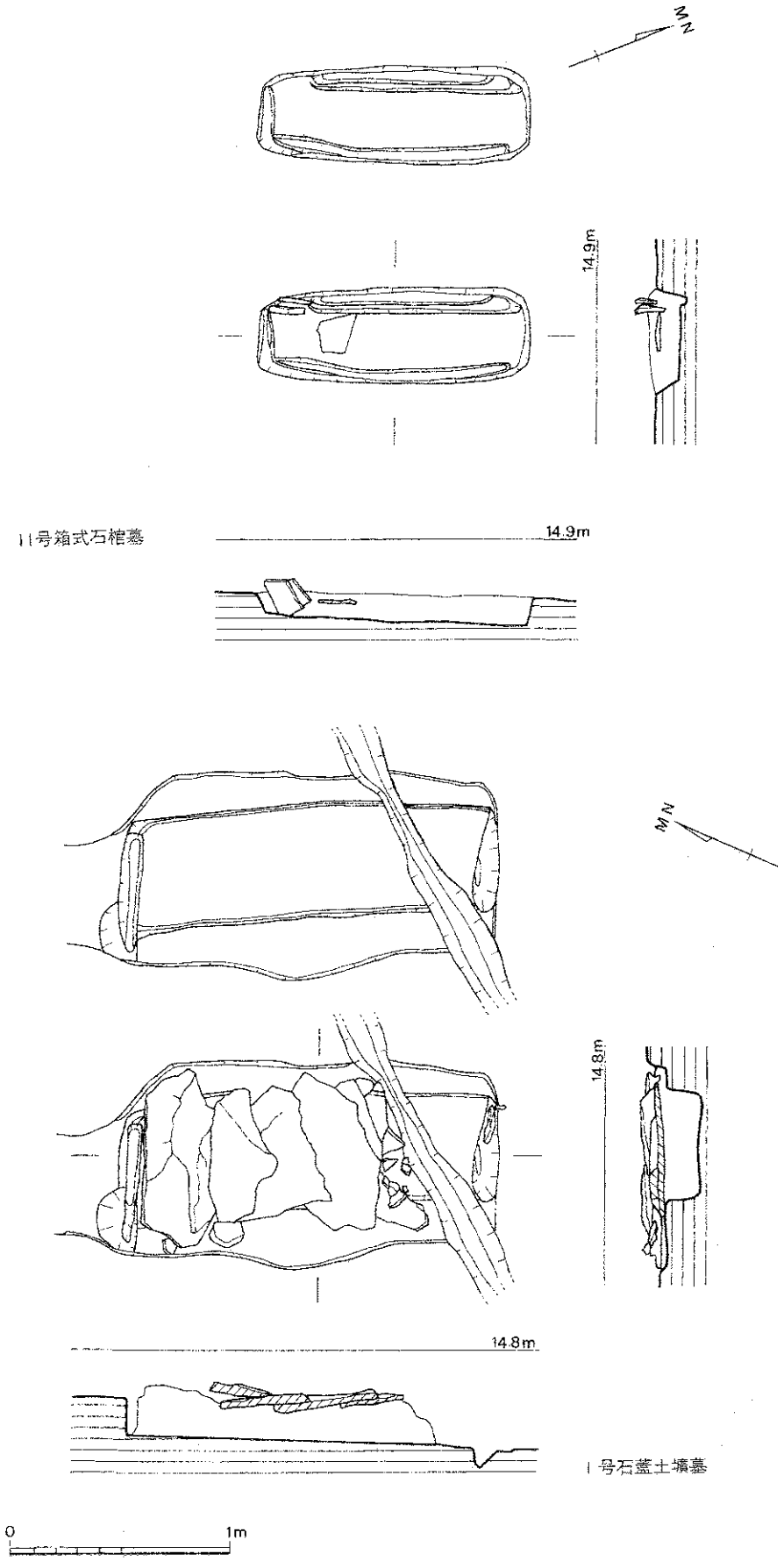



10号箱式石棺墓

第37図　D区箱式石棺墓実測図⑤（1／30）




第38図　D区箱式石棺墓実測図⑦（1／30）




第39図　D区箱式石棺墓実測図⑦及び石蓋土壙墓①実測図（1／30）

くなっている。全長1.7m，最大幅0.5m，深さ約0.2m。土壙内からガラス玉５個が出土。時期は弥生時代後期終末頃と考えられる。（安楽）

**２号石蓋土壙墓（第40図．ＰＬ22）**

調査区南東部で検出された。土壙の平面は，隅丸方形をしている。長軸内法は，推定約1.71m，短軸内法は，0.54mを図る。基軸は，磁北より西に17°傾いている。小口材は２枚残っており，北側は，厚みのある石材を用い，南側は，板状の石を使用している。蓋石は，厚みのあるものが残っている。遺物は，出土していない。（西）

**３号石蓋土壙墓（第40図．ＰＬ23）**

この石蓋土壙墓の土壙は，長軸内法1.8m，短軸内法0.26m，深さ約0.35mで，南側の小口中央に１枚の板石が立てられている。全体の形状は隅丸方形で，北側は楕円を呈している。上面には，５枚の板状の石が一部重なるように置かれている。土壙中央の床面には，副葬品として小形壺が１点置かれていた。この壺の底には，小指大の孔が穿たれている。遺構の年代は，副葬品から弥生終末頃と考えられる。（安楽）

**４号石蓋土壙墓（第41図．ＰＬ23）**

調査区中央南寄りに，蓋石が，落ち込んだ状態で検出された。南側は，耕作による削平をうけているが，土壙の平面は，隅丸方形をしている。長軸内法は，1.0m，短軸内法は，0.3mを図る。基軸は，磁北より東に142°傾いている。遺物は，出ていない。（西）

**５号石蓋土壙墓（第41図．ＰＬ24）**

調査区のほぼ中央，８号箱式石棺墓の北側に検出された。土壙の平面は，隅丸の台形状をしている。長軸内法は，1.0m，短軸内法は，北側0.44m，南側0.6mを図る。基軸は，磁北より東に150°傾いている。蓋石が，数枚土壙内に落ち込んでいる状況がみられる。遺物は，出ていない。（西）

③土壙墓

**１号土壙墓（第42図．ＰＬ24）**

調査区の中央部，やや北東よりに検出された。土壙の平面は，隅丸の方形をしている。長軸内法は，推定約0.96m，短軸内法は，0.49mを図る。基軸は，磁北より東に158°傾いている。土壙内に礫が投げ込まれており，小鉢が１点，鉄製方形鋤先が２点，鉄鎌が１点出土している。

④土壙（第31，38図）

**１号土壙**

長径約2.18m，短径約0.5m，深さ約0.087mの隅丸方形の土壙である。遺物は，出土していない。

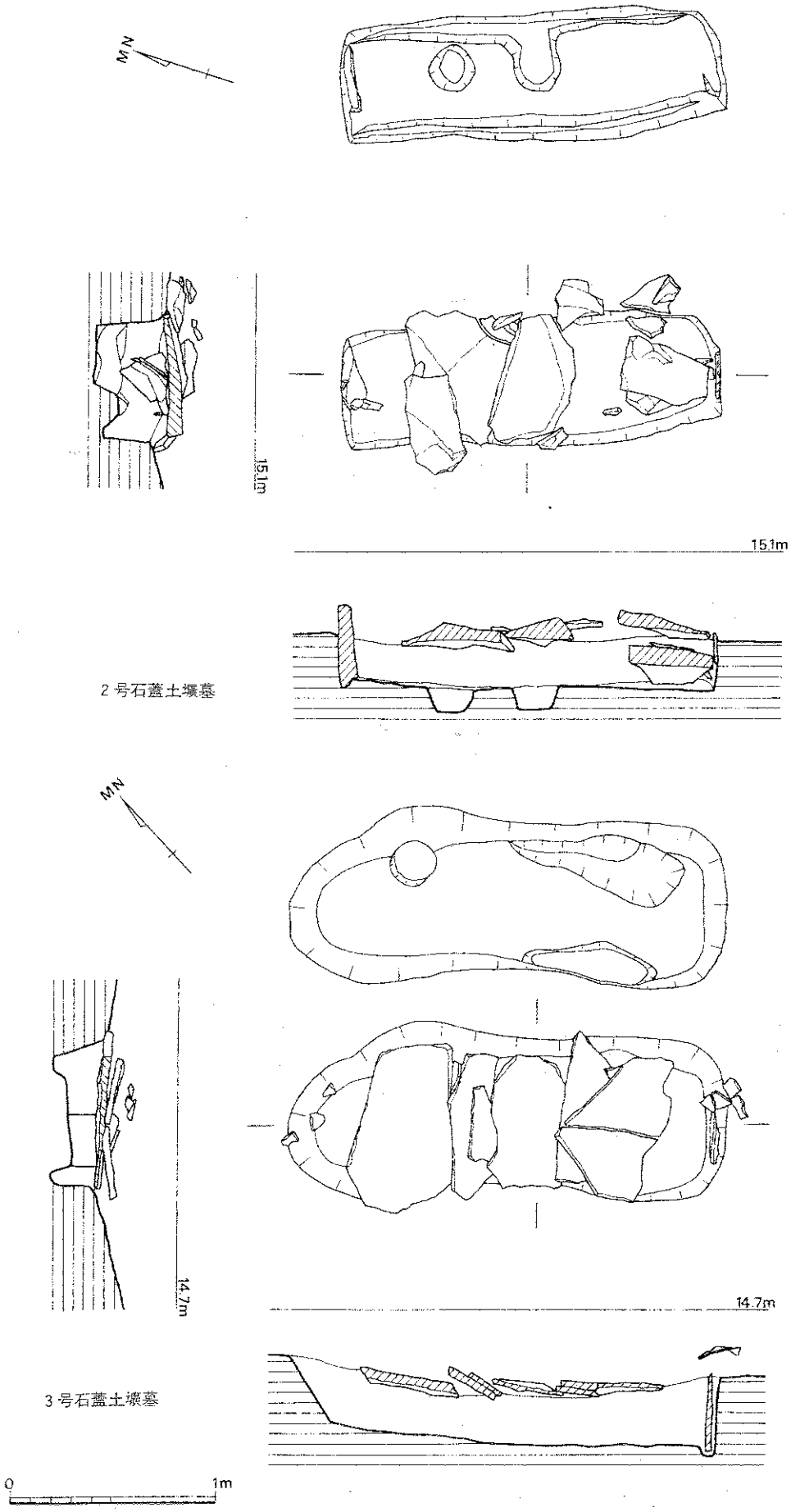
**２号土壙**

長径約1.04m，短径約0.96m，深さ約0.359mの楕円形の土壙である。遺物は，出土していない。

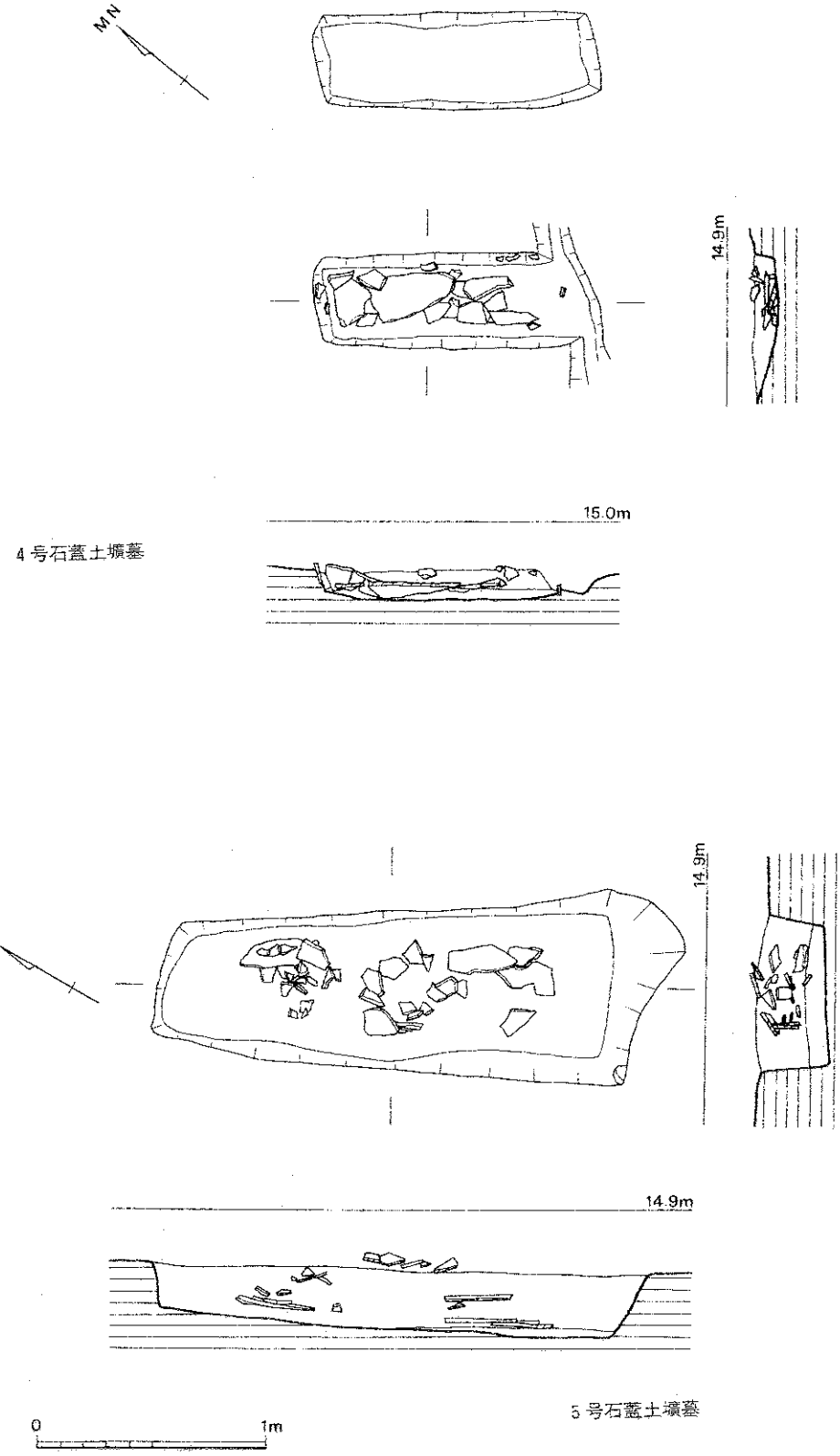
**３号土壙**

長径約0.92m，短径約0.7m，深さ約0.163mの不整形の土壙である。遺物は，出土していない。

**４号土壙**




第40図　D区石蓋土壙墓実測図②（1／30）




第41図　D区石蓋土壙墓実測図③（1／30）

長径約2.5m，短径約0.4m，深さ約0.291mの隅丸方形の土壙である。遺物は，出土していない。

**5号土壙**

長径約2.5m，短径約0.74m，深さ約0.057mの不整形の土壙である。遺物は，出土していない。

**6号土壙**

長径約1.86m，短径約0.54m，深さ約0.136mの不整形の土壙である。遺物は，出土していない。

**7号土壙**

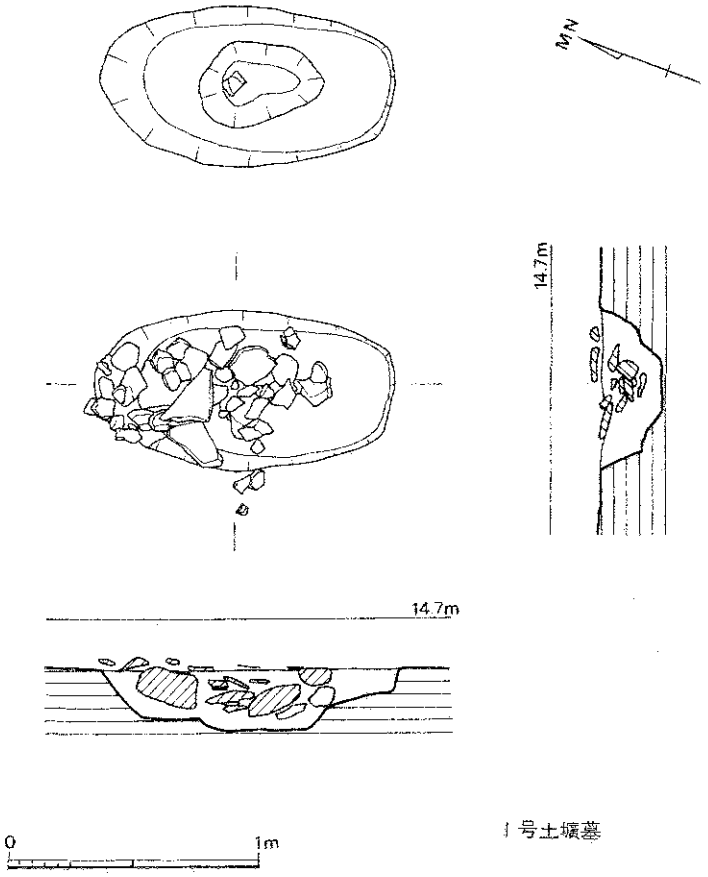
長径約0.76m，短径約0.68m，深さ約0.114mの円形の土壙である。遺物は，出土していない。

**8号土壙**

長径約1.08m，短径約0.68m，深さ約0.16mの隋円形の土壙である。遺物は，出土していない。

**9号土壙（第38図．ＰＬ19．20）**

12号箱式石棺墓を切る形で，検出された。長径約1.55m，短径約0.9m，深さ約0.32mの円形の土壙である。遺物は，内行花文鏡１面（後漢鏡），ガラス製勾玉１点，ガラス製丸玉３点，碧玉製管玉１点，筒形不明青銅器１点，その他多くの弥生式土器，石器が出土している。この土壙は，13号箱式石棺墓の石棺材が抜き取られた後に掘られたと考えられるところから，後世に掘られて，その際に出土した遺物を投げ入れたものと思われる。




第42図　Ｄ区土壙墓実測図（１／30）

⑤甕棺墓

**1号甕棺墓（第43図．ＰＬ25）**

調査区の中央，４号石蓋土壙墓の北側に検出された，西新式の壺を下甕とした小児甕棺墓である。上甕は，体下半部のみを利用して上甕としている。下甕内には，礫や板状の石が落ち込んでいるが，もともと甕棺墓の上に標石として置かれていたものが，落ち込んだ可能性が高い。下甕には，中央より東に４cmほどの位置に，穿孔と思われる穴が認められた。基軸は，磁北より東に50°傾いている。埋置角度は，25°である。遺物は，出土していない。

**2号甕棺墓（第44図．ＰＬ25）**

調査区の南東部に検出された，丹塗の複合口縁壺を用いた小児甕棺墓である。ほぼ，直立している。埋置角度は，90°である。遺物は，出土していない。

⑥集石遺構（第45図）

8号箱式石棺墓を取り囲むように検出された礫群である。

**1号集石**

石棺の南側に，東西約1.8m，南北約1.0mにわたり検出された礫群である。

**2号集石**

石棺の西側に，東西約1.3m，南北約1.5mにわたり検出された礫群である。

**3号集石**

石棺の北側に，東西約1.6m，南北約0.8mにわたり検出された礫群である。

**4号集石**

石棺の東側に，東西約0.3m，南北約0.3mにわたり検出された礫群である。

⑦溝

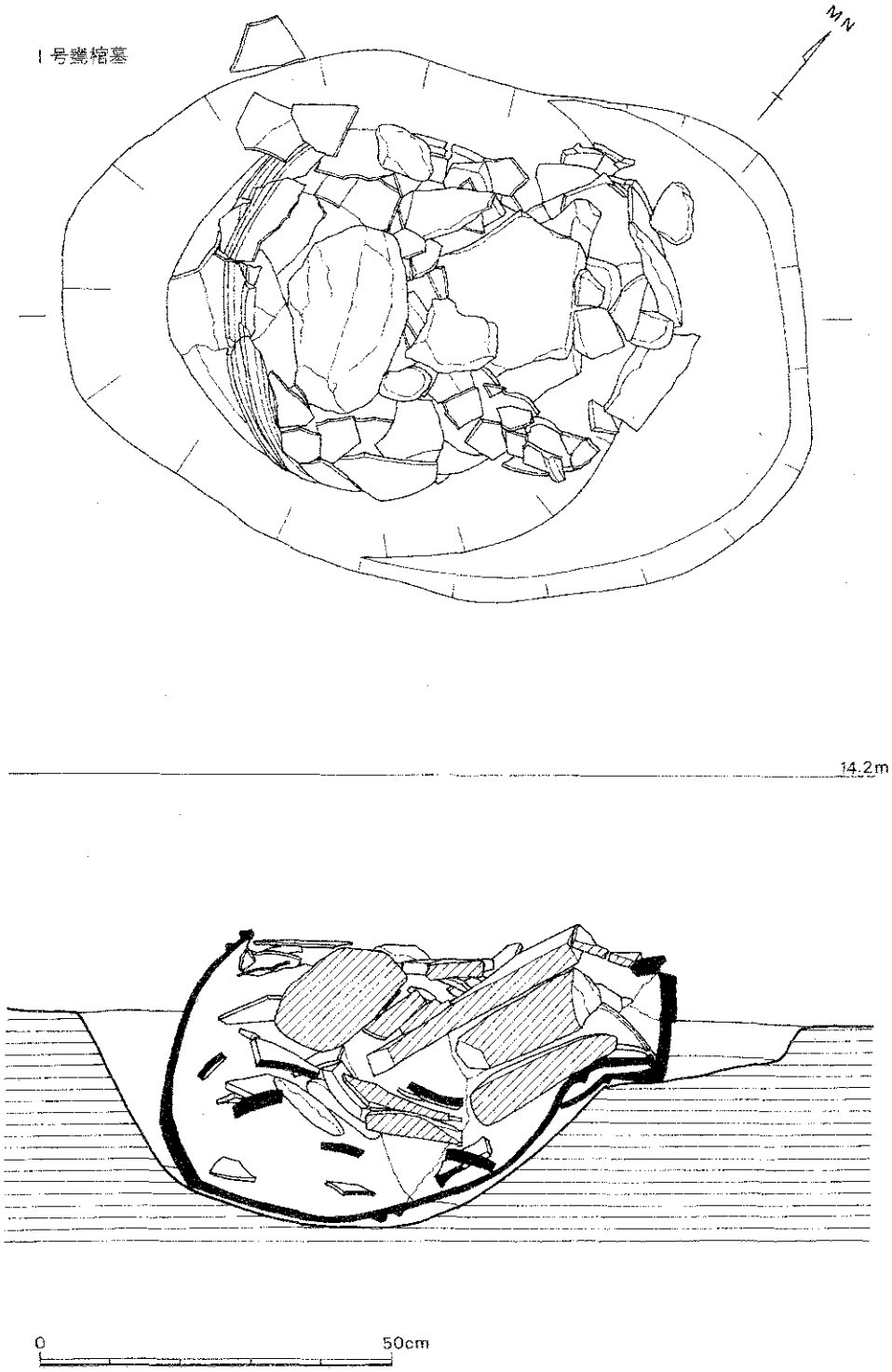
**1号溝（第31図）**

調査区の南西部に，３号箱式石棺墓に平行に北西から南東に走る形で検出された。上面幅0.3m～0.5m，下面幅0.2m～0.4m。遺物は，出土していない。

**(3)　Ｄ区の遺物**

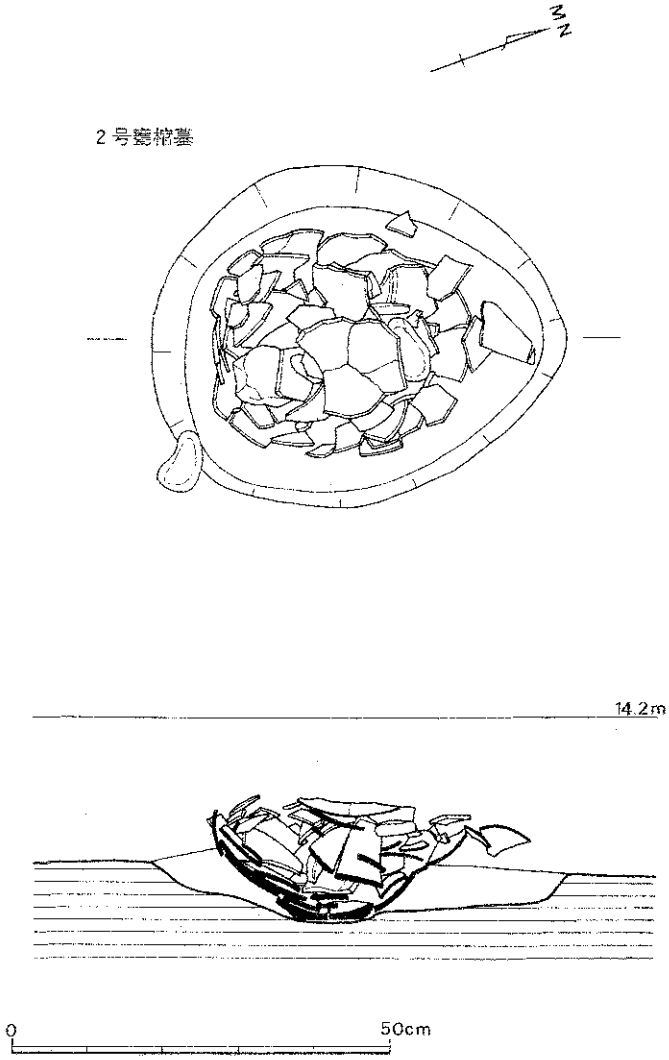
①土器（第46．47図）

１から６は，９号土壙から出土した土器である。１・２は，甕である。１は，弥生時代中期の須玖Ⅱ式の丹塗の鋤先状口縁を持つ甕である。口縁部直下に断面三角形の突帯を持つ。口縁端部は，やや，たれており，刻み目が施されている。胎土は，明褐色をしており，石英・長石・金雲母を含んでいる。２は，弥生時代中期の須玖Ⅰ式の甕の底部である。器表は，風化している。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石を含んでいる。３～６は，壺である。３は，弥生時代後期の鋤先状の口縁部を持つ大形の壺である。口縁部は，大きく外に張り出しており，口縁端部には，刻目が施されている。全体にわたり，ハケ目が見られる。器肉は厚い。胎土は，あらく，にぶい黄橙色をしており，石英・長石を含んでいる。４は，弥生時代中期の丹塗の袋状口縁を持つ壺である。口縁端部は，内湾し，丸く

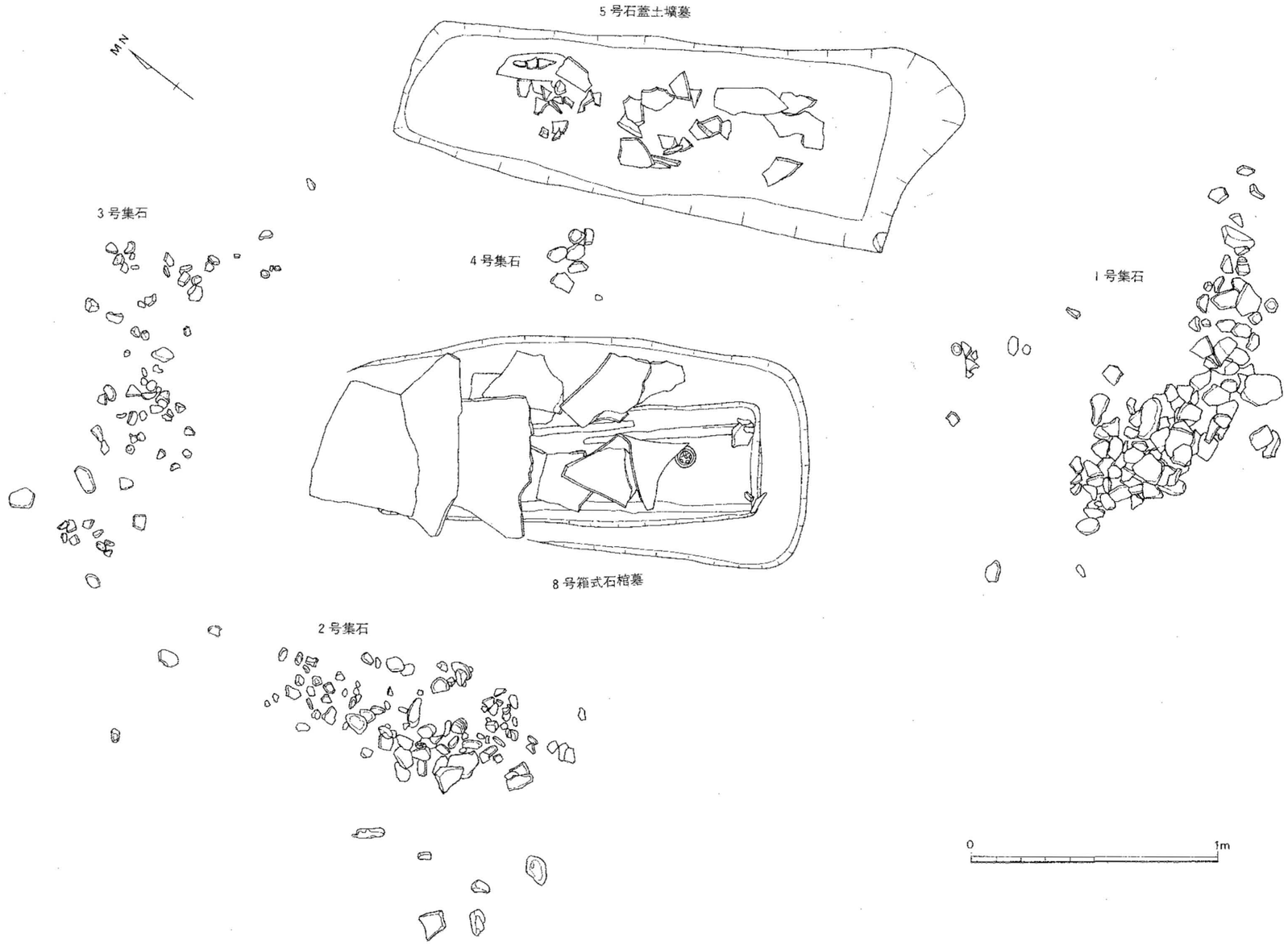



第43図　D区甕棺墓実測図①（1／10）

収まっている。胎土は，明赤褐色をしており，石英・長石を含んでいる。5は，弥生時代後期後半の複合口縁をもつ壺である。口縁端部は，外湾しており，丸く収まっている。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石を含んでいる。6は，弥生時代中期の須玖Ⅰ式の壺の底部である。器肉は厚く，体下半部は，大きく張り出している。器表は，風化しているが，一部にハケ目がみられる。胎土は，橙色をしており，石英・長石を多量に含んでおり，角閃石も見られる。7は，1号土壙墓から出土した弥生時代後半から終末期の身の深い小鉢である。体上半部は，そばまりぎみになっており，体下半部にはススが付着している。口縁端部は，平坦に収まっている。平底が，わずかではあるが残っている。胎土は，にぶい黄橙色をしており，石英・長石・金雲母を含んでいる。体下半部には，穿孔が1箇所みられ，内側にも穿孔途中と思われるくぼみが1箇所みられるが，祭祀の際に使用されたものではないかと考えられる。8は，2号石蓋土壙墓から出土した弥生時代終末期の丹塗の小壺である。口




第44図　D区甕棺墓実測図②（1／10）




第45図　集石遺構配置図（1／20）

縁部は，直立しており，口縁端部は，丸く収まっている。底部は，丸底である。胎土は，明赤褐色をしており，石英・長石を含んでいる。体下半部には，ススが付着しており，穿孔が１箇所みられるが，祭祀の際に使用されたものではないかと考えられる。９は，弥生時代中期の丹塗の鋤先状口縁を持つ高坏である。口縁部は，肥厚しており，口縁端部は，丸く収まる。器表は，風化しているが，内側には丹が残る。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石・金雲母を含んでいる。10は，弥生時代後期中葉の高坏の口縁部である。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石を含んでいる。９．10は，９号土壙から出土している。11～13は，９号土壙から出土した弥生時代後期から終末にかけての高坏の脚柱部である。11は，胎土は，橙色をしており，石英・長石を含んでいる。内側には，絞り痕がみられ，穿孔も１箇所みられる。12は，器表は風化しているが，胎土は，橙色をしており，石英・長石を多量に含んでいる。穿孔が３箇所みられる。13は，器表は風化している。胎土は，にぶい黄橙色をしており，石英・長石を含んでいる。穿孔は，１箇所みられる。Ｋ１は，１号甕棺墓に使用された弥生時代後期後葉の壺である。上甕は，壺の体下半部のみ残っている。器表は，風化しているが，ハケ目が残っている。底部は，平底である。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石を含んでいる。下甕は，壺である。口縁部は，外反しており，横Ｖ字状の刻目が施されている。口縁端部は，平坦に収まっている。頸部から口縁部にかけて朝顔形に開いており，頸部内側には，ハケ目がみられる。頸部下端に，台形状突帯を１条持っている。胴部には，台形状突帯を２条持っている。底部は，やや凸レンズ状になった底である。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石を含んでいる。Ｋ２は，２号甕棺墓に使用された弥生時代後期前葉から中頃の壺である。稜線のある袋状口縁を持つ。胴部径に比べ，口縁径が，極端に小さい。頸部下端には，断面三角形の突帯を一条巡らしている。口縁端部は，平坦に収まっている。口縁上面には，丹が残っており，ススも付着している。頸部には，ハケ目がみられる。体上半部は，風化しているが，ススが付着している。底部は，やや凸レンズ状になっている。胎土は，にぶい橙色をしており，長石・石英を含んでいる。

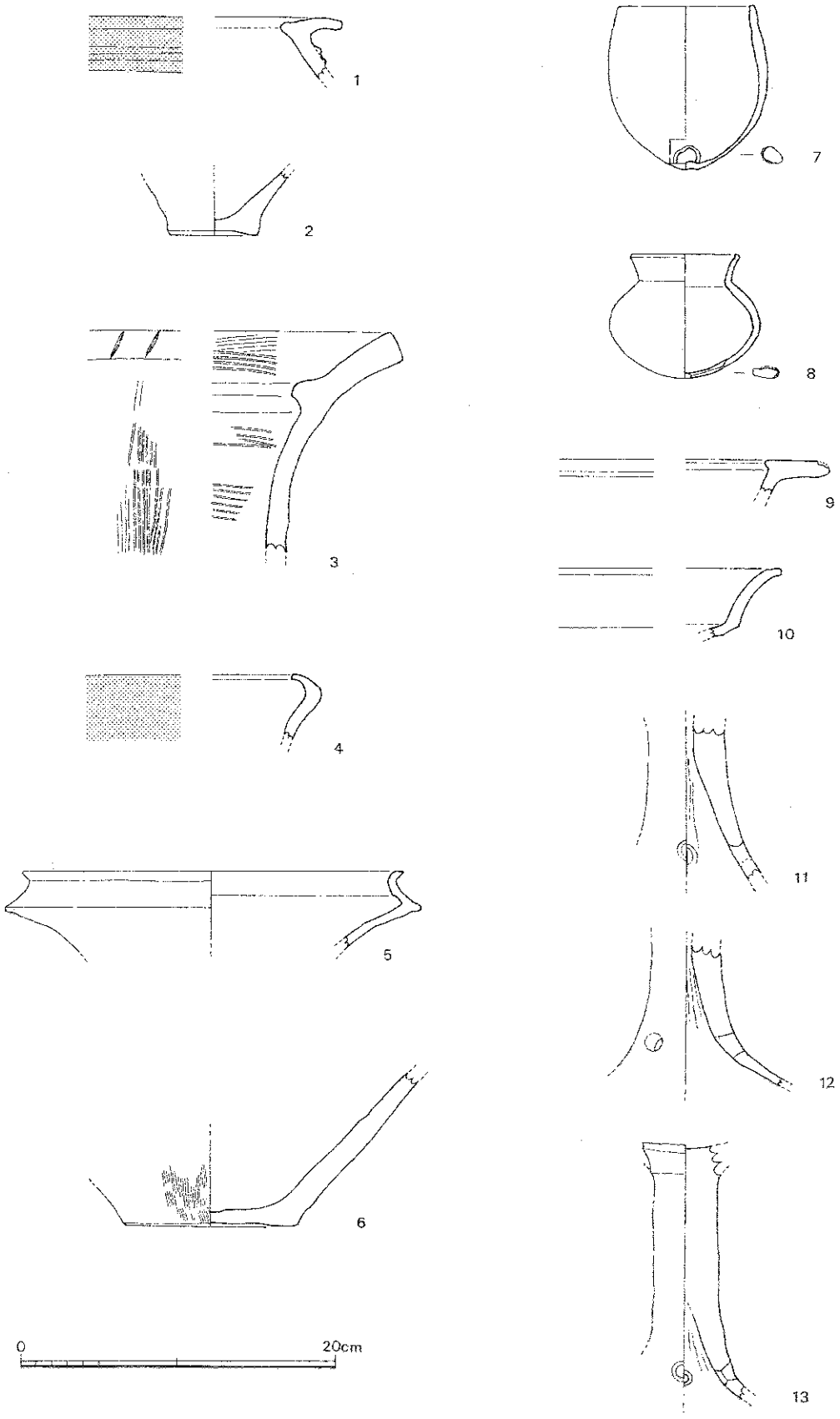
②石器（第48図）

１は，黒曜石製の角錐状石器。基部は，自然面が残る。長さ5.7cm，幅2.7cm，厚み1.4cm。２は，黒曜石の角礫を用いた石核。正面から側辺にかけ２／３ほど剥離しており，他の部分は自然面が残る。重さ10.1ｇ。３は，黒曜石製の台形石器。基部に，ブランティング加工がみられる。４は，凹基式の黒曜石製の無茎打製石鏃。長さ2.1cm，幅1.5cm，厚み0.3cm。５は，凹基式のサヌカイト製の無茎打製石鏃。長さ2.4cm，幅1.5cm，厚み0.5cm。６は，風化が著しいが，すり石として使用された形跡がある。重さ311ｇ。７は，砥石として使用された形跡がある。重さ488ｇ。８は，打撃痕がある。重さ412ｇ。

③金属器

**鉄器（第49図．ＰＬ25）**

１は，鉄鎌である。長さ4.0cm，基部幅18.1cm，基部厚み4.0mm，刃部幅19.7cm，刃部厚み1.0mm，重さ123ｇ。２は，鋤先である。長さ5.8cm，刃部幅8.5cm，厚み1.0mm～4.0mm，重さ75ｇ。３は，鋤先で

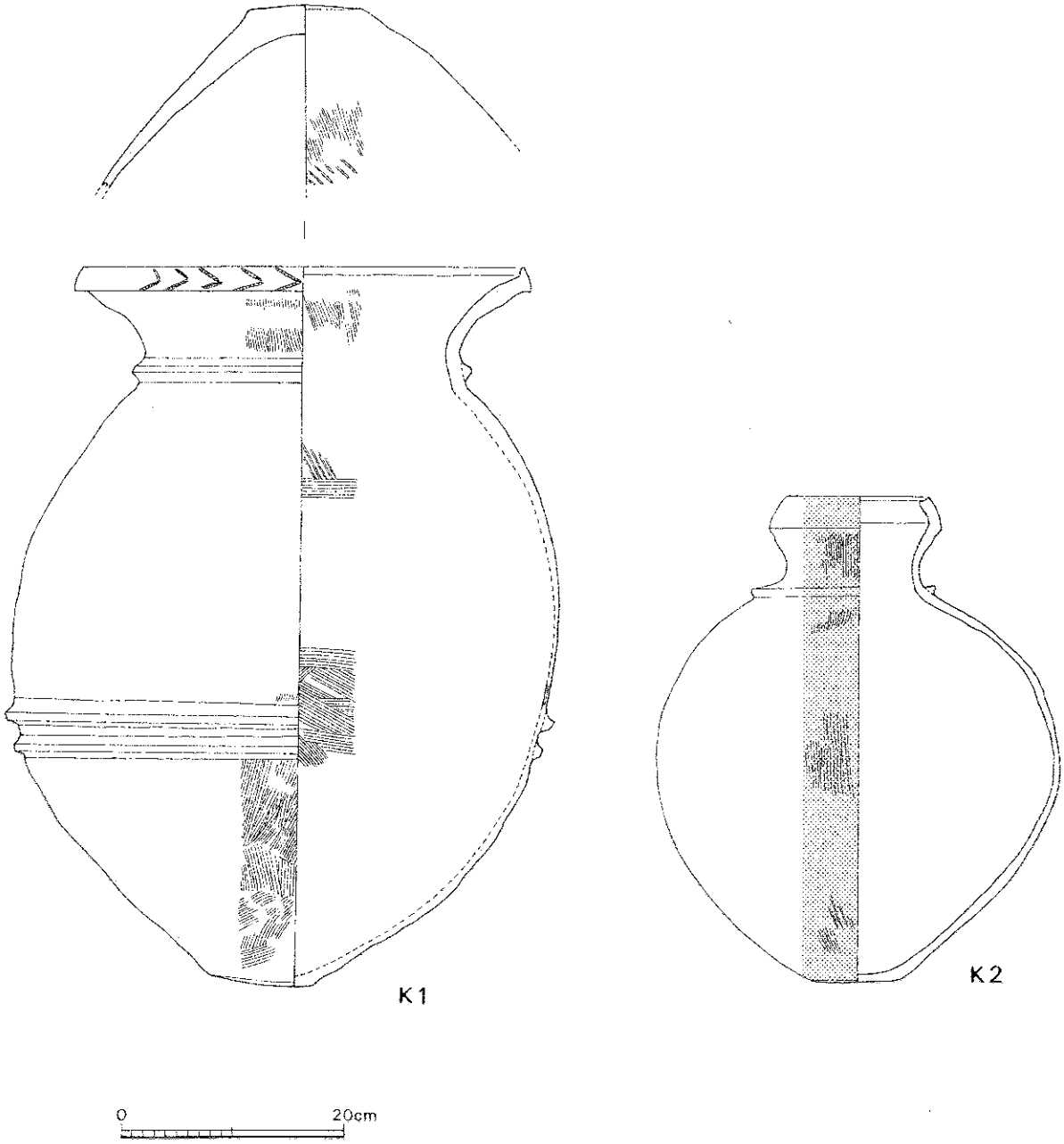



第46図　D区出土土器（1／4）

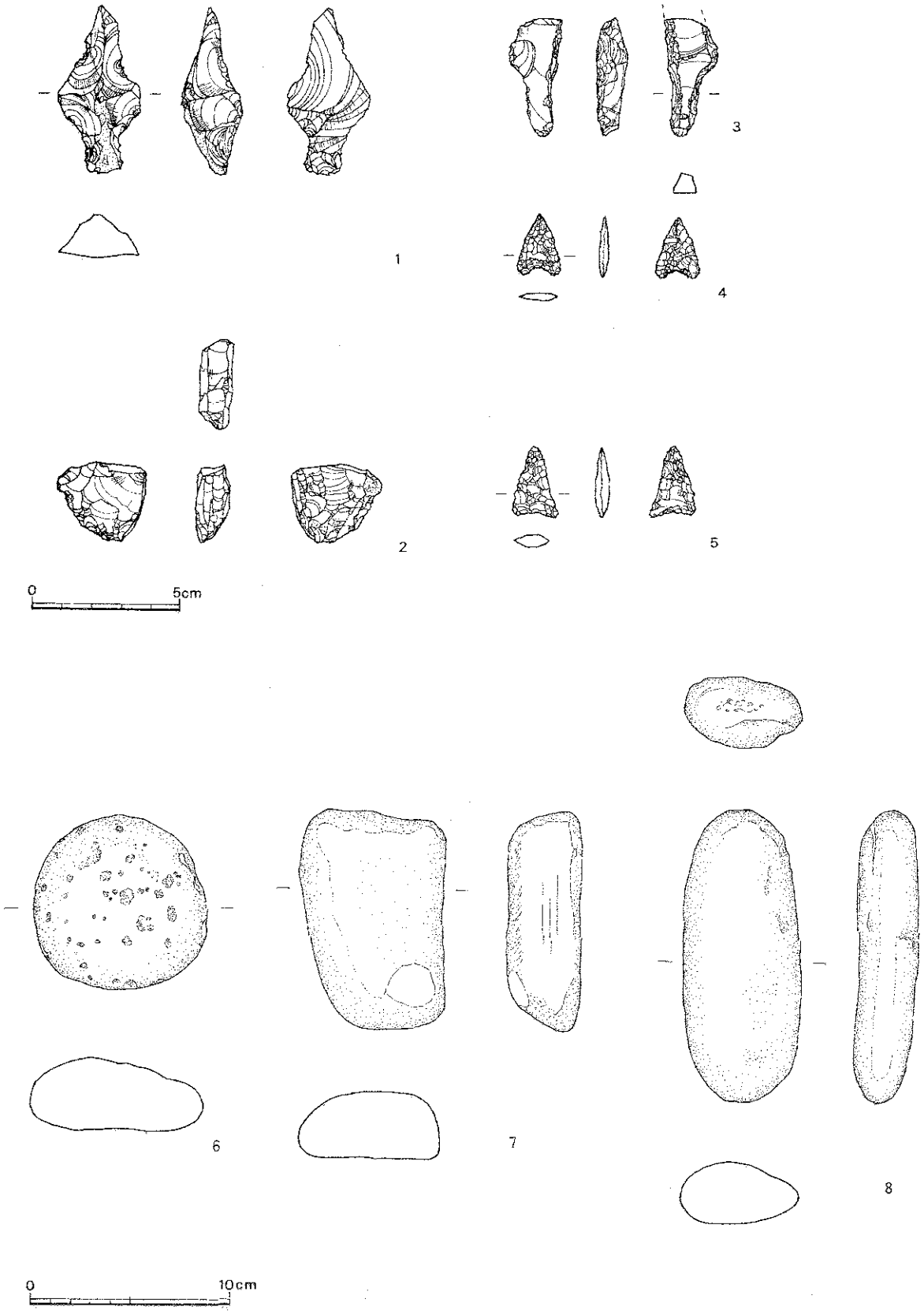
ある。基部，刃先部ともに欠損しており，折り返し部分のみ残る。現存長2.7cm，厚み1.0mm～3.0mm，重さ15.0g。1～3は，1号土壙墓から出土した。

**青銅器（第50図．PL21．22．29）**

1は，9号土壙から出土した後漢鏡の径20cmを測る長宣子孫銘内行花文鏡である。特徴をあげると，




第47図　D区出土甕棺（1／6）




第48図　出土石器（1／2・1／3）

・鈕座の四葉文の弁間に「子孫」の銘がみえ，「長宜子孫」銘と判断される。「子」「孫」の字形は，少し角張っており，「口」部が，菱形である。

・鈕座と連弧文の間にある圏帯は，圏帯のみである。

・連弧文は８弧である。

・連弧間文様は，全て円文のみ。

・雲雷文帯のなかで，渦文は二重以下の同心円，斜角線文は平行線。

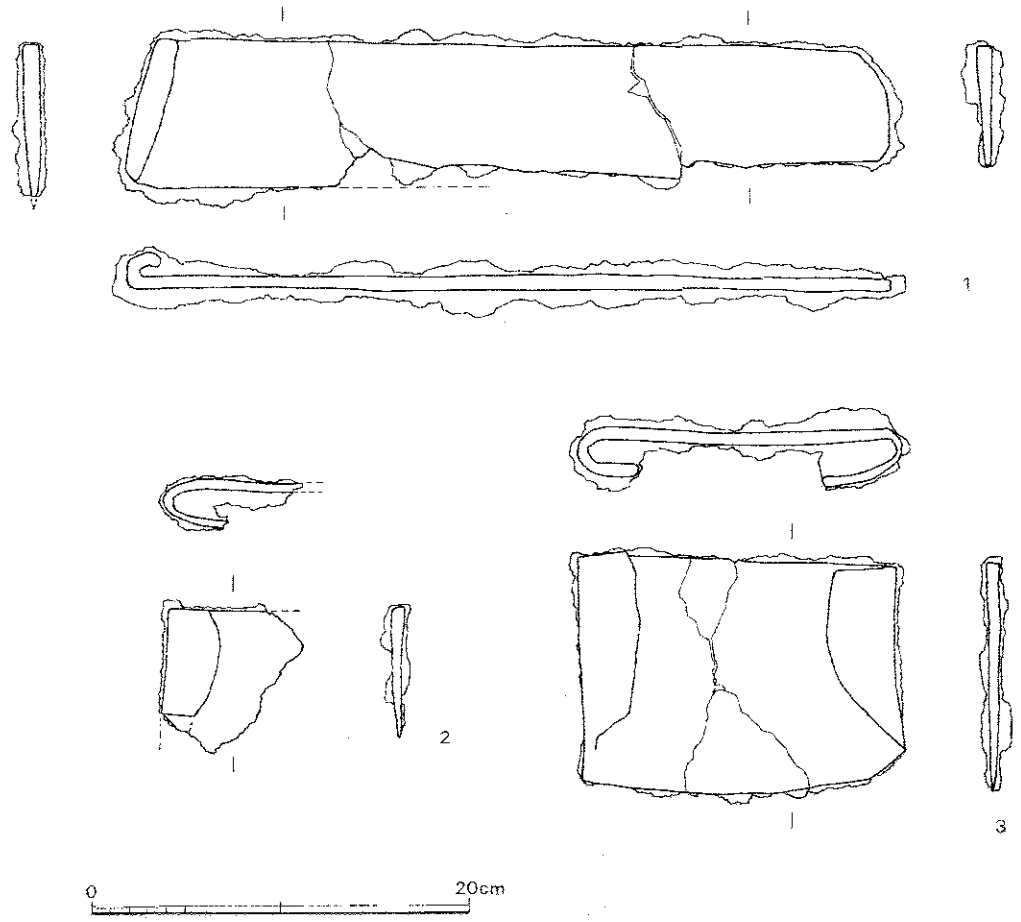
・雲雷文帯の形から櫛歯文の区分を考えると，まっすぐな粗い櫛歯文と考えられる。

以上の特徴により，岡村秀典氏の分類に従えば，「漢鏡Ⅴ期の四葉座Ⅳ式」の鏡[註2]と判断される。

２は，８号箱式石棺墓から出土した「小型仿製鏡」である。ほぼ完全な形で残っている。直径約7.6cm。重さ34.2ｇ。特徴をあげると，

・背文構成は鈕→内行花文帯→圏帯→櫛歯文帯→平縁となっている。

・内行花文帯を主文として，内行花文が圏帯に内接しており，弧線化，双線状で鋳出されている。




第49図　出土鉄器（１／４）

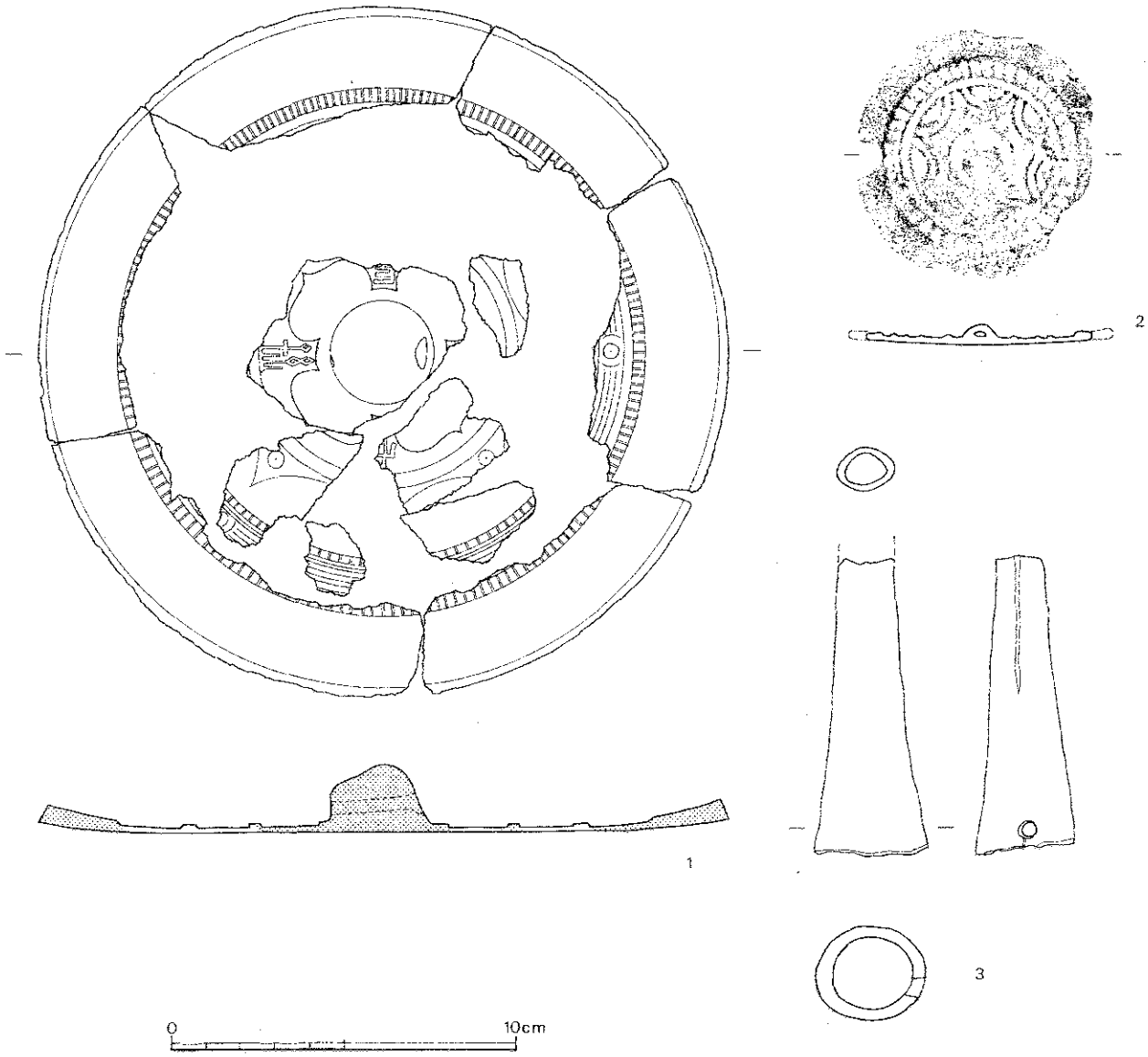
・平縁は幅広化していて，外に向かって傾斜傾向にある。

以上の特徴により，高倉洋彰氏の分類に従えば，弥生時代後期中頃から終末にかけて北部九州で製作された，「第Ⅱ型ｂ類」の鏡と判断(註3)される。平成９年度の車出遺跡からも同じ形式の完形の小型仿製鏡が出土している。

３は，筒形不明青銅器である。長さ8.4cm，径1.3～2.8cm，孔径9.0mm～2.3cm，重さ60.3ｇ。石突として使用された可能性も考えられる。

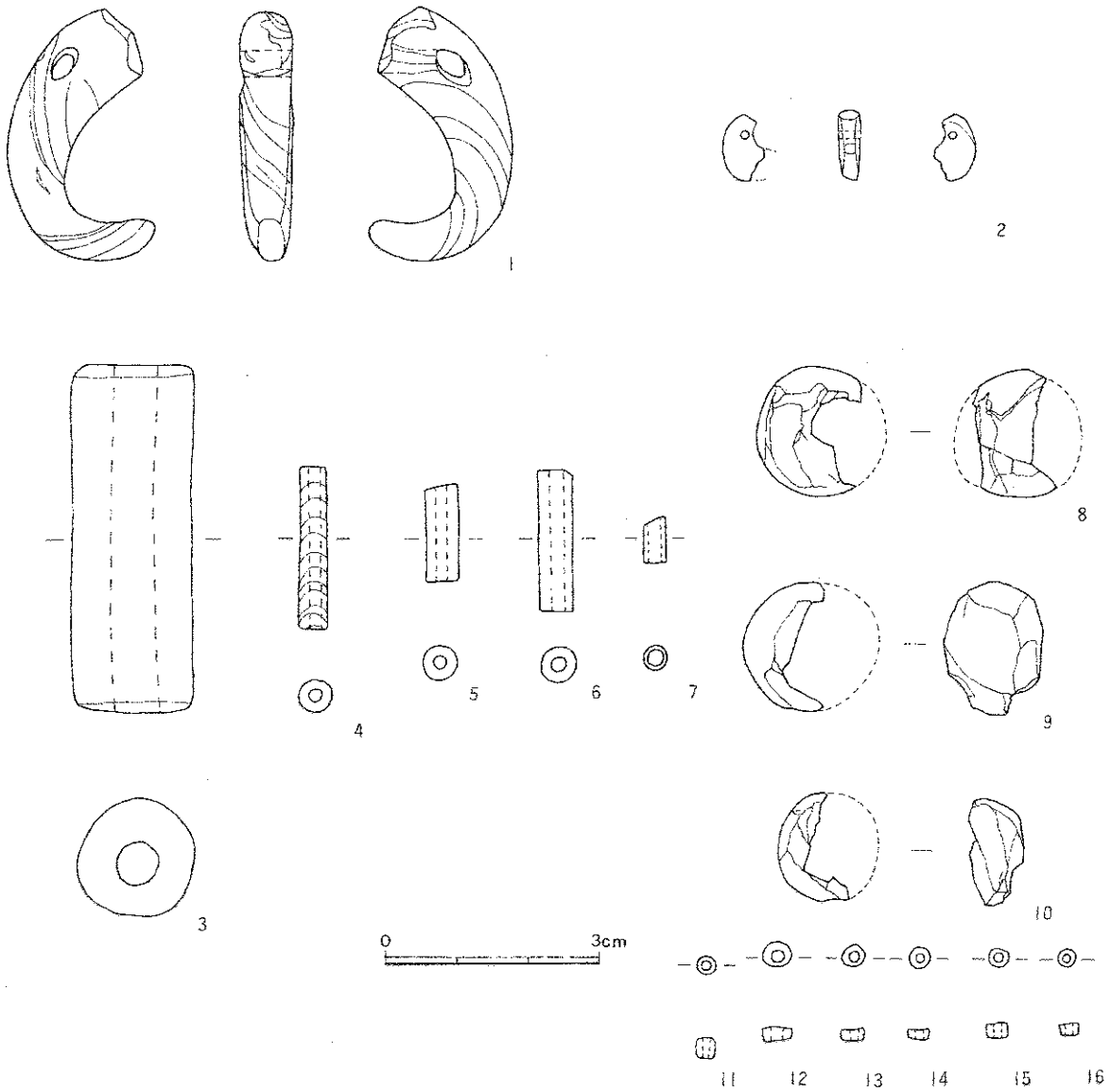
**④装飾品**（第51図）

１は，９号土壙から出土したガラス製勾玉である。頭部は，最初からこの状態であると思われる。まき技法によって作られている。頭径9.2mm，頭厚1.2cm，尾径5.7mm，尾厚5.8mm，穿孔径4.0mm，重さ

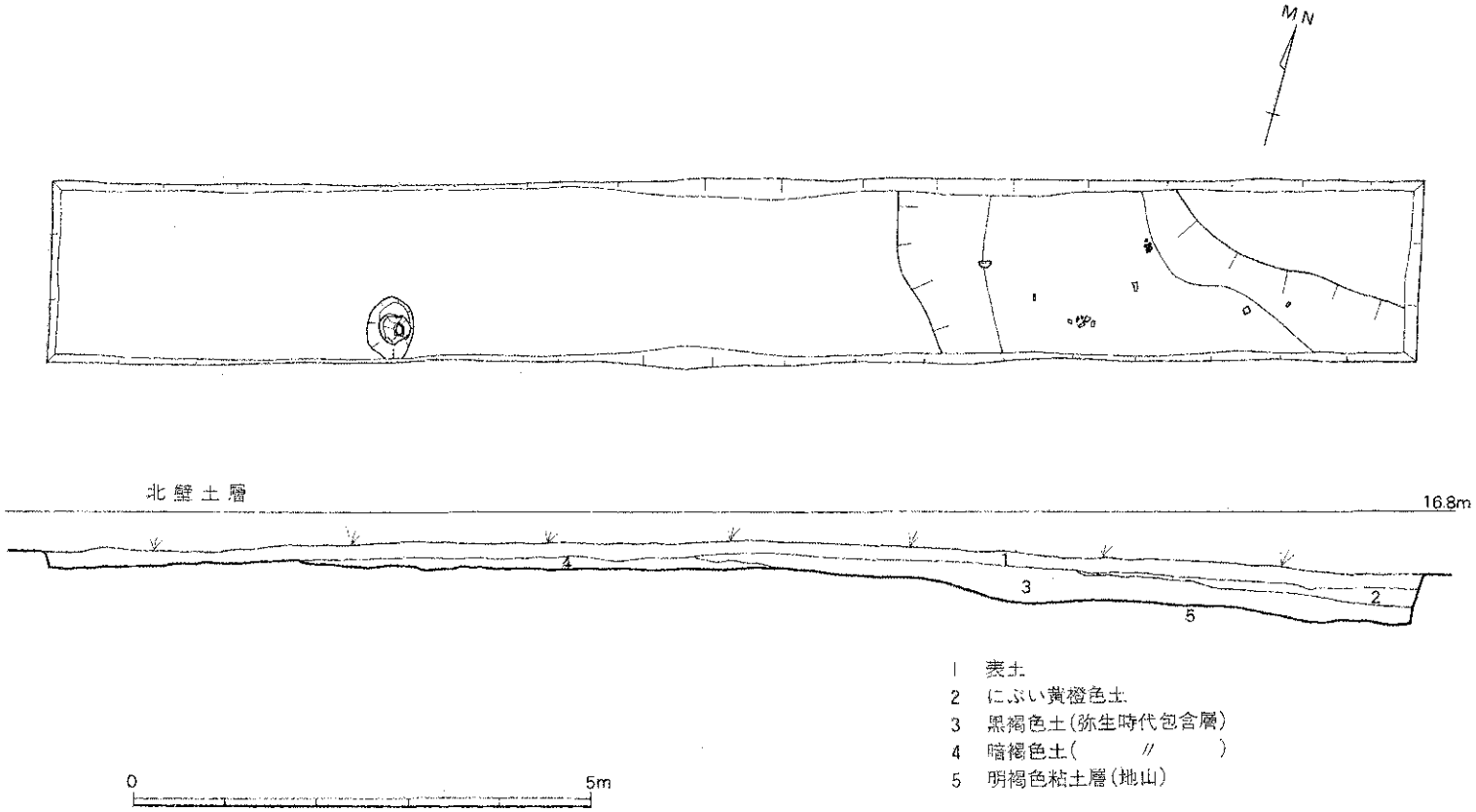



**第50図　出土青銅器（１／２）**

8.9g。2は，6号箱式石棺墓から出土した硬玉製勾玉である。頭径3.4mm，頭厚4.5mm，尾径2.7mm，穿孔径1.0mm，重さ0.5g。3～7は，碧玉製管玉である。3～6は，1層下部から出土，7は，6号箱式石棺墓からの出土である。3は，長さ4.9cm，径約1.6cm，孔径5.0mm，重さ31.1g。4は，長さ2.2cm，径4.0mm，孔径2.0mm，重さ0.9g。5は，長さ1.3cm，径5.0mm，孔径1.5mm，重さ0.6g。6は，長さ2.0cm，径5.0mm，孔径2.0mm，重さ1.1g。7は，長さ約6.0mm，径3.5mm，孔径1.5mm。3～6の色調は，明オリーブ灰色。7の色調は，灰色。8～10は，9号土壙から出土したガラス製丸玉である。8




第51図　出土装飾品（1／1）



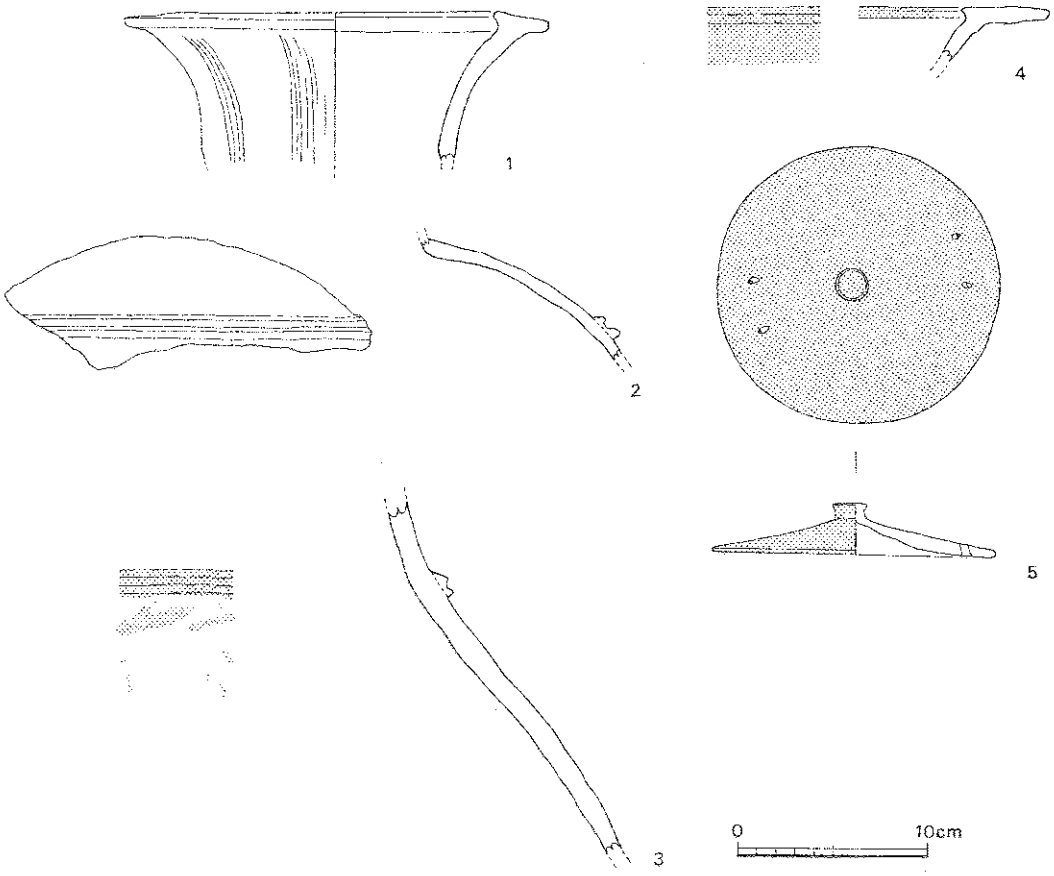

第52図　E区平面図・土層図（1／80）

は，直径約1.7㎜，重さ3.1ｇ。９は，直径約1.9㎝，重さ2.6ｇ。10は，直径約1.5㎝，重さ0.9ｇ。３点とも，穿孔はみあたらず，まき技法によって作られている。11～16は，ガラス製小玉である。11は１層下部から出土，12～16は，５号箱式石棺墓からの出土である。11は，径3.3㎜，厚み3.1㎜。色調は，暗青色である。12は，径3.5㎜，厚み2.1㎜。色調は，暗赤色。13は，径3.6㎜，厚み1.9㎜。色調は，暗赤色である。14は，径3.3㎜，厚み1.6㎜。色調は，暗赤色である。15は，径3.1㎜，厚み2.1㎜。色調は，暗青色である。16は，径3.1㎜，厚み2.2㎜。色調は，暗青色である。（西）

### (4) Ｅ区の遺構

①１号溝（第52図）

調査区の東側に，北から南東に走る形で検出された。上面幅3.1m～5.1m，下面幅1.7m～3.4m。遺物は，黒褐色土層の３層から出土している。丹塗の須玖Ⅱ式の蓋が１点，丹塗の甕で，M字の突帯を２条持っている胴部１点など，遺物32点のうち27点が，丹塗の須玖Ⅱ式の土器であるところから，この遺構は，弥生中期の溝であり，墓域にあるところから，排水路もしくは区画のための溝の可能性が考えられる。あるいは，何らかの祭祀行事の後に，土器をすてた遺構とも考えられる。




第53図　Ｅ・Ｇ区出土土器（１／４）

(5) E区の遺物

①土器（第53図）

1は，鋤先状口縁部を持つ須玖II式の長頸壺である。頸部から口縁部にかけて，朝顔形に開いている。口縁部は，やや垂れ下がり，上面には横ナデの跡がみられる。口縁端部は，平坦に収まっている。器表は，横方向にナデてあり，その後に縦方向にナデてある。胎土は，にぶい黄橙色をしており，石英・長石を含んでいる。2は，1号溝内から出土したM字突帯を持つ壺の胴部である。器表は，横方向にナデてあり，内側はスス痕がみられる。胎土は，にぶい黄橙色をしており，石英・長石を含んでいる。（西）

(6) F区の遺構

①箱式石棺墓（第54図．PL26．27）

1号箱式石棺墓

調査区の北東部に検出された。調査区の拡幅を行っていないために正確な寸法は不明であるが，長軸内法0.75mを図る。石棺材が，3点ほど検出された。

②甕棺墓（第54図．PL27）

1号甕棺墓

調査区の南東部に検出された。高三潴式の甕を上甕，下甕とする合口甕棺墓である。基軸は，磁北より西に111°傾いている。下甕の胴下半部に穿孔が1カ所みられる。

(7) F区の遺物

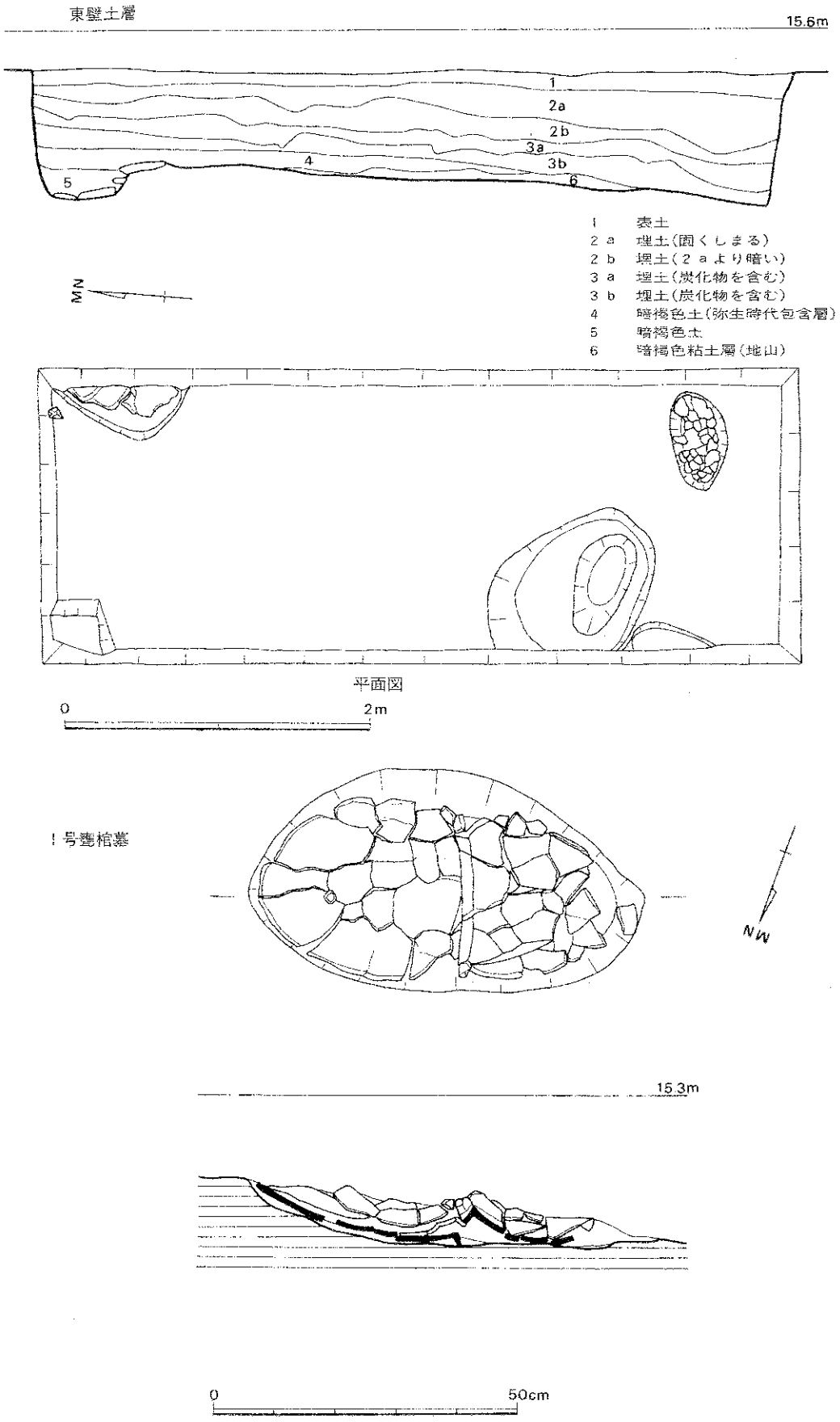
①土器（第55図）

1は，弥生時代後期の前葉から中葉にかけての甕である。上甕は，風化しているが，体下半部には，ハケ目が少し残り，ススが付着している。口縁部は，外反している。口縁端部は，肥厚しており，平坦に収まっている。胎土は，にぶい赤褐色をしており，石英・長石・雲母を含んでいる。下甕は，風化しているが，器表にススが付着している。全体的にハケ目がみられる。口縁部は，外湾しており，口縁端部は，やや丸く収まっている。胎土は，にぶい赤褐色をしており，石英・長石・雲母・金雲母・角閃石が含まれている。胴部やや下寄りに，焼成後の穿孔が1カ所みられる。

(8) G区の遺物

①土器（第53図）

3は，M字の突帯を持つ丹塗の壺の体上半部である。器肉は厚く，器表は風化しているが，横ナデの跡がみられる。頸部には，朱が残っている。胎土は，にぶい橙色をしており，石英・長石を大量に含んでいる。4は，弥生時代中期中葉の丹塗の鋤先状口縁を持つ高坏である。口縁端部は，丸く収まる。口縁の上面には，横ナデの跡がみられ，器表には丹が残る。胎土は，にぶい黄橙色であり，石英・長石・金雲母が含まれる。5は，丹塗の蓋である。焼成前の小さな穿孔が，2カ所あり，対になっている。直径約1.5cmの円形のつまみがついている。胎土は，橙色をしており，石英・長石・金雲母を含んでいる。（西）

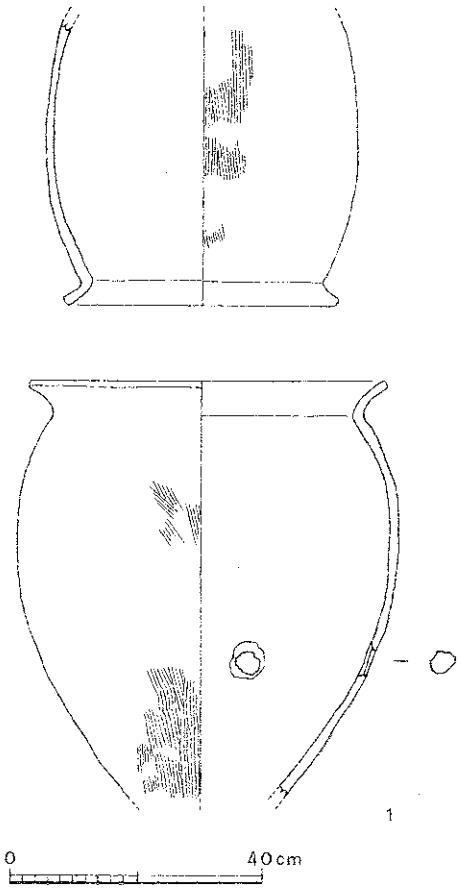



第54図　F区土層図・平面図・甕棺墓実測図（1／40・1／40・1／10）

註 1　『原の辻遺跡』　長崎県教育委員会　1978

2　岡村秀典　「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告　第55集』　1993　書収

3　高倉洋彰　「弥生時代の小形仿製鏡」『考古学雑誌』第70巻第3号　1985
『日本金属器出現期の研究』　学生社　1990　書収




第55図　F区甕棺墓実測図（1／6）

### (9) 小　結

今回の調査により，箱式石棺墓13基，石蓋土壙墓５基，土壙墓１基，土壙９基，甕棺墓３基，集石遺構４基，溝２条を確認した。また，土器5,200点，石器38点，陶器311点の出土であった。今回の調査の成果としては，昭和52年度の調査で確認された墓域の具体的な確認ができたことである。そこで，検出された遺構と９号土壙から出土した遺物についての分析を試みたい。

①遺構（第56図）

**箱式石棺墓**

まず，頭位方向であるが，12基中10基は，南方向であった。２基は，北方向である。等高線を調べると，ほぼ，等高線に沿った形で埋葬されていたので，地形に応じて，埋葬されていたものと思われる。次に，棺身の長軸内法と短軸内法の割合（長軸÷短軸）を調べてみた。すると，12基中２基の石棺墓は，長軸は，短軸の４倍未満であったため，比較的寸詰まりの石棺墓として（Ⅰ）と呼ぶことにした。（Ⅰ）のうち，１基の石棺墓は，棺身部内法が長方形であり，（Ⅰａ），残りの１基は，長台形状の棺身部内法であり（Ⅰｂ）とした。残りの10基は，棺身部が比較的長く，棺身部内法が長方形の石棺墓を（Ⅱ）と呼ぶこととした。そのうち，５号石棺墓の石材の上に１号石棺墓の石材がのっており，このことから（Ⅰ）は，（Ⅱ）よりも古い時代の石棺群と考えられるのではないか。また，７号石棺墓からは，弥生時代後期後半の小形仿製鏡が出土しているので，（Ⅱ）は，弥生時代後期後半の石棺群と考えられるのではないだろうか。この区分に従って整理を行うと，

（Ⅰａ）　棺身部が寸詰まりで，棺身部内法が長方形の石棺墓

６号石棺墓

（Ⅰｂ）　棺身部が寸詰まりで，棺身部内法が長台形状の石棺墓

９号石棺墓

（Ⅱ）　棺身部が比較的長く，棺身部内法が長方形の石棺墓

１号石棺墓・２号石棺墓・３号石棺墓・４号石棺墓・５号石棺墓

７号石棺墓・８号石棺墓・10号石棺墓・11号石棺墓・12号石棺墓

この分類に従って石棺墓の主軸方位をみていくと，（Ⅰａ）は，基軸からの角度は，磁北から西に35°となっている。（Ⅰｂ）は，磁北から東に135°の傾きになっている。（Ⅱ）は，基軸からの角度は，磁北から東に向かって132°から177°であり，45°の範囲の中に埋葬されていることがわかる。ただし，10号石棺墓のみ，基軸からの角度が，磁北から東に20°となっている。石棺材についてみてみると，厚めの蓋石を使用しているもの（２号石棺墓・３号石棺墓・７号石棺墓・10号石棺墓）と板状の蓋石を使用しているもの（４号石棺墓・５号石棺墓・８号石棺墓）がある。これは，上記の分類とは合致しないが，このことは，石棺墓を作る際には，石棺材そのものにこだわらないことを示していると考えられる。なお，Ｆ区検出の石棺墓は，完掘していないために分析対象から除外している。

**石蓋土壙墓**

まず，頭位方向であるが，５基中３基は南方向で，残りの２基は北方向である。やはり，石棺墓同

様に等高線に沿った形で埋葬されていることがわかる。次に，主軸方位である。磁北より東へ132°から150°の範囲に埋葬されている。ただし，1号石蓋土壙墓と2号石蓋土壙墓は，基軸からの角度は，それぞれ磁北から西に17°，25°となっている。弥生時代終末期の小壺が，3号石蓋土壙墓から出土しており，主軸方位もおおよそ同一方向を示しているところから，箱式石棺墓（II）と，この石蓋土壙墓群は同時期と考えられる。石棺材については，1号石蓋土壙墓・2号石蓋土壙墓・3号石蓋土壙墓に一般的に石蓋土壙墓では使用されない小口材が使用されているが，これは極めて珍しく，特殊な例と考えられる。

**土壙墓**

主軸方位は，磁北より東に158°の方向で，石蓋土壙墓の主軸方位と同一方向を示しており，やはり，石蓋土壙墓群の時代と同時期と考えられる。これは，弥生時代終末期の小鉢が出土しているところからもいえる。礫が，多く投げ込まれた状態もみられ，また，5mほど南方には集石遺構も検出されているので，祭祀的遺構の可能性も考えられる。

**土壙**

9基の土壙が検出されたが，9号土壙のみ遺物の出土がみられた。弥生時代中期から後期にかけての土器・石器・金属器がなげこまれており，石棺墓との切り合い関係からみて，遺構が，弥生時代のものとはいえない。

**甕棺墓**

D区，F区計3基検出されている。D区1号甕棺墓・F区1号甕棺墓は，合口甕棺墓，D区2号甕棺墓は，単式甕棺墓である。まず，主軸方位をみてみると，D区1号甕棺墓は，磁北より東に50°，F区1号甕棺墓は，磁北より西に111°である。2基の甕棺墓の時期は，D区1号甕棺墓が弥生時代後期後葉，F区1号甕棺墓が弥生時代後期前葉となっているが，箱式石棺墓（II）の主軸方位とは，合致しない。なお，D区2号甕棺墓は，直立しているために，主軸方位はでていない。

**集石遺構**

今回，8号石棺墓の四方を取り囲む形で検出されたが，おそらく，8号石棺墓の被葬者を特別な人として扱うために，石棺墓の周囲に盛土をして，集石を行ったのだと考えられる。その際に，8号石棺墓を中心に，等間隔で石をおいていったと想定される。そこで，1号集石と3号集石との距離を計ると，約5mであった。2号集石から5m計ると，5号石蓋土壙墓も範囲内になってくるが，これは，出土遺物もなく，また，5号石蓋土壙墓の北側には集石遺構も検出されていないため，5号石蓋土壙墓については，確証はない。

**溝**

今回，D区に1条，E区に1条検出された。D区の溝は，検出した範囲が狭いために，推測であるが，D区の墓域の区画溝とは考えられないだろうか。また，E区の溝については，溝内より丹塗土器が出土した。これは，祭祀に伴い，溝内に投げいれたとも考えられる。また，溝の方向が，北西から南東に走っている。これも推測の域を出ないが，D区の西側に広がる一帯にもう一つ墓域があり，そ

の墓域を囲んでいると考えられないだろうか。どちらの溝についても，今後の調査に期待したいところである。

②9号土壙出土遺物

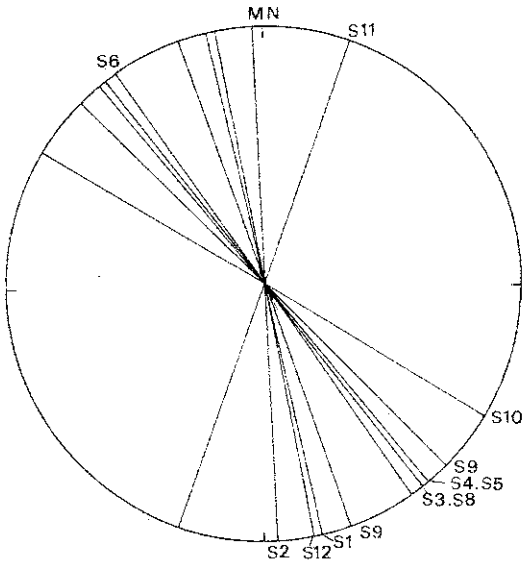
9号土壙からは，弥生時代中期から終末期までの土器が出土している。D区内の墓域の時期設定を，（I）は，弥生時代後期の前半から中頃，（II）を弥生時代後期後半から終末期に考えているが，そうすると，なぜ，弥生時代中期の土器が出土したのかが問題となってくる。そこで，遺構の検出状況をみると，棺床に朱が残る8号箱式石棺墓の被葬者が中心と思われる。そうすると，それ以外に，9号土壙から出土した長宜子孫内行花文鏡などの後漢鏡を持つような被葬者が，D区内にいるとは考えられにくい。その点から，9号土壙の出土遺物は，原ノ久保A地区のほかの場所から持ってきたもの，あるいは，捨てられたものと考えられないだろうか。

また，今回出土した長宜子孫内行花文鏡は，直径20cmと大形鏡である。大形鏡を持てる首長の存在が，確実に考えられる。石突とも考えられる筒形不明青銅器も，後漢から鏡と一緒に入ってきた可能性もあり，首長の存在を確実なものにできるのではないだろうか。

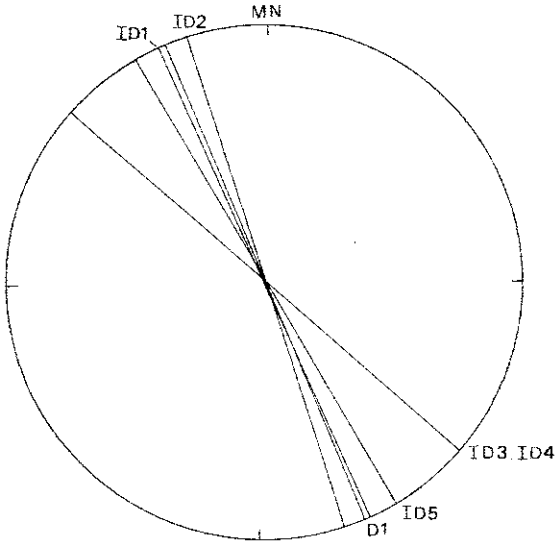
従来，原の久保A地区は，弥生時代後期の墓域といわれてきた。今回の調査においても，D区の石棺墓，石蓋土壙墓，土壙墓の時期は，弥生時代の後期に属した。しかし，E区における溝の検出は，これを区画溝ととらえた場合であるが，溝内に須玖II式土器が検出しており，墓域が，弥生時代中期後半から存在したと考える資料となりえないだろうか。

以上が原ノ久保A地区の調査結果であるが，本人の力量不足もあり，分析も不十分で推測の域を出ない部分も多い。今後の調査で補填していただくことを願って，本報告を終わりたい。

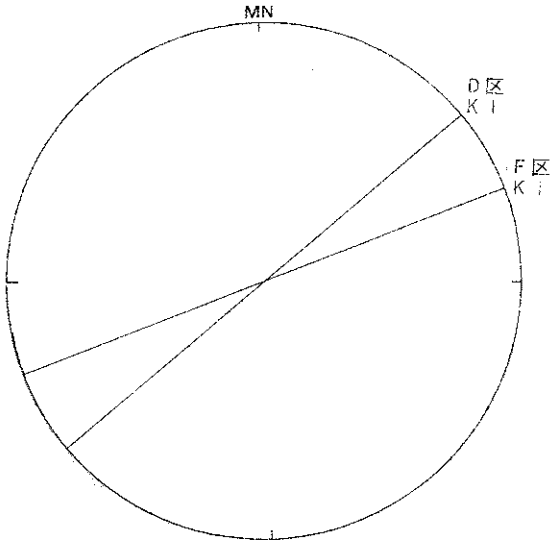
最後になりましたが，発掘調査から整理作業まで多くの方々のご援助，ご協力により，今回の調査報告をすることができました。心より感謝申し上げます。また，出土した筒形不明青銅器に関しましては，九州大学西谷正先生のご教示とご指導を仰ぎました。ここに，お礼申し上げます。　（西）



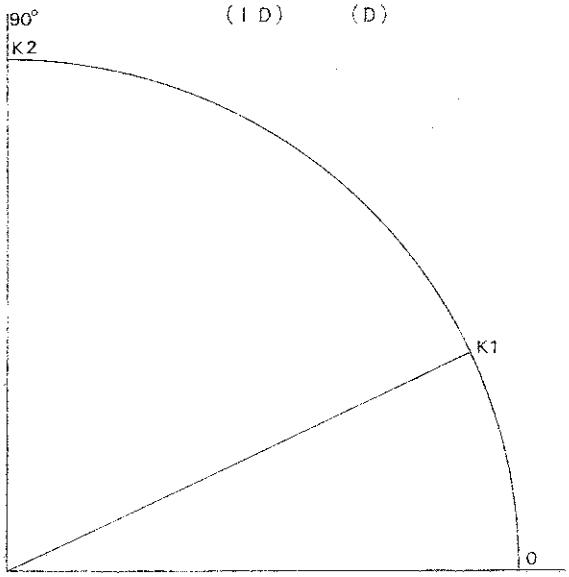

D区 石棺墓主軸方位
（S）




D区 石蓋土壙墓・土壙墓主軸方位
（ID）　（D）

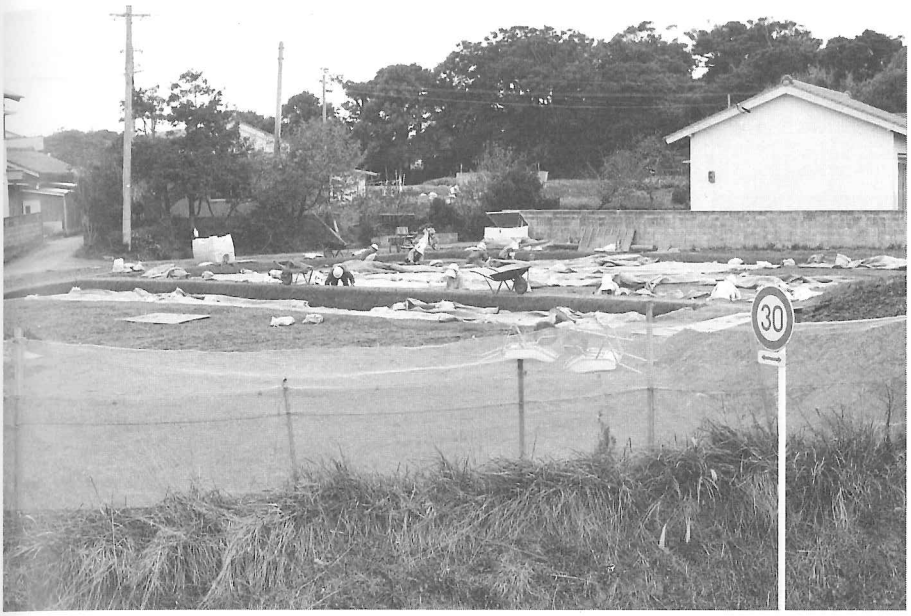



D区・F区 甕棺墓主軸方位

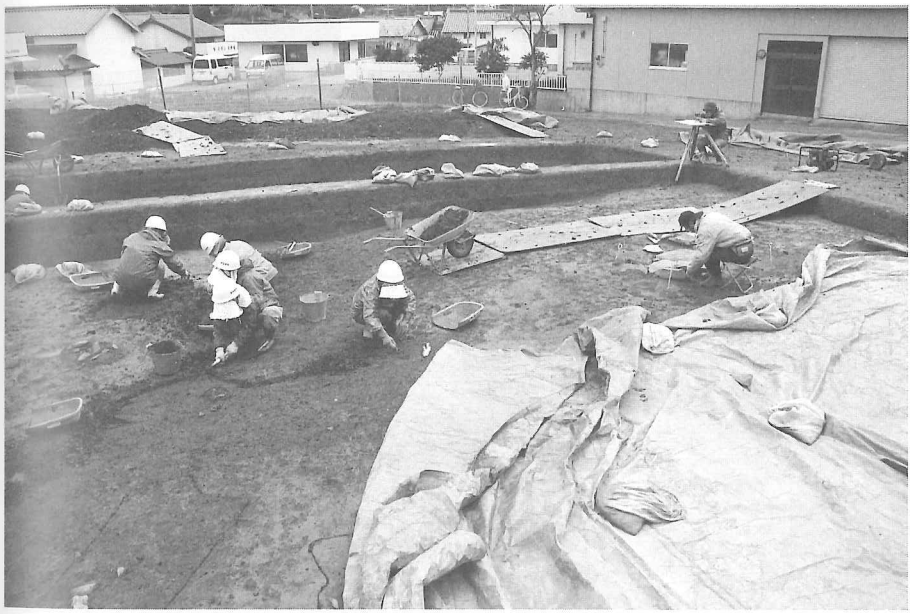



D区 甕棺墓埋置角度

**第56図　石棺墓・石蓋土壙墓・甕棺墓主軸方位・埋置角度（ＭＮは磁北）**

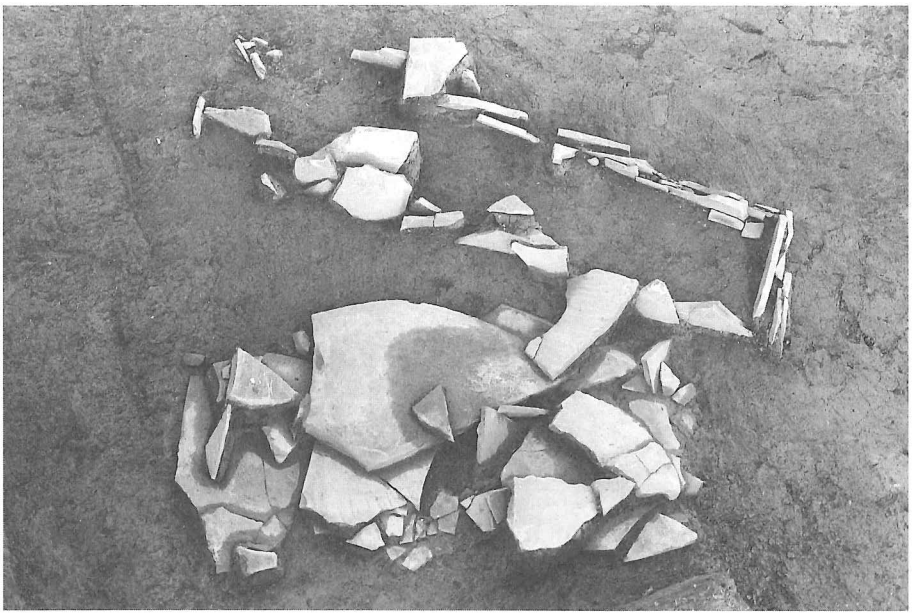



調査区近景
（D区，東から）

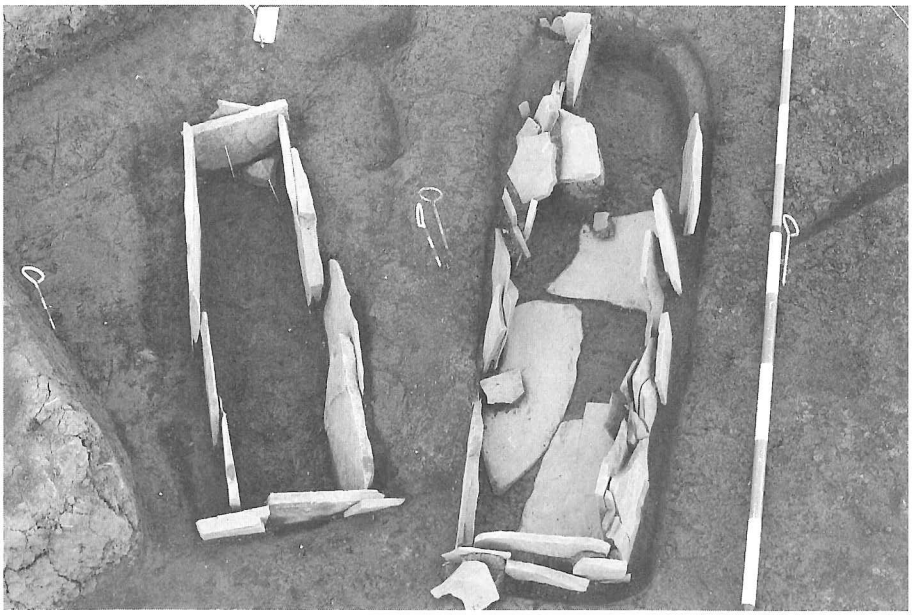


作業風景
（D区）

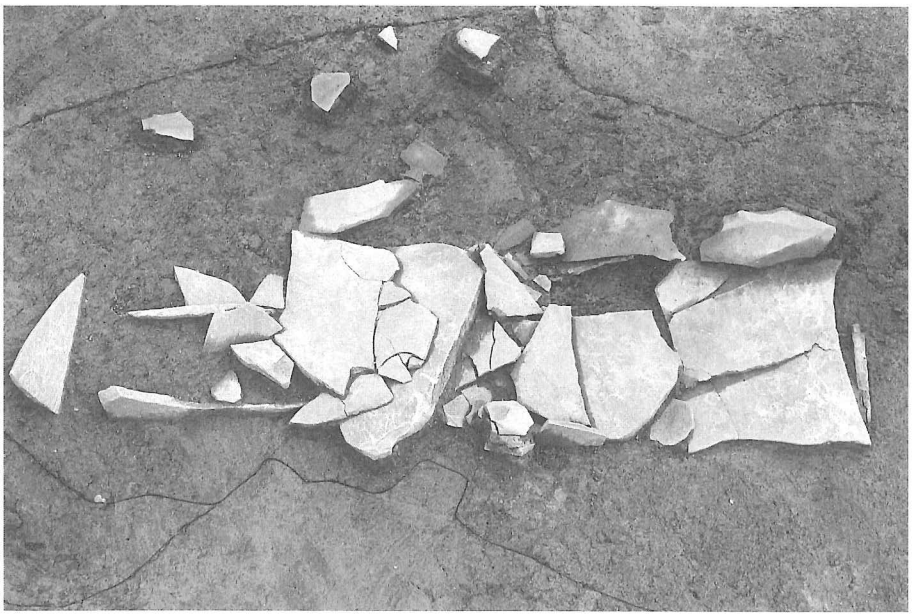
作業風景
（D区）



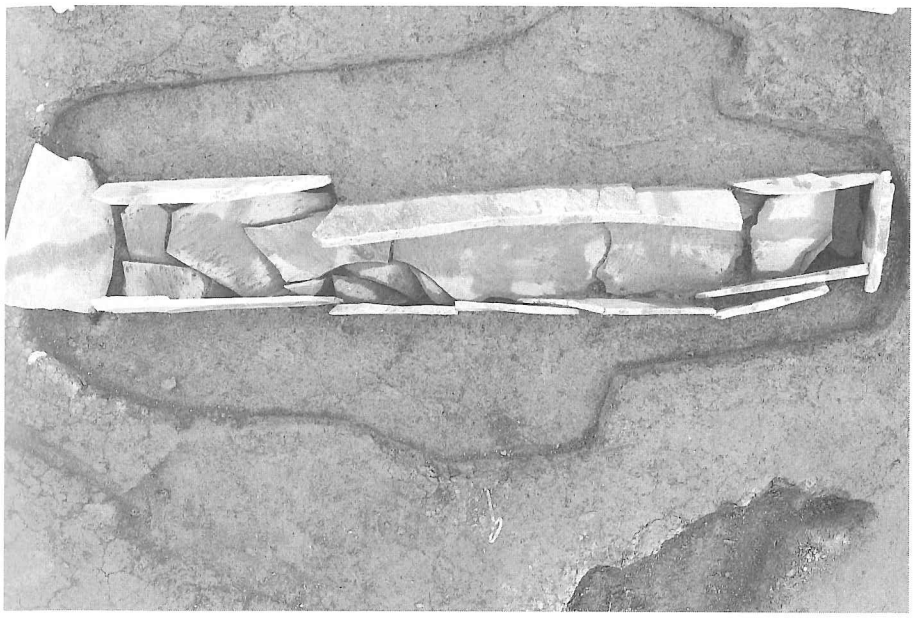
1号石棺墓（上）
6号石棺墓（下）
（南西から）



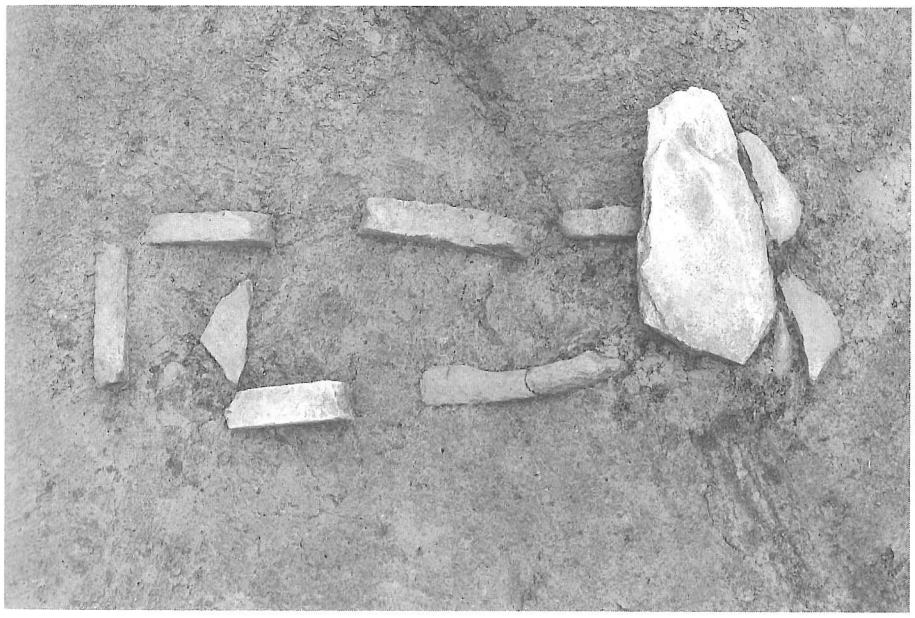
1号石棺墓（左）
6号石棺墓（右）
（南から）



2号石棺墓
（西から）

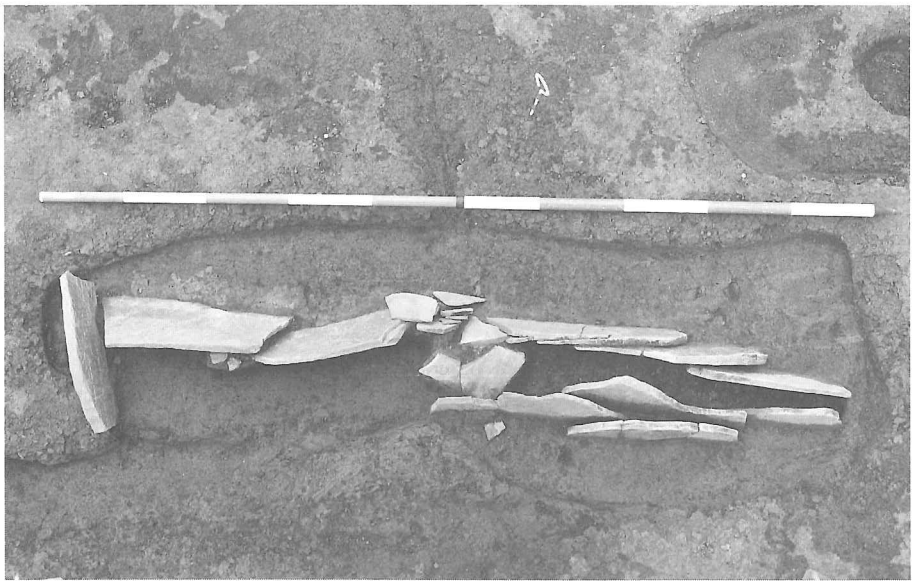


2号石棺
(西から)

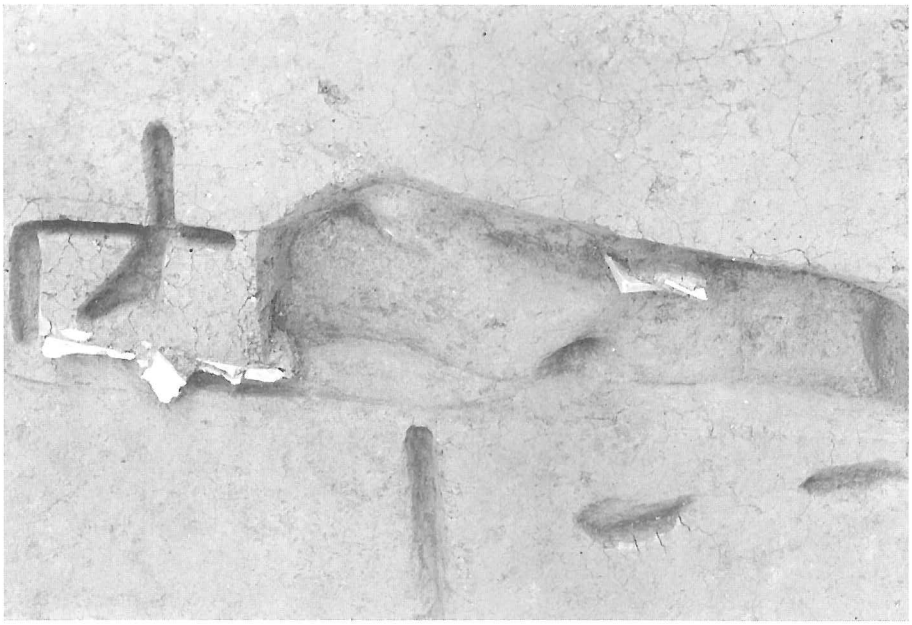


3号石棺墓
(南西から)

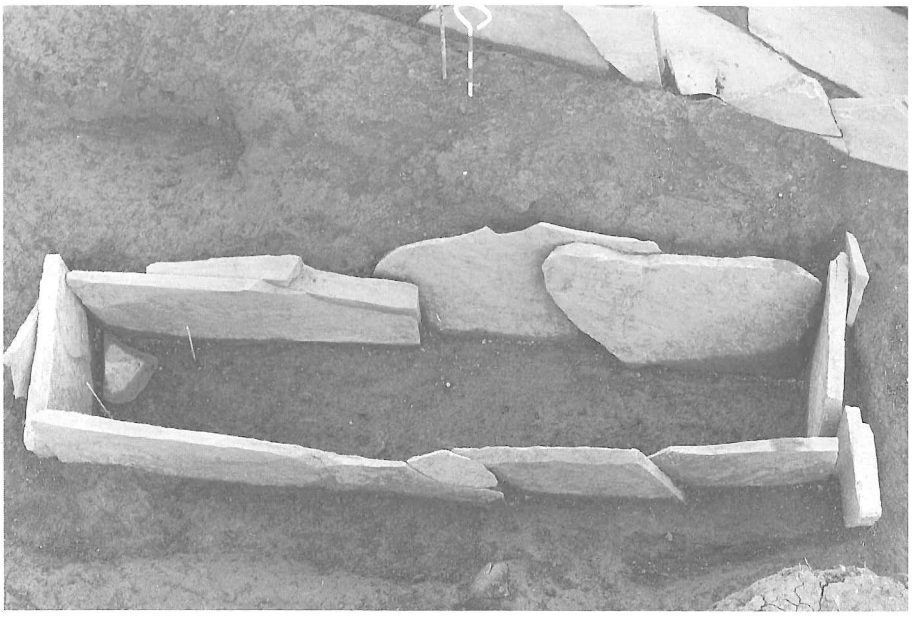
4号石棺墓
(南西から)



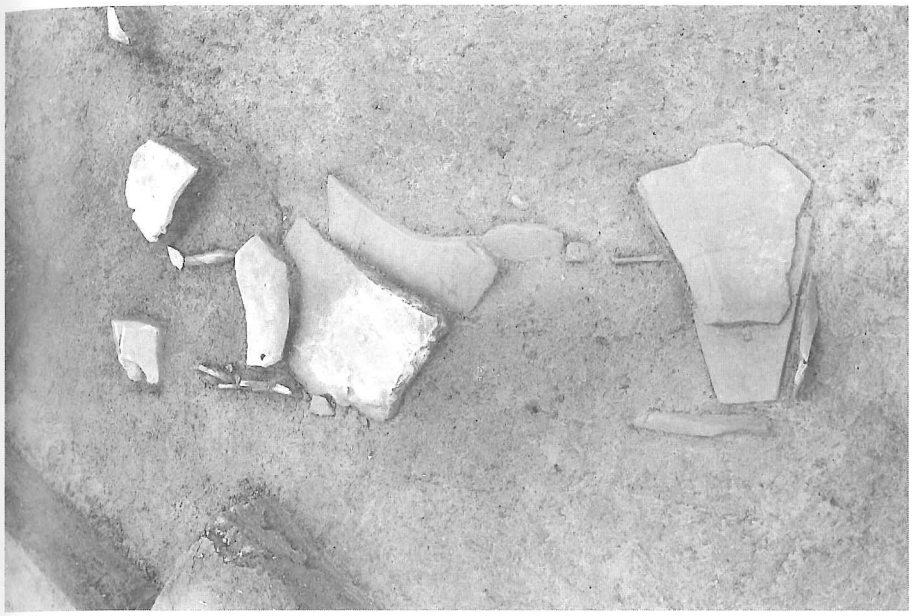
4 号石棺墓
（南西から）



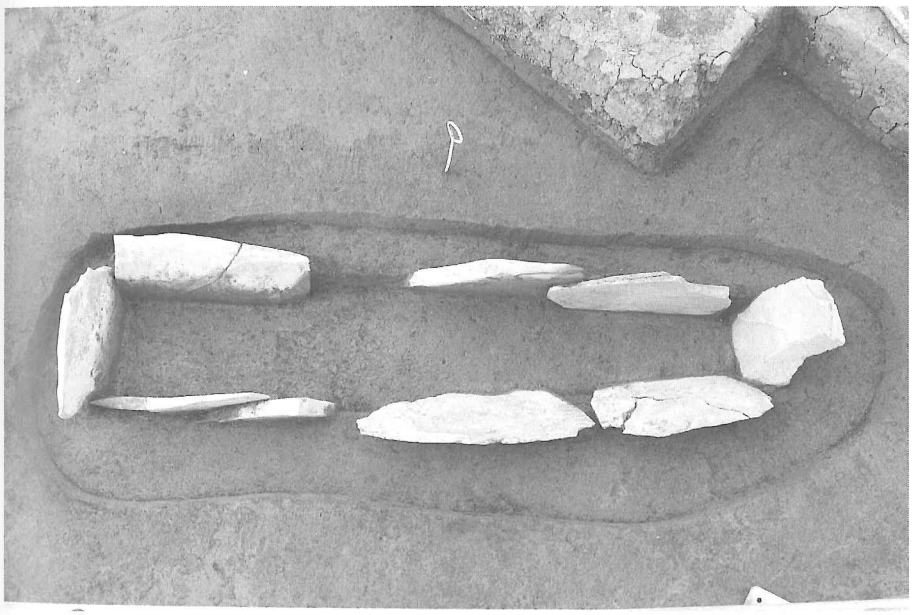
5 号石棺墓
（南西から）



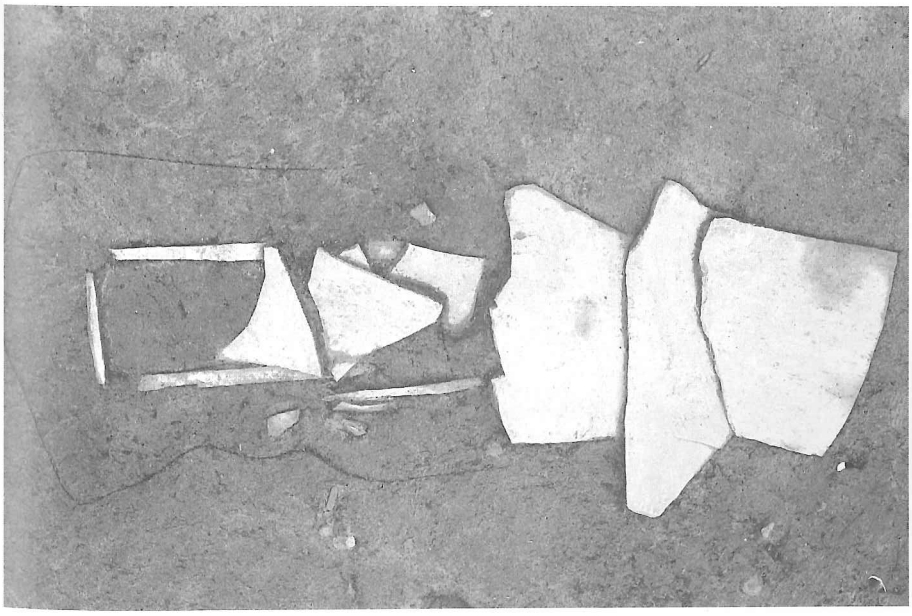
6 号石棺墓
（南西から）



7号石棺墓
（南西から）



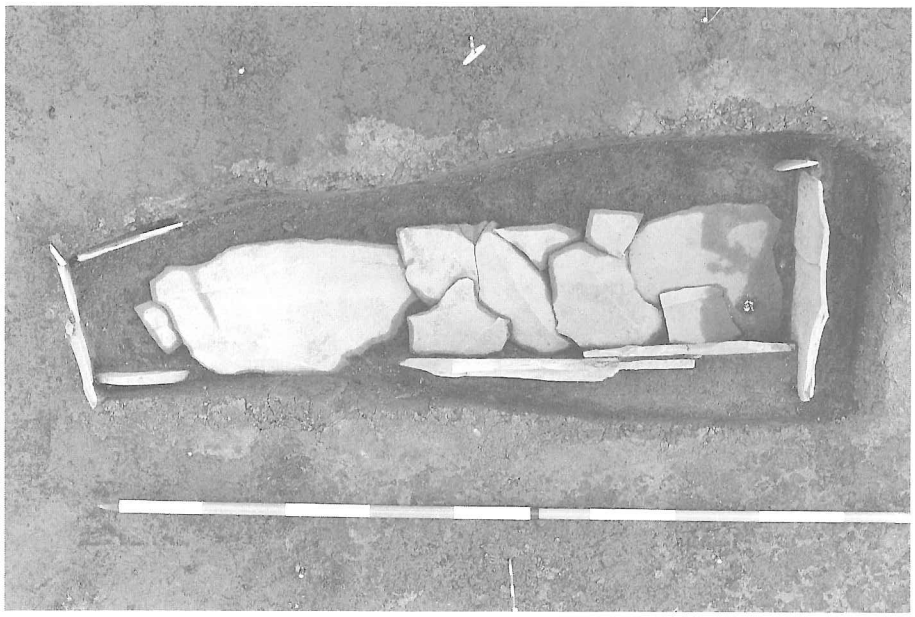
7号石棺墓
（北東から）



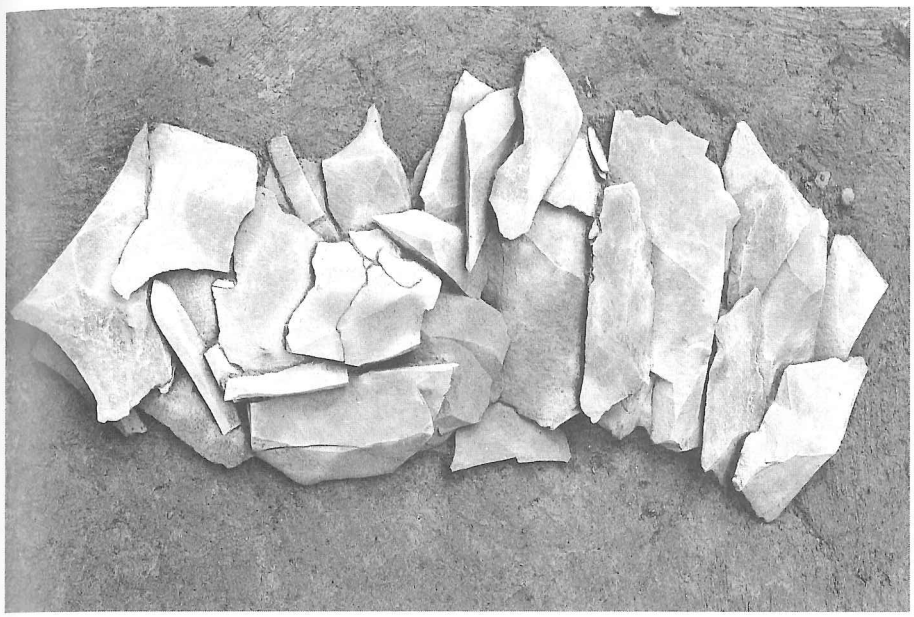
8号石棺墓
（北東から）

8 号石棺墓
（南西から）

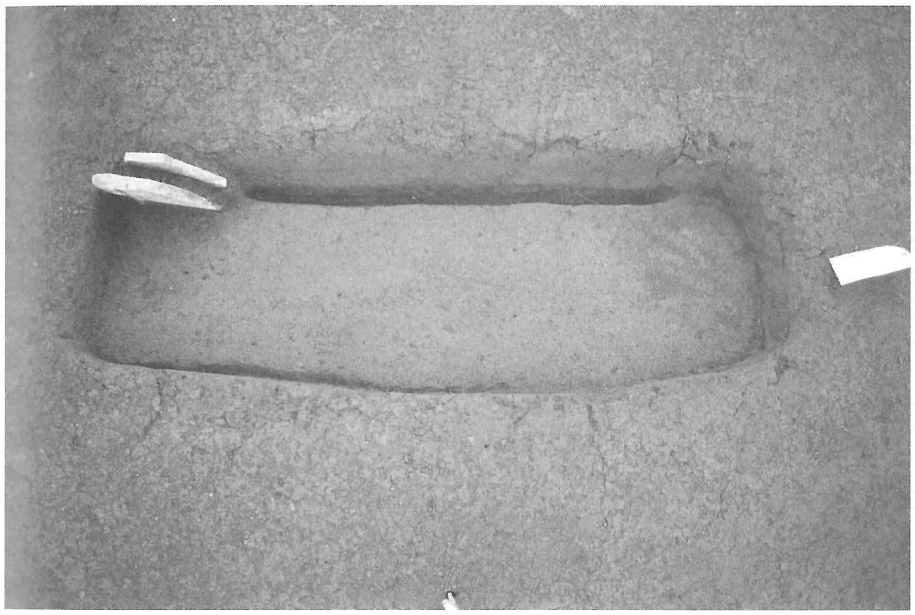
8 号石棺墓
小形仿製鏡出土状況



9 号石棺墓
（南西から）



10号石棺墓
（北から）



11号石棺墓
（南東から）

12号石棺墓
（南から）

12号石棺墓
（南から）

12号石棺墓
（南から）

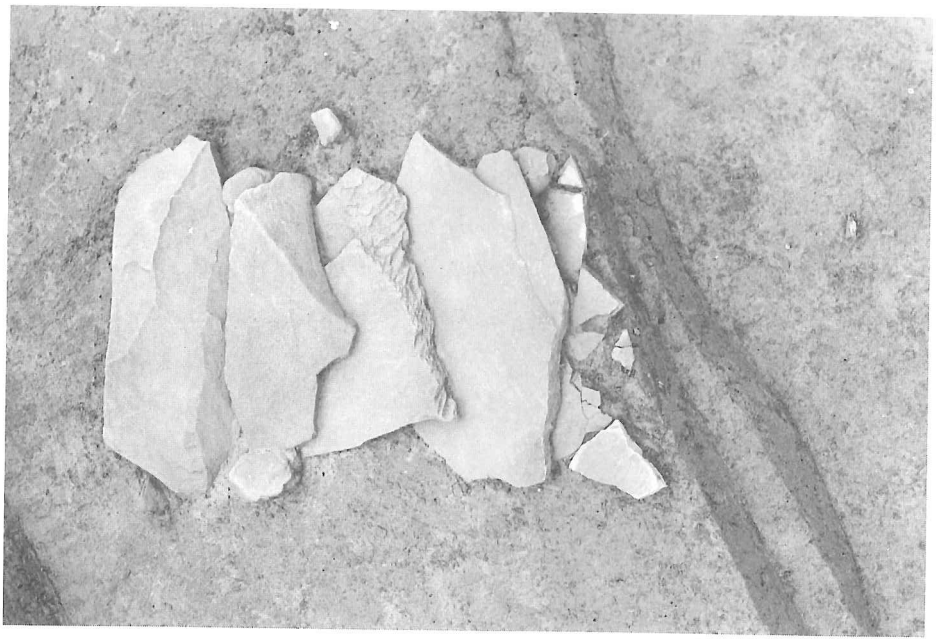
9号土壙
（南から）

9号土壙
碧玉製管玉
出土状況

9号土壙
鏡片出土状況

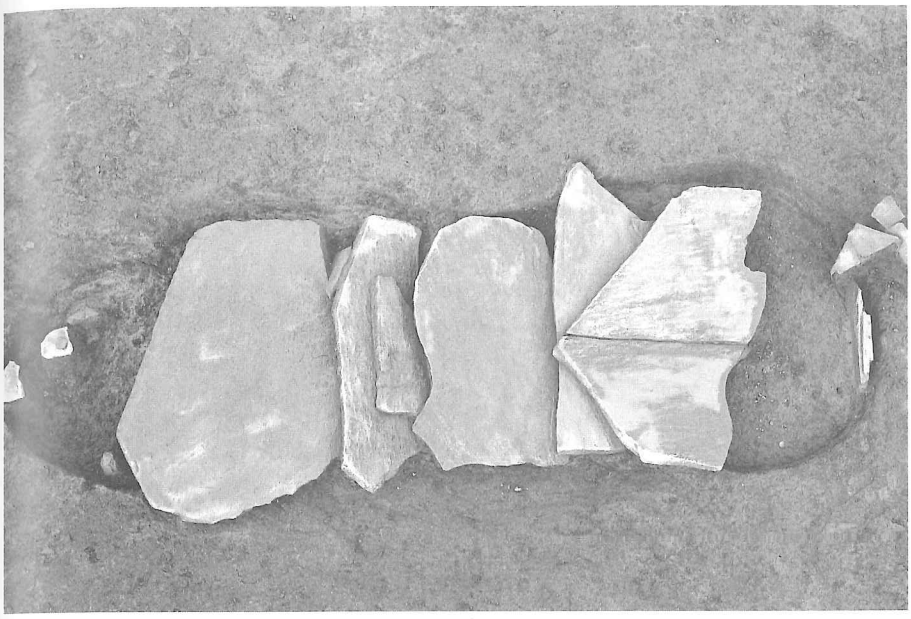
9号土壙
鏡片出土状況

9号土壙
筒形不明青銅器
出土状況



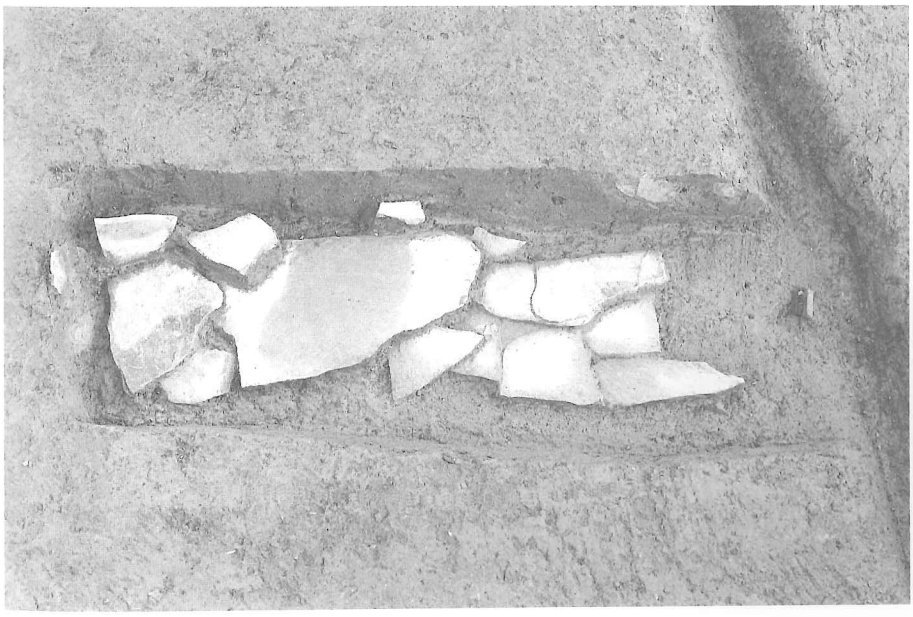
1号石蓋土壙墓
(南西から)

2号石蓋土壙墓
(南西から)

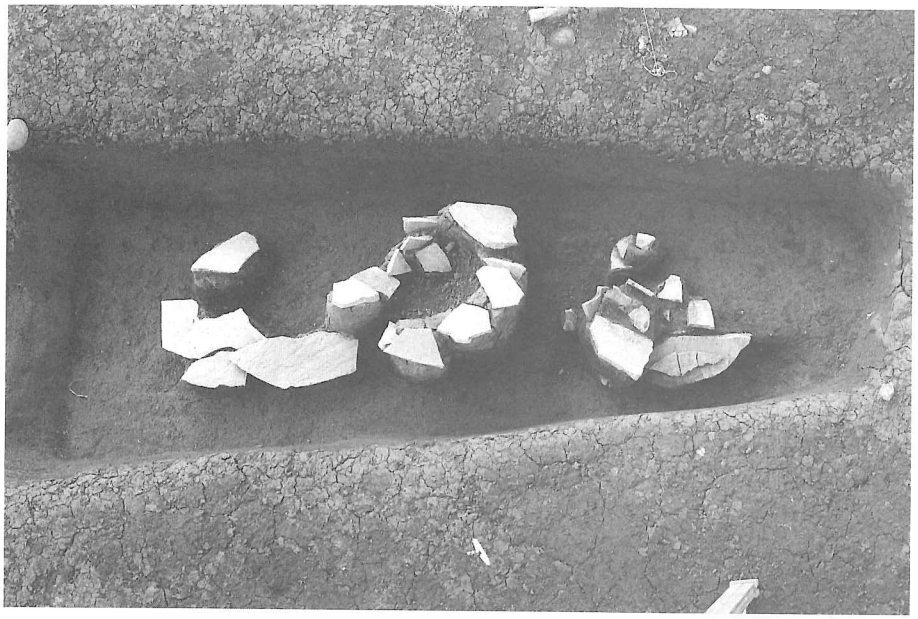


3 号石蓋土壙墓
(南西から)

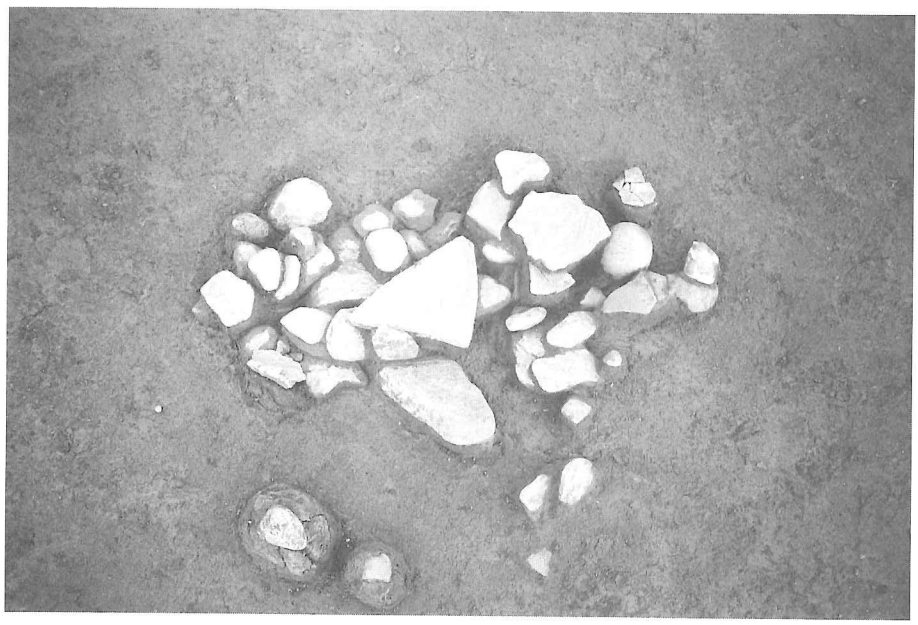
3 号石蓋土壙墓
(北東から)



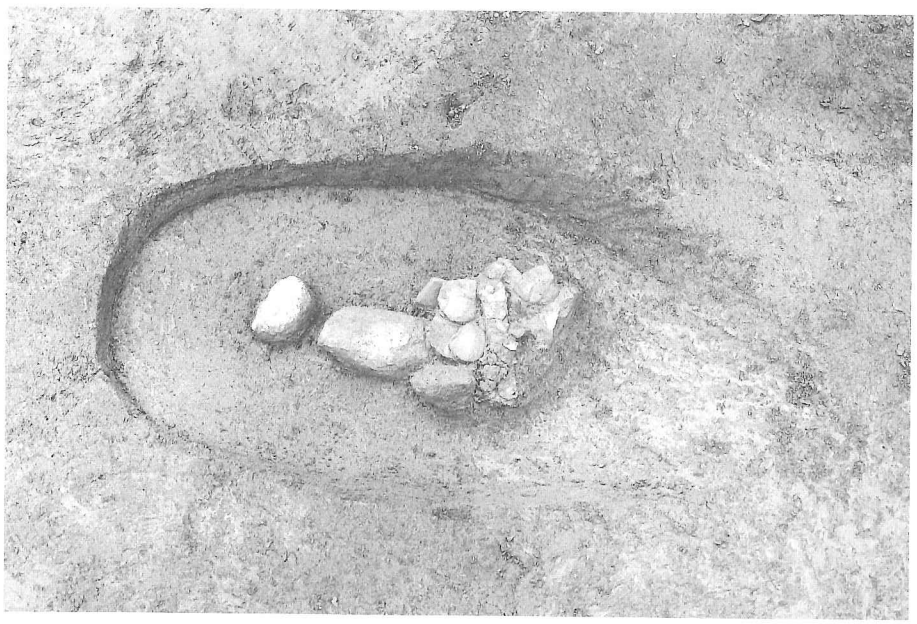
4 号石蓋土壙墓
(南西から)



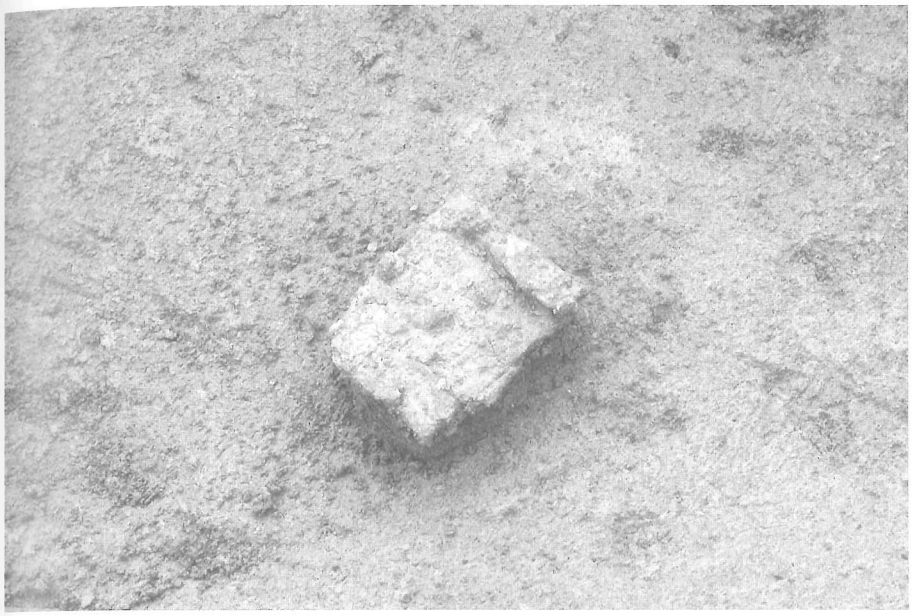
5号石蓋土壙墓
（北東から）



1号土壙墓
（西から）

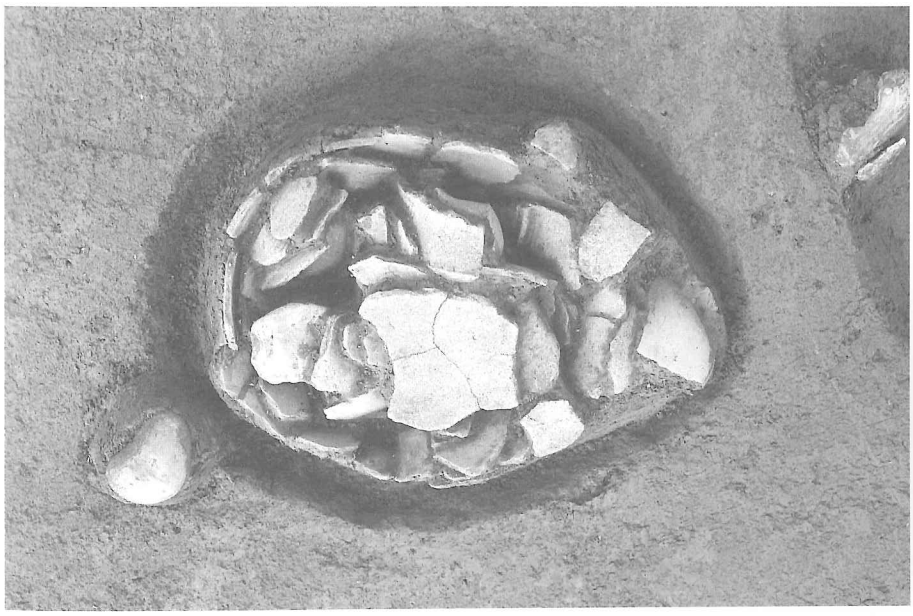


1号土壙墓
（西から）



1号土壙墓出土
鉄鋤先出土状況

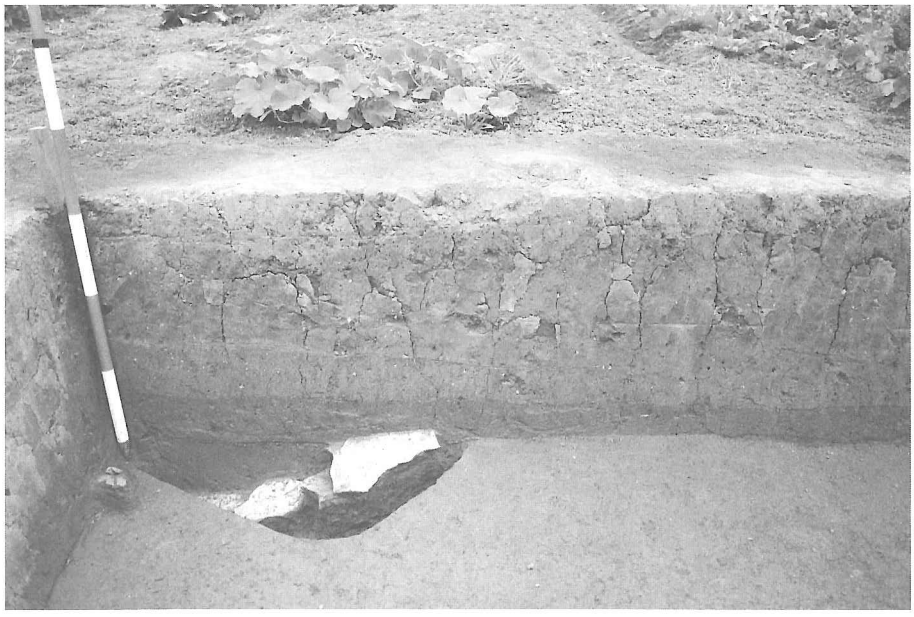
1号甕棺墓
(南東から)



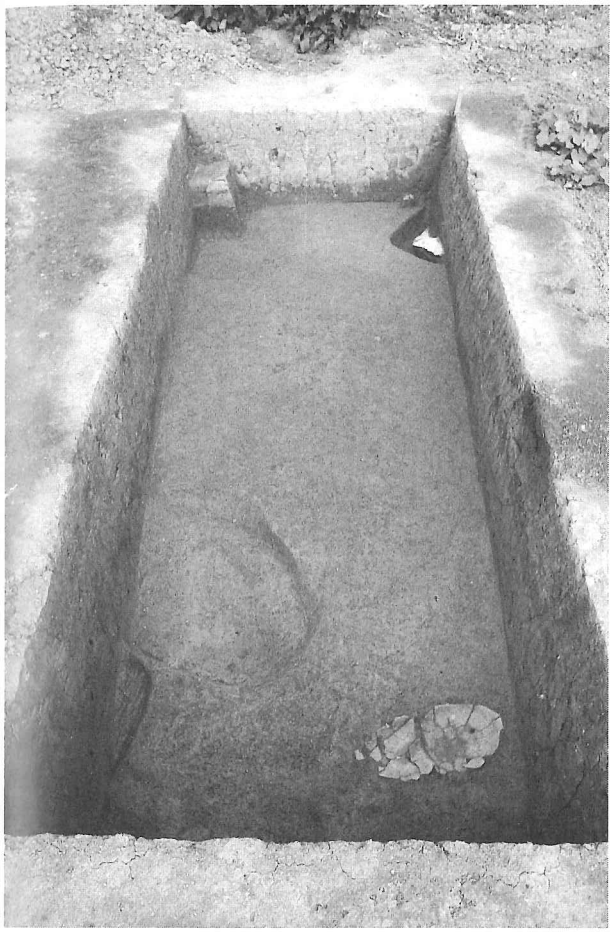
2号甕棺墓
(南東から)

Ｅ区
長頸壺検出状況
（北から）

Ｅ区
長頸壺検出状況
（南から）



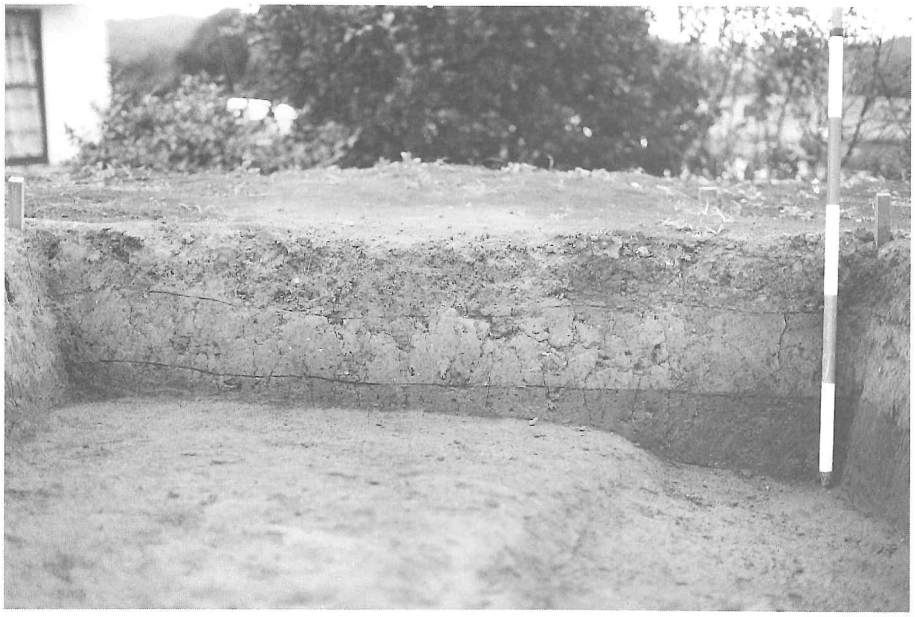
Ｆ区
１号石棺墓検出状況
（西から）



Ｆ区遺構出土状況
（南から）

Ｆ区１号小児甕棺墓
（西から）

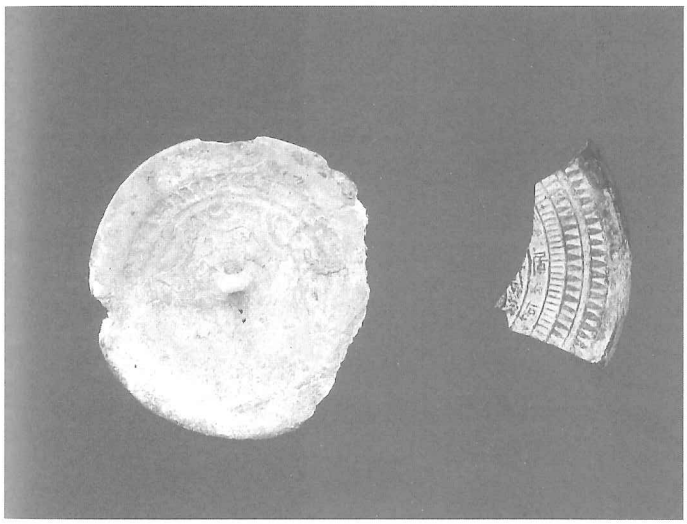
D区南東壁土層



E区東壁土層

F区東壁土層

9号土壙出土
長宣子孫内行花文鏡



8号石棺墓出土
小形仿製鏡（左）

9号土壙出土品
ガラス製勾玉（左）
碧玉製管玉（中）
筒形不明青銅器（右）

## 3．原地区の調査

### (1) 平成7年度の調査概要

平成6年度に実施された県単独事業の長崎県重要遺跡範囲確認調査では台地頂部を中心として高床建物群などが確認された。平成7年度の当該地区の調査は，それらの遺構の拡がりを追求することと新たな遺構を確認する目的で，調査区を設定して発掘を行った。調査区は，台地頂部を中心に西側傾斜面にA～I区を設定して，1,573m²を発掘した。A区は，平成6年度に調査を行った台地頂部北端の0区の南側に設定して，前方後円形の台地頂上部分をほぼ全体を発掘した。B区は，県道勝本石田線の東側で昭和50・51年度で濠が確認されていた所に設定した。C区は，A区とB区の間に設定して濠のつながりを探る目的で設定した。D区は台地頂部の南側，G区は南東側に設定した。H区とI区とは，平成6年度調査のTP．16で住居跡が確認された台地頂部の西側に設定した。E区とF区は県道の西側に設定して，濠を追うこととした。

調査の結果，A区で掘立柱建物の柱跡群，A・E・I区で竪穴住居跡9棟，東西方向の濠2条，C・F区で溝3条などの弥生中期～古墳前期の遺構が検出された。遺物は，コンテナ58箱分の出土がみられ，A区の2号竪穴住居跡で鉄鎌・ガラス小玉が出土した。

### (2) 平成7年度調査の遺構

①竪穴住居跡（第60・62図）

**1号竪穴住居跡**（第61図）

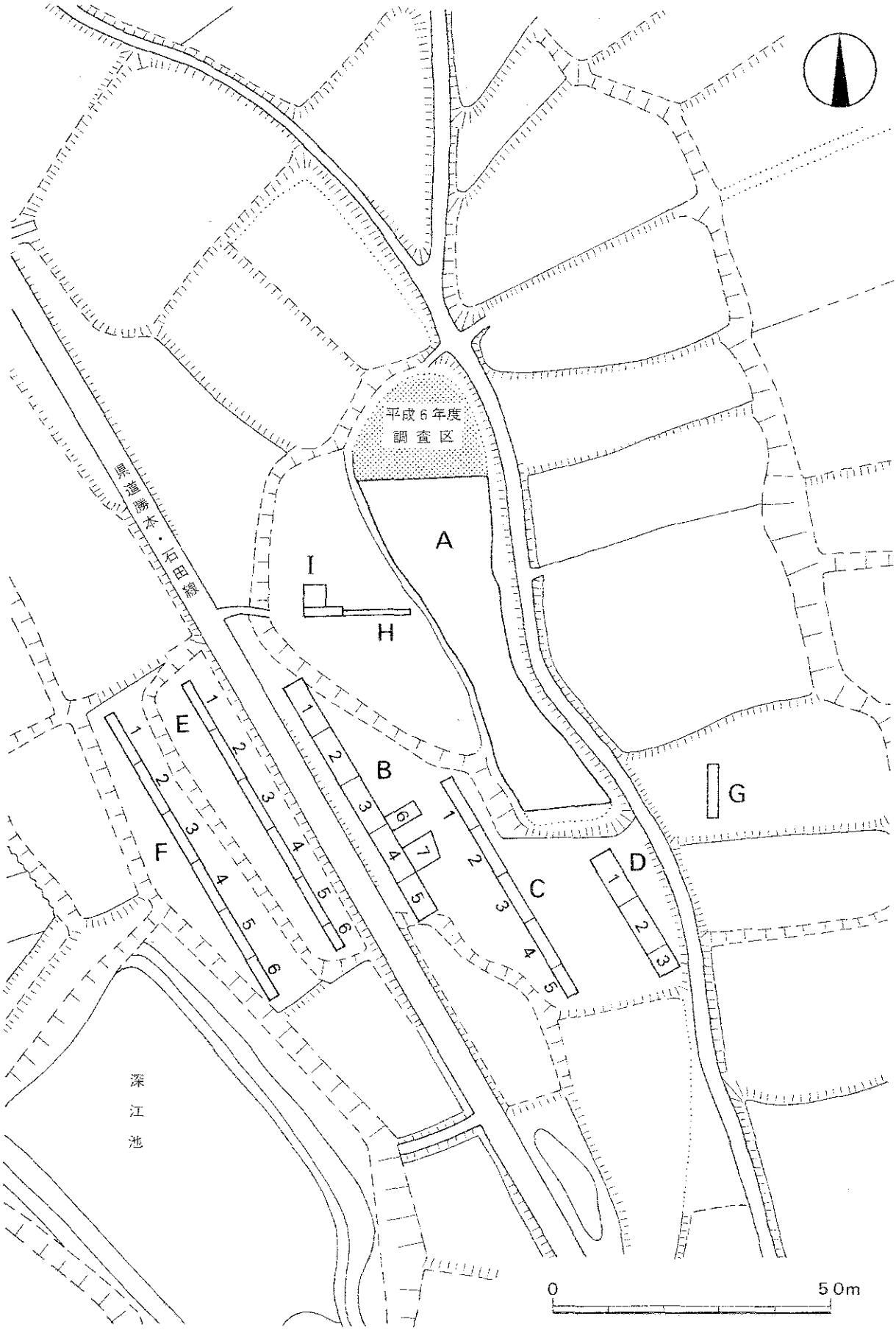
A区の中央より南側にある隅丸長方形の竪穴住居跡で，長辺2.26m，短辺3.4mを測るが，全体が削平を受けて，深さ5～10cmほど壁が残っているに過ぎない。幅1mほどのベット状遺構が，南側と北側片方に設けられ，東側には幅約10cmの壁溝がみられ，径50cmほどのピットにつながっている。主柱穴は，主軸に並んでベットの下端にある2箇所のピットであろう。床面中央より西側に径50cmほどの焼土面があり，炉跡と考えられる。遺構の主軸方位は，N5°Wである。東側壁面で2号建物跡の柱穴を切っている。出土した土器は，古墳前期の布留式である。

**2号竪穴住居跡**（第61図）

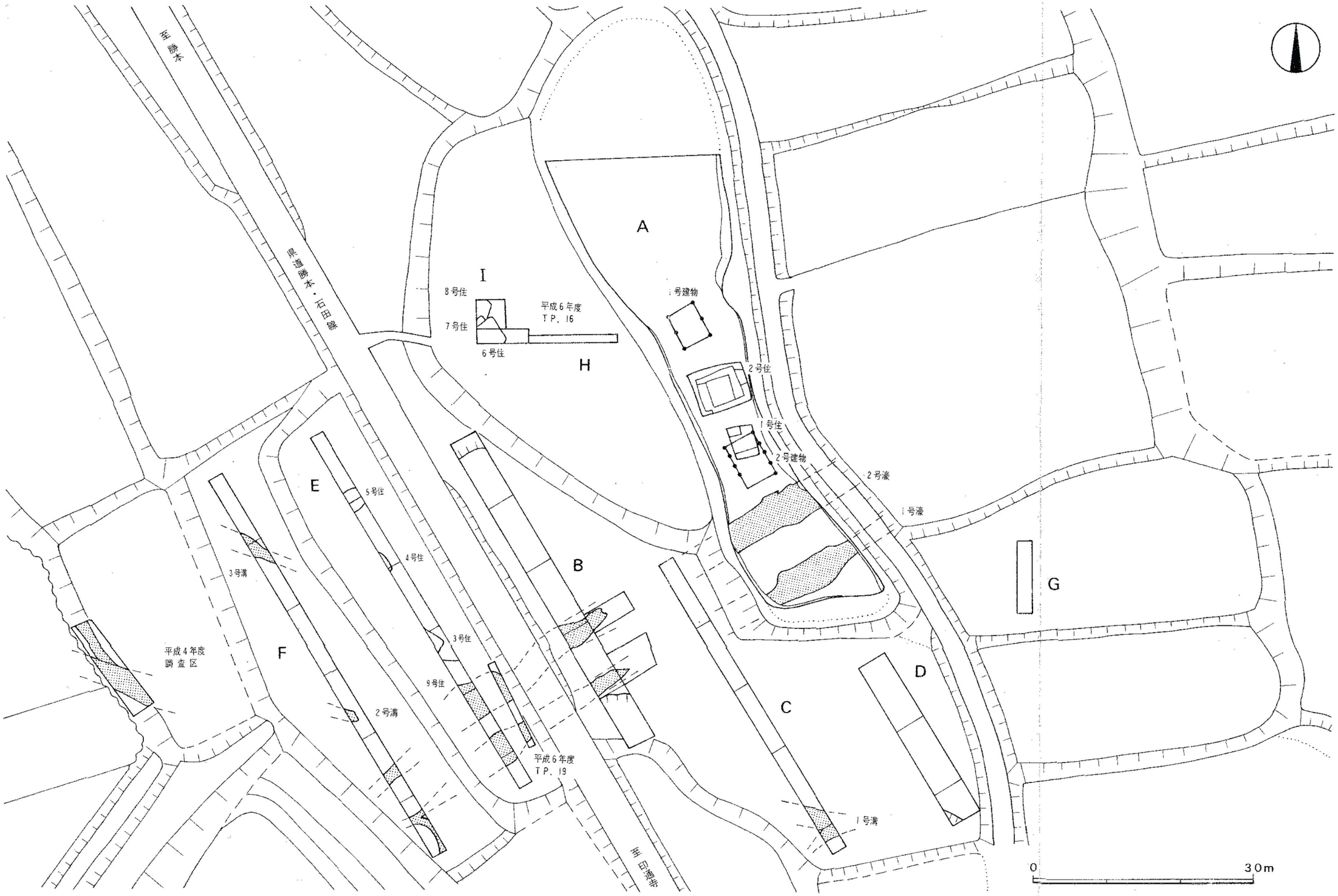
A区の中央にある方形の大形竪穴住居跡で，長辺7.3m，短辺6m，深さ40cmを測る。しかし，ベット部分が二段になっているので，大形の竪穴住居跡のなかに一回り小さい竪穴住居跡が重複した可能性をもっている。二段目のベット部分を重複した住居のベットであると考えれば，長辺5.56m，短辺4.34mの長方形竪穴住居跡とみることができる。炉跡が2箇所あるのも，そのことを示唆しているようである。大形住居の後に，一回り小さい住居を立て替えた可能性をもち，先の大形住居を2A竪穴住居跡，後の住居を2B竪穴住居跡することもできよう。遺構の主軸方位は，N80°Eである。古墳前期の布留式土器に伴って鉄鎌と鉄鏃？，ガラス小玉1点，石鎌，砥石，磨石などが出土した。

**3号竪穴住居跡**（第60図）

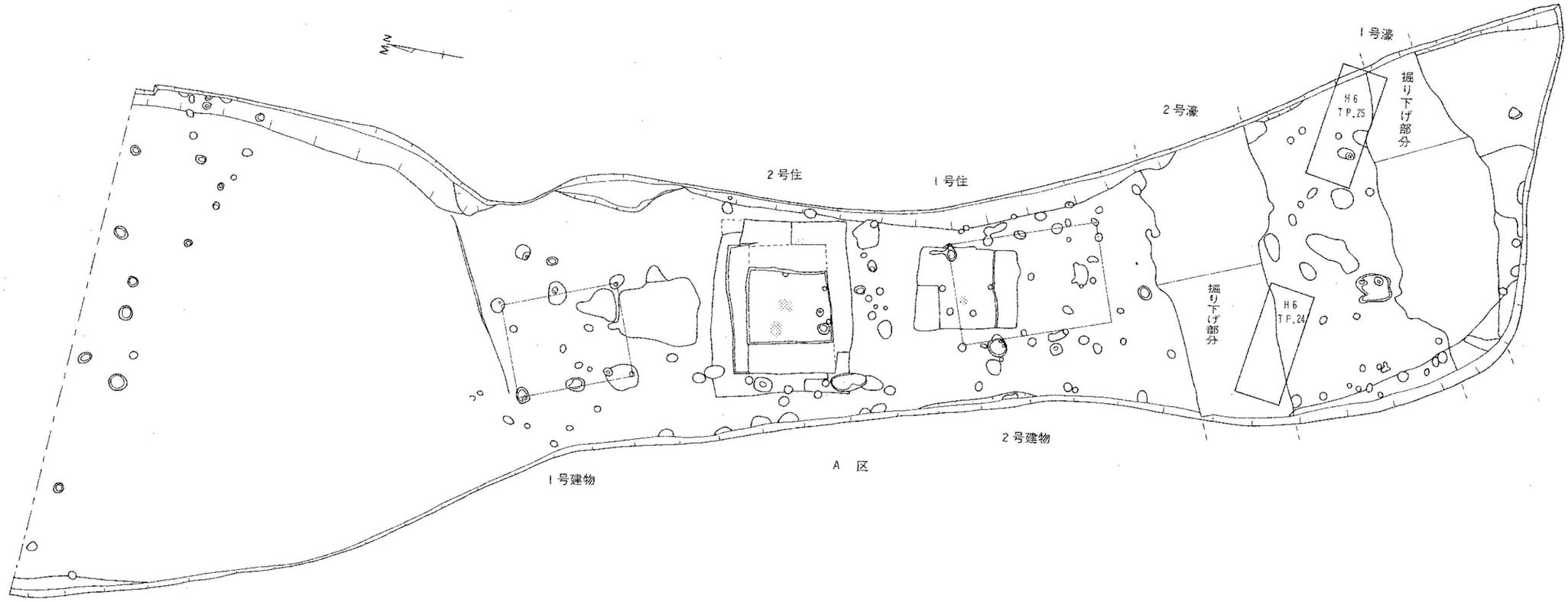
E4区にある竪穴住居跡である。北辺が3.5m，東辺が1.7m西壁にかかり，隅は丸みをもっている。

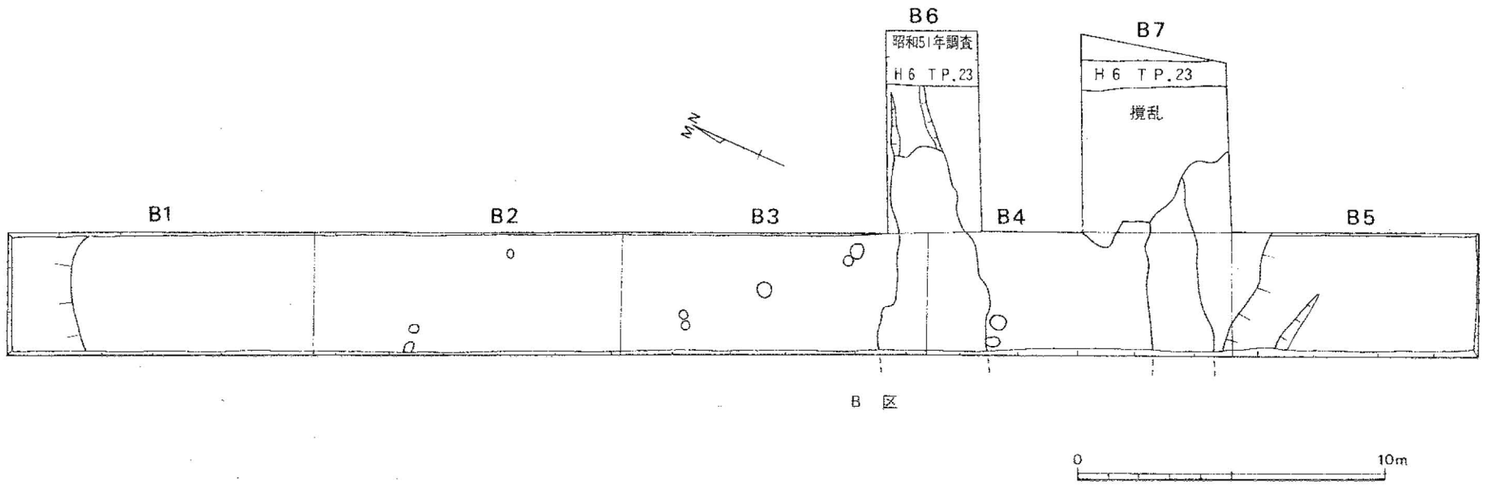



第57図　平成7年度調査区域図（1／1,000）

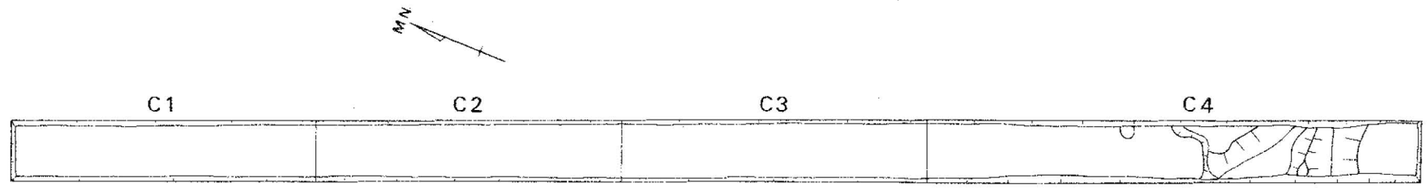



第58図　平成7年度調査主要遺構配置図（1／500）

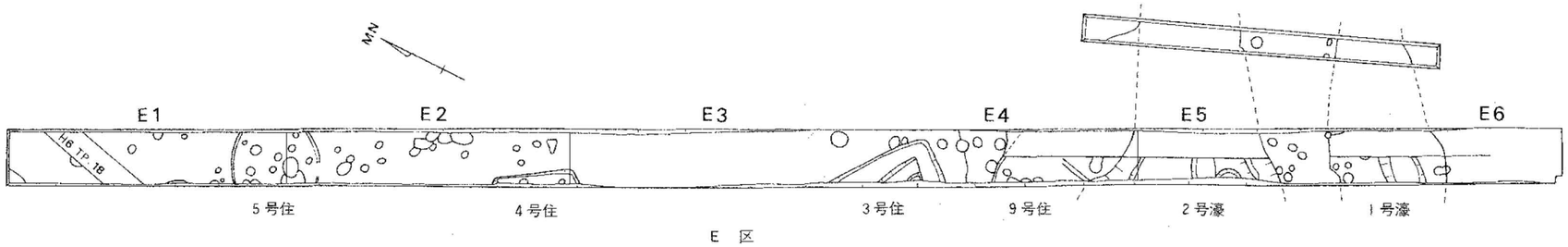


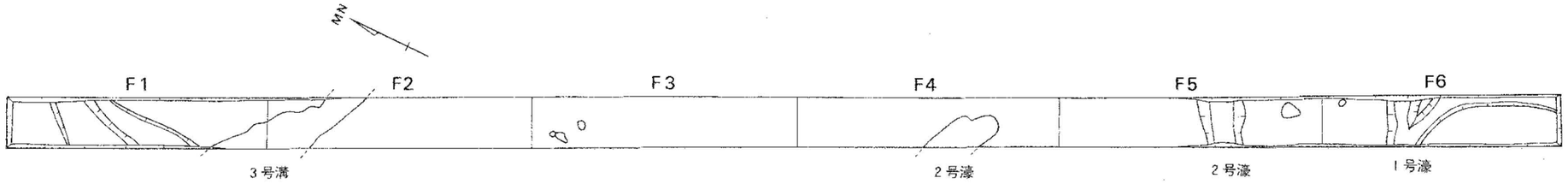

第59図　調査区別遺構配置図①（1／200）



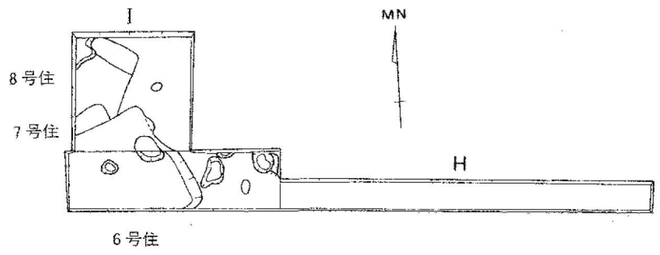

C　区




E　区

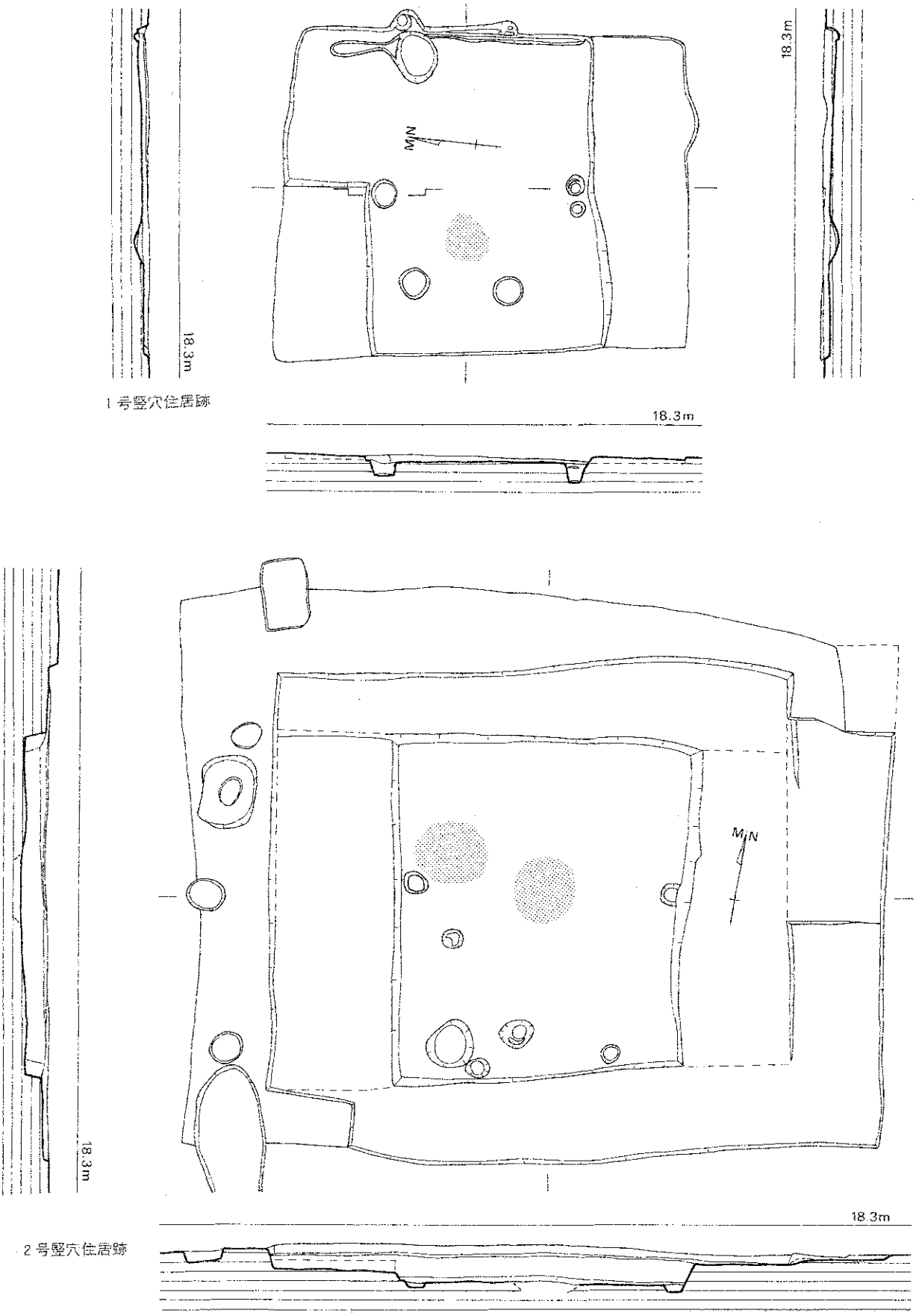



F　区




I・H区

第60図　調査区別遺構配置図②（1／200）




第61図　竪穴住居跡実測図（1／60）

壁面は40cmほどの高さをもち，さらに床面には10cmほどの段がついているが，全体が検出されていないため詳細は明確でない。北辺の主軸方位はN51°Wを測る。弥生中期後半の須玖II式土器が出土している。

**4号竪穴住居跡**（第60図）

E 2区にある竪穴住居跡で，隅が丸い東辺が西壁に一部かかったに過ぎない。東辺は長さ2.8m，壁面は9～36cmを測る。弥生中期前半の須玖1式土器が出土している。

**5号竪穴住居跡**（第60図）

E 1区とE 2区の境界付近にある竪穴住居跡で，長さ3mほどの円形をなしている。上面は削平を受け，壁面は6～8cmほどが残るに過ぎない。弥生中期前半の須玖1式壺口縁などが出土している。

**6・7・8号竪穴住居跡**（第60図）

I区で切り合いをもつ住居跡である。北から8号，7号，6号住居の順に新しくなっている。6号住居は東辺が4m，短辺が2.2mかかり，隅は丸みをもつ。壁面は36cmを測る。主軸方位は，N26°Wである。7号住居は，北辺が1m，東辺が70cmがかかるに過ぎず，南側を6号住居によって大きく失っている。主軸方位はN29°Wである。8号住居は，北辺が1.3m，東辺が2.1mかかるが，南側を6号住居と7号住居によって切られている。主軸方位はN21°Eを測る。7号住居では，古墳初頭から前期に属する壺破片が出土している。これらの住居は弥生後期から古墳前期の住居跡であろう。

**9号竪穴住居跡**（第60図）

E 4区にある竪穴住居跡で，2号濠の上部に一部がかかるようで，南北幅が3.4mほどを測る。床面には南北方向に幅16cmほどの小溝がみられる。住居の主軸方位は，N73°Wを測る。古墳前期布留式土器が出土している。

②掘立柱建物跡（第62・63図，表4）

平成6年度調査の台地頂上部北端で検出された掘立柱建物については，宮本長二郎氏が平成6年に22棟の建物を推定復元された。(註1) 平成7年度調査のA区の掘立柱建物については，宮本氏は中央部の建物（ここでは1号建物跡としている）を高床主祭殿，南側の建物（ここでは2号建物としている）を平屋脇殿とされ，平成6年度の北端の建物群を小型高床祭殿群として，棟を揃えてこれらの建物が直列する板塀囲いの祭場であったと推定された。(註2) ここでは，A区の1号・2号建物跡についてふれる。

**1号建物跡**（第63図）

A区中央にある2×1間の掘立柱建物で，宮本長二郎氏が高床主祭殿とされた建物跡である。桁行5.0m，梁行4.2mを測る。柱穴の掘方は径約50～100cmを測る。主軸方位は，N25°Wを測る。

**2号建物跡**（第63図）

A区南側にある4×1間の掘立柱建物で，宮本長二郎氏が平屋脇殿とされた建物跡である。桁行が6.2m，梁行4.3mを測る。柱穴の掘方は径40cm前後を測る。主軸方位は，N19°Wを測る。この他に，第62図に表した25と26の建物を想定している。両方ともに，1×1間の掘立柱建物で，25が桁行3.8m，梁行3.4mを測る。26が桁行4.4m，梁行4.2mを測る。

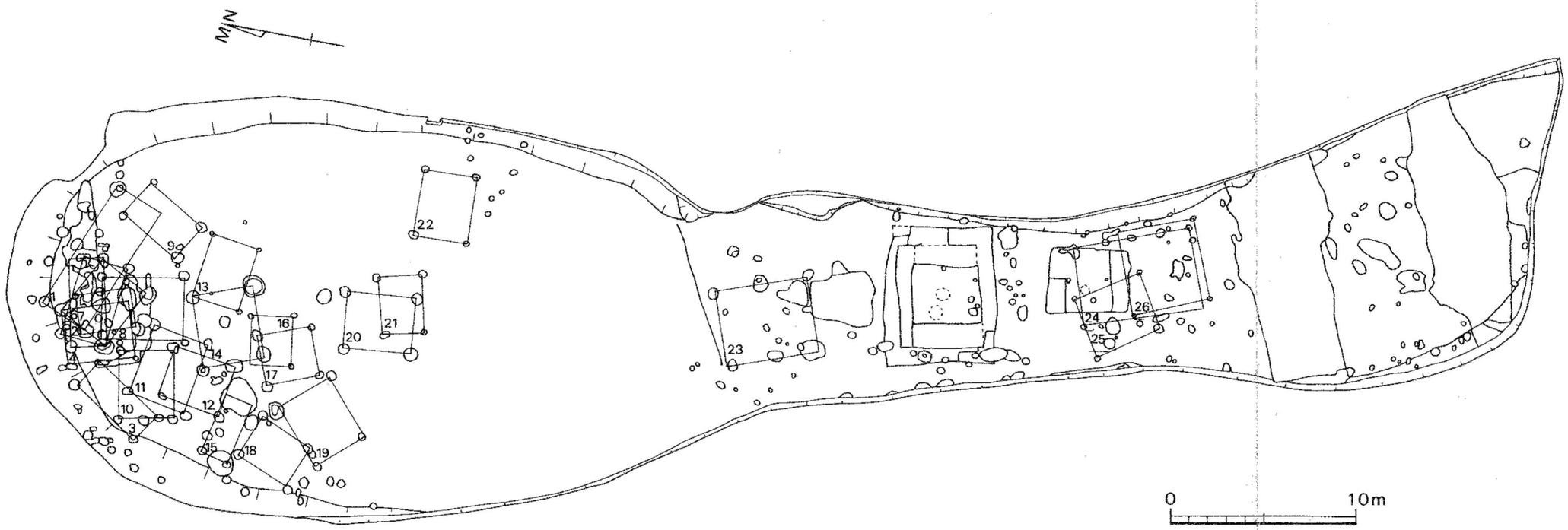
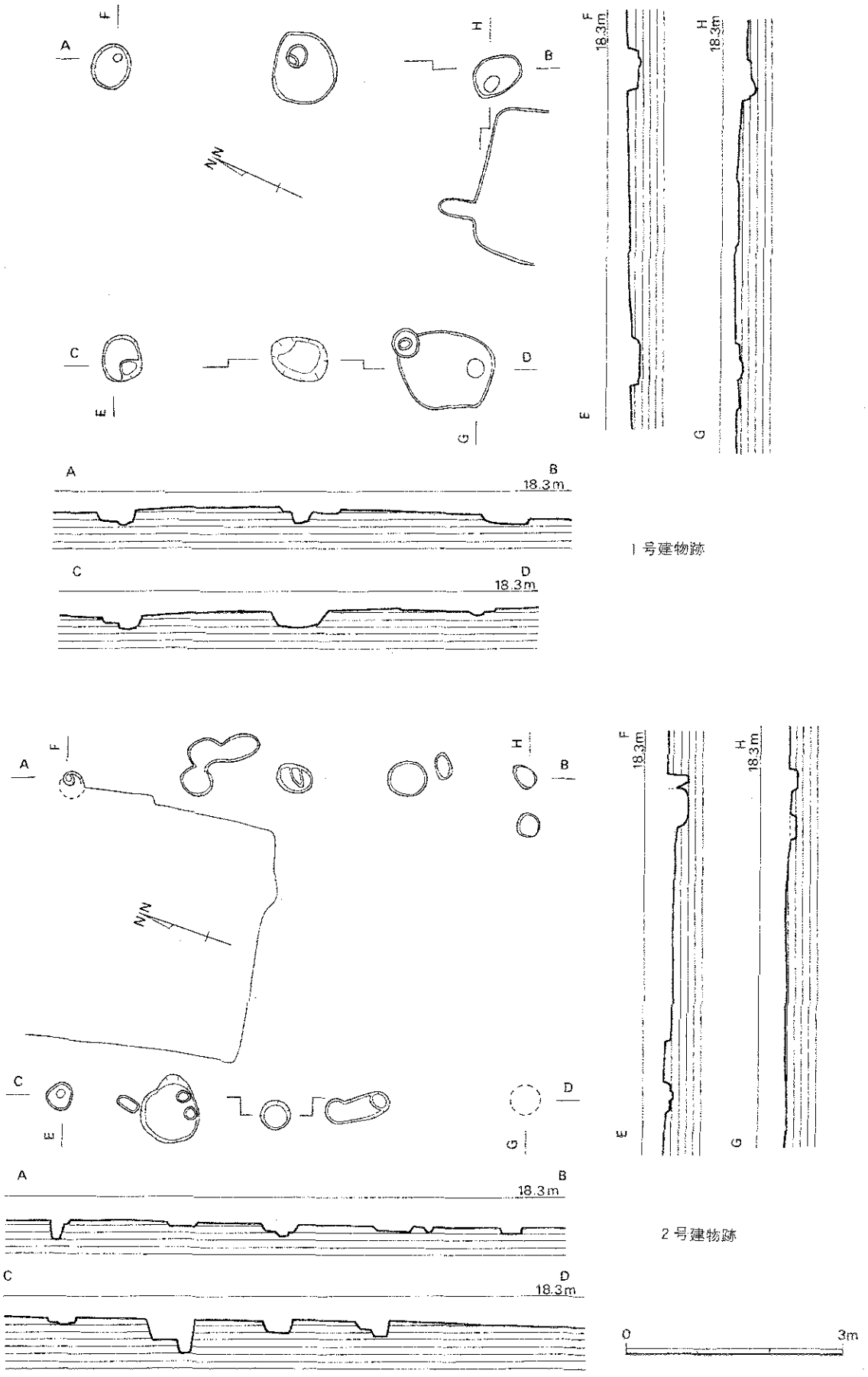



表４．Ａ地区建物遺構一覧表（宮本長二郎1996に追加）

| 番号 | 柱間 | 桁行m | 梁行m | 面積m² | 桁行／梁行 | 番号 | 柱間 | 桁行m | 梁行m | 面積m² | 桁行／梁行 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2×1間 | 7．3 | 2．8 | 20．4 | 2．61 | 14 | 1×1間 | 3．7 | 3．4 | 12．6 | 1．09 |
| 2 | 〃 | 4．4 | 1．9 | 8．4 | 2．32 | 15 | 〃 | 3．5 | 1．5 | 5．3 | 2．33 |
| 3 | 〃 | 4．2 | 1．8 | 7．6 | 2．33 | 16 | 〃 | 2．5 | 2．2 | 5．5 | 1．14 |
| 4 | 1×1間 | 3．6 | 3．0 | 10．8 | 1．20 | 17 | 〃 | 2．9 | 2．6 | 6．4 | 1．12 |
| 5 | 〃 | 4．1 | 2．4 | 9．8 | 1．71 | 18 | 〃 | 3．1 | 2．5 | 7．8 | 1．24 |
| 6 | 〃 | 3．5 | 3．1 | 10．8 | 1．13 | 19 | 〃 | 3．7 | 3．0 | 11．1 | 1．23 |
| 7 | 〃 | 2．9 | 2．1 | 6．1 | 1．38 | 20 | 〃 | 3．5 | 3．0 | 10．5 | 1．17 |
| 8 | 〃 | 4．3 | 3．3 | 14．2 | 1．30 | 21 | 〃 | 2．3 | 2．1 | 4．8 | 1．10 |
| 9 | 〃 | 3．6 | 2．2 | 7．9 | 1．64 | 22 | 〃 | 3．6 | — | — | — |
| 10 | 〃 | 3．7 | 2．8 | 10．4 | 1．32 | 23 | 2×1間 | 5．0 | 4．2 | 21．0 | 1．19 |
| 11 | 〃 | 3．8 | 3．0 | 11．4 | 1．27 | 24 | 4×1間 | 6．2 | 4．3 | 26．7 | 1．44 |
| 12 | 〃 | 3．3 | 2．8 | 9．2 | 1．18 | 25 | 1×1間 | 3．8 | 3．4 | 12．9 | 1．12 |
| 13 | 〃 | 3．5 | 2．6 | 9．1 | 1．35 | 26 | 〃 | 4．4 | 4．2 | 18．5 | 1．09 |

第62図　Ａ地区建物跡推定図（1／250）




第63図　建物跡実測図（1／80）

③濠・溝（第64～66図）

東西方向に２条の濠が，Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｆ区で検出された。南側を１号濠，北側を２号濠とする。

**Ａ区１号濠**（第64図）

Ａ区南端にある濠で，幅4.5～2.5mを測る。東側を長さ４mだけ掘り下げた。断面はＶ字形をなして，深さ1.17mを測る。遺物は，５層に古墳前期の布留式土器がまとめて投棄された状況が捉えられた。６層からは少々遺物が出土していて，２号濠の５層に対応する層と考えられる。７層からは遺物は出土していない。上部から陶質土器が１点出土している。この他，砥石，石製紡錘車などが出土した。この濠は，弥生中期に掘削され，古墳前期の布留式段階まで使用されて埋まったようである。

**Ａ区２号濠**（第64図）

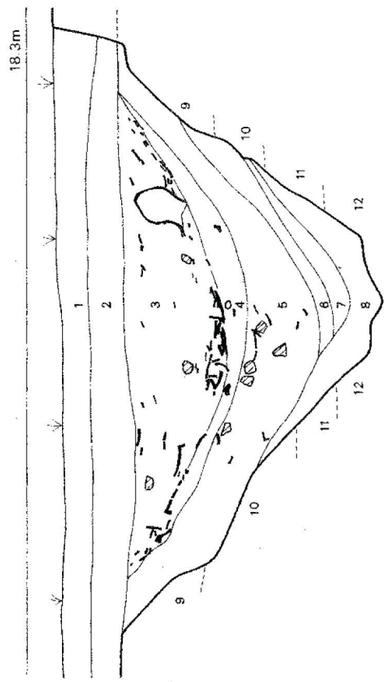
１号濠から５mほど北側に並行する濠で，幅４～５mを測る。西側を長さ６mほど発掘したが，約１m下に炭化物が薄く一面に拡がり，弥生後期後半～終末の遺物がまとまって出土する状況がみられたので掘り下げを一旦止めて出土状況の記録をとった。濠の土層は３層～８層であるが，３層最下面にある炭化物の以下の４～８層は，西隅を１m幅だけ掘り下げて精査を行った。その結果，濠の断面はＶ字形で，底面に浅い溝が付き，深さ1.67mを測る。４層には弥生後期初頭の土器を含むが，５層以下には弥生中期前半～後半の須玖Ⅰ式と須玖Ⅱ式古段階の土器を含んでいる。そのなかで，７・８層を中心として上限となる土器は須玖Ⅰ式古段階の資料であって，この濠が当段階に掘削されたことが考えられる。また，土器をみると弥生後期前葉期のものが少なく，その段階をとばして弥生後期後半の遺物が投棄されている状況がみられる。これをみると，弥生後期初めの段階に５層上面まで掘り直しが行われたことが推測される。その後，弥生後期後半に一括して遺物が廃棄されて弥生終末頃にはこの濠は埋没していたことが考えられる。古墳時代に入ると，台地頂部では１号濠だけ１条，古墳前期の布留式の段階まで残っていたことが分かってきた。また，６層は地山の黄色砂を多く含んでいて，北側から流れ込んでいるので，土塁が北側にあって盛土が流れ込んだ可能性をもっている。３層から一括出土した土器は，弥生後期後半～終末の時期の良好な資料であるが，破片でなくまとまりをもつ個体数50点をカウントしたところ，壺18点36%，甕８点16%，鉢５点10%，高杯３点６%，器台16点32%という成績が得られた。このデータを一般的な日常生活の器種構成に比べると，甕が少なくて，器台が壺に対応したように多い点が指摘できる。この器種構成は，ここが特殊な祭儀場であったことを反映した数値として評価することができよう。この他に，磨製石斧，砥石，台石，磨石が出土した。

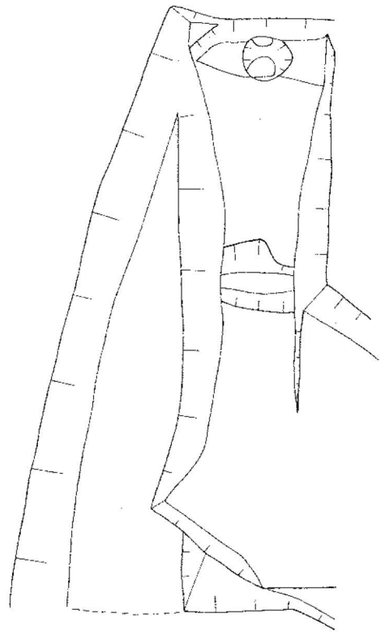
**Ｅ区１号濠**（第65図）

Ｅ区南端にかかる東西方向の濠である。幅3.8m，深さ0.9mを測り，上部が削平を受けている。12層の炭化物層があり，その上は弥生後期の土器が，その下部の14層から弥生中期の土器に伴って土製投弾や石庖丁などが出土している。14層から上部は掘り直された可能性が高い。

**Ｅ区２号濠**（第65図）

１号濠の２m北側に並行して検出した東西方向の濠である。幅は4.6m，深さ1.25mを測り，上部は



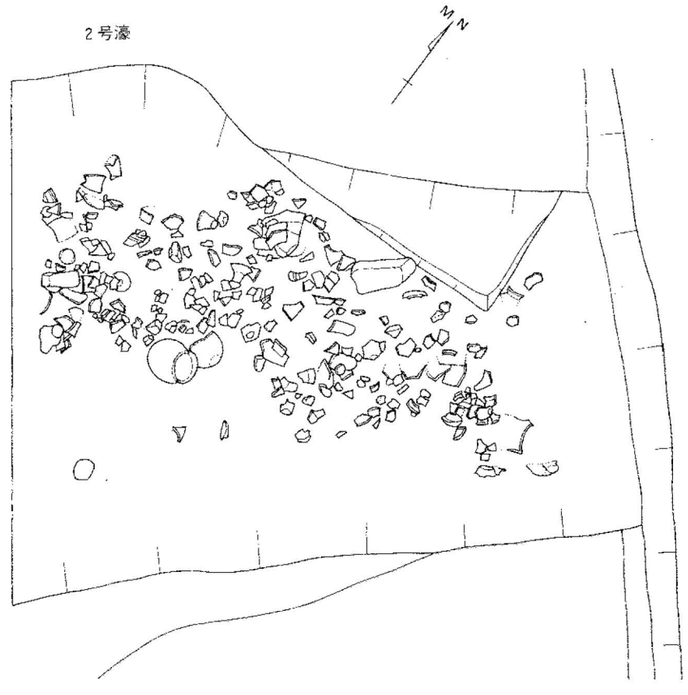
2号濠西壁土層名

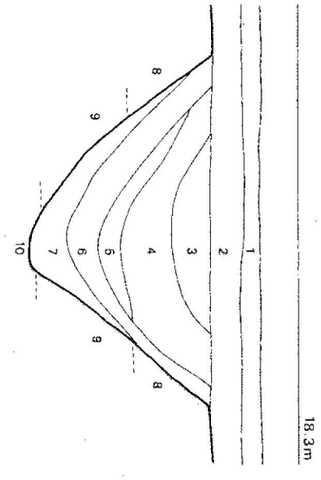
1層　灰褐色土層(耕作土)
2層　暗灰褐色土層(耕作土)
3層　黒褐色土層
4層　暗褐色土層
5層　にぶい赤褐色土層
6層　黄色砂混在褐色粘質土層
7層　炭化物混在暗褐色粘質土層
8層　明褐色粘質土層
9層　赤褐色土層(地山)
10層　淡灰色粘土層(地山)
11層　黄橙色粒混在淡灰色粘土層(地山)
12層　淡灰色風化岩盤(地山)

1号濠東壁土層名

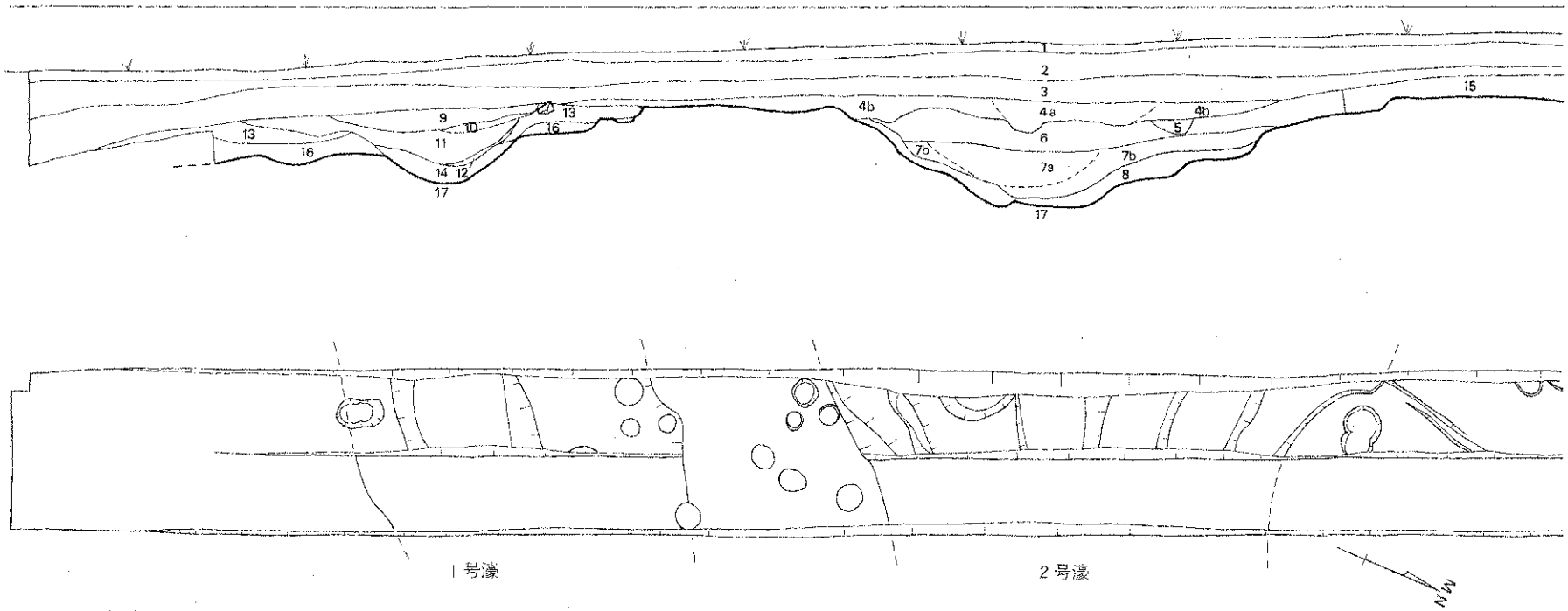
1層　灰褐色土層(耕作土)
2層　暗灰褐色土層(耕作土)
3層　暗赤褐色土層
4層　暗赤褐色粘質土層
5層　黒褐色土層
6層　にぶい赤褐色土層
7層　にぶい赤色土層
8層　赤褐色土層(地山)
9層　混礫淡灰色粘土層(地山)
10層　橙色風化岩盤層(地山)

0　3m




第64図　A区1号濠・2号濠実測図（1／40）

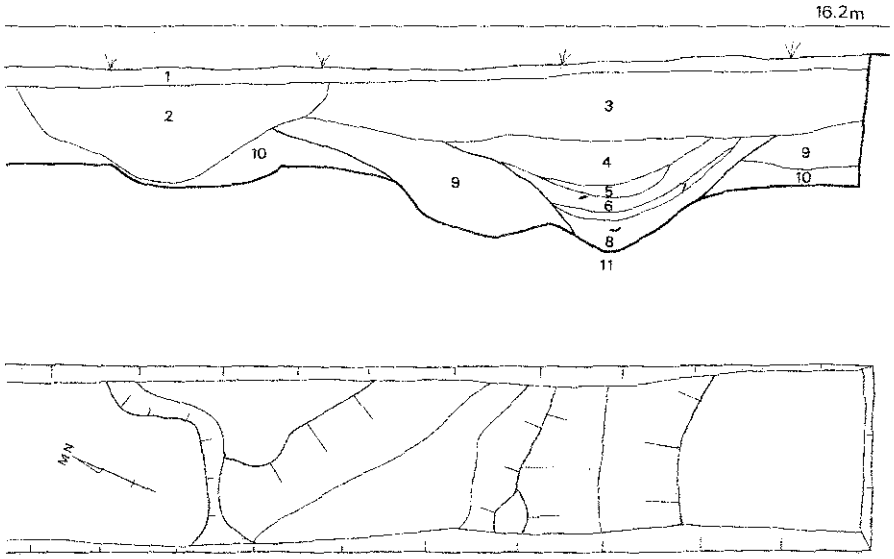



E区1号濠・2号濠土層名

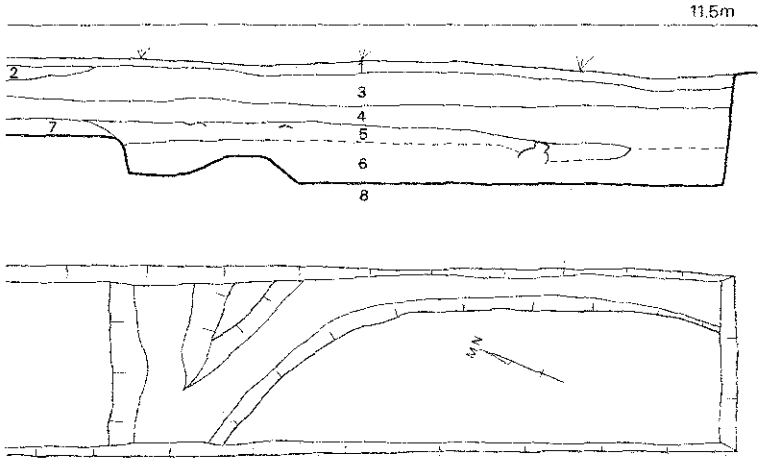
1　層　褐灰色土層(耕作土)
2　層　橙色土層
3　層　にぶい褐色土層
4 a 層　暗褐色土層
4 b 層　灰褐色土層
5　層　黒褐色土層
6　層　暗褐色土層(地山粒混在)
7 a 層　黒褐色土層(　　〃　　)
7 b 層　黒褐色土層
8　層　暗褐色土層
9　層　暗褐色土層(地山粒混在)
10　層　暗褐色土層(炭化物混在)
11　層　暗褐色土層
12　層　黒色炭化物層
13　層　黄褐色土層(地山粒混在)
14　層　極暗褐色土層
15　層　暗褐色土層(地山粒混在) 9号住居覆土
16　層　黄褐色土層(地山か)
17　層　明黄褐色土層(地山)

0　5m

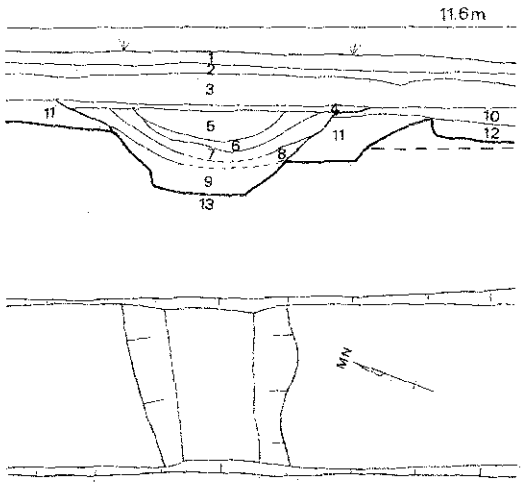
第65図　E区1号濠・2号濠実測図（1／80）




C区1号溝土層名
1層　茶褐色土層(耕作土)
2層　暗茶褐色土層(撹乱層)
3層　黄褐色土層
4層　暗茶褐色土層(小礫を含む)
5層　黒褐色炭化物層
6層　暗茶褐色土層
7層　黒褐色炭化物層
8層　暗茶褐色土層
9層　茶褐色土層
10層　黄褐色混礫層(地山)
11層　明黄褐色土層(地山)




F区1号濠土層名
1層　灰黄褐色土層(耕作土)
2層　黄褐色土層
3層　褐色土層
4層　灰褐色土層
5層　黒褐色土層
6層　灰褐色土層
7層　灰黄褐色土層(地山)
8層　黄褐色土層(地山)




F区2号濠土層名
1層　灰黄褐色土層(耕作土)
2層　黄褐色土層
3層　褐色土層
4層　黄褐色土層
5層　黄褐色土層
6層　明黄褐色土層
7層　灰黄褐色土層
8層　黒褐色土層
9層　褐色土層
10層　灰褐色土層
11層　黄褐色土層
12層　灰黄褐色土層
13層　黄褐色土層(地山)

第66図　濠・溝実測図（1／80）

削平を受けている。下層からは，弥生中期の土器が出土している。この他に砥石が出土している。

**F区1号濠**（第66図）

F区の南端にある濠で，濠本体は東壁で幅1.3mと狭まっているが，南側から溝がのびて濠と連結している状況が捉えられた。南側の溝からは，古墳前期の土器が出土している。

**F区2号濠**（第66図）

1号濠より2.5mほど北側にある東西方向の濠である。幅3.3m，深さ9.95mを測るが，上部を削平されている。下層から弥生中期後半の須玖II式古段階の土器が出土している。

**C区1号溝**（第66図）

C区南端にある溝で，二つの溝が重複して切り合っている。土層堆積の状況をみると，北側の溝を南側の溝が切っている。南側の溝は，幅3.5m，深さ1.2mを測り，濠であった可能性をもつ。弥生後期後半～古墳前期の土器が出土している。

**F区2号溝**（第60図）

F4区にある南東から北西へのびる幅1.4mの溝で，調査区内で止まっている。上面で範囲をおさえて掘り下げは行っていない。表面で取り上げた遺物は，弥生中期から後期初め頃の土器である。濠の可能性については，掘り下げていないので明確でない。

**F区3号溝**（第60図）

F1・2区にかかる南東から北西へのび幅1.7mの溝である。上面をおさえただけで，下部の掘り下げは行っていない。表面で取り上げた遺物は，弥生後期中頃～終末の時期の土器で，敲石も出土している。濠である可能性については，掘り下げていないので明確でない。

**註1**　宮本長二郎「弥生時代の祭儀建築と外来文化」『邪馬台国への海の道』大阪府立弥生文化博物館　1995

**2**　宮本長二郎「弥生の大型建物」『歴史九州』第7巻5号　1997

### (3) 平成7年度調査の遺物（第67～80図）

平成7年度の原地区での調査によって，コンテナ58箱分の遺物が出土した。その数量的な内訳は，土器・陶磁器29,171点，石器・石製品281点，土製品1点，金属器50点，装飾品1点の計29,504点が出土した。

①土器（第67～76図）

**1号住居跡出土土器**（第67図）

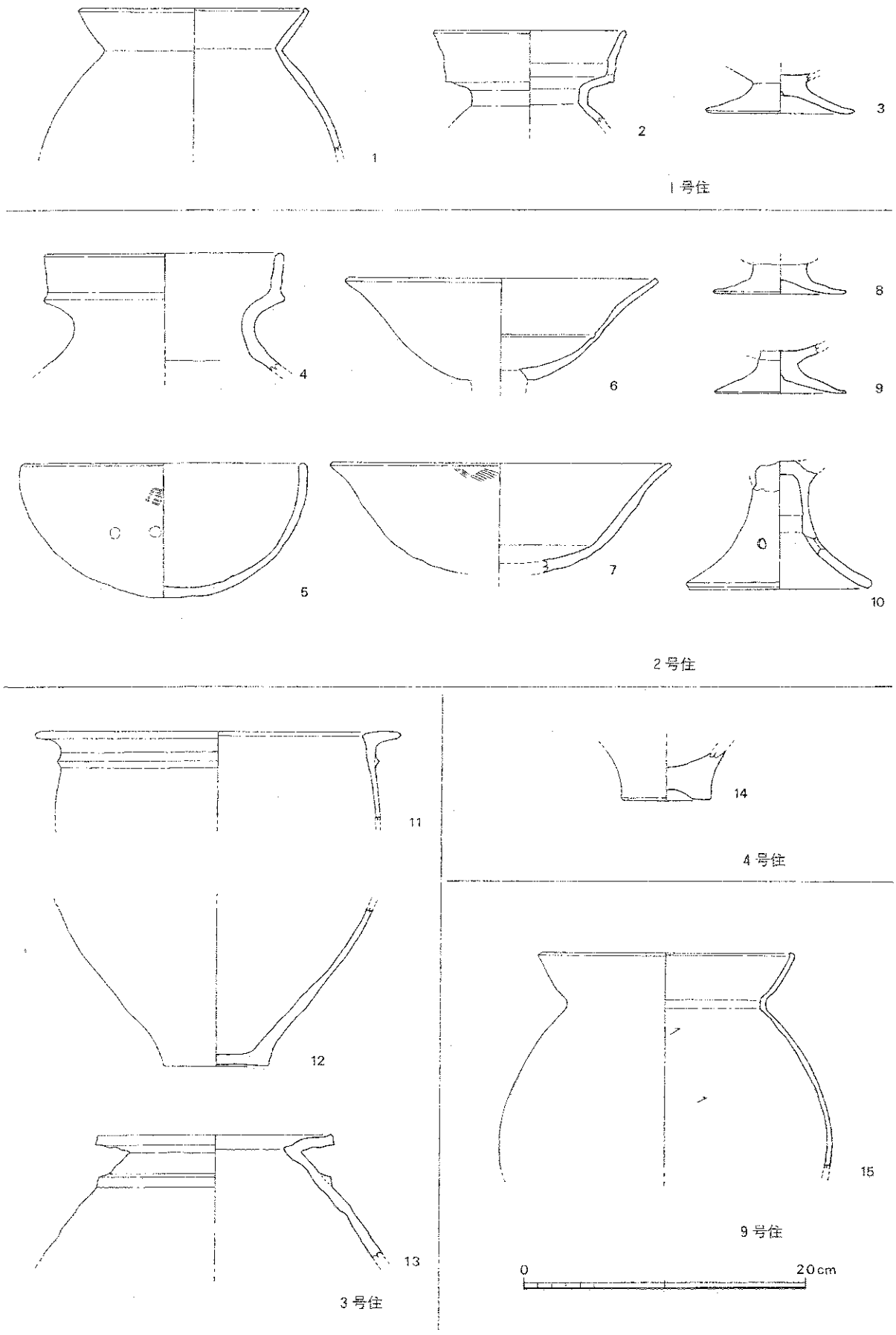
1～3は，1号住居跡から出土した土器である。1は，布留式の甕である。口縁は直線的に開いて端部を内上方に摘みぎみにおさめている。器表は，風化を受けて調整は明確でない。橙色の色調で，胎土の石英・長石を含む。2は，山陰系の壺である。直線的にのびる幅広の二重口縁で上半部はやや外方に開き，短い頸部を有する。器表は，風化を受けているがナデ調整されている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含む。3は，低脚の高杯脚部片である。裾部は大きく開き，端部を尖りぎみにおさめている。器表は，風化を受けて調整は明確でない。橙色の色調で，胎土の石英・長石・赤色砂を含む。これらは古墳前期の土器で，柳田康雄氏編年[註1]のⅡb式，井上裕弘氏編年[註2]の古墳前期2式に位置付けられる資料であろう（以下柳田編年，井上編年とする）。

**2号住居跡出土土器**（第67図）

4～10は，2号住居跡から出土した土器である。4は山陰系の二重口縁壺である。口縁は直立ぎみに立ち上がり，口縁下端は外方に突出している。口縁はヨコナデ調整，頸部は平滑なナデ仕上げ，頸部内面下端はヘラケズリされている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。5は丸底の浅鉢である。器表は風化を受けているが，ハケ調整のあと平滑なナデ仕上げされている。指オサエ痕もみられる。橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。6～10は高杯である。6・7は丸みをもつ杯部で，内面に6が沈線，7が淡い段が入る。6・7ともに橙色の色調で，精良な胎土をもつが，金雲母・赤色砂を含む。8・9は低脚の高杯脚部片である。裾部は大きく開き，端部は尖りぎみにおさめている。両者ともに器表は風化を受けている。8はにぶい黄橙色，9は橙色の色調で，胎土に金雲母・赤色砂を含む。10は，ラッパ状に広がる脚部である。焼成前の穿孔が3箇所入る。器表は風化を受けているが，ナデ仕上げであろう。橙色の色調で，胎土に石英・金雲母を含む。これらは古墳前期の資料で，柳田編年のⅡb式，井上編年の古墳前期2式に位置付けられる資料であろう。

**3号住居跡出土土器**（第67図）

11～13は，3号住居跡から出土した土器である。1・2は甕である。1は，鋤先形の口縁の甕で，口縁の下に断面三角形の突帯をもっている。器表は風化を受けている。明赤褐色の色調で，胎土に石英・長石を含む。12は甕下半部で，器表は風化を受けている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。13は，胴部が急速にすぼまり，口縁が「く」の字形に外反する広口壺である。胴上半には断面三角形の突帯が付く。口縁端部は，平坦で面取りされている。器表は風化を受けていて，調整は明確でない。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英を含む。これらの土器は，弥生中期の須玖Ⅱ式古段階の資料であろう。




第67図　住居跡出土土器（1／4）

**4号住居跡出土土器**（第67図）

14は，4号住居跡出土の土器である。甕の底部で，外底面がくぼんでいる。外面は風化を受けている。明赤褐色の色調で，胎土に石英・長石を含む。弥生中期前半の須玖Ⅰ式の資料であろう。

**9号住居跡出土土器**（第67図）

15は，布留式の甕である。口縁は直線的に開いて，端部を内上方に摘みぎみにおさめている。器表は，風化を受けていて調整は明瞭でないが，胴部内面はヘラケズリされている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を胎土に含む。古墳前期の資料で，柳田編年のⅡb式，井上編年の古墳前期2式に位置付けられよう。

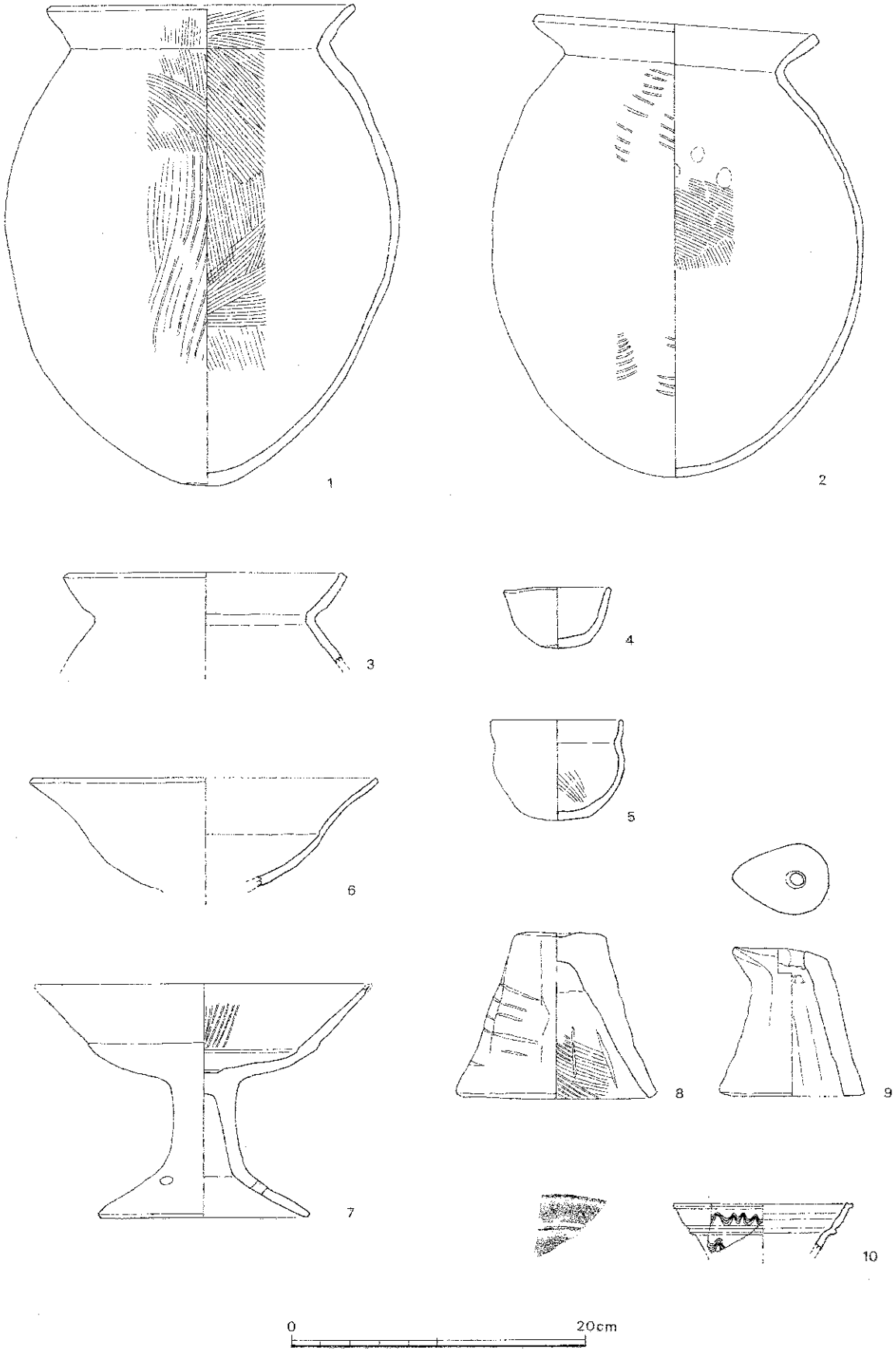
**A区1号濠出土土器**（第68図）

1～3は，甕である。1は，ほぼ完形に復原できた在地系の特徴をもつ甕である。口縁は「く」の字形に外反し，卵形の胴部は中位に最大径をもち，底部は小さい凸レンズ底をなしている。内外面ともにハケ調整され，外面には煤が付着している。口縁はヨコナデ調整されている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含くむ。2は，外面に叩き目を残すほぼ完形の甕で，口縁は「く」の字形に外反し，端部は肥厚されて平坦におさめている。楕円形状の胴部は，中位に最大径をもち，底部は丸底である。外面には叩きが施されるが，風化を受けて部分的に叩き目が残る。内面は，指オサエ，平滑なナデ仕上げされるが，部分的にハケ目が残っている。橙色の色調で，胎土に石英・長石を含んでいる。畿内系の伝統的Ⅴ様式の影響を受けた甕であろうか。3は，布留式の甕である。やや肥厚され直線的にのびる口縁端部は，内上方に摘みぎみにおさめている。器表は，風化を受け調整は明確でないが，胴部内面はヘラケズリされている。にぶい橙色の色調で，胎土に長石・金雲母・角閃石・赤色砂を含んでいる。5は，丸底の小形壺である。ややいびつなつくりで，胴部上端でくびれて口縁は内湾ぎみに立ち上がる。器面は風化をうけるが，口縁はヨコナデ調整され，胴部内面はナデつけたような調整痕がみられる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。4は，丸底で盃状をなす完形の小形鉢である。器面はナデ仕上げされる。にぶい褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。6・7は高杯である。6は，下半部が丸みをもつ杯部で，口縁は緩やかに外湾している。外面には屈曲部の段をもたないが，内面には接合部の段がついている。器面は風化を受けている。橙色の色調で，胎土に長石・金雲母・赤色砂を含んでいる。7は，口縁端部を欠失する高杯で，杯部は屈曲部の丸みをもった段から口縁は直線的に開いている。脚部は比較的短い柱状部から裾部は大きく開いている。外面は風化を受けて調整が明瞭でないが，杯部内面上半には放射状に暗文が施され，柱状部に縦方向の暗文がうかがえる。明褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。8・9は，完形の支脚である。8は，釣鐘形の形態で外面は叩きによって面取りされたように甘い稜線がはいる。上部中央部には浅い窪みがつく。内面はハケが施されている。9は嘴形の突出部をもつもので，上面には焼成前の穿孔がみられる。8・9ともに，橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。10は，上部から出土した陶質土器の壺口縁片である。櫛状施文具による波状文が施されている。これらの土器は，柳田編年のⅡa式～Ⅱb式，井上編年の古墳時代

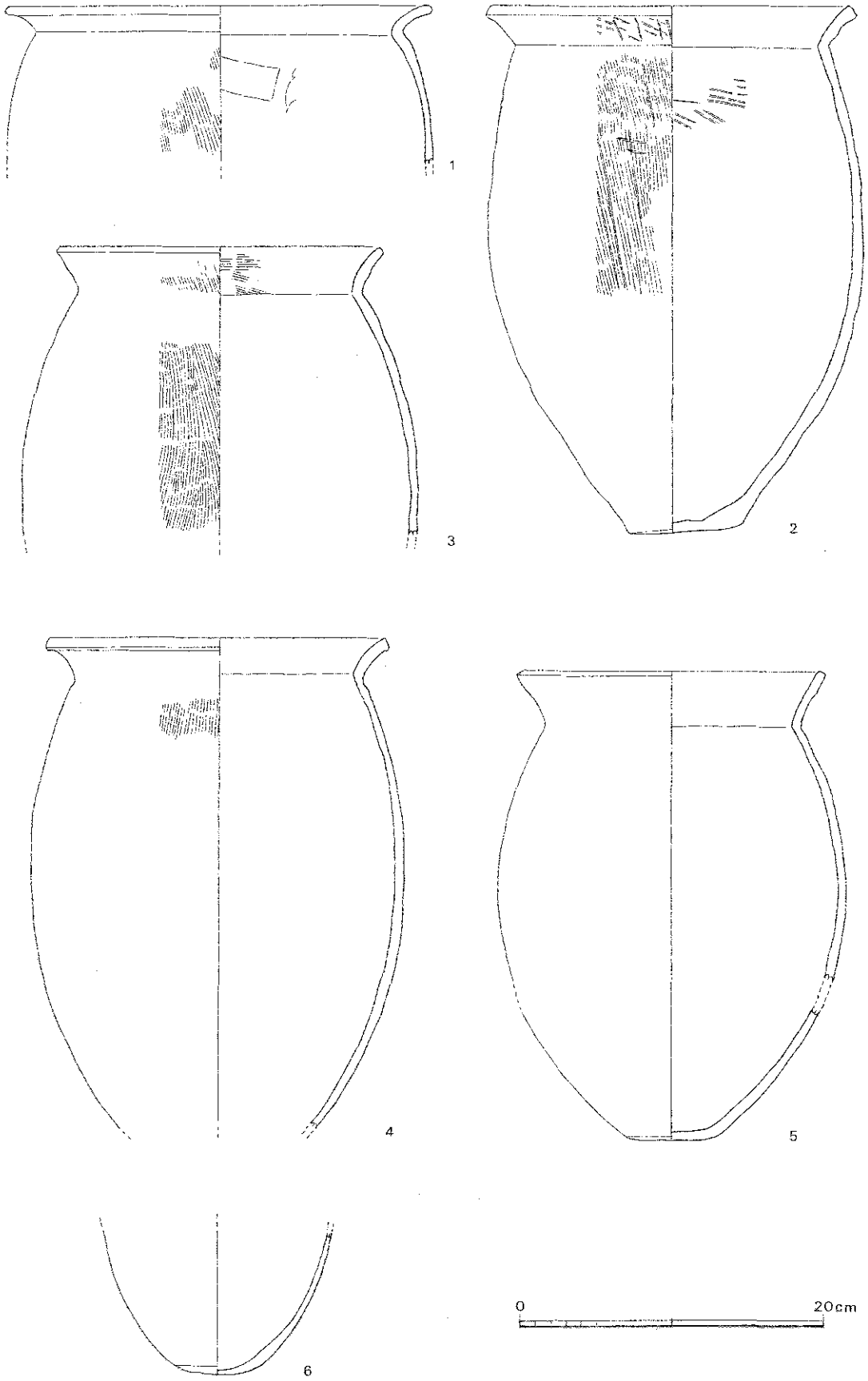
前期1式～2式に包括される資料であろう。

**A区2号濠上層出土土器**（第69～72図）

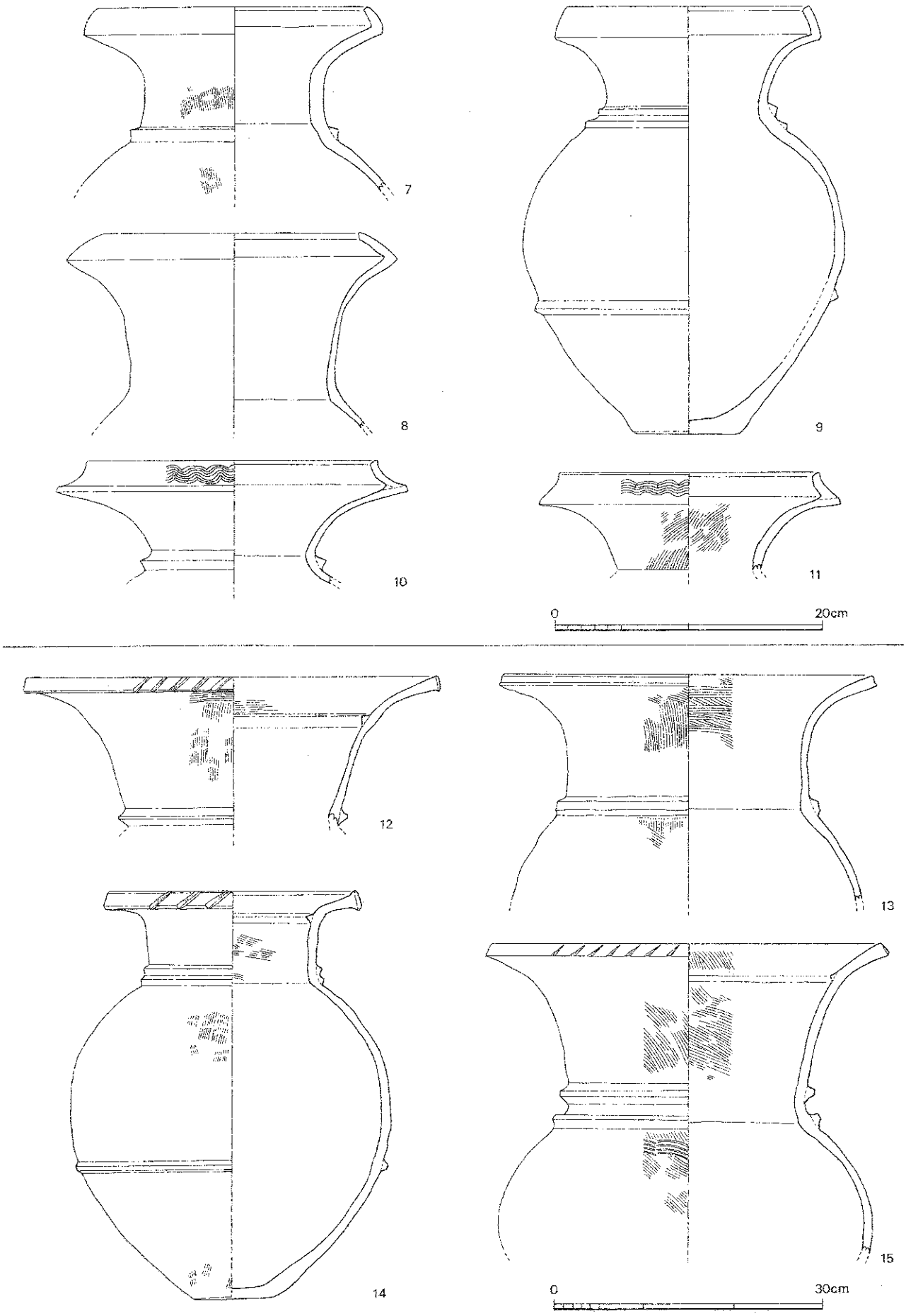
2号濠で3層から一括出土したものを上層出土品とする。1～6は，甕である。1は口縁が「く」の字形に外湾する甕で，端部は丸くおさめている。器面は風化を受けているが，内面にはヘラナデの痕跡がつく。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。2～5は，「く」の字形口縁が立ち上がり端部を平坦におさめるもので，胴中位に最大径をもち，4・6は長胴の形態をもっている。底部は凸レンズ底で，2・5・6の順に厚みを増している。調整は，外面がハケで，内面がナデ仕上げされているが，2の外面には叩き痕が部分的に観察される。色調は，2・3がにぶい黄橙色，4が橙色，5が灰褐色，6が明赤褐色を呈し，いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含んでいて，さらに4は赤色砂を含んでいる。7～15は，壺である。7～9は内湾ぎみに屈曲する複合口縁をもつ壺である。頸胴界に断面三角形の突帯が，7は1条，9は2条つき，9は胴下部にさらに1条突帯をもつ。器面は風化をうけているが，ハケの後ナデ仕上げされている。色調は，7が橙色，8・9がにぶい橙色を呈する。いずれも胎土には石英・長石・金雲母を含んでいる。10・11は，複合口縁の屈曲部が外方に突出する壺で，内傾する口縁外面には櫛状施文具による波状文を施している。10は頸胴界に断面三角形の突帯を1条つけている。色調は，10が明黄褐色，11がにぶい橙色を呈し，いずれも胎土には石英・長石・金雲母を含んでいる。口縁部の特徴から，福岡平野より以東の土器と考えられる。12～15は大形の壺である。13は，口縁が大きく広がる広口壺である。口縁は肥厚され，端部はヨコナデされて浅くくぼんでいる。頸胴界には，台形状の突帯がつく。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石を含んでいる。12・14・15は，大きく開く口縁部の内面に段あるいは突帯を有するもので，平坦な端部面には刻目を施している。頸胴界には，14が断面三角形の突帯を2条，12・15が台形状の突帯を12が1条，15が2条施し，14は倒卵形の胴部下半に台形状の突帯をめぐらしている。14の底部は薄い凸レンズ底をなしている。色調は，12・14が橙色，15がにぶい橙色を呈する。胎土には，12が石英・長石・角閃石・赤色砂を含み，14・15が石英・長石・金雲母を含んでいる。12・15は，鋤先形口縁の名残を残す形態で，12の場合には蓋受けの突帯になっている。16～20は鉢で，19・20は脚台が付く資料である。16・17は丸底の椀形鉢である。16は小形品で，低い脚台がつけば古墳初頭に落ちてくる可能性をもち，上層出土土器のなかでは最も新しい資料になる。橙色の色調で，胎土に長石・赤色砂・金雲母を含んでいる。17は，ほぼ完形の浅鉢で，丸底から体上半で屈曲して内湾ぎみに立ち上がり，口縁端部を平坦におさめている。外面はハケ調整され，体下半部はナデ消されている。内面も，上部は横位のハケ調整がなされ，体下半部はナデ仕上げされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。18は，「く」の字形に外反する口縁の浅鉢で，底部は丸底である。器表は，風化を受けているが，外面下端は板ナデ状のケズリ痕がみられ，内面にもハケ目が残っている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。19・20は，「く」の字形に外湾する口縁の浅鉢で，20が脚台がつくところから19も同様の可能性をもっている。19は内外面ともに風化しているが，内面に指オサエ痕がついている。20は外面がヨコミガキが施され，内面がナデ仕上げされている。両



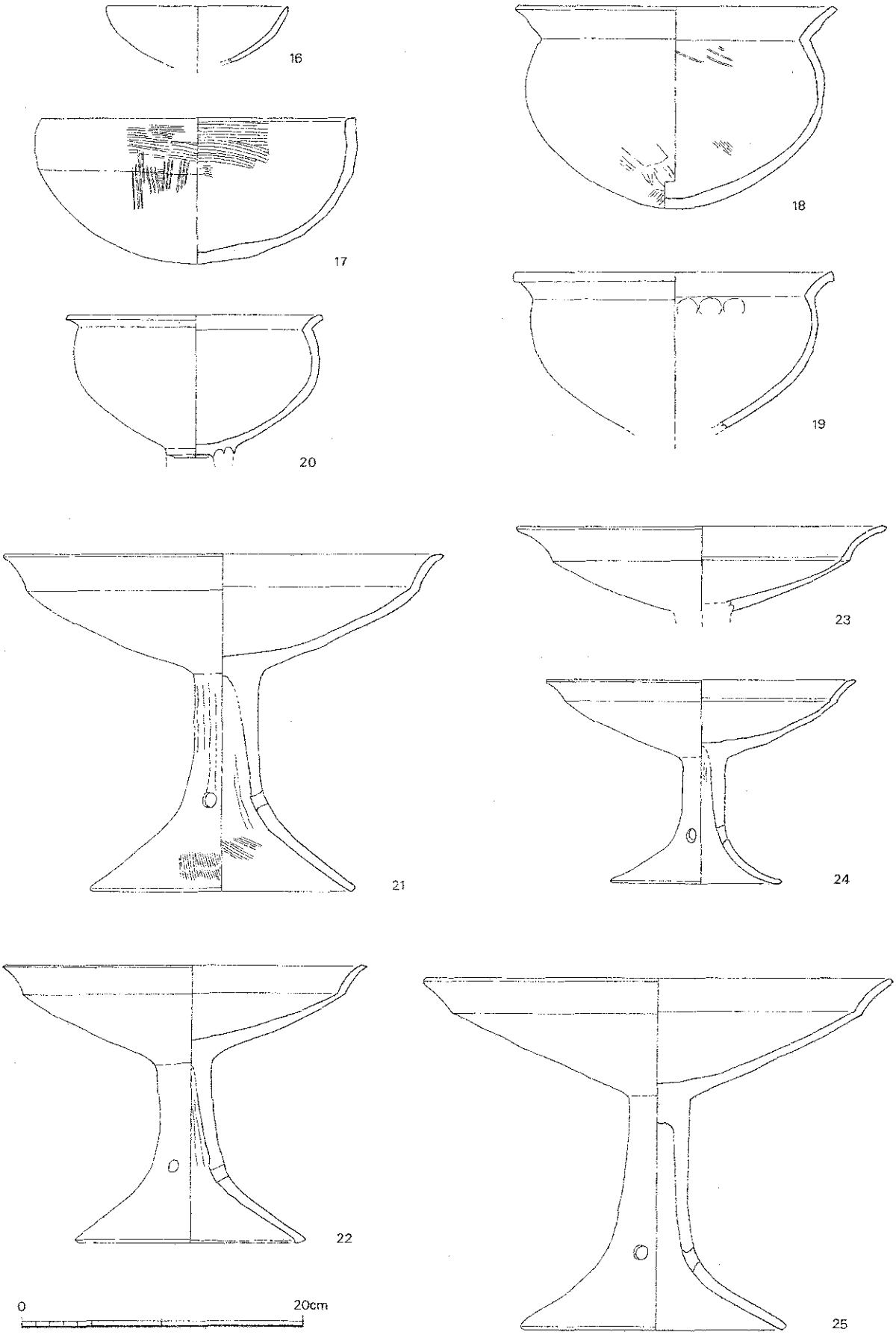

第68図　A区1号濠出土土器（1／4）



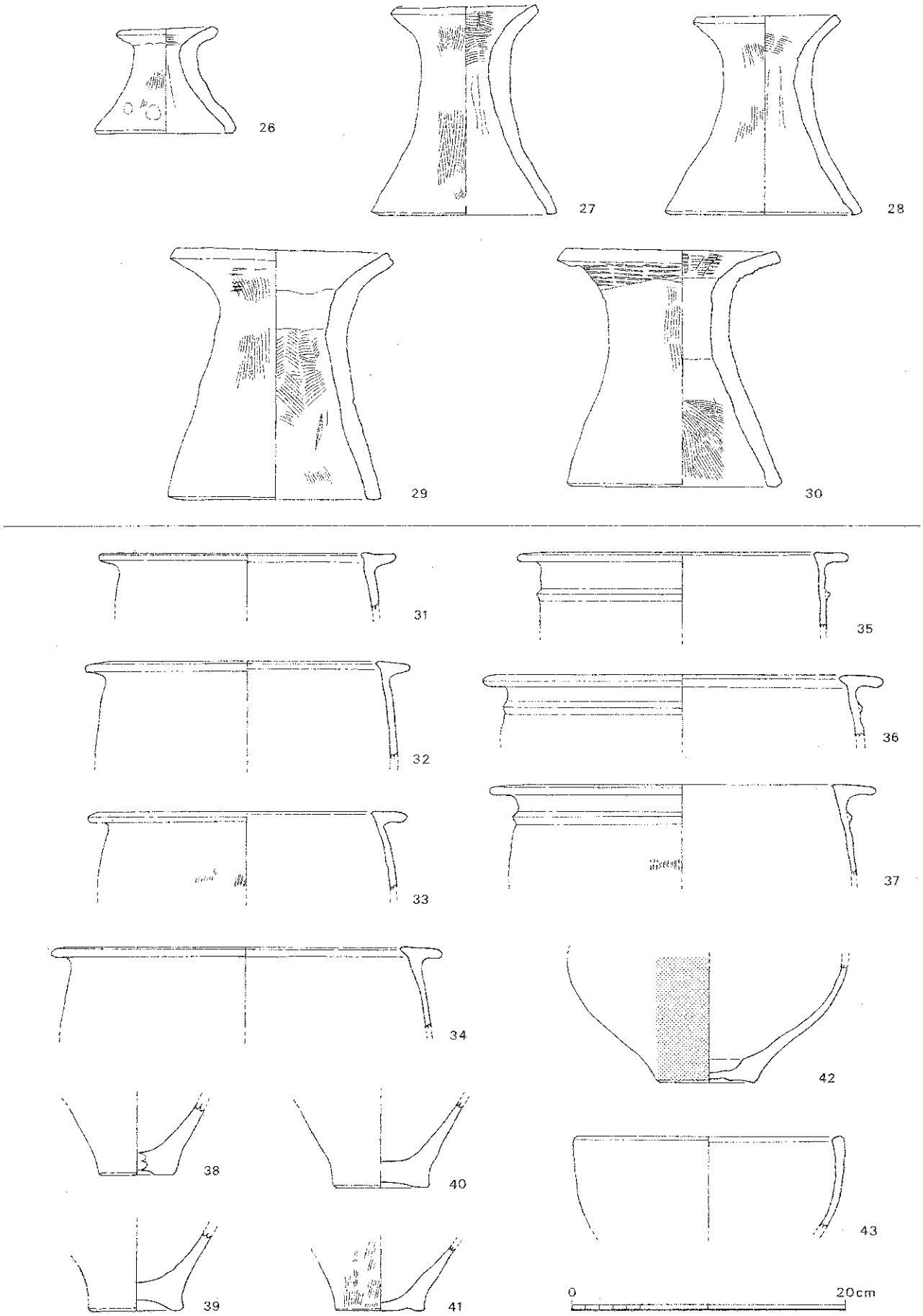

第69図　A区2号濠上層出土土器①（1／4）




第70図　A区2号濠上層出土土器②（1／4・1／6）




第71図　A区２号濠上層出土土器③（１／４）




第72図　A区2号濠上層出土土器④および下層出土土器（1／4）

者ともに橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含み，20はさらに角閃石を含む。21～25は高杯である。21～24は，丸みをもって開く杯下半部から屈曲して口縁が外反するもので，口縁はそれほど長く発達していない。25も同様の形態をもつが，杯下半部が直線的に開いている。脚部の穿孔は焼成前のもので，３孔である。色調は，22・23が橙色，21がにぶい橙色，24が明褐色，25がにぶい黄橙色を呈する。胎土には，23が石英・長石を含む他は，いずれも石英・長石・金雲母を含んでいる。26～30は鼓形の形態をもつ器台である。30が口縁を半分ほど欠失している他はほぼ完形の資料である。26は，27と入れ子の状況で出土した小形品である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂が含まれている。27・28は類似した形態をもち，外面がハケ，内面にはしぼり痕がみられる。両者ともに，橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂が含まれている。29・30は比較的に大形の資料で，体上端部には叩き痕がついている。色調は，29がにぶい黄橙色，30が明褐灰色を呈し，胎土はともに石英・長石・金雲母を含む。以上の２号濠上層の土器は，１の甕と16の鉢を除くと，弥生後期後半の下大隈式を主体とする良好な資料といえよう。

**Ａ区２号濠下層出土土器**（第72図）

31～43は，２号濠の５～８層から出土した土器である。31～41は甕である。31～37は，甕上半部の破片である。31～34は，比較的短い鋤先形口縁の甕である。31は平滑なナデ仕上げされる。他は風化を受けているが，33はハケ目が残っている。色調は，31がにぶい褐色，32・33がにぶい橙色，34がにぶい赤褐色を呈し，胎土は31が石英・長石，32が石英・長石・赤色砂，33・34が胎土に石英・長石・金雲母を含む。35～37は，鋤先形口縁の甕で口縁下に断面三角形の突帯をもつものである。色調は，35がにぶい黄褐色，36が明赤褐色，37がにぶい赤褐色を呈し，胎土は35が石英・長石・赤色砂・金雲母，36が石英・長石・金雲母，37が石英・長石・赤色砂を含む。38～41は，甕底部片である。38～40は外底面がくぼみをもち，41は輪状にくぼみをもつものである。色調は，38が橙色，39・40がにぶい橙色，41が明褐色を呈し，胎土は38・41が石英・長石・金雲母，39が石英・長石，40が石英・長石・赤色砂・金雲母を含む。42は丹塗壺の体下半部片である。外面はヨコミガキされ，内面はナデ仕上げされている。明赤褐色の色調で，胎土には石英・長石を含む。43は，椀状の鉢上半部片である。器表は風化を受けている。浅黄橙色の色調で，胎土には石英・長石・赤色砂を含む。以上の２号濠下層の土器は，弥生中期の須玖Ⅰ式古段階から須玖Ⅱ式古段階までの資料を含んでいて，上限となる弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階に濠が掘削されたことが考えられる。

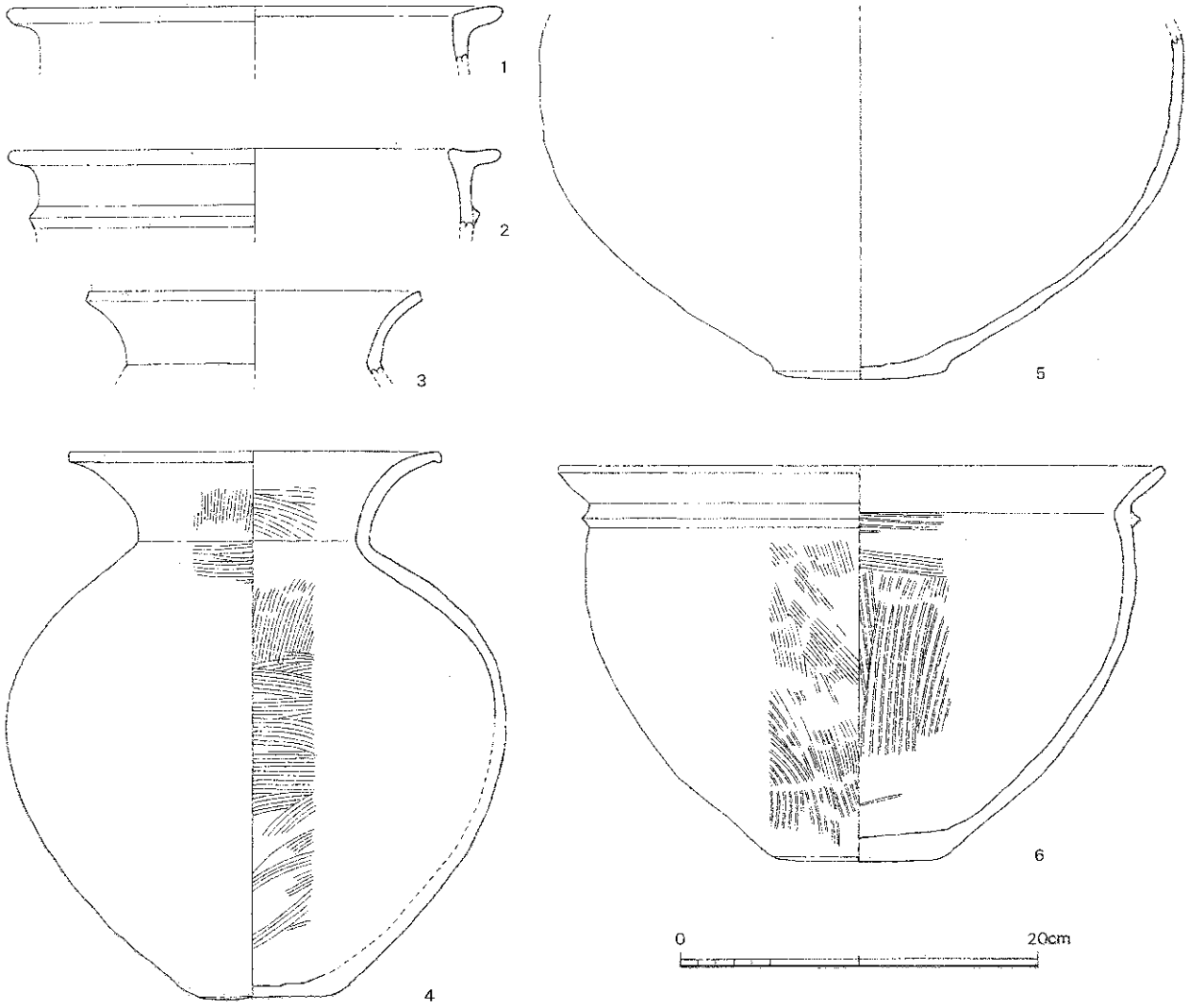
**Ｅ区１号濠出土土器**（第73図）

１～６は，Ｅ区１号濠から出土した土器である。１・２は最下層（14層）から出土した甕である。短い鋤先形の口縁で，２は口縁の下に断面三角形の突帯をもつ。器面はナデ仕上げされている。橙色の色調で，胎土に２が石英・長石・金雲母，３が石英・長石を含む。１・２の最下層の土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式である。３～６は，上層から出土した土器である。３～５は壺で，３・４は口縁が朝顔形に開く広口壺である。４はほぼ完形の品で，器面はハケ調整され，さらに口縁はヨコナデ，胴部外面はナデ消されている。底は凸レンズではないが少し丸みをもっている。５は，体下半部で底

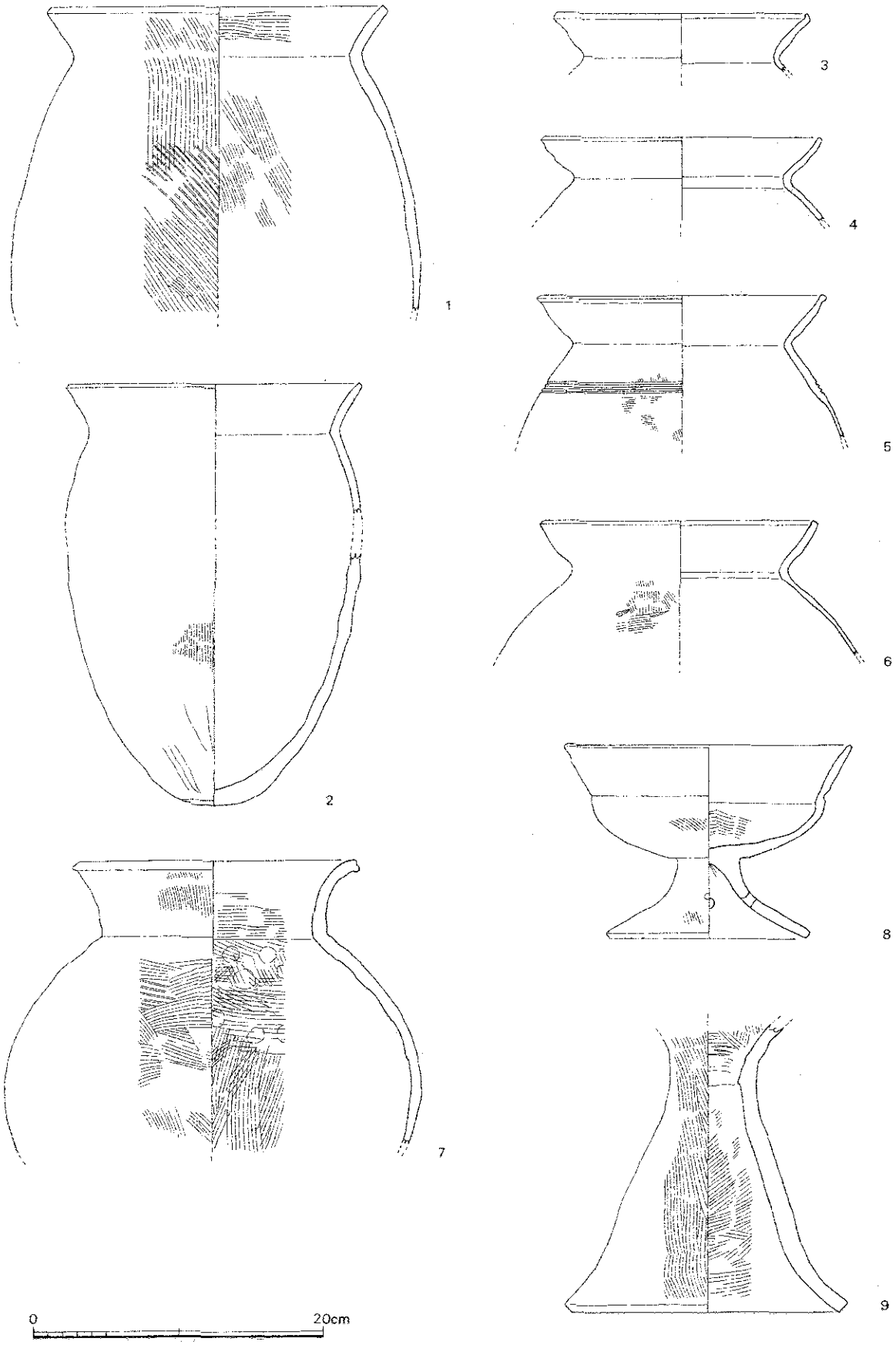
部が円盤状をなしている。色調は，３・４がにぶい橙色，５がにぶい黄橙色を呈する。胎土には，５が石英・長石，３が石英・長石・金雲母，４が石英・長石・金雲母・角閃石を含んでいる。６は，ほぼ完形の大形鉢である。「く」の字形口縁で，底部は少し凸レンズをなしている。内外面はハケ調整され，口縁はヨコナデ，内面下端はナデ仕上げされる。13層の炭化物層から出土した。３～６の上層の土器は，弥生後期中頃～後半にかけての資料である。

**Ｆ区１号濠出土土器**（第74図）

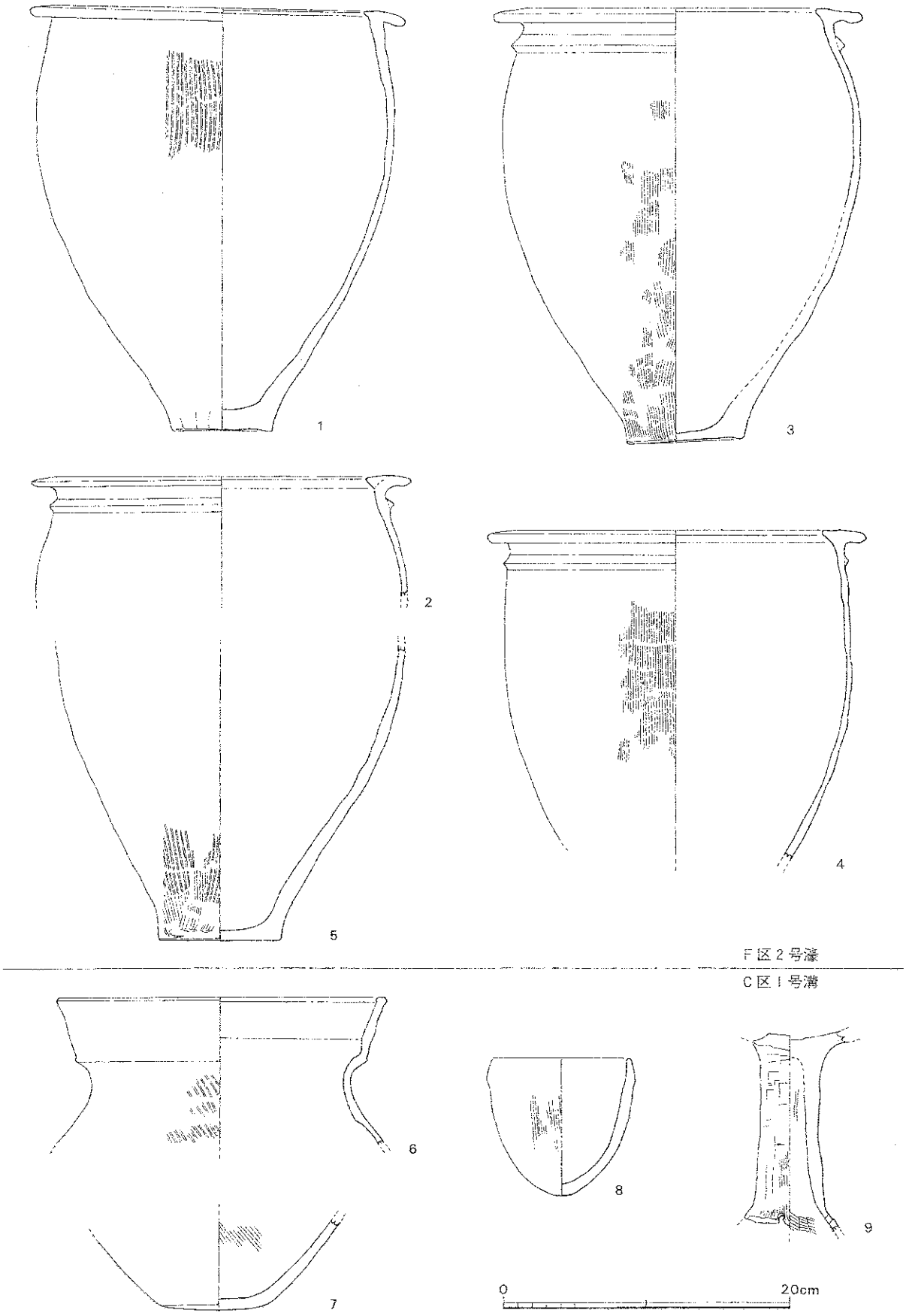
１～８は，甕である。１・２は「く」の字形口縁の在地系の甕で，２は下半が板状具でナデられ丸い凸レンズ底をなしている。色調は両者ともに橙色を呈し，胎土には１が石英・長石・金雲母，２が砂岩砂を含んでいる。３～６は，布留式の甕である。胴上部に５は３条の沈線，６は刺突文を施している。口縁端部は，３・６が上方に，５は外方に摘みぎみに仕上げている。色調は，３はにぶい黄褐



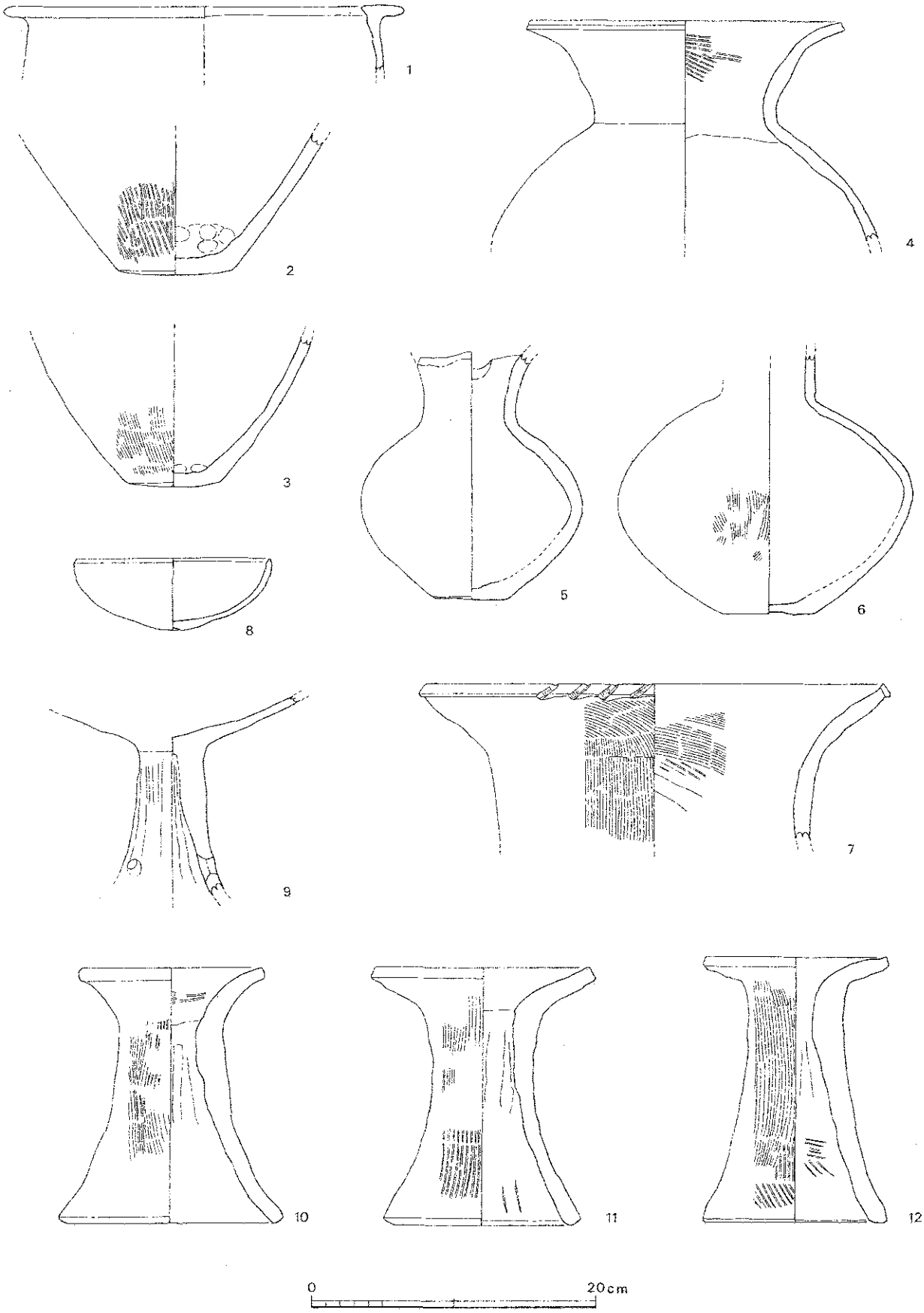

**第73図　Ｅ区１号濠出土土器（１／４）**




第74図　F区1号濠出土土器（1／4）




第75図　F区2号濠出土土器・C区1号溝出土土器（1／4）




第76図　F区3号溝出土土器（1／4）

色，4～5はにぶい黄橙色を呈する。胎土は，3と6が石英・長石・金雲母，4が石英・長石，5が石英・長石・赤色砂を含んでいる。7は口縁が外湾する広口壺で，胴部は丸く球状をなしている。内外面ともにハケ調整され，胴内面には指オサエ痕が残る。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含んでいる。9は比較的低脚の高杯である。杯部は体下半が丸みをもち，屈曲部から口縁は直線的に開くもので，端部は面取りされて平坦におさめている。脚台は裾部がスカート状に開き，焼成前の穿孔が3箇所施されている。橙色の色調で，胎土はわりと精良であるが石英・長石・金雲母・赤色砂を含んでいる。9は，口縁部を欠失する他は完形の器台で，くびれ部が細い割りに裾が長く開いている。内外面ともにハケ調整されている。橙色の色調で，胎土には石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。以上のF区1号濠出土品は，弥生終末から古墳前期（柳田Ⅱb式・井上古墳前期2式）までの資料を含んでいる。

**F区2号濠出土土器**（第75図）

1～5は，F区2号濠から出土した甕である。1は鋤先形口縁の甕で，ほぼ完形品である。2～4は鋤先形口縁の下に断面三角形の突帯をもつ甕で，3はほぼ完形品で胴部に張りをもっている。5は甕胴下半部である。色調は，1が橙色，2がにぶい褐色，3がにぶい黄橙色，4・5がにぶい赤褐色を呈する。胎土は，4が石英・長石・金雲母を含む他は，石英・長石を含んでいる。これらの土器は弥生中期後半の須玖Ⅱ式古段階の資料である。

**C区1号溝出土土器**（第75図）

6～9は，C区1号溝から出土した土器である。6・7は壺である。6は山陰系の二重口縁壺で，口縁端部は肥厚され摘みぎみにおさめている。ハケをナデ消して仕上げられ，胴部内面はヘラケズリされている。7は凸レンズ状の底をもつ体下半部である。色調は，6が橙色，7が明褐色を呈し，胎土は，6が石英・長石・角閃石・金雲母，7が石英・長石・金雲母を含む。8は小形の深鉢で，底は尖ぎみの小さな平底がつく。ハケ調整され，ナデ仕上げされる。橙色の色調で，石英・長石を含む。9は高杯で，在地系の長めの脚部である。外面は，ハケの後にヘラ状具でタテミガキされている。焼成前の孔が3箇所施されている。橙色の色調で，胎土に石英・赤色砂を含んでいる。以上のC区1号溝出土品は，弥生後期後半から古墳前期の資料である。

**F区3号溝出土土器**（第76図）

1～12は，F区3号溝から出土した土器である。1～3は，甕である。1は，鋤先形口縁の甕で，器面は風化を受けている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含んでいる。2・3は凸レンズ状底部の甕体下半部である。外面はハケ調整，内面はナデ仕上げされ，内底付近には指オサエ痕が残る。色調は，2がにぶい赤褐色，3が橙色を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。4～7は，壺である。4は，口縁が朝顔形に開く広口壺上半部である。内外面は風化を受けているが，口縁内面にハケ目が残っている。橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含んでいる。5・6は，口縁が打ち欠かく他は，ほぼ完形の長頸壺である。胴中位が尖りぎみに張りをもち扁球状をなしていて，底は平底である。外面は平滑ナデ仕上げされている。色調は，両方ともにぶい橙色

を呈し，胎土には5が石英・長石・金雲母，6が石英・長石・角閃石を含む。口縁端部に刻目を有するわりと大形の広口壺である。外面はハケ，内面はハケとナデ消しを施している。浅黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。8は，小形の浅鉢である。小さくくぼんだ底部から内湾ぎみに立ち上がり，口縁端部は尖りぎみにおさめている。浅黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含む。9は，高杯の杯下半から脚部の破片である。杯部は平滑ナデ仕上げ，脚部はタテミガキが施されている。焼成前の孔が3箇所みられる。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。10〜12は口縁と裾部の一部を欠失する他はほぼ完形の器台である。形状は，くびれが上部にある鼓形の器台である。外面はハケ調整され，内面はナデ仕上げされ，くびれ部内面にはしぼり痕が入る。色調は，10・11が橙色，12が明赤褐色を呈し，胎土には10が石英・長石・角閃石・金雲母，11・12が石英・長石・金雲母を含む。以上のF区3号溝出土土器は，1を除くと，弥生後期中頃〜終末にかけての資料である。

②石器（第77〜79図）

1は，磨製石剣の基部と思われる破片で，両側面に打ち欠いた抉りがみられる。頁岩製で，69gを測る。A区のピットから出土。2は，頁岩製の石鎌先端部片である。幅が2.2cmしかなく，かなり使いこまれている。A区2号竪穴住居出土。3・4は粘板岩製の扁平片刃石斧である。3はF区1号濠出土で，32gを測る。4はA区1号濠出土で，51gを測る。5は，頁岩製の蛤刃石斧である。全面に敲打痕が残っている。A区2号濠出土で，517gを測る。6〜9は砥石である。6・9は砂岩製，7・8は粘板岩製で，6は荒砥，9は中砥，7・8は仕上砥で，6は325g，7は300g，8は22g，9は188gを測る。6はA区，7はA区2号竪穴住居，8はA区1号濠，9はE区2号濠出土。10〜19は，磨石・凹石・敲石である。13は一面に磨面をもつ磨石。10・11・16・19は磨石・敲石の機能をもち，11・12・14・16・17・19は中央に使用痕をもつ。15は上下面に磨面をもつ凹石で，側面にも敲き痕がつく。10・16が安山岩の他は，玄武岩の円礫を用いている。10が765g，11が1,100g，12が940g，13が1,120g，14が1,040g，15が815g，16が820g，17が960g，18が1,000g，19が935gを測る。10・14はA区2号竪穴住居，11〜13はA区2号濠，15はF区2号濠，16はE区2号濠，17〜19はF区3号溝出土。

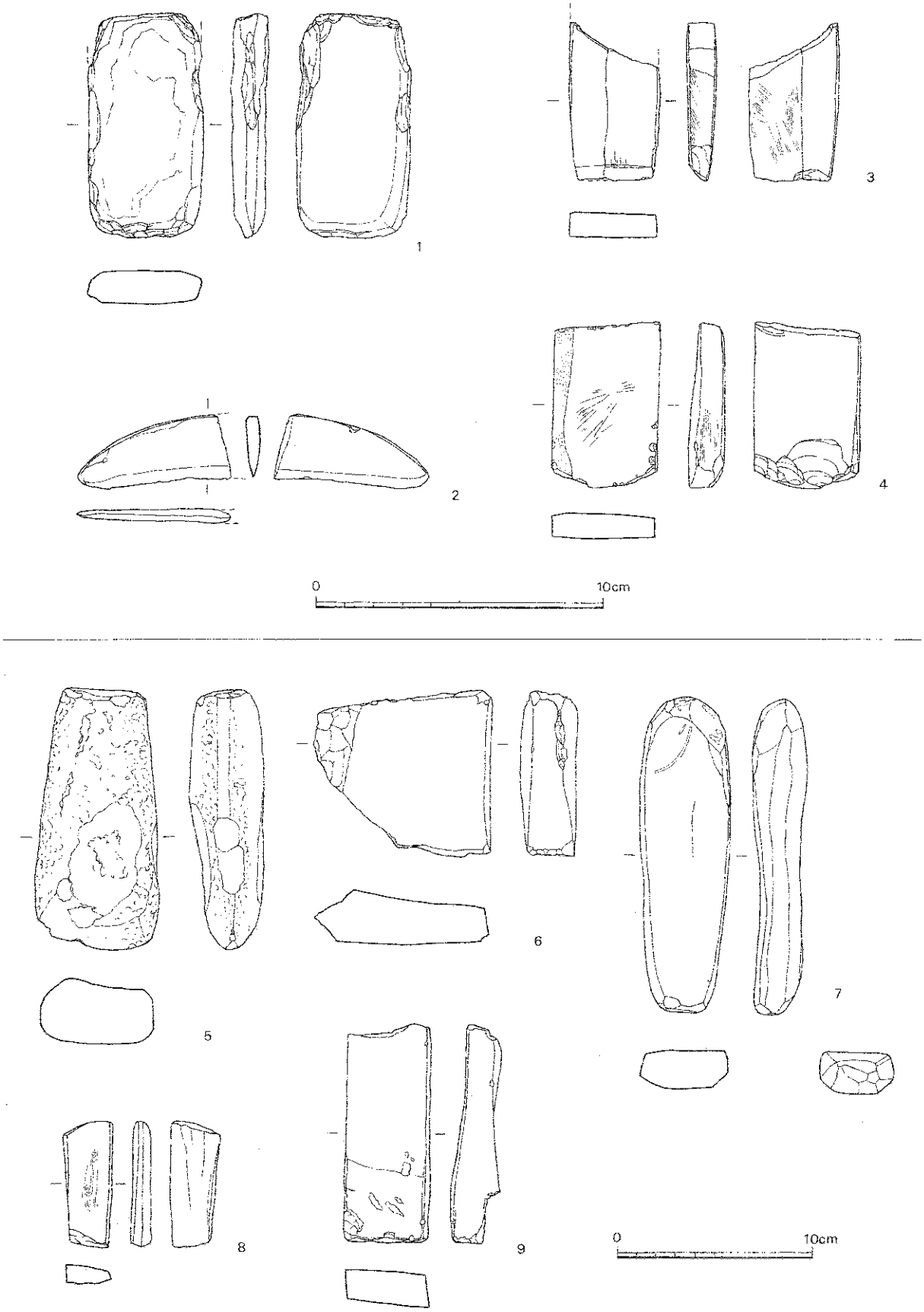
20は，上下に平坦な面をもつ台石で，1/3〜1/2ほどを欠失している。玄武岩製で7kgを測る。

③土製品・石製品（第80図）

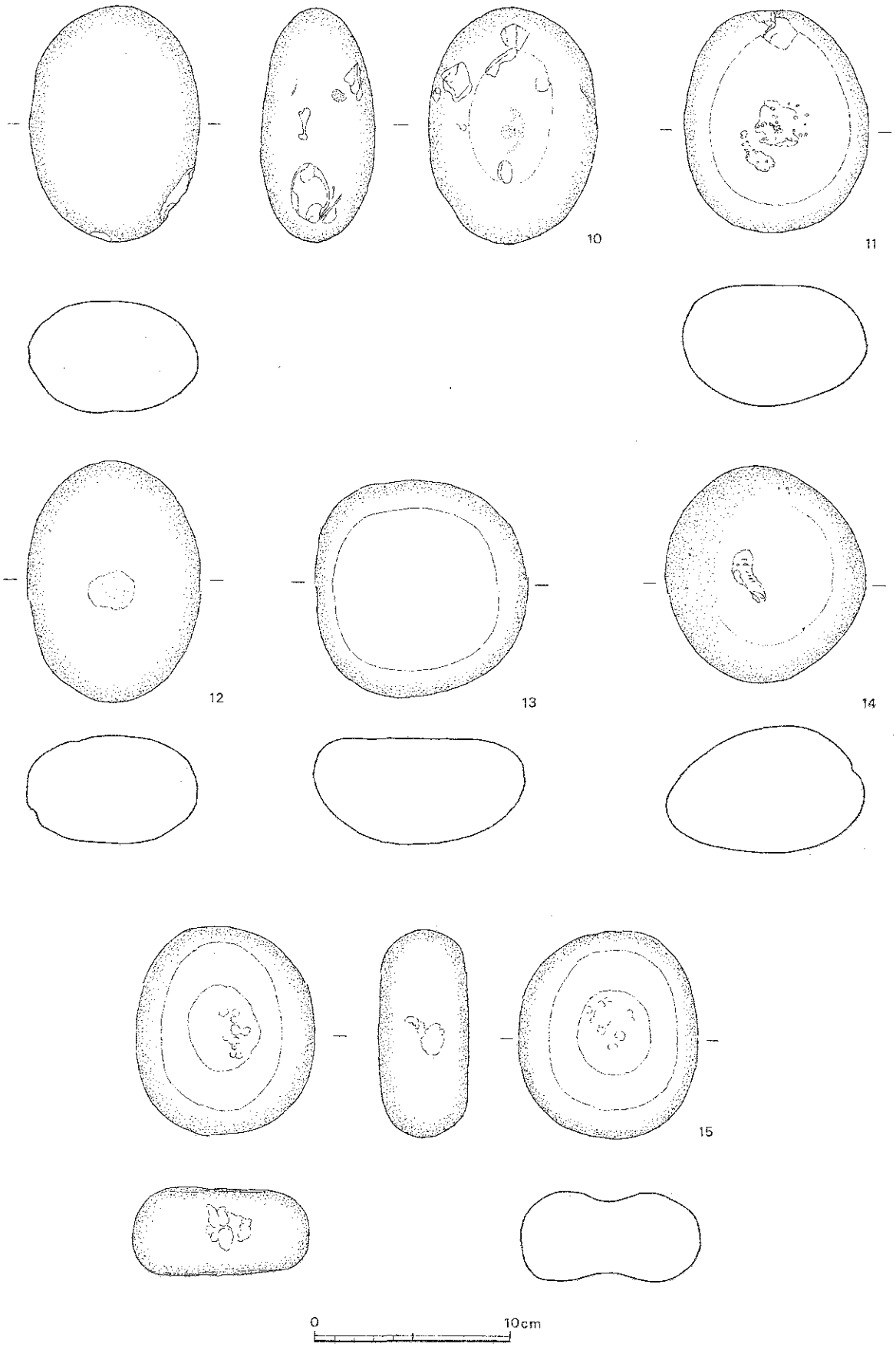
1は，土製の投弾で，やや幅広のラクビー球形をなす。長さ4.7cm，径2.8cm，重さ32gを測る。E区1号濠の最下層（14層）出土。2・3は石製円盤で，2は頁岩製の紡錘車，3は滑石製の模造品である。2は，径3.4cm，厚さ8mm，重さ15gを測る。3は裏面が少し欠損しているが，径2.2cm，厚さ3mm，重さ3gを測る。両者ともにA区1号濠出土。

④金属器（第80図）

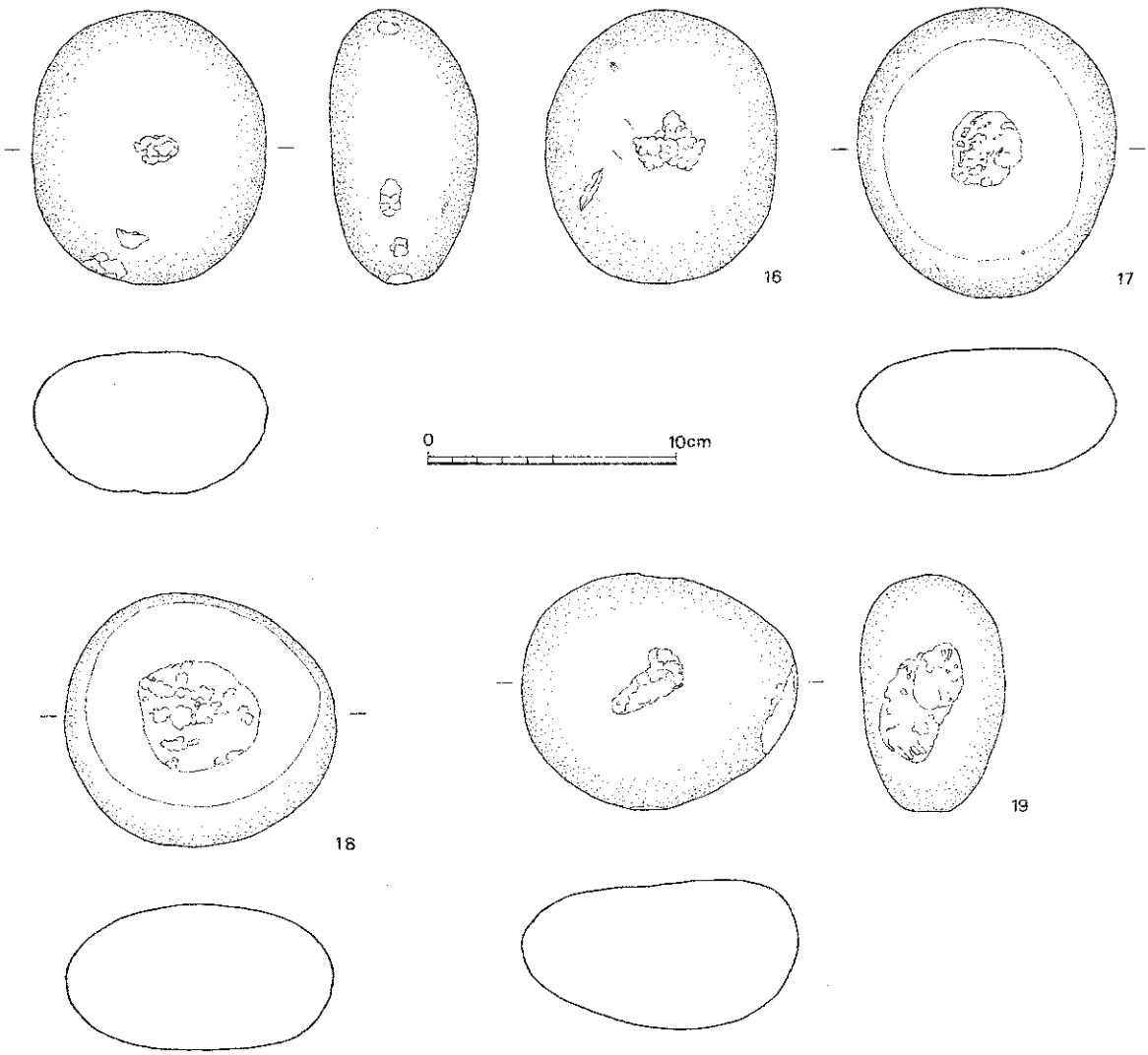
4は，鉄鎌片である。現存長は6.8cm，幅3.3cm，厚さ5mmを測る。A区2号竪穴住居出土。この他に，2号竪穴住居から鉄鏃？，A区1号濠から袋状鉄斧と思われる破片，A区2号濠から鉄片，E区

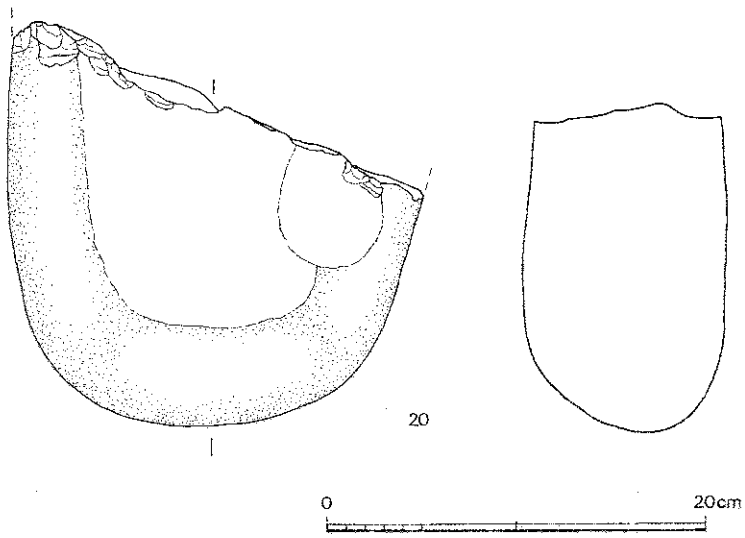



第77図　出土石器①（1／2・1／3）




第78図　出土石器②（1／3）




第79図　出土石器③（1／3・1／4）

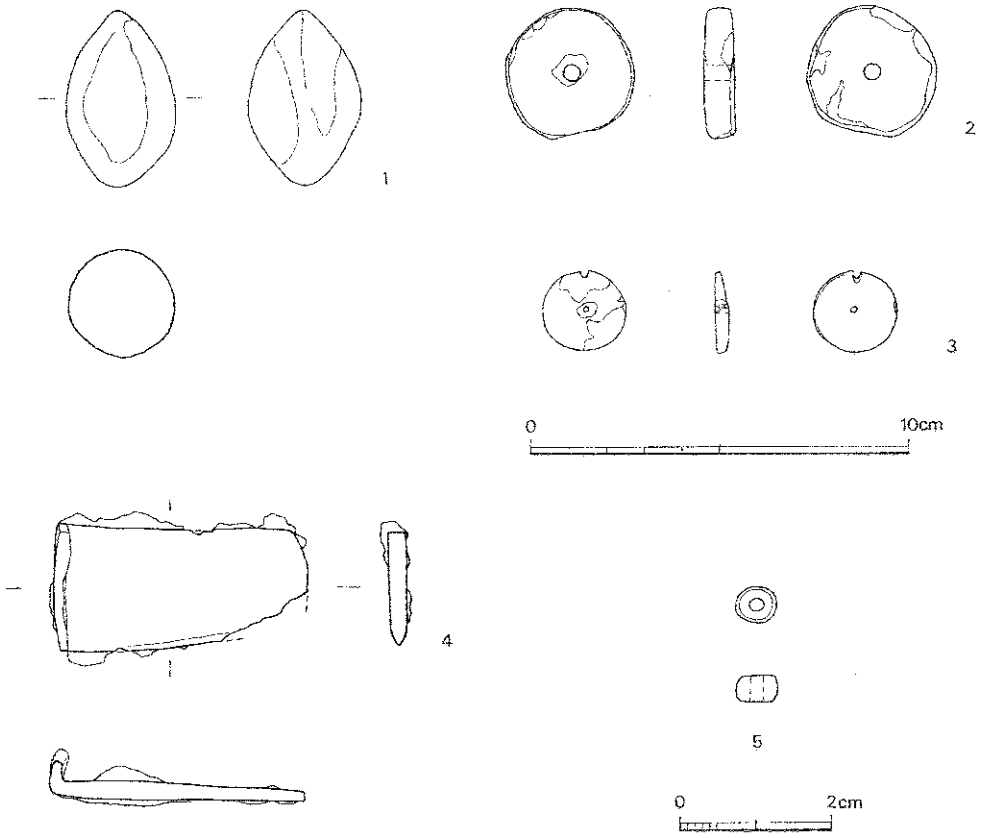
1号濠から鉄鎌？などの鉄製品が出土している。

⑤装飾品（第80図）

5は，ガラス小玉である。濃藍色の色調で，A区2号竪穴住居から出土した。

註1　柳田康雄「九州」『古墳時代の研究』6　雄山閣　1991

2　井上裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児嶋隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』1991

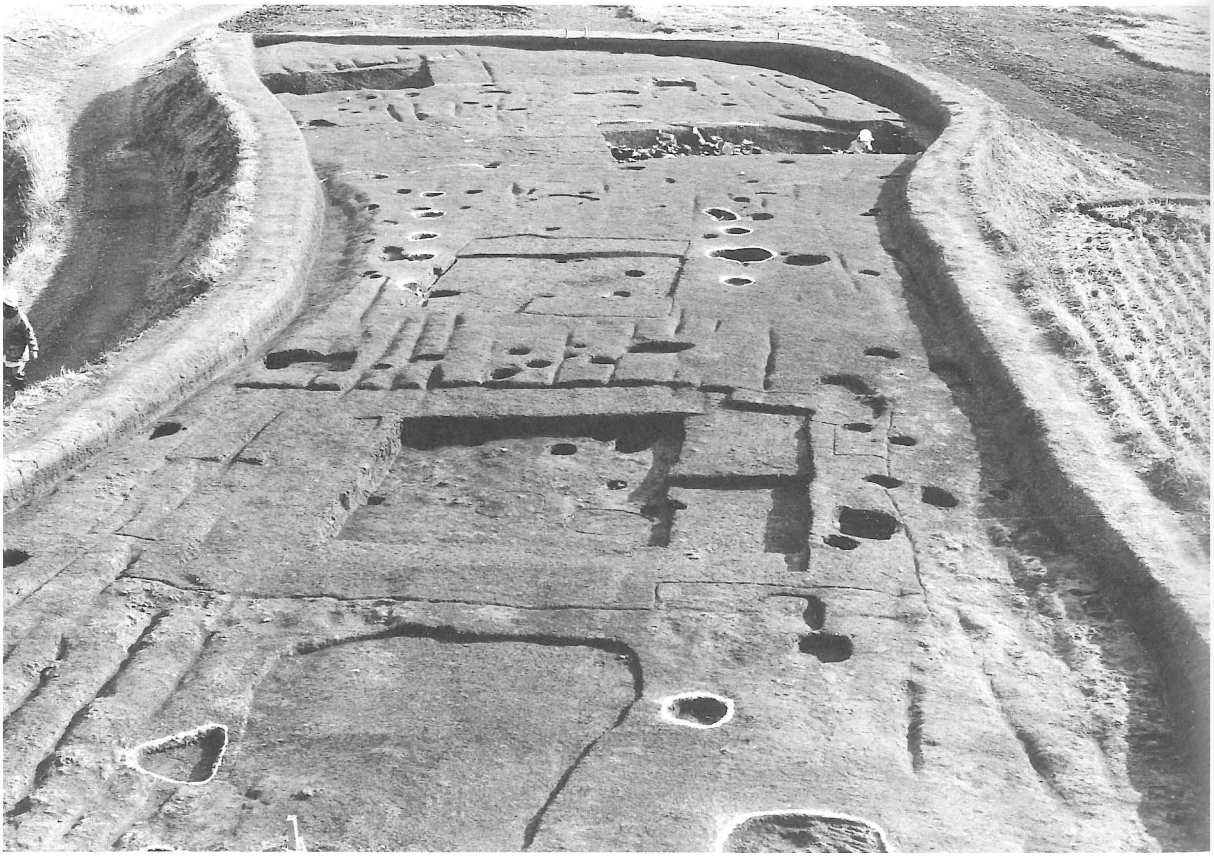



第80図　出土土製品・石製品・金属器・ガラス玉（1／1・1／2）

調査区付近全景（西側上空から）

A区，H・I区全景

A区近景（南から）



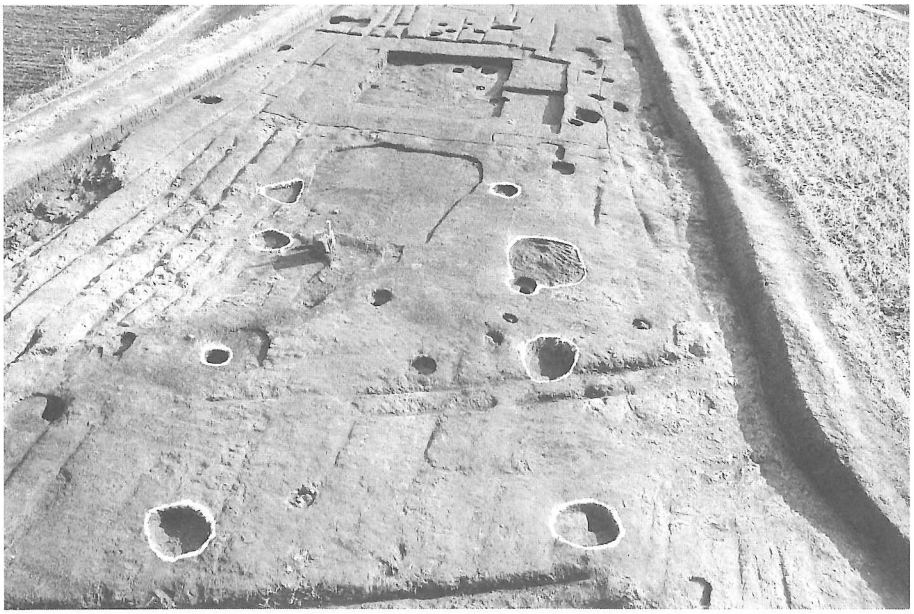
A区近景（北から）

A区
1号住居跡
(西から)

A区
2号住居跡
(北から)

I区
6・7・8号住居跡
(南から)

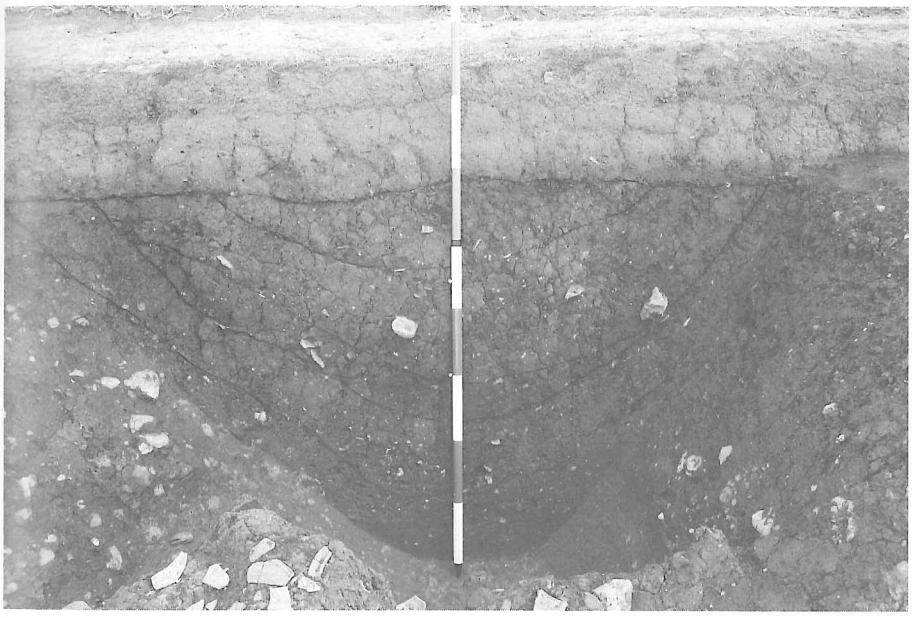
A区建物群
（南から）



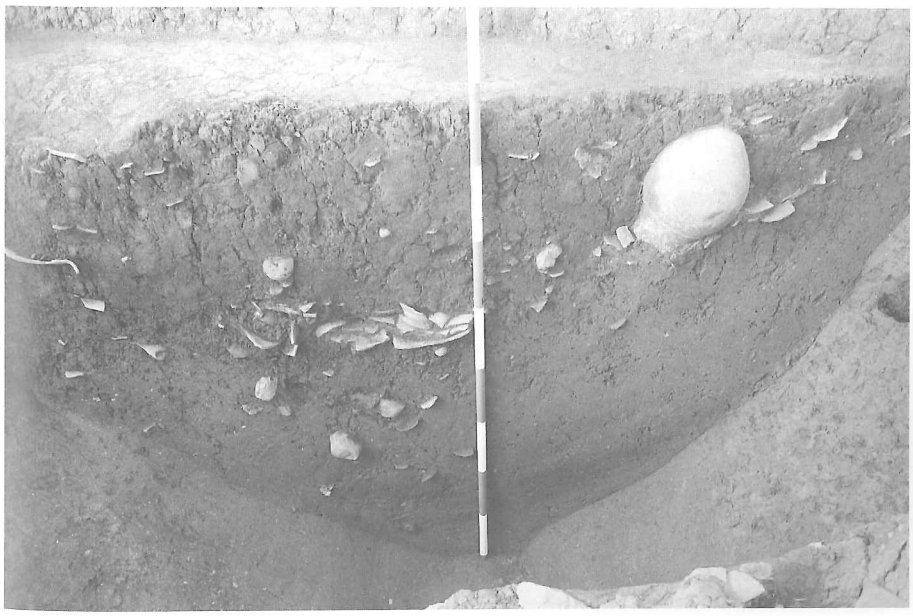
A区
1号建物跡
（北から）

A区
2号建物跡
（南から）

A区調査風景
(南から)

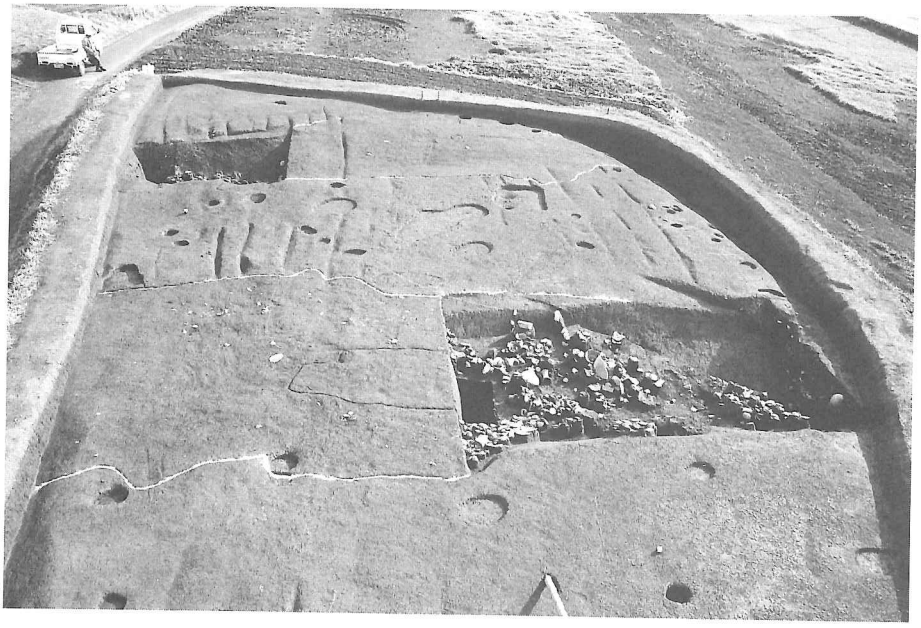


A区
1号濠東壁



A区
2号濠西壁

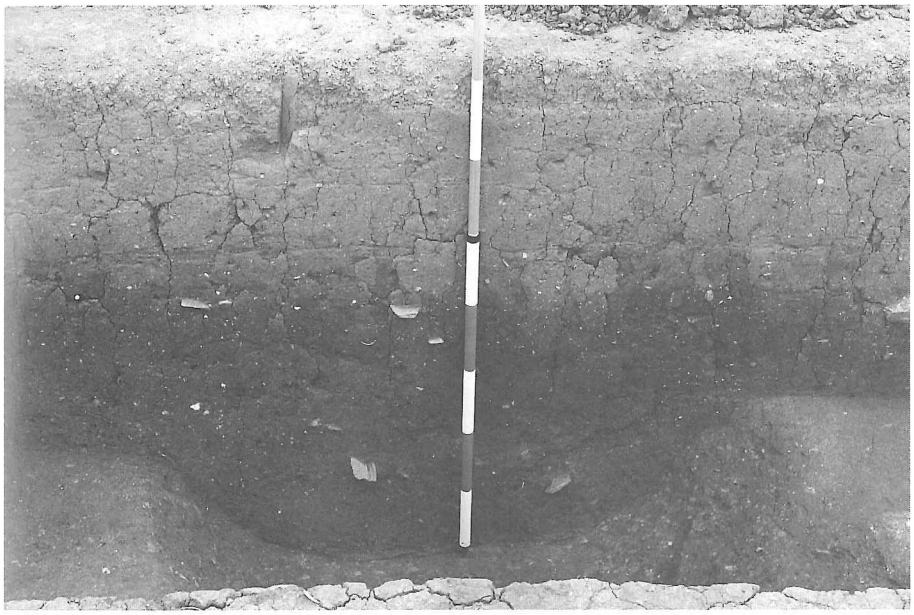
A区
1号・2号濠
(南から)



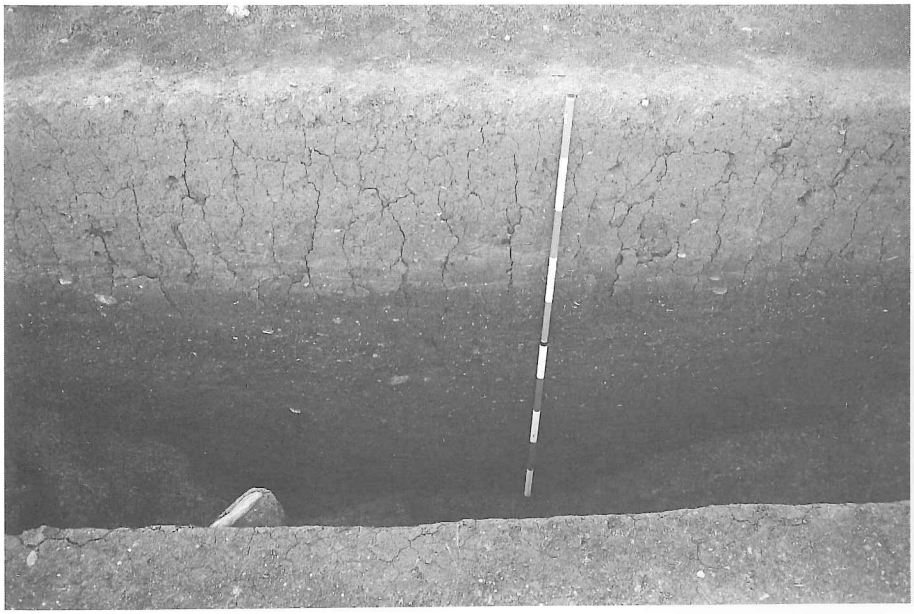
A区
1号・2号濠
(北から)

A区
2号濠遺物出土状況
(北から)

Ｂ区
１号・２号濠
（北から）



Ｅ区
１号濠西壁



Ｅ区
２号濠西壁

F区
2号濠
(東から)

F区
1号濠
(西から)

C区
1号濠
(西から)

### (4) 平成8年度の調査概要

平成7年度の原地区の調査では，台地高台の頂部で祭儀建物群と2条の濠が検出され，西側傾斜面に濠が並行してのび，9棟の竪穴住居跡，3条の溝などの遺構が確認された。平成8年度調査は，高台から東側の傾斜面において，濠がどのようにのびるのか，居住関係遺構の広がりなどを確認する目的で，標高12m前後の畑地・水田・荒蕪地に調査区を設定した。調査区は，A～I区の9箇所の調査壙を設定して，1,140㎡を発掘した。

調査の結果，A区で竪穴住居跡5棟，溝3条，小児甕棺墓1基，B区で竪穴住居跡1棟，ピット，C区で竪穴住居跡3棟，濠3条，D区で竪穴住居跡2棟，濠2条，小児甕棺墓5基，E区で溝1条，G区で溝1条とおびただしい数のピット，H区で竪穴住居跡2棟，ピットなどの遺構が確認された。竪穴住居跡はB区の6号住居が弥生中期の他は，弥生後期から古墳前期の住居である。C区の7号住居，D区の10号住居は，濠が埋没した後に建てられている。濠は，C区の1号・2号濠が高台からつながることが判明し，南端に確認された3号濠とD区の4号・5号濠が新たに検出された。小児甕棺墓は，A区の1号甕棺墓が1基だけ住居域のなかに存在しているが，D区の2号～6号甕棺墓の5基の幼小児棺は4号濠の両岸に並んで設けられている状況が捉えられた。これらは成人が埋葬される一般的な墓地とは異なる性格をもつのであろう。今回の調査では，弥生前期から古墳前期の遺物がコンテナ175箱分出土した。

### (5) 平成8年度調査の遺構

①竪穴住居跡（第89・90図）

**1号竪穴住居跡**（第89図）

A区の北端にある隅丸方形の住居である。長辺3m，短辺2.8mを測る割と小形の住居で，壁面は5～10cm程度が残るに過ぎない。床面には，焼土と炭化物がみられた。主軸方位はN88°Eを測る。古墳初頭期の土器に伴って，三韓系瓦質土器，磨石，砥石などが出土した。

**2号竪穴住居跡**（第90図）

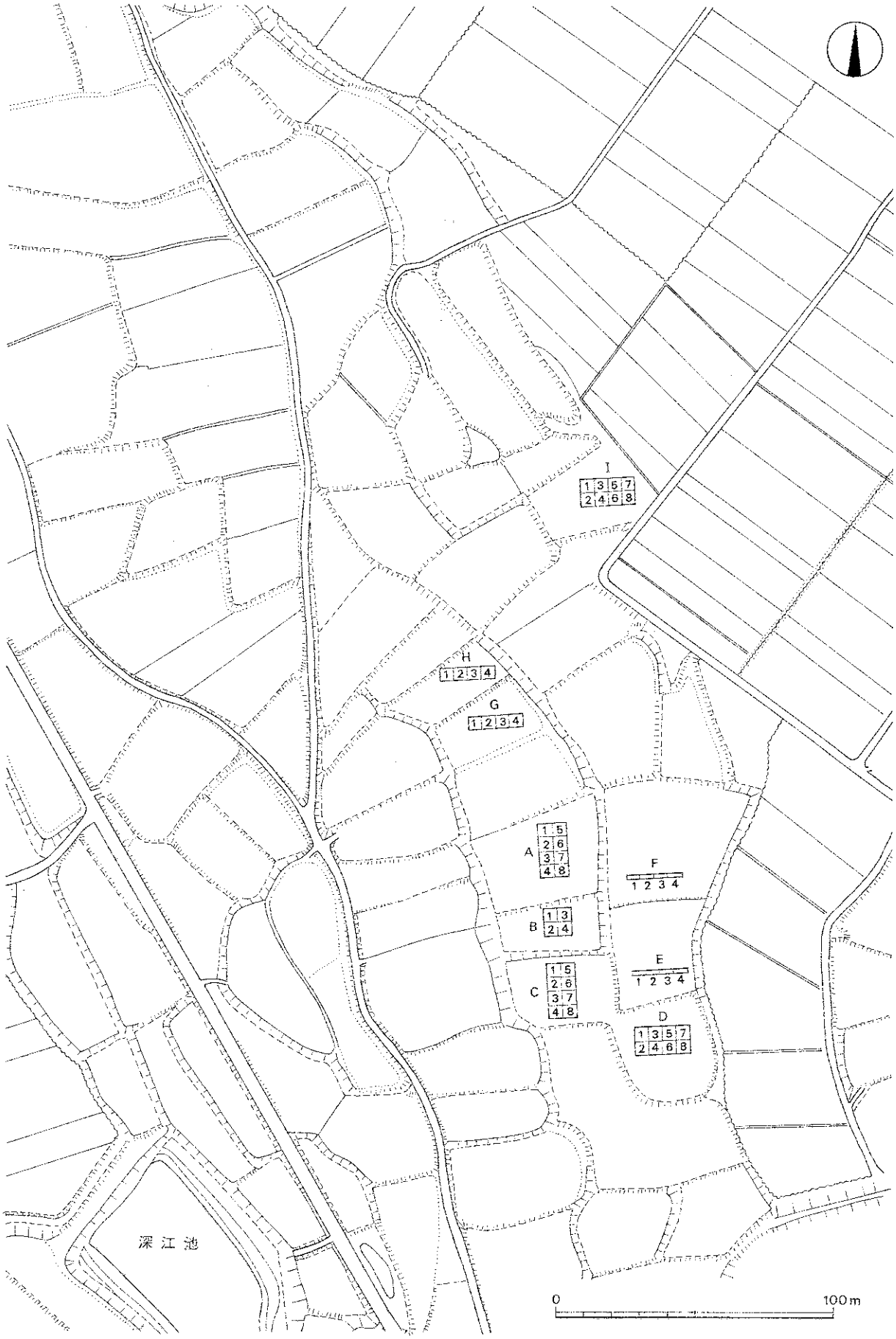
A6区にある方形の住居で，5号住居を切っている。長辺3.2m，短辺3.1mを測り，壁面は12cmから30cmほど残る。床面には焼土と炭化物がみられる。主軸方位はN10°Eを測る。弥生終末から古墳初頭期の土器に伴って，棒状の鉄製品が出土している。

**3号竪穴住居跡**（第89図）

A8区にある隅丸長方形の住居で東壁にかかり，西側には約1mほどのベット状遺構がみられる。長辺3.8m以上，短辺3.5mを測る。壁面は10cm前後残っている。主軸方位はN98°Eを測る。弥生後期～古墳前期の土器片が出土している。

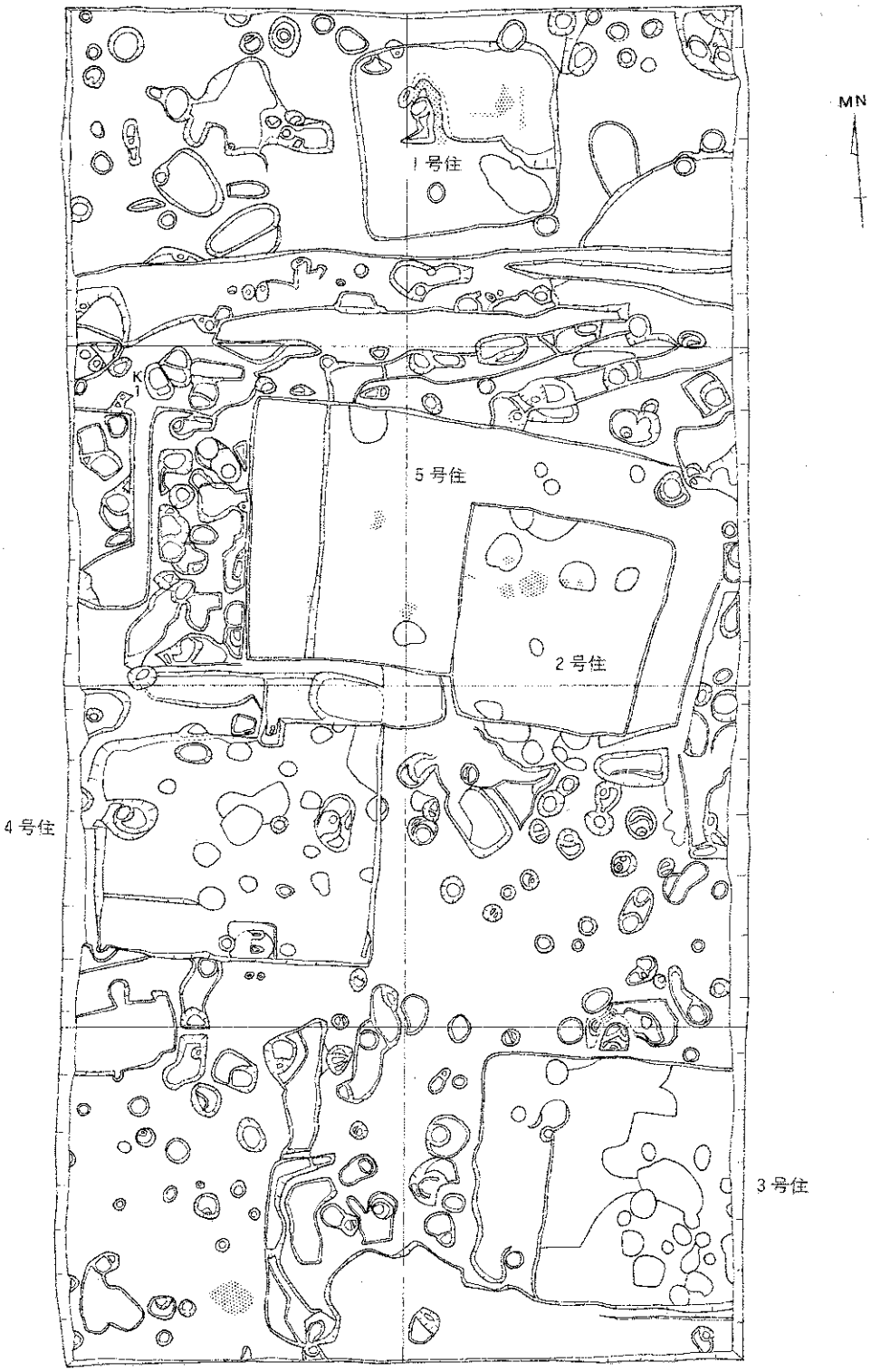
**4号竪穴住居跡**（第90図）

A3区にある長方形の住居で，西壁にかかり，長辺4.5m以上，短辺4.5mを測る。北側から西側にかけて「L」字形に約1m幅のベット状遺構がみられる。北側は一部5号住居を切っている。主軸方位はN80°Wを測る。弥生終末～古墳前期の土器が出土に伴って，砥石が出土している。




第81図　平成８年度調査区域図（１／2,000）

第82図　平成8年度原地区主要遺構（1／500）




凡　例
アミは焼土

0　5m

第83図　A区遺構配置図（1／100）

**5号竪穴住居跡**（第90図）

A2・6区にある長方形の住居で，2号住居と4号住居に切られている。長辺7.3m，短辺3.7mを測る。西側には約1m幅のベット状遺構がついている。主軸方位は，N104°Eを測る。弥生終末前後の土器に伴って，三韓系瓦質土器片，鉄片，石製紡錘車などが出土している。

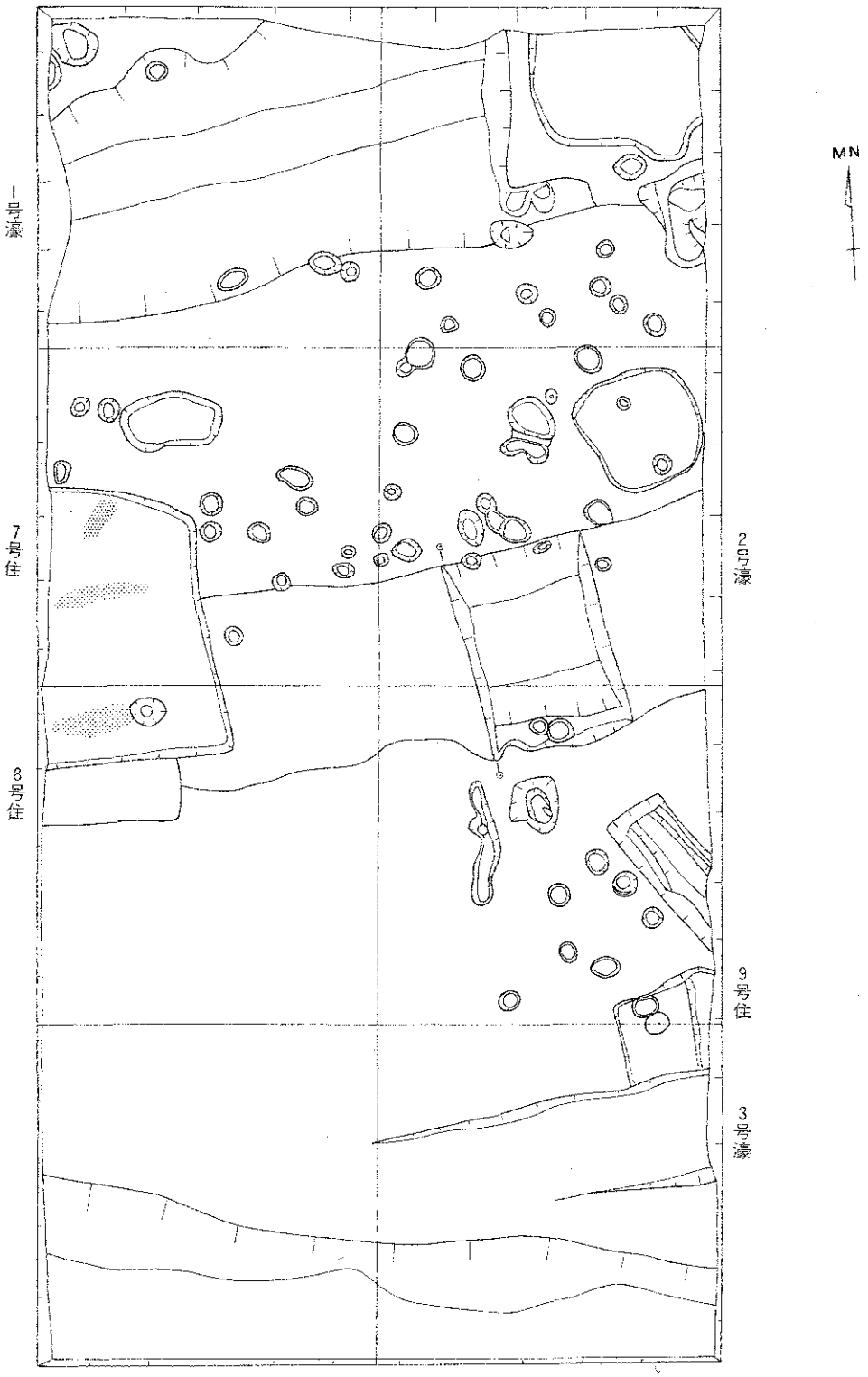
**6号竪穴住居跡**（第89図）

B区にある隅丸方形の住居で，西壁にかかっている。北東側は焼土に覆われていた。長辺3.6m，短辺2.6mを測る。壁面は，20～30cmほど残っている。N23°Eを測る。弥生中期前半の須玖I式土器が出土した。

**7号竪穴住居跡**（第85図）

C2・3区にある隅丸長方形の住居で，2号濠に重複していて，8号住居を切っている。西壁にかかっていて，長辺4.2m，短辺2.8m以上を測る。2号濠が埋没してから建てられた住居である。床面上部には焼土や炭化物がみられ，土器がまとまって出土した。主軸方位はN1°Wで，ほぼ南北を向いている。この住居は，土器を取り上げたが床面まで検出していない。弥生後期後葉～終末頃の土器に

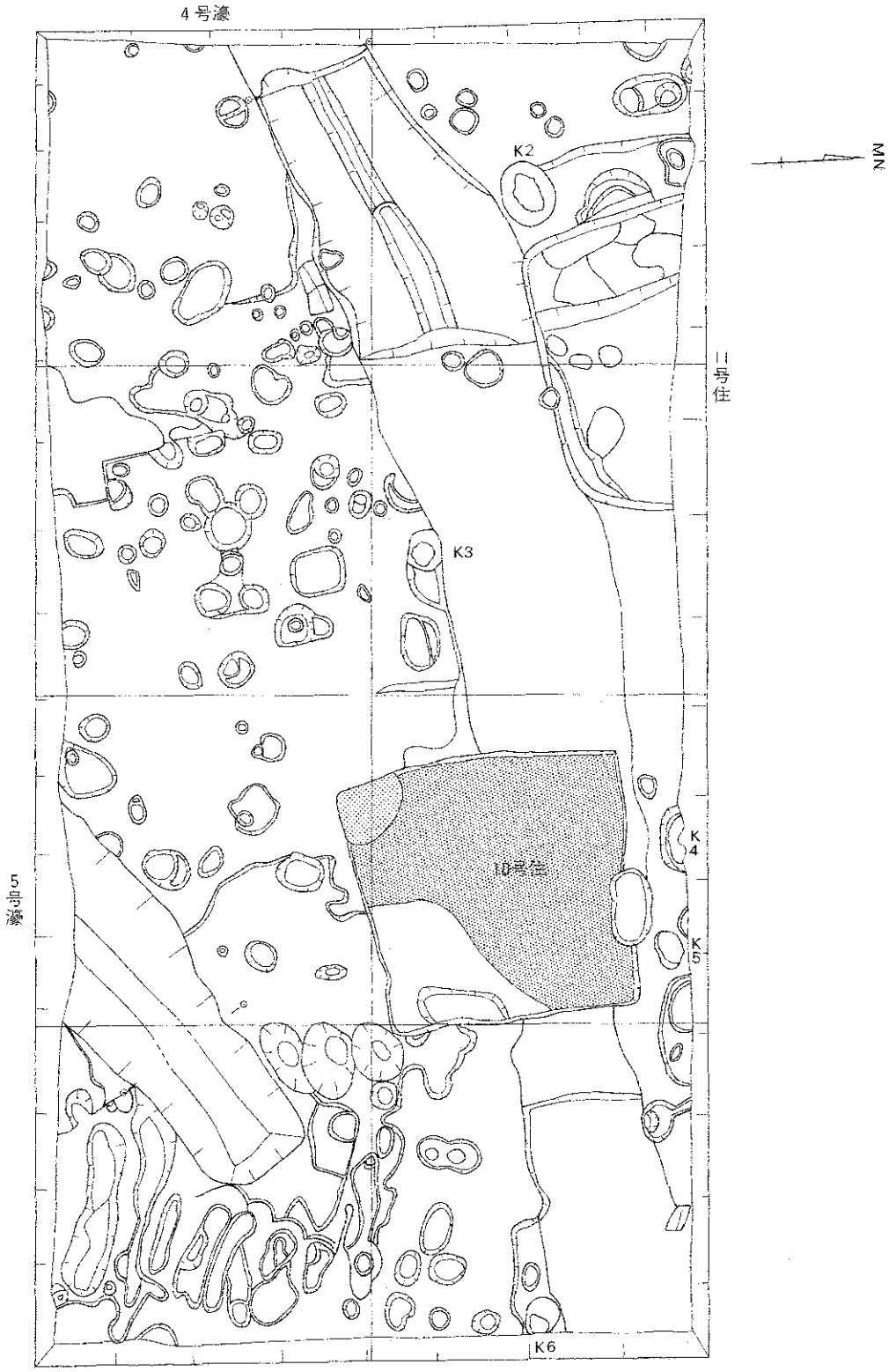
**第84図　B区遺構配置図（1／100）**




凡　例
濃いアミが炭化物
薄いアミが焼土

0　5m

第85図　C区遺構配置図（1／100）




凡　例
濃いアミが炭化物
薄いアミが焼土

0　5m

第86図　D区遺構配置図（1／100）

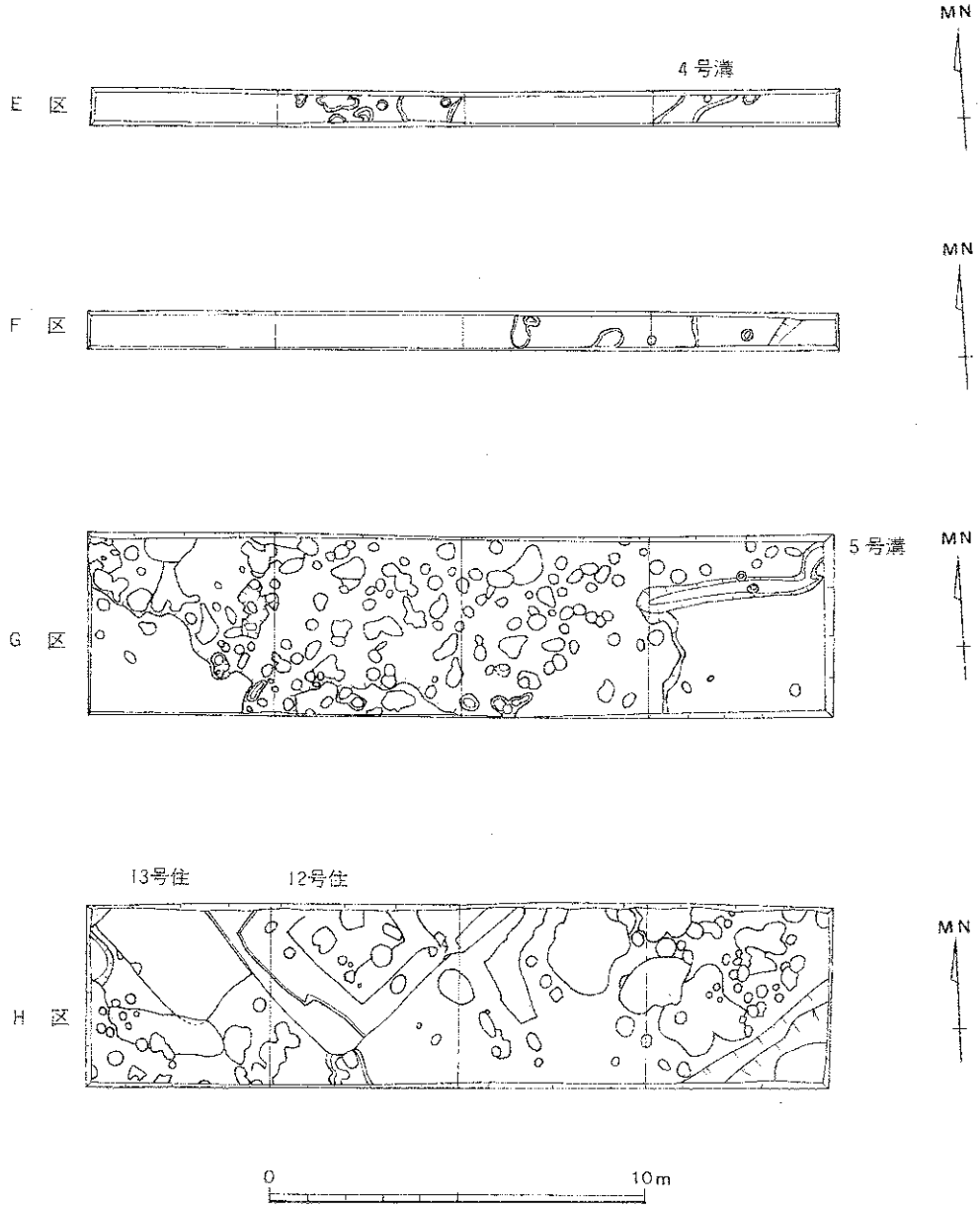
伴って，台石が出土している。

**8号竪穴住居跡**（第85図）

Ｃ３区にある住居で，２号濠に重複している。７号住居にほとんど切られ，南東隅付近が残るにすぎない。現存の規模は，長辺２ｍ，短辺0.9mを測る。輪郭を確認しただけで掘り下げていない。主軸方位は，Ｎ３°Ｅを測る。弥生後期の住居で，２号濠が埋没してから建てられた住居である。

**9号竪穴住居跡**（第85図）

Ｃ７・８区にある隅丸の住居で，３号濠によって大部分を切られている。西側に幅１ｍほどのベッ




第87図　E・F・G・H区遺構配置図（1／200）

ト状遺構がついている。現存の長辺1.6m，短辺1.2m，主軸方位がN 8°Eを測る。弥生後期後半期の土器が出土している。

**10号竪穴住居跡**（第89図）

D 5区にある方形の住居で，床面は炭化物と焼土に覆われている。4号濠の上に重複していて，長辺4.2m，短辺4mを測る。主軸方位はN 4°Wを測る。古墳前期の布留式土器に伴って，砥石・磨石などが出土した。

**11号竪穴住居跡**（第86図）

D 1・3区にある隅丸方形の住居で，北壁にかかっている。長辺3.8m，短辺2.6m以上を測る。西側には幅1mのベット状遺構がついている。主軸方位はN82°Eを測る。弥生後期の土器が出土している。

**12号竪穴住居跡**（第87図）

H 2区にある隅丸長方形の住居で，13号住居を切っている。北壁にかかっていて，長辺6.3m，短辺5.3mを測る。北西側は1.5m前後のベット状遺構をなしているようであるが，残りが良くなかった。床面の状況をみると，2棟の住居跡が重複している可能性をもっている。古墳前期布留式土器に伴って石臼，ガラス小玉2点などが出土。

**13号竪穴住居跡**（第87図）

H 1区にある住居で，12号住居に切られている。現存の規模は，長辺3.9m，短辺2.3mを測る。輪郭を確認しただけで，掘り下げていない。主軸方位は，N40°WあるいはN50°Eを測る。弥生後期の住居であろうか。

②濠・溝（第91図）

**1号濠**（第91図）

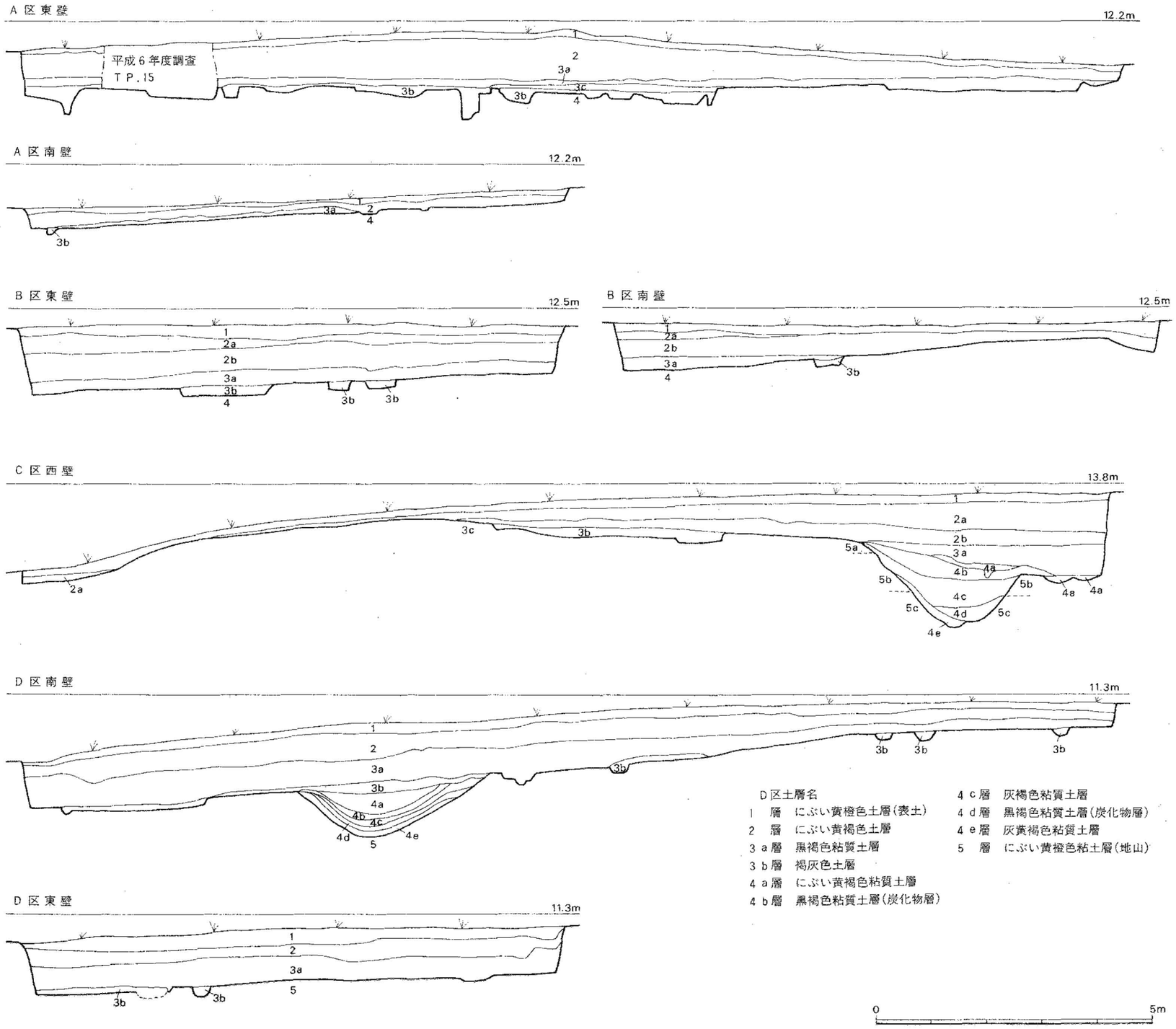
C 1・5区にある東西方向の濠である。濠幅が3～3.6m，西壁の深さが1.5mを測る。断面は，V字形をなし，底面には幅40cmほどの溝状のくぼみがみられ，底面は東へ6mで58cmほど傾斜している。土層断面図をとった東壁では明確にでていないが，4b層と4C層の間に黄褐色粘質土が南から流れ込んだ状況が捉えられた。4a・b層を上層，4c・d・e層を下層とする。上層からは，弥生後期前葉～終末の土器に伴って磨石，敲石，石杵，砥石が出土した。下層からは，弥生中期前半から後半の土器に伴って磨石・凹石が出土した。平成7年度のA区2号濠とつながることが推測される。

**2号濠**（第91図）

C区中ほどのC 2・3，6・7区にある東西方向の濠である。1号濠から4.6m南側に並行して走り，西側には7号・8号住居が重複している。C 6・7区を2m幅だけ掘り下げた。濠幅2.8m，深さ0.9mを測る。断面は，U字形で底面に幅40cmほどの溝がはいる。遺物は少なく，弥生中期の土器が若干出土したにすぎない。平成7年度調査のA区1号濠とつながることが考えられる。

**3号濠**（第85図）

C 8区にある東西方向の濠で，2号濠から5.5m南側に並行して走るが，後世の撹乱によって長さ5



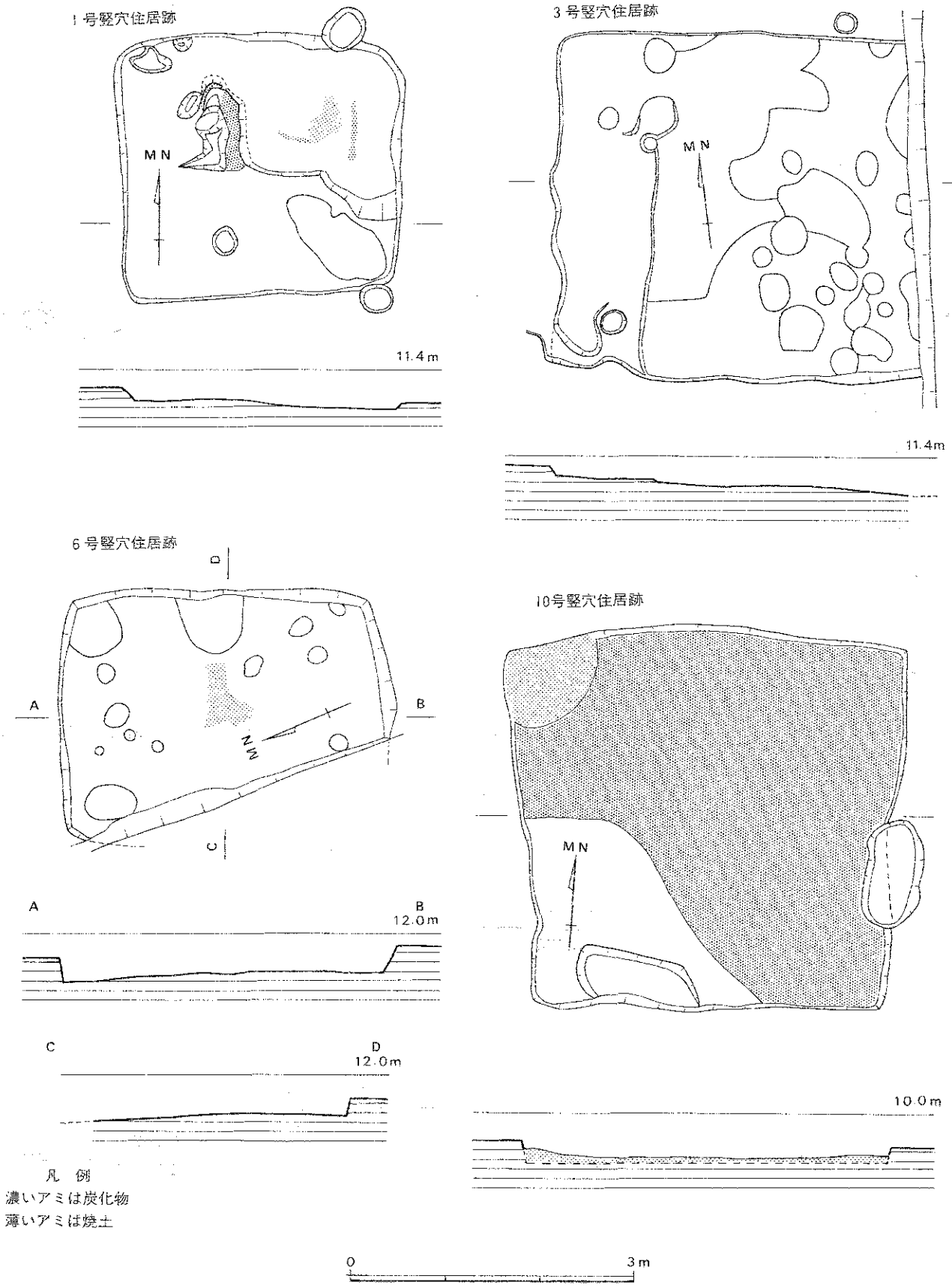

A区土層名
1　層　にぶい黄橙色土層(表土)
2　層　にぶい黄橙色土層
3 a層　黒褐色粘質土層
3 b層　黒色粘質土層
3 c層　暗褐色粘質土層
4　層　にぶい黄褐色粘土層

B区土層名
1　層　にぶい黄橙色土層
2 a層　橙色土層
2 b層　にぶい褐色土層
3 a層　黒褐色粘質土層
3 b層　にぶい赤褐色粘質土層
4　層　にぶい黄褐色粘土層

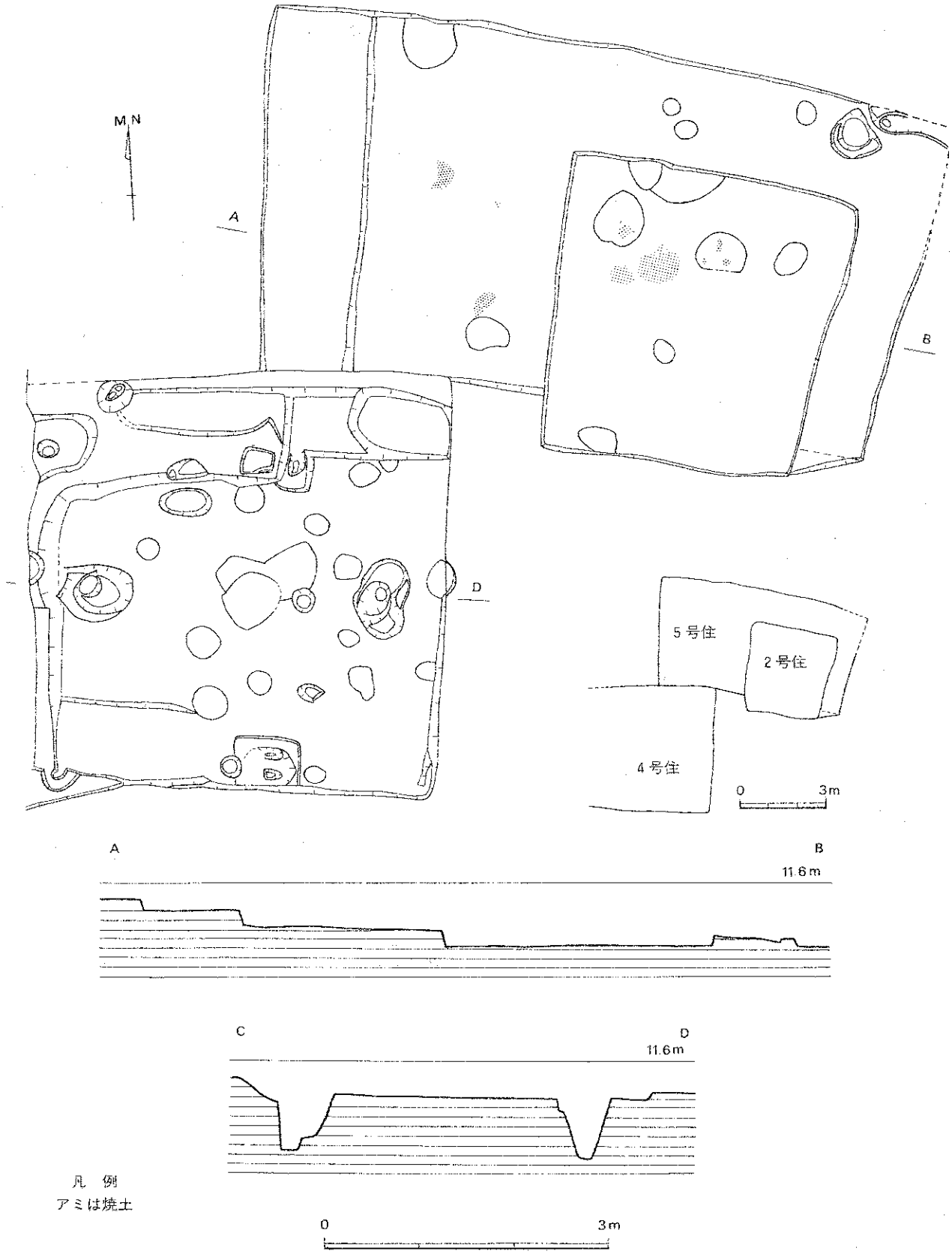
C区土層名
1　層　にぶい褐色土層(表土)
2 a層　にぶい橙色土層
2 b層　にぶい褐色土層
3 a層　灰褐色粘質土層(白色・黄白色粒多く含む)
3 b層　黒褐色粘質土層(1号住覆土)
3 c層　暗褐色粘質土層(2号住覆土)
4 a層　赤褐色焼土・炭化物層
4 b層　灰褐色土層
4 c層　暗褐色粘質土層(灰白色粒多く含む)
4 d層　灰褐色粘質土層
4 e層　褐灰色粘質土層
5 a層　黄褐色粘土層(地山)
5 b層　黄色粒混在黄褐色粘土層(地山)
5 c層　明黄灰色砂礫層(かたく締まった基盤層)

D区土層名
1　層　にぶい黄橙色土層(表土)
2　層　にぶい黄褐色土層
3 a層　黒褐色粘質土層
3 b層　褐灰色土層
4 a層　にぶい黄褐色粘質土層
4 b層　黒褐色粘質土層(炭化物層)
4 c層　灰褐色粘質土層
4 d層　黒褐色粘質土層(炭化物層)
4 e層　灰黄褐色粘質土層
5　層　にぶい黄橙色粘土層(地山)

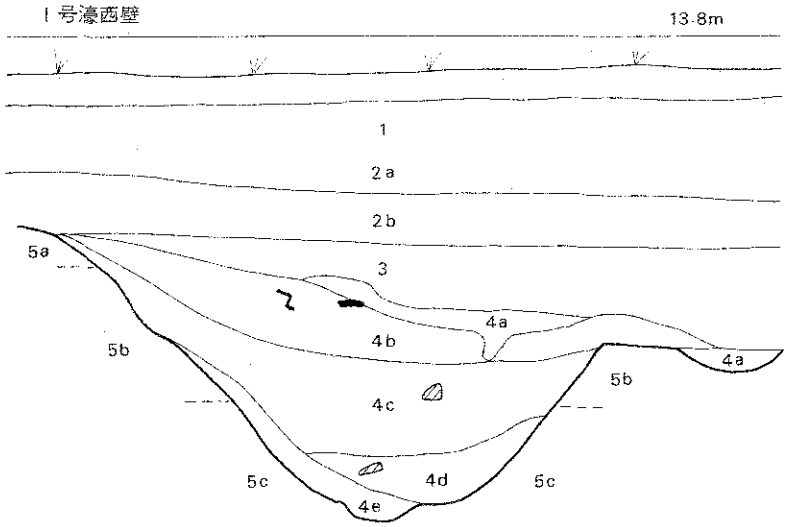
**第88図　土層断面図（1／80）**




第89図　竪穴住居跡実測図①（1／60）

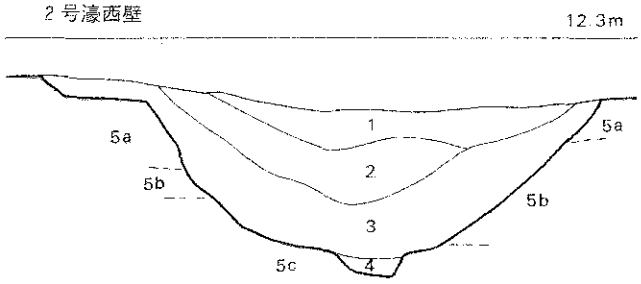



第90図　竪穴住居跡実測図②（1／60）



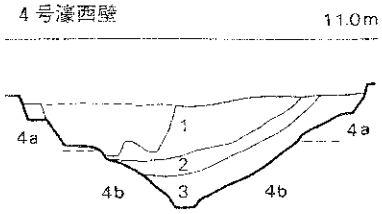

1号濠土層名

1　層　にぶい褐色土層(表土)
2 a 層　にぶい橙色土層
2 b 層　にぶい褐色土層
3　層　灰褐色土層
4 a 層　赤褐色焼土・炭化物層
4 b 層　灰褐色土層(白色・黄色粒を含む)
4 c 層　暗褐色粘質土層(灰白色黄色粒を多く含む)
4 d 層　灰褐色土層
4 e 層　褐灰色粘質土層
5 a 層　黄褐色粘土層(地山)
5 b 層　黄色粒混在黄褐色粘土層(地山)
5 c 層　明黄灰色砂礫層(地山)



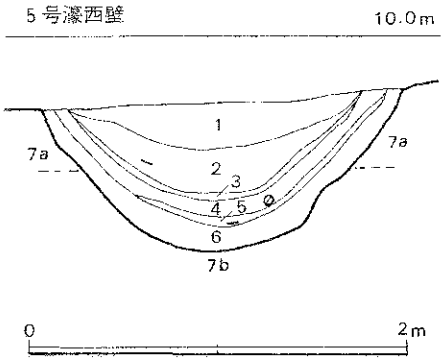

2号濠土層名

1　層　灰褐色土層
2　層　黄褐色粘土混在灰褐色粘質土層
3　層　褐灰色粘質土層
4　層　にぶい褐色粘質土層
5 a 層　明褐色粘土層(地山)
5 b 層　黄色粒混在黄褐色粘土層(地山)
5 c 層　明黄灰色砂礫層(地山)




4号濠西壁

1　層　暗褐色土層
2　層　にぶい黄褐色土層(地山土混在)
3　層　黒褐色粘質土層
4 a 層　にぶい黄橙色粘土層(地山)
4 b 層　黄灰色粒混在黄橙色粘土層(地山)




5号濠土層名

1　層　褐灰色土層
2　層　にぶい黄褐色粘質土(地山土を含む)
3　層　黒褐色粘質土層(炭化物層)
4　層　灰褐色粘質土層
5　層　黒褐色粘質土層(炭化物層)
6　層　灰黄褐色粘質土層
7 a 層　にぶい黄橙色粘土層(地山)
7 b 層　黄灰色粘土層(地山)

**第91図　濠土層断面図（1／40）**

m，幅1.5m，深さ20cm前後ほどが残るにすぎない。底面は東側に傾斜している。弥生後期後半の9号住居を切っているが，なかから弥生後期の土器が出土している。

**4号濠**（第91図）

D区を斜めに東西に走る濠である。D1・2区を4.5m幅だけ掘り下げた。断面はV字形で，底面に幅約15cmの溝が入り，2mほどで一段深くなっている。濠幅は2～2.9m，深さ西壁が67cm，東壁が96cmを測り，西から東へ4mで約60cm深くなっている。西壁の土層断面をみると，2層は地山土を混じえるにぶい黄褐色土層で，北からの流れ込みが捉えられ，土墨の盛土の流入の可能性をもっている。なかからは，弥生後期前半～終末頃の土器に伴って，磨石などの遺物が出土した。古墳前期の10号住居が濠が埋没した後に建てられている。

**5号濠**（第91図）

D6・8区にある濠で，南壁から6.5mほど北東にのびて止まっている。断面はU字形で，濠幅が1.7m～2.3m，深さ80cmを測る。底面は西端から東に4mで24cm高くなっている。土層堆積は，レンズ状に6層にわたっていて，炭化物層が2枚サンドイッチ状に薄く堆積している。遺物は，4～5層に張り付いた状況で多く出土した。弥生終末～古墳前期前葉の土器に伴って，敲石，鉄鎌？などの遺物が出土した。

**1号溝**（第83図）

A1・5区にある東西方向の溝である。溝幅0.81mから1m，深さ6cm～23cmを測る浅い溝である。東側は東壁から3.3mの位置で二つに枝分かれして，2号・3号溝を切っているようだ。溝底は西壁付近から東壁付近へ約40cm傾斜している。溝からは，弥生後期から古墳前期初頭の土器などに伴って，磨石，石臼などが出土した。

**2・3号溝**（第83図）

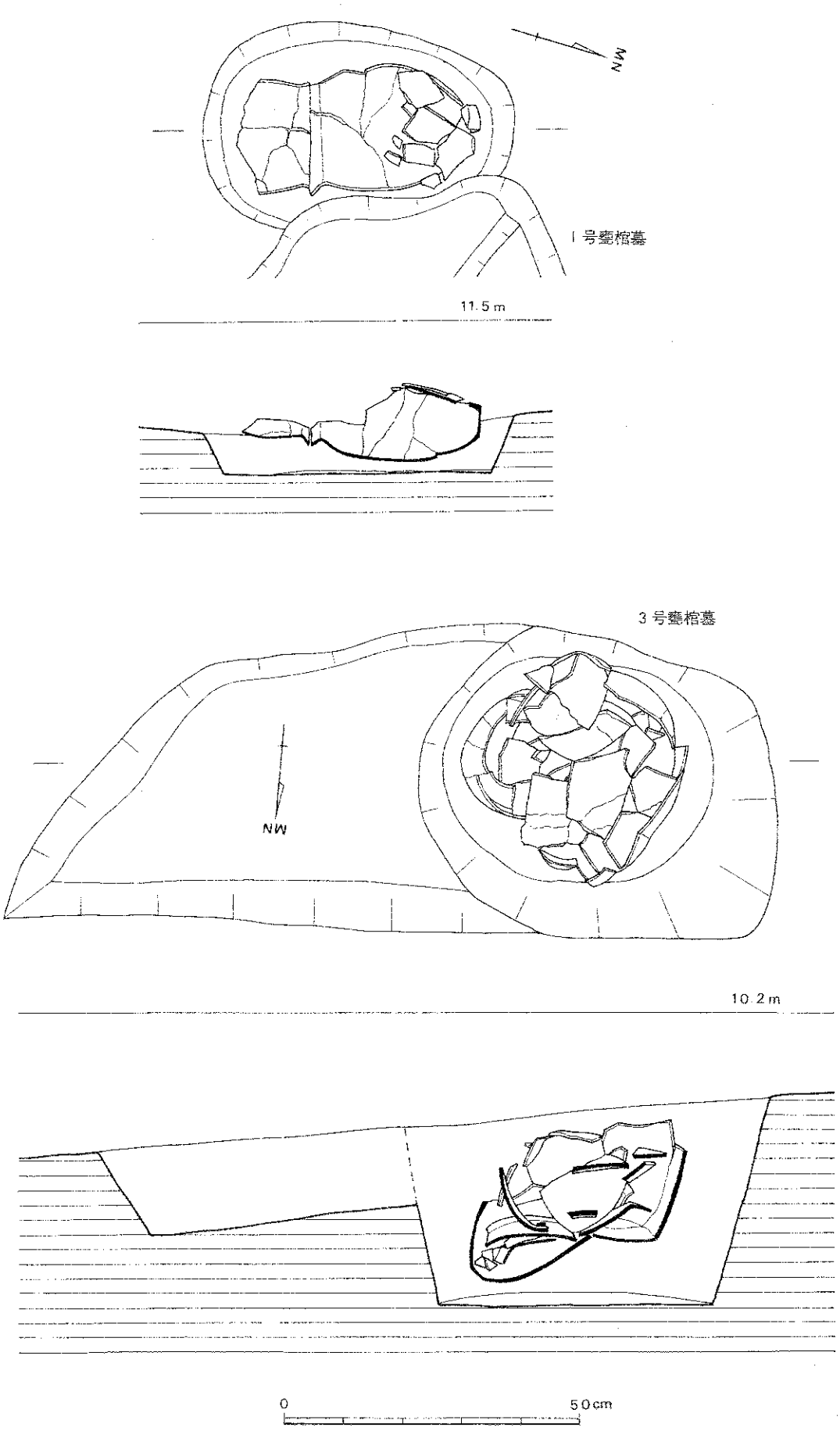
A5・6区にある幅30cm～50cm，深さ1～8cmの浅い溝である。南西から北東方向に2条並んで走っている。南西端は5号住居に切られ，一端北側にのびて北東側に屈折し，端は1号溝に切られている。なかから弥生後期の土器などが出土した。1～3号溝は，A区の居住域にあり，住居群を区切ったり，排水路などの役目をもっていたものであろう。

**4号溝**（第87図）

E4区にかかった南東から北西にのびる幅約80cmの溝で，深さ20～30cmを測る。溝底の高さは標高8.5m前後である。後世の水田基盤整備でほとんど上部を失ったようで，もともとは濠であった可能性をもっている。なかから，弥生中期の丹塗鉢などの遺物が出土した。

**5号溝**（第87図）

G4区にある東西方向の溝で，北東隅で北方向に曲がっている。幅50cmで，5～17cmの深さをもつ幅狭の溝である。西端から東端に向かって6cmほど傾斜している。東側に多くのピットが確認されているので，排水路の機能をもつものであろう。弥生後期の土器に伴って磨石などの遺物が出土している。




第92図　甕棺墓実測図①（1／10）

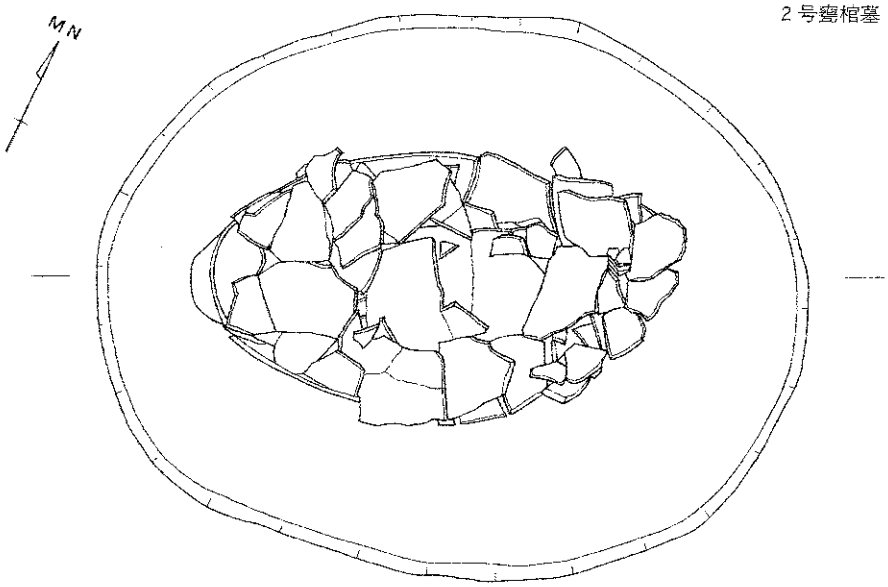
③甕棺墓（第92・93図）

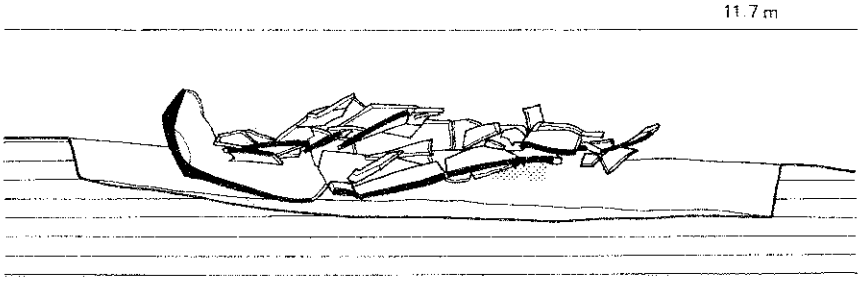
**1号甕棺墓**（第92図）

Ａ２区にある小児甕棺墓で，日用の甕を利用した合口甕棺墓である。下甕の上半部から上甕にかけて削平を受け，大部分が欠失している。主軸方位はN18°W，埋置角度は5°を測る。下甕には焼成後の穿孔は認められない。用いられている土器は，弥生後期前葉の高三潴式の甕である。

**2号甕棺墓**（第93図）

Ｄ１区にある小児甕棺墓である。下甕に器高47cmの甕，上甕に突帯上部を打ち欠いた甕を組み合わせた合口甕棺墓で，上甕は大部分が削平によって欠失している。下甕の口縁下には，灰色粘土のブロ




凡　例
アミは粘土塊

0　50cm

**第93図　甕棺墓実測図②（1／10）**

ックが2箇所置かれていた。主軸方位はN65°E，埋置角度は20°を測る。焼成後の穿孔は認められない。使用されている土器は，弥生後期後葉の甕である。

**3号甕棺墓**（第92図）

D3区にある小児甕棺墓である。下甕に日用の甕，上甕に口頸部を打ち欠いた壺を組み合わせた合口甕棺墓である。主軸方位はN85°E，埋置角度は50°を測り，棺は斜めに据えられている。焼成後の穿孔は認められない。甕棺には弥生後期後葉の土器が用いられていて，墓壙と4号濠との切り合いの状況をみると4号濠を切ったように捉えたが，検討を要する。

**4号甕棺墓**（第86図）

D5区北壁にかかる小児甕棺墓である。東西方向を向き，下甕に胴上半まで打ち欠いた壺，上甕に突帯をもつ甕を用いる合口甕棺墓である。弥生後期後葉の時期であろうか。

**5号甕棺墓**（第86図）

D5区北壁にかかる小児甕棺墓である。東西方向を向き，突帯をもつ甕を組み合わせた合口甕棺墓である。弥生後期前半～中頃の時期であろうか。

**6号甕棺墓**（第86図）

D7区東壁にかかる小児甕棺墓である。東西方向を向き，突帯をもつ甕を組み合わせた合口甕棺墓である。墓壙が4号濠を切っている。弥生後期後葉以降の時期であろうか。

**(6) 平成8年度調査の遺物**

平成8年度調査では，コンテナ175箱分の遺物が出土したが，その数量的な内訳は，土器・陶磁器110,259点，石器・石製品1,606点，金属器28点の計111,893点である。

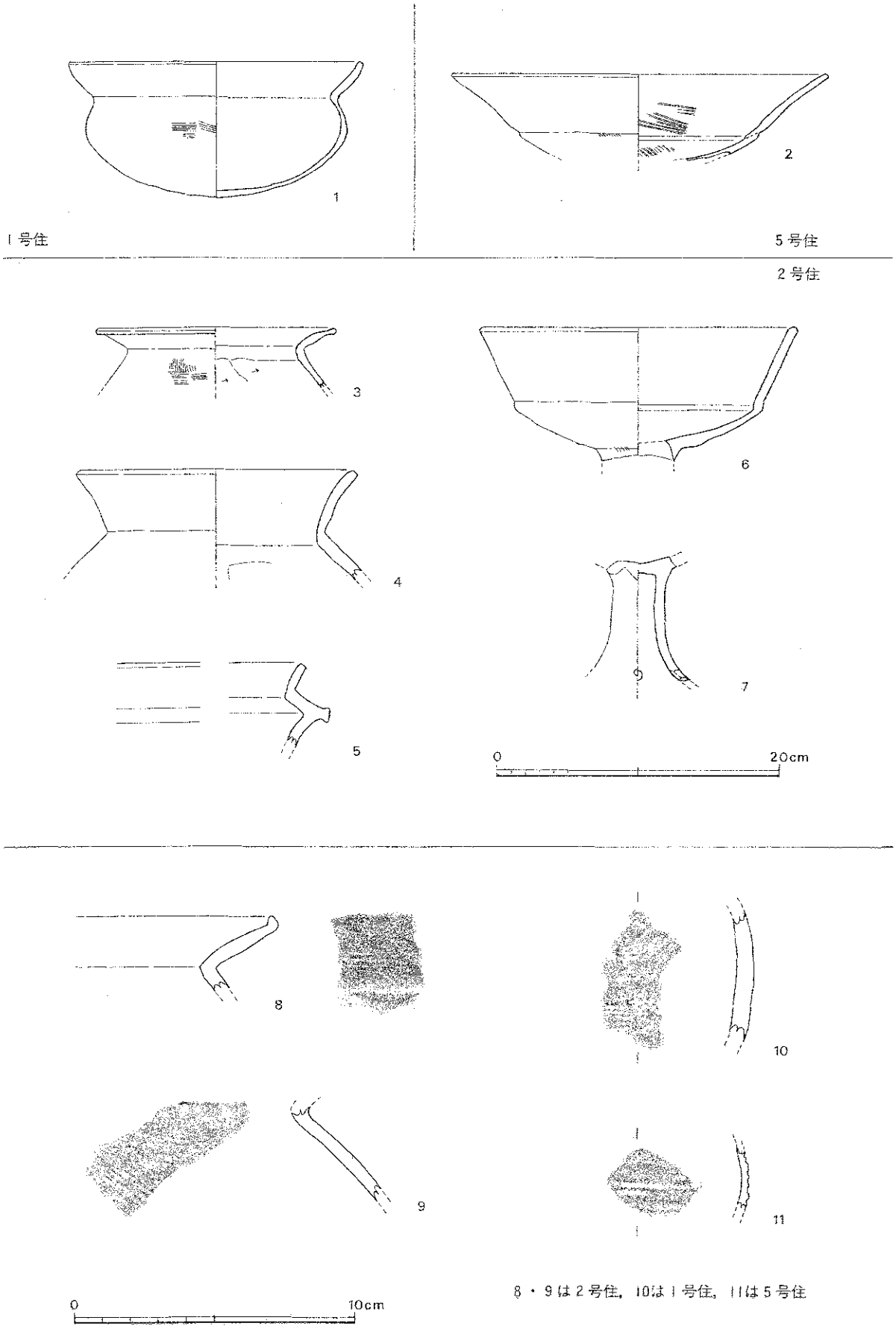
①土器（第94～106図）

**1号住居跡出土土器**（第94図）

1と10は，1号住居跡出土の土器である。1は，丸底の浅鉢で，「く」の字形の口縁は内湾ぎみにのびて端部を平坦におさめている。器表は風化を受けるが，一部ハケ目が残る。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。この土器は，柳田氏のⅡa式[注1]，井上氏の古墳前期1式[注2]に所属する資料であろうか。10は，朝鮮半島系の瓦質壺破片である。外面には細かい縄席文叩き目がついている。外面は暗灰色の色調だが，器肉はにぶい橙色を呈する。

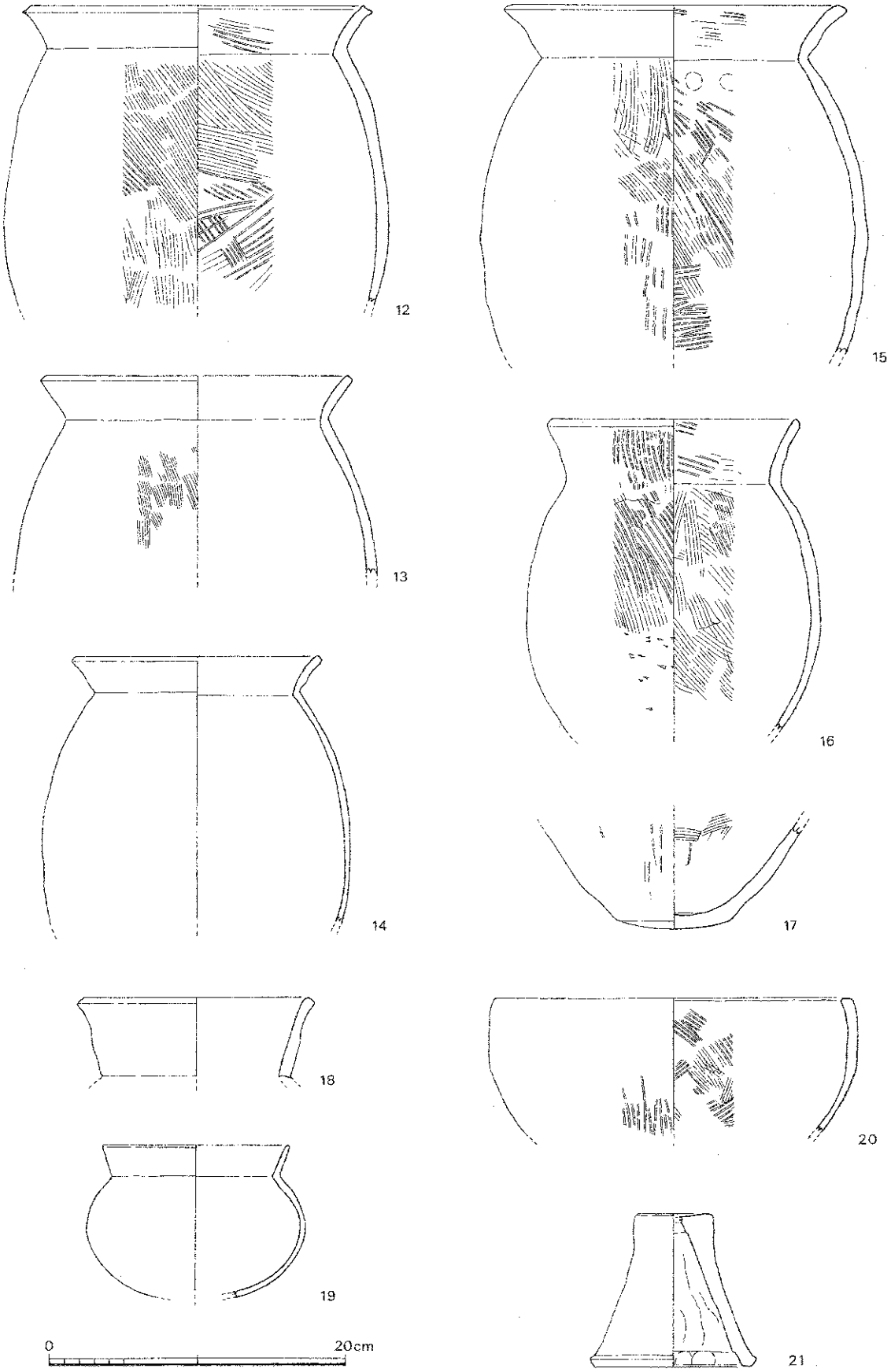
**2号住居跡出土土器**（第94図）

3～7・8・9は，2号住居跡から出土した土器である。3は胴上半が急速にすぼまる布留式系の甕で，口縁は強く外反して，端部を摘みぎみに丸くおさめている。胴外面はハケをナデ消し，内面は横位にケズリを行っている。灰褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。4は，「く」の字形に口縁が開く広口壺上半片で，口縁端部は平坦におさめている。器面は風化を受けるが，胴部内面はヘラケズリされているようだ。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。屈曲部から内傾した口縁はさらに強く外反する複合口縁の壺破片で，端部を平坦におさめる福岡平野以東系の壺である。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。6・7は高杯である。6は割と深い身の杯部で，屈曲部から口




8・9は2号住，10は1号住，11は5号住

第94図　住居跡出土土器①（1／2・1／4）




7号住

第95図　住居跡出土土器②（1／4）

縁は直線的に開く。器面は平滑に仕上げられ，色調は橙色を呈し，胎土は精良で長石，赤色砂を含む。7は高杯脚部で，焼成前の穿孔が3箇所みられる。ナデ仕上げされている。橙色の色調で，石英・長石・金雲母を含む。8・9は，同一個体の庄内式系甕破片である。丸みをもってすぼまる胴上半から口縁は強く屈曲して外反して，端部を上方につまみ上げているが，外方は丸くおさめている。胴部には右下がりの細かい叩き目がつき，口縁外面は叩き目をナデ消して，口縁内面は平滑なナデ仕上げ，胴部内面はヘラケズリされる。にぶい黄橙色から灰褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。これらの2号住居出土の土器は，柳田氏のⅡa式，井上氏の古墳前期1式に相当する資料であろう。

**5号住居跡出土土器**（第94図）

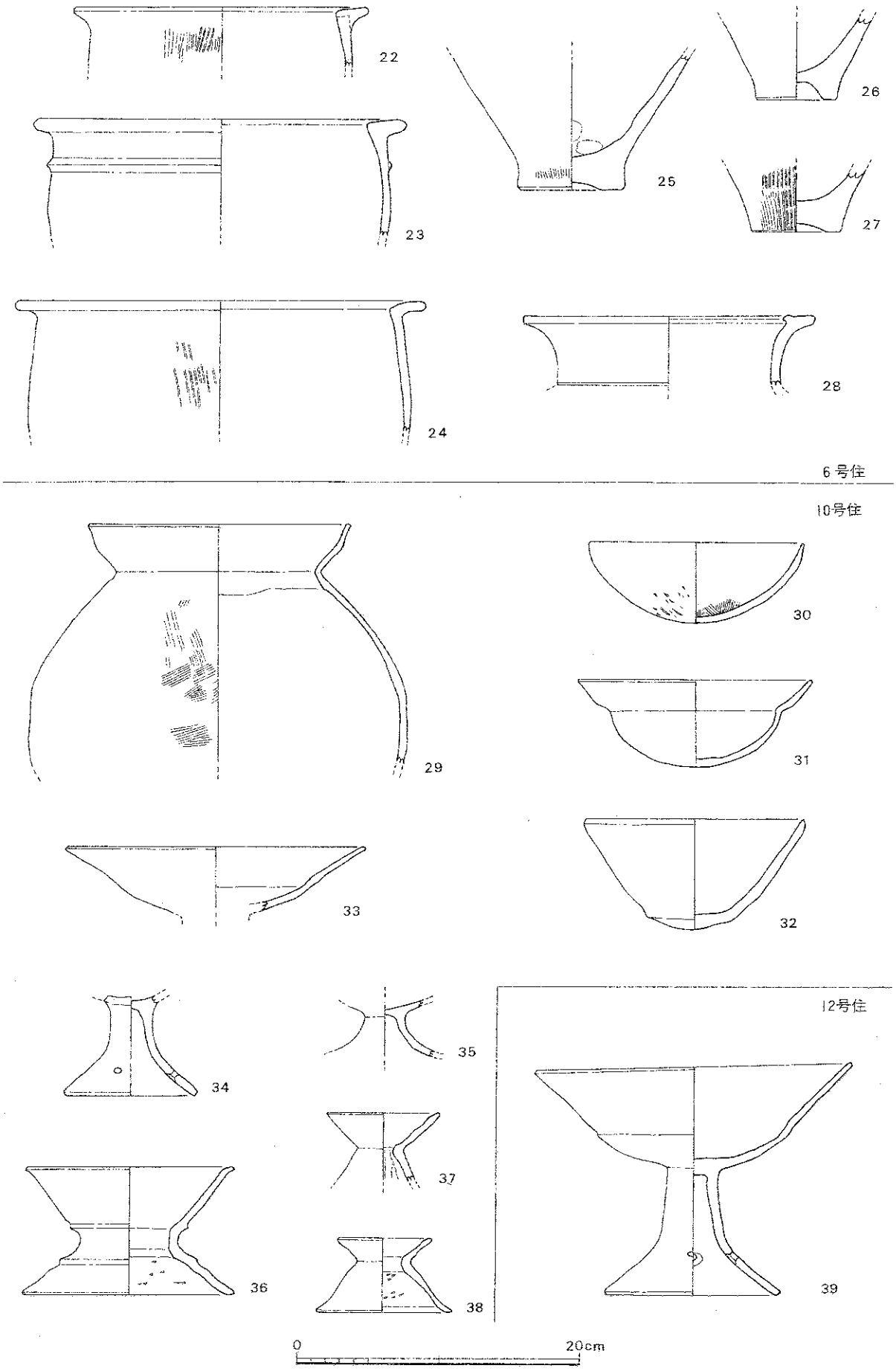
2と11は，5号住居跡の出土土器である。2は高杯で，屈曲部から口縁が直線的に開く杯部で，端部は面取りされ平坦におさめている。器面は平滑に仕上げているが，内面にはハケ目が残っている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含んでいる。この土器は，柳田氏のⅡa式，井上氏の古墳前期1式に相当する資料であろう。11は，朝鮮半島系の瓦質土器片である。外面に縄席文叩きが施されているが，全体に風化を受けている。灰色の色調を呈する。

**6号住居跡出土土器**（第96図）

22～28は，6号住居跡の出土土器である。22～27は，甕である。22は・23は逆「L」字形の短い口縁の甕で，23は胴部に断面三角形の突帯をもつ。22は外面がハケ，内面がナデ，口縁がヨコナデ調整されている。23は器面が風化を受けている。色調は22がにぶい赤褐色，23が明赤褐色を呈し，胎土に22が石英，長石，金雲母，23が石英，長石を含む。24は，逆「L」字形の口縁の甕で，やや屈曲ぎみである。外面がハケ，内面がナデ調整される。色調は明赤褐色を呈し，胎土に石英，長石，金雲母を含む。25～27は，外底面が上げ底になった甕底片である。外面は，27がハケ，25・26がナデ仕上げされる。内面はナデ仕上げされ，25の内底面には指オサエ痕がつき，煤が付着している。色調は25が明赤褐色，26が橙色，27がにぶい赤褐色を呈し，胎土は25が石英，長石，26が石英，長石，角閃石，赤色砂，27が石英，長石，金雲母を含む。28は，短い逆「L」字形の口縁の壺である。頸胴界には1条沈線が入る。平滑なナデ仕上げされる。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。以上の6号住居跡出土の土器は，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式古段階～新段階の資料を含んでいるので，住居跡は須玖Ⅰ式古段階に廃棄されたのであろう。

**7号住居跡出土土器**（第95図）

12～21は，7号住居跡出土の土器である。12～17は「く」の字形の口縁をもつ長胴の甕である。17は凸レンズ状の底部である。いずれも外面はハケ調整され，13・17がナデ消し，12・15が下半を縦に荒い板状具でナデられ，16が下半を横位のケズリを行っている。内面はハケ調整され，17はナデ消されている。色調は，12・14・16がにぶい赤褐色，13が明褐色，15が明赤褐色，17が赤褐色を呈する。胎土は，16が石英，長石，赤色砂，金雲母を含む他は，石英，長石，金雲母を含む。18・19は，壺である。18は口縁が直線的に開く広口壺で，端部は外方に尖りぎみにおさめている。器面は風化を受け




第96図　住居跡出土土器③（1／4）

ている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，角閃石，金雲母を含む。19は直口壺で，底部は欠失しているが，丸底をなすと思われる。器面は風化を受けるが，胴部内面は平滑なナデ仕上げされている。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。20は，椀形の鉢で，口縁端部上方は面取りされ平坦におさめている。器面は風化を受けるが，ハケ目が残っている。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。21は，釣鐘形の支脚で，上面は平坦面をなしている。裾端部はふくらみをもち，外方に尖りぎみにおさめている。外面はナデ仕上げされ，内面にはしぼり痕と裾端に指オサエ痕がつく。以上の7号住居跡出土の土器は，弥生後期後葉から終末期の資料と思われる。

**10号住居跡出土土器**（第96図）

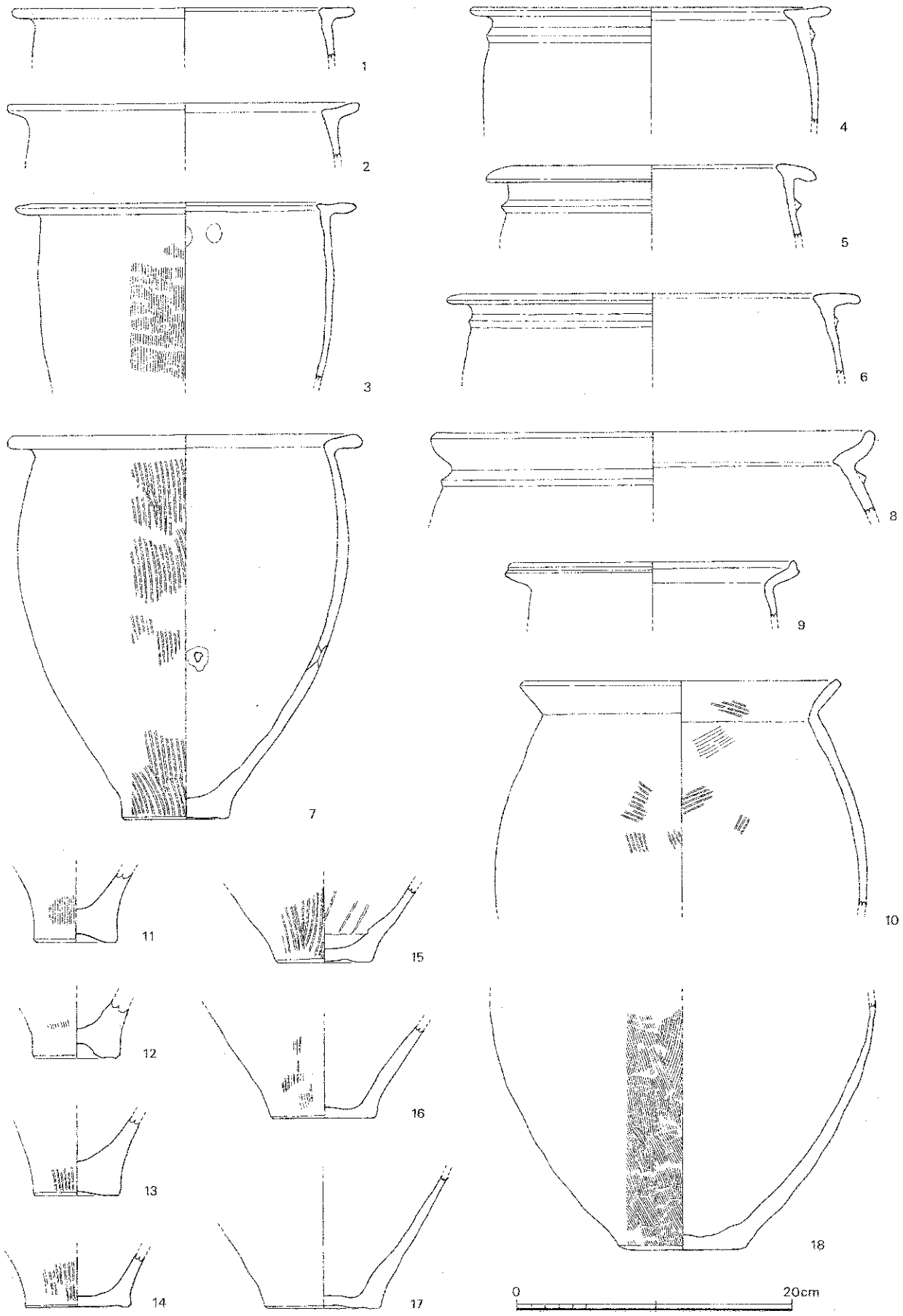
29～38は，10号住居跡出土の土器である。29は布留式の甕である。球状の胴部は急速にすぼまり，口縁は内湾ぎみにのびて，端部を外方に摘みぎみにおさめる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含んでいる。30～32は鉢である。30は，薄手つくりの丸底の浅鉢である。口縁端部は尖りぎみにおさめている。外面は，下半をケズリの後に，全体を平滑ナデ仕上げしている。内面は，風化を受けて，内底面には極細のハケが残っている。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。31は，浅い皿状の体部に屈曲して口縁が大きく開く丸底の鉢である。器面は風化受けている。明黄褐色の色調で，胎土には細かい石英，赤色砂を含む。32は分厚いつくりの小形鉢で，凸レンズ状の底部から体部は逆「ハ」の字形に開き，端部は尖りぎみにおさめている。器面はナデ仕上げされている。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。33～35は高杯である。33は屈曲部に段をもたないノッペリとした杯部で，内面には淡い段がついている。器面は風化を受けている。橙色の色調で胎土に長石，赤色砂，金雲母を含む。34は比較的小形の脚部で，焼成前の穿孔が3箇所みられる。器面は風化を受けている。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。35は小形の高杯で，外面はナデ，内面は平滑なナデ仕上げされている。浅黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。36～38は器台である。36は山陰系の鼓形器台で，器台全体は風化を受けている。外面はナデ仕上げされ，内面はヘラケズリされる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。37・38は小形の器台で，盃状の受部がつくものである。37は平滑なナデ仕上げされ，台部内面にしぼり痕がみられる。38は外面が平滑なナデ仕上げされ，台部内面はヘラケズリされている。色調は，37が浅黄橙色，38がにぶい黄橙色，胎土には37が長石，赤色砂，金雲母，38が石英，長石，赤色砂，角閃石，金雲母を含む。以上の10号住居の出土土器は，柳田氏のⅡc式，井上氏の古墳前期3～4式に相当する資料である。

**12号住居跡出土土器**（第96図）

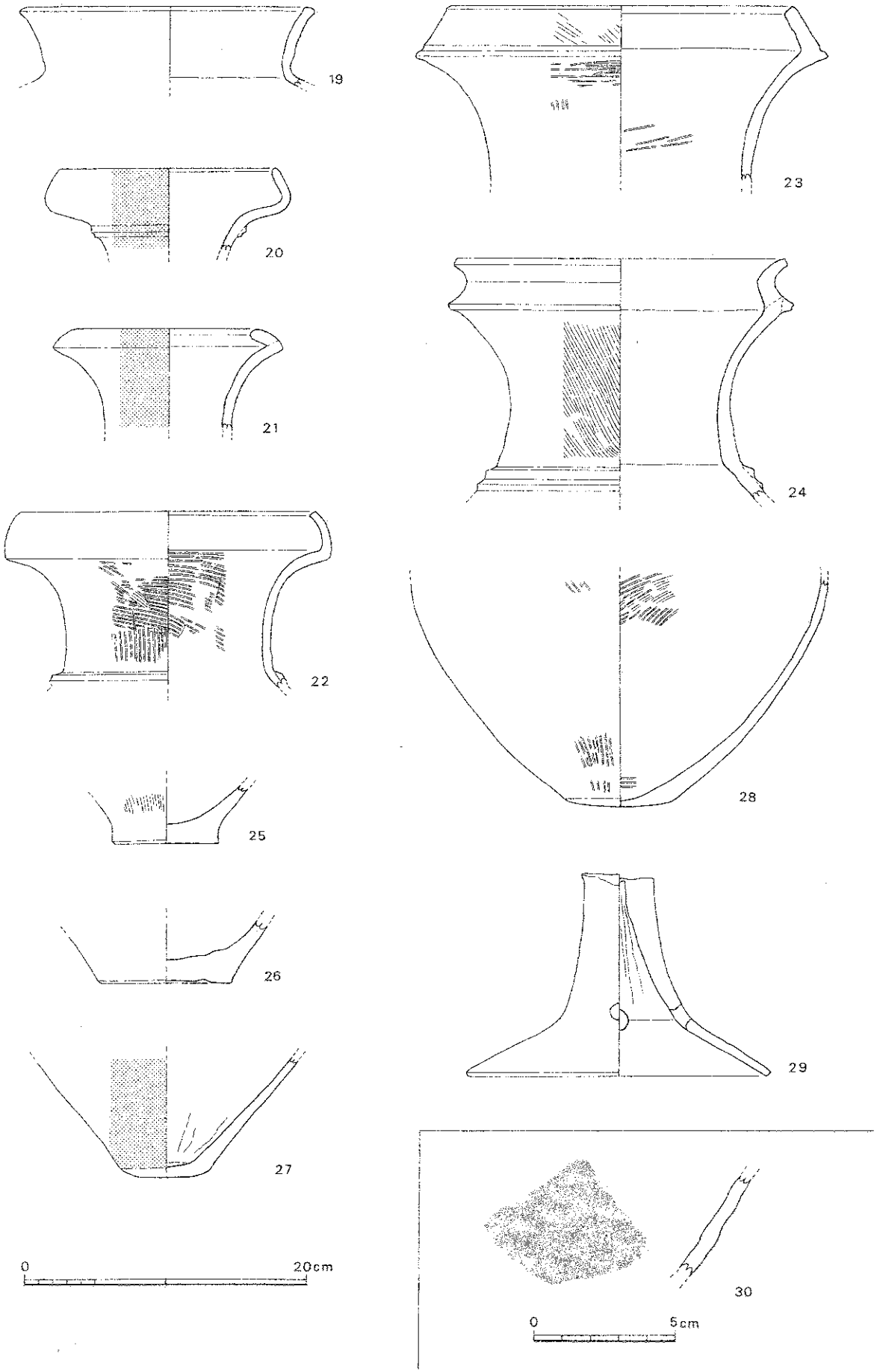
39は，12号住居跡から出土したほぼ完形の高杯である。外面の屈曲部には淡い段がつく，内面には段ははいらない。器面は，平滑ナデ仕上げされている。脚には焼成前の穿孔が3箇所みられる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。この土器は，柳田氏のⅡb式，井上氏の古墳前期2式に相当する資料であろう。

**1号濠上層出土土器**（第97・98図）

1～30は，1号濠上層出土の土器である。1～18は甕である。1～6までは，逆「L」字あるいは




第97図　1号濠上層出土土器①（1／4）

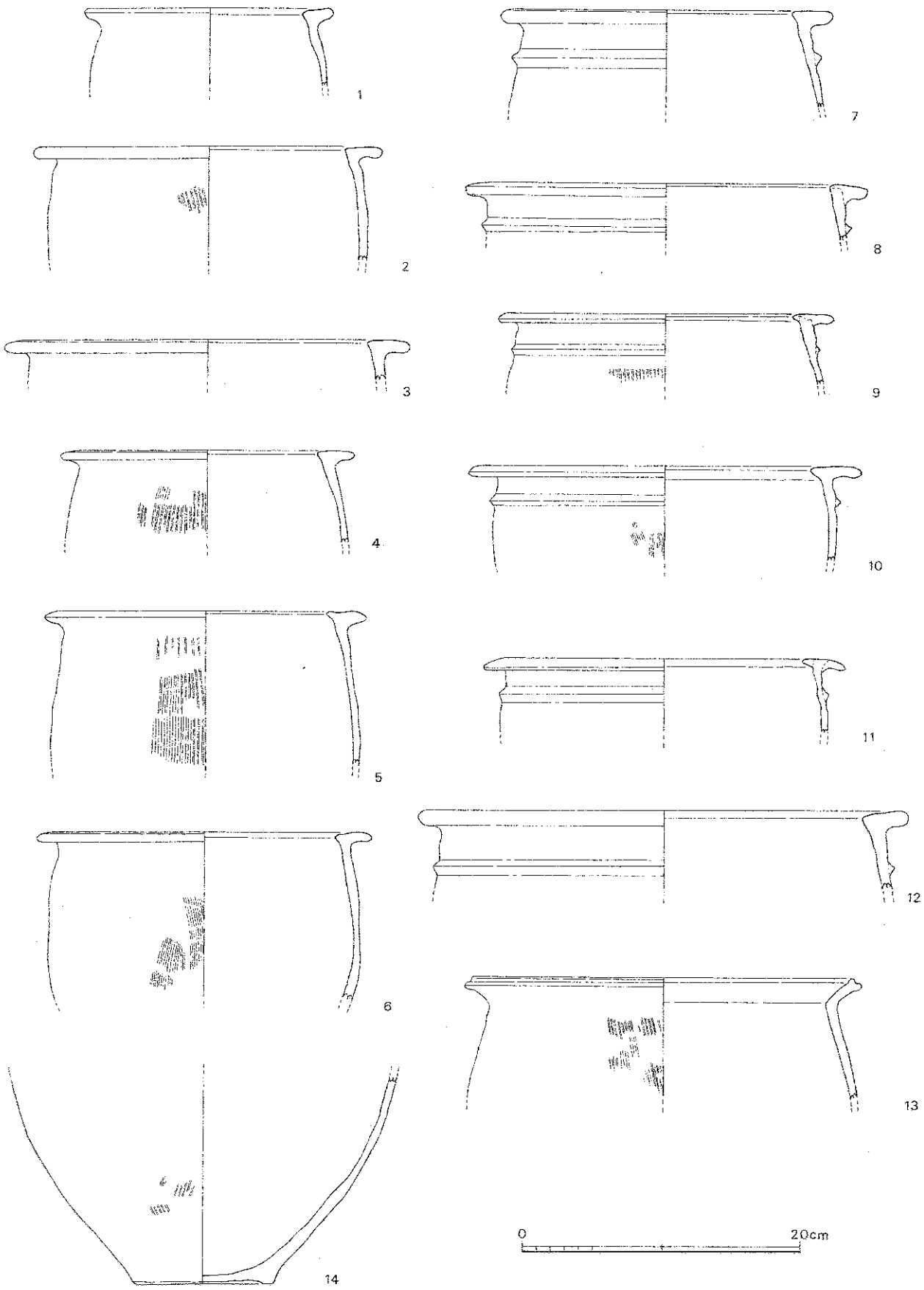



第98図　1号濠上層出土土器②（1／2・1／4）

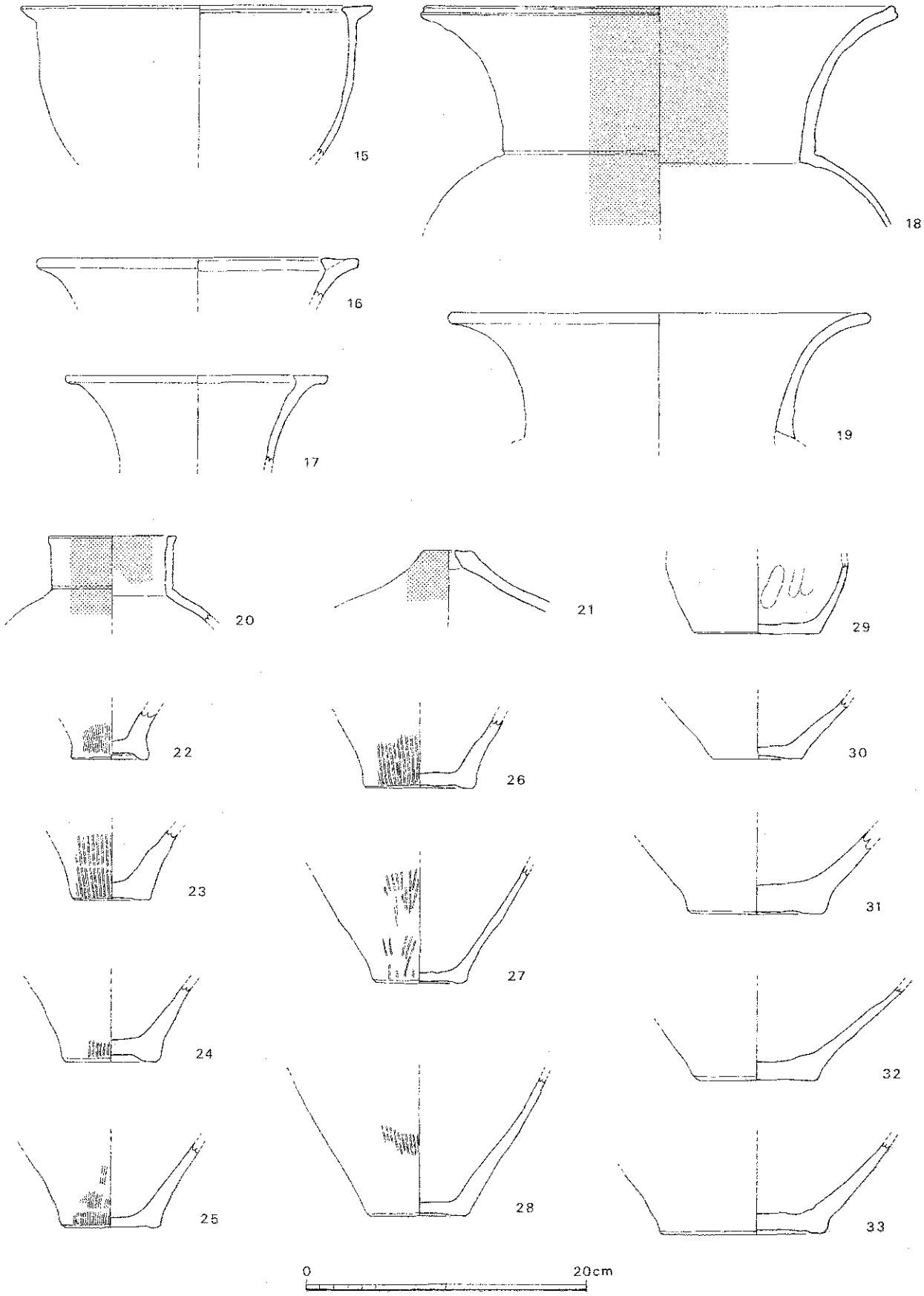
鋤先形の口縁の甕で，4～6は口縁下に断面三角形の突帯をもつものである。3は外面ハケ，内面ナデ仕上げされ，指オサエ痕がついている。1・2・5・6は内外面ともにナデ仕上げされている。色調は，1が橙色，2・4がにぶい褐色，3が灰褐色，5がにぶい黄橙色，6がにぶい橙色を呈する。胎土は，1が石英，長石，赤色砂を含む他は，石英，長石，金雲母を含んでいる。7は屈曲口縁の甕で，胴部に焼成後の穿孔が1箇所つけられている。外面はハケ，内面はナデ仕上げされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，角閃石，金雲母を含む。8は，口縁が内湾する大形の甕で，器面はナデ仕上げされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。9は，跳ね上げ口縁の甕で，器面はナデ仕上げされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，金雲母を含む。福岡平野以東の土器である。10は，「く」の字形口縁の甕で，端部は面取りされ平坦におさめている。内外面ともに，ハケをナデ消している。赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。11～18は，体下半から底付近の資料である。11～13は小さめの底で上げ底になっている。14～17は平底で，18は凸レンズ状底である。色調は，11がにぶい褐色，12・13・17・18が橙色，14がにぶい赤褐色，15がにぶい橙色を呈する。胎土は，11・13・16が石英，長石，金雲母，他が石英，長石を含んでいる。19～28は壺である。19は，逆「ハ」の字形に開く広口壺で，口縁端部は肥厚され外方に摘みぎみにおさめている。外面は平滑なナデ仕上げされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，角閃石，金雲母を含む。20・21は，丹塗壺で，20は袋状口縁壺，21は複合口縁壺である。色調は，20がにぶい橙色，21が橙色，胎土は20が石英・金雲母，21が石英，長石を含む。22～24は，複合口縁の壺である。口縁は，21が内湾形に，23が直線的に内傾して，24が屈曲部から内傾してさらに強く外反するものである。色調は，22がにぶい黄橙色，23が明赤褐色，24が橙色呈し，胎土は，22が石英，赤色砂，金雲母，23が石英，長石，金雲母，24が石英，長石，角閃石を含む。25～28は体下半から底付近の資料である。25・26は平底。27は丹塗土器で角がかなり摩滅している。28は凸レンズ状底である。色調は，25・28が橙色，26がにぶい黄橙色，27がにぶい橙色を呈する。胎土は，27が石英，長石，金雲母を含む他は，石英，長石を含んでいる。29は高杯脚部である。器面はナデ仕上げされ，柱状部内面にはしぼり痕がつく。焼成前の穿孔が3箇所みられる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。30は，朝鮮半島系の瓦質の土器で，ロクロ整形時の凹凸がみられる。灰色の色調で，外面に黒灰色の化粧土が一部残っている。楽浪系の鉢片であろう。以上の1号濠上層出土の土器は，弥生中期中頃から後期終末頃までの資料を含んでいる。

**1号濠下層出土出土土器**（第99・100図）

1～14は，甕である。1～12は，逆「L」字形あるいは鋤先形の甕で，7～12は口縁下に断面三角形の突帯がつく。色調は，1・4・6・9・11が橙色，5・8・10・12が明赤褐色，2・3がにぶい褐色，7が淡橙色を呈する。胎土は，1・12が石英，長石，2・4・5・7・11は石英，長石，金雲母，3が石英，金雲母，6が石英，長石，赤色砂，金雲母，9が石英，長石，赤色砂を含む。13は，跳ね上げ口縁の甕である。にぶい黄橙色の色調で，胎土に長石を含む。14は，外底面がやや凹んだ底部の甕体下半部片である。外面はハケ調整の後ナデ仕上げされ，内面はナデ仕上げされている。橙色




第99図　1号濠下層出土土器①（1／4）




第100図　1号濠下層出土土器②（1／4）

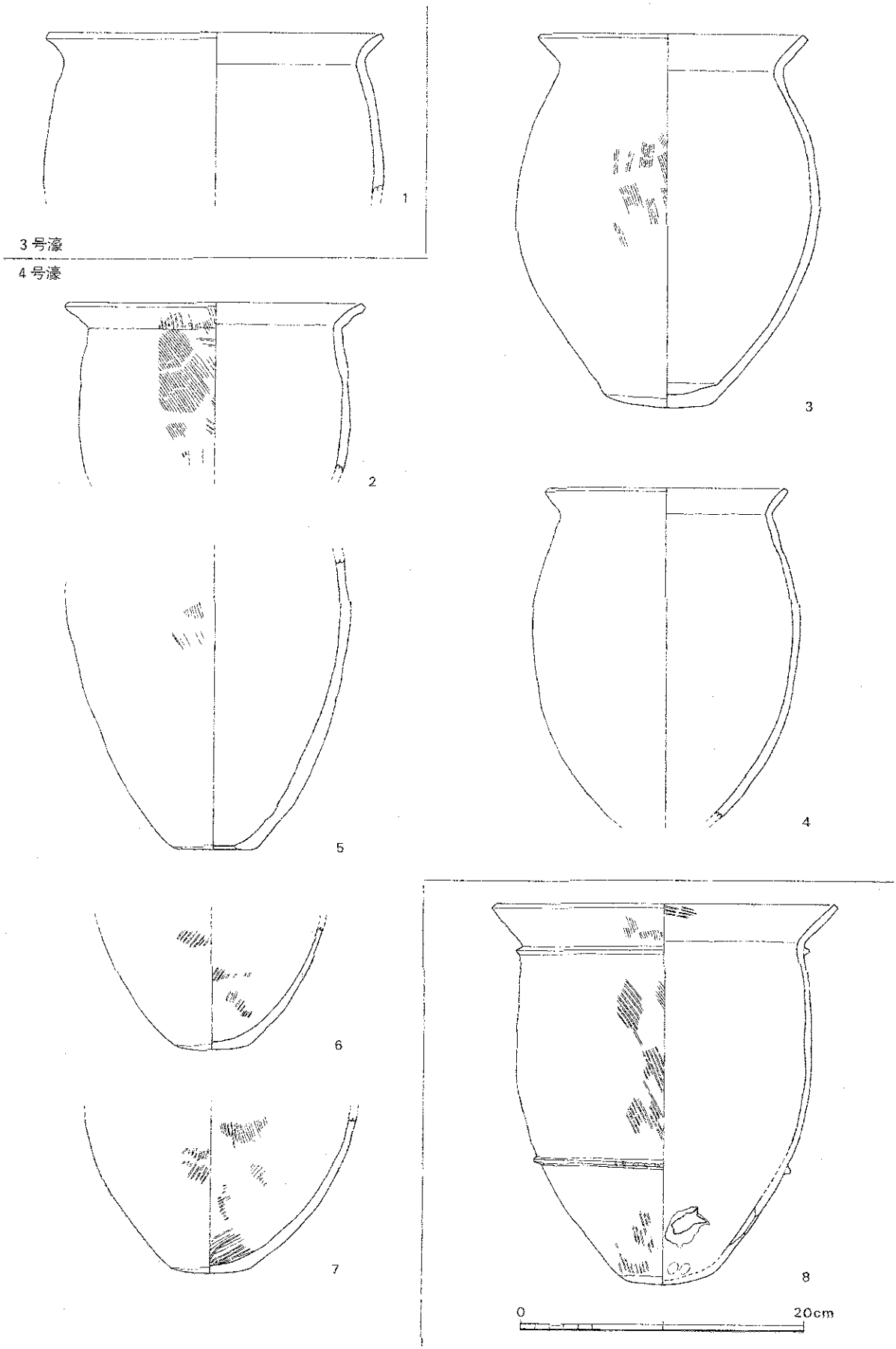
の色調で，胎土に石英，長石を含む。15は，口縁が逆「L」字形の鉢で，器面は風化を受けている。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。16～20は壺である。16･17は短い逆「L」字形の口縁の広口壺である。外面はナデ仕上げ，内面は風化を受ける。色調は，16が浅黄橙色，17がにぶい黄橙色を呈し，胎土に16は石英，長石，17は石英，長石，金雲母を含む。18・19は，口縁が朝顔形に開く広口壺で，18は丹塗土器である。色調は，18が橙色，19がにぶい橙色を呈し，胎土には18が石英，長石，19が石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。20は，丹塗の直口壺である。口縁端部は，肥厚されて上方を面取りして，外上方に尖りぎみにおさめている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。21丹塗の蓋である。外面はタテミガキが施されている。上面には孔が空くが，剝落したものであろうか。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。22～28は，甕底部である。22～24は上げ底，25～28は平底である。色調は，22・25～28が橙色，23がにぶい褐色，24が赤褐色を呈し，胎土には，22・23・25・27が石英，長石，金雲母，24が石英，長石，赤色砂，金雲母，26が石英，長石，28が石英，長石，赤色砂を含む。29～33は，壺底部である。29は丹塗土器鉢。外底面は，平底であるが，30・31・33はややくぼんでいる。器面は，ナデ仕上げされるものが多いが，30と32の外面はタテミガキされている。色調は，33が浅黄橙色の他は，橙色を呈する。胎土に，29が石英，長石を含む他は，石英，長石，金雲母を含んでいる。以上の1号濠下層の土器群は，弥生中期前葉から中期後半の須玖1式古段階～須玖II式古段階の資料である。この1号濠は弥生中期前葉の須玖I式古段階に掘削され，上層土器資料から弥生後期終末には埋没したことが考えられる。

**3号濠出土土器**（第101図）

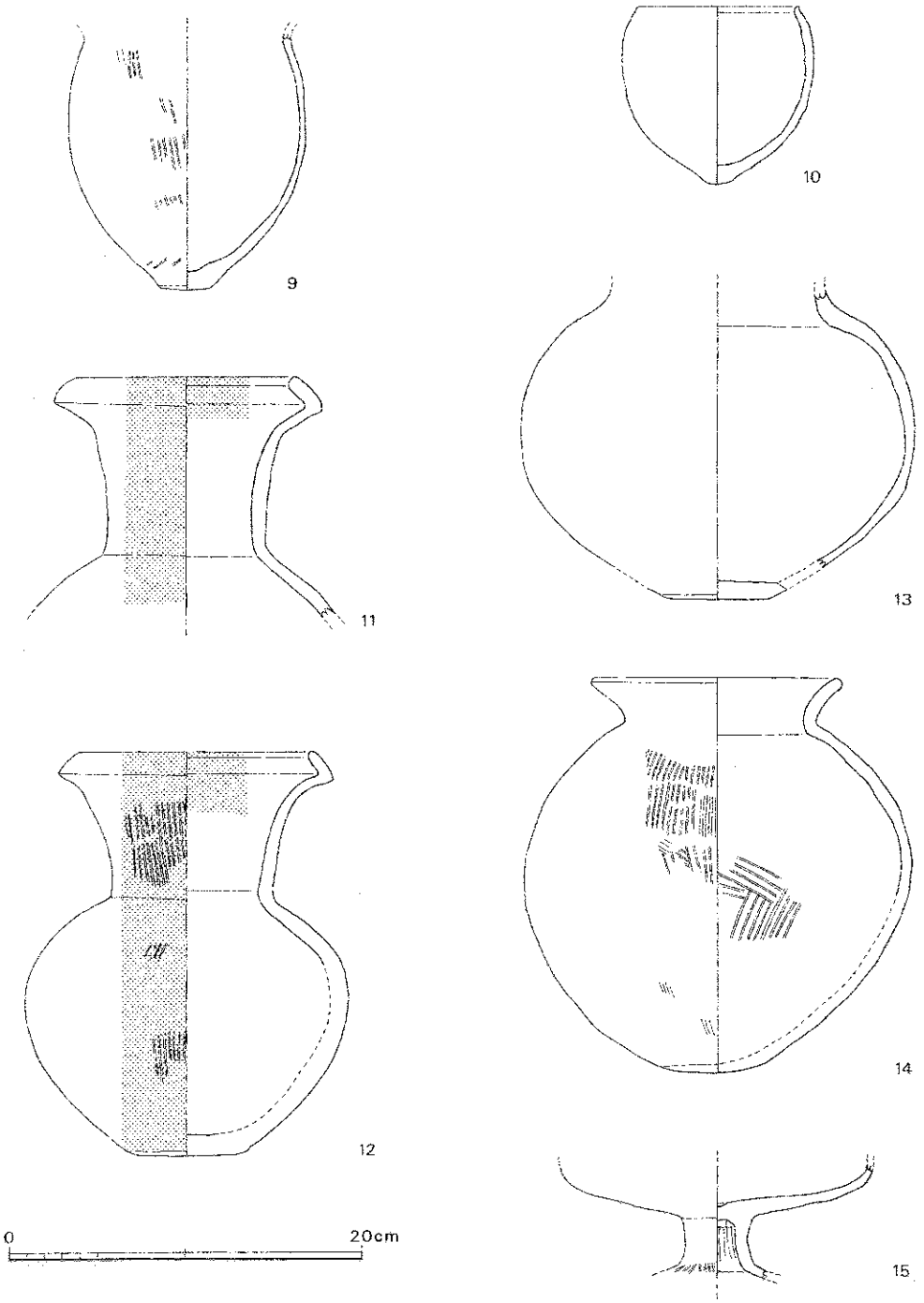
1は，3号濠出土の甕である。やや張りをもつ胴部から「く」の字形に口縁が外湾し，端部は面取りされている。外面はナデ仕上げされるが，他は風化を受けている。にぶい赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含んでいる。この土器は，弥生後期後半～終末期の甕であろう。

**4号濠出土土器**（第101・102図）

2～15は，4号濠出土の土器である。2～8は甕である。2～4は「く」の字形口縁の甕で，3はほぼ完形の資料で胴中位に丸く張りをもち，4は長胴の形態をもつ。外面は，2がハケ，3がハケナデ消し，4が風化を受け，2と3には煤が付着している。内面は，2は風化を受け，3はナデ，4はハケナデ消しされている。いずれも橙色の色調で，胎土に2・4は石英，長石，金雲母，3は石英，長石，赤色砂を含む。5～7は，胴下半の資料で，凸レンズ状底である。5は焼成後に孔があけられている。外面はいずれもハケナデ消しされ，内面は5がナデ，6・7がハケナデ消しされている。いずれも橙色の色調で，胎土に5が石英，長石，角閃石，金雲母，6・7が石英，長石，金雲母を含んでいる。8は胴部に突帯をもつほぼ完形の大形甕である。砲弾形の胴部で，底部は凸レンズ状底をなし，口縁は逆「ハ」の字形に開いている。口縁端部は面取りされて平坦におさめている。胴下端に焼成後の穿孔が認められる。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。9・10は深鉢である。9は口縁を欠失する鉢で，小さな底部がつく。外面はハケナデ消しされ，内面はナデ仕上げされている。10はレモンの上半部を切ったような形態の小形鉢で，尖りぎみの小さな底がついている。外面は風化をう




第101図　3号・4号濠出土土器①（1／4・1／6）

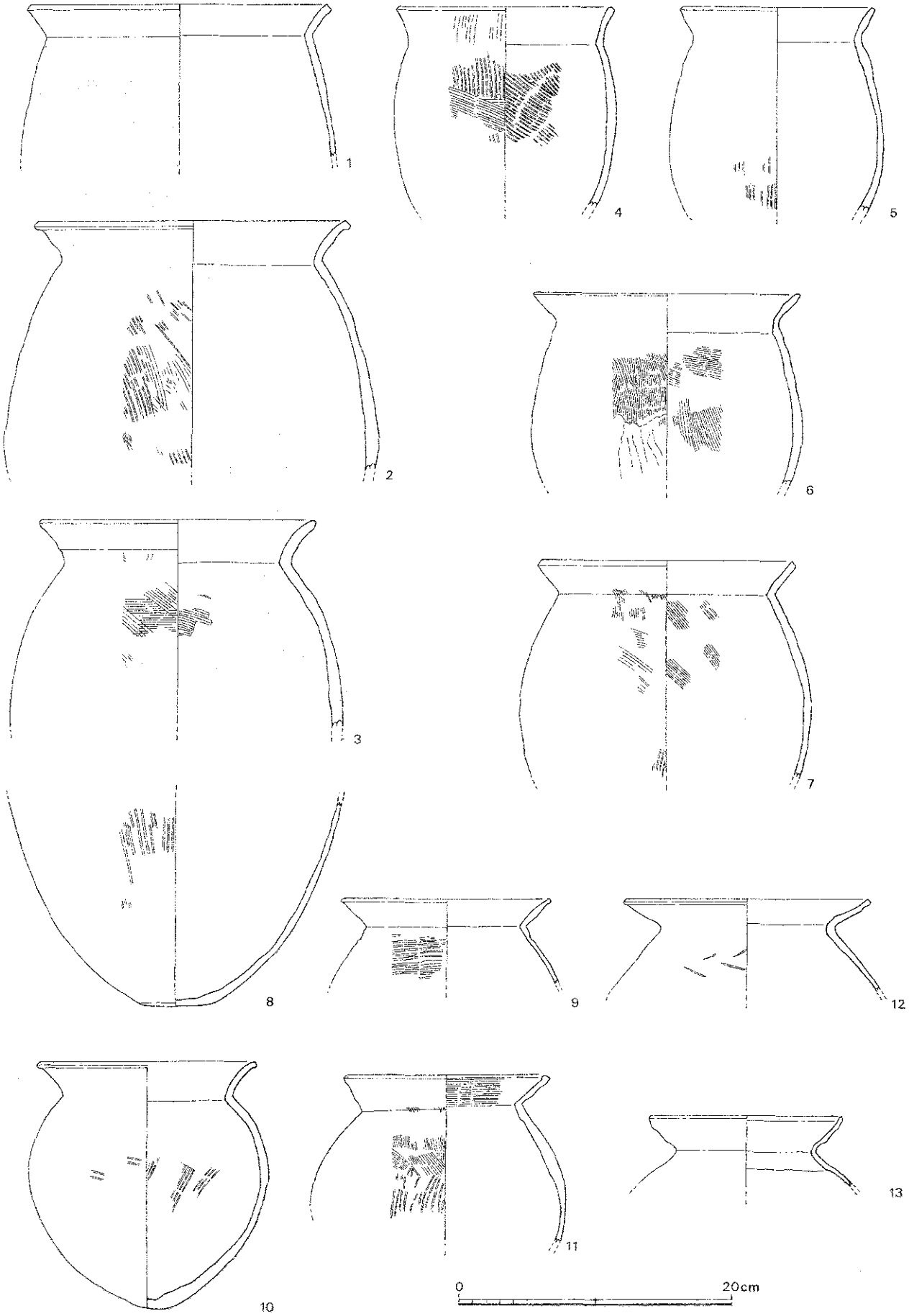



第102図　4号濠出土土器②（1／4）

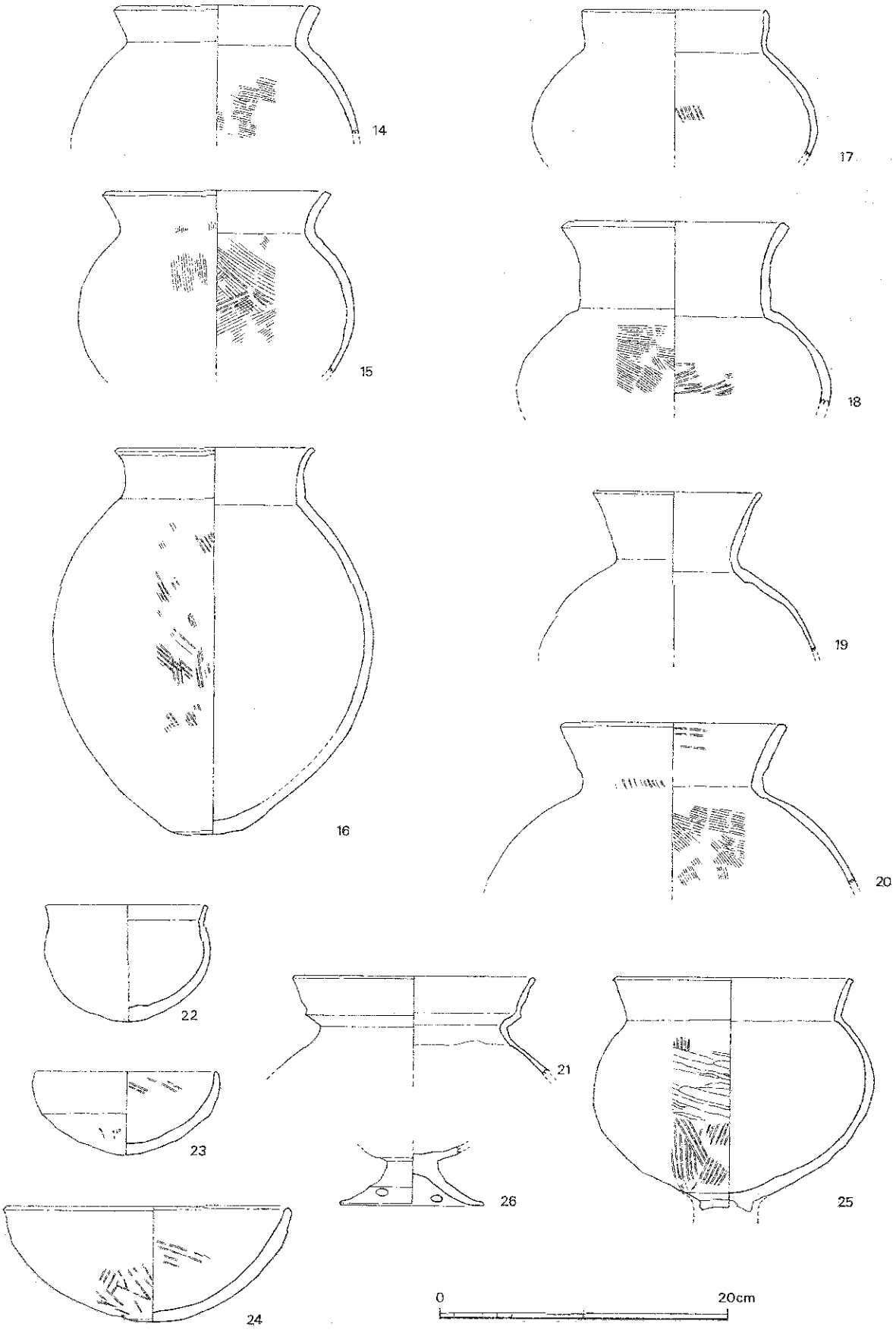
けるが，内面はナデ仕上げされている。橙色の色調で，胎土に石英，長石，角閃石，金雲母を含む。11～14は壺である。11・12は屈曲部に淡い稜がつく複合口縁の丹塗壺で，12は口縁の一部を欠失する他は，ほぼ完形の資料である。外面はハケナデ消し，内面はナデ仕上げされている。両者ともに，浅黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含んでいる。13は，丸く張りをもつ球形の胴部と薄い凸レンズ状底の壺である。器面はナデ仕上げされている。外面には赤く化粧土がつけられているようだ。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。14はほぼ完形の広口壺で，丸い球形の胴部に外湾する口縁がついていて，端部は丸くおさめている。底部は，分厚い凸レンズ状底である。内外面ともにハケナデ消しされる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。15は，低脚の高杯である。器表は平滑なナデ仕上げされ，裾部にはハケ目が残る。柱状部内面には，しぼり痕がつく。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。以上の4号濠出土土器は，弥生後期前半から後期後葉の土器を主体としていて，15の高杯は，古墳初頭まで落ちてくる資料と思われる。混入品であろうか。4号濠は，弥生後期前半以前に掘削され，弥生後期終末頃には埋没していたことが考えられる。

**5号濠出土土器**（第103～104図）

1～26は，5号濠出土の土器である。1～13は甕である。1～8は「く」の字形口縁の在地系の甕である。8は体下半の資料で，凸レンズ状底の底部をもつ。外面はハケ調整されているが，6は下半を板状具で縦位にナデツケしている。内面はハケ調整され，2・3・5・8はさらにナデ仕上げされている。色調は，1・4が明赤褐色，2・3が灰褐色，5が黄橙色，6が灰黄褐色，7が褐色，8が橙色を呈する。胎土は，8が石英，長石を含む他は，石英，長石，金雲母を含む。3・5・7の外面には煤が付着している。9～13は，外来系の甕である。9は，胴部に割と細かい叩き目をもつ甕で，全体に風化を受けている。口縁は「く」の字形に外反して，端部を摘みぎみにおさめている。胴内面はヘラケズリされている。伝統的V様式あるいは庄内系の甕であろう。灰褐色気味のにぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。10は「く」の字形に口縁が外湾するほぼ完形の小形甕である。胴上部に最大径をもつ球状の胴部で，底部は尖りぎみの丸底の庄内系の甕である。口縁は摘みぎみにおさめている。器面は全面に風化を受けている。外面は叩きの後にナデ仕上げか。内面は板状具でケズリが行われているようだ。にぶい橙色の色調で，胎土には石英，長石，金雲母を含む。11～13は布留式系の甕である。11は張りをもつ胴部が急速にすぼまり，「く」の字形に外反した口縁の端部は内上方に摘みぎみにおさめている。胴部から口縁内面は細かいハケ調整され，胴上半から口縁外面はナデ消しされている。胴内面は，ヘラケズリされる。明赤褐色の色調で，胎土には石英，長石，金雲母を含む。12は「く」の字形に外反する口縁はやや内湾して，端部を外方へ摘みぎみにおさめている。胴部から口縁部はナデて平滑に仕上げられ，胴内面はヘラケズリされる。胴部には刺突文を施している。浅黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。13は内湾ぎみの口縁で，全体に風化を受けている。胴部内面はくびれ部の1.4cm下からヘラケズリしている。灰色の色調で，胎土には石英，長石，金雲母を含む。14～21は壺である。14～15は，口縁が「く」の字形に外反する広口壺で，端部は面取りされ，平坦におさめている。14は外面は風化をうけるが，内面にはハケが残っている。




第103図　5号濠出土土器①（1／4）

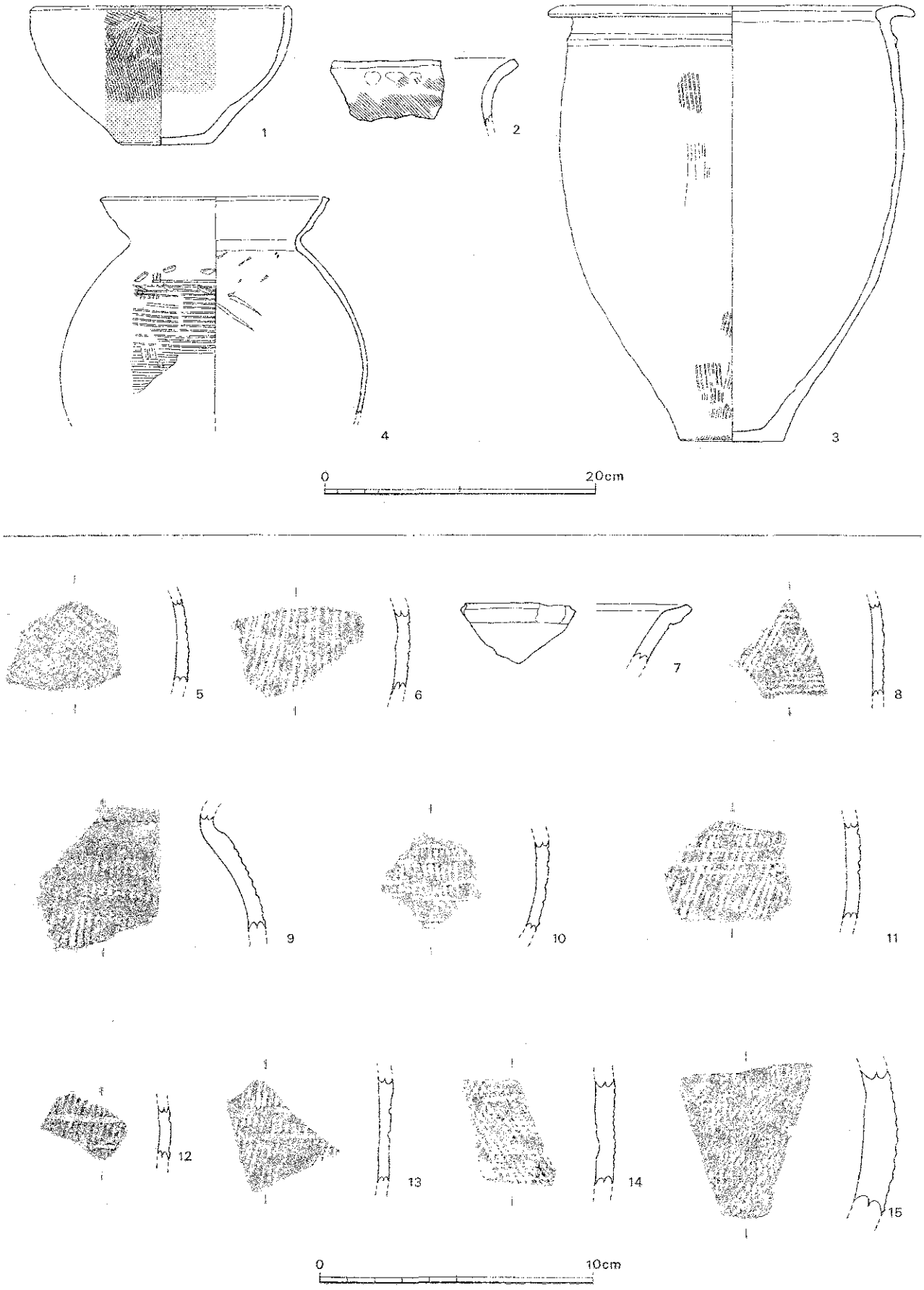



第104図　5号濠出土土器②（1／4）

15は外面がハケ，内面はハケで下半がナデ消されている。色調は，14がにぶい橙色，15が明赤褐色を呈し，胎土には両者ともに石英，長石を含む。16は，ほぼ完形の壺で，卵形の胴部から頸部が直立ぎみに立ち上がり，口縁が少し外湾する資料である。底部は，丸底に近い凸レンズ状底である。橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。17は直口壺である。器面は風化を受けていているが，内面にはハケ目が残っている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。18・19は長頸壺である。18は扁球状の胴部から頸部が直立して立ち上がり，口縁がやや外反するもので，端部は平坦におさめている。胴部はハケ調整され，口頸部から胴部内面上半にかけてナデ仕上げされている。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。19は，布留式系の長頸壺で，丸い球状の胴部から口頸部が逆「ハ」の字形に開く資料である。外面から口頸部内面は平滑なナデ仕上げされ，胴部内面はヘラケズリされている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，角閃石を含む。20は球状の胴部から口頸部が逆「ハ」の字形に開く広口壺であるが，口縁部は肥厚されて頸部との淡い段がつく。外面から口頸部内面はナデ仕上げ，胴部内面にはハケ目が残る。浅黄橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。21は，山陰系の二重口縁壺である。屈曲部は鋭く外方に突出し，口縁端部は摘みぎみにおさめている。器面は著しく風化を受けるが，胴部内面のくびれ部1.4cm下からヘラケズリされる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。22～24は，鉢である。22は，小さく外反する短い口縁をもつ丸底の鉢である。ほぼ完形の資料で，器面全体が平滑なナデ仕上げされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。23・24は，丸底の浅鉢である。23は体下半がヘラケズリされる小形の鉢で，他はナデ仕上げされるが内面にハケ目が残っている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，角閃石，金雲母を含む。24はほぼ完形の鉢で，小さな凸レンズ状底がつく。器面全体は，ハケの後ナデ消されている。灰褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。25は脚台付の壺である。脚台部を欠失している。丸く張りをもつ胴部外面はハケの後上半部をヨコミガキが施されている。直線的に立ち上がる口縁はヨコナデされ，内面はナデ仕上げされている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。26は低脚の高杯である。脚台には焼成前の穿孔が5箇所認められる。器面は風化を受けている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。以上の5号濠出土の土器は，弥生後期後葉から古墳前期初頭期の柳田氏のⅡa式，井上氏の古墳前期1式までの段階までの資料と考えられる。この濠は弥生後期に掘削され，古墳前期初頭ごろに埋没したのであろう。

**その他の土器**（第105図）

1は，ほぼ完形の丹塗鉢である。器面は風化を受けているが，外面はハケ調整され，内面はナデ仕上げされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。4号溝から出土した。2は如意形の甕口縁片で，端部は平坦におさめている。外面には斜位のハケ，内面横位のハケが入る。橙色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。B区ピット14出土。B区ではこの他に刻目をもつ如意形の甕口縁片が3点出土している。3は，鋤先形口縁のほぼ完形の甕で，口縁下に断面三角形の突帯をもつ。外面はハケ，内面はナデ仕上げされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長




第105図　その他の土器（1／2・1／4）

石，角閃石，金雲母を含む。弥生中期後半の須玖II式古段階の資料である。A区ピット3出土。4は，布留式の甕である。球形の胴部からやや凹凸をもち内湾する口縁で，端部は外方に尖りぎみにおさめている。胴部は横位のハケ，胴上端から口縁はヨコナデ調整される。胴部内面は，くびれ部の7㎜ほど下からヘラケズリされている。胴上半には，刺突文が6箇所施されている。A区ピット110出土。5～15は朝鮮半島系の土器である。5・6は三韓系の瓦質壺片で，外面に5は格子目文，6は縄席文の叩きが施され，6には細い沈線が入る。5はA8区3層出土。6はG2区3層出土。7・8は楽浪系の瓦質土器で，7は鉢口縁部，8は細かい縄席文叩きを施す壺胴部の破片である。7はG4区3層，8はA6区3層出土。9～15は，陶質土器壺破片である。いずれも縄席文叩きを施し，10～13は沈線がめぐる。9がD7区2層，10がD6区3層，11がD3区2層，12がA7区2層，13がA区1層，14がD6区2層，15がD8区2層出土。遺構出土の項でとり上げた1号住居から三韓系瓦質壺片1点，5号住居から三韓系瓦質壺片1点，1号濠上層から楽浪系の瓦質鉢片1点が出土している。この他に，三韓系瓦質壺片がA8区3層，D6区3層，G1区から出土し，陶質土器壺破片がD3区3層2点，D4区3層，D7区3層から出土した。その内訳は，楽浪系瓦質土器3点，三韓系瓦質土器7点，陶質土器11点である。

**1号甕棺**（第106図）

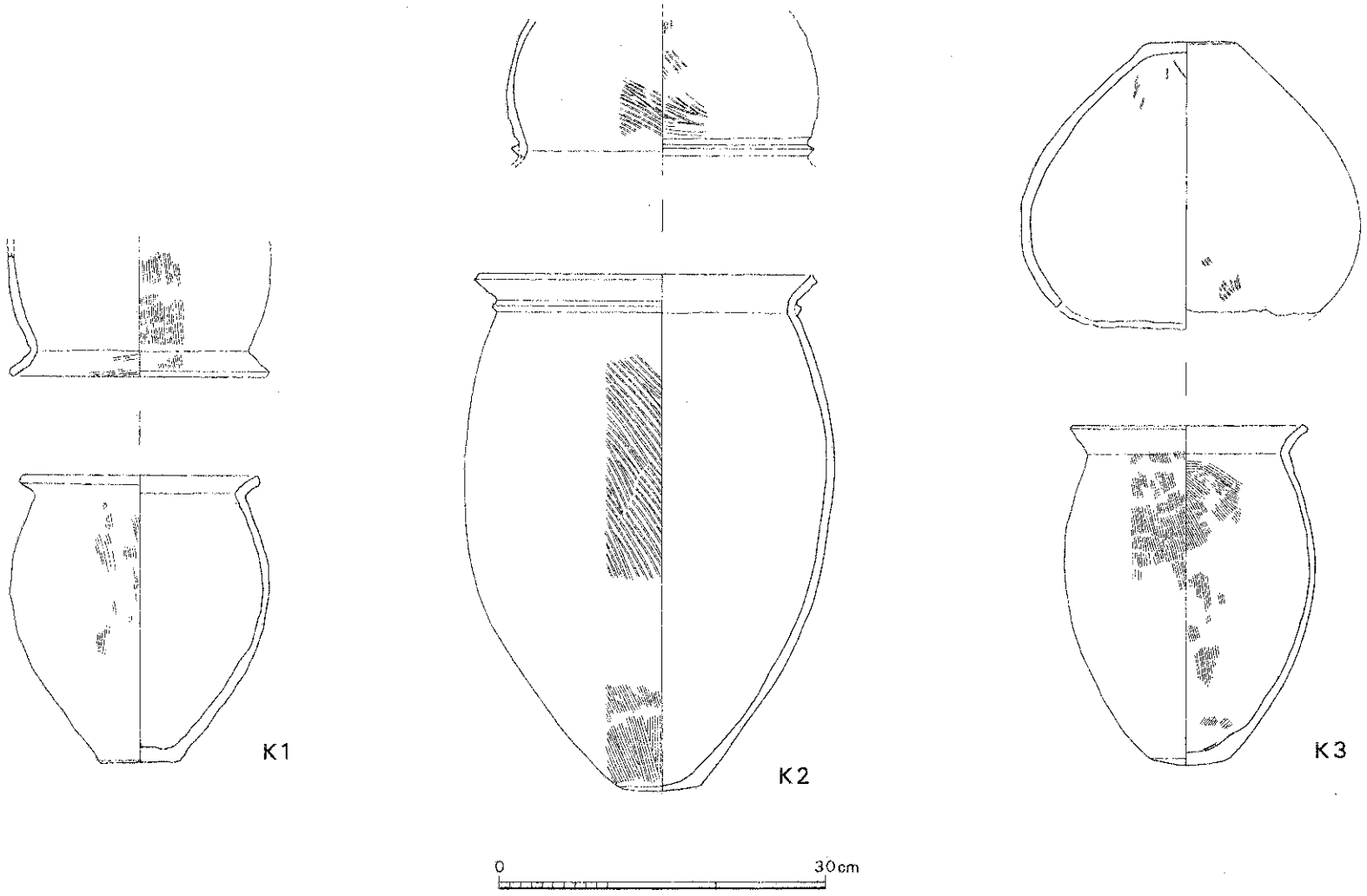
甕と甕を組み合わせた合口甕棺である。上甕は，後世の削平を受けて胴中位以下を欠失している。「く」の字形に口縁は外反して，端部は面取りされるがまだ丸みをもつ。胴外面はハケ，口縁はヨコナデ，胴内面は平滑に仕上げられる。にぶい褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。下甕は，丸く張りをもつ胴部から「く」の字形に口縁が外反する甕で，端部は丸くおさめている。外面はハケナデ消し，内面はナデ仕上げされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。焼成後の穿孔は認められない。1号甕棺は，弥生後期前葉の高三瀦式の甕が使用されている。

**2号甕棺**（第106図）

突帯をもつ甕を組み合わせた合口甕棺である。上甕は，口縁部を打ち欠いて使用され，胴下半部は後世の削平を受けて欠失している。胴部内外面ともに風化を受けているが，ハケ目が残る。浅黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。下甕は長胴の甕で，底部は凸レンズ状底をなす。器面は，胴部がハケ，口縁がヨコナデ，内面が平滑なナデ仕上げで，内底面には指オサエの痕がつく。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。上下棺ともに焼成後の穿孔は認められない。2号甕棺は，弥生後期後葉の下大隅式の甕が使用されている。

**3号甕棺**（第106図）

壺と甕を組み合わせた合口甕棺である。上甕は，口頸部を打ち欠いた壺を使用している。器面はハケの後にナデ仕上げされている。赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。下甕は，口縁が「く」の字形に外反する甕で，底部は分厚い凸レンズ状底をなしている。胴部は内外面ともにハケ調整され，口縁はヨコナデされる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。3号甕棺は弥生後期後葉の下大隅式の土器が用いられている。




第106図　出土甕棺（1／6）

②石器（第107～115図）

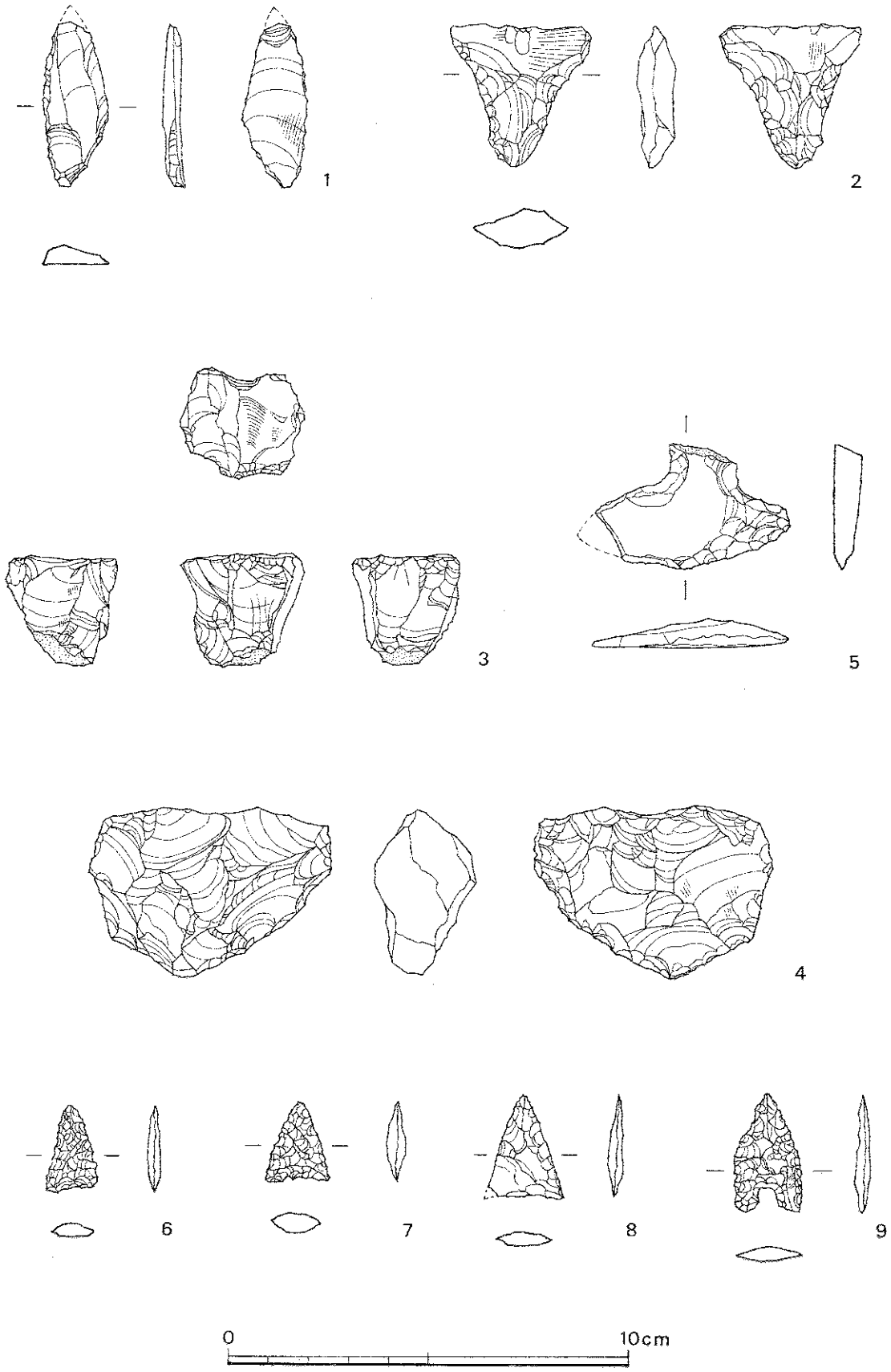
1～9は，4・8が安山岩製の他は，黒曜石製の剥片石器類である。1はナイフ形石器で，側辺を刃潰しを行い，斜めに刃部をもつが，先端を欠失している。A区1号竪穴住居跡出土した混入品である。2は，側辺を調整して平坦な刃部をもつ台形様石器である。D3区2層出土。3・4は石核である。3は，上面に打面をもち下位に剥ぎ取っていて，多角錐状をなす。下端には自然面が残る。A7区3層出土。4は亀甲形の石核で，周囲から剥片を剥ぎ取っている。G1区3層出土。4は小形の石匕である。丸く刃部がつき，先端が欠失している。G2区の2層出土。6～8は石鏃である。6～8は平基式の三角形鏃であるが，9は五角形で基部が凹んで双脚をなす。6はB3区2層，7はI2区2層，8はB3区2層，9はC1区の1号濠出土。

10・11は，頁岩製の磨製石鏃である。10は完形品で，基部が平坦で，側辺が丸い三角形をなす。下面には細かい傷が入る。長さ5.5cm，幅2.6cm，厚さ3㎜，重さ5gを測る。11は三角形の形態だが基部が凹んでいて，上部を欠失している。10はC区の1号濠上層出土。11はA区ピット104出土。

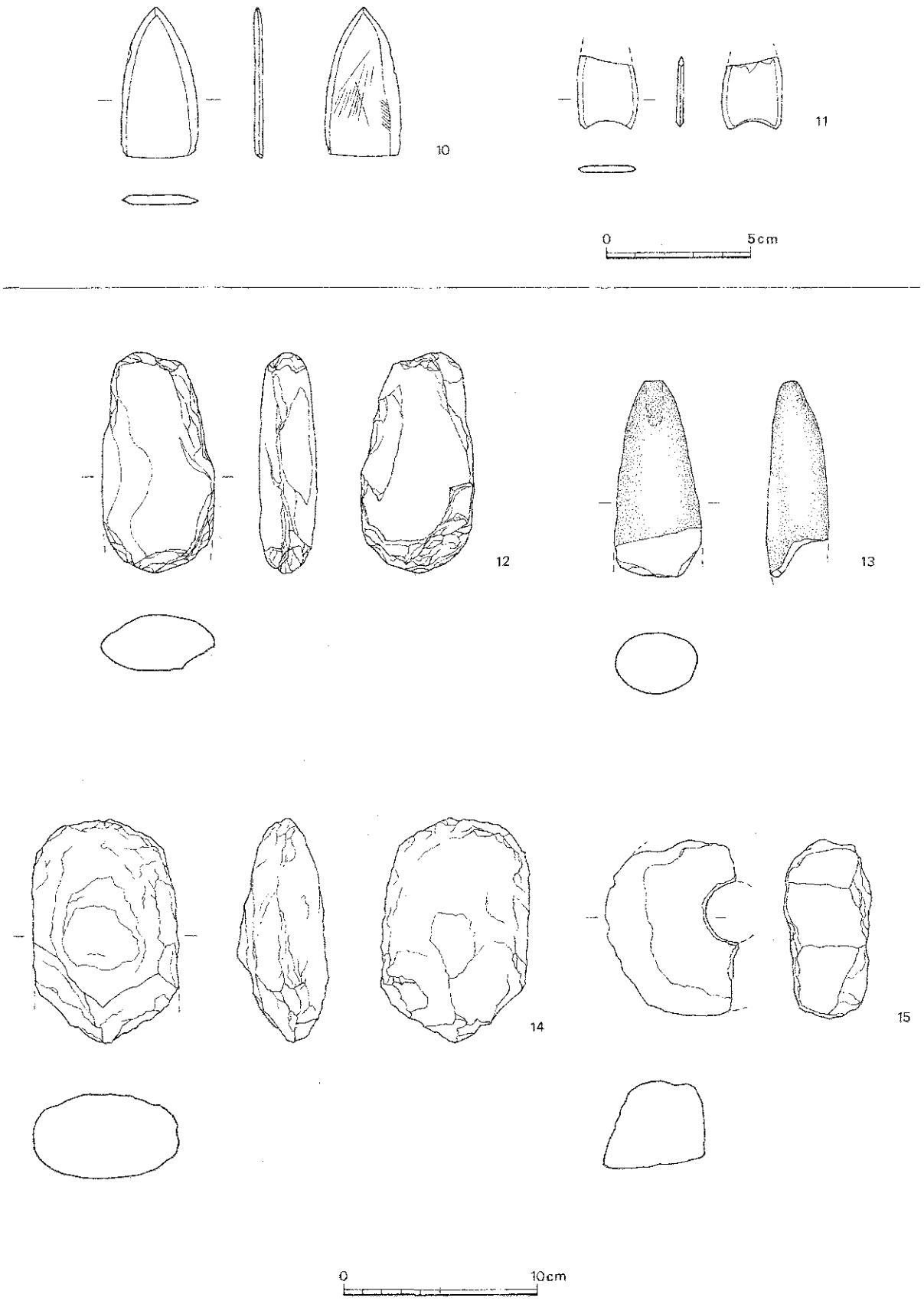
12～14は磨製石斧である。12は蛇文岩製の石斧で，先端と基部が潰れて欠損している。敲石として再利用した可能性が高い。13は中途から折れた頁岩製の石斧で，刃部を欠失している。14は頁岩製の石斧を大きい刃部をもつ礫器として再利用している。重量は，12が290g，13が190g，14が488gを量る。12はB4区3層，13はA6区2層，14はC区出土。15は，中央に径3.5cmの孔が貫通する凝灰岩製の石錘である。側面と下部を欠失している。重量は250gを量り，A5区3層出土。

16～21・40は砥石である。16～19・40は砂岩製で，20・21は粘板岩製で，16～19は荒砥・中砥，20・21は仕上砥である。16・17・21は上下面を使用し，他は側面も使用している。特に，20は全面を使用している。16・17は側面に筋状の傷が入る。40は大形の砥石で，先端が欠損している。上下面と側面を使用している。重量は，16が440g，17が358g，18が325g，19が645g，20が375g，21が1,810g，40が7,100gを量る。16が10号竪穴住居，17が2号濠上層，18が10号竪穴住居，19が7号竪穴住居，20がH区，21が2号濠上層出土。

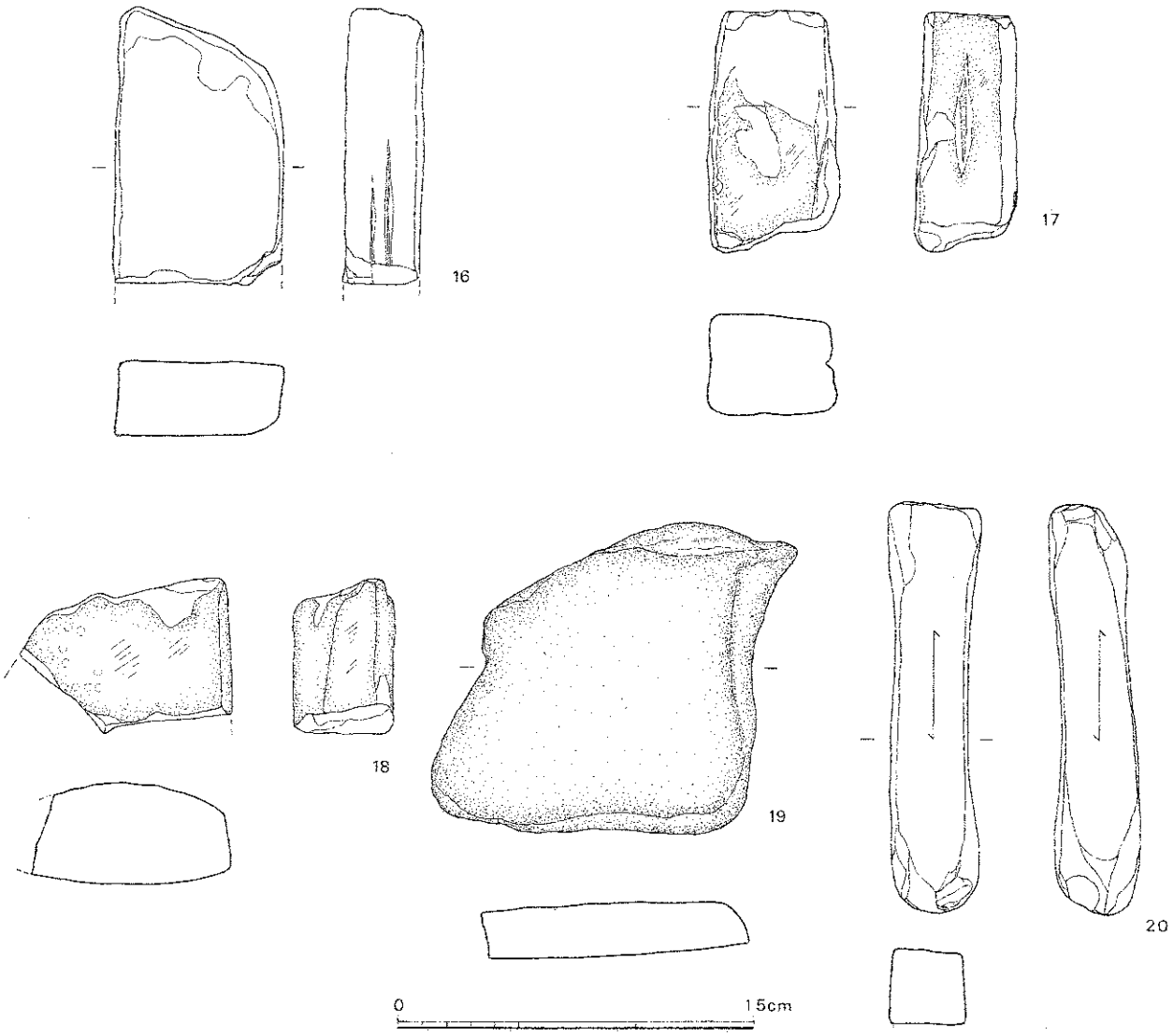
22～39は，磨石・凹石・敲石である。22は，7号竪穴住居出土の磨石・敲石で，上下面に敲打の痕跡がみられる。玄武岩製。重量1470gを量る。23は，10号竪穴住居出土の磨石・敲石で，上下面と側面に敲打痕がつく。花崗岩製。重量900gを量る。24～31は1号濠出土品で，24～27が上層，28～31・33・34が下層から出土した。24は棒状の円礫を用いる磨石・敲石で，先端・側面・上面に敲打痕がつき，磨石としても使用している。25は下面を磨面として主に使用する所謂手杵である。26は，上下面と側面に敲打痕がつく。27は上下面に敲打痕がつき，磨石としても使用している。いずれも玄武岩製で，重量は24が955g，25が1,530g，26が558g，27が1,002gを量る。28～30は磨石で，28・29は上下面に微かに敲打痕がついている。33は両端と下面に敲打痕がつく敲石である。31は凹石で，側面に敲打痕がついている。34は上面が少し凹んでいる。28～31は玄武岩製，33砂岩製，34は安山岩製である。重量は28が820g，29が260g，30は355g，31は880g，33は260g，34は880gを量る。32は，4号濠出土の凹石である。玄武岩で，重量が670gを量る。35は，5号濠出土の棒状の礫を用いた敲石で

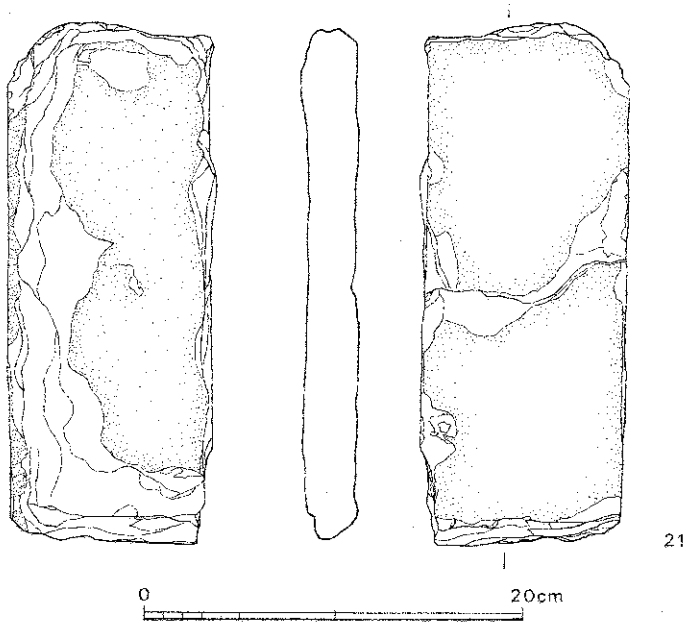



第107図　出土石器①（2／3）

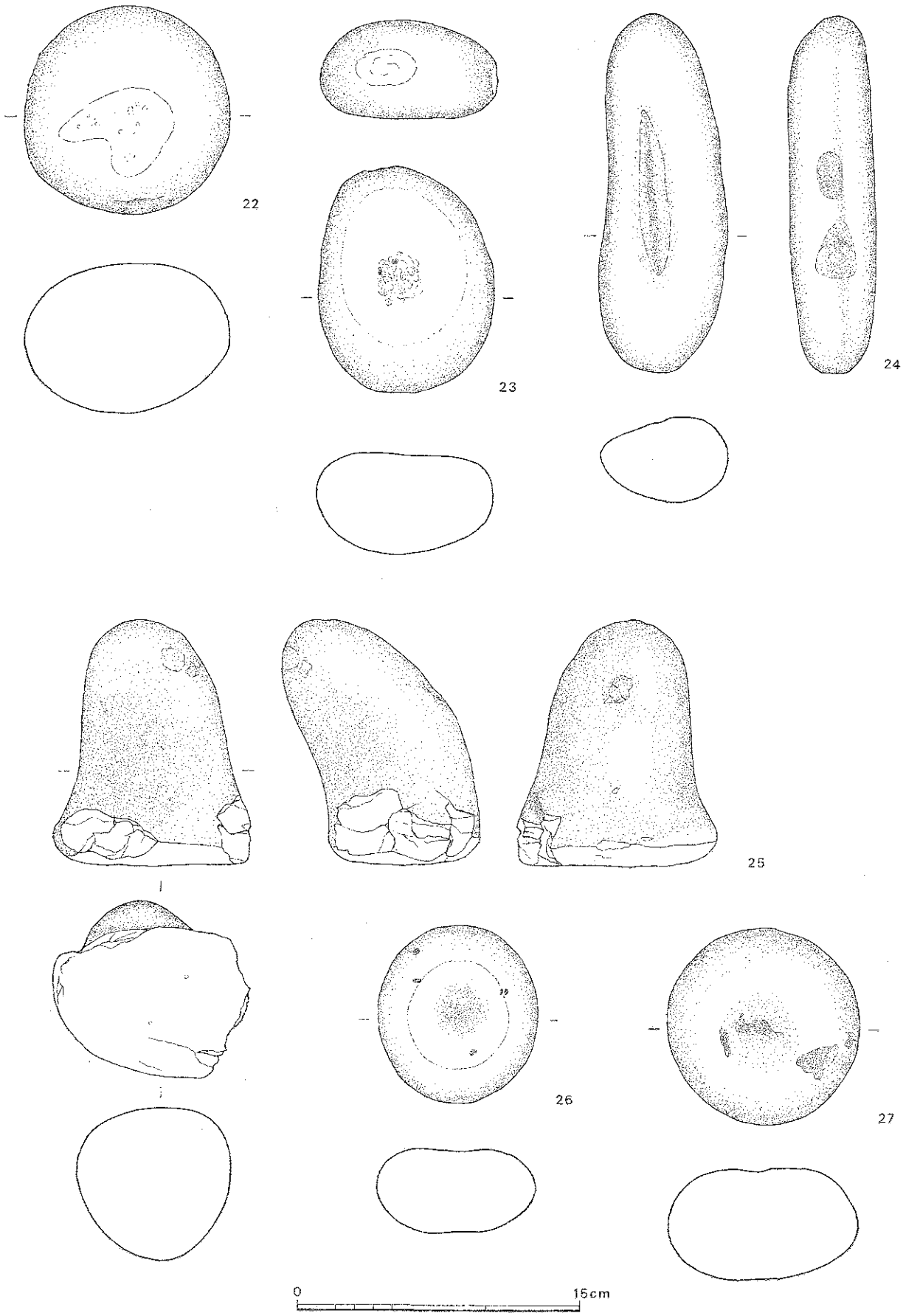



第108図　出土石器②（1／2・1／3）

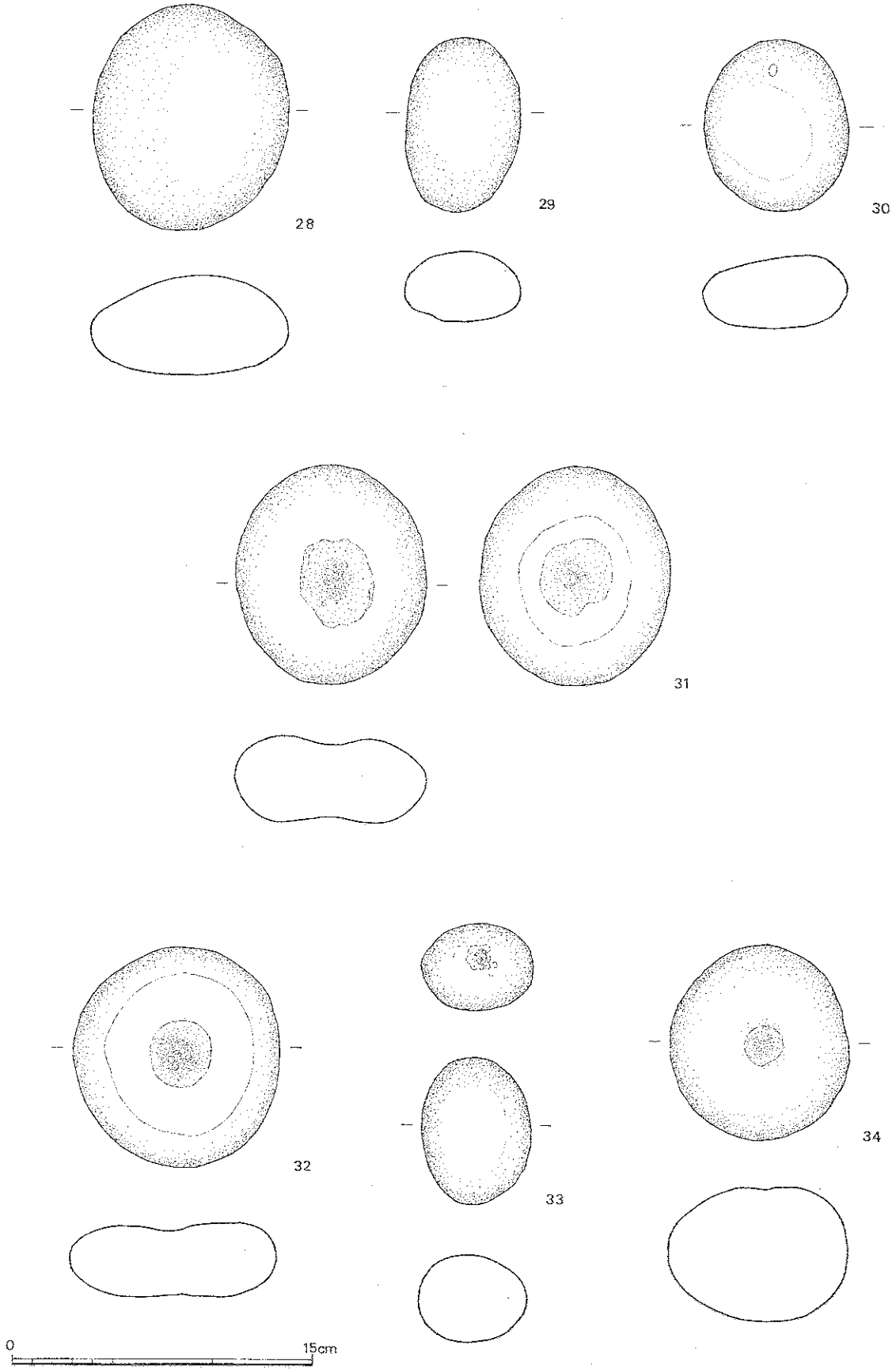


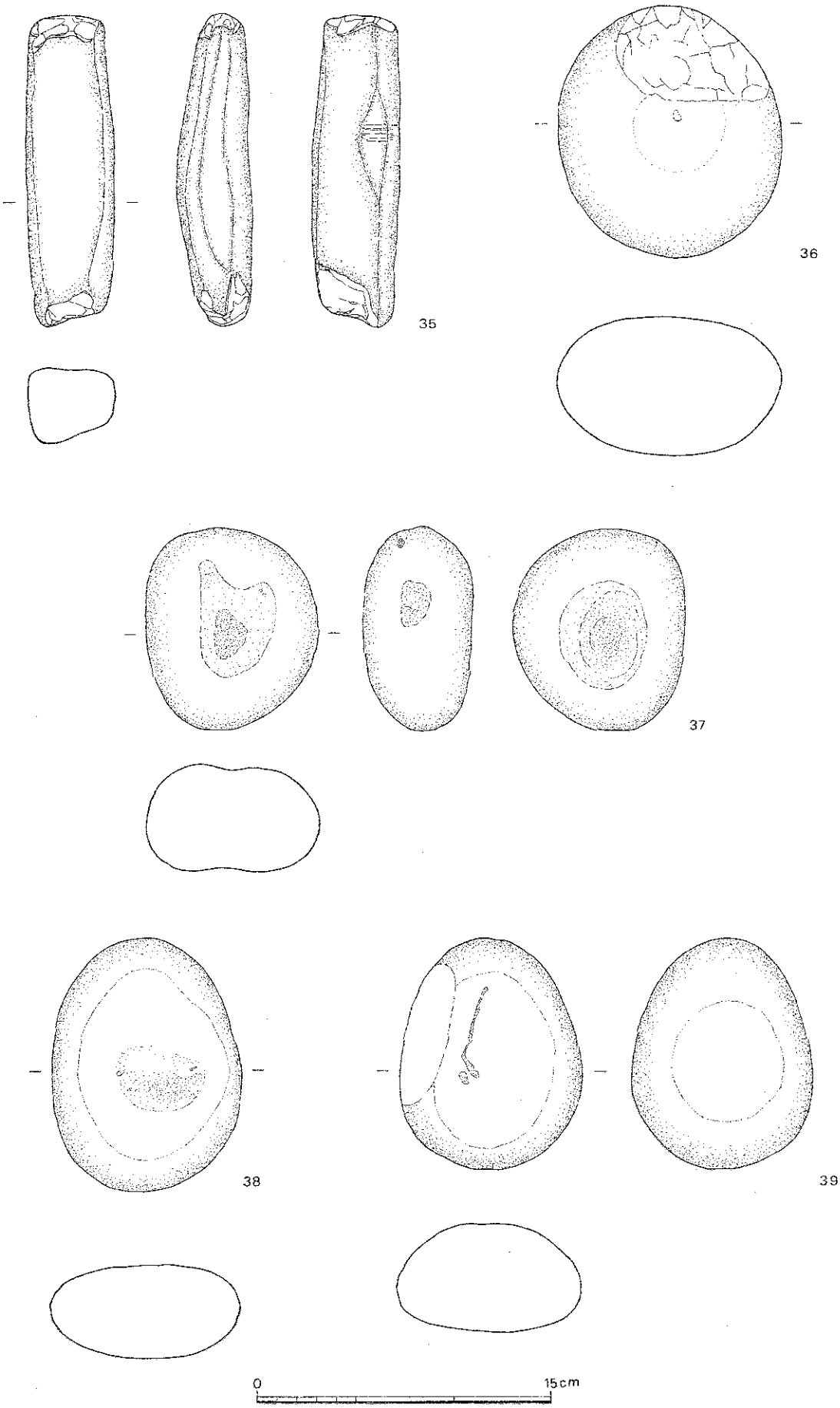

第109図　出土石器③（1／3・1／4）



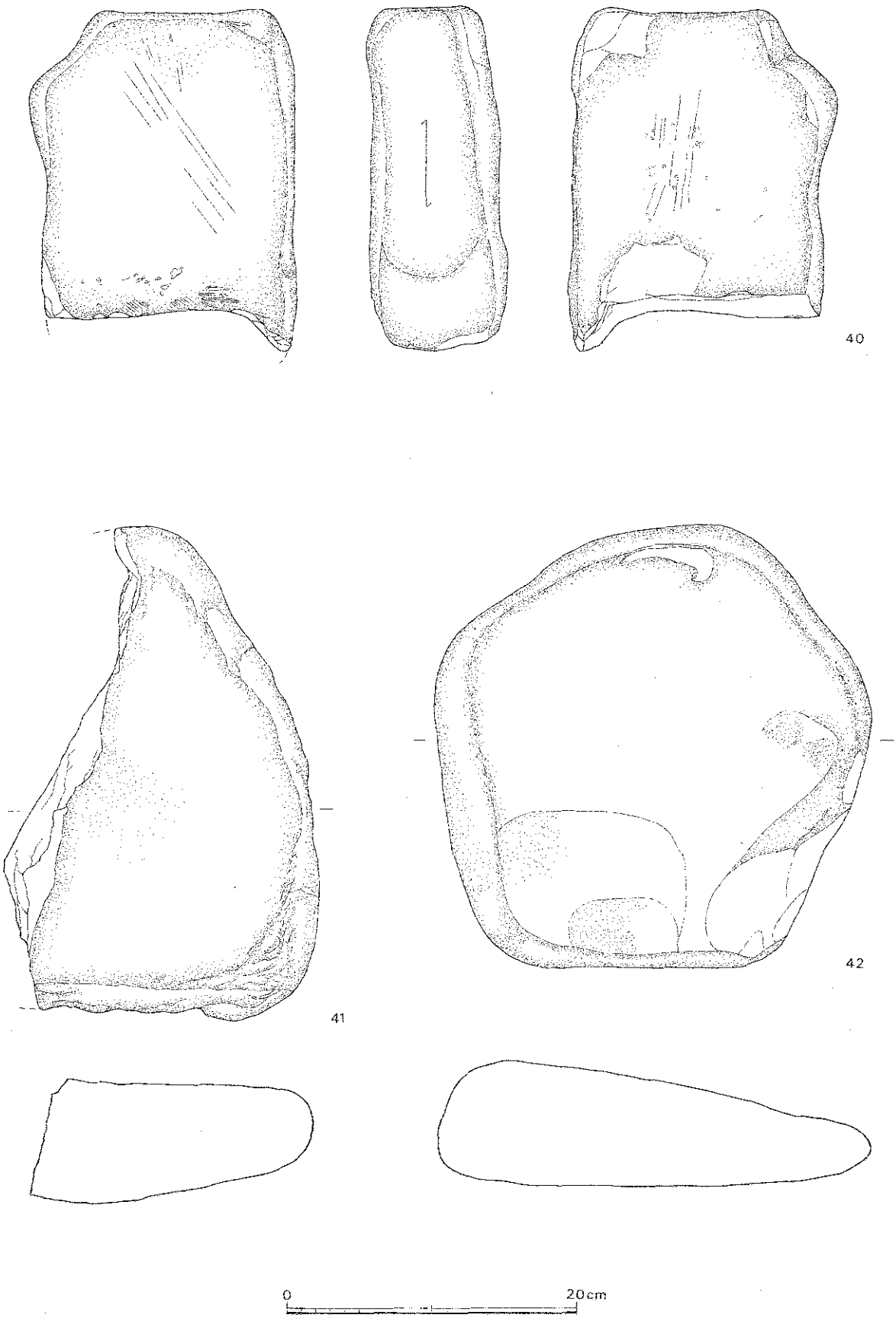

第110図　出土石器④（1／3）



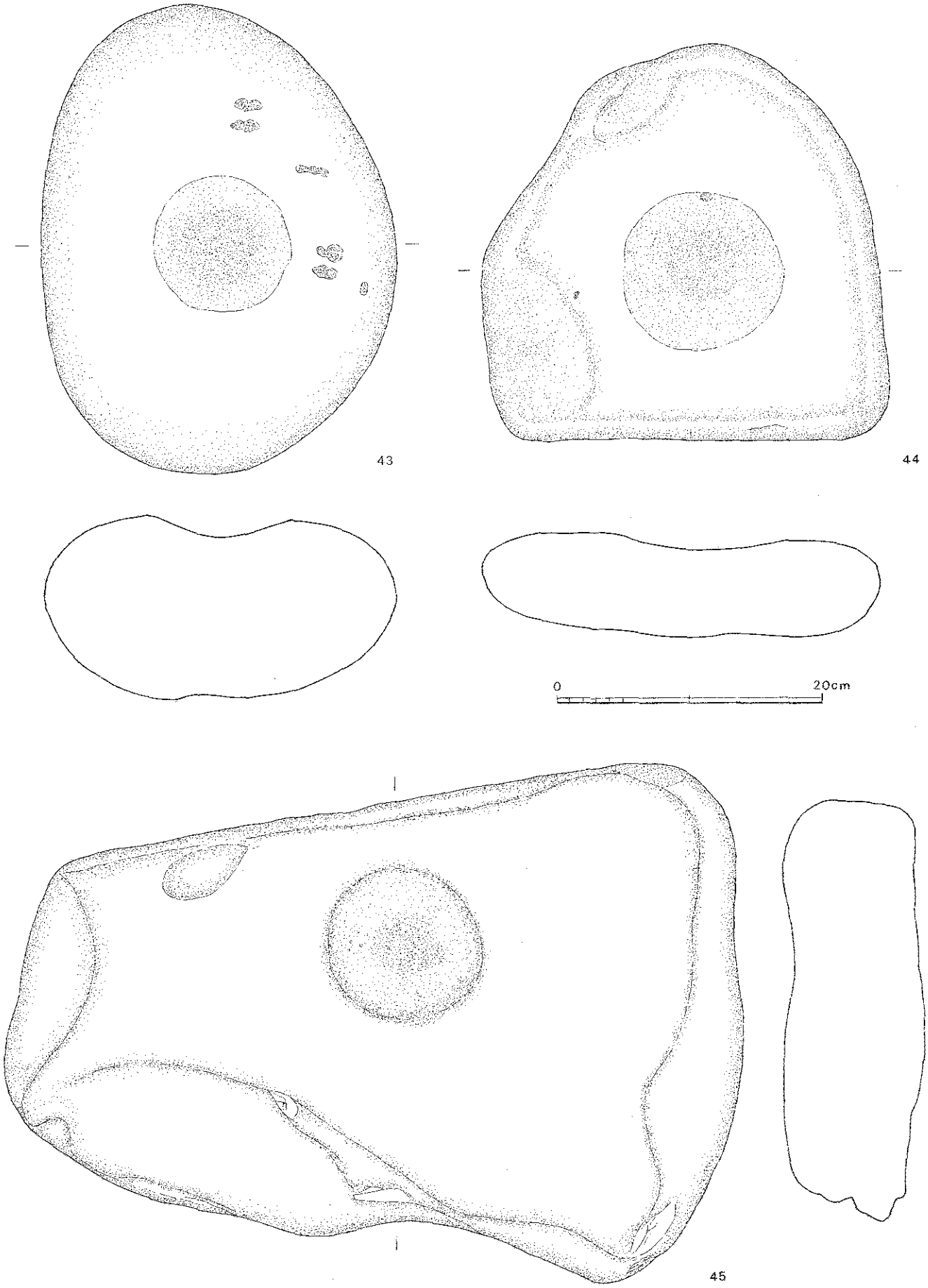

第111図　出土石器⑤（1／3）



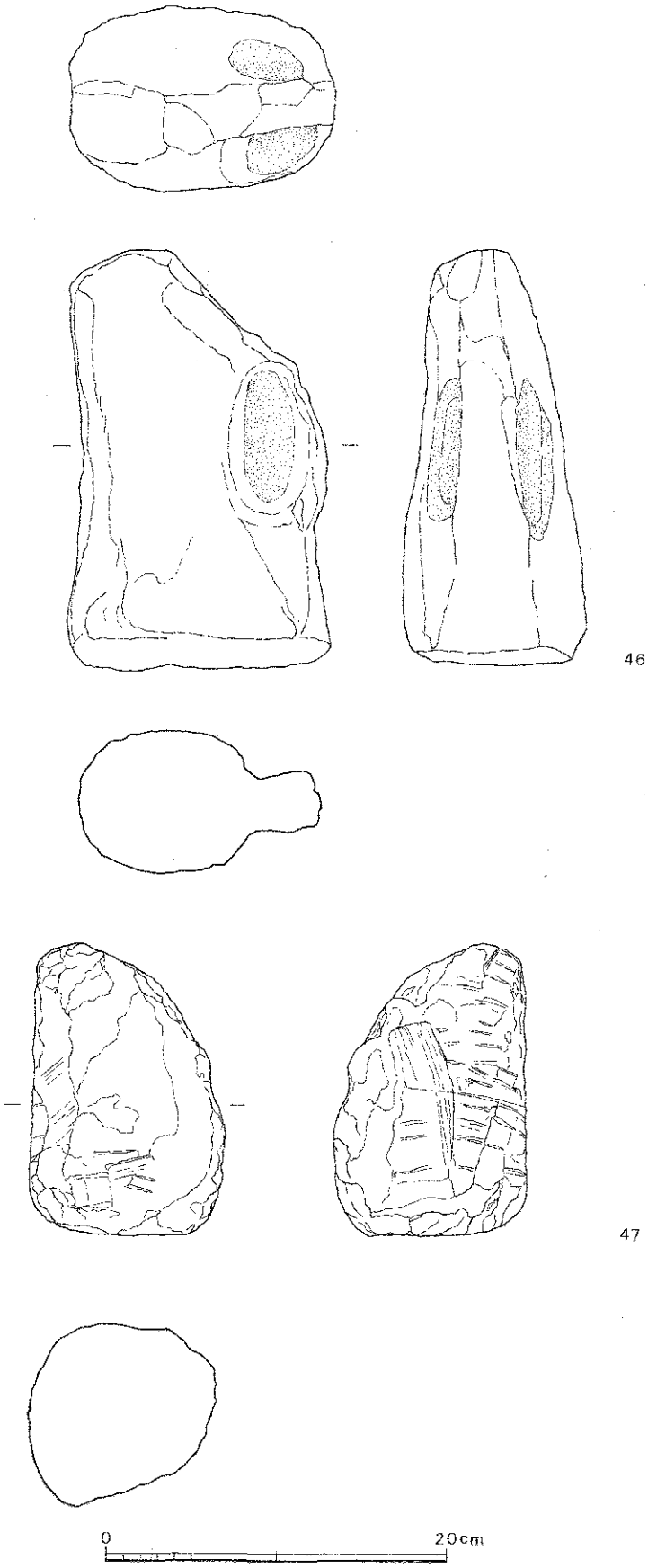

第112図　出土石器⑥（1／3）



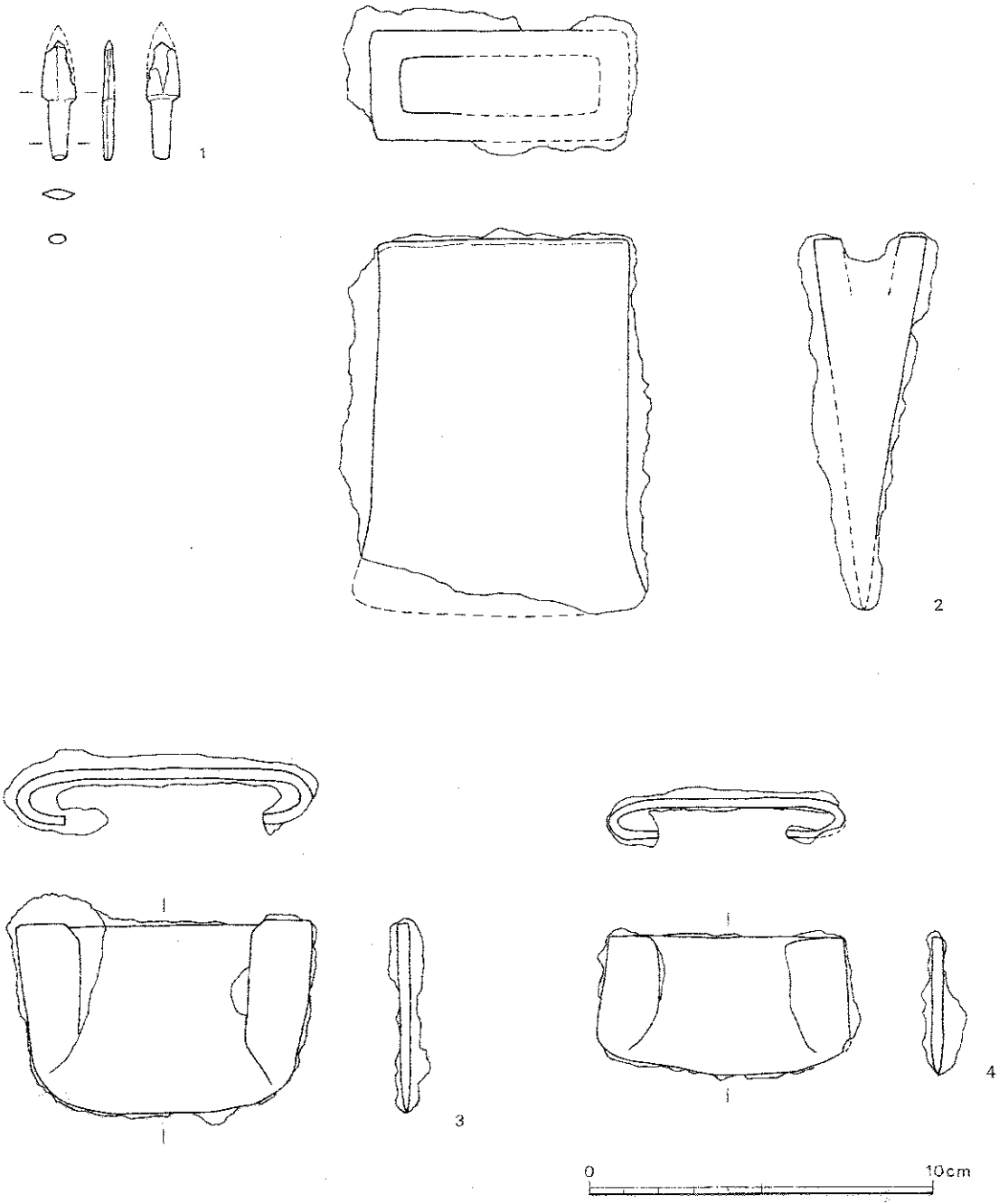

第113図　出土石器⑦（1／4）




第114図　出土石器⑧（1／4）




第115図　出土石器⑨（1／4）



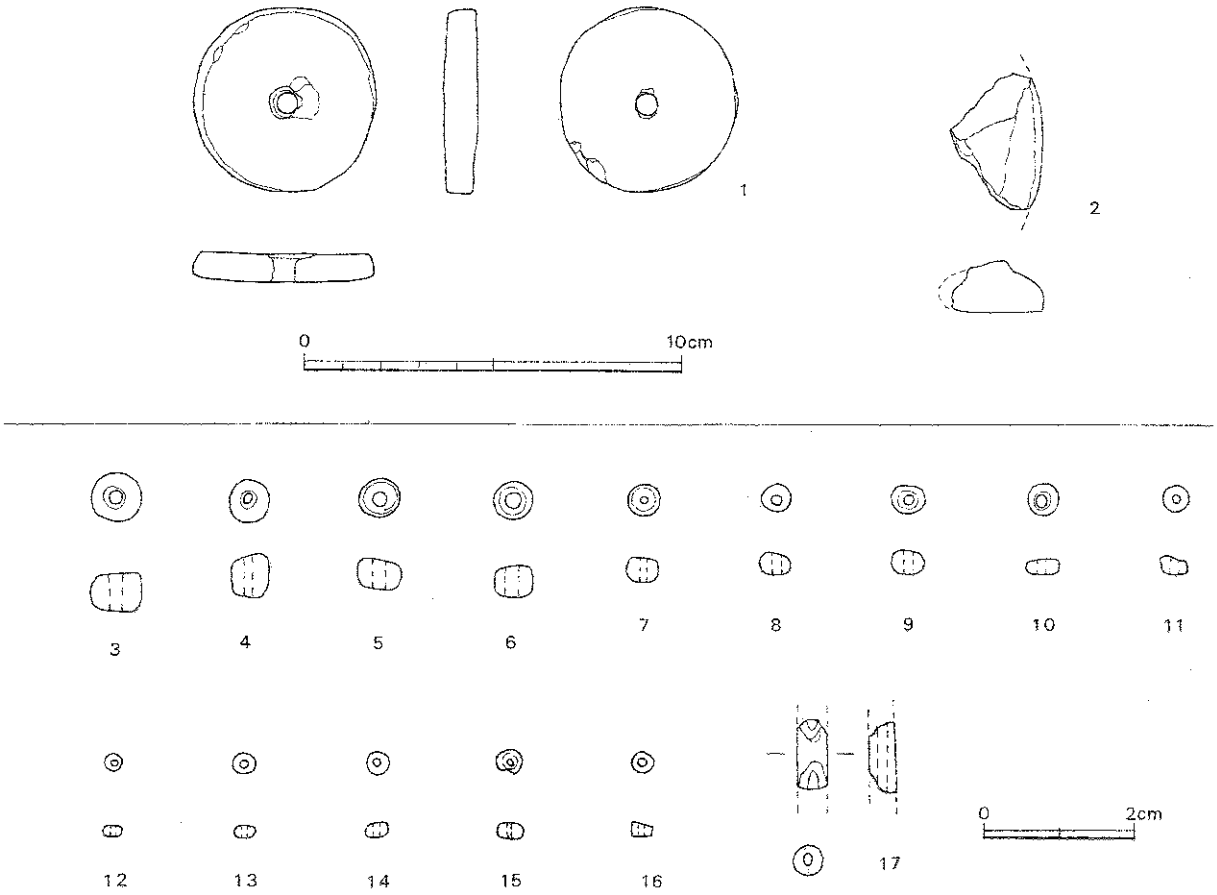

第116図　出土金属器（1／2）

ある。両端部が使用によって割れて潰れている。玄武岩製で，重量が450ｇを量る。36～39は，１号溝出土の磨石・凹石である。36・38・39は磨石で，36は上下面に微かに敲打痕がつく。37は上下面と両端に敲打痕をもつ凹石である。36・38・39は玄武岩，37は安山岩の円礫を用いている。重量は，36が1,125ｇ，37が845ｇ，38が1,000ｇ，39が960ｇを量る。

41・42は，７号竪穴住居から出土した台石で，41は半分ほど欠損している。41は安山岩，42は玄武岩である。41は上面に敲打痕がみられる。重量は，41が7.3kg，42が12.52kgを量る。43～45は玄武岩製の石臼である。43は12号竪穴住居から出土した資料で，大きな円礫を用いる。上下面に丸い凹みをもつ。重量は19.3kgを量る。44は角の丸い板状石を用いて，上面に丸い凹みをもつ資料である。重量12.8kgを量る。Ａ区出土。45は１号溝から出土した大形の石臼で，上面にある丸い凹みは中央よりずれた位置にある。重量40kgを量る。46・47は凝灰岩製の烏帽子形の石製支脚で，地元ではクド石と呼ばれる。46は，耳形の把手を作り出す資料で，１号溝出土。4.72kgを量る。47は全面に削られた加工痕を残す資料で，Ｇ区出土。２kgを量る。

③石製品（第117図）

１は，粘板岩製の石製紡垂車で，中央に径５㎜の孔が空けられている。径4.8cm，厚さ0.9cm，重さ




第117図　出土石製品・装飾具（１／１・１／２）

20ｇを測る。５号竪穴住居出土。

④金属器（第116図）

１は有茎の銅鏃で，身には鎬がつく。先端を欠失している。重量２ｇを量る。H区２層出土。２～４は鉄器である。２は鋳造鉄斧で，刃部は先端をほとんど欠損している。長さ11cm，上部幅7.4cm，推定刃幅8.6cm，上部の厚さ3.2cmを測る。Ｇ１区３層出土。３・４は鋤先である。３は，長さ5.5cm，上部幅8.7cm，厚さ３mmを測る。Ａ５区３層出土。４は，長さ4.4cm，上部幅6.9cm，刃幅7.3cm，厚さ３mmを測る。Ｃ５区２層出土。この他に25点の鉄片が出土した。

⑤装飾品（第117図）

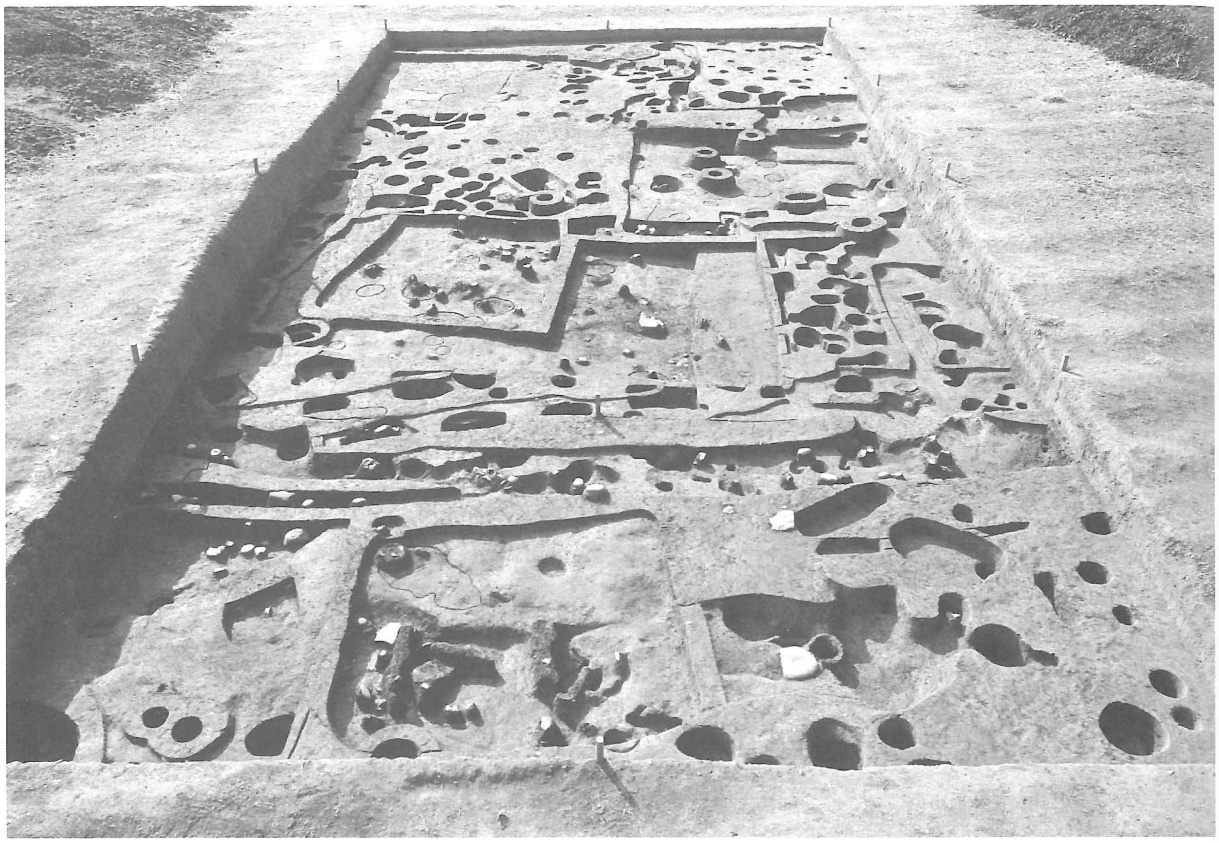
２は硬玉製の石製品であるが，大部分を欠損している。下面は平坦に磨かれていて，上部もいくらか磨いているようだ。未製品であろうか。15ｇを量る。Ａ７区２層出土。３～17はガラス製の玉である。３～16はガラス小玉である。３・６・12・13が青緑色，４・８が暗青色，５・７・９・10・16が濃藍色，11がくすんだ青緑色，14がくすんだ緑青色，15が藍色を呈する。３は１号濠，５・11・12は12号竪穴住居，４はＨ１区３層，６・14はＨ３区２層，７は２Ａ区３層，８はＡ８区３層，９はＡ区ピット127,10はＧ４区２層，13はＡ６区３層，15はＨ区，16はＡ１区３層出土。17は，ガラス製管玉で，両端を欠損している。淡緑色を呈する。Ｉ８区２層出土。

**註１**　柳田康雄「九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣　1991

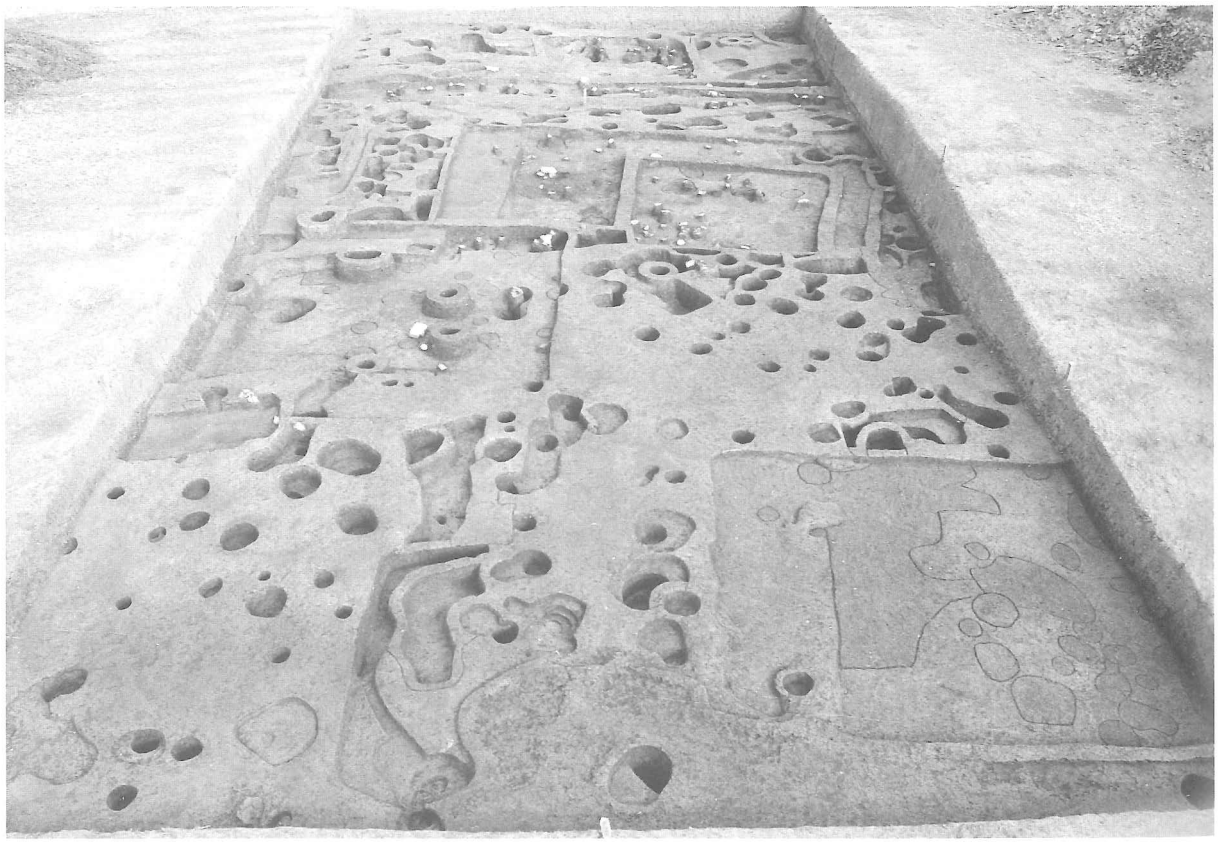
**２**　井上裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児嶋隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』　1991

調査区遠景

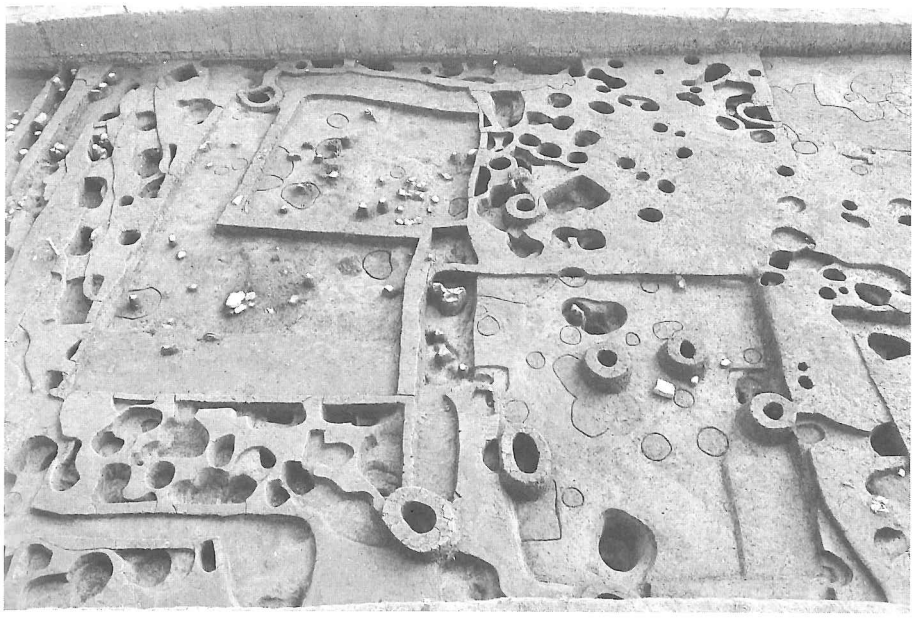
調査区遠景（東側上空から）



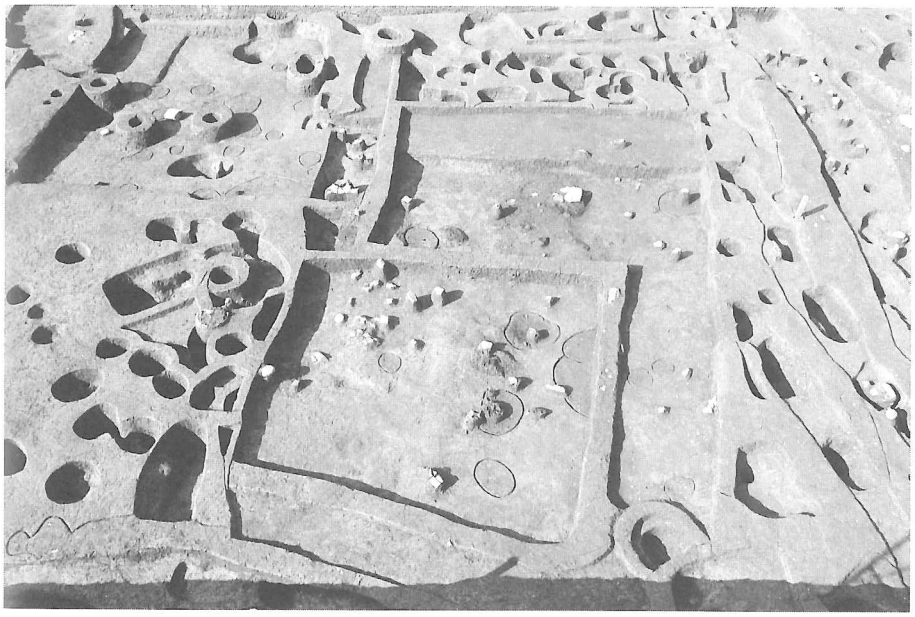
A区全景（北から）



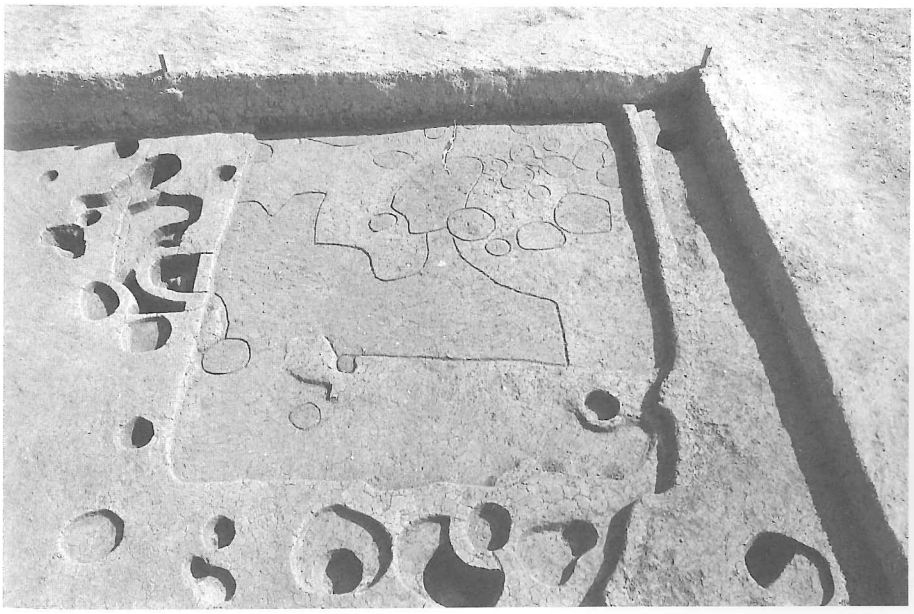
A区全景（南から）



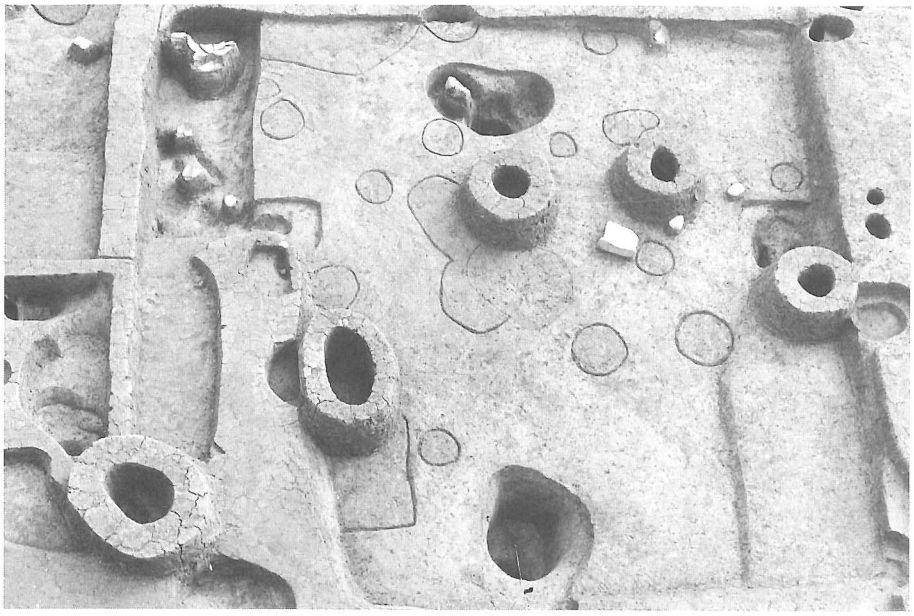
A区
住居跡検出状況
(西から)



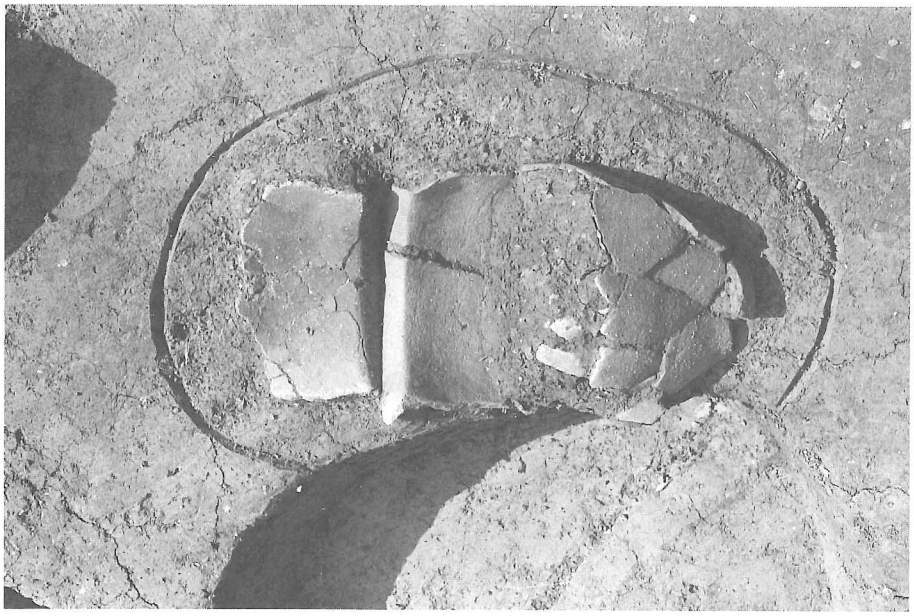
A区
2号・5号住居跡
(西から)



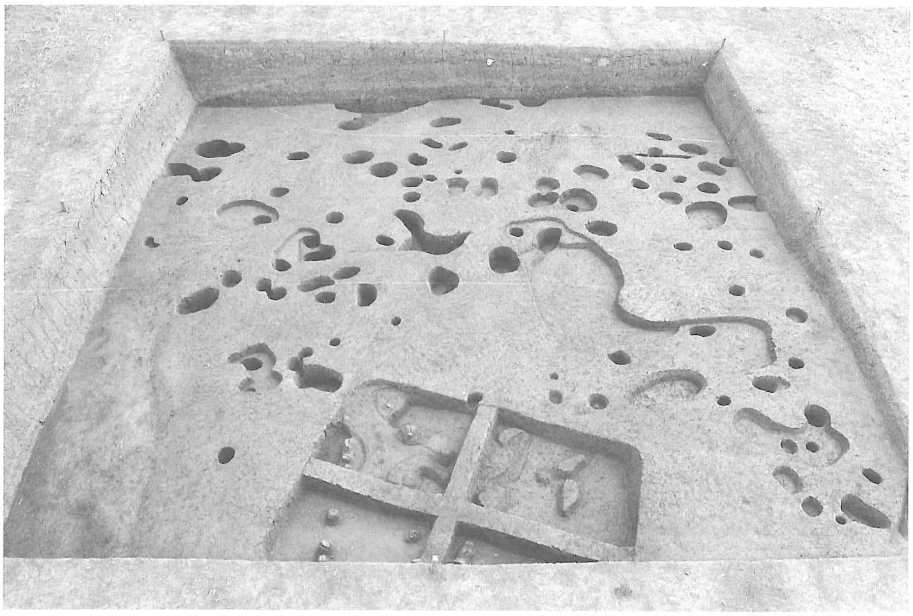
A区
3号住居跡
(西から)



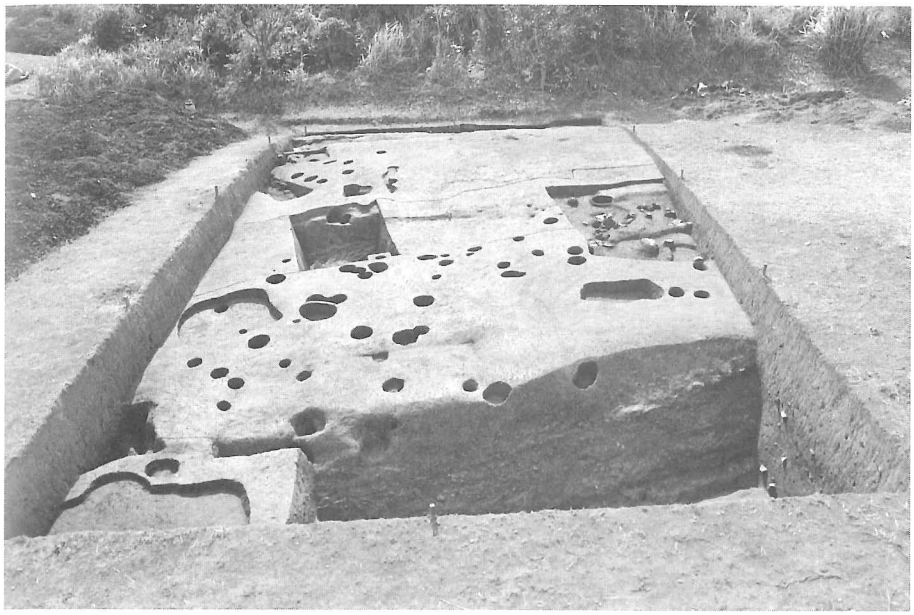
A区
4号住居跡
（西から）



A区
1号甕棺墓
（東から）



B区
全景（西から）



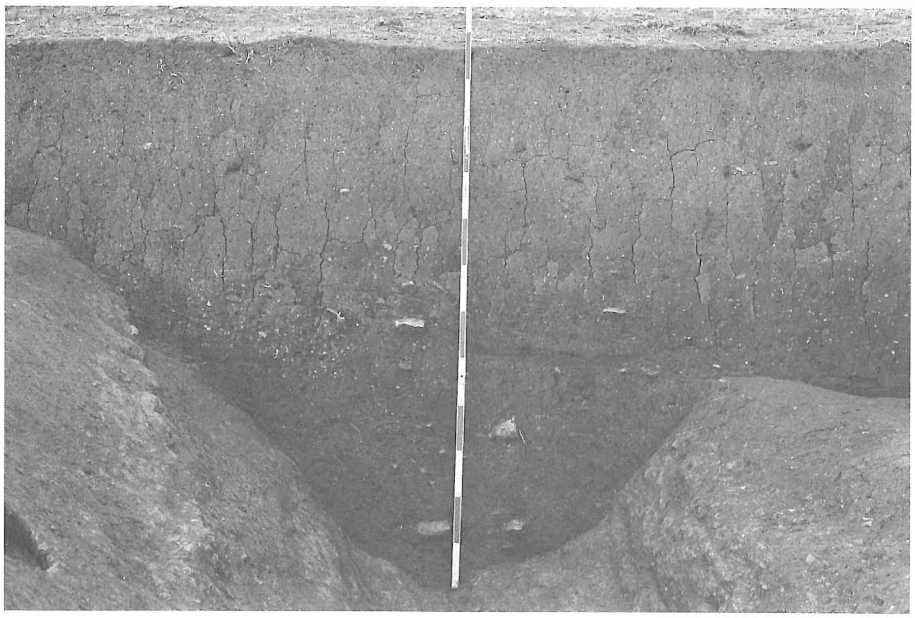
C区
全景（北から）

C区
調査風景

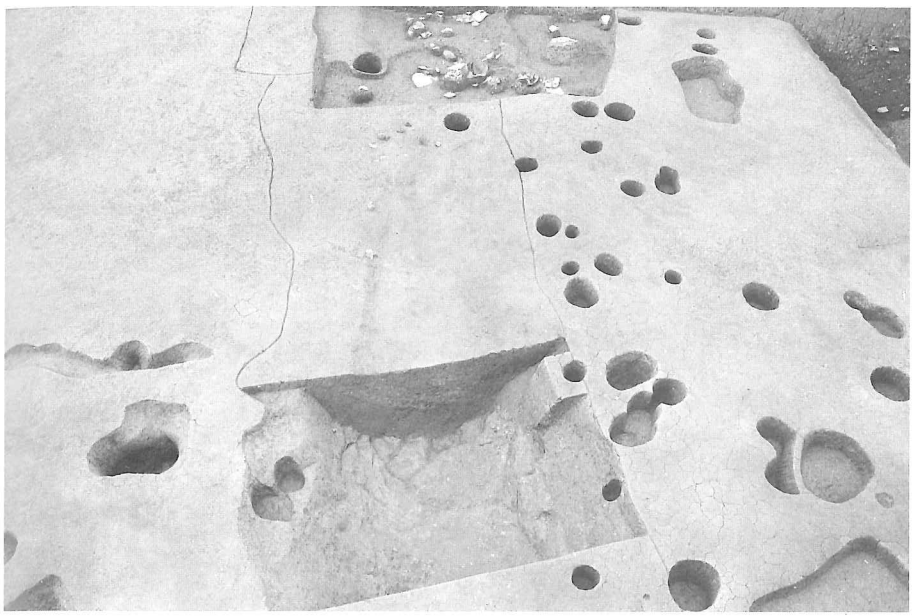
C区
1号濠下層出土
状況（西から）

C区
1号濠完掘状況
(東から)

C区
1号濠完掘状況
(西から)

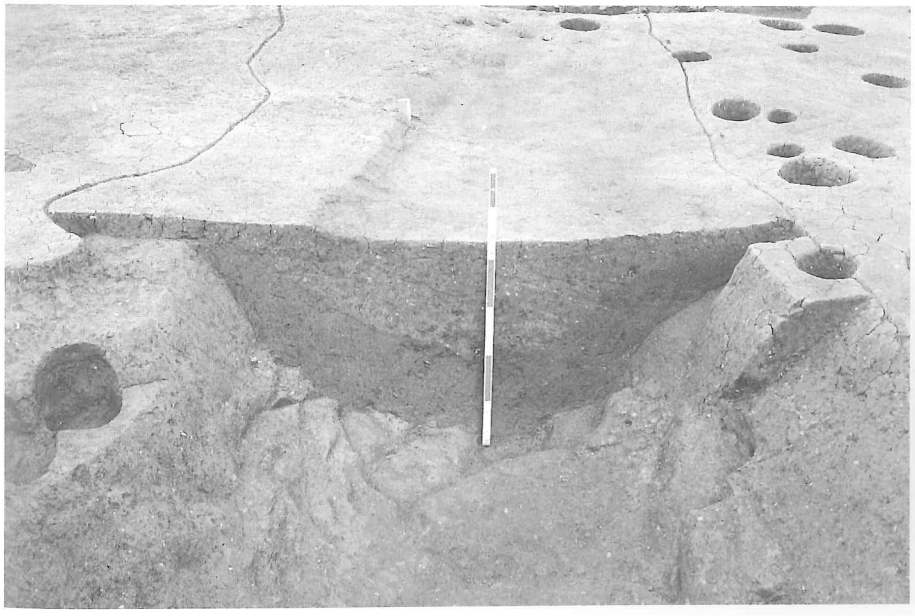


C区
1号濠土層断面
(西壁)



C区
2号濠検出状況
(東から)

C区
2号濠検出状況
(西から)



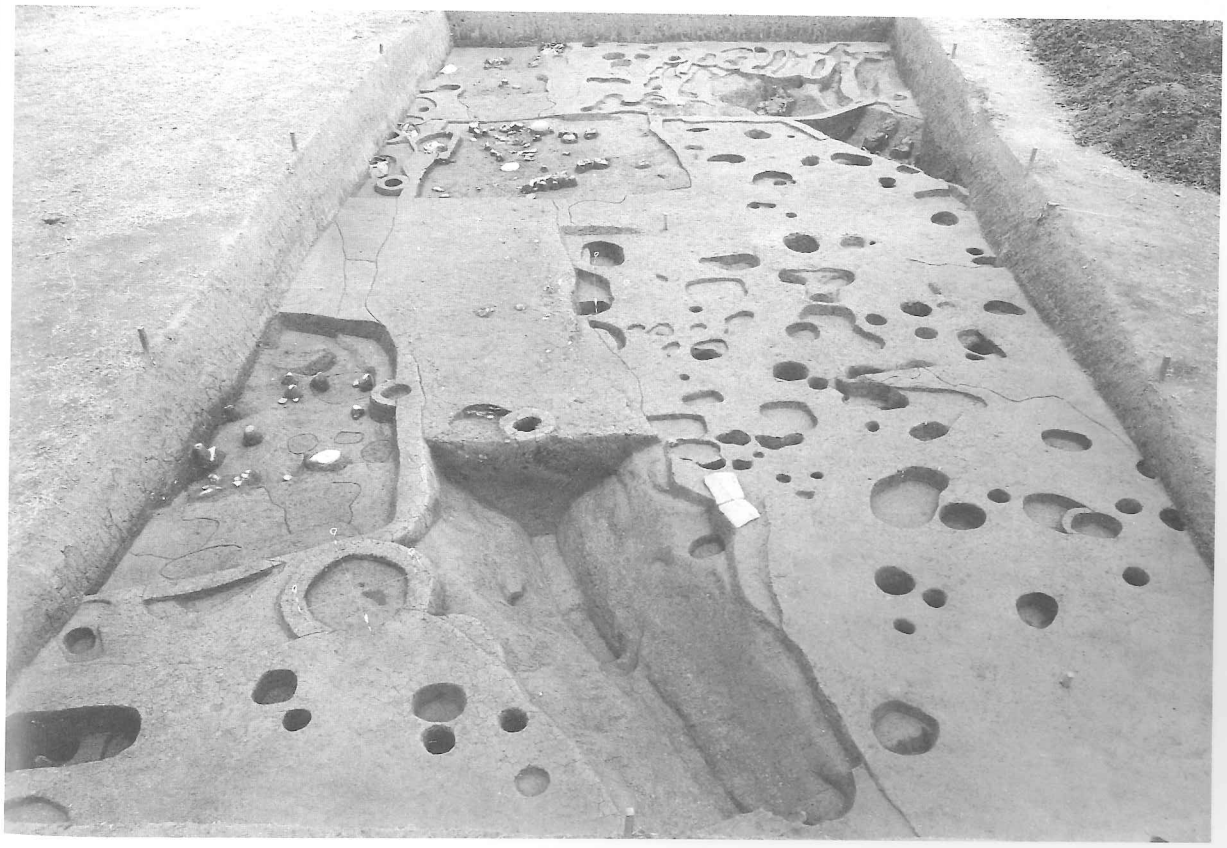
C区
2号濠土層壁面
(西壁)

C区
3号濠検出状況
(南から)

C区
7号住居跡検出状況
(西から)

C区
9号住居跡検出状況
(東から)

D区全景（東から）



D区全景（西から）

D区
10号住居跡検出状況
(北から)

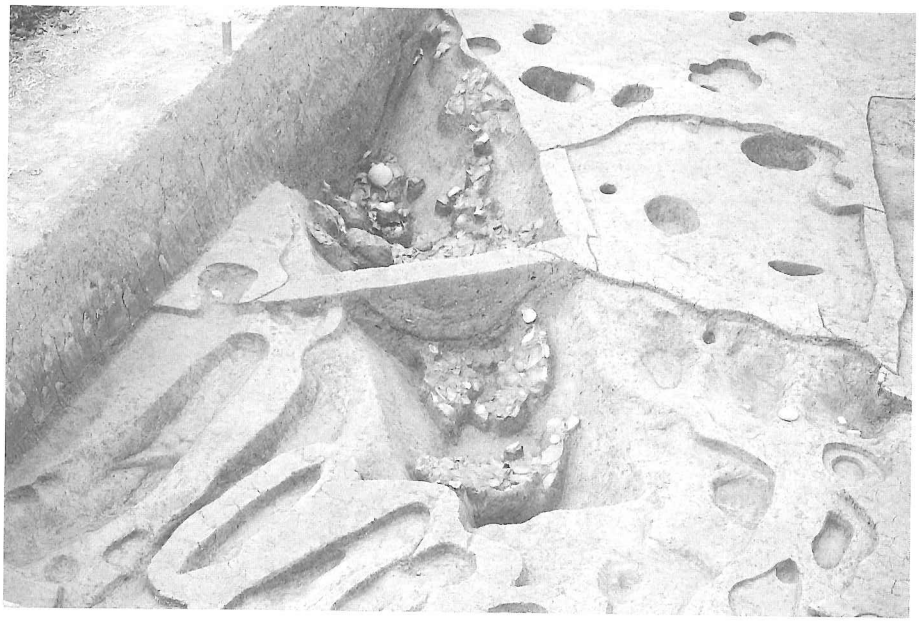
D区
10号住居跡遺物出土状況
(東から)

D区
11号住居跡検出状況
(北から)

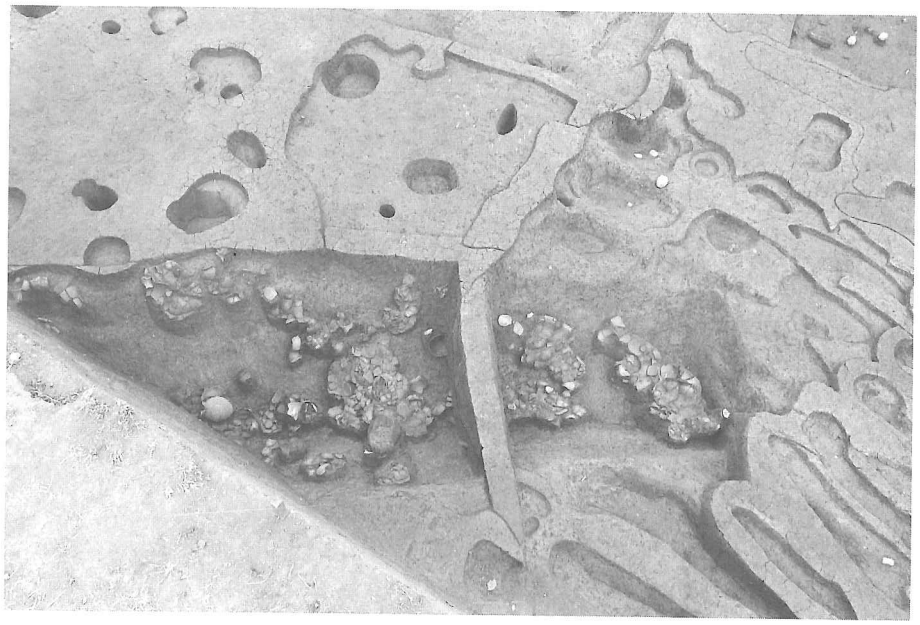
D区
4号濠遺物出土状況
(西から)

D区
4号濠検出状況
(西から)

D区
4号濠土層壁面
(西壁)

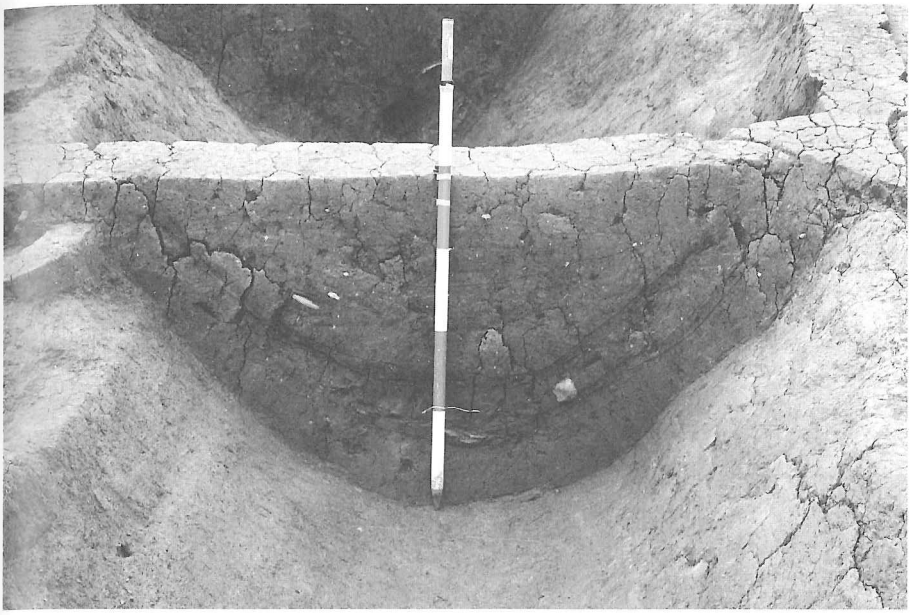


D区
5号濠遺物出土状況
（東から）



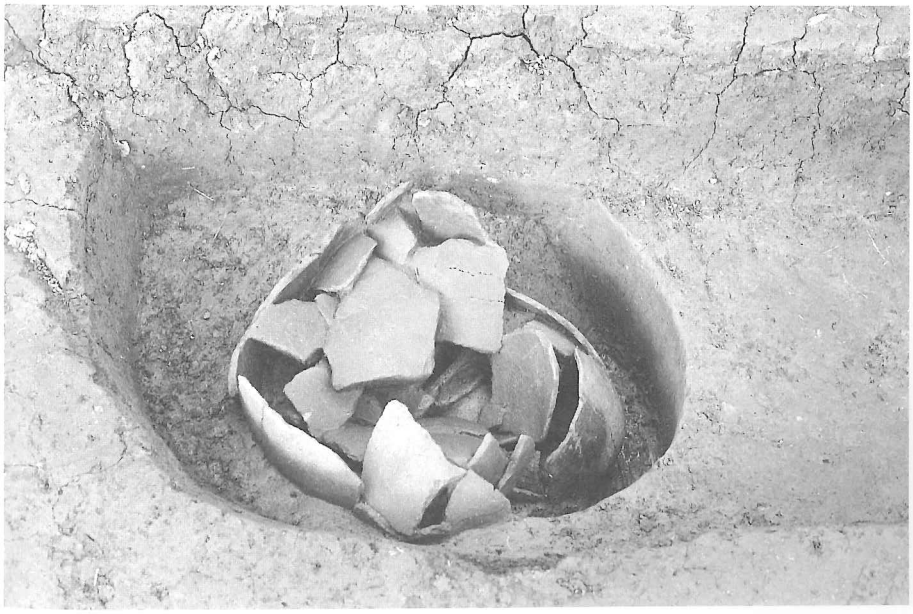
D区
5号濠遺物出土状況
（南から）

D区
5号濠検出状況
（東から）

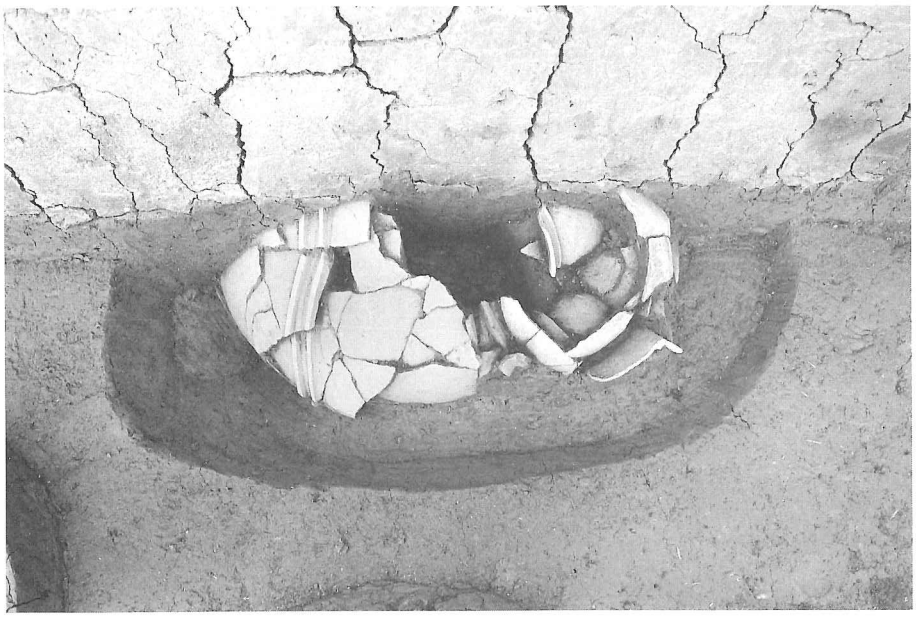


D区
5号濠土層壁面
(西壁)

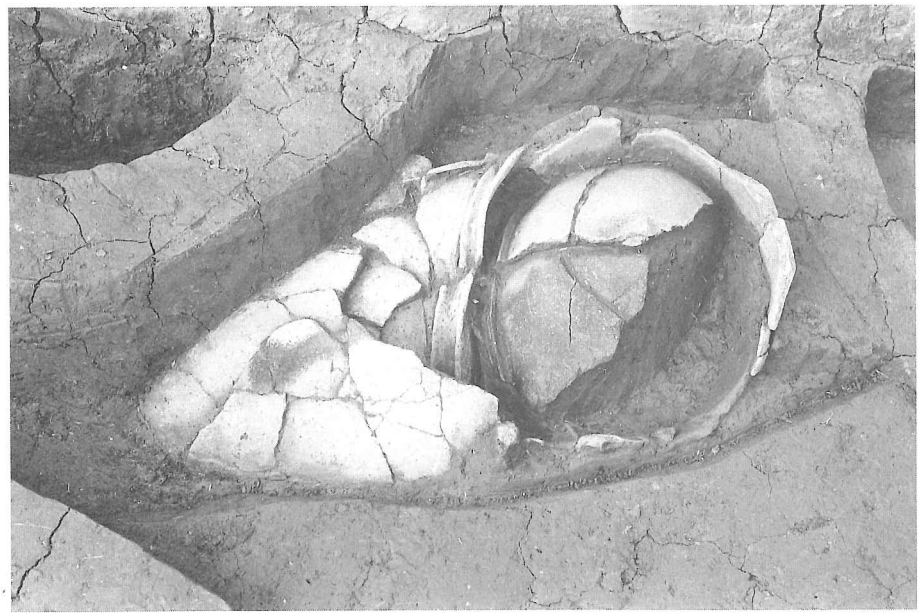
D区
2号甕棺墓
(南から)



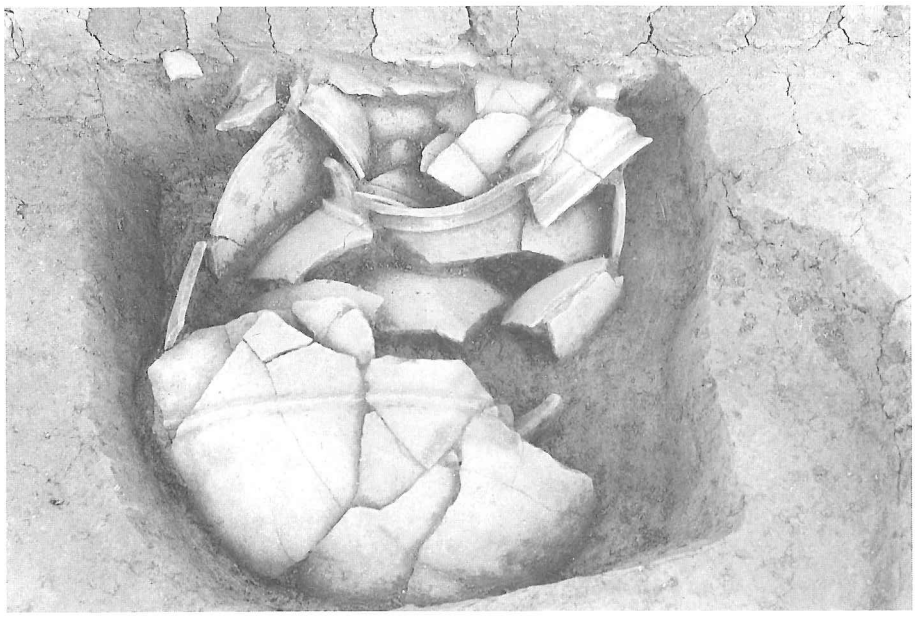
D区
3号甕棺墓
(南から)



D区
4号甕棺墓
(南から)



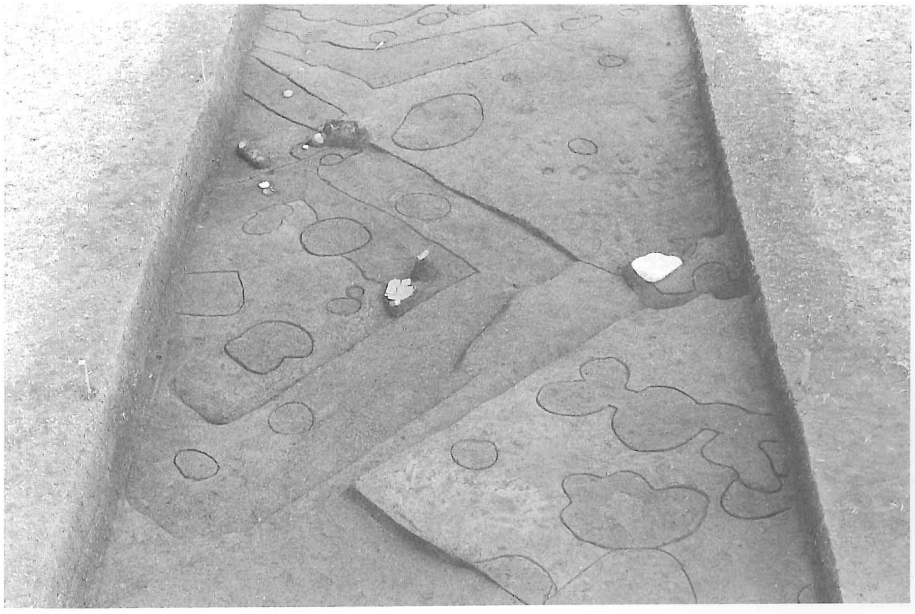
D区
5号甕棺墓
(南から)



D区
6号甕棺墓
(東から)

Ｅ区
４号溝検出状況
（西から）

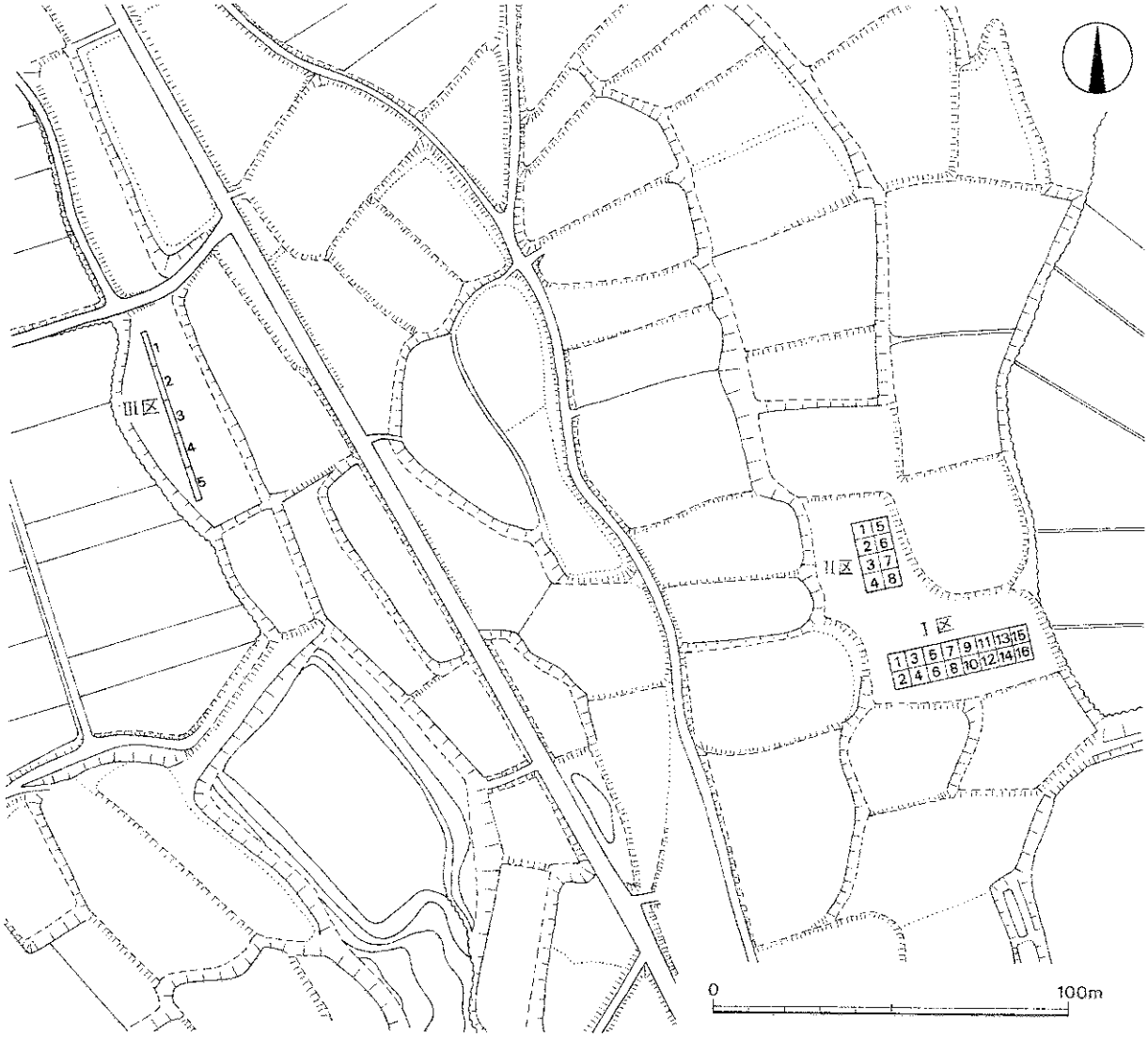
Ｇ区
検出状況
（西から）



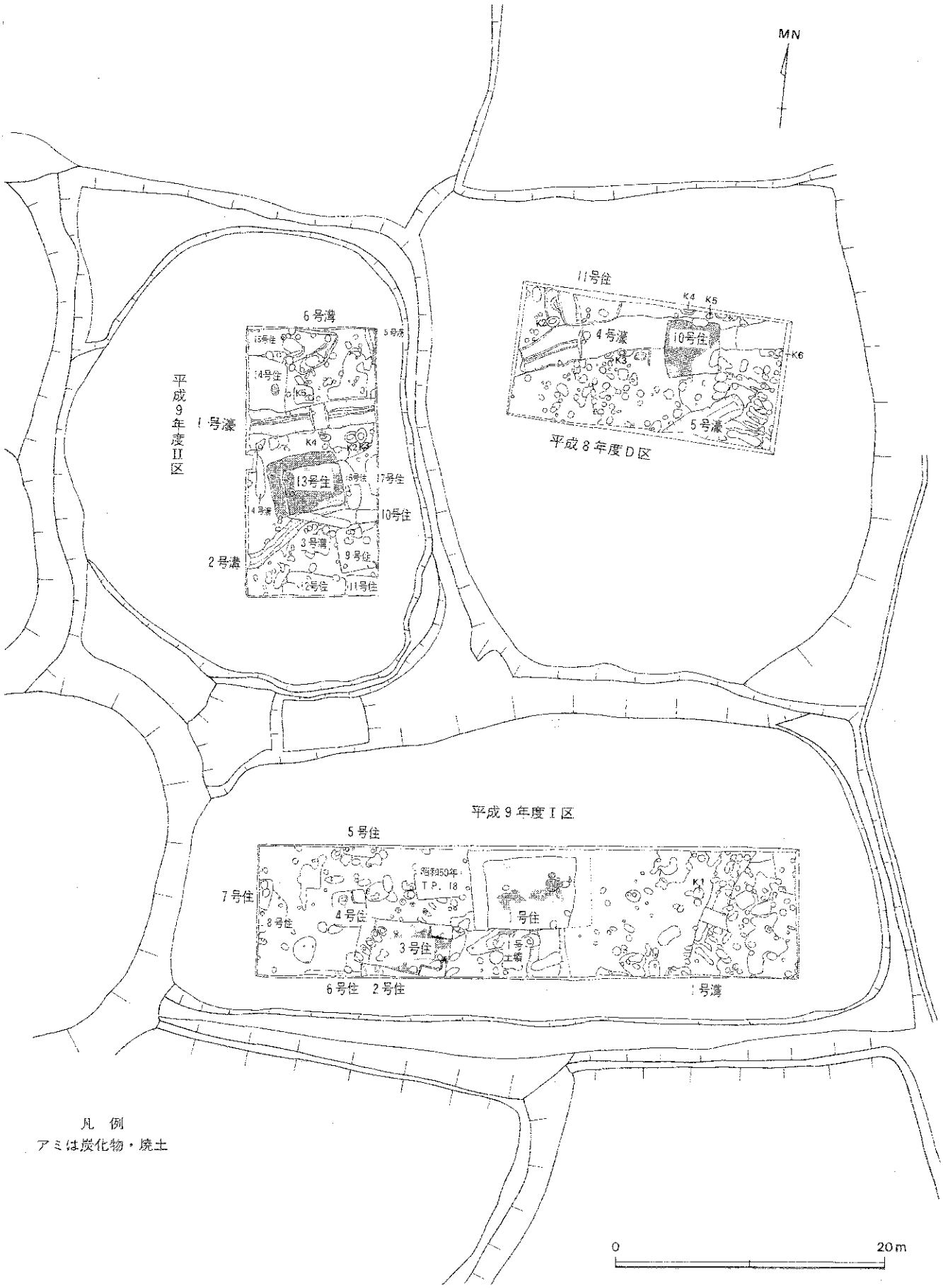
Ｈ区
12号住居跡検出状況
（西から）

### (7) 平成9年度の調査概要

平成8年度は，台地高台の東斜面部を調査対象として竪穴住居跡，濠，溝などの居住遺構が拡がっていることが明らかになった。平成9年度の調査は，平成8年度調査対象区より南側にI・II区の調査区を，さらに西側斜面にもIII区を設定して650m²の発掘を行った。調査の結果，I区では弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡8棟，幅約2mの浅い溝1条，多数の柱穴・ピット，小児甕棺墓1基を検出した。II区では，弥生後期～古墳前期の竪穴住居跡9棟，濠1条，溝6条，多数の柱穴・ピット，小児甕棺墓4基を検出した。III区では，弥生後期～古墳前期の住居跡などと推測される落ち込み4箇所が確認された。原地区では，弥生中期～古墳前期の土器に伴って石器，鉄器などの遺物がコンテナ43箱分出土したが，II区では後漢と思われる鏡片が2点出土した。今回の調査では，平成8年のD区で確認された4号濠がII区で検出されたことにより，東西方向の区画を目的とした濠が西側にのびることが明らかになったことと，台地南東部にも居住遺構が確認され環濠の内濠内部全体に居住域が展開



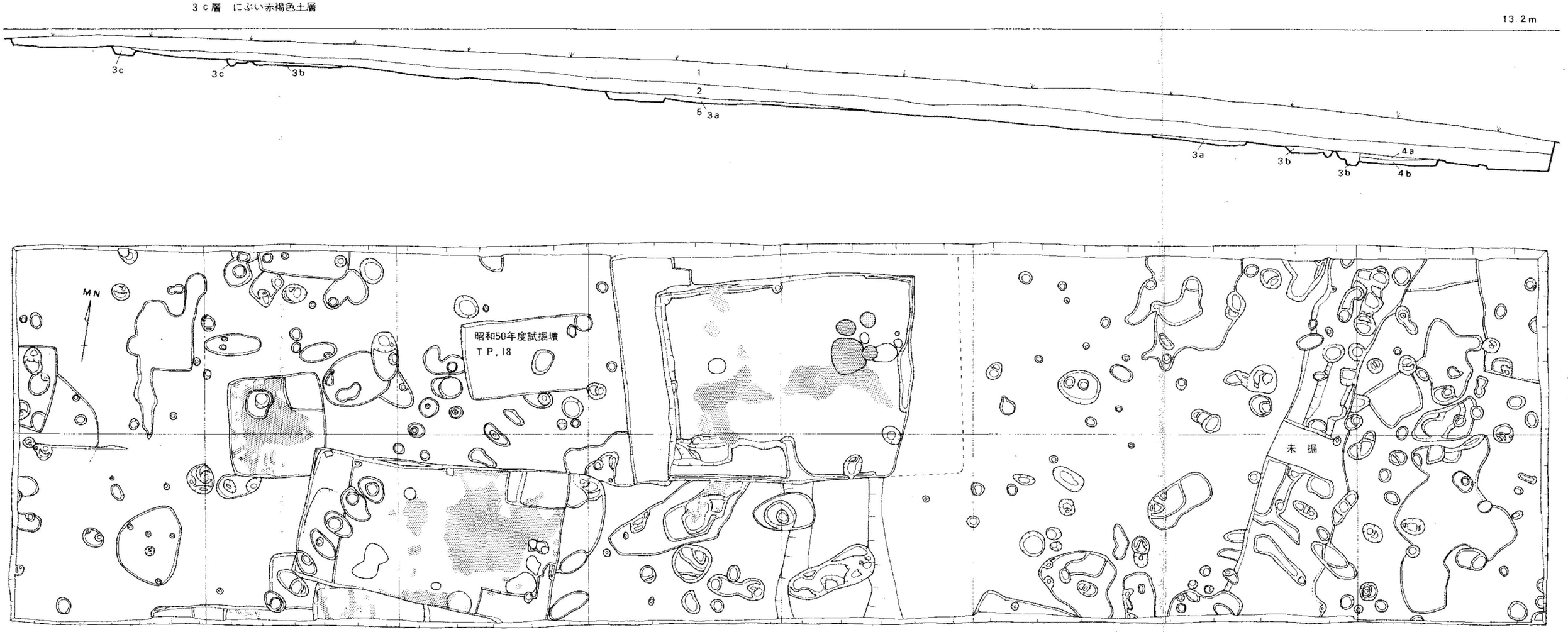

第118図　平成9年度調査区域図（1／2,000）




第119図　I・II区遺構配置図（1／400）

Ⅰ区北壁土層名

1　層　灰黄褐色土層（耕作土）
2　層　明黒褐色土層
3 a 層　黒褐色土層
3 b 層　暗褐色土層
3 c 層　にぶい赤褐色土層
4 a 層　黒褐色土層
4 b 層　褐色土層



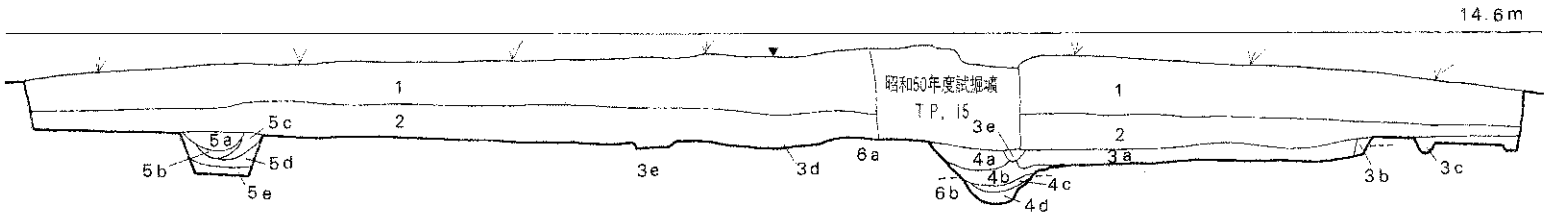

凡　例
濃いアミは炭化物
薄いアミは焼土

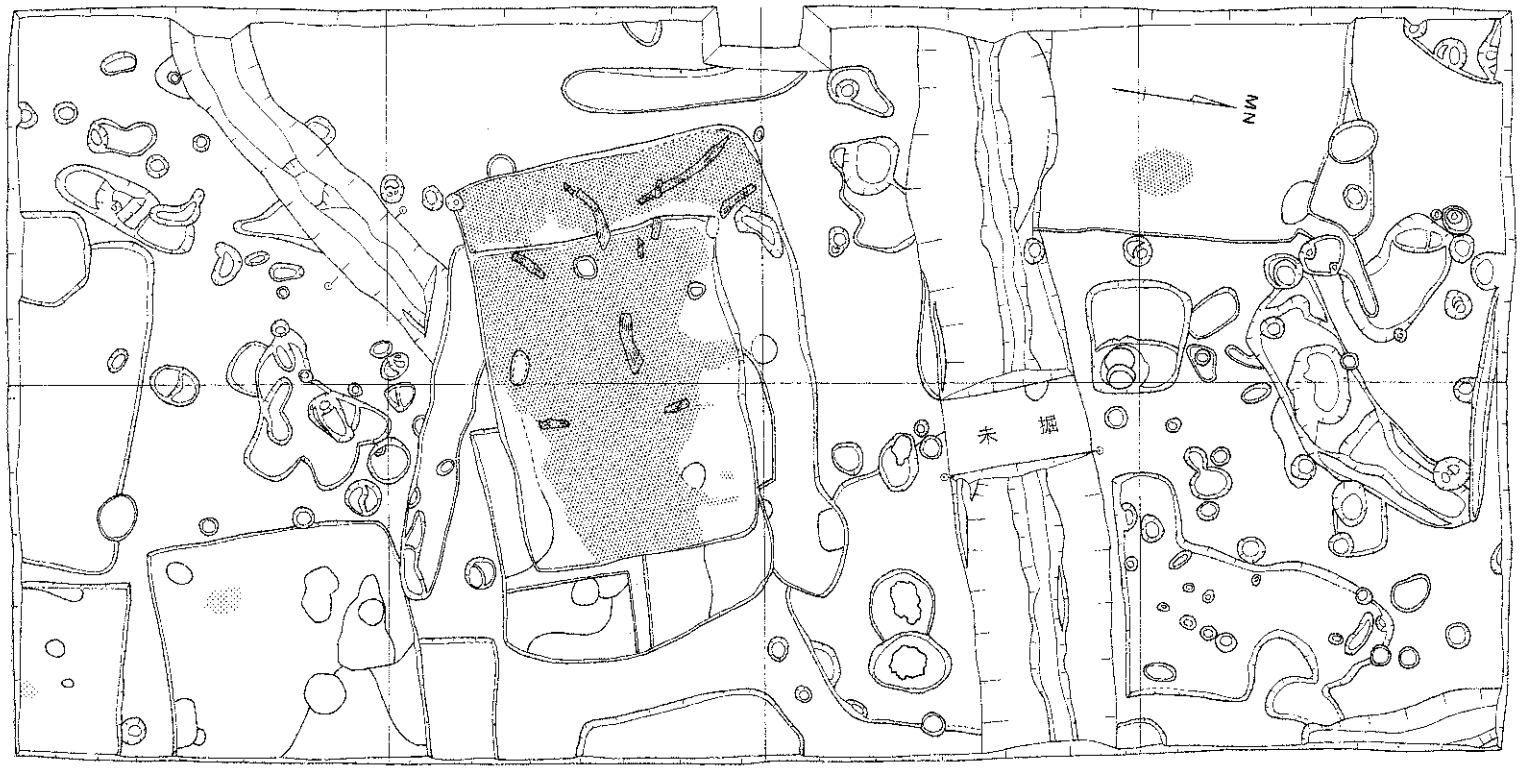
0　5m

第120図　Ⅰ区遺構配置図（1／100）

II区西壁土層名

1　層　灰黄褐色土層(耕作土)
2　層　黒褐色土層
3 a層　黄橙色灰色粒混在褐色土層
3 b層　にぶい黄橙色粘土層
3 c層　褐色粘質土層(5 Y R 4/4)
3 d層　にぶい褐色粘質土層
3 e層　褐色粘質土層(7.5 Y R 4/4)
4 a層　黄橙粒混在褐色粘質土層(7.5 Y R 4/4)
4 b層　にぶい褐色粘質土層
4 c層　褐色粘質土層(7.5 Y R 4/4)
4 d層　黄褐色粒混在明褐色砂質土層
5 a層　褐色土層(7.5 Y R 4/3)
5 b層　炭化物混在褐色土層
5 c層　褐色粘質土層(7.5 Y R 4/4)
5 d層　明褐色粘質土層
5 e層　灰白色粒混在にぶい褐色粘質土層
6 a層　橙色粘土層(地山)
6 b層　黄橙色風化岩盤層(地山)

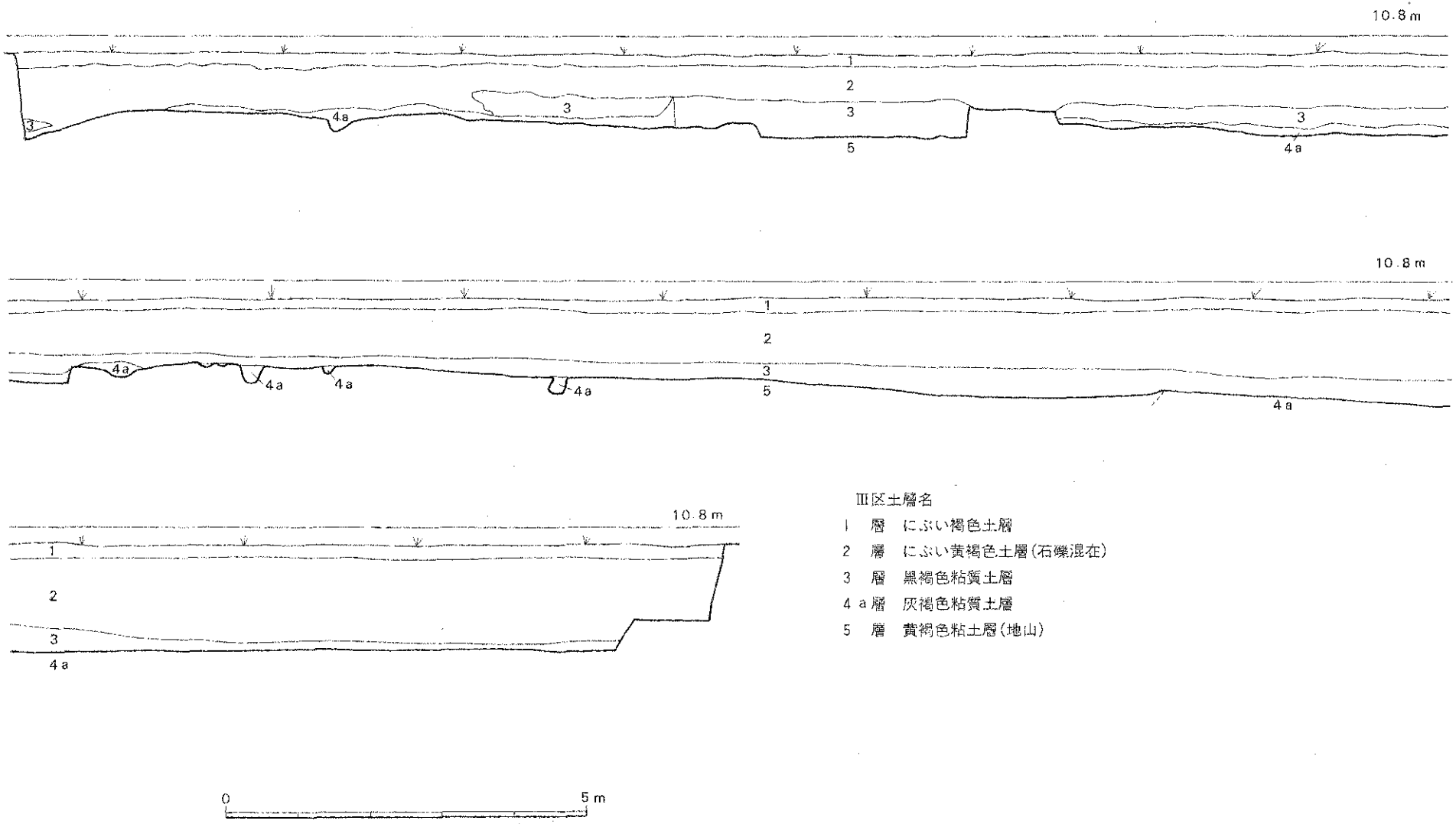



凡　例
濃いアミは炭化物
薄いアミは焼土

0　5m

第121図　II区遺構配置図（1／100）




Ⅲ区土層名

1　層　にぶい褐色土層

2　層　にぶい黄褐色土層(石礫混在)

3　層　黒褐色粘質土層

4 a 層　灰褐色粘質土層

5　層　黄褐色粘土層(地山)

第122図　Ⅲ区土層断面図（1／80）

していたことが想定できるようになったことを成果としてあげることができよう。Ⅰ・Ⅱ区の土層は，畑地の１～３層の堆積があって，その下にある地山を切り込んで弥生時代～古墳時代の遺構が検出された。しかし，遺構はすでに削平を受けていて，古墳前期以降の畑地開発によって上部が撹乱されていったことが推測される。なお，Ⅰ区では３号住居跡を切った柱穴群が南北方向に並び，古墳前期以降の柵列の可能性をもっている。

**(8) 平成９年度調査の遺構**

①竪穴住居跡（第123～125図）

**１号竪穴住居跡**（第123図）

Ⅰ７～10区にある長方形の住居で，北辺は北壁にかかっている。西側と北側に約１m幅のベット状遺構がみられ，東側は削平を受けているので，もともとは東側にもベット状遺構があったことが予想される。長辺が推定8.5m，短辺が６mを測り，深さが50cmほど残っている。主軸方位はN78°Eを測る。床面には焼土や炭化物が分布して，幅10～25cmほどの壁溝がめぐっている。この住居には，古墳前期の布留式土器を主体とする夥しい数の遺物が廃棄されていた。

**２号竪穴住居跡**（第120図）

Ⅰ４・６区にある住居で，北側は３号竪穴住居跡に切られ，南側は南壁にかかる。南壁に5.1m，西辺が1.1m確認された。床面には焼土や炭化物が分布していた。

**３号竪穴住居跡**（第124図）

Ⅰ４・６区にある長台形の住居で，２号竪穴住居跡と４号竪穴住居跡を切っている。長辺が6.7mで，短辺が東側４m，西側3.3mを測る。壁面は40cmほど残っている。西辺には１m幅のベット状遺構があり，北隅と南隅にも小さなベット状遺構がみられる。床面は炭化物がかなりの範囲覆っていた。主軸方位は，N87°Wを測る。古墳前期の土器に伴って，砥石などの石器が出土した。

**４号竪穴住居跡**（第124図）

Ⅰ３・４区にある隅丸方形の住居で，南東隅を３号竪穴住居跡に切られている。長辺が2.7m，短辺が2.5mを測る小形の住居で，壁面は６cm～15cmほど残っていたにすぎない。北東隅には約１m角のベット状遺構がみられる。大部分が炭化物で覆われていた。主軸方位はN９°Eを測る。北西側にあるピットが切っていて古墳前期の布留式が出土しているので，弥生後期終末頃の住居であろう。

**５号竪穴住居跡**（第120図）

Ⅰ３区にある隅丸の住居で，大部分は北壁に入っている。南辺は2.2mを測る。壁面は４～５cmほど残るにすぎない。弥生後期の住居であろうか。

**６号竪穴住居跡**（第120図）

Ⅰ２・４区にある住居で，２号竪穴住居跡に切られて，北西隅が出ているにすぎない。残った北辺は4.2mを測る。床面には炭化物と焼土もみられた。弥生後期の住居であろうか。

**７号竪穴住居跡**（第120図）

Ⅰ１区にある方形の住居で，８号竪穴住居跡を切っている。大部分が西壁に入っている。壁面は２

cmほど残るに過ぎない。

**8号竪穴住居跡**（第120図）

Ⅰ1・2区にある楕円形の住居で，7号竪穴住居跡に切られている。壁面は1～1.5cmが残るにすぎない。床面に張り付いて，弥生中期前葉の須玖Ⅰ式の甕などの遺物が出土した。

**9号竪穴住居跡**（第121図）

Ⅱ8区にある長方形の住居で，10号号竪穴住居跡を切っている。北辺が3.2m以上，西辺3.2mを測り，壁面は7～15cmが残っている。床面の南西部に炉跡を思われる焼土面がみられる。主軸方位はN70°Eを測る。弥生後期の土器に伴って凹石などの遺物が出土した。

**10号竪穴住居跡**（第121図）

Ⅱ7区にある方形状の住居で，9号竪穴住居跡に切られている。北辺が1.6m以上を測る。壁面は10cm前後が残るにすぎない。弥生後期の住居であろうか。

**11号竪穴住居跡**（第121図）

Ⅱ8区にある方形状の住居で，Ⅱ区の南東隅に北辺が2.3m，西辺が1.4mかかった。壁面は10cm前後残っている。弥生後期後半の土器が出土した。

**12号竪穴住居跡**（第121図）

Ⅱ4・8区にある隅丸方形状の住居で，南側は大部分が南壁に入っている。北辺は4.3mを測る。壁面は11～15cmほど残っている。弥生後期の住居であろうか。

**13号竪穴住居跡**（第125図）

Ⅱ区の中央部にある隅丸長方形の住居で，16号竪穴住居跡と2号・3号溝を切っている。長辺5.4m，短辺4.3mを測り，北側から西側に「L」字形にベット状遺構がついている。床面は大部分が炭化物に覆われている。主軸方位はN68°Eを測る。2号溝から出土した遺物が弥生終末期の時期であるので，古墳初頭頃の住居と考えられる。

**14号竪穴住居跡**（第121図）

Ⅱ1・2区にある隅丸方形状の住居で，1号濠が埋没した後に造られている。北東側は15号竪穴住居跡を切っている。西側が西壁に入っている。長辺4.7m，短辺3m以上を測る。東側床面に丸い炭化物面がみられる。主軸方位はN7°Wを測る。弥生後期後葉～終末の土器が床面から出土した。

**15号竪穴住居跡**（第121図）

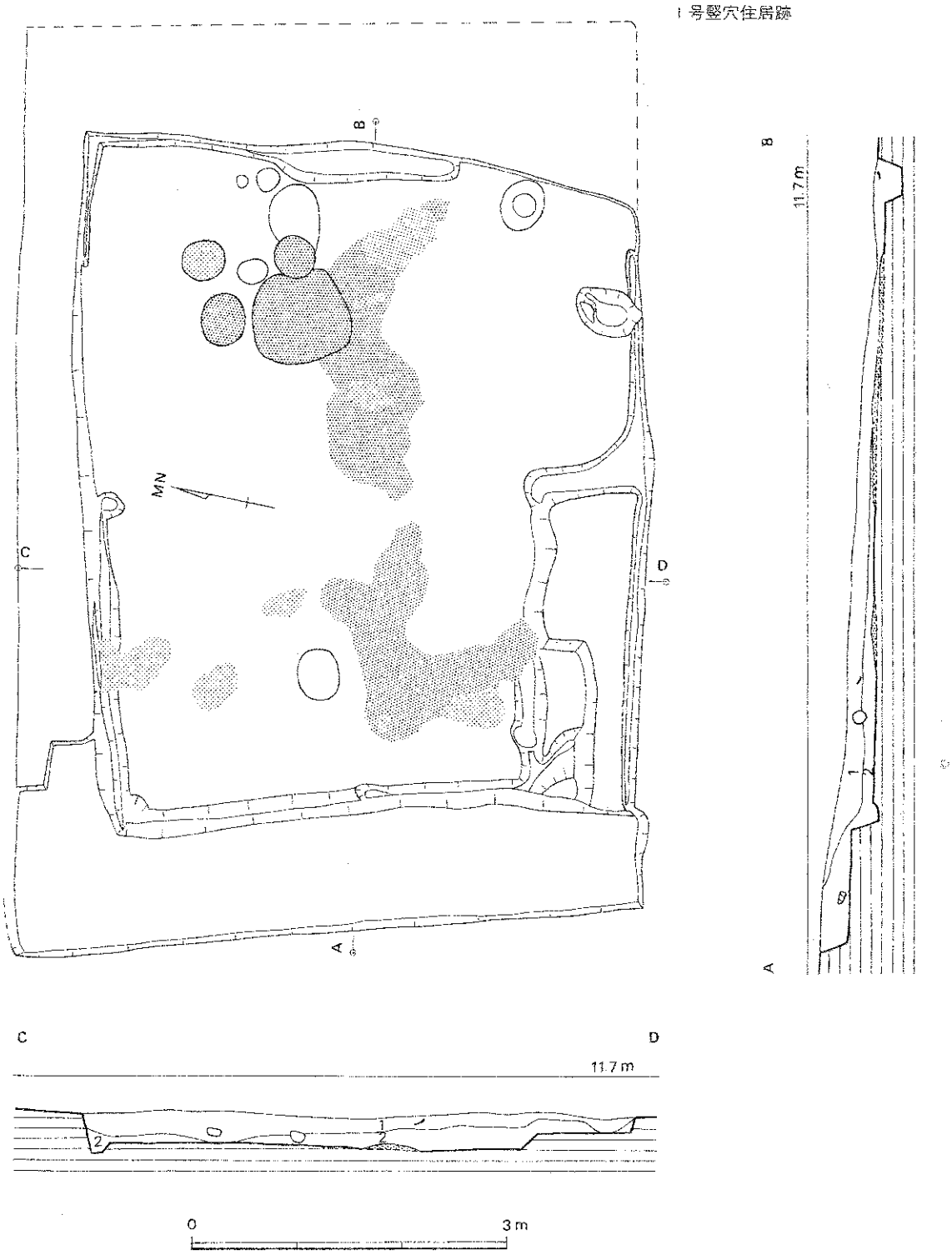
Ⅱ1区にある隅丸方形状の住居で，14号竪穴住居跡に切られて北東隅付近が残るにすぎない。弥生後期の住居であろうか。

**16号竪穴住居跡**（第125図）

Ⅱ7区にある隅丸方形状の住居で，13号竪穴住居跡に切られているが，2号溝を切っている。東辺は3.6mを測る。古墳前期初頭頃の住居であろうか。

**17号竪穴住居跡**（第121図）

Ⅱ6・7区にある隅丸方形状の住居で，大部分は東壁に入っている。長辺が3mを測る。時期が明

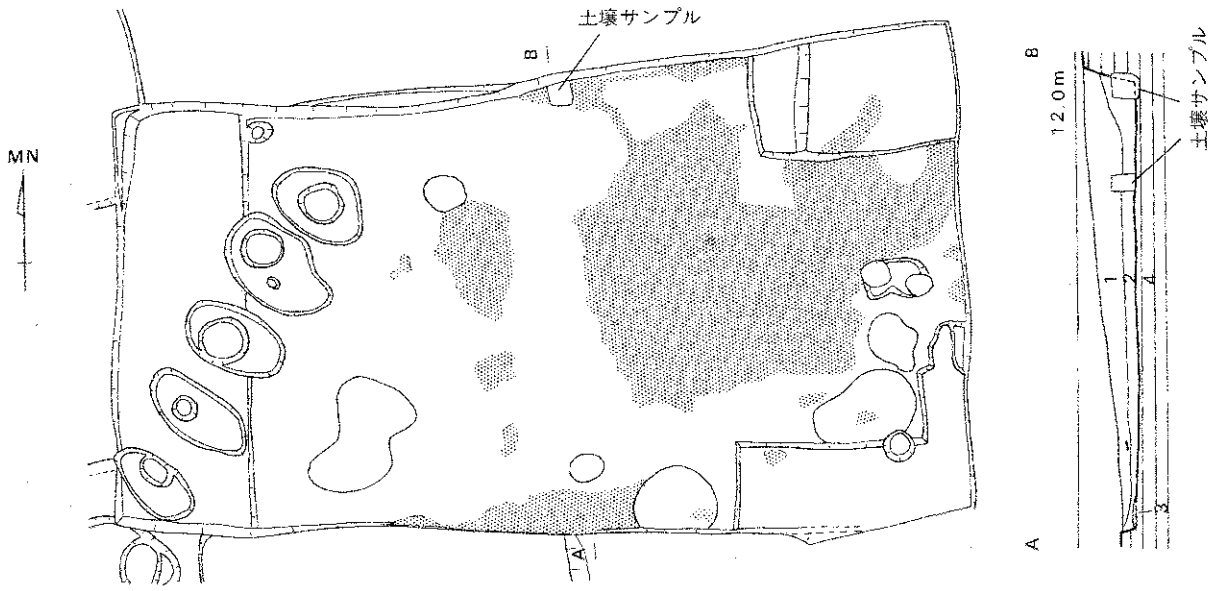



1号住居跡土層名
1層　黒褐色土層(土師器を多く含む)
2層　黄橙色粒混在灰黄褐色土層

凡　例
濃いアミは炭化物
薄いアミは焼土

**第123図　竪穴住居跡実測図①（1／60）**

3号竪穴住居跡




3号住居跡土層名

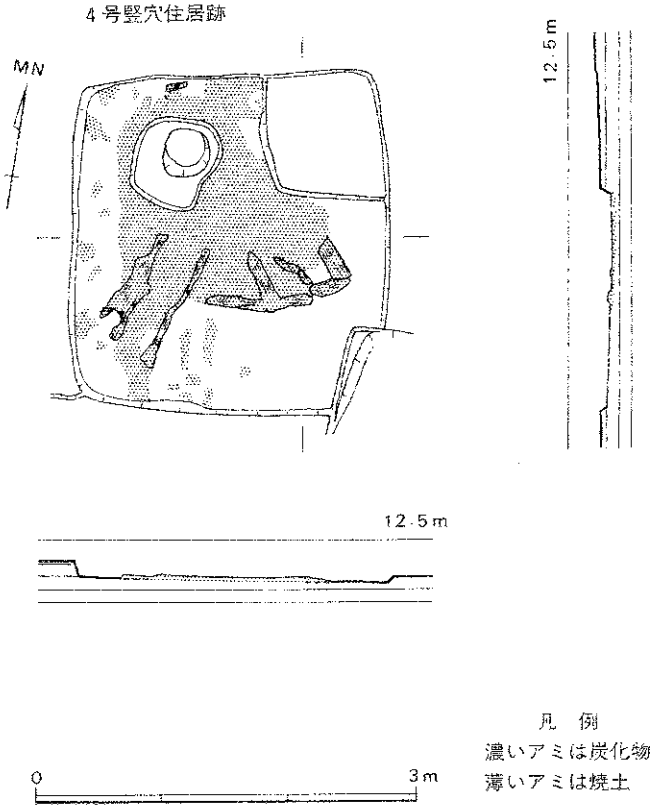
1層　灰黄褐色粘質土層

2層　黄橙色粒混在暗灰色粘質土層

3層　炭化物層

4層　黄橙色風化岩盤層(地山)

4号竪穴住居跡

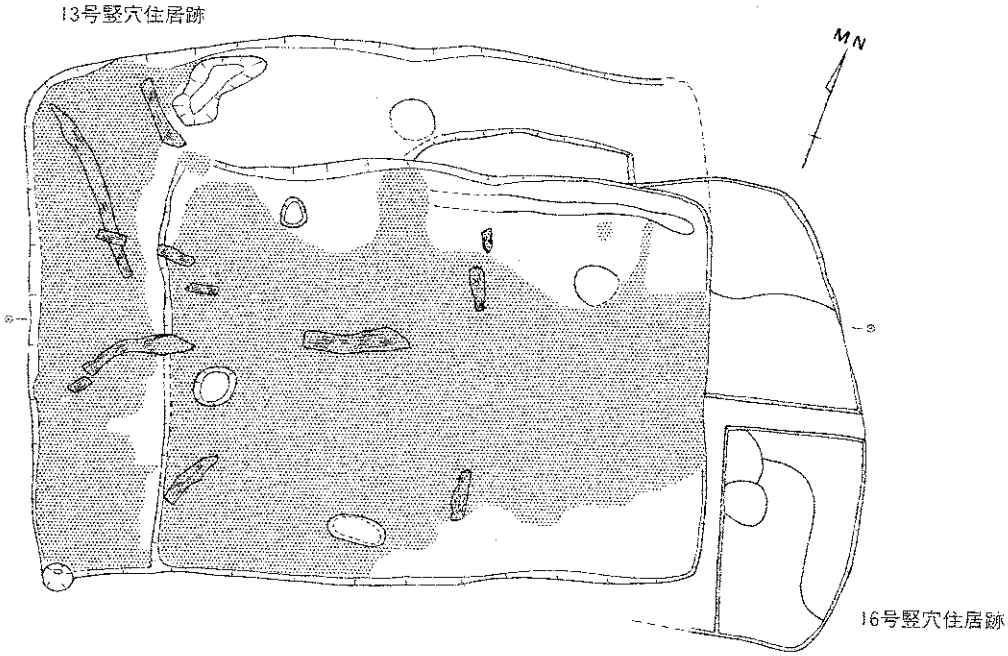


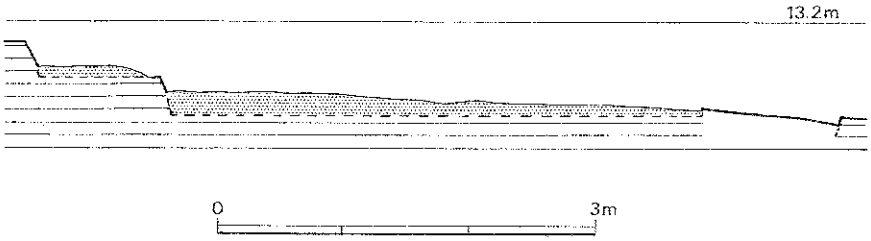

凡　例

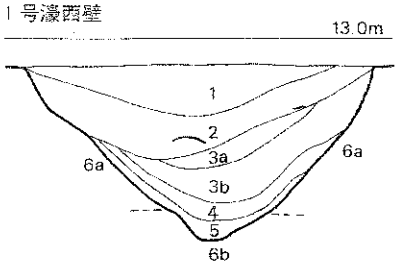
濃いアミは炭化物

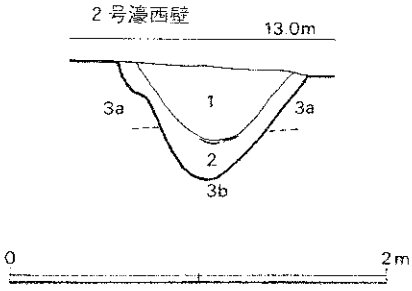
薄いアミは焼土

**第124図　竪穴住居跡実測図②（1／60）**




1号濠土層名

1　層　黄色・灰色粒混在褐色土層
2　層　褐色粘質土層
3 a 層　灰褐色粘質土層
3 b 層　明にぶい褐色粘質土層(黄褐色粘土が混入)
4　層　炭化物混在褐色粘質土層
5　層　にぶい褐色粘質土層
6 a 層　にぶい黄橙色粘土層(地山)
6 b 層　明黄橙色風化岩盤層(地山)

2号溝土層名

1　層　黄橙色ブロック混在にぶい黄褐色土層
2　層　灰黄褐色粘質土層
3 a 層　にぶい黄橙色粘土層(地山)
3 b 層　明黄橙色風化岩盤層(地山)

凡　例

アミは炭化物

**第125図　竪穴住居跡実測図③（1／60)濠・溝土層断面図（1／40)**

確な遺物は出土しなかったが，弥生後期の住居であろうか。

②濠・溝

**1号濠**（第121・125図）

II 2・4区にある断面「V」字形の濠である。東西方向を向き，東側から平成8年度調査D区の4号濠とつながる濠である。幅約2m，深さ90cmを測る。底面には50cmほどの溝が掘られていて，西側と東側では98cmほど傾斜している。14号竪穴住居跡が重複している。土層堆積は，3b層に地山の黄褐色粘土が北側から流れ込んだ状況が捉えられる。濠からは，弥生後期前葉～後期後葉の遺物が出土した。濠は弥生後期初め頃に掘削され，弥生後期後葉頃には埋没したことが考えられる。

**1号溝**（第120図）

I区東側（13・14・15区）にある南北方向の溝である。幅2m前後で，深さ約20～30cmの浅い溝である。弥生中期～後期の土器細片に伴って台石，磨石・凹石などの遺物が出土した。区画溝や排水路にしては浅すぎる感があり，通路状の遺構の可能性も考えられる。

**2号溝**（第121・125図）

II 4区から7区へ南西から北東方向を向く溝で，7区で止まっている。3号溝，13号・16号竪穴住居跡に切られている。幅1m，深さ60cmを測り，断面は「V」字形をなす。底面は，東壁から4.8mの位置で約28cm下がっている。なかから弥生後期後葉から終末の土器に伴って，磨石・敲石などの遺物が出土した。

**3号溝**（第121図）

II 3・7区にある東西方向の短い溝である。長さ4.7m，幅60cm，深さ10cm前後を測る。2号溝に重複して，13号竪穴住居跡に切られている。古墳前期初頭ごろの時期が推測される。西側にある4号溝と対になるものであろうか。

**4号溝**（第121図）

II 2・3区にある南北方向の短い溝である。長さ3.3m，幅60cm，深さ5cm前後を測る。3号溝と対になることが推測される。

**5号溝**（第121図）

II 5区隅に長さ2.6mほどがかかった溝で，南側で止まっているようだ。南西から北東の方向を向き，幅80cm，深さ20～30cmを測る。

**6号溝**（第121図）

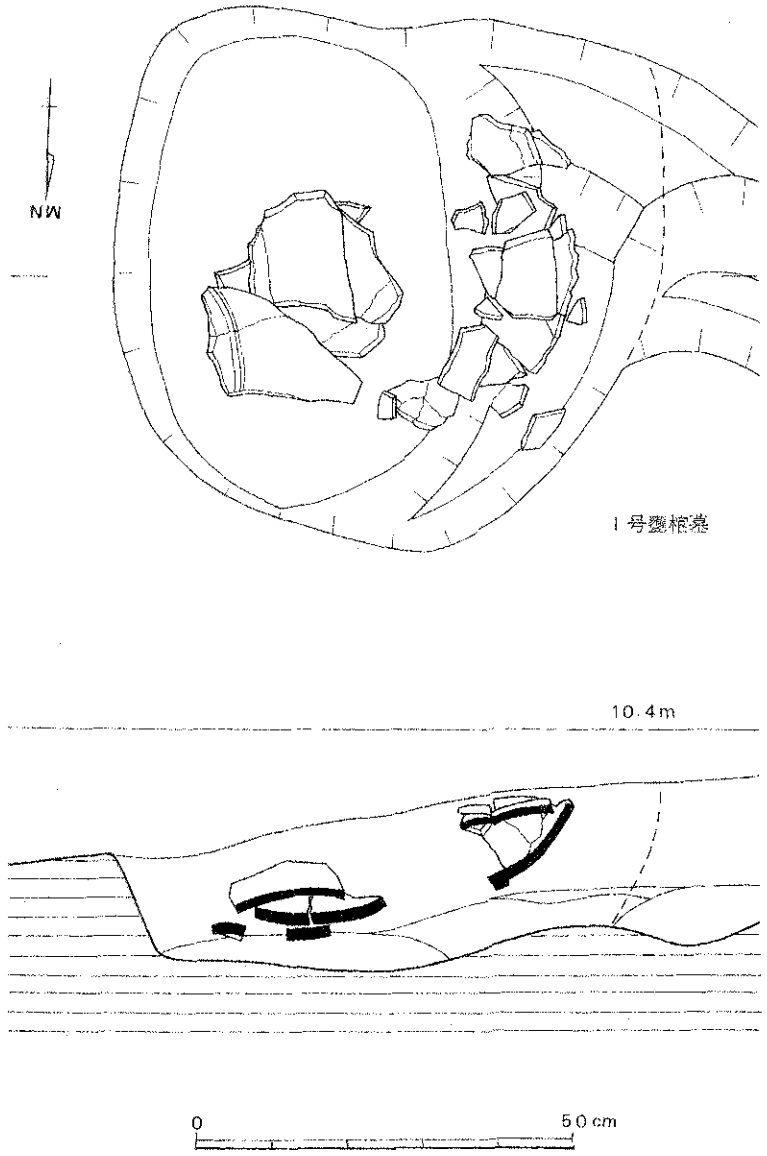
II 1・5区にある幅狭の溝である。東西方向を向き，北壁から3.1mの位置で止まっている。幅20cmで，深さ5cmを測る。竪穴住居跡の壁溝の可能性をつ。

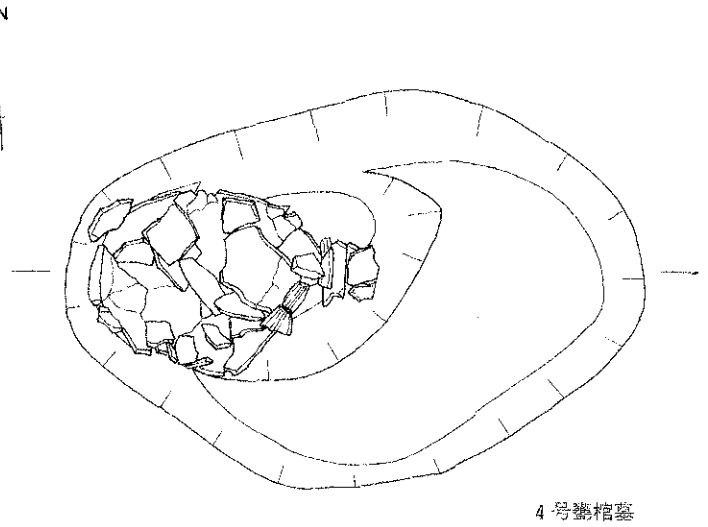
③甕棺墓（第126～128図）

甕棺墓は，小児甕棺がI区で1基，II区で4基検出された。以下，説明を行う。

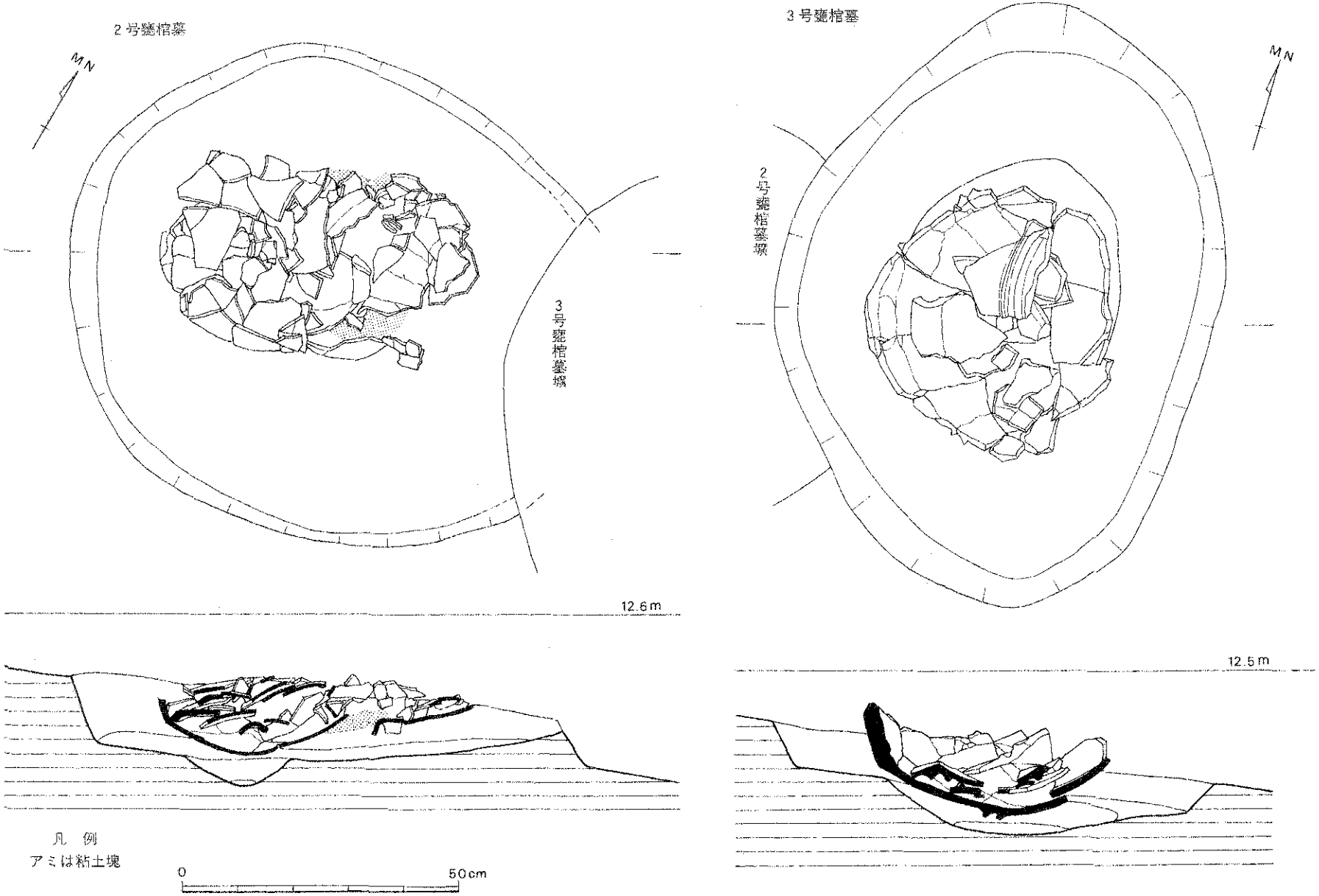
**1号甕棺墓**（第126図）

I 13区にある小児甕棺である。後世の削平を受けていて，大半を欠失する壺棺である。単棺の可能

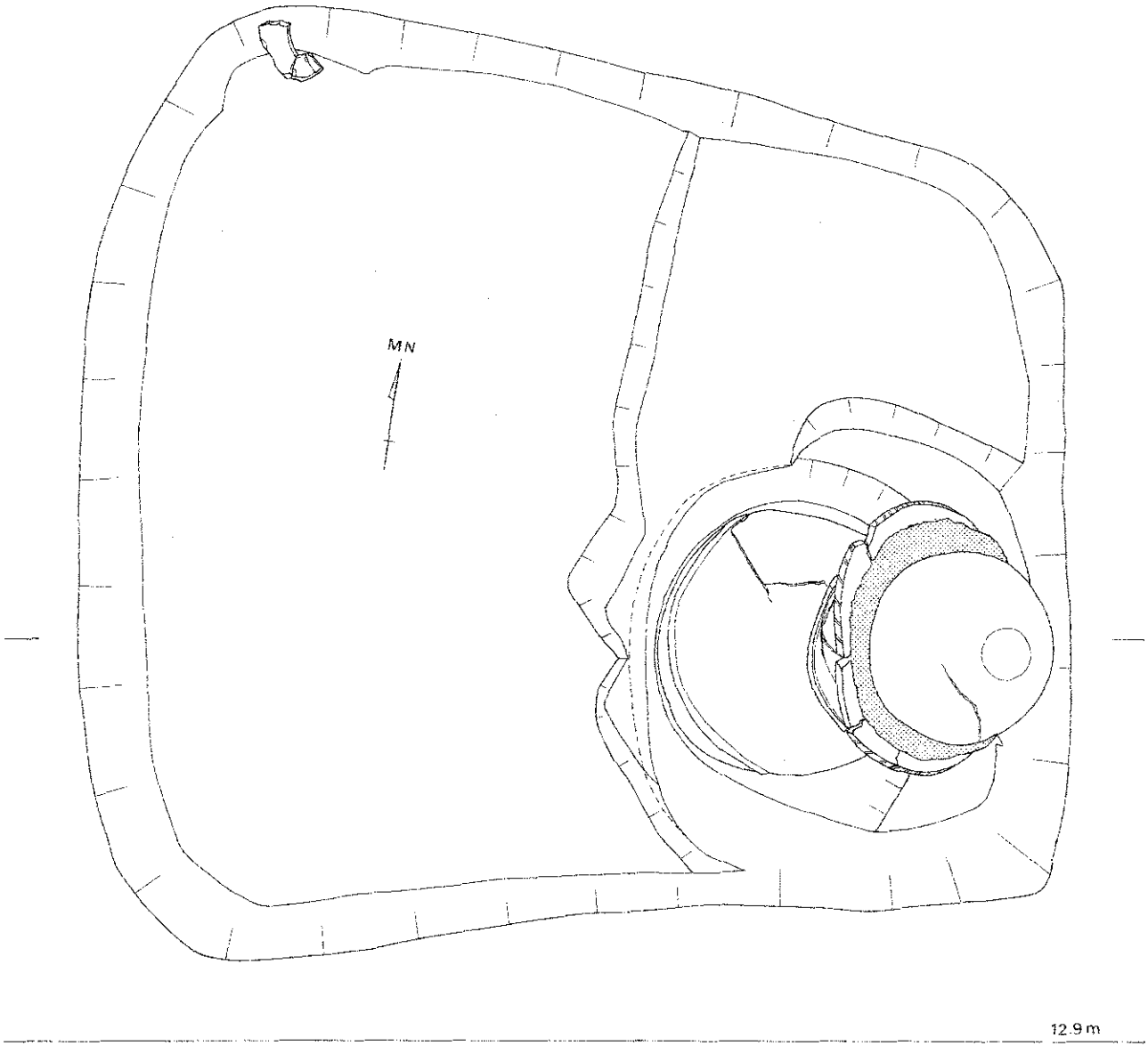



第126図　甕棺墓実測図①（1／10）




第127図　甕棺墓実測図②（1／10）




凡　例
アミは粘土塊

第128図　甕棺墓実測図③（1／10）

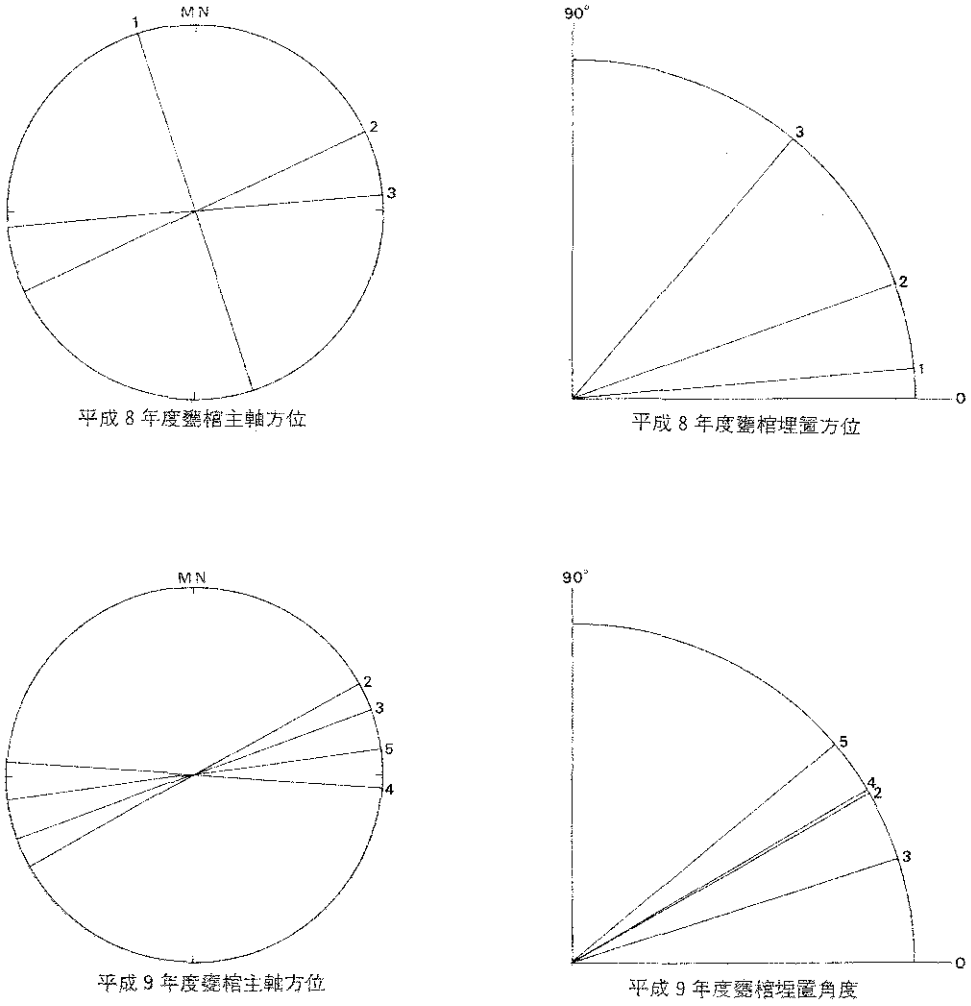
性をもつ。主軸は東西方向を向く。弥生後期後葉以降の西新式系統の直口壺を用いている。

**2号甕棺墓**（第127図）

II 6区にある小児甕棺で，甕と甕を組み合わせた合口甕棺である。上甕と下甕の組み合った部分の下には，黄白色の粘土塊が2箇所置かれていた。墓壙は3号甕棺墓の墓壙に切られている。甕棺の主軸方位はN61°E，埋置角度は30°を測る。使用された甕には煤が付着していて，日用器を転用したことが分かる。弥生後期後葉の土器である。焼成後の穿孔は認められなかった。

**3号甕棺墓**（第127図）

II 6区にある小児甕棺で，墓壙が2号甕棺墓の墓壙を切っている。後世の削平を受けて，かなりの部分が欠損している。大壺を利用した単式壺棺である。甕棺の主軸方位はN70°E，埋置角度は18°を測る。使用された壺は，弥生後期後葉から終末の資料であろう。焼成後の穿孔は認められなかった。




**第129図　甕棺の主軸方位と埋置角度（MNは磁北）**

**4号甕棺墓**（第126図）

Ⅱ6区にある小児甕棺で，甕と甕を組み合わせた合口甕棺である。後世の撹乱を受けて，上甕の大半を欠失している。下甕内の土は少々赤みをもっていて，赤色顔料が散布されていたのであろうか。甕棺の主軸方位はN94°E，埋置角度は31°を測る。使用された甕は，弥生後期後葉の資料であろう。焼成後の穿孔は認められなかった。

**5号甕棺墓**（第128図）

Ⅱ1・2区にある小児甕棺で，大形壺と鉢を組み合わせた合口甕棺である。接合面は粘土帯で覆われていた。甕棺に対して墓壙が大きく，甕棺は南東隅に寄っている。墓壙は，長辺1.47m，西辺1.42m，東辺1.08mを測り，底面は二段になっている。甕棺の主軸方位はN82°E，埋置角度は40°を測る。使用された甕は，弥生後期後葉の資料であろう。焼成後の穿孔は認められなかった。

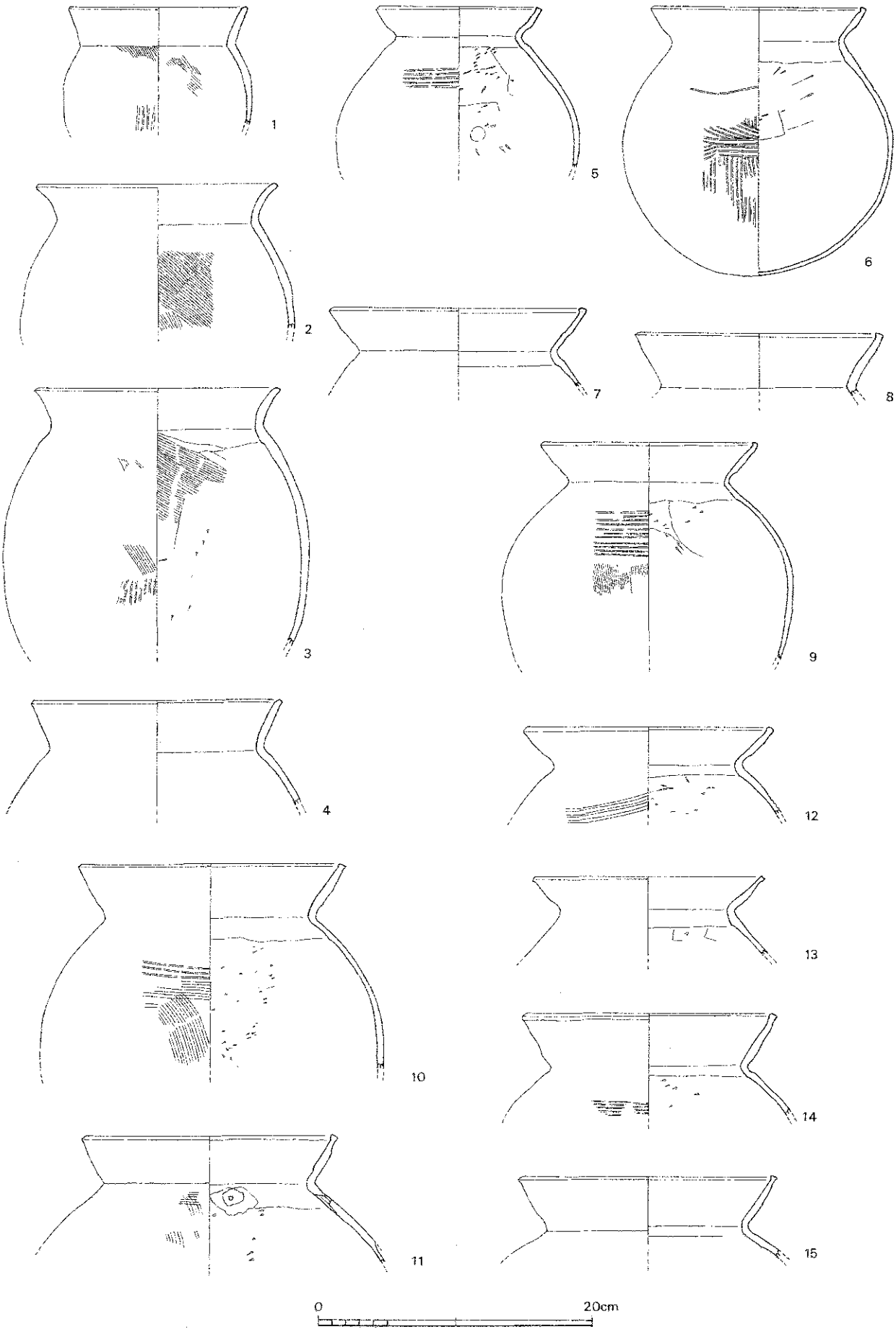
**(9) 平成9年度調査の遺物**

平成9年度の原地区の調査では，コンテナ43箱分の遺物が出土した。その数量的な内訳は，土器・陶磁器26,364点，石器・石製品382点，金属器13点の計26,950点である。

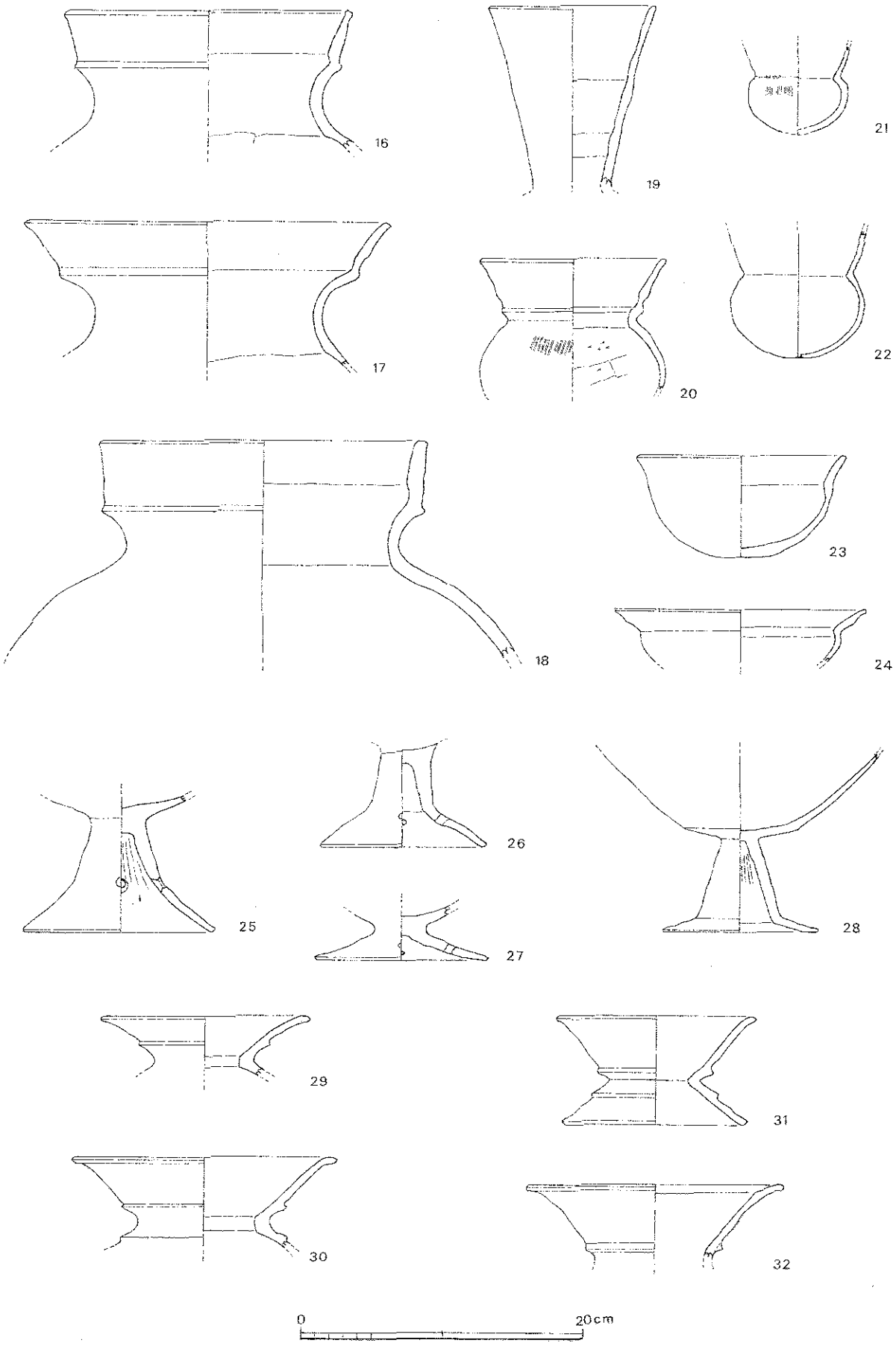
①土器（第130～135図）

**1号住居跡出土土器**（第130・131図）

1～32は，1号住居跡出土の土器である。1～4は，「く」の字形口縁をもつ在来系の甕である。1は小形甕で，内外面ともに風化を受けるがハケ目が残る。2は外面が風化を受けるが，内面には細かいハケ調整されている。3は胴部外面がハケナデ消し，口縁はヨコナデ，胴部内面がハケの後ヘラケズリを行っている。4は外面は平滑なナデ仕上げ，胴部内面はヘラケズリされているようだ。色調は，1が明赤褐色の他は橙色を呈する。胎土に1・4は石英，長石，金雲母，2は石英，長石，赤色砂，3は石英，長石，赤色砂，金雲母を含んでいる。5～15は布留式系の甕である。口縁は端部を内上方に摘みぎみに仕上げるもの（5～9・15）と外方に摘みぎみに仕上げるもの（13・14）がある。外面は，ハケをナデ消したものが多いが，6や12には波状の沈線が施されている。胴部はくびれ部から7㎜～1.5㎜ほど下からヘラケズリされている。11の胴部には，焼成後に穿孔が施されている。色調は，1が灰褐色，6・8・9・15がにぶい橙色，7・10・11が橙色，13がにぶい黄橙色，14が灰黄褐色を呈する。胎土は，5・6・9・12・13・15が石英，長石，金雲母，7・8・11・14が石英，長石，角閃石，金雲母，10が石英，長石，赤色砂，金雲母を含んでいる。16～22は，壺である。16～18は二重口縁の山陰系壺で，16・18は突出する屈曲部から直立ぎみに口縁が立ち上がる資料で，17は口縁が逆「ハ」の字形に開く。16は端部を肥厚して摘みぎみにおさめている。16は，平滑なナデ仕上げされ，胴部内面がヘラケズリされる。17は，器面が風化を受けているが，胴部内面がヘラケズリされる。18は，平滑なナデ仕上げされるが，胴部内面は風化を受ける。色調は，16がにぶい黄橙色，他は橙色を呈する。胎土は，16が石英，長石，金雲母，17が石英，長石，赤色砂，金雲母，18が石英，長石，角閃石，金雲母を含む。19は，長頸壺の直線的に開く口頸部である。ナデ仕上げされ，端部は尖りぎみにおさめている。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，角閃石，金雲母を含む。20は，山陰系の屈曲部か




第130図　1号住居跡出土土器①（1／4）




第131図　1号住居跡出土土器②（1／4）

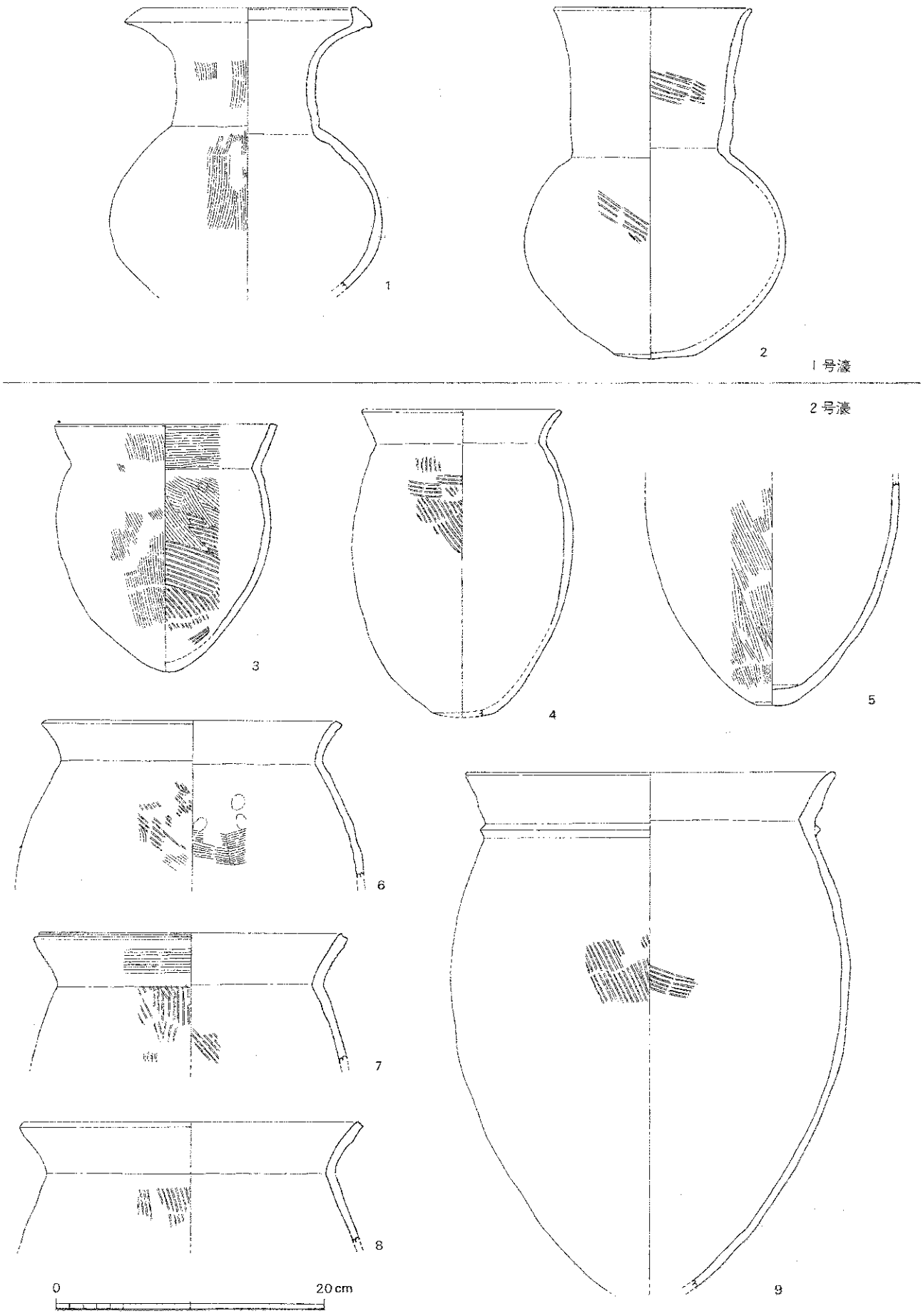
ら逆「ハ」の字形に開く二重口縁の小形壺である。胴部外面はハケナデ消しされ，口縁はヨコナデ，胴部内面はヘラケズリされる。にぶい褐色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，角閃石，金雲母を含む。21・22は小形丸底壺である。21は器面が風化をうけるが，外面には細かいハケ目が残り，内面はナデ仕上げされる。22は，器面が平滑なナデ仕上げされている。色調は両者ともに橙色を呈する。21は精良な胎土で，石英を含む。22は胎土に石英，長石を含む。23・24は鉢である。23は，口縁が少し外湾する丸底の鉢で，口縁は内面が肥厚されて段状の稜がつく。器面は風化をうけるが，内面はナデられている。明褐色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。24は，皿状の体部から屈曲して大きく開く口縁部の鉢で，器面は風化している。橙色の色調で，胎土には石英，長石，金雲母を含む。25～28は，高杯である。25～27は脚部で，25はラッパ状に脚が開くもの，26は筒状の柱状部から内湾ぎみに裾が開くもの，27は低脚の脚部である。器面はナデ仕上げされ，25の内面にはしぼり痕がつく。焼成前の穿孔が3箇所みられる。いずれも橙色の色調で，胎土に25が長石，赤色砂，金雲母，26が石英，赤色砂，金雲母，27が石英，金雲母を含む。28は口縁端部を欠失する高杯で，杯部は小さい体部から屈曲して口縁が逆「ハ」の字にのびる。脚部は，杯部に比べて小さく，円錐状の柱状部から裾が強く折れて開く資料である。器面は風化を受けるが，脚部は平滑なナデ仕上げされ，内面にはしぼり痕がつく。浅黄橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。29～32は，山陰系の鼓形器台である。29・30はくびれ部内面が平坦面をもつもので，31・32はくびれ部内面が稜がつくものである。外面から受部はナデ仕上げされ，裾部内面はヘラケズリされている。色調は，29・32が橙色，30がにぶい橙色，31が浅黄橙色を呈する。胎土には，31が石英，長石，赤色砂，金雲母を含む他は，石英，長石，金雲母を含む。以上の1号住居跡出土の土器は，柳田氏のⅡb式[註1]，井上氏の古墳前期2式[註2]に相当する資料であろう。

**1号濠出土土器**（第132図）

1・2は，1号濠出土の土器である。1は，丸い球状の胴部から頸部が直立ぎみに立ち上がり，口縁は屈曲部から短く内傾する複合口縁をもつ壺である。外面はハケナデ消し，口縁はヨコナデ，内面はナデ仕上げされる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。2はほぼ完形の長頸壺で，底部は凸レンズ状底をなす。口頸部外面は平滑なナデ仕上げ，胴部外面と口頸部外面はハケナデ消しされている。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，黒色砂を含んでいる。これらは，弥生後期前半から後葉期の資料である。

**2号溝出土土器**（第132・133）

3～18は，2号溝出土の土器である。3～9は甕である。3・4，6～8は，「く」の字形口縁の甕で，3・4は小形の部類である。3は尖りぎみの丸底，4・5は凸レンズ状底である。外面は，ハケ調整され，さらに6はナデ消しされ，3は底部がケズリの後ナデられているようだ。内面は，ハケ調整され，4・5・7・8はナデ仕上げされている。色調は，3・5・6がにぶい橙色，4がにぶい黄橙色，7が褐色，にぶい赤褐色を呈する。胎土には，3・7・8が石英，長石，金雲母，4・6が石英，長石，赤色砂，金雲母，5が石英，長石，角閃石，金雲母を含む。口縁が「く」の字に外反する




第132図　1号濠・2号溝出土土器①（1／4）

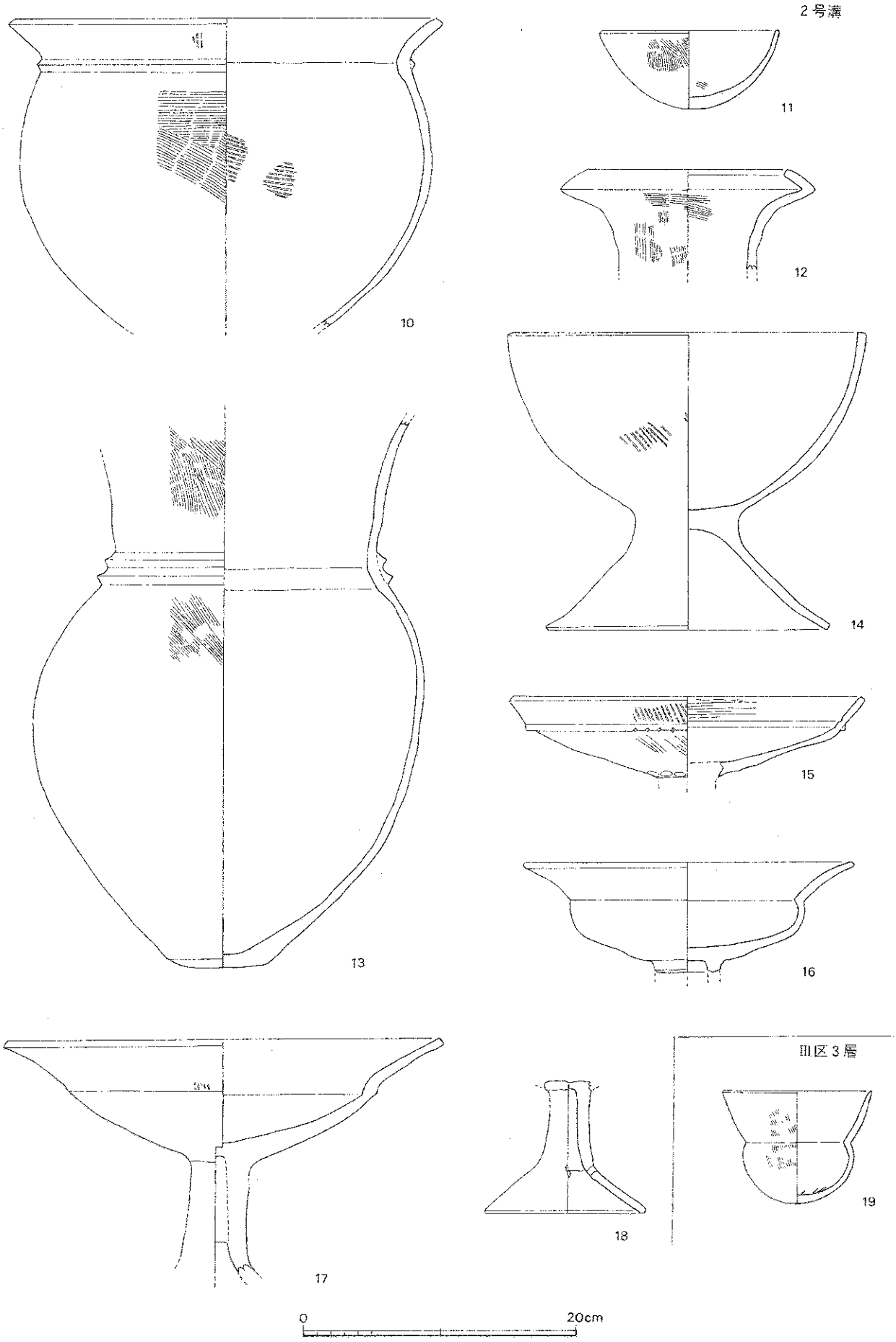
長胴の甕で，くびれ部に断面三角形の突帯がつく。口縁端部は尖りぎみにおさめている。胴部はハケナデ消し，口縁部はヨコナデされている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。10・11は，鉢である。10は，口縁が「く」の字形に外反する大形の鉢で，胴部は丸く張りをもっている。胴部外面は，ハケ調整され，下半をナデ消している。口縁はヨコナデされ，胴部内面は風化を受けるが，ハケ目が残る。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含んでいる。11は丸底の小形鉢で，器面はハケの後ナデ消している。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。12・13は壺である。12は屈曲部から内湾ぎみに強く折れる複合口縁の壺口頸部である。口縁はヨコナデ調整され，他はハケの後にナデ仕上げされている。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。13は卵形の胴部から長い頸部が立ち上がる壺で，頸胴界に2条の三角突帯がつく。底部は凸レンズ状底をなす。器面はハケナデ消しされている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。14～18は，高杯である。14は深い身の鉢に脚台がつくもので，ほぼ完形品である。外面はハケナデ消しされ，内面は平滑なナデ仕上げされる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，黒色砂，金雲母を含む。15は皿状の杯部で，屈曲部に断面三角形の刻目をもつ突帯が付く。体部外面はハケをナデ消し，口縁は斜めに暗文がはいる。内面は平滑なナデ仕上げされる。明黄褐色の色調で，胎土に，石英，長石，金雲母を含む。16は丸い皿状の体部から口縁が大きく開く高杯である。屈曲部内面には鋭い稜がつき，口縁端部は丸くおさめる。柱状部は杯部との接合部で折れているが，角がとれて摩滅しているので，欠損後も杯部だけ使用されているようである。器面は平滑なナデ仕上げされている。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。17は，丸い体部の屈曲部からさらに開く口縁で，端部は平坦におさめている。脚部は杯部に比較して短いようだ。口縁はヨコナデが施されて，他は平滑なナデ仕上げされる。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，赤色砂，金雲母を含む。18は，割と小形の脚部で，細い柱状部から裾部は内湾ぎみに開く。焼成前の穿孔が3箇所みられる。器面は風化を受ける。にぶい橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。以上の2号溝出土の土器は，弥生後期後葉～終末期の資料である。

**その他の土器**（第133図）

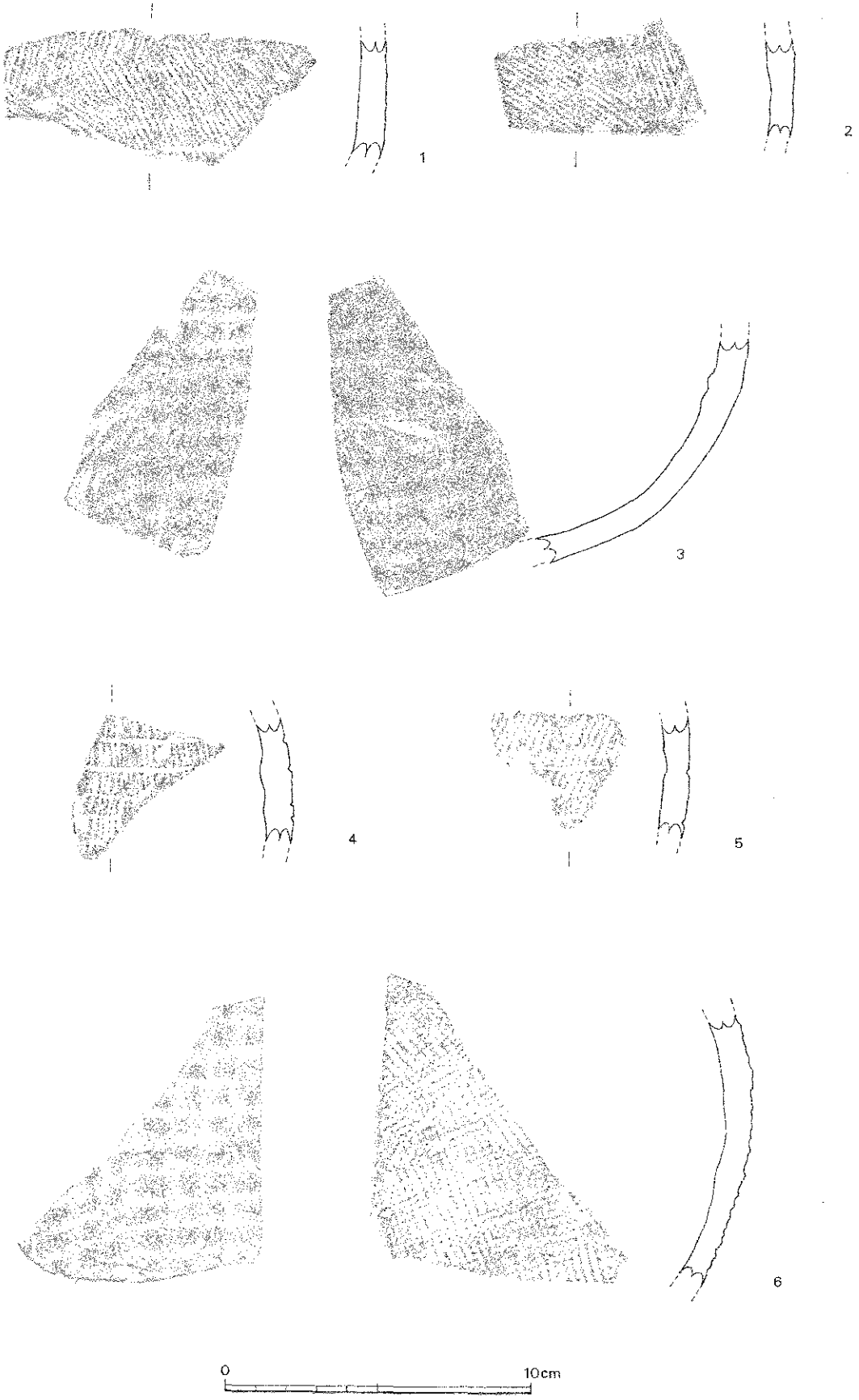
19は，Ⅲ区3層から出土した完形の小形丸底壺である。丸い胴部から口縁は内湾ぎみにのびる。端部は尖りぎみにおさめている。浅い黄橙色の色調で，胎土に石英を含む。柳田氏のⅡC式，井上氏の古墳前期3式の資料であろう。

**朝鮮半島系土器**（第134図）

1～6は朝鮮半島系の土器である。1・2は楽浪系の瓦質壺と考えられる破片である。外面には細かい縄席文叩きが施され，内面は平滑に仕上げられている。淡灰色の色調をもつ。1はⅠ1区の2層，2はⅠ5区の1層出土。3～6は陶質土器である。3は，1号竪穴住居から出土した壺破片で，器面はナデ仕上げされている。灰褐色の色調で，割とザラザラした胎土をもつ。4・5は，縄席文叩きの後に沈線を施す壺破片で，4は淡灰色，5は灰色を呈する。4はⅠ13区の2層，5はⅡ2区の1層出土。6は格子目叩きの壺破片で，内面には丸い当具痕がついている。明るい灰色の色調で，器肉はア




第133図　2号溝出土土器②　その他の土器（1／4）




第134図　朝鮮半島系土器（1／2）

ズキ色を呈する。Ⅰ4区2層，Ⅰ1区2層出土。この他にも，瓦質の壺？破片がⅠ7区1層から出土。無文の陶質土器壺破片が，Ⅰ3区2層，Ⅰ12区2層3点，Ⅰ15区1層，Ⅲ2区1～2層から出土。格子目叩きの壺破片が，Ⅰ5区1層2点，Ⅰ5区2層，Ⅰ6区2層，Ⅰ7区1層3点，Ⅰ8区2層出土。以上24点の出土がみられた。

**1号甕棺**（第135図）

1号甕棺は，丸い胴部から口縁が立ち上がる直口壺で，体下部を欠失している。境界には断面三角形の突帯がつく。口縁端部には「ハ」の字形に刻目を施す。器面はハケ調整され，内面には指圧痕がみられる。明褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。弥生後期後葉以降の資料であろう。

**2号甕棺**（第135図）

2号甕棺は，甕と甕を組み合わせる合口甕棺である。上甕は，胴部の大半を欠損する甕である。「く」の字形の口縁で，端部は平たく面取りされている。底部は大きめの凸レンズ状底である。口縁はヨコナデされて，胴部外面はハケ，内面はナデ仕上げされる。にぶい褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。下甕は，「く」の字形に外湾する口縁で，端部は摘みぎみにおさめている。胴部は楕円形状をなし，底部は凸レンズ状底をなす。口縁はヨコナデ調整され，胴部はハケナデ消しされる。外面には煤が付着している。にぶい黄褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。2号甕棺に使用された甕は，弥生後期後葉の資料である。

**3号甕棺**（第135図）

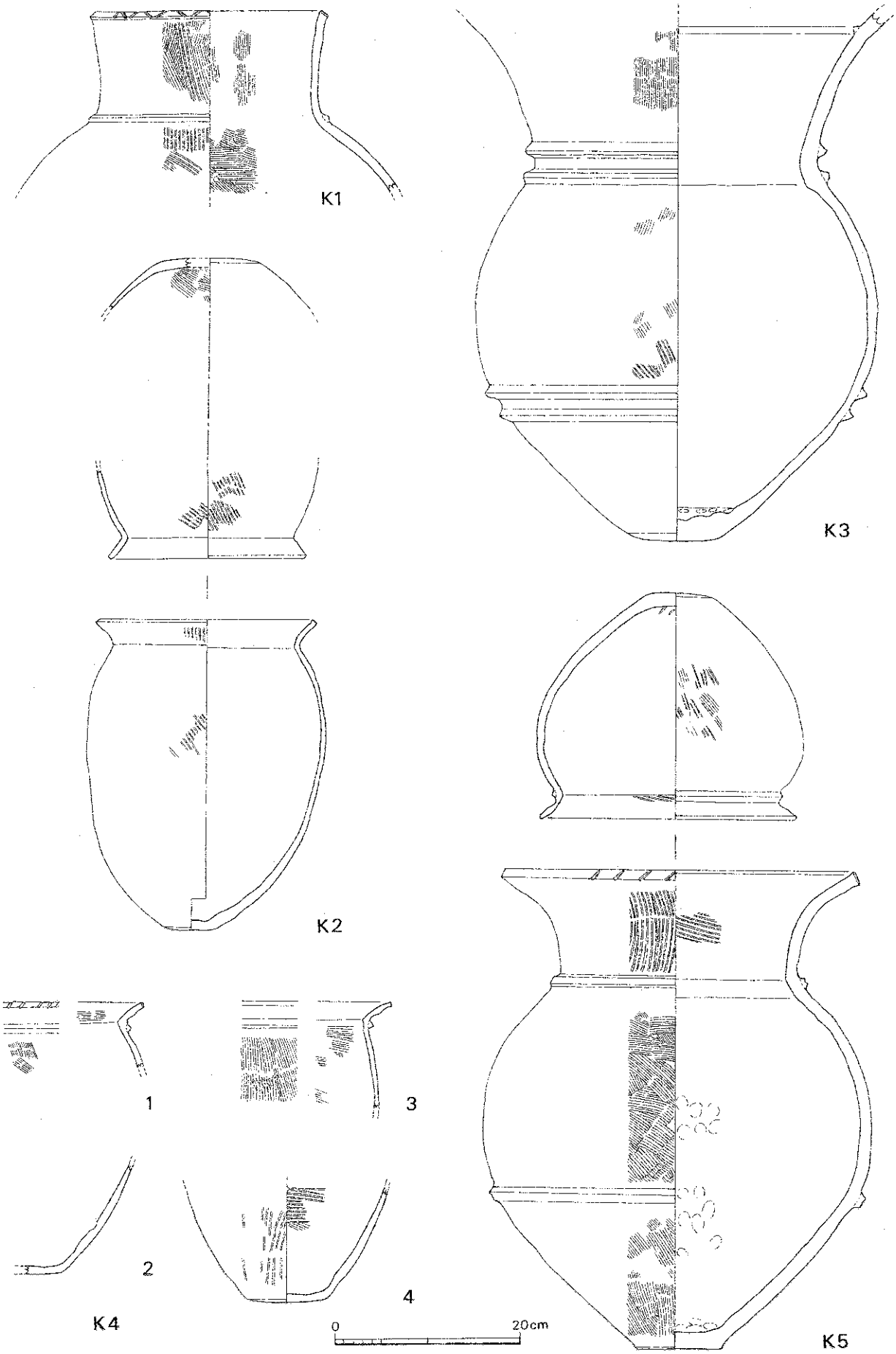
3号甕棺は，頸胴界と胴下半に2条ずつの台形状の突帯をもち，丸い胴部から口頸部が朝顔形の大きく開く壺である。口縁内面には蓋受けの突帯がめぐる。底部は，凸レンズ状底をなす。外面はハケ調整し，内面はナデ仕上げされ，内底面に指オサエ痕がつく。橙色の色調で，胎土に石英，長石を含む。この土器は，弥生後期後葉～終末の時期の資料であろう。

**4号甕棺**（第135図）

4号甕棺は，屈折部に断面三角形の突帯をもつ甕を組み合わせて合口甕棺としている。撹乱を受けていて，全形を復元できなかった。上甕は，「く」の字形に外反する口縁の甕で，端部は平坦におさめられ，刻目を施している。底部は，薄い凸レンズ状底をなす。口縁部はヨコナデ，胴部外面はハケナデ消し，胴部内面はナデ仕上げされる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含んでいる。下甕は，「く」の字形口縁の甕で，底部は，凸レンズ状底をなす。口縁部はヨコナデ，胴部内外面はハケ調整され，下半はナデ仕上げされる。橙色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。4号甕棺の甕は，弥生後期後葉の資料であろう。

**5号甕棺**（第135図）

5号甕棺は，壺と鉢を組み合わせた合口甕棺である。上甕（1・2）は，上半に丸く張りをもつ胴部から口縁は「く」の字形に外湾する鉢で，屈折部には断面三角形の突帯をめぐらす。底部は，凸レンズ状底をなす。口縁はヨコナデされ，胴部外面はハケの後にナデ消して，内面は平滑なナデ仕上げされる。にぶい赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。下甕（3・4）は，丸い胴部か




第135図　出土甕棺（1／6）

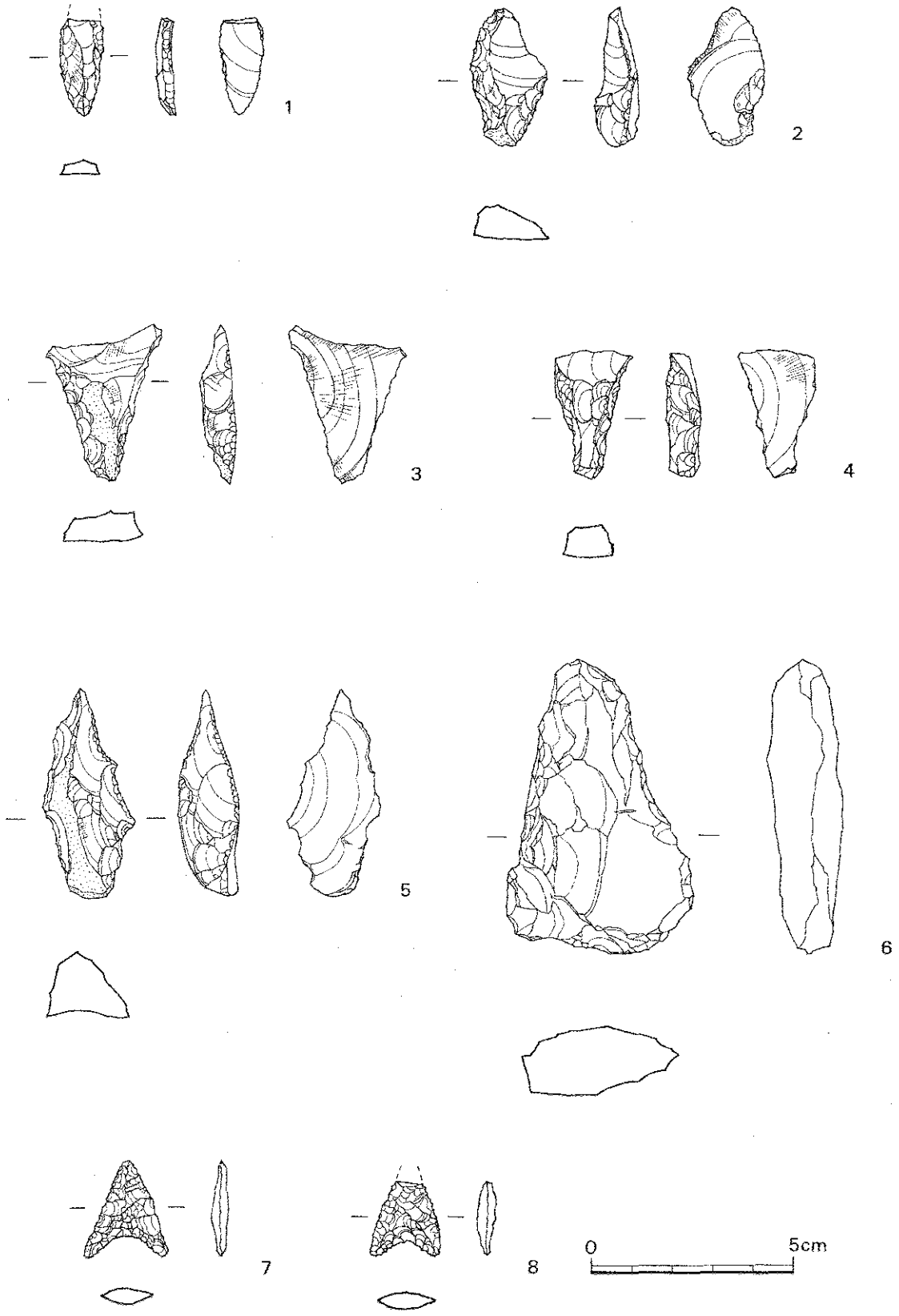
ら口縁が大きく開く大壺である。頸胴界と胴下半に1条ずつ断面「コ」の字形の突帯をめぐらす。口縁端部はやや肥厚されて，平坦におさめた面に刻目を施している。底部は，平底である。外面はハケ，内面はナデ仕上げされるが，指オサエ痕がみられる。明赤褐色の色調で，胎土に石英，長石，金雲母を含む。5号甕棺に使用された土器は，弥生後期後葉の資料と考えられる。

②石器（第136～147図）

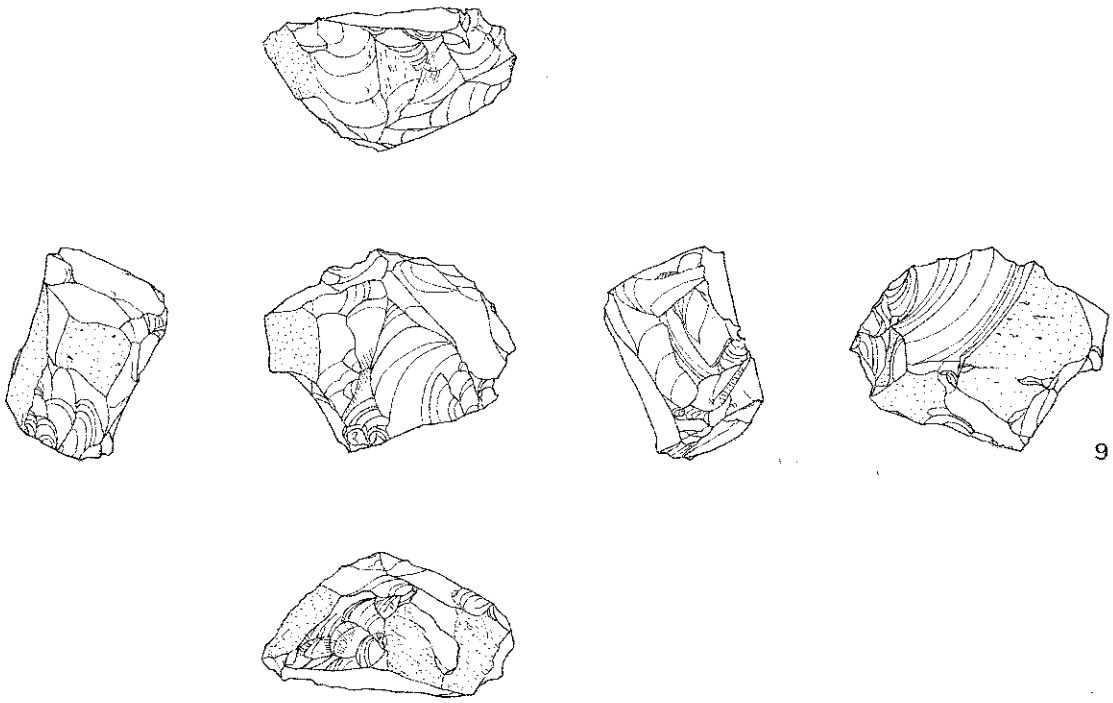
1～14は，剥片石器類である。6が安山岩製の他は，黒曜石製である。1・2は，ナイフ形石器である。1は側辺がブランテイングされる小形のナイフ形石器で，刃部を欠損している。Ⅲ区ピット2出土。2はいびつな横剥ぎの剥片を用いたナイフ形石器で，側辺がブランテイングされ，刃部には刃こぼれがみられる。Ⅲ3区3層出土。3・4は台形様石器で，両者ともに横剥ぎの剥片を用いる。3は，一方の先端が突出する斜めの刃部をもつ。上面には自然面が残る。Ⅰ区ピット33出土。4も刃部が一方が突出していて，側辺はシンメトリーの形態をもたない。Ⅰ3区2層出土。5は横剥ぎの剥片を用いた角錐状石器である。上面の自然面が残っていて，円礫の良好な石材を使用している。6は一方の側辺に刃部をもつサイドスクレーパーである。Ⅲ区ピット2出土。7・8は，両者ともに三角形の形態で，基部にくぼみが入る凹基無茎式の石鏃である。8は先端が欠損している。7はⅢ2区2層出土。8はⅢ1区2層出土。9～14は石核である。9・11は角礫，10は円礫の良質な石材を用いている。9はⅠ10区2層出土。10はⅠ15区1層出土。11はⅠ6区2層出土。旧石器時代の石核であろう。12～14は，白い巣が入る地元の黒曜石を用いた多角形の石核である。剥離された稜線は潰れてガジガジした感がある。12はⅠ区1号竪穴住居跡，13はⅢ5区2層，14はⅢ3区2層出土。

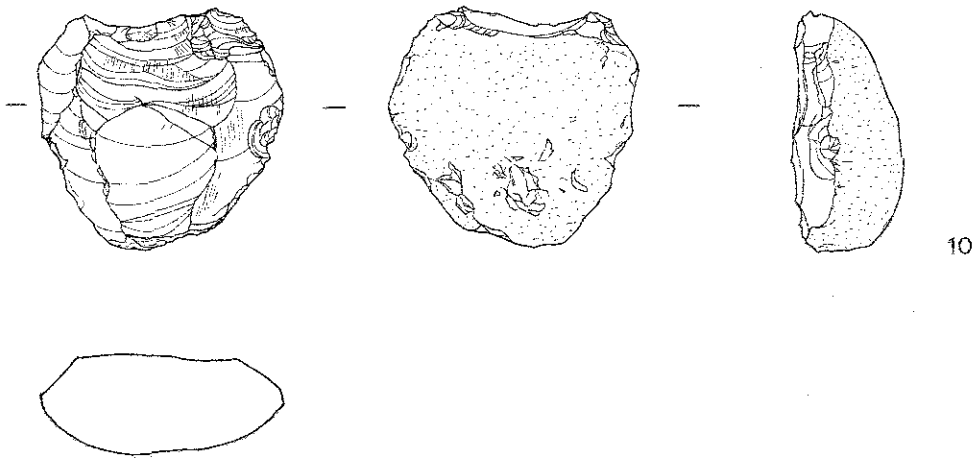
15・16は磨製石斧である。15は頁岩の製品で，刃部を欠損している。先端は摩滅していて，欠損した後にも敲石として使用した可能性をもっている。重さ230gを量る。Ⅰ14区1層出土。16は玄武岩製で，刃部・基部ともに欠損した中途の資料である。重さ80gを量る。Ⅰ6区2層出土。17～28は砥石である。

17～27は，砥石である。17が粘板岩，19が安山岩を用いる他は，砂岩を使用している。17は，全側面を使用するもので，重さ2,400gを量る。Ⅰ区1号竪穴住居跡出土。18は，上面と側面を使用するもので，重さ60gを量る。Ⅱ区2号溝出土。19は，欠損しているが，側面を使用している。重さ80gを量る。Ⅰ区3号竪穴住居跡出土。20は，上下面を砥石として使用しているが，砥面は曲面をなしている。重さ540gを量る。21は，上面を使用する割ときめの細かい砥石である。重さ280gを量る。22は，上下面を砥石として使用するが，凸凹していて台石として使用したのであろうか。重さ1,360gを量る。23は，上下両側面とも使用していて，上面の表面が光沢をもつ。重さ240gを量る。20～23は，Ⅰ区1号竪穴住居跡から出土した。24～27は，割と大形の砥石である。24・26・28は上下を砥面として使用し，25は上面だけを使用する。24は上下面の表面が光沢をもつ。28は表面に傷が入っていて，26は側面が2箇所打ち欠かれている。重量は，24が3,740g，25が1,740g，26が5,120g，27が2,940gを量る。24がⅡ区ピット出土。他は，25がⅠ区1号竪穴住居跡，26・27がⅠ区3号竪穴住居跡出土。28～52は，磨石・凹石・敲石である。石材は，27が砂岩，30・40・48・49が安山岩，42が鉄石英の他



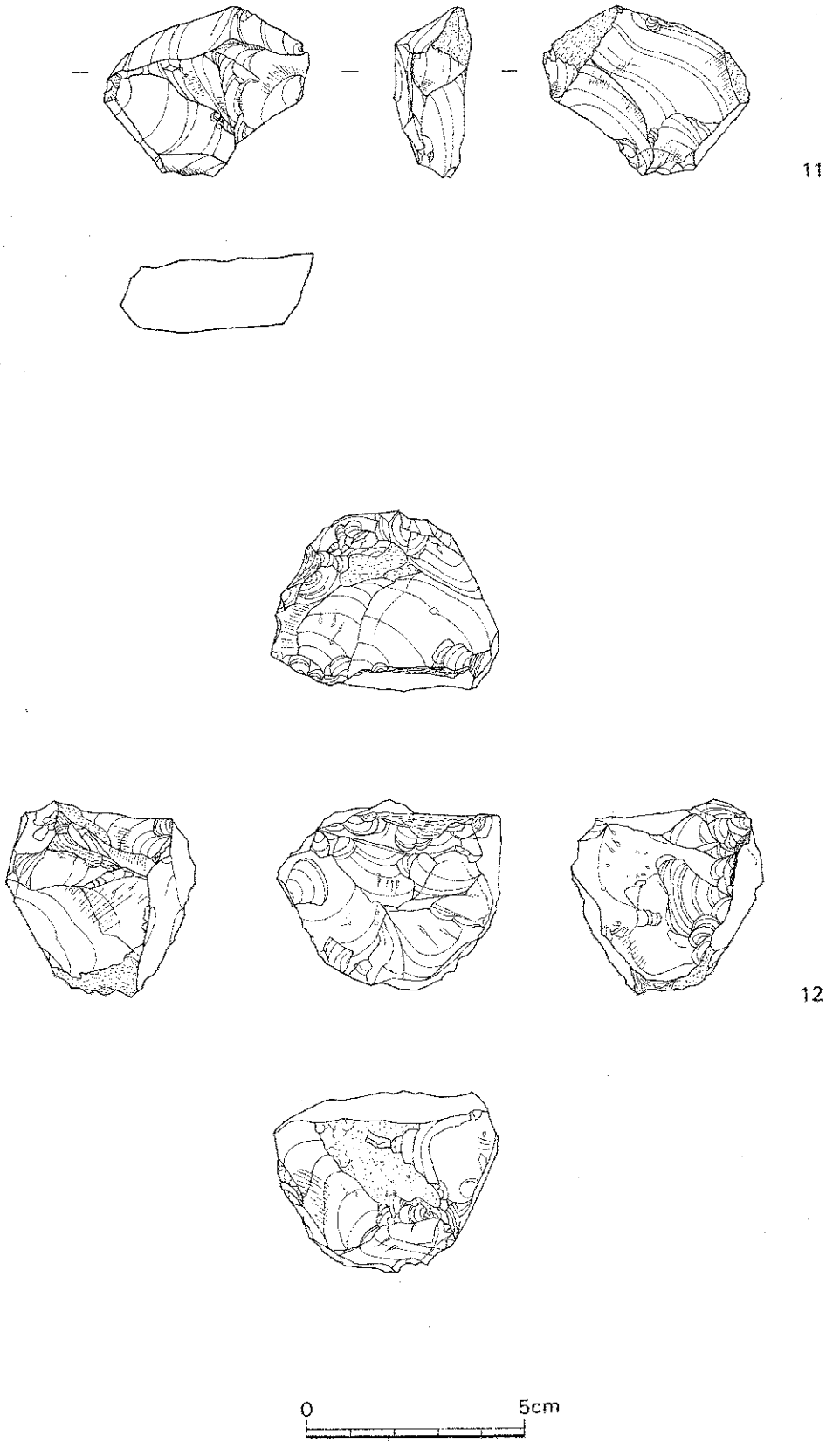

第136図　出土石器①（2／3）



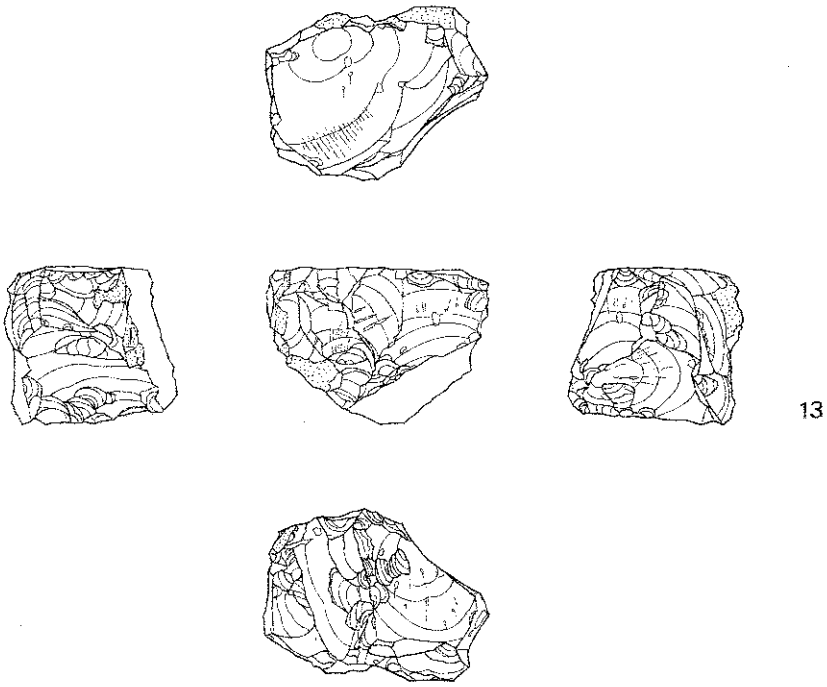



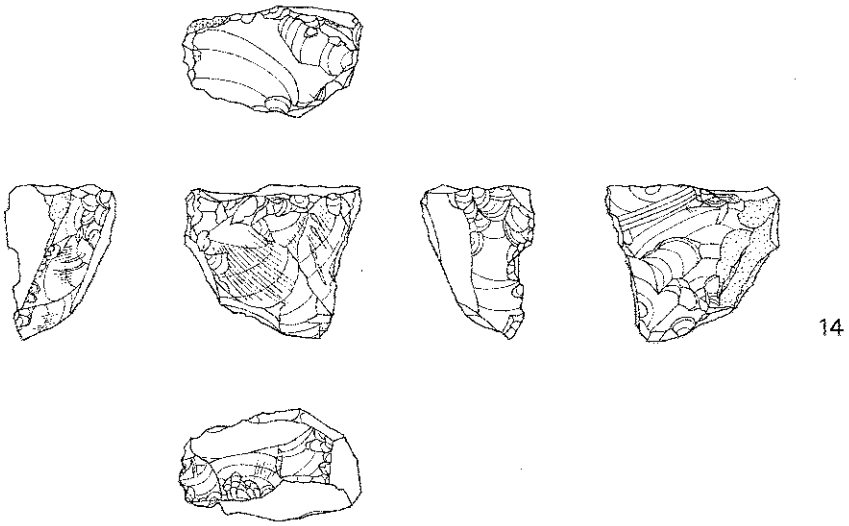

0 5cm

第137図　出土石器②（2／3）




第138図　出土石器③（2／3）

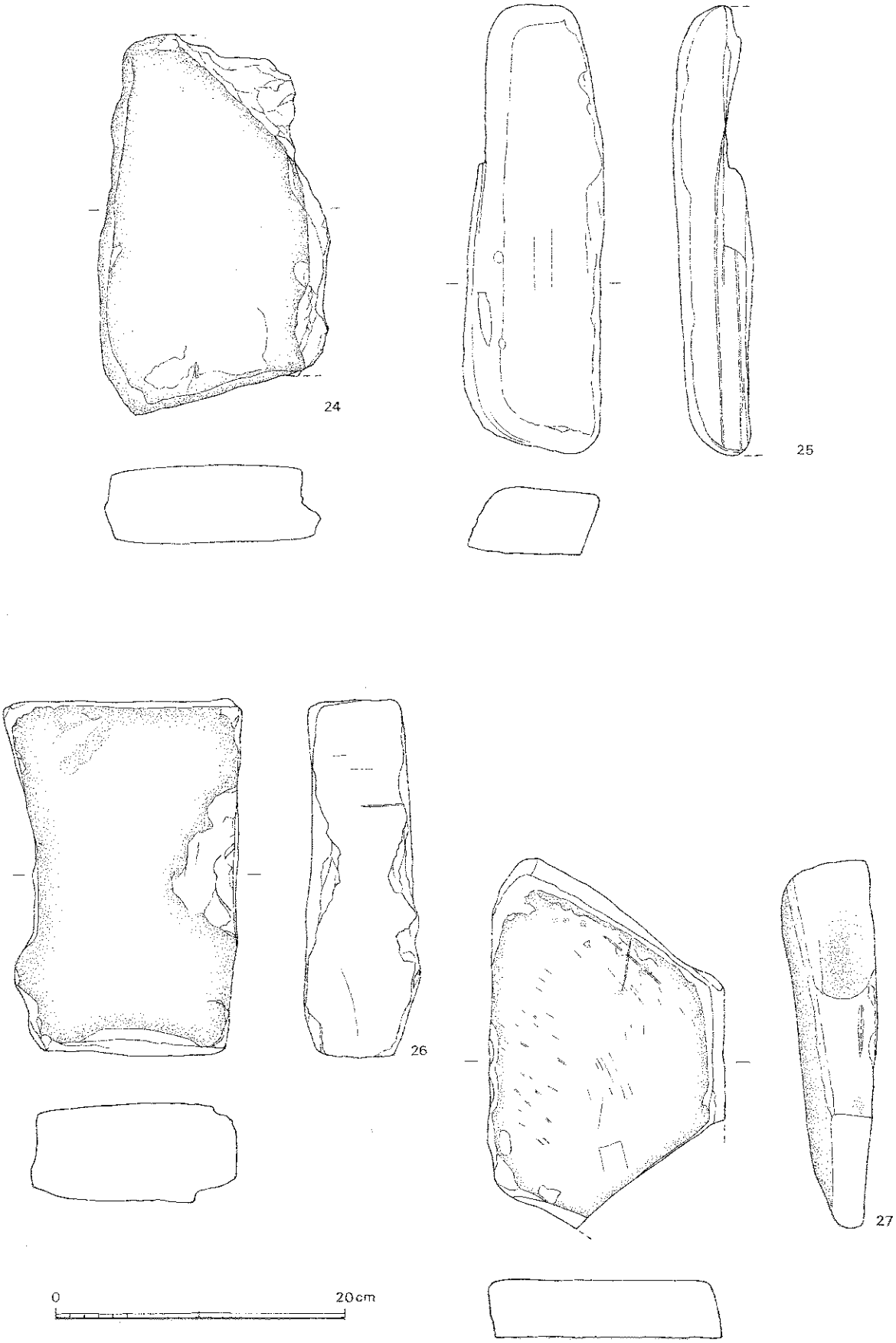


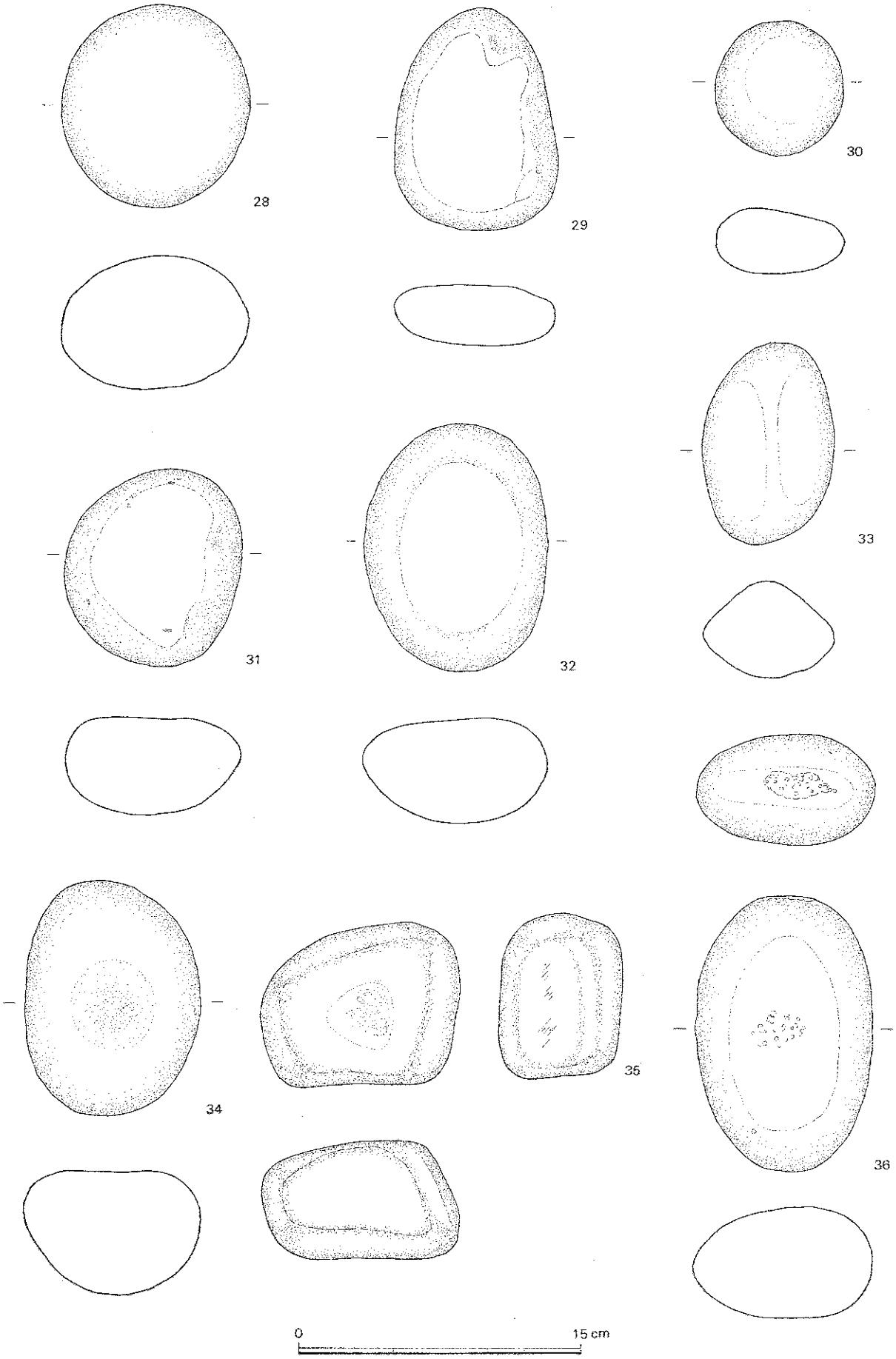

0　　5cm

第139図　出土石器④（2／3）

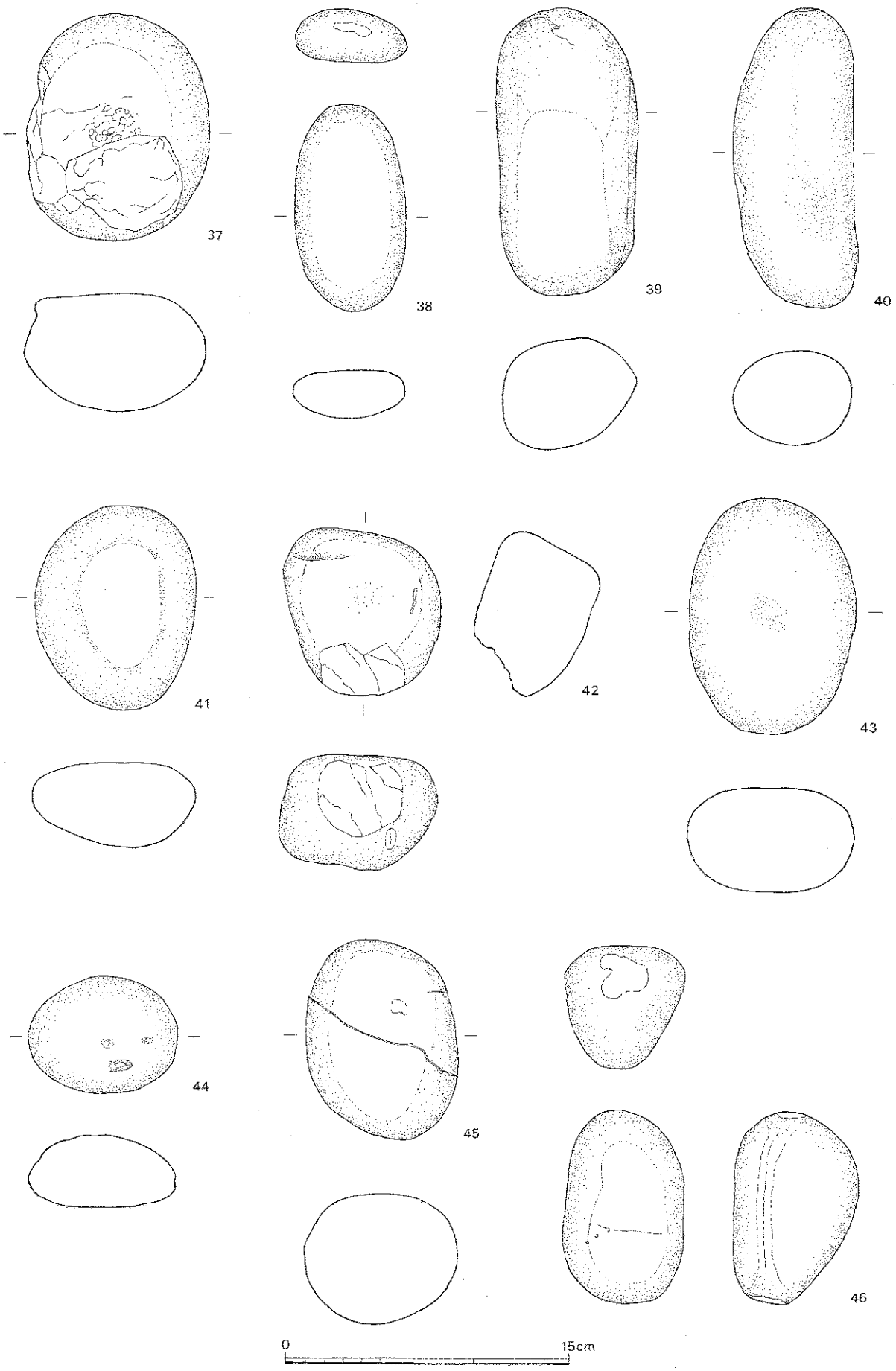
第140図　出土石器⑤（1／3）




第141図　出土石器⑥（1／4）

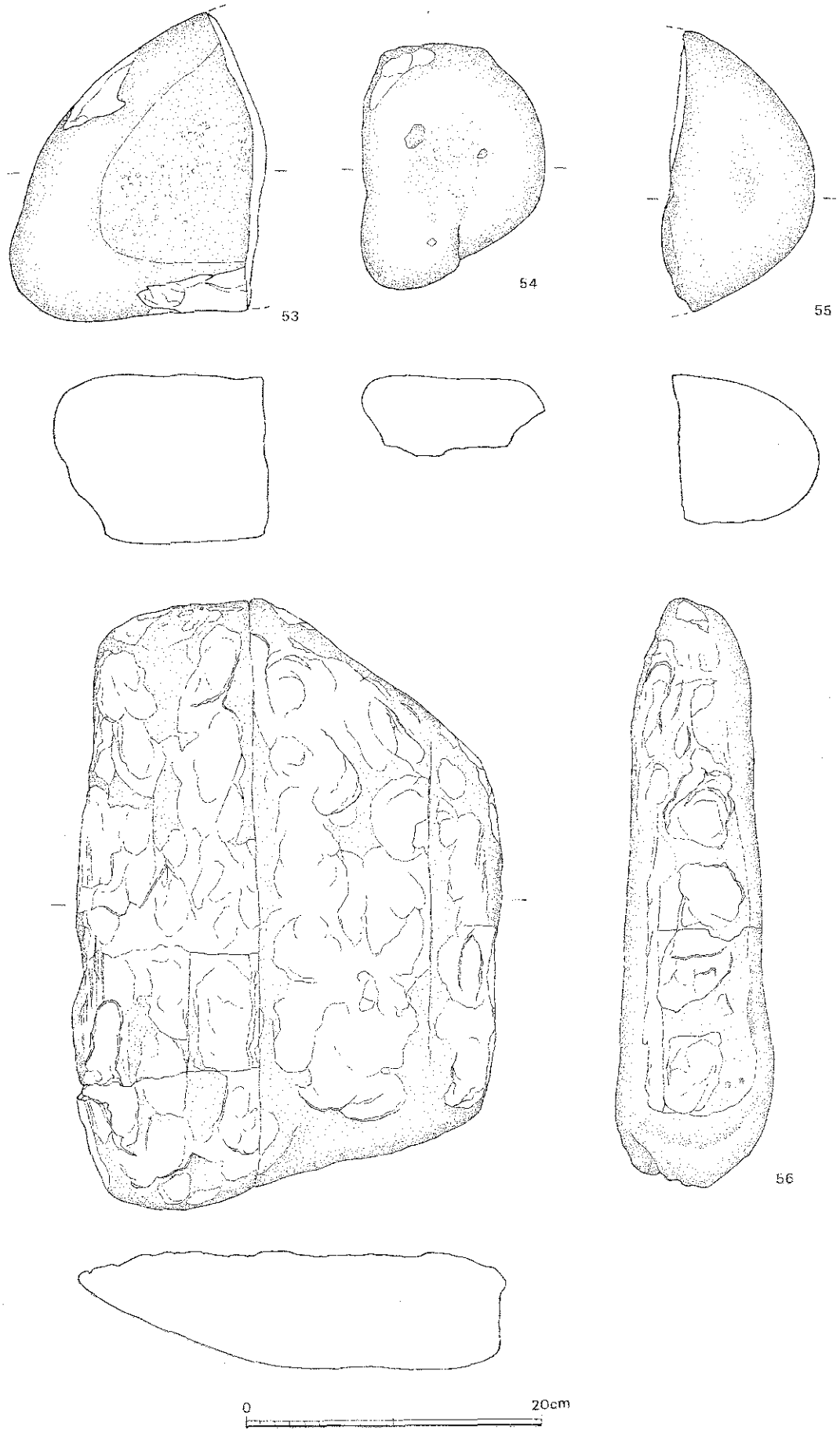



第142図　出土石器⑦（1／3）

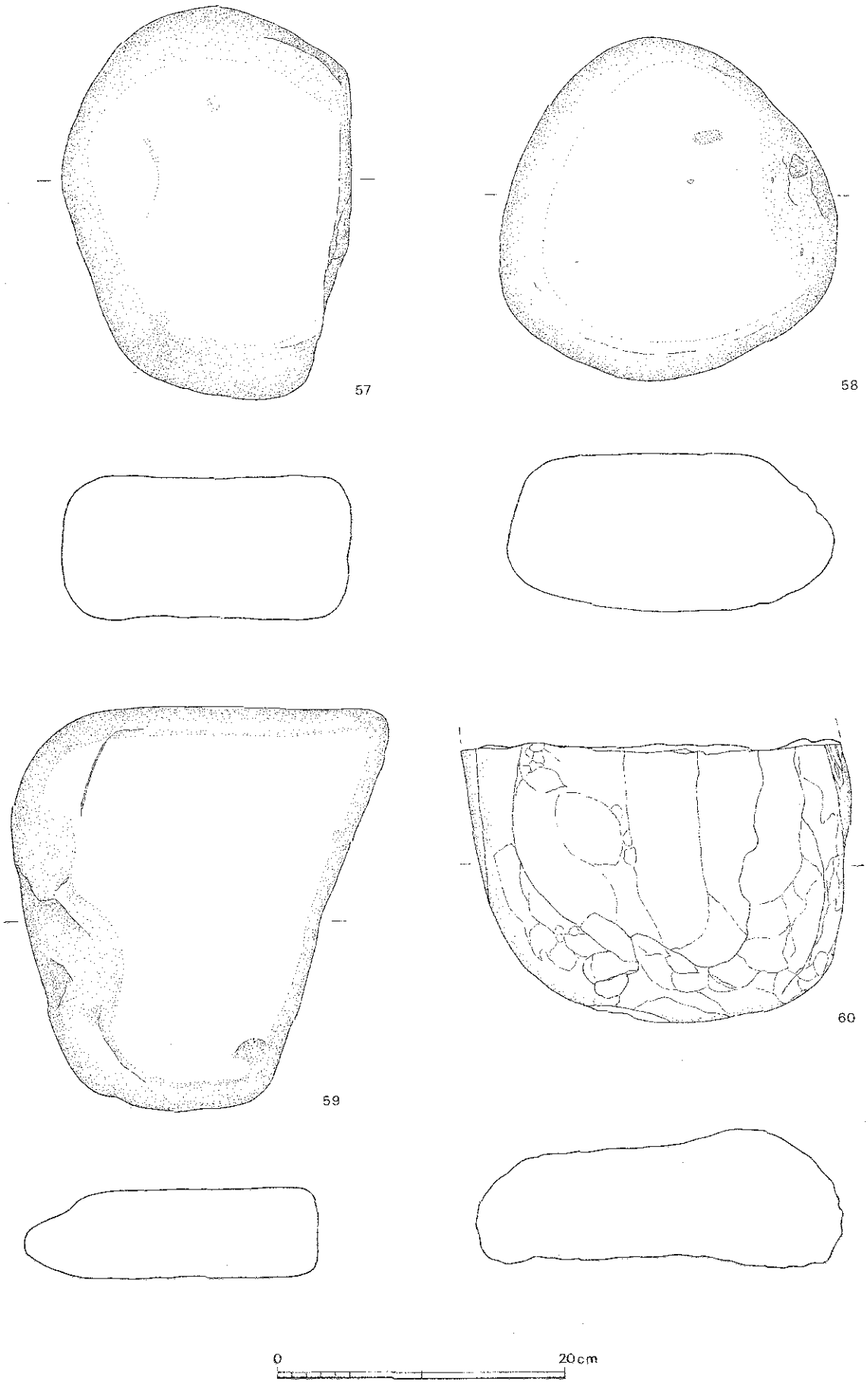



第143図　出土石器⑧（1／3）

第144図　出土石器⑨（1／3）



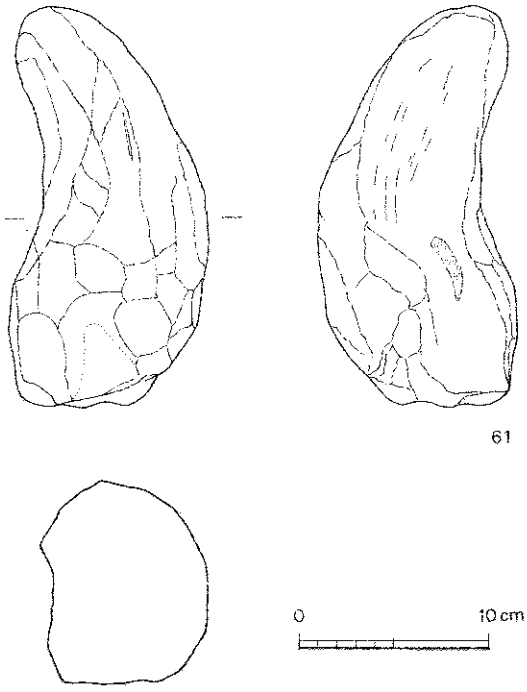

第145図　出土石器⑩（1／4）




第146図　出土石器⑪（1／4）

は，玄武岩の円礫を利用している。28～32は，一面だけに磨面をもつ磨石で，33は側面に磨面をもつものである。重量は，28が1,100ｇ，29が550ｇ，30が240ｇ，31が740ｇ，32が1,110ｇ，33が500ｇである。31がＩ区３号竪穴住居跡出土の他は，Ｉ区１号竪穴住居跡出土である。34は，上面中央に丸く浅い凹みを，35は上下に丸く浅い凹みをもつ磨石である。34は1,260ｇ，35は1,000ｇを量る。両者ともに，Ｉ区１号竪穴住居跡出土である。36～38は敲石と磨石との兼用品である。36は上下の磨面の中央に敲打痕がつき，両端に敲石としての使用痕をもつもの。37は磨面は一面で，中央に敲打痕がつき，敲石としての使用で剝離している。38は上下面に磨面をもち，先端に敲石としての使用痕をもつ。重量は，36が1,270ｇ，37が1,100ｇ，38が260ｇを量る。いずれもＩ区１号竪穴住居跡出土である。39は長い円礫の側面を磨面として使うもので，40は長い円礫の側面を磨面として使い，先端と側面を敲石として使用するものである。重量は，39が1,250ｇ，40が800ｇを量る。両者ともにＩ区１号竪穴住居跡出土。41は，一面だけ磨面をもつ磨石である。重さ660ｇを量る。42は，上面中央にかすかに敲打痕がつき，先端を敲石と使用して欠損している。重さ660ｇを量る。41と42は，II区13号竪穴住居跡から出土。43は，上下面にが磨面をもち，中央が少々敲打によって凹む。重量は980ｇを量る。II区14号竪穴住居跡出土。44・45は一面だけ磨面をもつ磨石である。重量は44が280ｇ，45が960ｇを量る。44はＩ区１号溝出土。45はII区１号濠出土。46は，側面に磨面をもち，両端が敲石として使用されている。重さ600ｇを量る。47は，上下に磨面をもち，中央に敲打痕がつく磨石で，両端は敲石としての使用されている。重さ1,660ｇを量る。46・47は，II区１号濠出土。48は上下面が丸く凹む凹石である。重さ1,780ｇを量る。II区１号濠出土。49・50は，上面のみに磨面をもつ磨石である。重量は49が1,100ｇ，50が1,570ｇを量る。II区２号溝出土。51は，上下面の中央に丸くかすかに敲打痕がつく磨石である。重さ615ｇを量る。52は，棒状の円礫の側面を磨面として使用する磨石で，両端を敲石として使用している。重さ1,180ｇを量る。51・52は，II区２号溝出土。

53～60は，玄武岩製の台石である。53～55は，割と小形の製品である。53・55は上下面を，54は上面を使用している。重量は，53が6,540ｇ，54が1,600ｇ，55が2,520ｇを量る。いずれも，Ｉ区１号竪穴住居跡出土である。56～60は，大形の台石である。56・60は上面，57～59は上下面を使用している。56と60は，上面が丸く剝落していて，敲打をともなう作業によってできたことが推測される。重量は，56が16,3kg，57が




第147図　出土石器⑫（１／４）

10,06kg，58が9,64kg，59が8,28kg，60が8,06kgを量る。56・57は1区3号竪穴住居跡出土。58はII区13号竪穴住居跡出土。59はI区1号溝出土。60はII区ピット2出土。

61は，鳥帽子形をなす凝灰岩製の支脚である。表面にはノミで削られた加工痕が残っている。二次的な火熱を受けて赤褐色を呈する。重量は2,3kgを量る。I区1号竪穴住居跡出土である。

③金属器

金属器は13点出土している。青銅器は，II 4区2層から後漢鏡と思われる鏡片が1個体分2点出土している。鉄関係では，I区1号竪穴住居跡から棒状や鉄鏃と推定されるものや鉄滓と思われる資料が出土している。鉄滓と思われる資料は，I 10区2層から3点出土している。他に鉄片が，I 10区2層から2点，III 5区2層から1点出土している。

註1　柳田康雄「九州」『古墳時代の研究』6　雄山閣　1991

2　井上裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児嶋隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』　1991

## (10) 小　結

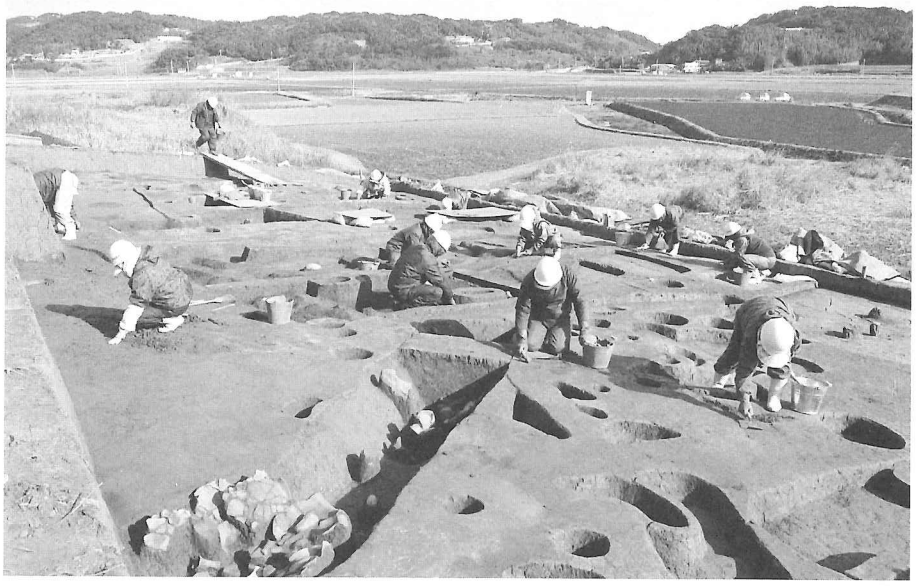
平成7年度から平成9年度における原地区の調査について，年度ごとに説明を行ってきた。ここではその成果について，まとめを簡単に行いたい。原地区は，標高18mの台地頂部を中心として拡がる区域であり，原の辻遺跡の中枢部分と考えられる。そこで調査の主眼は，宗教的なセンター遺構の確認と居住域の実態を把握することにあった。調査の結果，前方後円形の台地頂部で祭儀建物群が検出され，ここが祭儀場であることが明らかとなった。居住関係では，弥生中期～古墳前期の竪穴住居跡と弥生前期末の土器が出土していて，前期末～古墳前期まで居住があったことが判明した。台地頂部南端より南側には濠が何条も東西方向に走って区域を区切っていることが確認された。時期的には，弥生中期前葉に掘削されたものと，弥生後期初頭頃に掘削されたものがあることが明確となった。濠は，弥生後期後葉以降になると埋没してしまうものが多く，その上に竪穴住居が建てられているところもある。住居域には，溝が走っており，居住域を区切ったり，排水の機能をもつものと考えられる。また，東側傾斜面の住居域では，11基の小児甕棺墓が検出されていて，一般的な墓地とは性格の異なるものと考えられる。特に，平成8年度D区の4号濠は，平成9年度の1号濠とつながることが確認されたが，この濠に沿って列をなして10基の小児甕棺が検出されているのは，大変興味深い事象である。濠との関係について検討を要する。この他に3箇年度の成果としてあげることができるのは，台地では基本的な居住域は内環濠の内部全体に及ぶことが推測され，環濠外に墓域や畑地が展開していたことが推測できるようになったことであろう。

Ⅰ・Ⅱ区遠景（南側上空から）

Ⅰ・Ⅱ区遠景（東側上空から）

Ⅰ・Ⅱ区全景

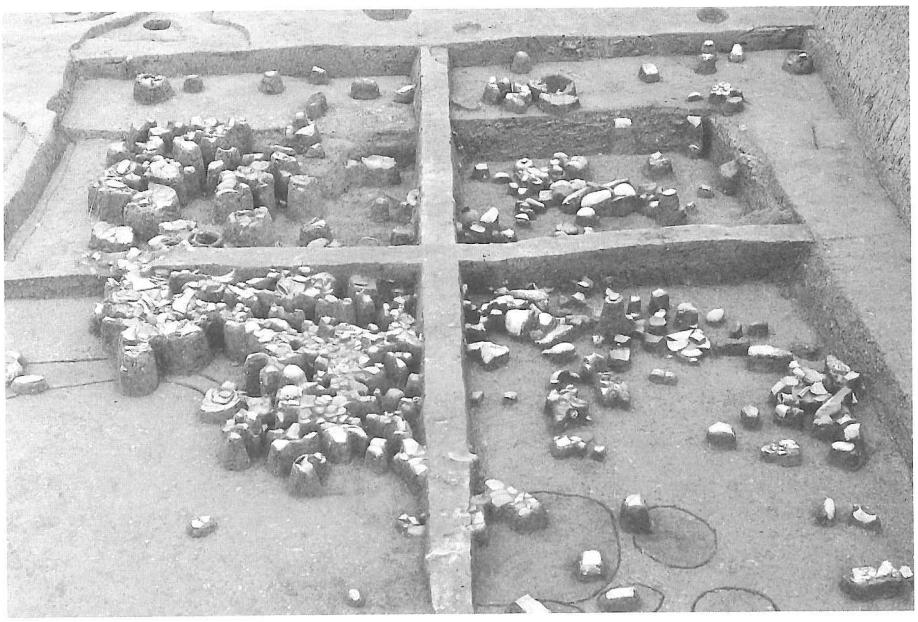
Ⅱ区全景



II区
調査風景

I区全景
(東から)

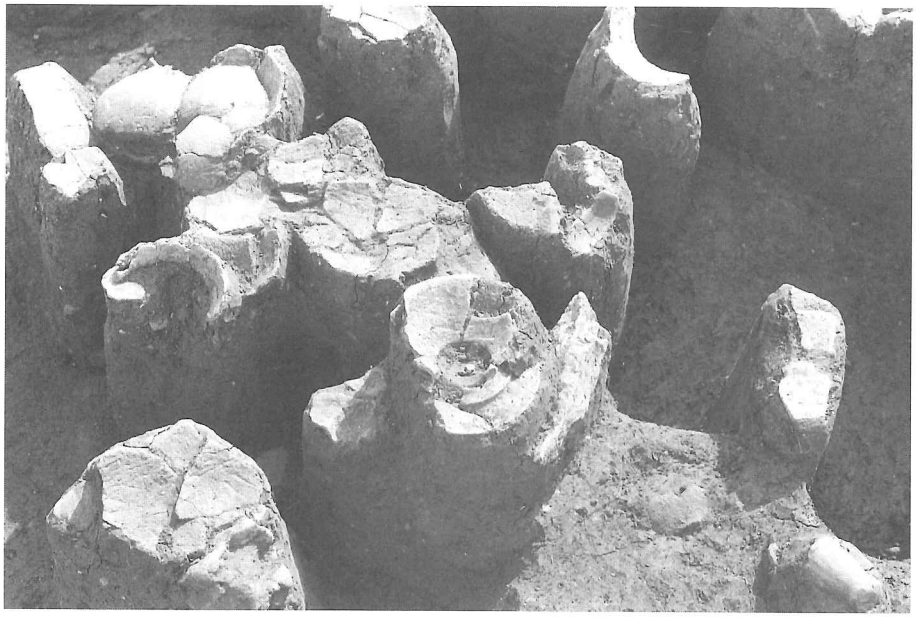
I区全景
(西から)



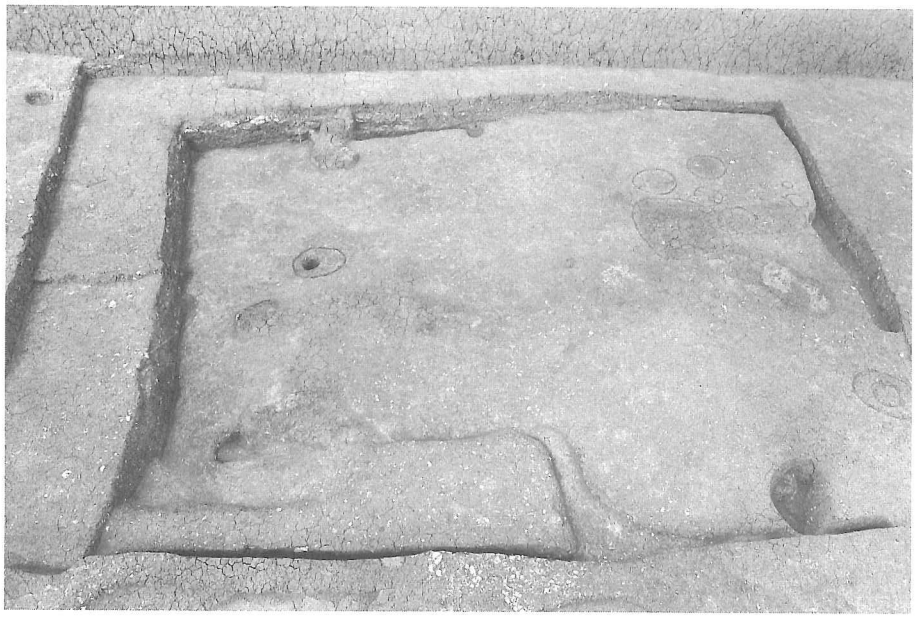
Ⅰ区
1号住居跡遺物出土
状況（東から）

Ⅰ区
1号住居跡遺物出土
状況（西から）

Ⅰ区
1号住居跡遺物出土
状況（部分）

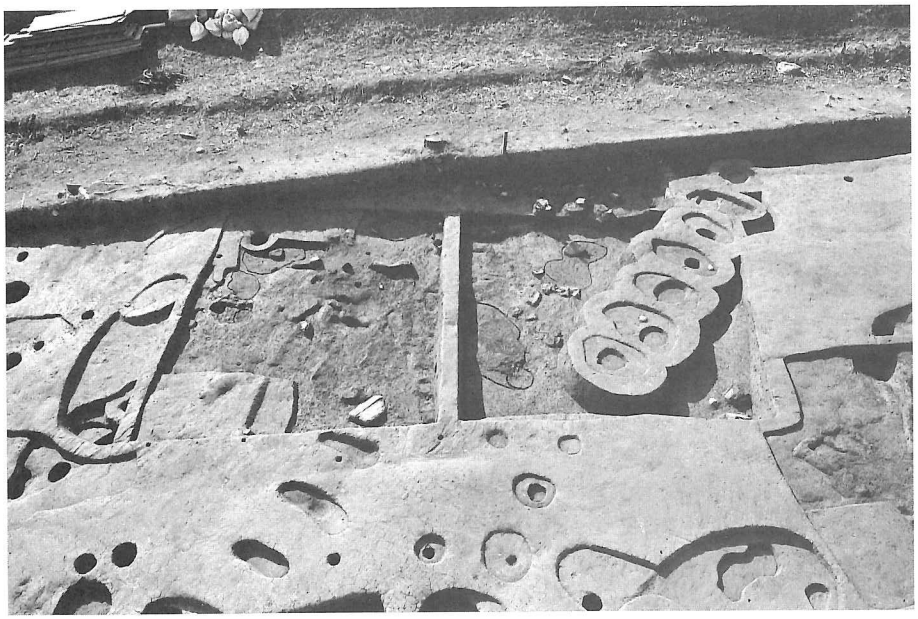


Ⅰ区
１号住居跡遺物出土
状況（部分）



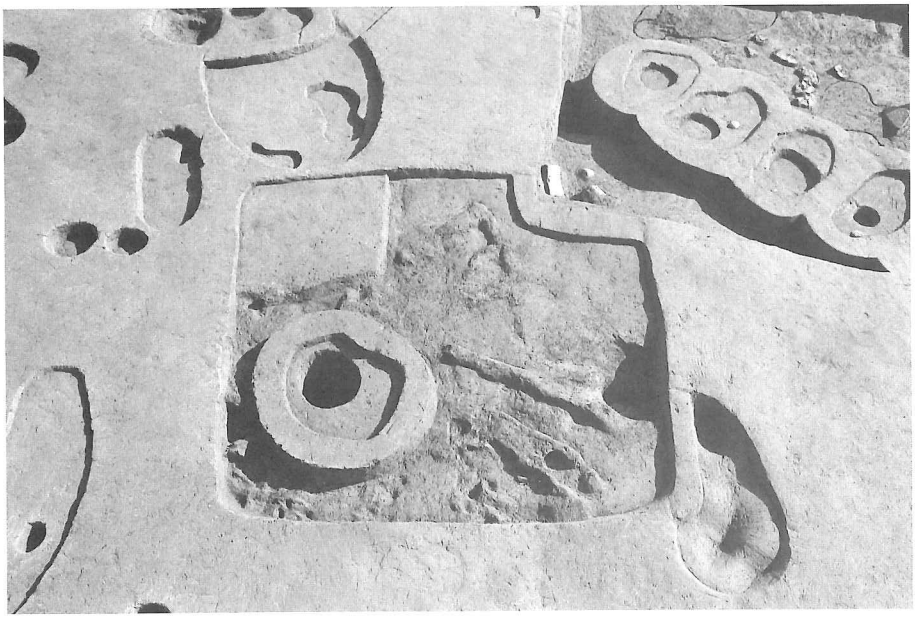
Ⅰ区
１号住居跡検出状況
（南から）

Ⅰ区
１号住居跡検出状況
（東から）



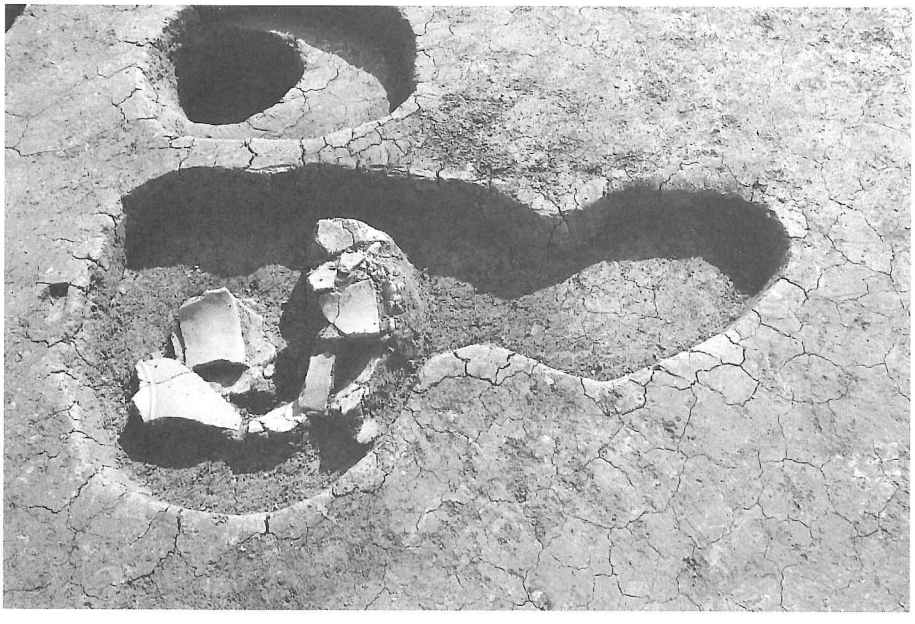
Ⅰ区
3号住居跡検出状況
(北から)

Ⅰ区
3号住居跡検出状況
(西から)



Ⅰ区
4号住居跡検出状況
(西から)

Ⅰ区
5号住居跡検出状況
(北から)



Ⅰ区
1号甕棺墓
(北から)

Ⅱ区全景
(東から)

II区全景
（南から）

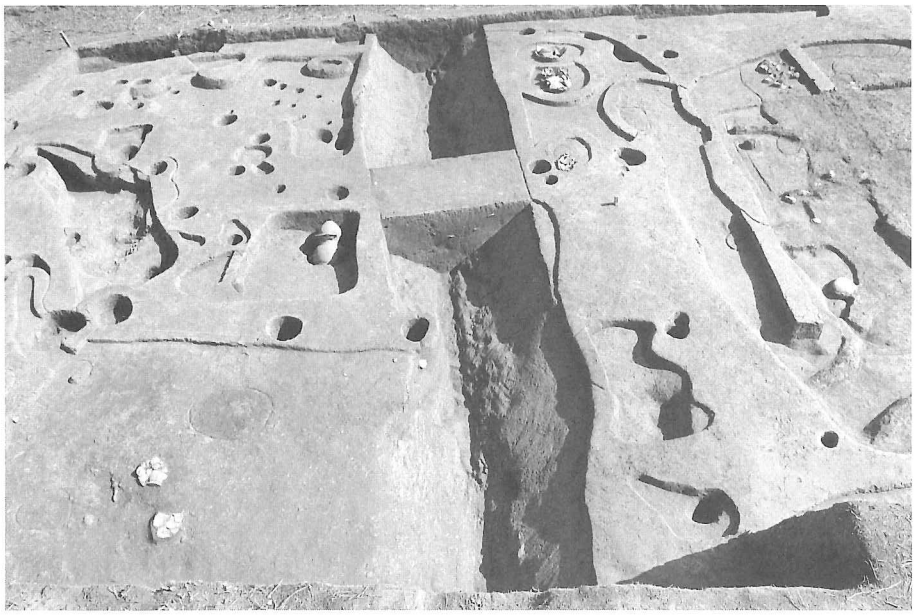
II区全景
（北から）

II区
9～11号住居跡検出
状況（南から）

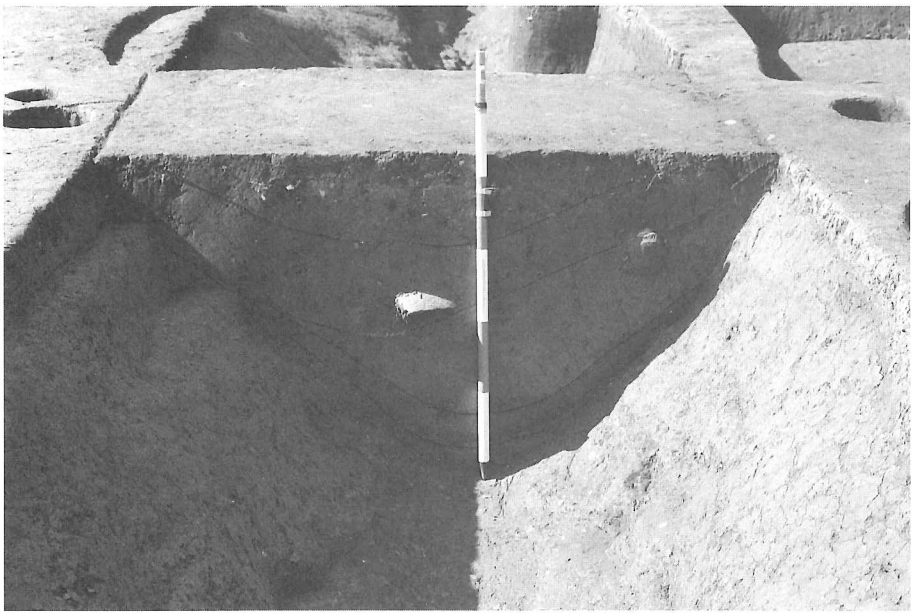
II区
13号住居跡検出状況
(西から)

II区
14号住居跡検出状況
(西から)

II区
1号濠遺物出土状況
(西から)

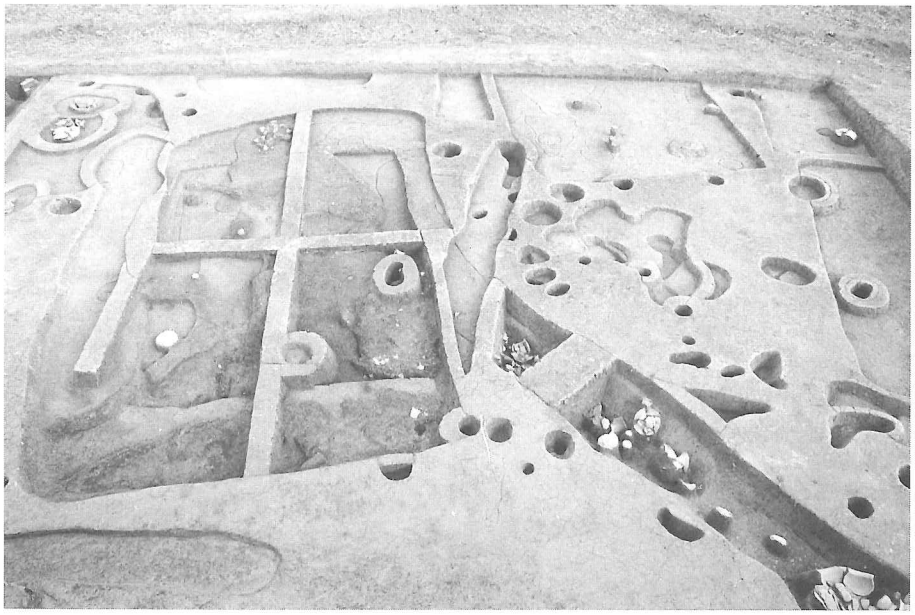


II区
1号濠検出状況
(西から)

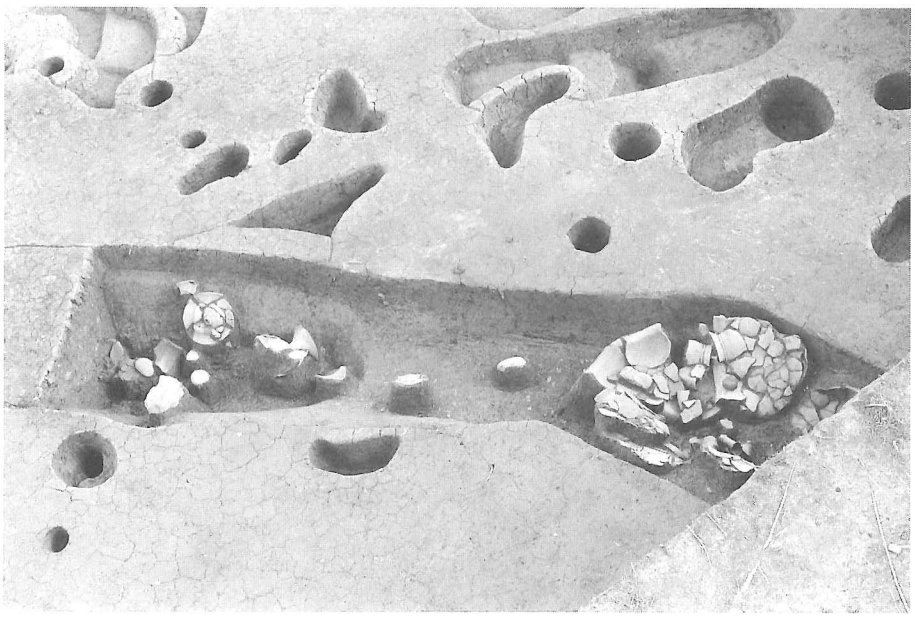


II区
1号濠土層壁面
(西壁)

II区
2号溝検出状況
(西から)

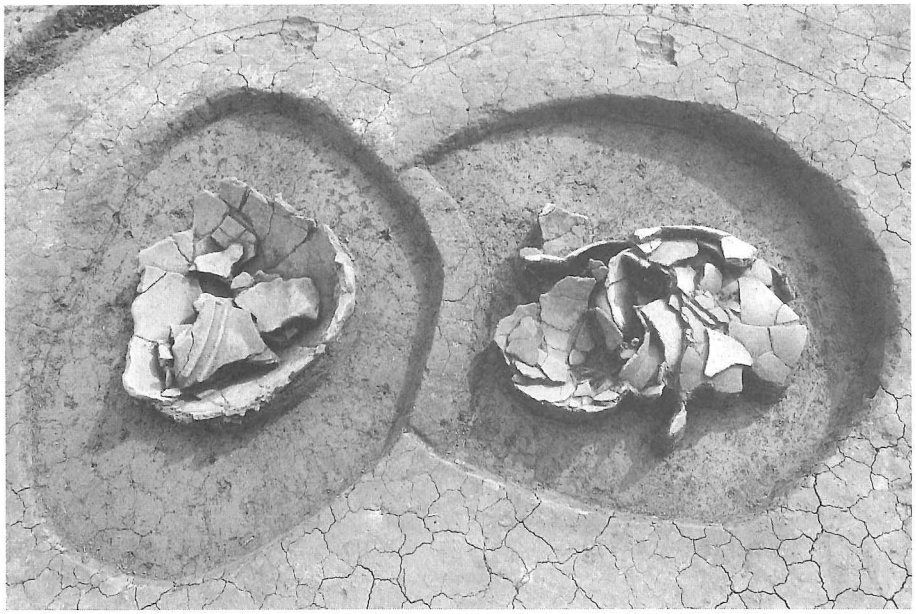


II区
住居跡と溝
(西から)

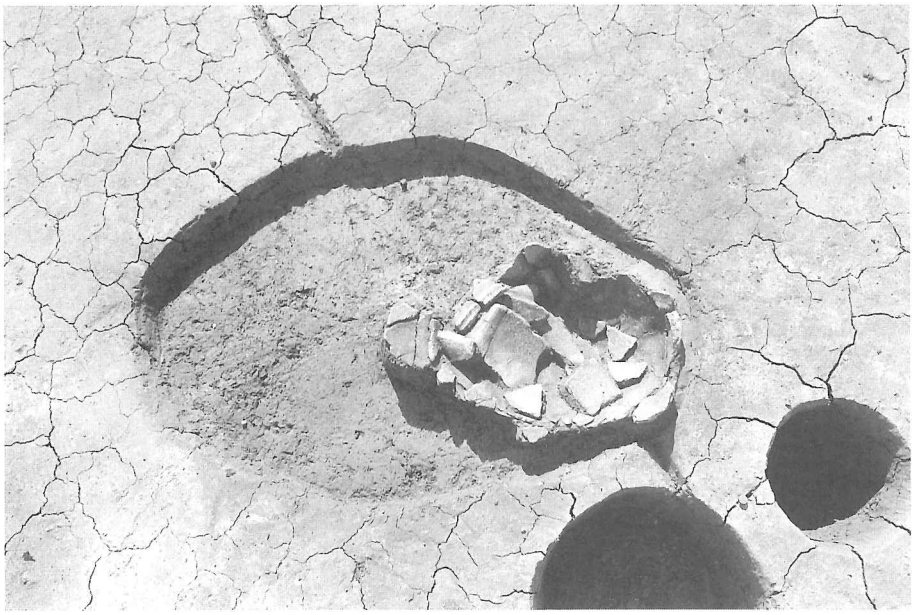


II区
2号溝遺物出土状況
(北西から)

II区
2号溝遺物出土状況
(部分)



II区
2号・3号甕棺墓
(北から)



II区
4号甕棺墓
(北から)

II区
5号甕棺墓
(北から)

## 4．高元地区の調査

### (1) 調査概要（第148図）

平成6年度，芦辺町教育委員会は国庫補助をうけて，高元地区の範囲確認調査を実施し，竪穴住居跡，土壙，貯蔵穴を検出した。[註1] この結果を受けて，さらなる居住域の確認と墓域確認のため，平成10年2月3日～平成10年3月24日に同地区で範囲確認調査を実施した。調査区は，南からⅠ区（1m×50m），Ⅱ区（1m×40m），Ⅲ区（2m×20m），Ⅳ区（1m×40m），Ⅴ区（1m×30m），Ⅵ区（1m×17.5m）を設定し，218m²を調査した。

### (2) 遺　構

Ⅰ区でピットなど検出した。Ⅲ区では弥生時代終末期～古墳時代初頭の小児甕棺墓2基が検出し，Ⅴ区でもピットなどを検出した。Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区では遺構は確認できなかった。

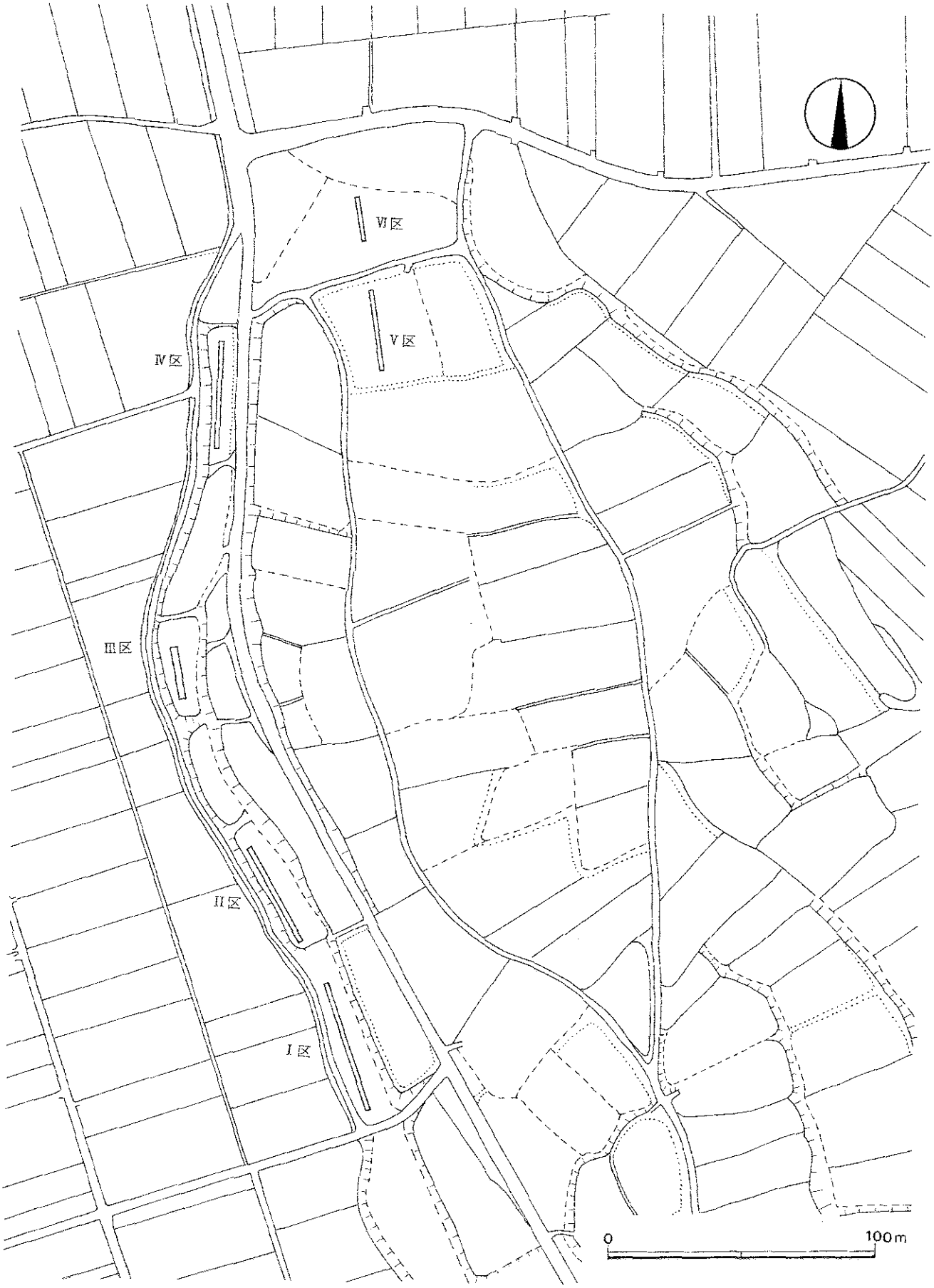
### (3) 遺　物

弥生時代後期～古墳時代前期の土器を中心にコンテナ11箱分の遺物が出土した。

### (4) ま と め

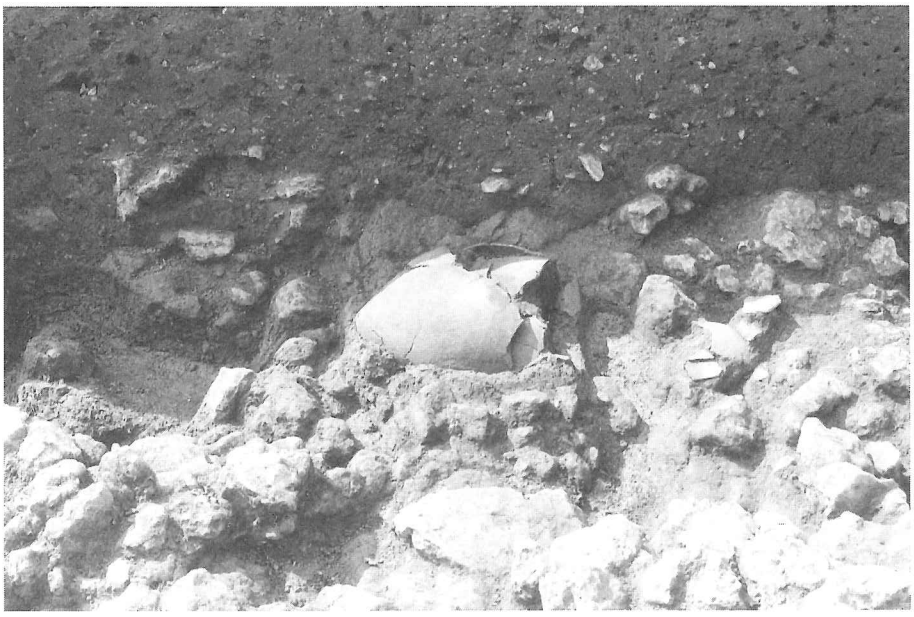
今回の調査の結果，居住域も墓域も確認できなかった。調査区Ⅰ～Ⅳ区は原の辻遺跡中央の舌状台地西側の傾斜面に，Ⅴ・Ⅵ区は同じく台地の北側斜面に位置する。Ⅴ区を除く，全ての調査区のほとんどが，地盤は玄武岩の岩盤であり，Ⅲ区で小児甕棺墓2基が検出したものの，広範に住居や埋葬施設を設けることは困難であったと考えられる。特に台地西側傾面の傾斜は，東側斜面のなだらかな傾斜に比べ急で，さらに冬には北西からの強い季節風が直接当たるため居住に適する環境ではない。Ⅴ区は，竪穴住居跡が削平されたような痕跡らしいものがあったが，1mのトレンチ幅では明らかにできなかった。今後拡大した調査区を設置し，再度調査を実施することが望まれる。

註1　芦辺町教育委員会『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第9集　1995




第148図　調査区配置図（1／2,000）

調査区遠景（南西より）



Ⅲ区１号甕棺出土状況

Ⅲ区２号甕棺出土状況

## 5．池田大原地区の調査

### (1) 調査概要（第149図）

平成８年度の原ノ久保Ａ地区の発掘調査では，この地区が東西約 100m，南北約 150mの範囲の墓域であることが確認された。この結果を受け，さらに墓域の範囲と内容を確認するために原ノ久保Ａ地区に近接する池田大原地区において，平成10年１月21日～平成10年３月６日に範囲確認調査を実施した。調査区は，南からＩ区（５m×15m），II区（５m×10m），III区（１m×３０m），IV区（５m×10m），Ｖ区（１m×20m），VI区（１m×10m）を設定し，235m²を調査した。

### (2) 遺　構（第150図，第151図）

Ｉ区では，濠１条とピット群が検出された。

濠は，上面幅推定約２m，下面幅約30cm，深さ約80cmで断面Ｖ字形をとる。本調査区においては北西から南東に延びる長さ約５m50cmを確認した。濠内からは須玖II式土器の古段階が出土し，弥生時代中期の遺構と考えられる。大原地区は，遺跡の中心である舌状の台地を取り巻く多重環濠の外に位置するが，この環濠の外での新たな防御線の存在がこれにより明らかになった。

ピット群は，木の根跡と考えられる相対的にやや大きめのものと，柱穴状小穴に大別できる。柱穴の方は27基を確認したが，底部の短径の平均は約11．７cmであり，かなり細い柱が立っていたと考えられ，建物としては仮設の小屋のようなものの存在しか考えられない。

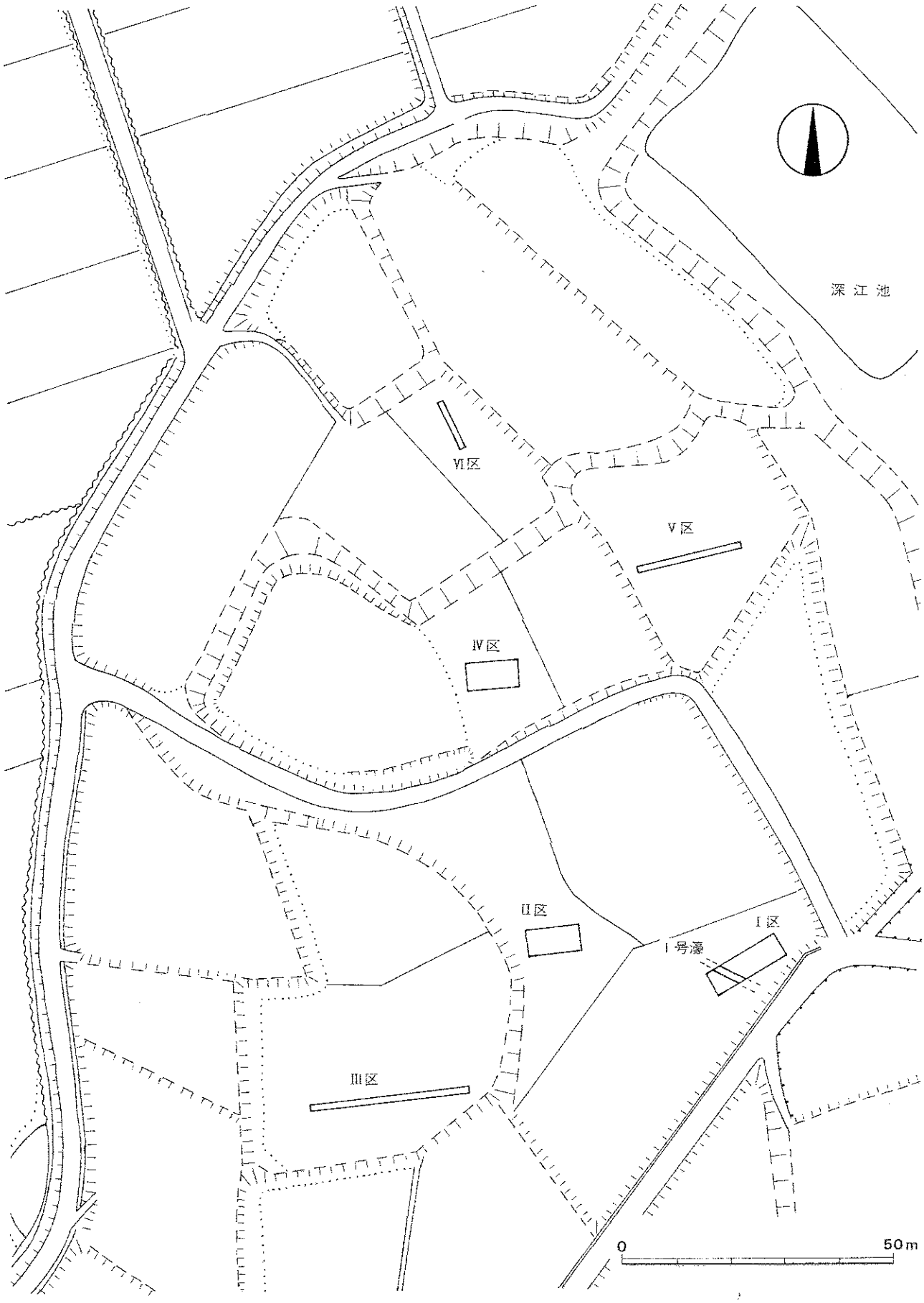
また，柱穴の深さは平均17．６cmと浅いので，この調査区は近世に壱岐特有の「饅頭畠」化，近現代には水田化を受けて，弥生時代の遺構面は大半が削平され失われたたものとは思われるが，この調査区にこれ以上の遺構があったとは考えられない。墓域に関連する遺構も確認できず，居住域とも考えられない。これはＩ区に限らず，今回の池田大原地区の調査区全てにあてはまることである。このため，この区で確認した濠は池田大原地区にあった何かの防御ため，またはそれと他とを区画するために設けられたものではなく，多重環濠に個別の防御線を加えることにより，より強固な防御体制をつくろうと意図したものと推測される。

II～VI区は，数個のピットを確認したが年代は確定できず，確かな遺構は確認できなかった。

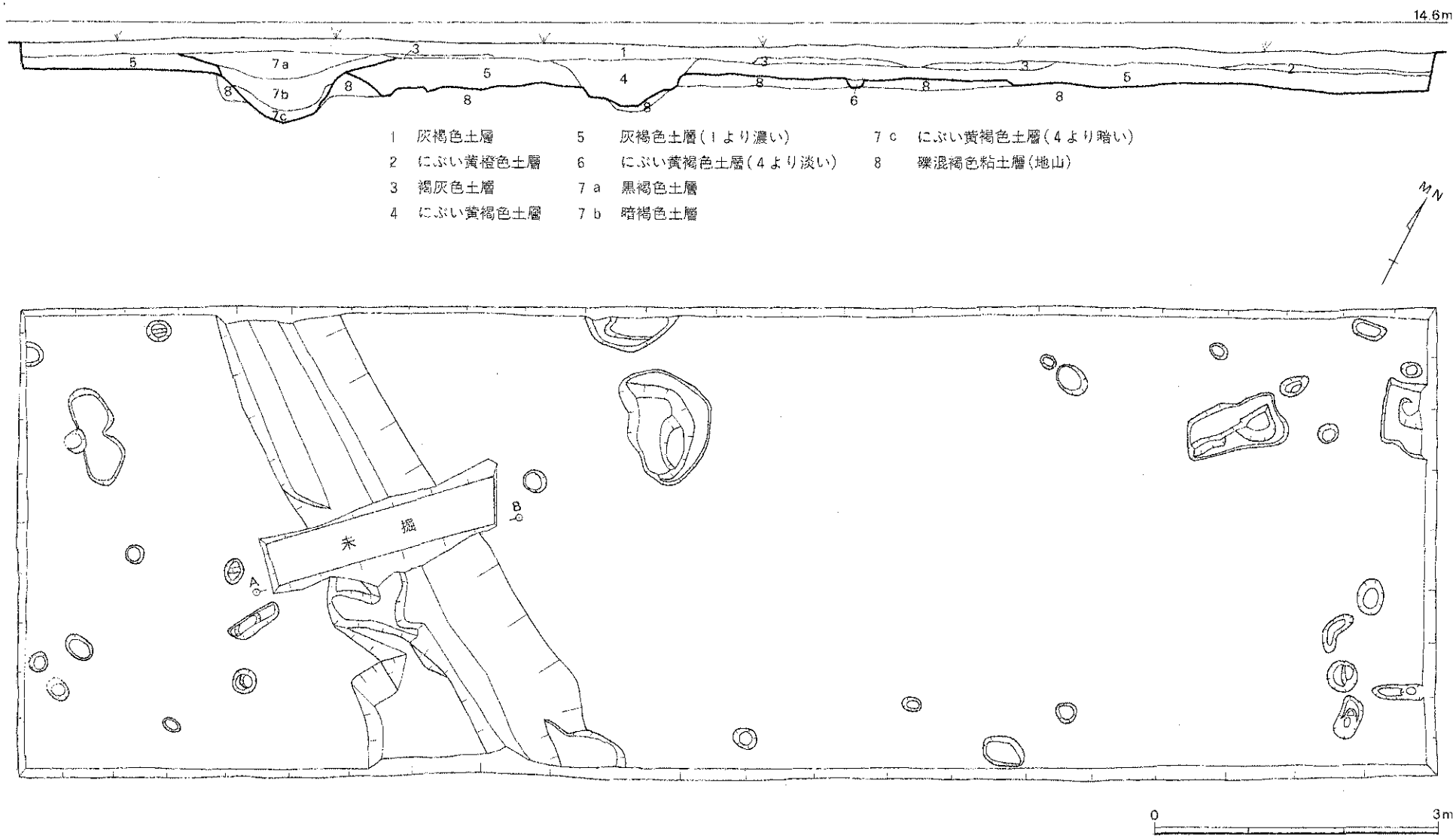
### (3) 遺　物（第152図）

今回の調査では，わずかな土器片と黒曜石片が出土したに過ぎない。さらに形式が判明するのは，Ｉ区から出土した５点の弥生土器のみである。　１～４は，鋤先形口縁の甕の口縁部破片である。１・２は須玖Ｉ式土器新段階の，３・４は須玖II式土器古段階の資料である。調整法は１～４ともに内外両面風化が甚だしく不明である。色調は，１・３がにぶい橙色，２・４が橙色である。胎土は１～４ともに石英，長石，金雲母を含む。１・２・４は濠内から，３は１層（現在の水田作土層）最下部から出土した。

５は，弥生土器の壺底部である。断面の形態から弥生中期の資料であろう。調整法は内外面ともに風化が激しく不明である。色調はにぶい橙色である。胎土は石英，長石，金雲母を含む。１層（現在




第149図　調査区配置図（1／1,000）

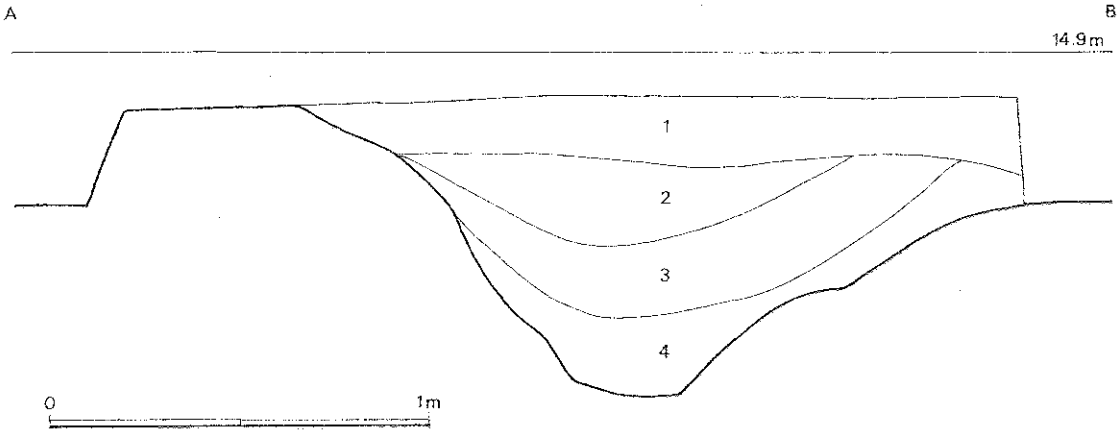



第150図 Ⅰ区遺構配置図・北壁土層図（1／60）

の水田作土層）最下部から出土した。

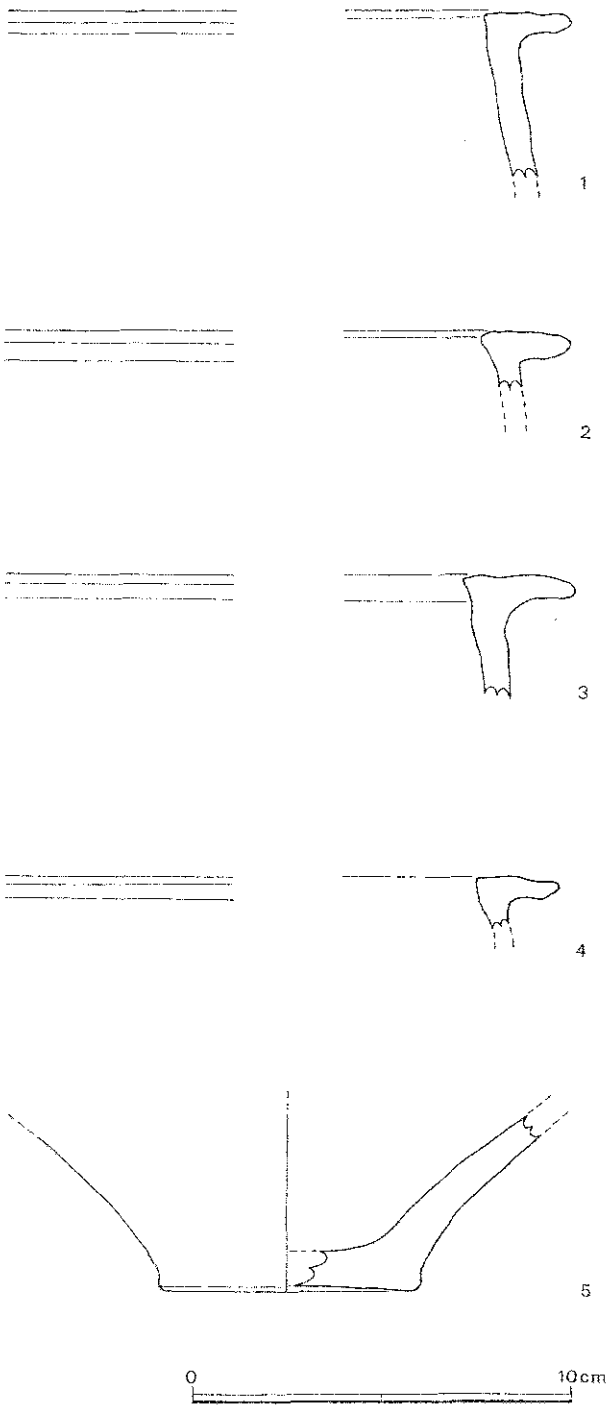
(4) ま と め

今回の調査の結果により，池田大原地区は墓域でなく，居住域でもないことを確認した。また，多重環濠に個別の防御線を加えることによって，より強固な防御体制をつくろうと意図したものと推測される，多重環濠の外部に存在する別の濠を確認することができた。




1．褐灰色土層
2．炭化物混黒褐色土層
3．炭化物混暗褐色土層
4．炭化物混にぶい黄褐色土層

**第151図　Ⅰ区1号濠土層図（1／20）**




第152図　Ⅰ区出土土器実測図（1／2）

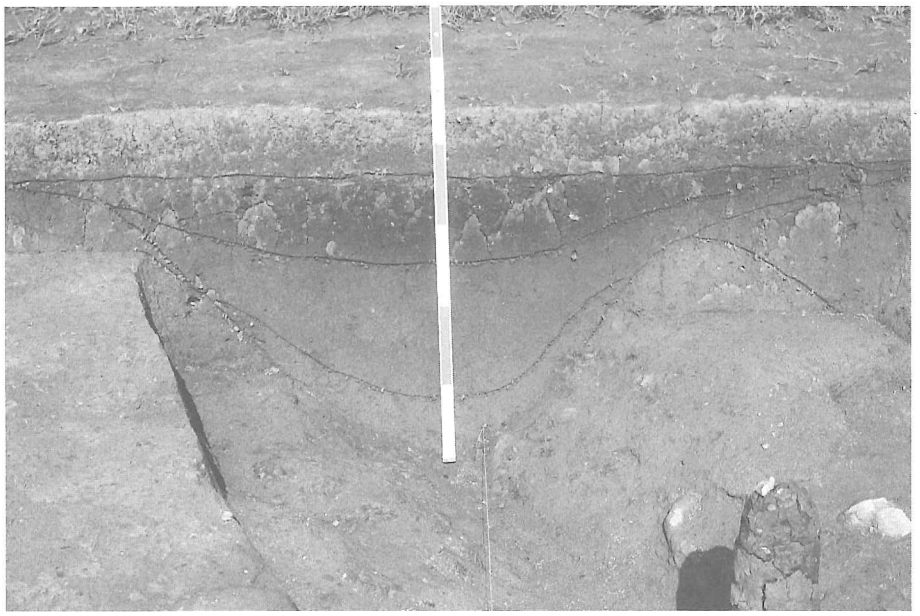
調査区遠景（北東より）

調査風景

Ｉ区全景（西より）

Ⅰ区濠全景（南より）

Ⅰ区濠横断土層北層



Ⅰ区北壁土層濠部分

## 6．原ノ久保Ｂ地区の調査

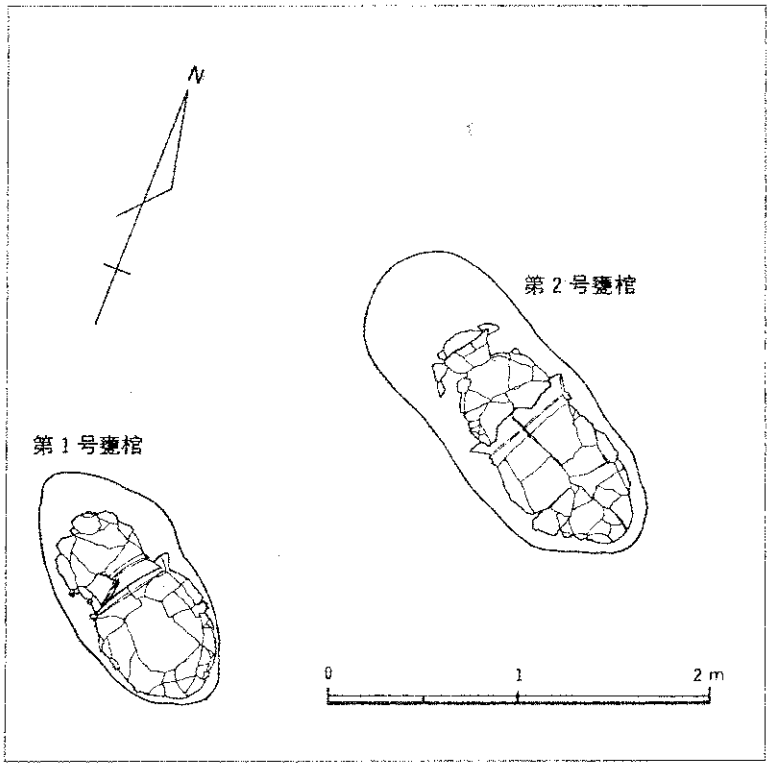
### (1) 調査概要

原ノ久保Ｂ地区は，平成８年度に調査した原ノ久保Ａ地区の墓域に隣接する小川川から南西部の地にあたり，標高22mから14mである。

調査区はⅠ～Ⅵ区を設定した。Ⅰ区は県道石田勝本線と小川川が交差する南西側の標高18mから16mの畑である。この地点からは昭和52年度の第３次範囲確認調査において古墳時代初頭の合口甕棺２が検出されており，今回も出土が期待され，調査区も南北20m，東西10mを設定した。しかし，調査の結果は，前回の破片の一部と思われるものが数点出土したのみで，地山の岩盤層まで浅く，追加資料は得られなかった。

前回の甕棺の出土状況は，１号甕棺が合口なのに対して２号甕棺は大形の甕と底を欠失した壺棺を組み合わせ，さらに底部をかぶせたいわば三重棺で，接合部には青白色の粘土で目張りがされていた。副葬品は１号甕棺が水晶玉１個とガラス玉多数，２号甕棺が碧玉製管玉２個とガラス製小玉多数で両方とも主軸を北西に向けていた。

Ⅱ区は南から北にゆるく傾斜した畑に設定したが，遺構も遺物も確認できなかった。Ⅲ区はこの区域の中では一番低い畑で標高約14mである。この畑にも昭和52年に２m×２mの試掘壙を２個所設定し，古代の土師器が出土している。地主の話によると，２枚の畑を造成して１枚の広さにしたということで，南から北へ切盛されている。今回も須恵器片や土師器片が調査壙から出土しており，古墳時代の包含層が確認された。Ⅳ～Ⅴ区は遺物包含層は認められなかった。Ⅵ区は調査域で一番高い所に位置し，隣接して稲荷神社が祀られている。神社の周囲は削られているが，昭和52年当時は弥生終末期の甕棺が断面に残されていた。調査壙は東西に設定したが，甕棺と思われる小破片が数点出土したにすぎなかった。この地域は下段の畑の切り通しにも甕棺の出土が確認されており，弥生終末から古墳時代初頭にかけての墓地が営まれていたと考えられる。

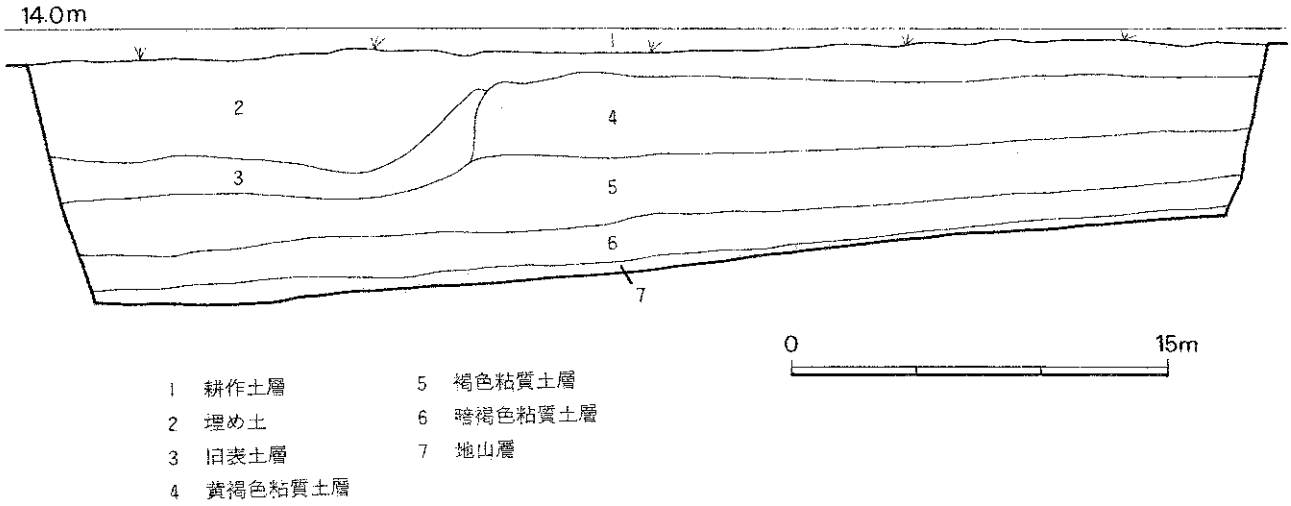



第153図　昭和52年調査甕棺出土状況（註１より）

第154図　原ノ久保B地区調査区配置図（1／2,000）

### (2) 土　層

第155図の土層は遺物が出土したIII区である。1層は耕作土層，2層は埋め土で風化礫などを含みあまりしまっていない。3層は旧表土で褐色を呈している。4層は黄褐色粘質土で小指大の礫や黄色い岩粒を含み無遺物層である。5層は褐色粘質土層で遺物を若干含む。6層は暗褐色粘質土層で5層より黒味を帯び粘質も強い。遺物を含む主要包含層である。




**第155図　原ノ久保B地区III区土層実測図（1／30）**

### (3) 遺　物

①土器（第157図）

I～VI区の調査区で出土した遺物は量的には非常に少ない。弥生土器はI区とVI区でわずかに出土したが図示できるものではない。第156図にあげた資料はすべてIII区出土で土師器と須恵器，それに石器である。須恵器は十数点の出土で特徴あるものをここに示した。1は蓋で天井部と体部の境にゆるい沈線が見られる。また口縁部外側には約3㎜の幅でヘラ調整したあと繊細な刻みを巡らせている。2は坏身で口縁部はやや外反ぎみに立ち上っている。小田編年のIII期と考えられる。3は身か蓋かわからないが，頂部にヘラ記号が残る。4～9は須恵器胴部片である。4の外面はハケ目調整され内面は叩きのあとナデ消されている。5は外面が波状の叩き目，内面は格子の叩き目がわずかに残り焼成はやや甘い。6と9は外面は縄目状の叩き目で内面は平行叩き目である。7は外面が格子目叩きのあとナデ消しており，内面は同心円の叩き目である。8は外面格子目叩きのあとハケ目調整を行っており，内面は同心円文の叩き目である。須恵器の年代については6世紀後半頃と考えられる。

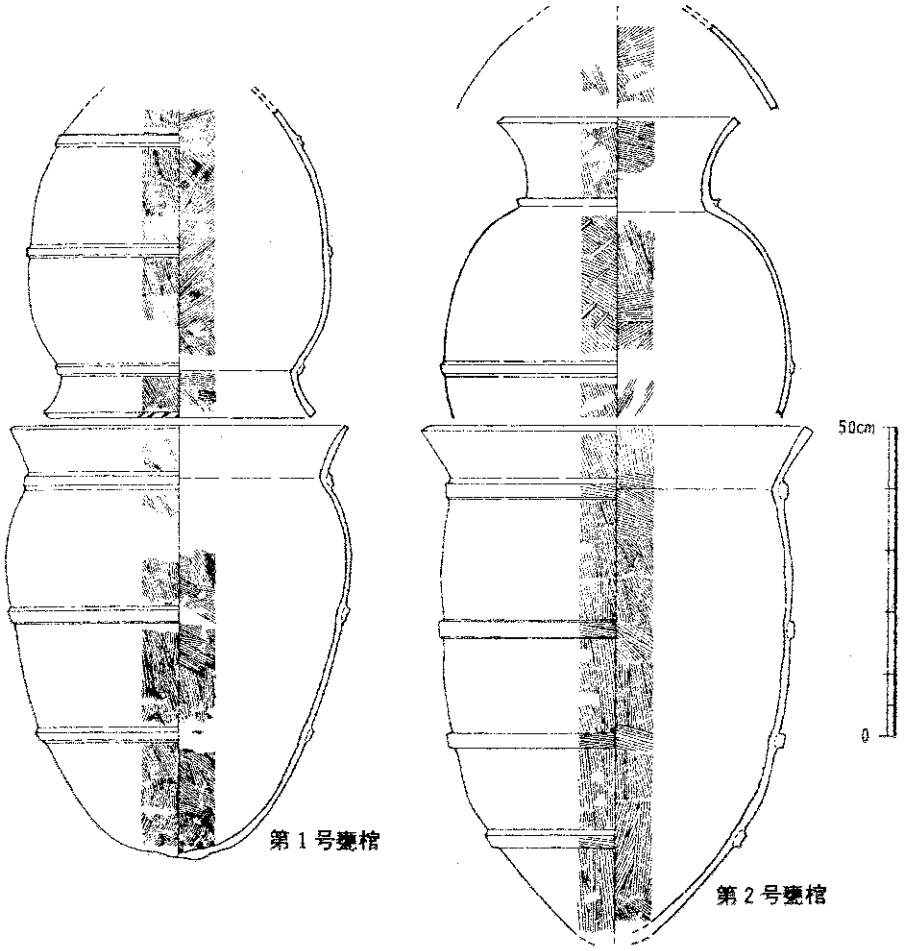
10～12は土師器である。10は小形甕で風化が著しいが口縁内面にハケ目痕をその下部に削り痕が確認できる。11も風化を受けているが，口縁外に浅い沈線が施されている。12は高坏の脚の部分である。坏部との接ぎ目で剥離している。脚の中央部は絞られくびれているが端部を欠失している。胎土には白い砂粒や石英粒を含みきめ細かいが焼成甘く，色調は肌色を呈している。時期的には須恵器と同年代と考えられる。

②石器（第157図）

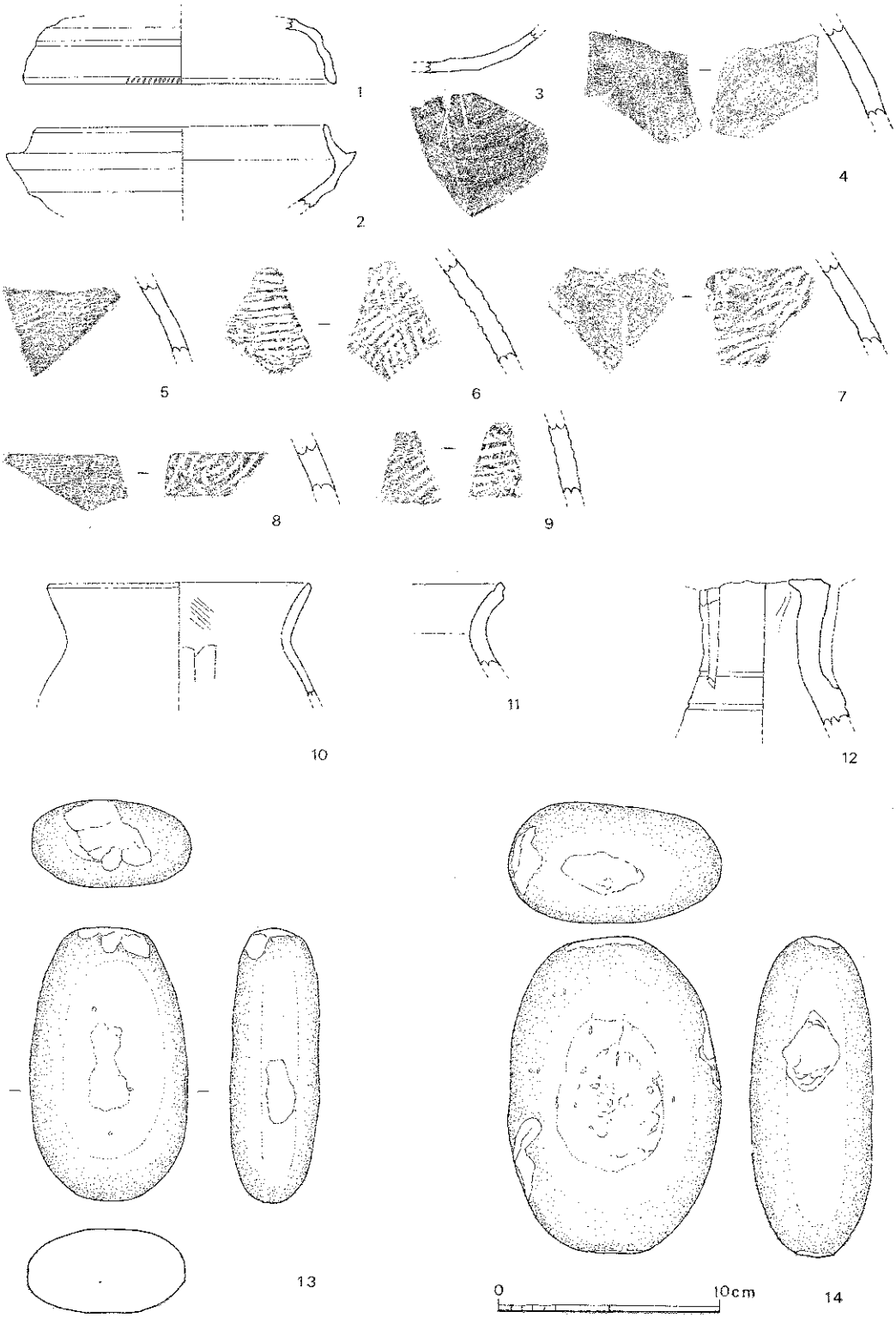
石器は２点だけである。13はやや扁平な自然礫で細くなった端部に叩いた痕が残り，叩き石としての利用が考えられる。重さ580ｇ，石質安山岩質。14は楕円形自然礫の長軸の両端に叩いた痕と，短軸の両面にも叩いたと思われるガサガサした痕が観察され叩き石と考えられる。

**(4) 昭和52年出土の甕棺について**[註2]（第156図）

１号甕棺は主軸をN—59—Wにとる合口甕棺で，耕作等で全体の半分は欠失している。上甕は底部を欠失しているが，口縁部は特徴が残っている。外反した口縁の端部には刻目が巡り，頸部に１条と胴部に２条の，幅が広く中央部をややへこませた突帯を巡らし，横にナデて貼り付けている。内外の器面全体に斜め方向に荒いハケ目が施されている。なお内面の口縁部から胴上部にかけ丹が塗られている。下甕は上甕よりひと回り大きく口縁径55.2cm，器高70.4cmを測る。口縁部は外方向にほぼ直線に伸び端部は平らにおさめている。頸部に１条と胸部に２条の幅が広く中央が少しくぼんだ突帯が巡る。底部は丸底に近く，不規則な形を呈している。内外の器表面は荒いハケ目調整が見られる。上甕




第156図　昭和52年出土の甕棺実測図（註１より）




第157図　原ノ久保B地区遺物実測図（1／3）

と下甕の接合部は青白色の粘土で目張りしている。土壙も残っているが，甕棺はほぼ水平に埋葬されている。

2号甕棺は主軸をN－62°－Wに向け1号甕棺とほぼ平行している。この甕棺は本体部を壺と甕で合わせ，底の部分を蓋としてかぶせる。いわば三重棺の構造である。蓋の部分は，上の壺が底を欠失しているが，法量から考えるとこの壺の底を利用したものであろう。壺の口縁部は外反しつつ伸び，端部は少しくぼんでいる。頸部には断面三角形の突帯が1条と，最大径の胴部には幅の広い突帯を1条それぞれ貼り付けている。内外の器表にはハケ目調整が見られ丁寧な作りである。

下甕は復原口縁形63cm，復原最大胴径は57.6cmで口縁径が大きい。器高は底部を欠くものの84cm内外になると推定される。口縁部は外方に真っすぐ伸び，端部は平坦におさめられている。頸部に1条と胴部に3条の幅の広い突帯を巡らし，内外の器表面にハケ目調整が見られる。壺の口と甕の接合部には青灰色の粘土で目張りがされている。

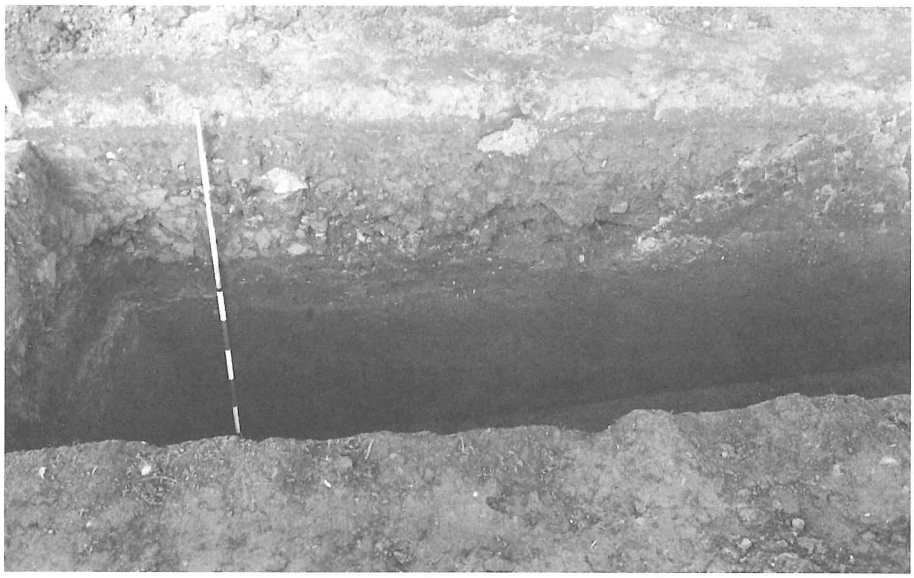
1・2号甕棺ともに土器形式は西新式であり，時期的には古墳時代初頭と考えられる。

**(5) 小　結**

原ノ久保B地区では，6箇所の調査区の中で，遺物包含層が確認されたのは1箇所にとどまり，古墳時代の遺物の出土となった。また今回は追加資料が得られなかった昭和52年の甕棺出土地点については，当時の出土状況と比較すると包含層が削平されていることも考えられる。また稲荷神社の切り通しやその下の水田の壁部分に甕棺が位置していることは，小川川を境に南側の高台地域が古墳時代の墓域として利用されたと考えられるのである。

註1　『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書　第37集　長崎県教育委員会　1978より転載
　2　同上文献より抜粋

III区近景



III区土層

VI区遠景

II区遠景

II区調査風景
昭和52年甕棺が
頂上付近で出土した

昭和52年調査の甕棺出土
状況

# Ⅳ まとめ

平成７年度から平成９年度に実施した「原の辻遺跡発掘調査事業」の調査について，年度ごとに各地区をとりあげて各担当者が説明を行った。調査は，原の辻遺跡が立地する台地を対象として，主に墳墓と居住関係遺構の実態について追求を行ってきた。墳墓域は，平成７年度に大川地区，平成８年度に原ノ久保Ａ地区，平成９年度に原ノ久保Ｂ地区の調査を実施した。昭和52年の弥生後期終末から古墳前期初頭の西新式甕棺が２基検出されていた原ノ久保Ｂ地区では，新たな墳墓の確認はできなかったが，その他の地区では箱式石棺墓，土壙墓(木棺墓)，石蓋土壙墓，小児甕棺墓，溝などの遺構が検出された。大川地区は，調査によって，東西約60m，南北約80mの範囲に拡がることが確認され，墳墓遺構は過密ではなくゆったりした配置状況をもつことが判明した。溝状の遺構は，墳墓や墓域を区画する溝の可能性をもっている。これまで円圏規矩四神鏡や内行花文鏡などの後漢鏡，国産の有鉤銅釧，ガラス勾玉・管玉・小玉，石製勾玉・管玉，鉄製ヤリガンナ・鋤先・剣などの副葬品が出土していて，幼小児墓までがガラス玉をもつことなどを考慮すると，有力な集団によって営まれた墓地であったことが推測される。墓域の時期は，弥生中期後半から弥生後期を主体とする。原ノ久保Ａ地区は，調査によって遺跡東西約100m，南北約150mの範囲に拡がることが確認された。Ｄ地区では，墳墓群が南北方向に並んで営まれていて，箱式石棺墓から小型仿製鏡や，石製勾玉，ガラス小玉，９号土壙から長宜子孫銘内行花文鏡，筒形不明青銅器，石製管玉，ガラス勾玉，ガラス丸玉などが出土した。９号土壙は，後世に掘られて遺物が廃棄された土壙と推測され，遺物はかならずしも一括性をもたない。しかし，内行花文鏡はもともと面径20cmの大形完形鏡であって，首長級の墳墓に納められていた可能性が高い資料である。Ｄ地区の西側は一段高くなった畑地になっていて，もともと小野氏宅の方にのびていたことが考えられるので，この場所に鏡出土の候補地を求めることができるのではないかと思量している。Ｄ区とＦ区では弥生後期の墳墓が確認されたが，Ｅ区の溝では弥生中期後半の丹塗土器などが出土していて，墓地として利用された上限がこの段階まで遡ることが考えられる。溝は，墳墓や墓域を区画する可能性が高いと思われる。

居住域を念頭においた調査は，平成７年度から平成９年度の原地区と平成９年度の高元地区，池田大原地区で実施された。原地区では，標高18mの台地頂部を中心として，東側と西側の台地傾斜面の調査を行った。平成６年度に続いて平成７年度に調査を行った前方後円形の台地頂部では，祭儀建物群が確認されて，祭儀場として宗教的でシンボリックな中枢区域であったことが明らかになった。この頂部南端には，２条の濠が東西方向に走っていて環濠内を区切る区画濠であるということが平成７・８年度調査で確認された。しかし，平成８・９年度の調査によって，東側傾斜面で新たに３条の濠が東西方向に走っていることが確認された。これらの区画濠は，中期前葉の須玖Ⅰ式古段階に掘削されたことが考えられる２条の濠（７年度１・２号濠，８年度１・２号濠）と，後期初頭頃に掘削されたことが推定できる濠２条（８年度４・５号濠）があり，前者は後期初頭頃に再掘削されていることが土層の状況から推測された。平成８年度調査の３号濠は，Ｃ区８号竪穴住居跡を切っていて，弥

生後期後半段階に掘削されたことが考えられるが，すぐに埋没したようである。区画濠は，弥生後期後葉から終末段階には埋没しているが，平成７年度調査の１号濠が柳田康雄氏編年[註1]のⅡｂ式（これより柳田編年とする）まで，平成８年度調査の５号濠が柳田編年のⅡａ式まで残る。同じくつながる濠であっても，台地頂部では１号濠が部分的に残っていたことになる。

原地区では，弥生前期末の土器が平成８年度調査のＢ区で出土していて，弥生中期前葉の竪穴住居跡が平成８年度調査Ｃ区６号住居と平成９年度調査Ｉ区８号住居の２棟が検出された。この他に弥生後期から古墳前期の竪穴住居跡が重複した状況で確認されている。濠が埋没した後に重複した竪穴住居跡が，平成７年度調査のＥ区９号住居（２号濠），平成８年度調査のＣ区７号住居（２号濠），Ｄ区10号住居（４号濠），平成９年度調査のⅡ区14号住居（１号濠）である。柳田編年でいうと，Ｅ区９号住居がⅡｂ式，Ｃ区７号住居が弥生後期後葉から終末，Ｄ区10号住居がⅡｃ式，Ⅱ区14号住居が弥生後期後葉から終末の土器が出土している。原地区での居住は，弥生前期末に遡ることが確認され，古墳前期の柳田編年のⅡｃ式段階まで存続したことが明らかとなった。また原地区の東側斜面では，11基の小児甕棺墓が検出され，高元Ⅲ区でも２基の小児甕棺墓が検出された。これらは，一般的な墓地とは性格の異なる墳墓と考えられる。特に，平成８年度Ｄ区の４号濠とつながる平成９年度Ⅱ区の１号濠に沿って10基の小児甕棺が並んで確認されたのは，極めて特殊な状況を示していると考えられる。

平成９年度の池田大原地区の調査では，北西から南東方向の濠が１条検出されたが，居住関係の遺構は確認されなかった。濠は，弥生中期に掘削されたが，間もなく埋没して掘り直されることはなかったようである。昭和52･54年には，この濠から南西約100ｍの位置に同様な濠が確認されていて，台地南西部における２条の防御ラインであった可能性が高い。この池田大原地区で居住関係遺構が確認されなかったことにより，環濠が整備された後の低地を除く台地での基本的な居住は，内濠のなかのエリアに限定することができるようになった。

以上の平成７年度から平成９年度の調査によって，本遺跡が弥生前期末の板付Ⅱｂ式段階に居住が開始され，古墳前期の柳田編年Ⅱｃ式の段階まで集落が存続したが，その段階に大集落の解体が起って消滅したことを明らかにできたのが，今回調査の大きな成果の一つといえよう。

最後になりましたが，発掘調査から報告書作成まで多くの人の支援を受けました。特に，調査事務所の内業の方々の献身的な応援がなければ，本書は成立できなかったと思います。いつも指導をいただいています原の辻遺跡調査指導委員会の先生方，福岡大学武末純一氏，横山順氏，指導・支援いただきました多くの皆様方に感謝申し上げます。壱岐の文化財調査にご尽力をいただいていた松永康彦氏が，昨年12月６日に急逝されました。原の辻遺跡の調査においても，苦楽を共にして遺跡への思いを語り合いました。本書の成稿を見てもらいたかったと思っています。これから，壱岐の考古学ために邁進される方と期待していた人だけに大変残念に思います。心から哀悼の意を表して結語とします。

註１　柳田康雄「九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣　1991

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | はるのつじいせき |
| 書名 | 原の辻遺跡 |
| 副書名 | 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書 |
| 巻次 | I |
| シリーズ名 | 原の辻遺跡調査事務所調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第11集 |
| 編著者名 | 宮崎　貴夫・安楽　勉・西　信男・杉原　敦史 |
| 編集機関 | 長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所 |
| 所在地 | 〒811-5322　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092-1　TEL09204（5）4080 |
| 発行年月日 | 西暦1999年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| はるのつじいせき<br>原の辻遺跡 | ながさきけんいきぐん<br>長崎県壱岐郡<br>あしべちょう いしだちょう<br>芦辺町・石田町 | 42423<br>42424 | 73－10<br>72－92 | 33度<br>45分<br>24秒 | 129度<br>45分<br>14秒 | 19950929<br>～<br>19970324 | 5,348 | 原の辻遺跡発掘調査事業（国庫補助事業） |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 原の辻遺跡 | 集落<br>墓地 | 弥生時代<br>古墳時代 | 高床建物<br>平屋建物<br>竪穴住居跡<br>濠，溝<br>箱式石棺墓<br>土壙墓<br>石蓋土壙墓<br>甕棺墓<br>土壙 | 弥生土器，土師器<br>朝鮮半島系土器<br>石器，鉄器，後漢鏡，小型仿製鏡，不明筒形銅器，ガラス勾玉，石製勾玉，ガラス管玉，石製管玉，ガラス小玉 | 祭儀建物の確認<br>首長墓級の鏡の出土 |

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集

原の辻遺跡

1999. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷